

■ 『北海道文学大事典』ご利用の皆さまへ——ネット上での公開にあたって ■

【はじめに】

『北海道文学大事典』（編集・北海道文学館／発行・北海道新聞社）が1985（昭和60）年に刊行されてから四半世紀以上が過ぎました。多くの皆さまにご利用いただいていたこの『大事典』も、今日では入手が難しくなった事情から、ここ数年来その内容をインターネット上で公開してほしいという声が当文学館にしばしば寄せられてきました。

そこで、これらのご要望におこたえするために当文学館では、このたび「人名編」について先行的に北海道立文学館のホームページ上で公開することにいたしました。北海道の文学にいっそう親しんでいただくために、どうかお役立てください。

原則的には『大事典』刊行当初の姿にとどめました。したがって、訂正を加えるべき箇所も若干は残っていますが、調査可能な範囲で修正をほどこしました。なお、今後も調査を継続し、より精確な情報をご提供するつもりです。

【ネット版『北海道文学大事典』編集上の留意点】（順不同）

- * この『大事典』の当該ホームページ上における公開は、公益財団北海道文学館が、自らの責任において公開するものです。
- * この『大事典』は既に絶版になっているものです。また、北海道新聞社の著作権も消滅しています。
- * ここに搭載された個々の記事は刊行時に原稿買い取りの方式で集められ、個々の執筆者には、北海道文学館から稿料が支払われています。
- * 今回の公開は『大事典』の「人名編」にとどめ、「雑誌編」「事項編」については、調査・訂正などの作業を進める過程で順次アップしていきます。また、『大事典』の冒頭に収められていた、写真（グラビア）ページは割愛しました。
- * 公開に際しては、『大事典』初版に僅かながら認められた誤字・脱字、また誤記について、可能な範囲で修正をほどこしました。
- * 一部の記事中には、人名漢字などの用字（正字体や旧字体）について、コンピュータ処理のうで画面への反映が困難な例があります。カッコ内に「偏」や「つくり」を掲げて判断していただけるように努めました。が、刊行時のままとした例もあります。
- * 『大事典』刊行後の物故者は多数にのぼりますが、今回の「人名編」の公開に際して没年月日が判明した人物については、見出し語(人名)を赤いラインで囲み、「人名編」記事の最後に一覧表を掲げました。なお、相当数の没年月日不明の人物が残っていますが、調査を継続し、新たに判明した情報を追加していく予定です。
- * この『大事典』の記事内容は、コンピュータのディスプレイ上でのみ読み得る形式を採用しています。画面上の記事はプリントアウトできませんので、ご注意ください。

【お願い】

物故者の没年月日など、新たな内容訂正を可能とする情報をお持ちの方は、当文学館までメール等でご一報ください。

※e-mail: bungaku@h-bungaku.or.jp

(2012年4月3日)

北海道 文学 大事典

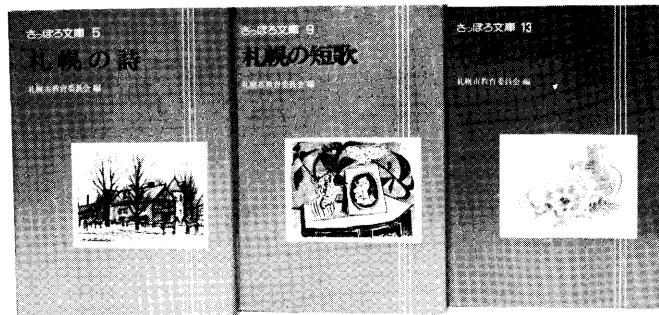
●北海道文学館 編

北海道新聞社

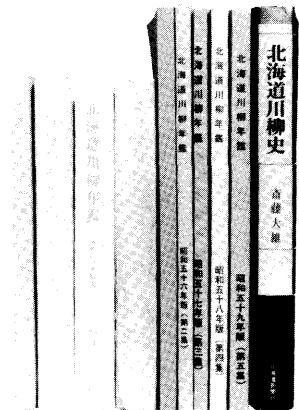
北海道
文学
大事典

北海道文学館
編

北海道新聞社

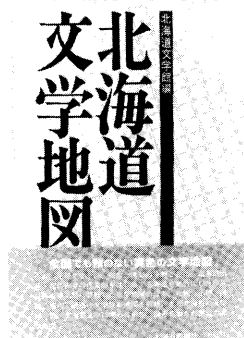


▲さっぽろ文庫・短詩型3部作（札幌市教委編集、北海道新聞社発行）

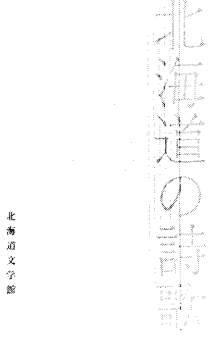


▲「北海道川柳史」「同年鑑」一括

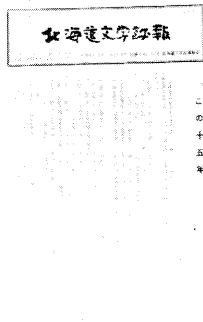
北海道文学館刊行物



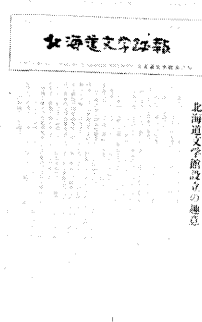
▲北海道文学地図



▲北海道の詩歌



▲北海道文学館報



北海道文学館
北海道関係図書所蔵目録



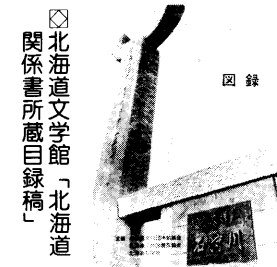
北海道文学館
北海道関係図書所蔵目録



北海道文学館
北海道関係図書所蔵目録



北海道文学館主権の
文学展図録



北海道文学館「北海道
関係書所蔵目録稿」

「北海道文学大事典」刊行の辞

昭和四十二年（一九六七）四月二十三日に「北海道文学館」が発足してから、二十年近い歳月がたちました。前年秋に北海道の文学者が総力を結集して開催した「北海道文学展」の画期的な成功がもたらしたものです。

以来、各種の文学展・文芸講座・文学散歩・図書の刊行など多くの事業を重ねながら北海道文学に関わる諸資料の収集・保存・活用につとめ、現在九万点を所蔵するに至っております。満度の状態には道遠ですが、しかし、これほど一堂に収納している機関は北海道広しといえども私どもの文学館以外には見当たらないと自負しています。

展示室・閲覧室・収蔵庫・事務室を置く札幌市資料館を本拠に北海道文学センターの役割を果たし続けてゆく所存ですが、このほど北海道新聞社のご助力を得て念願の事業である「北海道文学大事典」を編集・刊行の運びとなりました。

全国的にみて、府県単位による総合的な文学事典としてはおそらく最初のものだろうと思いますが、これもひとえに館が牛歩のうちにも積み重ねてきた実績にほかならないと考えています。

項目は、人名編が二二八三、雑誌編が七一八、事項編が二三八、しめて三二二九項目の多きを数えます。ご執筆くださった三四〇人の方に心からなる感謝の意を表すものですが、小説・戯曲・評論・随筆・児童文学・詩・短歌・俳句・川柳と、文学全ジャンルを包含したこの総量は、現在の館ができる最良の事典であるといっても言いすぎではありません。

北海道新聞社の深いご理解を得て刊行されるこの事典が、おおいに活用され、北海道の文化・文学の向上に限りなく役立つことを心から願うものです。

昭和六十年十月

北海道文学館

北海道文学大事典執筆者（五十音順）

相内 晋	稲葉 吉正	岡 嘉彦	川村 壽人	葛見 勇	酒本 寿朔	菅村敬次郎	高原 与祢
相川 正義	井上 二美	小国 孝徳	川村 美翔	工藤 欣弥	佐々木逸郎	菅原 政雄	高山 亮二
青木 政雄	猪股 泰	小名 提郎	河部文一郎	久保 吉春	佐々木露舟	杉本 晃一	武井 静夫
青地 繁	今井 国夫	小野規矩夫	神埜 努	倉島 齊	笹原登喜雄	須合 尚剛	竹岡和田男
青葉 鬼善	今井 要太	小野寺与吉	木内 進	小池 進	佐藤 喜一	鈴木 勝美	武田 隆子
青葉テイ子	入江 好之	貝塚 忠弘	菊地 慶一	越郷 黙朗	佐藤 孝	鈴木 青光	只木かほる
青山ゆき路	岩佐和歌子	柿崎 清一	菊地 信一	小島 嘉雄	佐藤 忠雄	鈴木 杜世春	田中 章彦
朝倉 賢	上田 豊	笠井 静一	菊地 滴翠	小谷 博貞	佐藤 初夫	鈴木 光彦	田中 和夫
浅野 明信	鶴川 章子	笠井 信一	北川 頼子	後藤軒太郎	佐藤 昌子	鈴木 幸吉	棚川 音一
浅見 祐治	内田 弘	笠原 稔雄	北川 緑雨	小林小夜子	更科 源蔵	須田 抄二	谷川 文利
東 延江	梅田 恭平	笠原 肇	北川 玲三	小林 孝虎	椎名 義光	瀬戸 哲郎	谷口 広志
安住 尚志	江口源四郎	可知 春於	北 光星	小林 正明	塩見 一釜	園田夢蒼花	玉井 裕志
足立 敏彦	江原 光太	加藤 多一	北野 青村	小檜山奮男	鹿野 正伍	平 忠昭	玉川 薫
新井 章夫	遠藤 裕	金坂 吉晃	北野 竜介	小堀 煌治	滋野 透子	平 善雄	田村 圭司
安東 璋二	大久保興子	かままるよしあき	北見 恂吉	小松 瑛子	六戸 鉄蔵	高木 喬	田村 哲三
飯田 智佳	大須田一彦	金子 信夫	木ノ内洋二	小松 茂	柴村 紀代	高津戸 明	千葉 宣一
飯田 安子	太田緋吐子	金子 一男	木下 順一	小松 利夫	島 恒人	高野斗志美	千葉 益也
五十嵐健二	太田 光夫	金子徳四郎	木原 直彦	小森 邦男	嶋田 一步	高橋 昭夫	辻 星行
池永 竜生	大塚 陽子	金崎 葭杖	木村 隆	斎藤 大雄	下村保太郎	高橋 明雄	辻脇 系一
石井 有人	大西 雄三	加納 愛山	木村 哲郎	斎藤 征義	東海林淳子	高橋 愁	津田 達子
石岡草次郎	大野 信夫	叶 楯夫	木村 敏男	白幡 千草	白幡 千草	高橋 富子	続橋 利雄
石家久一郎	大場 豊吉	神谷 忠孝	木村 南生	新蔵 利男	新蔵 利男	高橋 信子	堤 寛治
泉 孝	大広 行雄	川上喜代一	木村 正雄	新明 紫明	新明 紫明	高橋 秀郎	坪川美智子
居関 透	岡澤 康司	川端 麟太	木村真佐幸	菅井 彬人	菅井 彬人	高橋 正彰	坪谷 京子
伊東 廉	小笠原 克	川辺 為三	木村和嘉子	須貝 光夫	須貝 光夫	高橋 和光	寺師 治人

写真撮影・写真協力

札幌市教育委員会文化資料室
市立小樽文学館
藤井 治
北海道新聞社

執筆 者

照井 千尋	中本 俊生	菱川 善夫	水口 幾代	山口勝次郎
東野ひろ子	中山 周三	日高 昭二	光城 健悦	山口 透
堂本 茂	中山 信	比良 信治	嶺岸 柳舟	山下 和章
土江田千治	中山 勝	平田 角平	宮口 良朔	山田 政明
時田 則雄	名島 俊子	平松 勤	宮崎 勝義	山田 緑光
土蔵 培人	鍋山 隆明	深海 秀俊	宮崎 芳男	山名 康郎
富岡木之介	南河 達雄	福井 剣山	宮田 千恵	山本 丞
富田 正一	新妻 博	福島 瑞穂	宮西 頼母	湯田 克衛
友田多喜雄	西川 青濤	福地 順一	宮之内一平	横井みつる
鳥居 省三	錦 俊坊	福本 範子	宮村 フヨ	横沢いさを
長井 菊夫	西嶋 征夫	藤川日出尚	宮本 貞子	横道 秀川
永井 浩	西村 一平	藤田 昌彰	村井 宏	吉田 秋陽
中川 吉夫	西村 信	藤本 英夫	村上 清一	吉田福太郎
長木谷梅子	布川 初朗	船尾 彊	茂木健太郎	米坂ヒナリ
中沢 茂	野田 牧聖	文梨 政幸	本山 節弥	脇田 勇
長沢としを	萩原 貢	古川 善盛	本山 哲朗	脇 哲
中嶋 常雄	橋爪まさのり	細井 剛	百川 梢介	脇尾 待人
中島 正裕	畑沢 草羽	細谷徹之助	森山軍治郎	鷲谷 峰雄
永田耕一郎	畑中 康雄	堀田 輝子	八重樫 実	和田 謹吾
中館 寛隆	秦 保二郎	堀井 利雄	八木橋絵民	渡辺 勇
永田 富智	早川 雅之	堀井 美鶴	矢口 以文	渡辺 健治
中坪 青雲	林 晃平	堀越 義三	八子 政信	渡辺 洪
長野 京子	林 直樹	本田 錦一郎	矢島 京子	渡辺 悦人
永平 利夫	原子 修	本田 大柳	八森虎太郎	渡辺ひろし
永平 緑苑	原 裕子	前田 信一	山内 栄治	
中部川信一郎	針山 和美	増谷 竜三	山岸 巨狼	
中村 勝栄	萬上 義次	水出みどり	八卷 春悟	

目次

「北海道文学大事典」刊行の辞……………北海道文学館 3
北海道文学大事典執筆者…………… 4

凡例…………… 7

北海道文学大事典・人名編…………… 9

北海道文学大事典・雑誌編…………… 401

北海道文学大事典・事項編…………… 613

北海道文学略年表……………木原 直彦編 709

索引…………… 756

編集後記…………… 772

凡例

☒北海道文学にかかわる小説・戯曲・評論・随筆・児童文学・詩・短歌・俳句・川柳のほか一部関連ジャンルも含めて構成した。

☒人名・雑誌・事項の三部で構成し、それぞれ五十音順に配列したが、収録項目は三三三九（人名二二八三、雑誌七一八、事項一三三八）であり、執筆者数は三四〇人である。

☒項目の配列は、ひらがな、かたかな、漢字を問わず音による五十音順とし、濁音、半濁音を無視した。音引きは音順に入れていない。

☒項目の記述は、原則として昭和59（一九八四）年12月現在を基準とした。

☒アンソロジー類は雑誌の部に入れた。

☒原則として常用漢字と現代かなづかいを用い、引用は原文のままとしたが、署名原稿なので若干の不統一も止むを得ない。

☒執筆者の記述にしたがったが、事典の性質から最小限の記述の統一をはかった。

☒北海道を対象とする地域の文学事典であることから、スペースは北海道事項を軸に配分した。たとえば夏目漱石の項であっても少スペースとしている。

☒生、没年は「明43・10・1～大14・2・15（1910～1925）」とし、生存中は「明43・10・1～（1910～）」とした。

☒ジャンルは（ ）で囲み、二つ以上あるときは点で区切った。

☒出生地は、道外の場合原則として「〇〇県生まれ」とし、東京、大阪、京都は都府を省いた。道内は「〇〇市生まれ」または「〇〇（支庁）管内〇〇町生まれ」とした。現在地名を使用している。

☒本名の姓が同じ場合は省略し、名前だけにした。本名と姓名の間に句読点は付けていない。

☒年号は初出のみ「明治5年」などを入れ、次の同年号は「23年」とし、年号は省略した。ただし、年号が戻ったり文章が長い時には年号を繰り返すこともある。

☒文中の雑誌名は「」でくくった。結社名はバラツキがあるが原則として「」でくくり、結社名に賞が付くときは「」をはずした。

☒作品名のあとに付く出版年月、出版社名は（昭35、北海道新聞社）のように表示し（ ）内に出てくる数字（5巻）なども算用数字を用いた。

☒出身学校名は、一般的にわかる場合はフルネーム（北海道大学）とし、微妙なものは原稿どおり無理に統一しなかった。旧制、庁立、道立、国立などは、あったほうがよくわかる場合のみ使用した。

北海道文学大事典・人名編

装丁 佐藤 信明

あおきかつ (人名編)

あ

相内 晋 昭3・3・20 (1938) 「小説」後志管内余市町生まれ。北海道学園大学卒。北大大学院修。「作家」道支部長、「創作手帖」「文学」1953年「同人、札幌通運「こだま」の編集などをつとめ、現在「北海作家」編集責任者、道都短大教授。詩集「虹をおふ」刊行。作品に戯曲「炭塵」、小説「歯車」「変春曲路」「輪舞」などがある。

(木原直彦)

相神 達夫 昭6・2・21 (1931) 「新聞記者」滝川市生まれ。北海道学芸大学札幌分校卒。「ダン」に「北海道を探検する」、北海道新聞に「日本の城」「歴史の風景」、アマゾン川、黄河、長江の流域の旅などルポ記事を執筆。「新さつぽろ物語」(昭52、北海道新聞社)出版。編著に「城・歴史と風土の旅」「世界の河」など。北海道新聞社勤務(「ダン」編集長等を経て文化部長)、日本ペンクラブ会員。(朝倉 賢) 相川 育洋 大6・7・19 (191

「俳句」札幌市生まれ。本名美義。空知農業学校林科卒。元北海道庁職員。昭和30年伊藤凍魚を識り俳誌「水下角」に入会。32年「アカシヤ俳句会」に入会して土岐鍊太郎に師事。44年同百花集同人、55年同木理集(無鑑査)同人に推される。53年句集「羽化」上梓。北海道俳句協会常任委員。アカシヤ俳句会運営委員として庶務会計に尽力。俳人協会員。

(岡澤康司)

相川 正義 明36・3・18 (1961) 「詩」札幌市生まれ。北海道大学卒。大正8年頃より「北大文芸」「展望」に詩を発表。一度だけ「北大文芸」にペンネーム星透を使う。14年服部光平、伊藤義輝、外山卯三郎らと、詩と版画の同人誌「さとぼろ」を札幌詩学協会から創刊。編集にたずさわり、15年アンソロジー「全北海道詩集」を編集、発行。大正期における札幌の文化運動の一つの大きな意義をもたらした。大正14年頃北大スキー部の部歌を作詞、秋田脳病院、埼玉毛呂病院勤務などを経て、12年旭川市に精神神経科病院開業、17年「北海道文学」(旭川・北海道詩人協会機関誌)に発表以来詩作を休筆。もつぱらエッセイ、訳本に筆をすすめる。詩集「雪と麵麴」、訳本「愛と死と夢を凝視めて」ジヨバンニ・パビニ著、エッセー集「釣り

・釣れ・釣った」がある。詩誌「情緒」同人。(東 延江)

相坂 郁夫 昭8・8・18 (1933) 「俳句」夕張市生まれ。札幌短期大学卒。国家公務員。高校時代に詩や俳句を作り北海道新聞俳句欄の細谷源二選を受け、昭和30年「水原帯」に入会、一方三〇年代の社会性俳句論議の高中を「圏」「ガンマー」「象」など道内若手作家を中心とした同人誌に積極的に参加。47年水原帯賞、48年第二回細谷源二賞を受賞。「粒」「広軌」「北群」同人。現代俳句協会員。(辻脇系一)

藍野 祐之 明21・6・2 (1933)

7・18 (1938) 「美術」千葉県生まれ。東北帝大農科大学卒。大学在学中に原田三夫、小熊掉らと有島武郎を中心とする学内の美術団体黒百合会をはじめた。黒百合会は今日も続き、美術団体の嚆矢として本道美術界に多大の影響を与えた。卒業後、大地主の実家を継ぎ、東海村村長等各種公職を歴任した。晩年の有島は彼の世話で大原町に母のため別荘地を求めている。(高山亮二)

青木 郭公 元治元・8・19 (1818・8・19 (1864-1943) 「俳句」新潟県生まれ。本名清治郎。新潟師範学校を卒業、郷里の小学校で教鞭をとっていたが、明治23年来道、函館の北海新聞に入

社。以来室蘭毎日新聞、函館新聞、釧路新聞などを経て大正元年北海タイムスに転じ15年まで勤めた。俳句は幼少の頃叔父の手ほどきで始め、一時秋声会の尾崎紅葉、巖谷小波に指導を受けたこともある。新聞俳壇の選は明治27年の北海道新聞を皮切りに、北海タイムス、北海道新聞の選は大正4年から昭和18年までの長きにわたった。その郭公が新聞俳壇の投句者を基盤に「曉雲」を創刊したのは大正15年、郭公と共に大正期、昭和初期における北海道俳壇の両雄と並び称された牛島勝六がこれより早く大正10年に「時雨」を創刊しており、ここに二大俳誌併立の第一期黄金時代の幕が切って落とされた。「季を歳時記に探すは愚」といい、北方自然の中に季の創造を求めたことは、当時中央偏重の考え方の多かつた道内俳人の心を覚ます鐘となった。郭公の作風は勝六の幽玄、蒼古に對し明快闊達、一茶的なとぼけた味すらあった。気軽にどこにでも出かけ、門弟たちと膝をまじえて作句の指導もした。社会部長を最後に新聞社をやめ「曉雲」一本に打ち込んだ郭公の生活は必ずしも楽ではなかったようで、青木家の家財は俳句のため「曉雲」のため、たびたび質草に変わったという伝説がある。郭公門からは白山空華、竹田凍光、新田汀花、杉山月魄、

古田冬草ほか多くの俳句指導者を輩出しており、現在第一線で活躍しつつある山田緑光、川端麟太、宮部鳥巣らも若き日「曉雲」の門を叩いている。腸患のため札幌市で没した。「郭公句集」は泉谷無月が郭公の古稀を記念して昭和8年曉雲社から刊行したもの。句碑は四基、札幌荒井山、中山峠、松前城址、旭川鷹栖公園に建つ。荒井山の句碑は「日の句ひ水の句ひ草茂り澄む」(川端麟太)

た。郷土歌壇発展のため「湾」会員の作品指導に専念している。(北野竜介)

ける。50年歌集「青蛙」を樹水社より出版。54年講談社「昭和万葉集」に二首登載。「潮音」「新壘」同人として活躍。

活を送り、「青空」「新短歌時代」に所属。生粋な口語歌人として、その存在は貴重である。

青沼仰風 明43・3・3(1906)「俳句」日高管内門別町生まれ。本名信義。日本大学芸術科卒。昭和29年「水原帯」同人を辞してから「壺」「秋」「北の雲」に拠り、45年「壺」「北の雲」同人。58年北の雲大賞を受賞した。

青葉三角草 明42・8・8(1909)「俳句」千葉県生まれ。本名誠。昭和10年東京慈恵会医科大学卒。耳鼻咽喉科医。中学時代より父や兄の影響で句作に志す。大学時代も時々句作。19年北見市に疎開。実兄唐笠何蝶主宰の「阿寒」に協力してから本格的に句作生活に入る。26年より高浜年尾に師事、「ホトトギス」で活躍、虚子選最後のホトトギスで巻頭になる。35年東京に転居、医院を川崎市に開業。36年ホトトギス同人に推される。その後花鳥諷詠の主客両観に疑問を持ち、純客観写生こそ俳句の本質であるとして「地球の真を直観す」など小論文を次々とホトトギス誌に発表。50年岡山県津山に移転、主宰誌「写生理論と実作」を発売。純客観写生の叙景詩こそ俳句と唱導中。句集に「三角草句集」など。評論集に「新しき伝統」「俳句の芸術への道」。(乳をのむ仔馬の首のよちれをり)

青葉鬼舎 明37・6・25(1904)「短歌」宮城県生まれ。明治40年父母と共に胆振管内洞爺村字富丘の新開地に入植し、開拓の労苦をつぶさに体験。昭和56年離農。特異な農民口語歌人として活躍した。歌は藤田晋一に師事し、大正6年頃晋一主宰の文芸誌「土筆」に俳句、文語歌を発表、のち口語歌に移り、昭和7年より「青空」に加入、作歌に専念するようになった。その後、「素描」「炭かすの街」「防風林」「新樹小屋」「群青」「輪」「現代短歌」「新短歌時代」「木賊」等、所属した結社は十数社に及ぶが歌は一貫して口語型式を捨てず、46年歌集「百姓記録」、50年詩歌集「白鳥」、54年「有珠山噴火」を発行。歌風は奔放、天衣無縫の生活詠で、すこぶる多作家でもある。56年離農後は自適の生

青山有記 昭22・9・14(1907)「小説」本名松竹谷孝子。札幌市生まれ。北海道教育大学卒。「テトラポットのある風景」によって北教組結成三〇周年記念文学賞に入選し、「北海道新

青地 繁 大11・8・15(1902)「短歌」上川管内上富良野町生まれ。東中尋常高等小学校卒業後農業に従事。昭和15年並木凡平の口語歌誌「青空」に入社するが一年で退社。16年小田観螢主宰の「新壘」に入社。翌17年太田水穂主宰の「潮音」に入社。その透明度の高い作品は注目されたが18年大東亜戦争に応召、20年に復員後は和田耕人の上富良野噴煙短歌会に所属して活躍。21年川仁純子指導の中富良野潮音会に参加、「富良野路」に出詠。21年西川青涛の主宰する「樹水」に加盟、現在選者。人望篤く上富良野農民連盟副委員長ほか数多くの公職を兼任の傍ら、東中中学校校歌、青年団歌、小唄等を作詞、49年上富良野文連一〇周年記念式に短歌部門の表彰を受

青山ゆき路 明40・8・11(1907)「短歌」本名定次郎。石川県生まれ。小学校在学中より絵画、文学に興味をもち回覧誌を發行。大正13年頃より歌作。大正末期並木凡平を識り口語歌を作りはじめる。札幌の炭光任発行「一点」に作品を発表。小樽から並木凡平の「新短歌時代」発行に参画、編集同人。同誌終刊後、昭和6年6月「青空」を創刊主宰。20年休刊。40年復刊現在に至る。全国短歌雑誌連盟常任理事。新短歌人連盟常任理事。北海道歌人会委員。歌集「せせらぎ」「ダリヤ咲く窓」「青空に描く」「海峡」「青山ゆき路歌集」。53年6月小樽朝里川温泉に歌碑建立(豊倉の流れに沿うて定山が袈裟掛け憩うた岩頭光る)。五十有余年に及ぶ北海道歌壇における業績は顕著であり、口語短歌の灯ともし続ける短歌理念は偉大である。詠風は並木凡平の生活即短歌を信条とし、生活詠に共感をよぶ作品が多い。現在「新短歌日記」の発刊を手がけており、出版の意欲も旺盛である。また北海道理容協同組合理事として活躍。その功で58年厚生大臣賞受賞。趣味の詩吟は九段、書道は二段。絵画も卓抜な筆致で「青空」の表紙を飾る等その芸域も広範にわ

たる。(吉田秋陽)

赤井善一 (1915) 「詩」福島県生まれ。昭和22年から渡島管内大野町に移り住む。詩歴は堀口大学の「若草」や西条八十主宰「若草」の詩壇への投稿からはじまる。風土性と生活感を巧みな構成力でまとめた抒情詩が評価され、「詩文学研究」「芸芸汎論」「新詩論」「麦通信」に作品を発表。北園克衛、笹沢美明、秋谷豊、小野連司らとの交友がはじまる。後年は日常性のなかの個の追求から、生存の意味を探ろうとする重量感をにじませた作品を「詩学」や、同人メンバーである「地球」「竜」、函館の詩誌「だいある」に発表。日本文芸家協会編「日本詩集57版」にも選ばれた。詩集に「彼岸」「たんぼぼうた」「明りを灯す石」があり、昭和54年には「これらを作らないうちは私の戦後は終わらない」として、意欲的な詩集「北海道」を出した。この詩集には大岡信が出色の作品と評価した「石の形態」をはじめ一四編を収めた自家版である。(堀井利雄)

赤木三兵 (1915) 明42・3・24、昭和50・4・30 (1909-1975) 「小説」旭川市生まれ。本名宇川渡。室蘭中学(現栄高)中退。郵便局勤務のかたわら演劇活動。昭和29年に木村南生と「山音文学」

発行。同誌に「大きな瞳」「山の科学者」「節婦」「和田氏の場合」「船出を知らず」発表。32年に短編集「郵灯」出版。同年NHK室蘭の連続ラジオドラマ「明るい群像」執筆。「コモリ傘の男」郵政大臣賞、「黄色い柩」随想社新人賞。また「隠医たち」は「芸芸首都」佳作となりHBCテレビドラマとして放送(昭和34)。36年より朝日新聞に「地名の旅」を連載し一〇〇回に及ぶ。退職後は著述、印刷出版に専念し手がけた書籍は一〇〇種を超える。(山の出版屋)として全国的な存在。出版の動機は「山音」発行資金調達のためである。同誌は彼のポケットマネーによって発行を継続した。二〇年間に六六号、奇しくも享年六六歳。伊達日赤病院で急逝した。(木村南生)

赤倉憲一 (1915) 明35・10・8、昭和48・11 (1902-1973) 「短歌」秋田県生まれ。明治41年両親に伴われて渡道、夕張、北見を経て美唄市に在住。大正7年国鉄滝川機関区に就職、富良野、稚内を経て名寄機関区に転勤、33年定年退職した。昭和3年「潮音」入社、幹部同人。5年「新壱」創刊と同時に入社、小田銀螢に師事した。21年「新壱」名寄支部を結成し、23年「新壱」名寄支社に昇格と同時に選者となり名寄短歌会を創設して

秋田雨雀 (1915) 明16・1・30、昭和37・5・12 (1883-1962) 「劇作、小説」本

名徳三。青森県生まれ。早稲田大学で坪内逍遙、島村抱月らに学び、在学中に社会主義へ接近。卒業後、小説、戯曲に手を染め劇団経営にも腐心。大正4年エロシェンコを識りエスベラント運動にも参加。昭和2年から3年ソ連革命一〇周年祝祭に招かれ、帰国後、国際文化研究所を創設。13年新協劇団の顧問となるが、15年強圧で検挙された。戦後郷里から上京、23年舞台芸術学院を創立し俳優養成に努め、25年には日本児童文学者協会長に推された。半生を叙した「雨雀自伝」(昭和28、新評論社)、「雨雀日記」五巻(昭和42、未來社)がある。代表的戯曲に「埋れた春」(大2)、「国境の夜」(大9)があり、後者は十勝の開拓成功者のかたくなな自己主義的信条が一夜の悪夢でゆらぎ、訪れたアイヌ人の優情と批判によって人道主義に目覚める話。取材作に「アイヌの煙」(明40)など。(小笠原克)

秋葉疎黄 (1915) 明33・3・3、昭和45・7・29 (1900-1970) 「俳句」山形県生まれ。本名政之助。札幌鉄道教習所卒。国鉄運輸関係勤務。俳句は昭和8年より「石楠」「柏」「緋衣」「はまなす」等に投句、札幌市で没した。46年遺句集を長

男の収が出版。(佐々木露舟)

秋庭八重子 (1915) 昭6・7・12、(1931) 「小説」美唄市生まれ。結婚後、悲惨などん底生活から昭和26年の事件を起し刑の執行猶予、自殺未遂一命をとりとめる。著書に「地獄を見たまど、愛の痛恨の手記」として「ななかまど」の挽歌(昭和54、恒友出版)がある。(佐藤喜一)

秋元盧風 (1915) 明11・12・13、(1878-?) 「詩、ドイツ文学」静岡県生まれ。本名喜久雄。明治40年8月から43年8月まで札幌農科大学(現北大)に在職。その間書かれた詩作品五〇編を詩集「北の空」として44年1月自家版で発行。「鴛鴦曲」ほか多くの訳詩集、訳本がある。(東 延江)

秋山清 (1915) 明38・4・20、(1905) 「詩、評論」福岡県生まれ。日本大学社会学科に学ぶ。アナキスト詩人、「黒色戦線」「弾道」等に参加。戦後金子光晴、岡本潤、小野十三郎と「コスモス」を発刊。「秋山清詩集」等に北海道取材の「深川ベニヤ工場」「石狩」「松籟」「馬籠」「からす」「五稜郭」等がある。(更科源蔵)

秋山しづれ (1915) 大14・11・15、(1925) 「俳句」岩見沢市生まれ。本名幸枝。岩見沢女子高校教師として勤

地域の後輩育成に尽くした。30年日本歌人クラブ会員、32年北海道歌人会委員、36年8月第一回「新壱」地区大会を開催、道内より小田銀螢夫妻をはじめ、新壱、潮音社友一〇〇名近い参集を見た。36年名寄市文化賞受賞。47年5月歌集「独りの道」を出版した。(鍋山隆明)

赤平典子 (1915) 昭21・11・22、(1909) 「詩」深川市生まれ。深川市立図書館勤務。昭和44年「環」会員となり、52年「北海詩人」の復刊にも加わる。かたわら56年「麦笛」を創刊して現在に至る。詩集に「海のない街」など五冊。北海道詩人協会員。(山本 丞)

赤間武史 (1915) 大2・11・10、昭和58・2・27 (1913-1980) 「小説」帯広市生まれ。本名武。小樽新聞社に勤める。昭和8年「芸芸新報」を創刊して以来、「新理想」「北海道文学」「原稿」として戦後にいたり、21年「原稿」を再刊したあと35年から「文学道場」「芸芸道場」と新人発掘に意欲を示した。その間「北海道芸芸年鑑」(昭和18、43、44、47年版四冊)を編集刊行。18年旭川七師団に召集され北千島の守備に当たったが、「占守島手記」(昭和45、日本新作家協会)はその実戦記録。「マガダン強制収容所」(昭和48、芸芸道場編集部)もある。(木原直彦)

務。胸部疾患のため療養生活に入り、作句を始める。矢田枯柏に師事し「柏」「径」「草人」を中心に投句する。昭和41年より北光星に師事、「道」の前身である「扉」へ入会。「道」同人となる。49年句集「花鋏」を上梓、身辺の素材に素直な眼を向ける作風である。他に合同句集「朱弦」。(北 光星)

芥川竜之介 (1915) 明25・3・1、昭和2・7・24 (1882-1927) 「小説」東京生まれ。東大在学中に久米正雄らと第三、四次「新思潮」創刊。「鼻」で漱石に認められ、以後「羅生門」「奉教人の死」「大導師信輔の半生」「玄鶴山房」などで大正文壇の第一人者となる。昭和2年5月改造社の講演で来道、随筆「東北、北海道、新潟」を残す。小樽での講演は伊藤整「幽鬼の街」「若い詩人の肖像」が印象的に伝えている。(小笠原克)

浅井京子 (1915) 昭23・6・7、(1906) 「小説」十勝管内清水町生まれ。旭川大学貿易学科卒。日ソ貿易に入社してモスクワに駐在。昭和57年「ちいさなモスクワ。あなたに」で第一回潮賞。これに「靴の精」を付して一冊とし、作家の道にふみだす。58年別冊「潮」に「帽子の男」を書いたあと、プーシキン大学に留学。59年「赤い矢」を書く。古井由吉論などの作家論もあるが、リルケの影響

響の下に小説にむかった。「愚神群」同人。

(高野斗志美)

浅井花子 明36～昭47・4・17 (1903～1972) 「小説」熊本県生まれ。本名藏前花。宮本百合子に励まされ「芸芸評論」に「ある夫婦」を発表。「婦人文芸」の「泥ねいの春」が第一回芥川賞有力候補になる。社会運動非合法中、全協オルグ活動、流浪、投獄に遭いながら札幌に潜り、活動家藏前光家と結婚。昭和16年光家検挙、終戦まで女工となる。小樽に転居、婦人有権者同盟をつくり市議選に立候補する。同人誌「くま」に「風見の鶏」を発表。釧路市で没。

(東野ひろ子)

浅井勇吉 明38・1・19～昭60・5・13 (1905～1986) 「短歌」歌志内市生まれ。大正15年より昭和34年まで上砂川町三井鉱山鉱業所総務課勤務。昭和34年から札幌市の鉄鋼商社に勤め、56年退職。昭和40年原始林入会、同人。昭和45年北海道歌人会賞を受ける。新琴似、しのろ短歌会の毎月例会には欠かさず出席し、沈滞しがちな作歌意欲を盛りあげ、実生活を基調として抒情を貫く修練にとめた。

(宮西頼母)

朝倉賢 昭7・3・2～(昭32) 「小説、シナリオ」札幌市生まれ。北海道学芸大学札幌分校二類修。同人誌

「くりま」を中心に「来訪者たち」「渥原」「柱状節理」「骨とライラック」「点睛」などを発表。「来訪者たち」は「文学界」(昭44・9)に転載された。ラジオドラマ「アグアドの首」(一九七)の日本からの候補となる。長編「鮫たちの樹水」(昭52・4、太陽)、共著に「北海道放送脚本集」(昭47・12、北書房)。札幌市役所勤務。

(倉島 斉)

浅田青蓮 大13・12・10～(昭54) 「俳句」秋田県生まれ。本名英一。昭和26年伊藤凍魚、熊谷杜宇の指導を受け「雲母」「水下魚」復刊後これに拠り、間もなく「水下魚」同人。31年第一回水魚賞受賞。現在「雲母」同人、巻頭作家ともなる。57年「曜の会」を結成、代表となる。33年には雲母寒夜句三昧個人賞受賞。NHK俳句講座添削指導講師、江別、大麻等の句会指導。(鳥 恒人)

朝谷耿三 明42・2・17～(昭60) 「小説」後志管内余市町生まれ。

本名川端義平。日本大学高等師範部卒。哲学者倉田百三が義父にあたる。東京在住中「第十三次新潮」などに参加。帰道後「第一次札幌文学」同人。主な作品は「寒月に描く」(札幌文学)、「谷間の分教場」(早稲田文学)、「蒼海の記録」(いのち)。単行本として「老人と

志内市で詩誌「火口丘」を約二年間発行、新鋭詩人として注目を浴びる。旭川の詩誌「情緒」に加入、また道内若手詩人が結集した「先列」を経て、昭和29年「野性」に参加した。「野性」解体後の33年河邨文一郎らの「核」の創立同人となり、45年第一詩集「狼」によって北海道詩人協会賞を受けた。その間、歌志内鉱閉山とともに小樽市へ移る。浅野の好んでとり上げたテーマは戦争体験であり、晩年は米国のニグロの状況であるが、彼にとつての戦争とは共犯者ののがさを混ぜあわせた泥のような触感をもつもので、彼自身の挫折と犠牲を通してその残滓を洗い浄めた世界を次の世代に明け渡そうとする悲壮な願いにみちている。

(河邨文一郎)

浅野 晃 明34・8・15～(昭71) 「詩、評論」滋賀県生まれ。東京大学弘法科卒。西田哲学の影響から、戦前学生運動の中核「新人会」に大宅壮一らと入会。野坂参三の産業労働調所で野呂栄太郎、志賀義雄らと日本共産党再建期に活動。三・一五事件直後に検挙され、未決収監中に水野成男の解党上申書事件に加わり転向、党除名の転形期を経る。昭和9年亀井勝一郎、保田与重郎の日本浪曼派に、12年「新日本文化の会」に所属。北海道へは、20年勇払国策バルブの

水野に誘われて疎開、その開かれた思想は地域振興の先見者を育て、知識人の多くに影響を与えた。北海道関連の詩集に「風死なず」(玄文社)、「光りの中に歩む」(穂別町)があり、「寒色」(果樹園社)は39年読売文学賞。評論「岡倉天心論考」「主義にうごく者」等。小説「贖い」のほか児童向け物語も数多い。詩「天と海」を自殺直前の三島由紀夫が朗読したことも知られる。立正大学名誉教授。

(斉藤征義)

浅野太市 昭5・7・10～(昭60) 「小説」岩見沢市生まれ。十代でひとり大阪に住み、職業を転々とする。大阪の「文学思潮」などに小説を発表。鹿児島と東京で雑誌記者。NHK、日本放送、日活などでシナリオを書く。日活映画「野郎!地獄へ行け」などがある。

その後「炭砒文学」に「傾ける空間」を発表し、「北方文芸」掲載の「闇の中」が第七回(昭48)北海道新聞文学賞の佳作に選ばれた。

(浅野明信)

浅野明信 昭8・8・5～(昭39) 「詩」室蘭市生まれ。北海道学芸大学を経て玉川大学卒。昭和36年詩誌「明暗」(夕張)の主宰をはじめとして詩誌「ベルシャ」(江別)、「童話と小説」「文学会議」「瞬間の眼」などを次々と発行、以後「北海詩人」を季刊で継続させ、多

九人の子たち」「後志の文化」「仁木町史」「余市小史」がある。(小松 茂)

(小松 茂)

麻田伸彦 昭19・2・12～(昭65) 「小説」札幌市生まれ。本名島田敏二。高校卒業後、印刷工、業界紙記者、塗装業などに従事し、現在フリーライター。小説「山女魚」(昭52・8、「ノア」3号)で第四回北方ジャーナル同人雑誌賞受賞。「石積み」(昭55・6、「北方文芸)、小説集「充たされた午後の断章」(昭57・9、近代文芸社)。

(神谷忠孝)

浅沼君子 明39・12・1～(昭59) 「詩」後志管内喜茂別町生まれ。庁立旭川高女卒。旭川在住時高橋ことじの創立した芸芸グループ「朱蘭会」に入会、詩誌「独活」同人となる。のち網走管内端野町に移り、端野小学校教師。その頃函館の海老名礼太のさそいで「北方の詩」の同人となる。個人誌「北海道」を一号から八号まで刊行。竹内てるよ、中島葉那子と親交深く、働く婦人としての立場や社会への告発を歌う。

(小松 英子)

浅野秋穂 昭3・6・3～昭55・9・8 (1908～1980) 「詩」赤平市生まれ。戦後、秋谷豊らの「葦」に所属、「地球」復刊とともにこれに加わる。歌

くの新進を育成。北海詩人社として詩人叢書発刊も手がけ「北海詩人選集」等を出版。「日本未来派」にも加わり多作の活躍で知られる。小中学校教師として児童劇や童話も書き、脚本集「とばされた分校の屋根」、小説集「宮子の掟」など。詩集に「追憶の烙印」「ツヤとライオン」「理のいくさ」「北風の角度」など多数あり、「律の宿」は日本詩人クラブ賞候補、「バラのあいつ」は北海道詩人協会賞を得た。童話は北海道児童文学全集(立風書房)に収録されている。日本詩人クラブ会員。北海道詩人協会常任理事をつとめる。

(斉藤征義)

浅原六朗 明28・2・22～(昭69) 「小説」長野県生まれ。早稲田大学英文科卒後、編集者を経て創作に入り、大正14年「不同調」同人、昭和4年「近代生活」同人として活躍、新社会派文学を提唱、「混血児ジヨオヂ」(昭6)がある。昭和3年中村武羅夫らと来道。

(小笠原克)

朝比奈義郎 明32・3・3～昭20・8・18 (1899～1945) 「短歌」新潟県生まれ。本名義太郎。大正5年来道。札幌の商社に勤務し昭和13年渡満したが、同地で死去。大正末の「新樹」「原始林」、昭和には「橄欖」で活躍。歌集「笹原」(昭3)を刊行。(中山周三)

朝日亮雄 昭18・7・15(66)
 (詩) 釧路管内弟子屈町生まれ。京大文学部卒。詩誌活動は行わず、詩集による作品発表をもっぱら行っている。昭和51年処女詩集「平たい顔」のほか「性市場」「眠れぬ時代」「旅舟」「ラスカル・ブルース」などを刊行した。詩風は仏教的視点を基盤として、死の相のもとに人間、事物をはじめ森羅万象を照らす点に特色がみられる。北海道詩人協会員。(木井 浩)

朝海さち子 昭9・4・14(168)
 (小説) 空知管内新十津川町生まれ。本名台野澄子。滝川高校を出たあと旭川日赤高等看護学校を中退し、滝川職業安定所勤務。のち上京し慶応大学医学部付属厚生女子学院を卒業。農林省の勤めを経て日本油脂美唄工場に籍を置いたころから本格的に小説と取り組む。再度上京後は母校慶応の恩師林麟(推理作家木々高太郎)の手引きにより十津川光子のペンネームで短編集「コタン」の春(昭33・12、朱雀社)を上梓した。ふるさとを舞台にした作品群。49年に「谷間の生霊たち」で第一〇回太宰治賞を受けたが、このときに筆名を変えた。(木原直彦)

浅見稲香 明13(昭30頃)(880)~1965頃(俳句) 岩手県生まれ。長く京、「留萌文学」「北見文学」に所属した。旭川詩人クラブ会員、北海道詩人協会常任理事。(佐々木逸郎)

安住誠悦 明45・7・4(昭43・1・31(1912~1968)) [近代文学研究] 胆振管内洞爺村生まれ。函館師範、東京高師を経て、昭和25年北海道大学文学部国文学科第一期卒。26年7月日本学協会北海道支部創立に尽力、以後その運営に当たり、道内国文学研究の推進に貢献。27年北海道教育大(岩見沢)助教。北村透谷研究を軸に明治浪漫主義の研究に業績が多い。著書に「浪漫主義文学(昭44、北書房)がある。(和田謙吉)

安住尚志 大8・1・20(1919) [短歌] 胆振管内洞爺村生まれ。伊達専修農業科卒。杉浦翠子に師事。短歌誌「木賊」主宰。合同歌集一〇冊余。個人歌集一〇冊刊行。歌集に「無明歌」「生命の細胞」。現役並びに、従軍歌多数発表。ほかに「デンガン先生春秋記」がある。文化活動では藤田晋一、与謝野鉄幹、晶子夫妻歌碑、菅江真澄歌碑、菅原弥五大夫歌碑等建立。洞爺村史、同農業協同組合史、虻田町百年史等も編纂、執筆。洞爺村農業委員を経て洞爺村教育委員長、民生委員推薦委員等で活躍中。(青葉鬼善)

麻生直子 昭16・12・16(1941)

函館に住み、のち小樽、札幌、東京と転々、戦時の強制疎開で樺太に渡る。昭和19年病弱の姉と郷里に戻る。姉の没後再び函館に滞在中、戦禍に遭って十勝に移る。その間俳句、俳画の行脚は北海道、樺太、本州、四国、佐渡、さらに満州は大連、ハルビン、吉林等津々浦々に足跡を残し帯広市に没した。(佐々木謙舟)

浅見淵 明32・6・24(昭48・3・28(1889~1973)) [小説、評論] 神戸市生まれ。早稲田大学在学中から創作を始め、以後多くの同人誌に関与。「昭和文壇側面史(昭43、講談社)など多数。北海道出身の作家岡田三郎、八木義徳、長見義三らへの親身な批評がある。(小笠原克)

浅見祐治 昭4・2・14(1928) [小説、劇作] 鎌倉市生まれ。昭和26年二松学舎卒。長万部高、札幌東高勤務。同人誌「北緯四十三度」「新北海道文学」に参加。小説「比企と里沙」等を発表。34年以後劇作に転じ「余計な奴」「ポンプになった九一」「メコンデルタ」を次々と発表。43年函館北高へ転じ「井越早稲秘聞」により全道高校創作脚本賞を受賞。函館の歴史を掘り起こした「碧き血の民」も代表作である。(菅村敬次郎)

(詩) 松山管内奥尻町生まれ。本名村田千佐子。函館西高卒。以後東京に住む。「潮流詩派の会」所属。詩集「霧と少年(昭49)、「北への曳航(昭53)、「神威岬(昭57)、「詩と思想」の編集に参加し、企画、司会に当たる。(佐藤喜一)

足立音三 昭12・6・4(昭49・2・24(1937~1974)) [俳句] 札幌市生まれ。昭和31年北海道新聞俳壇の伊藤凍魚選に投句、「水下魚」に拠る。早稲田大学在学中は俳句研究会の指導的役割を果たし、雲母・青潮会で石原八束の指導を受けるが、松沢昭の影響を受け、「四季」創刊後編集同人。現代俳句協会員として活躍。46年北の雲社から独特の美意識をあしらった句集「花」を刊行した。(島 恒人)

足立敏樹 明35・4・17(1982) [短歌] 京都生まれ。一六、七歳の時から作歌をはじめ、大正14年6月札幌の萩の里人(小沢勇)の編集する「草いちご」が全道的な雑誌とするため二三の支社を設置した時、苫小牧支社を引き受ける。昭和2年歯科医専在学中に倫理科教授であった太田水穂に師事、その教え子たちの富士短歌会では有力なメンバーであった。6年苫小牧に帰郷して歯科医を開業し歌会活動をする。当時創刊間

足助素一 詩 明11・1・1(昭5・10・29(1878~1938)) [出版] 岡山県生まれ。明治37年札幌農学校卒。在学中より土曜会等を通じ有島武郎と親交があった。卒業後官吏を辞し札幌で貸本屋独立社を開く。大正3年独立社の社財を遠友夜学校に寄付し上京。幾波乱のち、有島の援助で出版社叢文閣をはじめた。第六集以後の有島武郎著作集の刊行をはじめ左翼系著作の出版に寄与した。遺稿集「足助素一集」がある。(高山亮二)

東 延江 昭13・4・12(1938) [詩] 旭川市生まれ。本名松野郷延江。藤学園旭川高校(現旭川藤女子高校)卒。中学時代から詩作をはじめ、昭和28年「青芽(名寄)同人。下村保太郎に私淑し、29年「情緒」に作品を発表、のち同人となる。32年5月石川郁夫、水戸英宣、小関恒夫らと詩誌「童貞(のち「フェスタ」と改題)創刊。33年第一詩集「渦の花」を刊行。ほかに「北の涯の(昭48・10)、「冬のから(昭50・1)、「掌詩集」があり、詩書に「北海道関係詩集年表(昭58・8)、「旭川詩壇史(昭59・4)、「評伝「クサベラ・レーメ(昭58・9)、「HTBまめほん」がある。この間に同人または会員として「だいたいある(函館)、「環(名寄)、「オメガ(帯広)、「コスモス(東

もなかつた「新墾」の中でも重きをなした一時期選者もした。のちに本州に転出したが18年再び帰道して幌内炭鉱病院に勤務し、幌内歌会の指導にあたる。戦後は「草原」の同人や「青根」の客員などになるが、27年大夕張短歌会結成への働きを作り、29年の北海道歌人会結成への発起人となり同会の委員となった。歌風は伝統を重んじた重厚な叙情である。京都市在住。(永平利夫)

足立敏彦 昭7・8・15(1962) [短歌] 苫小牧市生まれ。北海道学芸大学岩見沢分校卒。昭和21年空知農業学校校友会の「ポプラ短歌会」に、教員の近藤絢子、生徒の坂田資宏らと参加。26年に坂田、大塚陽子らと共に草原短歌会を結成、歌誌「草原帯」を創刊した。自らも歌集「鶴鶴」を出し、合同歌集の「樺火集」を出版するなどの活躍をした。28年夕張市の中学校教員として赴任した。28年には、夕張を主な活動の舞台とした。翌29年には父の足立敏樹や藤田貞雄を指導者とし、「草原帯」のメンバーを中核に地元歌人も糾合して歌誌「柗形」を創刊して夕張歌壇活動に刺激を与えた。さらに公民館活動等を通じて毎月市民短歌会を開くと共に、短歌教室、短歌研究会などを開催するなど次第に短歌作者を増やしていった。「夕張市民歌集」

として発刊された合同歌集は、一九六七年版では作者三八名、歌数七六〇首。一九六九年版になると作者五〇名、歌数が一〇〇首にもなっている。40年郷土文化活動の結集を企図して星雅夫らと夕張歌人会を提唱し結成する。積極的に道央や他地域歌人との交流もはかり、44年の暮れには地域歌壇史として光を放つ「夕張歌壇史」を刊行した。46年札幌市へ転任。昭和23年入社以来の「新墾」の選者、編集委員の後編集兼発行人となつて大所帯を背負っている。「潮音」同人。第六回新墾賞を受賞している。

(永平利夫)

安達不死鳥 明26・1、昭19・1 (1893-1944) 「短歌」札幌市生まれ。本名市之丞、のち一彦と改名。篠路小高等科卒。拓銀入行後、札幌ビール会社に就職、死亡時は札幌支店長。札幌で最も古き歌誌「オリーブ」(大7創刊)、ついで「アカシヤ」(大11創刊)を編集。大正期北海道歌壇に残した足跡は大きい。歌集「樹木光れり」(大12)、佐久間砂汀路編集「北海道歌人選集」(大13)に参加。

(田村哲三)

安達零太 明37・12・15 (1904-) 「詩」札幌市生まれ。本名宗吉。求道者として、その道程を詩の形で表現する詩法の詩人。所属詩誌はなく詩集「彼

岸会」「阿呆陀羅經」がある。(東 延江 阿部宇之八 文久2・2・28、大正13・11・10 (1892-1994) 「新聞記者」徳島県生まれ。慶応義塾を出て明治15年に大阪新報の記者になった。実父らが北海道で事業に携わっていたことから北海道開発に関心を持ち来道。北海道新聞の経営を任せられ、自ら精力的に執筆、大正2年札幌区長に選ばれた。北海道新聞の前身、北海タイムスの経営を担当、多くの人材を北海道内の新聞に送り出して新聞界の発展に大きく寄与した。

(佐藤忠雄)

阿部慧月 明38・12・25 (1905-) 「俳句」十勝管内豊頃町生まれ。本名富勇。大正9年札幌通信講習所卒。郵政職員として昭和42年まで勤務。大正11年より一人で句作を始めたが、間もなく石田雨圃子によってホトトギスを知り、以後「ホトトギス」「玉藻」に投句。高浜虚子に師事、本道の代表的俳人として活躍中。昭和24年ホトトギス同人。さらに昭和18年より「かつらぎ」にも投句。42年より専念して阿波野青歌の指導を受ける。昭和32年「かつらぎ」同人。

38年より北海道新聞俳壇の選者。51年「かつらぎ」推薦作家選考委員に推される。現在北海道ホトトギス会顧問、函館ホトトギス会長、俳人協会評議員など本

道俳壇の長老として多くの俳人を指導している。句集に「芍薬」「晚涼」「遼遠」「自註阿部慧月句集」「牡丹焚く」「蝌蚪の紐」などがあり、序文は虚子、または青歌が書いている。評論に「俳句の鑑賞」がある。

「牡丹焚く」 慧月の第五句集である。大正11年から昭和57年に至るまでの主として「ホトトギス」「玉藻」「かつらぎ」に発表した句より自選。虚子は、仕事に携わっている傍ら明け暮れ俳句を作ること生涯の計としている最も熱心な俳句作者の一人と称し、慧月俳句を、一見人の目を驚かす様なものはないけれども、どの句も君と共に自然に遊ぶ様な穏和な感触を受けると言っている。(生涯の今の我あり牡丹焚く) (嶋田一步)

安部公房 大13・3・7 (1906-)

「小説、劇作」東京生まれ。幼、少年期を満州で過ごす。原籍を旭川市東鷹栖町におく。東京大学医学部卒。昭和26年「壁」S・カルマ氏の犯罪」で芥川賞を受け、斬新な前衛的手法の作家として一躍脚光をあびた。以後、文学の前衛に発表していくが、37年の「砂の女」は、安部文学の高い頂点をしめし、これによって日本を代表する国際的な作家の地位を手に入れた。このあと「他人の

顔」(昭39)、「榎本武揚」(昭40)、「燃えつきた地図」(昭42)等の問題作を書き、さらに「箱男」(昭48)、「密会」(昭52)等によって新しい文学空間の造形にのりだした。この間、48年には安部公房スタジオを結成し、実験的なイメージ空間の造形をめざす演劇運動をくりひろげている。エッセー集に「砂漠の思想」(昭40)などがあるほか、長編小説としては、59年に出た「方舟さくら丸」がある。

(高野斗志美)

阿部三婦 明37、昭59・1・17 (1904-1984) 「俳句」夕張市生まれ。本名部。大正13年国鉄職員、同定山溪保健所長、有珠鉄道病院事務長を経て昭和30年国鉄退職。俳句は大正13年「枯野」に拠り長谷川零餘子に師事。昭和5年長谷川かな女主宰「水明」創刊に参加し、34年「水明」同人となる。48年かな女の後継者長谷川秋子天折するや、感ずるところあって俳句生活をする。31年句集「化転」刊行。

(横道秀川)

阿部信一 昭7・8・15 (1903-) 「俳句」後志管内ニセコ町生まれ。法政大学文学部卒。共和町立共和中学校教師。「道」俳句会所属。中学生への俳句指導に力を注ぎ、昭和57年俳句指導教育実践賞を北海道教育委員会より受賞した。随筆、小説の発表も数多い。

(北 光星)

阿部たつを 明25・1・22 (1905-10・23 (1892-1984) 「短歌」東京生まれ。本名竜夫。一高、東京大学医学部卒。医学博士。大正11年渡道。市立函館病院、函館中央病院小児科医長など歴任。大正初期に「創作入門」「橄欖」などを経て、昭和7年歌誌「無風帯」を創刊、46年まで主宰する。歌風は穏やかな中にも鋭い観察が詠み込まれてその人柄を表している。歌集に「溪流」「新雪」「茜雲」など。「函館歌壇史」「啄木と函館」「啄木と郁雨の周辺」「新編啄木と郁雨」。その他郷土史関係の著書、句集などあり。特に毎年誕生日祝いの豆本歌集は晩年まで二十数冊に及ぶ。函館市文化賞、道文化奨励賞を受賞し叙勲の栄に浴する。46年秋、五〇年住みなれた函館を後に、名古屋市に移住する。その後悠々自適の十数年を過ごしていたが、痛風を患い、九二歳で没した。函館護国神社の境内に歌碑がある。(人恋ひし遠山の雪ほのぼのと春の夕日に茜さす頃)

(岩佐和歌子)

阿部 保 明43・5・30 (1910-) 「英文学、詩」山形県生まれ。東京大学文学部卒。北大名誉教授、東京経済大学講師。百田宗治の「椎の木」同人。作家伊藤整と交友をもつ。詩集「紫夫

人」(昭28、河出書房)、「冬薔薇」(昭30、川崎書房)、「蝶」(昭33、公論社)は札幌在住時代の詩集である。その他翻訳詩集、評論が多く、なかでも「ボオ」の翻訳は著名である。詩作品は「眼」(千歳)に発表。北大退職後東京在住。昭和初期の新しい詩の運動の渦の中にいた詩人で、詩の形式、ことに「椎の木」の散文詩運動的な翻訳の形式はモダニズムの形をとっている。北海道ではそれら詩の形式のもとに、対象を自然の風物にとらえて表現を抒情的に結晶させていった。雪、流水といったテーマの、イメージの展開の美しさは芸術的である。帰京後詩集「薔薇一輪」(昭53、昭森社)、「流水」(昭55、弥生書房)を上梓した。

(小松瑛子)

阿部知二 明36・6・26、昭48・4・23 (1903-1973) 「小説」岡山県生まれ。東京大学英文科卒。戦後しばしば講演会に来道し、昭和41年秋は然別湖畔に宿泊。そこで取材した或る女の哀話「泣きうさぎ」(昭42・1、「小説新潮」)がある。

(八重樫実)

阿部みどり女 明19・10・26、昭55・9・10 (1886-1980) 「俳句」札幌市生まれ。本名光子。北海道開拓の屯田兵創設に当たった永山武四郎(のち第七師団長、北海道庁長官)の四女。旧

制札幌北星女学校中退。大正元年鎌倉で療養中俳句を知り、旧派宗匠の選を受け、3年病氣全快と共に「ホトトギス」投句、高浜虚子に師事。10年長谷川零餘子の「枯野」創刊に参加。また昭和2年室積徂春の「ゆく春」創刊にも参画。4年婦人句会「笹鳴会」を起し、6年河北新報の「河北俳壇」選者となる。7年「駒草」創刊主宰。20年疎開先の仙台で「駒草」復刊、没年まで継続。句集に「笹鳴」「微風」「光陰」「定本阿部みどり女句集」「雪嶺」など。31年河北新報賞、53年蛇笏賞等受賞。平明的確な作風。43年旭川の開拓記念碑に俳句が刻まれた。(秋風や石積んだ馬動かさざる)

(木村敏男)

阿部幽水 あべゆうすい 大12・12・4(1883)〔俳句〕胆振管内大滝村生まれ。本名保。昭和21年作句開始。23年「いぶり」「はまなす」同人。28年福田蓼汀に師事以来「山火」に拠り39年同人となる。41年第一二回山火新人賞受賞、俳人協会員。53年牧羊社から句集「昆布馬車」を刊行。大滝村に在って社会教育委員長、文化団体協議会長、俳句会長として郷土文化の育成指導につとめ、真摯な作家の定評がある。(鳥 恒人)

天田愚庵 あまた 安政元・7・20(1854)〔詩〕福島37・1・17(1864)〔短歌〕福島

県生まれ。通称五郎。平藩士の五男で、戊辰の役に平落城に遭い、その後行方不明の父母妹を捜し、全国を行脚。明治20年仏門に入り、鉄眼と称する。万葉調の歌を詠み、正岡子規とも親交がある。明治9年10月函館を訪れ、厳寒に堪えられず肺を病んで翌年帰京。26年6月再度来道、札幌、十勝に赴き、各一首を詠んでいる。(中山周三)

天野宗軒 あまのむねのり 明18・11・3(1889)〔俳句〕島根県生まれ。本名銀市。松江市立一成中学校、松江法律研修会卒。島根県庁を経て社会福祉法人札幌育児園園長、道兒童福祉審議会委員長をつとめた。俳句は中学二年の時漢籍の師林不昧に学び、明治37年子規門の奈良梧月に師事、日本派に属し、大正初期に俳誌「美津子見」「曲玉」を發行。「ホトトギス」「懸葵」「石楠」「俳星」「慧星」に拠る。大正9年渡道。

12年長谷川零餘子の来道を機に佐瀬子駿、石田雨圃子と図り互選会有無会を主催、北海道、樺太一丸のホ派有力俳人百余人を網羅。一方比良暮雪と軒雪会を興した。また「木の芽」「時雨」「暁雲」「水下魚」等代表俳誌の顧問として活躍したが、昭和5年朝鮮京城に渡り、訪れる百余の俳人と漢江俳句会を組織。7年再渡道、水声会を興し、9年俳誌「水

声」を創刊、金崎葭杖、手塚甫、鈴木白歩ら多くの俊秀を育てたが、古格を踏まえつつも常に新境地を求めてやまぬ覇気は「水声」をして旭川の「プリズム」、函館の「壺」と並ぶ北海道における新興俳句運動の拠点と言わしめた。戦後はNHKの俳句選者、北海道俳句協会顧問として重きをなす一方、長年の社会福祉事業功勞を認められ、藍綬褒章、勲四等旭日小綬章を受章した。句集は「美津子見」「双思楡」の二冊。札幌育児園園庭に(秋九月園児九十九人草に花に)の句碑が建っている。(金崎葭杖)

雨宮謙 あまみやま 昭13・2・15(1938)〔詩〕室蘭市生まれ。本名高橋繪。昭和33年文芸誌「第一形態」に詩を発表し創作を志す。45年詩誌「パンと薔薇」同人。翌年道詩人協会、室蘭文芸協会員となる。47年に第一詩集「庖丁」を出し、特異な生活歴を素材にし注目される。49年第一回室蘭文芸奨励賞受賞。52年詩集「かけらたち」を發行、新しい町おこし大道芸術祭を開催し実行委員長になる。56年の詩集「風太・ギンギラギン」は本人の血脈を通し、親子の意味を問いかけた。59年室蘭文化連盟奨励賞を受賞。(光城健悦)

綾部清隆 あやべひさたか 昭11・7・25(1936)〔詩〕東京生まれ。立正大学卒。

あさわか (人名編)

学生時代から浅野晃に師事。昭和37年詩誌「光と闇」(個人誌)を北海道で創刊、詩活動にはいる。高校教員、演劇教育にも力を注ぐ。道詩人協会員。「北海詩人」に多くの詩作品を発表。詩集「落書」がある。(浅野明信)

鮎田如牛 あしたか 文政6(1823)明20・4・14(1833)〔漢学、短歌〕宮城県生まれ。通称は四郎左衛門、号は盛衰軒。代々家老の家柄。明治4年伊達邦直の当別移住に従い、同地で塾を開き、子弟を教育した。後年は当別教育所の教師や、当別の戸長をつとめた。(中山周三)

新井章夫 あらいあきお 昭10・2・15(1935)〔詩〕釧路市生まれ。本名明夫。昭和28年、道立稚内高等学校卒業のころから詩作を始める。北海道開発局に勤務し、稚内、釧路、網走と、一貫して道北を移動するにつれて、凛烈な北の風土が詩的骨格を形成するにいたった。32年詩誌「未開」に加入、「接点」創刊、「青芽」「かおす」に参加し旺盛な詩作を続ける一方で、地域の文化活動を推進し、40年詩集「風土の意志」によって第三回北海道詩人協会賞を受けるとともに、翌41年には稚内文化奨励賞をも受賞した。43年「核」同人となり、「原野喪失」「野性告知」「わが風への夢想」「若者への頌

歌」と矢つぎ早に詩集を刊行。57年には詩集「北の明眸」によって北海道新聞文学賞佳作賞を受賞した。作品は北方の風土性にふかく根ざしており、厳寒不毛の原野に生きることが、いかに必死で惨酷な作業であるかが、強い言葉で、しかし稀にみる肉声のひびきで語られる。好んで自然と人生のきびしい極限状況を指向し、求道者的な美学が魅力的である。(河野文二郎)

荒川重秀 あらかわしげひさ 安政6(1829)昭6・7・1(1859)〔演劇〕札幌農学校の一期生。明治13年7月卒業後、ミシガン大学、カンバント大学に留学、帰国後は新聞記者、東京農学校、東京専門学校、東京商船学校教授を歴任する。またわら、東京演劇界の中心的役割を果たした。40年には歌舞伎俳優沢村宗之助らと洋劇研究会をつくり東京座でシェークスピア作「ジュリアス・シーザー」(ジーザイ荒川)を上演した。(本山節弥)

荒川楓谷 あらかわかえ 明41・2・25(1908)〔俳句〕釧路管内浜中町生まれ。本名義男。信用金庫幹部を経て現在会社代表取締役。昭和3年ホトトギス系の高井春汀に師事、俳句の道に入る。5年「暁雲」に参加、地元「無名会」「毬藻吟社」などで若手俳人の中心として活躍。その後「時雨」にも所属した。21年

「えぞにう」創刊に参画、以来編集同人、編集同人代表。現代俳句協会員、同協会北海道地区会議委員。(鈴木青光)

荒木沙羅 あらかみ 明39・6・1(1906)〔俳句〕横濱市生まれ。本名吉守。横濱市立立野小高等科卒。大震災に遭って家を失い父を追って母と釧路へ渡る。国鉄は運輸関係に勤務。俳句は昭和2年頃「時雨」牛島勝六、「暁雲」青木郭公に師事。十勝に移り数カ所に転動、「柏」(矢田枯柏)に重んぜられ、去ってから帯広俳人と「北海道俳句」創刊に参加。晩年は病氣等で不遇、札幌市で没した。(佐々木露舟)

荒木 颯 あらかみ 明38・10・6(1905)〔小説〕東京生まれ。本名下村是隆。東京大学卒。高見順らと「日曆」創刊。釧路管内釧路村(現釧路町)の昆布森を舞台にした理想郷物語である長編小説「詩と真実」(昭15・9、河出書房)と「続・詩と真実」(昭16・2、同)は代表作で、巻末に上林暁の解説、丹羽文雄と高見順の作者評が載っている。ほかに「光を背負ふ男」「十勝の林檎」の取材作、「北海の海峡を越えて―北海道紀行―」(昭11・4、「文芸」という紀行記がある。(木原直彦)

荒沢勝太郎 あらかわかつたろう 大2・4・15(1907)

(1913)「小説」樺太真岡町生まれ。法政大学卒。樺太日日新聞記者、雑誌「樺太」編集長、樺太文化振興会主宰を歴任。戦後釧路市経済部長等を経て釧路文学団体協議会長。樺太時代から小説を書き、「北の系譜」(昭18)、「鶴の舞」(昭27)、「やせ犬」(昭32)が代表作。亜寒帯、北方の植物に関する著書十数冊あって、いずれも好評。(鳥居省三)

新出朝子 昭16・1・31(1931)「俳句」空知管内北竜町生まれ。本名北朝子。昭和40年より作句。北光星に師事し「道」の前身である「扉」に参加。「道」同人となる。47年準俳作家賞受賞。43年合同句集「朱弦」、50年句集「飛沫」を上梓。透明感溢れる作風が好感を呼んだ。清新な感覚を認められ、58年度道俳句作家賞を受賞。北建夫と夫婦俳人。(北光星)

荒巻義雄 昭8・4・12(1933)「小説」小樽市生まれ。本名邦夫(のち義雅と改名)。札幌第一高校(現札幌南高)を経て早稲田大学文学部卒。家庭裁判所調査官試験に合格するが任地の新潟には行かずアルバイト。昭和36年帰郷、家業を継ぐため北海道大学土木科に入学。40年CORE(北海道SFLクラブ)に参加、「CORE」創刊号にショート・ショート「しみ」を魚澄昇太郎

(のち荒巻邦夫、魚田農夫など使う)名で発表。また平井和正、筒井康隆ら発行の「SF新聞」や「宇宙塵」に投稿。43年日刊スポーツ特派員としてグルノーブル・オリンピック取材、それ以後数年、ヨーロッパ、エジプト、インドへの旅がつづく。45年評論「術の小説論」、短編「大いなる正午」を「SFマガジン」に執筆、商業誌に進出。47年4月処女作品集「白壁の文字は夕陽に映える」(早川書房)刊行、星雲賞受賞。以後、SF、推理、冒険、伝奇、ハードボイルドなど幅広いジャンルをこなす。中短編集に「時の葦舟」(昭50、文化出版)「ある晴れた日のウィーンは森の中にたえずむ」(昭53、カイガイ出版)があり、のちこれらは初期中編集1、2として「柔らかな時計」(宇宙25時)(昭53、徳間書店)にまとめられる。長編には「神聖代」(昭53、同)のほか、「空白の十字架」(昭50、祥伝社)、「神鳴る永遠の回帰」(昭53、徳間書店)、「神州白摩伝」(昭54、奇想天外社)などがシリーズとして刊行された。(日高昭二)

荒谷松葉子 明15・12・26(昭20・2)(1882-1945)「俳句」後志管内寿都町生まれ。本名万吉。網元の三男として成長したが、鯨が幻の魚と化した大正初期士別町へ移住、さらに昭和10年

代旭川市に出て上川神社の神官になった。俳句は生地で旧派の宗匠の教えを受けて始めたが、古典、特に芭蕉俳諧に対する造詣深く、後年青木郭公の求めに応じ「暁雲」にもたびたび研究成果を発表した。士別では士別俳壇を創設して多くの門下を擁し「常盤木」を創刊主宰、旭川に移住後は道北はもとより全道各地へ俳句網を広げ多数の門下を育成、旭川新聞俳壇選者としても俳句の普及に貢献した。昭和27年旧門下生により士別神社の境内に「藪は畑に畑は田になり囀れる」の句と、鎌倉子桐、北村暮畔子ら門下一〇名の句を併刻した句碑が建立された。〈無格社の祭とてなき茂りかな〉(園田夢蒼花)

荒谷七生 明44・8・24(1919)「短歌」後志管内寿都町生まれ。昭和6年黒松内駅勤務。並木凡平の「新短歌時代」「青空」に所属。9年青空詩社より口語歌集「絵草子」発刊。当時筆名雪原冷太。10年「村の家族」誌主宰。「青空」「新民族詩」「旗」「短歌新調」等に関係。13年鉄道省より外地派遣を命ぜられ、徐州鉄路所、開封鉄路局勤務。敗戦により郷里に引き揚げ。闘病生活十一年余。40年石岡草次郎と歌誌「北方」を発刊主宰。「青空」復刊に参画。現在「新短歌時代」編集委員。北海道歌人会

ありしました(人名編)

委員。55年心象風景的歌集「氷の踏絵」発刊。詩の分野における活動も多く、11年詩誌「律」を石川一遼と発行。従軍詩集「おのが軍書」、従軍時代には日満華人による徐州詩人連盟主宰。戦後「雪国天女」「小さな教室」を発刊。32年より寿都町史編纂室長。55年より島牧村史編纂員。(吉田秋陽)

有坂赤光車 明33・1・1(1900)「俳句」本名正己。札幌市生まれ。斜里町で司法事務所経営。大正時代「層雲」に学び、15年青木郭公の「暁雲」に創刊時より参加し幹部。また、牛島藤六の「時雨」に加わる。昭和4年から、白田垂浪の「石楠」に入会し幹部同人となる。さらに長谷川零餘子の「枯野」、青木月斗の「同人」等にも関係する。オホーツク海辺の町に永住して大自らの豊かな恵みの中で独特の詩が生まれ、赤光車作品を形成した。戦後の昭和20年斜里砂丘吟社を作り、町に多くの俳人が育成された。「石楠」無き後「河」及び「人」の同人となる。54年町の公園に句碑建立される。〈雪晴れや故郷の山深し赤光車〉。斜里岳の青嶺にむかい立つ句碑はいさぎよい。昭和9年頃から多くの町内の俳人を育成する。山田緑光、神田涼路、終戦後、斎藤諸凡、米沢草水ら。57年斜里町文化功労賞をうける。

(山田緑光)

有島曉子 明44・8・22(昭57・7・5)(1911-1983)「随筆」東京生まれ。双葉高女卒。生馬の長女。上智大学女子学生指導官となり、昭和46年の両陛下の渡欧では皇后陛下の通訳をつとめた。「有島曉子著作集」、遺稿集「松の屋敷」がある。(高山亮二)

有島生馬 明15・11・26(昭49・9・15)(1882-1974)「美術、小説」武郎の弟。横浜市生まれ。本名土生馬。洋画を藤島武二に、文学を島崎藤村に師事。東京外国語学校卒業後、渡欧。帰国後、印象派風作品をもって画壇に新風を与え、新たに在野の第二科美術展覧会を創設。また、雑誌「白樺」に「蝙蝠の如く」等を発表。日本ペンクラブ発会に当たり副会長に就任。戦後は画業を主とし文化功労者となる。(高山亮二)

有島武郎 明11・3・4(大12・6・9)(1878-1923)「小説、評論」東京生まれ。四歳の時父武が関税局長心得となり、一家横浜に移る。明治20年学習院予備科三年級に編入学。翌年皇太子明宮嘉仁の学友に選ばれる。学習院中等部をおえ、29年9月札幌農学校予科五年級に編入学。同校教授新渡戸稲造宅に寄宿した。翌年、新渡戸は過労から札幌を去り、学友森本厚吉との交友から32年2

月キリスト教人信を決意(札幌独立基督教会正式入会は明治34年3月)、このころより新渡戸が貧しい家庭の子弟教育のため設立した遠友夜学校を手伝い、34年卒業に当たって森本と「リビンググストン伝」を刊行。36年米國に留学。ハヴァアオード大学大学院に入学。翌年6月M.A(文学修士)となる。日露戦争に際して信仰に疑念を抱き、ホイットマンや社会主義思想を知り、40年帰國の途次ロンドンでクロポトキンを訪ねる。翌年、昇格後の母校東北帝国大学農科大学の教官となる。学生に敬愛され、また独立教会役員、日曜学校長、遠友夜学校代表に推されたほか社会主義研究会の活動を盛んにし、学内に美術団体黒百合会を創立した。43年独立教会を退会し、弟生馬、里見淳とともに「白樺」の同人となる。大正3年妻安子発病のため離札。5年安子と父武を喪い、以後活発な創作活動をつづけ「カインの末裔」「小さき者へ」「生れ出づる悩み」「或る女」「惜しみなく愛は奪ふ」「星座」等々を発表。9年以後創作力の減退に悩み、それが自己の額に汗しない生活にあると考え、父の代(明33)から所有していた北海道狩太(現ニセコ町)の農場四五〇ヘクタールを農民に無償で解放した。が、創作力の回復をみることなく軽井沢の浄月庵で婦人公論

の記者波多野秋子と自殺した。「有島武郎全集」は叢文閣版一二巻(1924-1925)、新潮社版一〇巻(1929-1930)、改造社版三巻(93)があり、現在筑摩書房版全一六巻が刊行中である。

「カインの末裔」 中編小説。大正6年7月「新小説」。翌年2月、有島武郎著作集第三集「カインの末裔」を新潮社から刊行。無知で原初的衝動に生きる一小作農が北海道の厳しい自然や酷薄な農場の「掟」と闘い、結局敗れ、農場を去る物語。有島の出世作であり代表作であり、のちの北海道文学に大きな影響を与えた。

有田豊涯 明12・11・20、昭15・9・20(1879-1940)「俳句」生地は東北地方とのみ。本名政雄。北海道庁を経て札幌育児園長を務める。書道に秀でた信仰あついキリスト教徒であった。俳句は昭和7年天野宗軒の手引きで始め、宗軒を盟主に水声会を結成、「水声」の同人、会員委員長として尽くした。職責上は宗軒の上司。やがて園長職を宗軒に引き継ぐが、温厚かつ磊落の大人であった。(金崎霞杖)

阿波野青歌 明32・2・10(88)「俳句」奈良県生まれ。本名敏雄。中学二年生頃より句作。大正6年高浜虚子と初対面以来師事。ホトトギス誌上で

活躍、昭和初頭のホトトギスのいわゆる四S時代の一人である。昭和4年「かつらぎ」を主宰発行。北海道にも弟子多く来道すること五回に及ぶ。俳人協会顧問、ホトトギス同人。昭和48年蛇笏賞。句集に「万両」「國原」「定本青歌集」「青歌風土記」など多数。(嶋田一歩)

安在久太郎 明40・1・31(1907)「短歌」酒田市生まれ。大正13年頃より作歌をはじめ「歌集」に属し酒田短歌会の結成に尽力する。昭和13年樺太に移住しても短歌を継続した。20年現地召集され、終戦時にはシベリアに抑留される。23年帰還後は函館に居住し、24年「短歌紀元」に加入し主要同人として白山友正を助け後輩の指導と、会の発展に尽くした。友正死後は白山登代子を助け萬上義次、村上清一とともに雑誌の継続発展に尽力する。現在札幌市に居住し、「短歌紀元」小樽支社のよき助言者となり、歌人である妻の安在みはるとともに毎月小樽支社の歌会をもちあげている。(仕事やめめい病む日々を労ればわが身さながら廃品に似る)の作品のように、歌風はあくまでも生活を基礎とし、平易に表現して飾らなく、それでありながら人の真実を突く傾向をもっている。(村上清一)

安藤海霧 大7・4・18(91)

20年代の終わりに京都から津別町に赴任するとき、道北の駅で買った牛乳が凍っていたことが強烈な印象であったことを、離道後随筆に記している。「白スリス」は道北での生活が母体となって書かれた作品であり、在道中に出版された同書はとくに北海道との結びつきが強い作品である。他に創作は数多く、翻訳、研究にも実績がある。(加藤多一)



飯塚 朗 明40・9・2(1607)「中国文学研究、小説」横浜市生まれ。第一高等学校を経て東京大学文学部支那文学科卒。「日曆」同人。昭和13年から18年まで中国に滞在。19年応召して中国各地を転戦。21年復員。22年から一年、東宝映画演劇部嘱託となる。26年から39年まで北大で中国文学を教えた。創作集「北の旋律」(昭42・10、現文社)、「胡同の雪」(昭60・1、響文社)。(神谷忠孝)

飯塚秀城 大8・6・29(昭60・9・19(1919-1985)「俳句」群馬

〇)「俳句」北見市生まれ。本名秀三。産業組合講習所修了。北海道農業協同組合中央会に勤めた。昭和49年より「ホトトギス」「緋燕」「雲母」等により句作。豊浦俳句研究会会長。(木村敏男)

安東璋二 昭7・11・22(93)「評論、近代文学研究」函館市生まれ。早稲田大学大学院文芸研究科修士課程修。森高校、函館北高、函館高専を経て、現在北海道教育大学函館分校教授。主要論文は「漱石私論(1)」「(昭38)52、「人文論」、「求道者の美意識」(昭43・3、「北方文芸」)、「吾輩は猫である」論」(昭44・4、「国文学」)、「鷗外の方法」(昭48・3、「語学文学」)など。(神谷忠孝)

安藤美紀夫 昭5・1・12(90)「児童文学」京都生まれ。京都大学イタリヤ文学科卒。在学中毎日新聞児童小説コンクールに「夏子のスケッチブック」入選。卒業後北海道に渡り、津別町で一〇年、北見市で八年高校教師として勤務した。のち離道し、現在日本女子大教授。日本児童文学者協会理事。昭和37年「白いリス」でサンケイ児童出版文化賞、41年「ポイヤウンベ物語」で国際アンデルセン賞国内賞、48年「でんでん虫の競馬」で日本児童文学者協会賞、野間児童文芸賞など五賞を受賞した。昭和

〇)「短歌」札幌市生まれ。札幌医大附属歯科衛生士養成所卒。幼時居住していたあたり牧歌的な雰囲気や隣に住むアメリカ人一家との交流は記憶に新しく、その頃本質的な詩情が培われたという。短歌を愛好していた母の影響も大きく、少女時代のノートに書き残した詩や短歌も少なくない。結婚後二〇年経て、再出された。昭和33年「凍土」に加入。41年「新凍土」創刊と共に編集委員。46年宮田益子没後は残された各グループの助言者として明快な指導をつづける。53年まで北海道歌人会幹事。59年同会計監査。知的な技法とフレッシュな感覚が身上にある。(狂いゆく秩序にいつかならされしおおかたの貌どこか似かよう)

飯田佳吉 明29・5・7(昭23・12・19(1896-1968)「短歌」徳島県生まれ。露木家から飯田家(養子。京都府立医学専門学校卒。大正13年旭川市共立病院に勤務。昭和2年旭川市で医院を開業。さきに九条武子に師事し、読売新聞歌壇に投稿。その後「香蘭詩社」に入社し村野次郎に師事する。10年香蘭同人となり、旭川新聞歌壇の選者として「旭新短歌会」を指導するなど、その作品においても最も充実した時期であったと思われる。戦後、北海道にも戦前誌が復刊

したのを契機として、21年3月「あさひね」を創刊し、編集発行人となった。道央、道北はもちろん、全道からの会員参加があり、旭川歌壇に大きな足跡を残した。〈庭土をすてにやぶりし水仙の芽はみづみづし黄にうつしく〉

(小林孝虎)

飯田竜太 大9・7・1(1908)〔俳句〕山梨県生まれ。国学院大学卒。句作は昭和16年大学在学中に始め、22年から数年石原八束と「雲母」編集、38年飯田蛇笏没後「雲母」主宰。NHK俳句講座などその指導力で「雲母」の隆盛をもたらした。56年日本芸術院恩賜賞受賞。昭和29年第一句集「百戸の谿」はじめ「童眸」「麓の人」「涼夜」「春の道」「今昔」など句集のほか、評論、随筆の著作も多く、32年現代俳句協会賞、句集「忘音」により34年読売文学賞を受賞。32年「水下山」復刊三周年記念大会で初来道以来、既に一三回来道、屈託のない講話と姿の美しさに惹かれる者が多し。〈三伏の幾野を越えて昆布の地〉 (鳥 恒人)

飯野遊汀子 大10・6・6(1921)〔俳句〕旭川市生まれ。本名吉雄。飯野硝子株式会社代表。昭和18年頃より句作、「はまなす」を経て加倉井秋をに師事し「冬草」同人。「壺」同人

を経て「青女」「にれ」同人、「杉」所属。38年飯野水無月と二人句集「葉鶏頭」、56年第一句集「雪像」刊行。55年第一回にれ風響賞、56年北海道俳句協会賞受賞。俳人協会会員。虚と実の遊想美を目指す作風。 (木村敏男)

(木村敏男)

井浦徹人 明28・1・14(1896)〔俳句〕久留米市生まれ。大正5年の北見新聞に始まり十勝毎日新聞、小樽新聞、樺太新聞と文筆生活四〇年。俳句はその間帯広市で「峠」を創刊。その頃十勝毎日新聞の俳壇選者。昭和13年「峠」は小樽市に転じて廃刊。後帯広市に戻り文筆、俳句活動を続け、29年「あきあじ」を創刊、主宰となり中嶋音路の「鈴蘭集(雑詠)」、中屋繁城「郷土風物詩」、丸山四穂「あきあじ道場」などと共に全国に名をあげた。句集「山霧」は全毛筆の自筆。「雪嶺(あきあじ第三雑詠選集)は希望者一六一名の句と巻末に随想一〇編、俳句私見三〇編。第一集「層雲」、第二集「夏草」。「とびら」(井浦徹人俳話集)は「あきあじ」の「扉の言葉」をまとめ、53年徹人没後同人が発刊。23年高浜虚子の来道を記念して以後毎年「虚子来道記念北海道俳句大会」を催す。句碑は誌友が帯広市緑ヶ丘公園、札幌市宮の森に建立。その他の著書に「おびひろ今と

(山名康郎)

を経て「青女」「にれ」同人、「杉」所属。38年飯野水無月と二人句集「葉鶏頭」、56年第一句集「雪像」刊行。55年第一回にれ風響賞、56年北海道俳句協会賞受賞。俳人協会会員。虚と実の遊想美を目指す作風。 (木村敏男)

昔」がある。これは十勝毎日新聞に徹人が連載した明治、昭和の帯広の推移を、古老の直話も取り入れ、一九話にまとめた帯広市の文獻。36年帯広市文化賞受賞。〈熊笹の中に怪あり鮭の秋〉 (佐々木露舟)

(佐々木露舟)

39・5・12 (1915-1964)〔小説〕釧路市生まれ。早稲田大学卒。北海道新聞記者。戦前に東京で「新創作」の同人となり、伊藤整と交渉があった。昭和24年「北方文芸(釧路)」に「日本の土と酒」「ロイドガーデン」など警鐘的なすぐれた短編を書いた。中学生のとき地元新聞に掲載した作品が反社会的であると理由で校内外に物議をかもしたのは有名。 (鳥居直三)

五十嵐利三 明42・5・16(1909)〔俳句〕札幌市生まれ。明治大学政経学部卒。昭和16年ころまで「鶴」に投句。22年「壺」に投句、同年同人。小西英市らの「路人」発行に協力、また「水輪」の高橋貞俊らとも交流があった。居宅は「路人館」とよばれ、斎藤玄、金谷信夫はじめ近藤潤一、在札「壺」同人の溜まり場の観を呈し、印刷所を札幌に移した「壺」の発行に協力したが、昭和28年「壺」休刊後俳句活動を休止。 (金谷信夫)

猪狩満直 明31・5・9(1893)〔詩〕福島県生まれ。一歳のとき父を失い、叔父政一を養父に迎え大正6年バプテスト教会の洗礼を受ける。愛知県属となり、中京法律学校中退。ホイットマン、ワーズ・ワース、テニソン、バイロン、ゲーテ、ハイ

(金谷信夫)

を経て「青女」「にれ」同人、「杉」所属。38年飯野水無月と二人句集「葉鶏頭」、56年第一句集「雪像」刊行。55年第一回にれ風響賞、56年北海道俳句協会賞受賞。俳人協会会員。虚と実の遊想美を目指す作風。 (木村敏男)

ネ等の作品を愛読し、三野混沌、妻木泰治、草野心平、山村暮鳥らと交わり、詩誌「播種者」をつくる。大正14年3月養父との確執から脱するため、補助移民となり阿寒郡舌辛村二五線(阿寒町丹頂台)の高位泥炭地に入植、15年二児を残して妻だけを失い、翌昭和2年小沼たかと再婚、開墾に打ち込み詩作をつづけ、3年より草野心平の「銅鑼」、坂本七郎の「第二」等に精力的に詩作を発表。生活のため冬季は馬車で木材搬出に苦闘。4年8月草野と三野の編集する銅鑼社より上梓した「移住民」はこの記録でもあり、詩壇に大きな反響を巻き起こした。その年の冬、阿寒の雄別炭砒の選炭機の運転のアルバイトをしたときの記録が、昭和6年の「北緯五十度詩集」の「炭坑長屋物語」である。八町三反の開墾地の成功検査は何とか通過したが、営農の見込みたらず、三七〇円で開墾地を売って故郷に引き揚げ、一時養鶏に新しい生活の道を求めたが、長野県千曲川の改修工事で健康を害し、「農勢調査」や「秋の通信」を上梓し、多くの未刊詩集の原稿を残して他界した。 (史料源蔵)

(史料源蔵)

「講談雑誌」等の編集に当たる。大正13年歌誌「吾妹」を創刊し、歌集、歌書十数種を刊行している。来道は昭和2年10月3日から20日までで、道内各地の「吾妹」会員と交流、根室まで赴いており、若干の歌を残している。 (中山周三)

(中山周三)

生田直親 昭4・12・31(1908)〔シナリオ、小説〕東京生まれ。本名直近。戦後は十勝で開拓農。上京して放送作家となる。46年から書き下ろし作家。本道をスケール大に描く。「雪原逃亡13年」(徳間書店)をはじめ「青函トンネル大爆裂(同)ほかスキー小説多数。58年上田市から函館市に移住。 (八重樫実)

(八重樫実)

井黒弥太郎 明41・9・25(1908)〔歴史研究〕留萌管内増毛町生まれ。昭和3年札幌師範学校卒。小、中学校教員となる。24年札幌市史編集員、26年北海道教育研究所教育史編集員となり、のち北海道開拓記念館嘱託となる。30年に「北海道開拓図」を世に問い、大きな評価を得る。主要著書に「日高開拓史」「黒田清隆」「榎本武揚伝」、共著に「北海道のいしずえ四人」など。 (小野規矩夫)

(小野規矩夫)

池津海彦 昭11・6・25(1898)〔俳句〕十勝管内鹿追町生まれ。本名芳徳。郵政職員。昭和28年より作

句。「水原帯」を経て31年「磔」同人。休刊により「扉」へ参加、「扉」改題による「道」を通して北光星に師事。47年扉作家佳作賞受賞。重厚で硬質の詩情が認められて52年度「道」俳句作家賞受賞。44年句集「荒地」、53年句集「北の国」を上梓。現代俳句協会員。

(北 光星)

池田勝亮 いけだかつ 大3・7・18〜昭25・12・22 (1914〜1950) 「短歌」歌志内市生まれ。庁立旭川商業学校卒。農村文化誌「新郷土」発刊、郷土文化社経営。昭和11年「香蘭」に入会。19年香蘭賞受賞。同年回覧誌「飛鳥」発行。21年3月「あさひね」創刊と同時に編集同人となる。24年より二年間「かぎろひ」編集。23年より「鶏苑」にも所属。没後上川管内鷹栖町に歌碑が建立された。

池田克己 いけだかつ 明45・5・27〜昭28・2・23 (1912〜1953) 「詩」奈良県生まれ。昭和2年奈良県立吉野工業学校建築科卒。6年写真技術修得のため上京中、小学校時代の恩師植村諦と再会。植村諦により小野十三郎、岡本潤らと交友する。9年吉川則比古主宰の「日本詩壇」の同人となる。同年8月第一詩集「芥は風に吹かれてゐる」を刊行。10年以降「風地」「関西詩人」「豚」「現代詩

(木村 隆)

池田信三郎 いけだかつ 明33・10・15〜昭8・12・21 (1900〜1933) 「小説、劇作」東京生まれ。東京大学からベルリンへ留学の翌年大震災で実家焼失し帰国、長編「望郷」(大14)で新感覚派系の作家として登場。都会的な作風が特色だが、本道取材作「鱈」(大15)は漁場が舞台、階級意識にめざめる青年が登場する異色作。

「精神」の同人または編集責任者として活躍。14年徴用令で中支に。16年現地徴用解除後、華字新聞「新申報」の写真報道記者となる。22年八森虎太郎と再会、詩誌「日本未来派」を札幌より創刊。池田の積極的かつ包容力のある編集が目ざされた。また「日本未来派」は戦後詩壇に新風を吹き込んだ功績が大である。日本未来派より「池田克己詩集」「唐山の鳩」を刊行。その他詩集に「原始」「上海雑草原」「法隆寺土塀」等、数冊がある。

(八森虎太郎)

池波正太郎 いけなかつ 大12・1・25〜(1923〜) 「小説、劇作」東京生まれ。長谷川伸に師事し、昭和35年の「錯乱」で第四三回直木賞を受賞。戦国から幕末にかけての時代ものを得意とし、市井の人を描くところに特色がある。代表作に「鬼平犯科帳」「剣客商売」など。本道取材作には直木賞受賞第一作の「北海の

まぎわに検挙、放校された。その後放浪生活を続けるうち聖書や仏典に興味を持ち、9年ごろ左翼運動から離れた。14年3月はじめて石上玄一郎の筆名で「針」(「日本評論」)を発表。続いて6月「魑魅魍魎」(同)、15年2月「絵姿」(「中央公論」)を発表して作家としての地位を築いた。「精神病学教室」(昭18・3、中央公論社)、「緑地帯」(昭19・6、万呈閣)が戦前の代表作。戦争中は上海の中日文化協会に就職し、21年1月帰国。戦後の代表作は「自殺案内者」(昭26・9、北辰堂)。「石上玄一郎作品集」全三巻(冬樹社)がある。

石上 慎 いしかわき 昭10・1・1〜(1935) 「劇作」網走管内留辺蘂町生まれ。本名石原敬三。北海道教育大学旭川分校卒。昭和42年から四年間日教組文学賞小説部門に入選。43年北見の劇団「河童」に請われて小説「凍土」を脚色し、以降「胞子の季節」「ある遅い出発」「御本山農場」ほかを同劇団により発表。戯曲集「御本山農場」(昭51)がある。北見商業高校教諭。

(佐々木逸郎)

石川郁夫 いしかわき 昭12・1・19〜(1937) 「小説」宗谷管内礼文町生まれ。北海道学芸大学旭川分校卒。昭和32年水戸英宣らと「芸芸北国」を創刊、小説と評論を書き始める。「コミュニズムと

男」をはじめ、間宮林蔵が主人公の「北海の獵人」、土方歳三の「色」、永倉新八の「竜尾の剣」などがある。

(木原直彦)

石 一郎 いしかわき 明44・8・1〜(1921) 「小説、アメリカ文学研究」茨城県生まれ。東京大学卒。山に憑かれた心の孤独を描く「蒼い岩壁」(昭39・3、光風社)は北海道から物語がはじまる。代表作に「標高八八四〇メートル」「ミングウェイ研究」など。(木原直彦)

石井昌光 いしかわき 明44・5・24〜(1921) 「詩」石狩管内石狩町生まれ。小、中学校は旭川。早稲田大学国文科卒。宮城学院女子大学長を経て定年。昭和4年から5年旭川の詩誌「裸」「不死鳥」「風」のつて」などに江夢愛のペンネームで詩作品を発表。詩集「罅」「ヘンリとエルザの愛の物語」「祝婚歌」、評論集に「情熱の詩人土井晩翠」、校訂に「晩翠詩抄」(岩波文庫)。(佐藤善一)

石岡草次郎 いしかわき 大5・3・20〜(1916) 「短歌」樺太真岡生まれ。本名陸奥雄。樺太新聞、北日本経済新聞記者。新岩宇新聞発行。のち農業従事者。昭和9年口語短歌を並木凡平、伊東音次郎に師事。17年竹中葉吉郎、若山純一らと樺太口語歌人連盟を創設。戦後「短歌しりべし」創刊。「無風」創刊に参画。

「輪」編集委員。荒谷七生と「北方」創刊。現在共和短歌会長。北海道歌人委員会。樺太時代、北方全体芸協会を主宰。「亜寒帯」を発刊。戦後、シベリアから帰還後北海道歌人会創立委員。文学活動の中では、岩内ベンクラブ編集委員。北海道文学館理事。共和文化協会副会長。歌集「冬の宿」「三浦半島」「赤い星の国」等多数。「岩宇歌壇史」も。共和短歌会では機関誌「創」を発刊、三九号を数え創叢書として歌集刊行、現在第二編「岩内平野」(葉には葉に花には花にそつときて皆なまるいな露の月蓮)

石垣福雄 いしかわき 大3・7・23〜(1914) 「国語学」渡島管内上磯町生まれ。昭和19年広島文理大学卒。夕張東高校校長などを務める。著書に「方言の旅」(昭31、宝文館)、随筆集「タンポポの花輪」(昭50・3、北書房)、「北海道方言辞典」(昭58・8、北海道新聞社)などがある。

(吉田秋陽)

石上玄一郎 いしかわき 明治43・3・27〜(1910) 「小説」札幌市生まれ。本名上田重彦。五歳のとき父の郷里盛岡に移り、盛岡中学を経て昭和2年弘前高校に進む。同学年に太宰治がいた。おからの社会運動に参加し新聞雑誌の発行責任者となって活躍したが、三年次の卒業

(木原直彦)

昭和2年稚内市に転住。地方公務員として約30年間勤務し、50年退職。若くして短歌を趣味とし、昭和3年当時新短歌が盛んに詠まれた頃、愛好者と共に同人誌「若人時代」「尖塔」などを刊行した。23年宮柁二のコスモスに属し、片山博園が主宰の「うみなり」の顧問として活躍、37年「うみなり」が解散。その直後、自ら主宰として結成したのが現在の「むらさき短歌会」である。歌集「残照」があるほか、漢詩、書道にも意欲的で、漢詩では「氷雪の門」「海峡の月」が代表的。一〇詩余がレコードに吹き込まれている。53年稚内市から教育文化功労賞、56年には文化賞を授与されている。

(福本純子)

石川きぬ子 いしかわ きぬこ 大4・3・11〜昭和44・4・21 (1915〜1967) 「短歌」釧路市生まれ。本名熊谷きぬ子。看護婦、店員、保険外交などを経て、昭和34年西興部村村議。37年発病以後入院生活を送る。昭和20年、池田勝亮の「飛鳥」に短歌を発表。21年「あさひね」創刊に参加。29年「かぎろひ」創刊に参画。39年かぎろひ一〇周年記念第一回青玄賞受賞。41年歌集「綾」出版。(木村隆)

石川桂郎 いしかわ けいろう 明42・8・6〜昭和50・11・6 (1909〜1975) 「俳句」東京生まれ。「鶴」「馬酔木」同人。「風土」主

宰。句集「含羞」「竹取」「高蘆」「四温」。俳人協会賞、蛇笏賞受賞。文筆家としても高名で「剃刀日記」「妻の温泉」「俳人風狂列伝」で読売文学賞受賞。昭和18年斎藤玄を知り「壺」同人。23年来道、以来数年毎年来道し、46年2月句集「玄」出版記念会に来道し、玄とともに網走へ流水を見るため旅行する。

(金谷信夫)

石川啄木 いしかわ たくも 明19・2・20〜明45・4・13 (1886〜1912) 「短歌、評論、詩、小説」岩手県生まれ。本名「」。二歳の時一家は岩手郡日戸村から隣の渋民村に移住した。明治35年10月県立盛岡中学校中退。38年5月詩集「あこがれ」を発刊。同年5月堀合節子と結婚。39年4月渋民小学校の代用教員となる。父一植はその頃渋民の宝徳寺住職を罷免されていたので、啄木は生活のゆきづまりから40年5月新天地を求め北海道函館へ移住した。「明星」系の文学結社「首宿社」同人らの好意による。同6月に入って弥生小学校の代用教員となり、7月には離散していた妻子を、8月には母を迎え、同じ8月に函館日日新聞社にと転職、生活も順調にゆくかみえたが、同8月25日の函館大火で失職。9月に入って札幌の北門新報社に校正記者として入社したが、間もなく小樽日報に籍を移し、母と

支局長歴任。15年から20年まで樺太生活物資統制組合に勤務。22年引き揚げ以後札幌に居住。樺太時代に詩歌誌「白孔雀」発行、11年に同志と「樺太短歌」を発行、編集同人として活躍。「北海道歌壇史」(昭46)に「樺太歌壇」を執筆、15年結成の樺太短歌会(会長九鬼左馬之助、副会長新田寛)の内容をはじめ綿密な各種記録は後世にのこる資料となった。昭和10年北原白秋門下となり「多磨」に所属、その以前「潮音」「香蘭」にも関係した。22年「原始林」同人、56年3月から59年6月まで同誌選者。作風は写実を基調としているが白秋門らしくロマン性をもって暢達、馥郁としている。59年に傘寿を迎えたが独特な艶をもつ作品は衰えを見せない。(雲海に底ごもるうぐひすの声聞けばこの山頂の隈なくまぶし)(昭50)。歌集に「海山」(昭22)、「老鳥」(昭43)、「小鳥の村」(昭49)、「宗谷海峡」(昭50)、「妻」(昭51)、「桜まつり」(昭54)、「柚子の実」(昭58)、「銀扇」(昭59)のほか合同歌集に「多磨」第一〜第四歌集、「原始林十人集」「延齡草」「春楡」「北辛夷」など。また、樺太在住当時から書道にもなじみ、自らも書を能くするほか北海道書道協会や北門書道などの団体にも関係する。

(村井宏)

石川昌男 いしかわ しょうお 明44・10・10〜(19)二一(「短歌」釧路管内標茶町生まれ。本名正男。昭和12年標茶の俳句結社「菱の実吟社」に所属、琴圃と号した。30年8月標茶短歌同好会に入り歌誌「自生林」同人、合同歌集第四集を発刊。31年4月「新塾」入社同人。41年「潮音」入社同人。標茶で菓子製造・石川十字堂会長。標茶町史編纂委員長。文化協会会長、顧問。42年町議会議員を三期務める。

(渡辺勇)

石川良雄 いしかわ りょうお 大4・2・3〜(19)一五(「詩」新潟県生まれ。昭和五年詩誌「詩想」発行。その後「詩と詩人」同人。「詩と詩人詩集」に参加。「北越詩人」の発行と活発に詩活動をし、詩誌「パンと薔薇」(室蘭)同人を経て、詩誌「骨法」主宰。室蘭文芸協会、詩人協会員。

(東 延江)

石樽千亦 いしかわ ちよ 明2・8・26〜昭17・8・22 (1869〜1942) 「短歌」愛媛県生まれ。本名辻五郎。水難救済会理事として、明治43年以来、昭和15年まで来道十数回に及ぶ。明治26年佐佐木信綱に師事、歌誌「心の花」を編集。本道各地に足跡をのこし、とくに海の歌が多く詠まれており、歌集「潮鳴」「鴨」「海」などに収録されている。五島茂は千亦の三男。

(中山周二)

妻子を函館から迎え、花園町に居を構えた。しかし、それも社の人事抗争に巻き込まれ12月に退社。翌年1月今度は道東の釧路新聞社に記者として入社し生活基盤の立て直しを図ったが、文学への情熱もだしがたく、函館の友人宮崎郁雨の好意に頼って家族を同地に預け、同年4月単身上京した。東京では創作活動に専心し、自然主義風の小説を書いたが認められず、煩悶と焦燥の日々を送ることが多かった。その後、創作欲を短歌表現に移し、歌壇に新生面を開いていった。明治42年2月東京朝日新聞に校正記者として入社、6月には家族をも呼び寄せた。翌43年6月幸徳秋水らのいわゆる大逆事件に烈しい衝撃を受け、急速に社会主義に接近、国家権力の本質に迫ろうとしたが果たせず、45年4月13日東京小石川久堅町の寓居にその波乱に富んだ生涯を終えた。享年二十七歳。病名肺結核。代表的作品に歌集「一握の砂」「悲しき玩具」、評論「時代閉塞の現状」、詩集「呼子と口笛」などがある。

(福地順一)

石川澄水 いしかわ しょうみづ 明38・5・1〜(19)05(「短歌」弘前市生まれ。本名健三。旧制弘前中学校中退。少年時代から文学趣味があり歌誌「鬱金香」を発行したこともある。昭和3年樺太に渡り樺太日日新聞へ入社、以後落合、真岡、豊原

石黒 忠 いしぐろ ちゅう 昭12・3・28〜(19)23(「詩」宗谷管内中頓別町生まれ。日本大学文学部国文学科中退。高校在学中から詩を書き、道内の詩誌「火口丘」「だいたいある」「北方の詩」「扇状地」「野性」などに寄稿した。上京ののち現在「潮流詩派」「原詩人」に所属。詩集に「世界中のサン・タントアンヌとサン・マルセルで」(昭41・6)、「雑草群生」(昭58・12)がある。月刊労働者総合雑誌「新地平」編集委員。アジア・アフリカ作家会議会員。(佐々木逸郎)

石黒白萩 いしぐろ びやくし 明42・2・1〜(19)09(「俳句」滝川市生まれ。本名貞一。大正11年白山空華(友正)に師事して俳句を学び、同時に口語短歌にも関係する。昭和3年笹笛吟社を創立。山田秋雨主宰「赤壁」に所属。6年牛島藤六の「時雨」、青木郭公の「曉雲」にも所属。以後長谷部虎杖子の「葦牙」に所属。13年岡本圭岳主宰「火星」その他の新興俳句に転じたが警察の干渉もあり中断。22年土岐鍊太郎の知遇を得て「アカシヤ」に参加。日野草城、土岐鍊太郎に師事する。一時草城主宰「青玄」にも同人として参加。32年アカシヤ無鑑査同人。53年句集「朱塗の箸」を上梓。滝川市滝の川公園に句碑を建立する。(街並木榴りゆうりゆうと北風有す)。アカシヤ菘藻集

選者。昭和26年滝川市第一回文化奨励賞。51年アカシヤ功労賞、56年滝川市自治、治安、文化功労賞を受賞する。俳人協会員。(岡澤康司)

石坂由紀子 (いしざか ゆきこ) 昭11・6・6 (1936) 「詩」函館市生まれ。本名由稀子。函館遺愛女子高等学校卒。詩誌「バターの馬」を経て現在「帆」、「表現」同人。詩集「北側の部屋」(昭43・6、黄土社)。存在への認識を主題とする詩風である。(小松隆子)

石坂洋次郎 (いしざか ようじろう) 明33・7・25 (1908) 「小説」弘前市生まれ。慶応大学国文科在学中に同郷の作家葛西善蔵と親交を結ぶ。大正14年に卒業したあと弘前高女と横手高女で教員生活。出世作「若い人」(昭8・5、「三田文学」)の圧倒的な成功で作家的地位を不動にしたが、作中のミッシヨン・スクールは函館の遺愛女学校がモデル。映画も人気を呼んだ。「囁託医と孤児」ある伝道日記(昭10・8、「金魚」所収、サイレン社)は北オホーツクが舞台で末尾に「野付牛にて」昭九・八」とある。(木原直彦)

石塚書久三 (いしづか しゅうさん) 明37・9・5 (1904) 「小説」小樽市生まれ。大正時代には札幌、池田、東京に住み、瀨棚では三年間代用教員をしたという。函館師範卒(現道教大函館分校)。小樽市花

園国民学校教員を経て、昭和15年、家族を小樽に残して蒙古に渡り華北交通張家口鉄路局に勤務し、大陸文芸興隆の中で蒙疆文芸懇話会幹事となる。被圧迫民族たる蒙古人の苦悩と願いを描いた「纏足の頃」(昭18・1、「蒙疆文学」)で第一七回芥川賞受賞。戦後は札幌の雑誌「リベルタ」に「久雄」(昭21・9)、「子供達」(昭21・12)を、同「大道」に「傷物」(昭21・10)を発表、北海道文学者会編「散文派」に「続纏足の頃」(昭23・5)を載せた。単行本には「花の海」(昭23・9、講談社)、「回春室」(昭23・11、大泉書店)などがあり、復員者の抑圧された性を題材とした作品で知られた。(神谷忠孝)

石塚友二 (いしづか ともじ) 明39・9・20 (1914) 「俳句」新潟県生まれ。大正13年上京、東京堂書店につとめ、那珂孝平と横光利一を訪ね師事。初め「枯野」に投句、二〇歳の終わり頃「馬酔木」に所属、昭和12年「鶴」創刊とともに句作に励み、石田波郷没後主宰を継承。17年「文学界」に発表した「松風」は芥川賞候補作となり、翌年池谷信三郎賞受賞。現代俳句協会創立会員で、現在は俳人協会顧問。人間哀歓を盛り込んだ生活諷諷にすぐれ、31年以來一五回来道。私小説作家のような作風で独自の強靱な表現形

来似通ったところがあり、自然そのものを宗とせよ、自然の写生に安住せよとし、雨圃子俳句をその相似の善用としている。(秋の雲大雪山に収まらず)

石田横管子 (いしだまろこ) 昭4・5・10 (1929) 「俳句」樺太生まれ。本名友治。戦後開拓農業に従事、のち釧路に転入し現在給油所勤務。昭和25年俳句の道に入り、秋元不死男に師事。釧路転入後、久保洋青に師事。「えぞにう」同人、現代俳句協会員。「にれ」「四季」同人。(嶋田一歩)

石橋豊次郎 (いしはし ほうじろう) 明39・9・13 (1906) 「短歌」石狩管内広島町生まれ。小学校卒業後農業に従事。青年時より「螢光」と号して作歌。四〇年の中断期間を経て昭和47年より復活「原始林」に所属。農業団体役員を経て34年から42年まで広島村(現在は町)村長。52年に歌集「草野」上梓。(村井 宏)

石原慎太郎 (いしはら しょうたろう) 昭7・9・30 (1932) 「小説」神戸市生まれ。五歳、父の転任で小樽市移住、稲穂小学校五年(昭19)で返子に転じた。「橋科大学在学中に注目され、「太陽の季節」(昭30・7、「文学界」)で芥川賞を受賞、新世代の旗手としてマスコミを賑わした。43年参議院議員として政界入り。「亀裂」「死

態をもち(六月の斑雪大雪山といふ)は31年旭川での作品。創作集「松風」「橋守」「田螺の歌」。随筆集は「とげけ旅人」など。句集は「百万」「方寸虚実」「磯風」「光塵」「曠野」「磊砢集」など。(島 恒人)

石附忠平 (いしつけ ちゅうへい) 明27・2・7 昭56・8・19 (1904~1981) 「教育、出版」新潟県生まれ。三歳で札幌郊外茨戸に移住(父は茨戸小学校長)。北海道師範学校(現道教大札幌分校)卒業後、室蘭、札幌の教員生活を経て北海道評論社社幹として入社(昭2)。「北海道郷土読本」「北海道教育評論」など数多くの教育関係出版の中核として活躍。綴方連盟事件(昭15)に、弁護士高田富与とともに尽力。自叙伝「切株の跡」(昭29)や「北海道教育評論」の毎号巻頭言などがある。(小笠原克)

石田雨圃子 (いしだ むぼこ) 明17・1・13 昭27・1・13 (1884~1962) 「俳句」富山県生まれ。本名慶封。早稲田大学文科卒。旭川慶誠寺二代住職。西本願寺輪番。明治38年中学四年生の頃より句作。大正2年大学卒業後布教師としてハワイに行き6年に帰国。その間俳句と縁がなかったが、8年に父の跡を継いで住職になってから句作復活。初め長谷川零餘子に師事して「枯野」の課題句選者などを

の博物誌」「行為と死」「刃綱」「化石の森」など多数。小樽の体験を踏まえた「水際の眺望」(昭41、「文芸」)がある。(小笠原克)

石原八束 (いしはら やつむす) 大8・11・20 (1902) 「俳句」山梨県生まれ。中央大学法学部、同大学院卒。昭和12年より飯田蛇笏に師事、処女作「流人墓地寒潮の日」(昭12)は三好達治の推奨を受け、のち詩人の絶大の知遇を得た。21年から数年「雲母」編集。31年内観造型の新風を創り、試論を「馬酔木」に発表。44年読売俳壇選者。36年「秋」創刊以来

写生の行を積むことを指標とし、季語の二面性を生かした作風で世評高く、30年句集「秋風琴」「空の渚」のほか「川端茅舎」など評論集も多く、著作は三〇巻に及ぶ。59年の句集「白夜の旅人」は充実の頂点を示し、「飯田蛇笏論」は当代屈指の長編研究論文。50年句集「黒凍みの道」芸術選奨文部大臣賞、59年紫綬褒章受章。昭和33年来来道の機会多く、ストイックで徹な書生氣質を実作で示し、「白炎をひいて流水掃りけり」など三回に及ぶ流水吟を発表。(島 恒人)

石丸幸男 (いしまる ゆきお) 明40・3・15 (1905) 「短歌」札幌市生まれ。北海道大学工学部電気工学科卒業後、北海道電灯株式会社就職、その後、大日本電力、

していたが、9年夏、虚子俳句復活を知り、以後虚子に師事す。12年「雪舟」を創刊。阿部慧月、加藤蛙水子らもこれに参加。昭和4年本道唯一のホトトギス系俳誌として「木ノ芽」を創刊、ホトトギス系俳人を傘下に集める。ホトトギスの写生を唱導、多作を強調指導した。8年北日本俳句大会を旭川で開き、虚子以下多数のホトトギス有力俳人を招く。大会後ホトトギスの同人に推される。本道最初のホトトギス同人であった。この大会を機として、9年「木ノ芽」を「石狩」と改名し発刊。19年戦争のため廃刊になるまで多くの俳人を育成した。戦後道内俳誌復刊のトップを切って「古潭」を発刊する。その間17年には雨圃子を代表として北海道俳句作家協会が結成された。本道ホトトギス俳句界の祖であり、本道俳壇の代表的俳人。現在も直系の俳人が多く「ホトトギス」その他で活躍している。句文集に「古潭」、句集に「看経余録」「牡丹の芽」。

「牡丹の芽」句集。雨圃子還暦の祝として子供らにより出版された。昭和12年より21年までの三〇〇句が収録されている。句集「看経余録」に続いて虚子の序文があり、その中で虚子は雨圃子を北海の奉行であり探題であると言及、真宗の教義と我がホトトギスの主義は元

北海道配電、北海道電力等三〇年以上も電気事業の発展と共に歩む。退職後は母校の工業教員養成所や私立の工業大学で教授を務めるかたわら精力的に作歌。大正14年から「橄欖」に、昭和20年から「原始林」にも所属。歌集に「どうだんの窓」(昭54)がある。(村井宏)

石森和男 いしもりわくお 万延元〜大5・9 (1860〜1916)〔短歌〕宮城県生まれ。東京帝国大学文学部古典科卒。明治29年から37年まで札幌師範学校勤務。のち税務局監督局、樺太庁を経て札幌一中、札幌高女で教鞭をとった。中学では漢文・作文、女学校では詠歌を担当。夫人の死後、五人の子女養育に追われながらも、自宅で歌会を開くこともあり、札幌興風会の額賀大直、栗賀祐之らと交遊があった。「我が愛する北海道」「わが札幌」などの唱歌の作詞もした。浅香社の落合直文と同郷で親交のあったことが、作歌上の刺激となっていたと思われるが、その作風は旧派の和歌にはない新しい傾向がみられる。「コタンの口笛」の児童文学者石森延男はその長男で、延男が父の没後一五年を記念して編集、出版した「谷酒草切」には、長歌一四、短歌五三七首がおさめられている。(田村哲三)

石森延男 いしもりひさお 明30・6・16〜(1897〜)〔児童文学、国語学者〕札幌市生まれ。

秋田県生まれ。大正3年東京大学国文科卒。中学教師、万朝報記者などを経て7年「新しき村」会員となり、9年に北海道帝国大学予科講師として札幌に着任、のち教授となり12年まで在任。のち松江高等学校教授を経て大正13年より昭和18年まで大阪府立女専教授。「有島氏の歩いた道」(大13・3、新しき村出版部)がある。(和田謹吾)

石山 透 いしやま 昭2・5・15〜(1903〜)〔シナリオ〕本名伊藤幸司。小樽市に生まれ神奈川県に育つ。都立高校(旧制)卒。戦後東京で演劇活動に入り劇団主宰。昭和27年NHK札幌放送劇団に入団。同局専属作家となりラジオドラマ「パイロット・ファーム」(昭31)で文部省芸術奨励賞受賞。NHK東京専属作家を経てフリー。数多いラジオドラマのほかテレビ人形劇「新八大伝」「タイム・トラベラー」(放送後出版)、戯曲「港の恋人」など。(佐々木逸郎)

石山正雄 いしやま 大3・2・5〜(1914〜)〔短歌〕十勝管内本別町生まれ。農業を営むかたわら、昭和37年町広報紙文芸欄に投稿以来、「原始林」選者土蔵培人の指導を受け、37年「原始林」入社。40年同人。二度にわたる応募経験があり、農村生活、社会への問題意識を基盤とする作風である。歌集「段丘台地」

れ。石森和男の長男。北海道師範学校付属小学校、本校を卒業。一時札幌市内の小学校に勤めたのち、東京高等師範学校文科第二部国語漢文科に入学。卒業後、愛知県の中学校、香川師範学校などに勤め、その後南満洲教科書編集部、大連民政務学務課、大連弥生高等女学校、文部省図書局を歴任する。戦後、国定国語教科書の編集、「学習指導要領国語科編」などを作成して退官、昭和女子大学の教授になる。石森の文学は、「もんくうふうん」(蒙古風)にはじまる。昭和13年の時の執筆で、満洲日日新聞に連載された、のち「咲き出す少年群」という題に改め出版。新潮社文芸賞を受賞する。文学界に全く無名の新人が受賞したのは、「戦時下に生きる目標を見定めにくい難しい社会情勢の中で、若者や少年たちの不安といかり、わずかな光明をしなやかな文章が鮮明にとらえていた。」(前川康男)からだと言われている。32年作者六〇歳のとき「コタンの口笛」(二巻)が東都書房から出版され、ラジオ、テレビ、映画になり、第一回小川未明文学賞を受賞、児童文学ブームのさきがけとなる。ユタカとマサのきょうだいが、民族的な差別のなかでたくましく生きていく物語は、それまでになかったスケールの大ききで児童文学の拡大をもたらした。

のほか著書に「開拓略談」など数冊。本別文化協会理事、公民館短歌会幹事。59年本別町文化奨励賞受賞。(田村哲三)

石山宗要 いしやま 昭14・2・10〜(1908〜)〔短歌〕紋別市生まれ。昭和37年北海道学芸大学旭川分校卒。北海道教育大学附属中学校教員。同大学非常勤講師等を経て、旭川市立神居中学校教諭。昭和38年「かぎろひ」入社。古代歌謡についての論考と独特な歌風によって注目された。現在、専任編集委員並びに運営委員。かたわら昭和45年、昭和世代の自律と自立を目指す現代短歌集団「野馬の会」結成、同人誌「野馬」編集。新ロマン派美術協会にも参画。国語国文解釈学会員。著書に「古京夢幻」(昭49、短歌308首と記紀歌謡関係論考等6編を収めた歌文集)と、「天明忌」(昭55、短歌300首と万葉関係論考等10編を収めた歌文集)。(あかときおのしじまの果も霜降れる季いたるらしけさの静けさ)(木村隆)

伊豆田立泉 いずだたかひ 明44・10・2〜(1911〜)〔俳句〕山形県生まれ。本名登。国家公務員、会社員等を歴職。昭和28年より名和三幹竹に師事して句作。中断のち49年より「道」「金剛」等で復活。55年より「にれ」入会。現在同人。(木村敏男)

一六〇枚という枚数も、児童文学の常識を変えるものになった。その後石森は数多くの作品を書いたが、主な受賞作品をあげると「パンのみやげ話」(野間児童文芸賞)、「コタンの口笛」(小川未明文学賞、サンケイ児童出版文化賞)、「千軒岳」(国際アンデルセン賞候補作)などがあり、それら全作品を網羅した石森延男児童文学全集全一五巻が昭和46年学習研究社より発刊されている。長編八、中編三のほか短編、エッセー、民話など多彩である。(笠原肇)

石森史郎 いしもりしろう 昭6・7・31〜(1931〜)〔シナリオ〕留明管内羽幌町生まれ。日本大学芸術学部映画学科卒。シナリオ同人誌「凡」(東京、「侃」改題)同人。映画の代表作に「約束」「旅の重さ」(毎日映画コンクール脚本賞、芸術選奨文部大臣新人賞受賞)があり、小説集に北海道を舞台にした「春告祭」(昭53)のほか「水色の時」「太陽は泣かない」など。シナリオ関係の著作に「水色の時ノート」「シナリオ創作」プロ作家への早道」がある。石森史郎プロダクション代表、東京写真専門学校主任教授。シナリオ作家協会、日本放送作家協会員。(佐々木逸郎)

石山徹郎 いしやまとく 明21・8・18〜昭20・7・30 (1888〜1945)〔国文学研究〕

泉 斜汀 いづみ 明13・1・31〜昭8・3・30 (1880〜1933)〔小説〕石川県生まれ。本名豊春。鏡花の弟。尾崎紅葉門下の硯友社作家。明治39年北海タイムス(現北海道新聞)社会部長として札幌にいた。同紙に「札幌見物」「雁の便」などの連載随筆や俳句などを発表。「寒紅梅」という小説を載せたという説(山口喜一)もあるが未詳。40年春帰京。帰京後「文芸倶楽部」に掲載した「異熱」は札幌生活に縁を持つ。一時ロシア文学の影響を見せたが大成しなかった。(和田謹吾)

泉 孝 いづみ 大5・8・1〜(1916〜)〔短歌〕釧路市生まれ。室蘭商業学校在学中に短歌を学び、のち実兄(海道はじめ)の影響により口語短歌に進む。「新樹」「星輝」「ふるさと」「青空」に所属。昭和12年工藤仙二らと「炭かすの街」創刊。現在同誌主宰。元新日鉄社員。47年定年退職後関連企業役員に就任した。室蘭文芸協会理事。新日鉄職場場芸誌「足跡」編集発行人責任者。

泉田天桃 いづみ 明34・1・25〜昭40・6・15 (1901〜1966)〔俳句〕福島県生まれ。本名義正。昭和2年東洋大学東洋文学科卒。同年旭川北都高等女学校講師。石田雨圃子の「木ノ芽」ホトトギス

に投句。8年第三回ホトトギス全集に兩圃子をはじめ旭川俳人の句が多く収録されているが、その中の俊英作家の一人であり、北海道ホトトギス女流作家の育ての親でもある。(白幡千草)

泉 天郎 (1886-1949) 「俳句」東京生まれ。本名正路。千住小学校高等科のこる受け持ち教師の影響により琴溪の俳号で句作した。明治38年独逸協会中学に入學、句作にも励み、41年には河東碧梧桐門下の俊秀として認められ、44年久米三汀(正雄)と「朱鞠」を創刊、この年句集「東国」を出版した。45年千葉医専に入學するまでに一高三部(医科)の受験に八回失敗「俳句に凝ると天郎のようになる」という戒めあいの言葉が伝説になった。大正5年千葉医専後岩内に帰り父とともに医業に就き、画家の木田金次郎らと交友がはじまった。12年エスベラントの学習をはじめ、15年結婚。昭和3年北海道日日新聞俳壇選者。4年改造社版現代日本文学全集現代俳句集に作品「自由律」収録。5年佐藤十狼、下国巨幹らと「麓」刊行。7年金谷からす(信夫)らのガリ版俳誌「破片」(後「篝火」)の指導に当たった。10年廣江八重桜、中塚響也らと季刊「渚」発行、風間直得の「紀元」などに自由律ルビ俳句を

発表していたが、このころから有季定型俳句に戻った。「渚」は昭和15年二〇号で終わったが、この後響也に代わって兼崎地橙孫が加わり、自筆回覧方式による「清明」を始め、戦争末期の郵便事情の悪い間も続けられ、地橙孫に送られた最後の句稿は死の四日前、家族に代筆させたものであった。昭和18年月例会を開き新人の育成に当たった。22年岩内町に訪れた「壺」主宰斎藤玄の強い要請で同志同人に加わり、添削指導を担当した。33年天郎門下の天郎会が岩内神社境内に句碑を建立。58年には佐藤十狼、庄崎稲郎ら泉天郎を偲ぶ会が苦勞の末に得た写本により、三千余句を収録した「自選泉天郎句集」を刊行。(金谷信夫)

和泉伸好 (1892-1929) 「俳句」後志管内余市町生まれ。本名信義。自治大学校卒。北海道対がん協会常任理事。「饗宴」所属、「これ」同人。昭和59年句集「凡百」刊行。飄々淡々としながら豊かな滋味と俳味を加え、自己の内面に転ずる作風。(竹田てつを)

泉麟太郎 (1892-1929) 「短歌」宮城県生まれ。晩年は静処志農と号した。明治3年仙台藩一門石川邦光の家臣として室蘭に移住し、21年に夕張開墾起業組合を設立して夕張郡アノ口原野(現栗山町)に転住。道議会議員などを務める。本格的な作歌は35年ころからで「六十一歳を初めとして悉しき日記を書くべき題辭の心として」と動機を述べている。作品は「混濁集」「まことの泉」「静処志農―泉麟太郎遺歌文稿」に収められている。(木原直彦)

雷の復活から23年まで投句。その後「霧華」編集同人、「扉」同人を経て、同人誌「広軌」に拠る。(後藤軒太郎)

井田 実 (1906-1970) 「短歌」門司市生まれ。京都帝国大学卒業後旧道銀に入行。拓銀に合併した時、酒匂親幸指導の拓銀短歌会に入り、「日高路」「新墾」に作品を発表し続けた。旧制高校時代から古典の素養を積んでおり、趣味も範圍が広い。札幌で没後子女によって遺歌集「虚々実々」が刊行された。(永平利夫)

市江弥門 (1910-1991) 「小説、評論」小樽市生まれ。昭和9年小樽中学卒。16年法政大学政治経済科卒。戦前八坂純の筆名で「赤門文学」に評論を発表。北日本木材商會経営のかたわら小樽ベンクラブ機関誌「浮標」(昭27・9創刊)当初の編集人。「薔薇勁ければ」「木下閣」「若く谷間」などがあり、「アキレウスの恋」は「北海道文学代表作選集」(昭31・11)に転載。36年に東京へ転じた。(木原直彦)

市川謙一郎 (1903-1972) 「評論」長野市生まれ。大正12年信濃毎日新聞入社。昭和9年読売新聞に転じ同社より出向して山陰新聞、島根新聞、ビルマ新聞、北日

本新聞各編集局長を経て読売新聞整理部長、記事審査委員長、25年から北海タイムス主筆として「一日一言」を執筆。28年第一回エッセイストクラブ賞受賞。33年長崎新聞社長。36年から「一日一言」を再び執筆した。(南河達雄)

市川三枝子 (1914-1960) 「国文学研究、短歌」東京生まれ。東京女高師卒。群馬女子師範、東京校町高女教諭を経て、昭和18年北大理学部教授市川純彦と結婚。同年藤高女教諭。25年北大国文科卒。藤女専、短大国文科助教授を経て教授。歌は今井邦子の「明日香」に出詠。戦後は「原始林」同人。流麗な歌を詠んだ。著書に「蕪村の鑑賞」(昭36)、「私の樹・私の道」(昭35)がある。(和田謙吾)

市川守国 (1915-1960) 「短歌」胆振管内豊浦町生まれ。後志管内真狩村で開発に従事、のち北海道農業は酪農にあるとの信念のもとに酪農業に従事して成功。真狩村酪農組合長、教育委員長、農業協同組合代表監事を歴任。昭和10年作歌をはじめ、18年「新墾」入社。現在は「銀河」同人。51年第一歌集「反芻」を発売。酪農業者の心意気に満ちあふれた歌集である。33年後志歌人会結成に参与。52年真狩短歌会選集「麓」第二集発行。真狩村では文

合を設立して夕張郡アノ口原野(現栗山町)に転住。道議会議員などを務める。本格的な作歌は35年ころからで「六十一歳を初めとして悉しき日記を書くべき題辭の心として」と動機を述べている。作品は「混濁集」「まことの泉」「静処志農―泉麟太郎遺歌文稿」に収められている。(木原直彦)

伊勢正勝 (1914-1960) 「短歌」後志管内岩内町生まれ。苦小牧西高卒。昭和13年登別、24年穂別の役場を経て、49年苦小牧市役所を退職。昭和21年「羊蹄」、23年「アララギ」、33年「北海道アララギ」入会。現在、苦小牧市在住。地域の短歌指導に当たる。(笹原登喜雄)

磯木雄介 (1930-) 「磯路管内厚岸町生まれ。本姓島田。北大詩話会発行の「未来」同人、詩集「磯路」(昭33、北大詩話会)、「季節」(昭37、同)、「愛のかたち」(昭39)等がある。札幌在住時「フェニックスの会」で詩画展を開催し、詩活動を行った。(小松瑛子)

磯野雅之 (1938-) 「俳句」旭川市生まれ。本名正行。昭和19年療養中、高橋貞俊選の新聞俳句欄に投句。21年「水輪」創刊と同時に参加。23年同人となる。並行して戦後「寒化団体の中心となって活躍している。会の創立三〇周年を記念して「南麓」第三集を発売。全後志の第二〇回大会を主催した。(時雨来るニセコの山に尻向けて牛はおのおのの位置を動かさず)

市川よし子 (1938-) 「短歌」十勝管内本別町生まれ。庁立池田高女卒。在学中より作歌を始めている。昭和30年「新墾」に入社、新墾新人賞受賞、新墾銀河同人。別に「辛夷」に入社、第一回辛夷賞受賞、現在は辛夷編集委員及び選者。小田観螢、野原水嶺、小田哲夫、宮崎芳男に師事したが、作品は一風をなし文章面でも活躍が著しい。(あかき野をよぎりゆく影は馬の如し野ぎつねのごとし我のごとし)

一乗秀峰 (1906-1983) 「俳句」東京生まれ。本名秀夫。法政大学を卒業し、札幌管林局に勤務。昭和24年より鮫島交魚子に師事し、職場の熊笹会で句を学ぶ。42年「若葉」同人、44年「青女」に参加し、若葉、青女同人。俳人協会員となる。50年より北海道俳句協会事務局長として、同協会の発展充実に大きく寄与した。(新明紫明)

938) (小説) 仙台市生まれ。本名渋谷正之。東北学院大中退。北海学園大卒。札幌市役所に入り、朝倉賢を知る。昭和59年退職。39年「くりま」入会。同誌に「夏の果て」等九編。「みぞるる」(昭46、「北方文芸」)「花遺る日」(昭50、同)を発表。(川辺為三)

一条迷羊 明41・11・15 (1968) (小説、短歌) 盛岡市生まれ。本名正。大正15年釧路中学校時代に「北方芸術」を、卒業後口語短歌誌「白楊樹」を主宰して口語短歌の普及につとめた。昭和4年上京、短歌に失望して「近代文学」「新創作時代」に創作を発表。戦後日本食糧新聞を経営。創作集「蛭の仲間」(昭14、赤塚書房)。「若き日の歌」(昭16、赤塚書房)は発禁処分となった。(鳥居倉三)

市瀬 見 大7・6・5 (1932) (新聞記者) 東京生まれ。早稲田大学中退。北海道新聞東京支社、本社で主として学芸記者。昭和43年論説委員となり同紙夕刊コラム「直線曲線」を五年間担当。その後東京の新聞三社連合(西日本、中日、東京、北海道新聞)の事務局長を務め松本清張、井上ひさし、瀬戸内晴美、後藤明生らの連載小説を手がける。以後、北海道新聞、「美術ペン」などに美術批評を掲載。著書に「彫刻家佐藤忠良」(昭60、一光社)。美術記者会員。横浜市在住。(中島正裕)

原九糸 明43・8・23 (1930) (俳句) 徳島県生まれ。本名有徳。昭和4年白田亜浪の「石楠」、以後「天狼」「浜」に。また廃刊まで「緋衣」同人。「水原帯」「粒」「葦牙」同人。「水原帯」に「風のメモ」、「葦牙」に「霧のネガ」執筆。登山家、版画家としても知られ、56年北海道現代美術展最優秀賞等受賞。著書に句集「岳」「坂」、二人句集「二人の坂」、ガイドブック「北海道の山々」等がある。(山田緑光)

市村正之 昭2・3・24 (1927) (俳句) 千歳市生まれ。酪農学園に学ぶ。公務員。昭和20年碧水園孤月に師事して俳句の手ほどきを受ける。23年土岐鍊太郎を識り「アカシヤ」へ入会。日野草城、土岐鍊太郎に師事。25年百花集同人、34年無鑑査同人。その間「青芝」にも参加し八幡城太郎にも師事。昭和31年アカシヤ賞、56年千歳市民文芸賞を受ける。42年から千歳俳句会講師。千歳民報俳壇運者。(岡澤康司)

五木寛之 昭7・9・30 (1932) (小説) 福岡県生まれ。本名松延寛之。早稲田大学露文科中退。各種の職業を転々とし、41年の「さらば、モスクワ愚連隊」が小説現代新人賞を得て作家生活に入る。41年「蒼蒼めた馬を見よ」で直木賞受賞。代表作「青春の門」は全二部で構成された長編で、物語は筑豊から東京、北海道(講談社刊「放浪篇」「墮落篇」)へと移り、主人公伊吹信介の生き方を通して青春を追求している。ほかに本道を舞台にした作品に「内灘夫人」(昭44・10、新潮社)、「ユニコーンの旅」(昭46・8、「オール読物」)、「海峡物語」(昭52・9、講談社)など。本道を扱ったエッセイも多い。(木原直彦)

井手都子 昭10・11・21 (1935) (俳句) 名寄市生まれ。本名照井郁子。地方公務員。昭和35年「水原帯」に入会。38年「象」同人。40年「粒」同人。ほかに「海程」「広軌」同人。58年生活に入る。41年「蒼蒼めた馬を見よ」で直木賞受賞。代表作「青春の門」は全二部で構成された長編で、物語は筑豊から東京、北海道(講談社刊「放浪篇」「墮落篇」)へと移り、主人公伊吹信介の生き方を通して青春を追求している。ほかに本道を舞台にした作品に「内灘夫人」(昭44・10、新潮社)、「ユニコーンの旅」(昭46・8、「オール読物」)、「海峡物語」(昭52・9、講談社)など。本道を扱ったエッセイも多い。(木原直彦)

井手都子句集 刊行。星野一郎は「前衛俳句の流れに身を投じる決意が固まつての井手の書きっぷりは喰いついた蟹が放れた如く在来の俳句の概念から脱出し強力な転機であった」と評している。現代俳句協会員。(山田緑光)

伊東音次郎 明27・5・17 (昭28・2・6 (1894~1953) [短歌] 江別市生まれ。明治40年札幌市立第一中学校入学。44年父の死亡に伴い中途退学。当時ロシア文学に傾倒し「文章世界」に投稿。西出朝風の現代語歌に共鳴。一九歳の夏ロシア行の志を捨てきれずロシア語勉強のため上京。大正3年「新短歌と新俳句」創刊と共に同人として参加。西出朝風とは大正元年に邂逅し、口語短歌運動の戦列に加わるが、食うための職に追われ次第に当初の希望は断たれ、5年秋、流浪の淋しさに耐えられず帰郷。小間物商等をするが、のち農業を営む。9年西出朝風の「純正詩社」創設に参画。小樽の「橄欖樹」刊行に参与。「新短歌」「芸術と自由」「明日の歌」等に関係。作品発表の機会に恵まれる。大正年代後半から昭和初期まで全国的に活発な口語歌運動を推進し、地方口語歌の扶植に貢献すると共に童謡作家としても活躍。昭和4年西出朝風来道を機に、歌誌「無風」を創刊するが六カ月で終刊。並木凡

平、代田茂樹、炭光任、渡辺要らと交友を深め、北海道口語歌壇の画期的隆盛につとめたが、昭和10年代より作歌意欲を失い、西出朝風の死去により全く執筆を絶つ。この間に関係した歌誌は七十余誌に及び、日本の口語歌運動の総帥として残した業績は偉大である。昭和48年音次郎顕彰会により歌碑を建立。翌49年「伊東音次郎歌集」刊行。(吉田秋陽)

伊藤桂子 昭13・6・9 (1938) (小説) 樺太真岡生まれ。昭和20年十勝幕別に引き揚げ、入植。幕別高校別科卒。農業体験を基に新しい農民文学をめざす。昭和46年「くりま」の会入会。同年「農民文学会」入会。「焼酎と赤い靴下」(土とふるさとの文学全集11)、「後志、雨のち雪」(北海道文学全集21)、「冬の陰」(北海道新鋭小説集7)、「ほかに「くりま」に数編を発表。北海道新聞のコラム執筆。(川辺為三)

伊藤彩雪 明34・2・15 (昭49・6・20 (1901~1974) [俳句] 札幌市生まれ。本名信緒。会社役員。広告美術「フタバ堂」を経営した。少、青年期を東京、京都に過ごし、画家を志望して伊東深水に学ぶ。「ホトトギス」の内藤鳴雪に師事して句作に入る。一時短歌へ転向したが、昭和17年より本格的に句作。鳴雪没後高浜虚子、年尾に師事。のちホ

トトギス同人で「菜殻火」を創刊した野見山朱鳥に私淑し、生涯「ホトトギス」「菜殻火」同人を貫く。作風は若年期に学んだ絵画の視点を背景にして、単なる平面的な描写にとどまらず、人間の内面を諷諷することにも重きを置き、伝統の中に新しさを求めた。その意欲が同人誌「榆派」などへの参加となってあらわれている。病没の翌年、遺句集「櫛の馬」刊行。北海道タイムス俳壇選者。俳人協会員。また北海道俳句協会役員として、その運営にも情熱を注いだ。(流水の無垢の大陸接岸す) (木村敏男)

伊藤習司 大14・7・16 (1925) (小説、詩、評論) 樺太大泊生まれ。大泊商業学校卒。北電室蘭から現在労金本店勤務。室蘭で戦後最初の同人誌「山茶花」(昭22)を出し、続いて「形象」「室蘭文学」「習作時代」「文学風土」次にくるもの「壁」で旺盛に文学運動。詩集「黒い兵隊」がある。(かなまると・よしあき)

伊東正三 明4・1・3 (大2・9・13 (1871~1913) [新聞記者] 青森県生まれ。号は山華。明治9年札幌に移住。28年東京大学を退学して北門新報社に入社、主筆として健筆をふるう。34年には北鳴新報社を創設して新聞界に新風をもたらしたが、同記者山本露滴ら

と手を組んで、北海文壇の未発の新文芸的生気を注いだ。40年には詩人野口雨情がいた。42年廃刊。44年上梓の「札幌区史」(札幌区役所)は名著。脳溢血のため釧路で没した。(木原直彦)

伊藤信吉 いとう 明39・11・30(1908-) (詩、評論)前橋市生まれ。萩原朔太郎、室生犀星に師事し、草野心平等と「学校」に拠り、アナキズム文学運動、次いでマルキシズムの詩集「故郷」「上州」「風と天」「天下末年」で多喜二・百合子賞受賞。北海道に取材のため数度旅行。「ユートピア紀行」の「カインの末裔」、「紀行ふるさとの詩」の「風雪の詩をめぐる旅」等で、北国の詩の幾編かをとりあげている。(更科源蔵)

伊藤信二 いとう 明40・10・30(1907-) (小説)小樽市生まれ。庁立小樽中学(現小樽潮陵高)を家の破産で中退、北海製缶の労働者となる。三・一五事件で検挙。全日本無産者芸術連盟(ナップ)小樽支部を風間六三、小林多喜二と結成。何度か上京、中野重治らと交遊。「反戦小説について」(昭4・10)、「戦旗」、「ゴモの家族」(昭7・2)、「大衆の友」など。多喜二「工場細胞」取材に協力。「北方文芸」に特集号(昭46・11)がある。(小笠原克)

長、農学部部長を歴任。昭和20年北大総長(後、学長)となり、法文学部、教育学部の創設に貢献。日本農学賞、文化功労者表彰を受ける。稲熱病について御進講。「北海詩談」など、漢詩、川柳、随想の著がある。(和田謹吾)

伊藤達朗 いとう 明41・2・25(1908-) (短歌)青森県生まれ。昭和6年「歌と観照」入会。8年「吾が嶺」入会。13年「あさひこ」入会。24年「珊瑚礁」入会。27年「原始林」入会。34年「霸王樹」入会。42年「樹水帯」入会。46年「いしかり」入会。札幌市に在住。(水口幾代)

伊藤凍魚 いとう 明31・7・1(1898-) (俳句)福島県生まれ。本名義蔵。幼時家産傾き祖父母に養育され、中学進学を断念。このころより俳誌「軒の栗」に拠り、矢部椿郎、佐久間法師らと親交を結ぶ。大正8年樺太に渡るが父の訃報に接し上京、苦学して専修大学に学ぶ。高浜虚子、長谷川零餘子、村上鬼城、内藤鳴雪に接し俳句の指導を仰ぐ。9年丸善に就職、11年札幌出張所に転勤。札幌商業教師であった比良暮雪を知り、生涯の絆を結ぶ。12年関東大震災により同出張所閉鎖、東京に戻ったが、過労による疾病のため同店退職。原石鼎に師事してその膝下に参じ、

伊藤 整 いとう 明38・1・16(1905-) (小説、評論)渡島管内松前町(炭焼沢村)生まれ。本名、整。父昌整は広島県出身。陸軍教導団を経て日清戦役後、海軍水路部臨時測量員として北海道福山にきた。日露戦争には旭川第七師団から旅順攻略戦に参戦し負傷、陸軍少尉で退役後、忍路郡塩谷村字伍助沢で簡易教育所代用教員、のち塩谷村役場書記、収入役。整は塩谷尋常小学校卒業後、庁立小樽中学校に進み、鈴木重道(北見尚吉)、川合友重らを知る。鈴木から「藤村詩集」を借りて読み、詩歌にめざめ、同人誌「踏絵」を発行。大正11年小樽高等商業学校入学、一年以上級に小林多喜二、高浜年尾らが入った。「校友会誌」に詩「春日小曲」を発表、また川崎昇編集の同人誌「青空」に参加。

14年小樽高商卒業、新設の小樽市中学校教諭となり詩作に専念。15年12月、処女詩集「雪明りの路」を東京椎の木社から上梓。昭和2年東京商大に入学したが事情で休学、翌年上京。川崎昇、河原直一郎らと同人誌「信天翁」、翌年「文芸レビュー」を創刊。その間、父死亡、また山越郡八雲町野田生に住む小川貞子を知り、故郷を往還す。短編「生物祭」「石狩」等はその間の消息をあらわす帰郷小説で、一面、ジョイス等新文学の手法を

俳誌「鹿火屋」の編集にあたり、田村木国、小野燕子らと交流を深める。13年富士製紙落合工場に就職樺太に渡る。山本一掬、西原蛍雨、花上稲香らと「水 downstream」を興し、俳誌「水 downstream」を創刊。俳号余子を凍魚と改む。14年俳誌「高潮」で活動をしていた松井ユキ(雪女)と結婚。共に「水 downstream」の編集、発行にあたり、新人の発掘、後進の指導に情熱を傾ける。「鹿火屋」同人。日本文学会員となり、「水 downstream」は内外の多くの支持を受け誌齢を重ねる。昭和19年王子製紙を退職、以後もつばら俳句指導に奔走する。20年樺太庁の要請により内地旅行中敗戦、樺太に渡航不能となり放浪の日を重ね、21年引き揚げの家族を迎えて旭川に帰住。22年「花樺会」を創設、北海道新聞俳壇選者、NHK聴取者文芸の選評にあたる。25年来道の飯田蛇笏に随伴以後師事、「雲母」同人。29年「水 downstream」復刊、北方俳句の拠点として支持を得た。37年(への芽の雪ふるときも旺んなり)、38年(へのづから空にみちあり鳥わたる)の句碑建立。著書句集「花樺」「水 downstream」ほか。(菊地滴翠)

伊藤俊夫 いとう 明40・10・30(1907-) (詩)札幌市生まれ。北海道大学農学部経済学科卒。北海道大学名誉教授、北洋相互銀行顧問。戦前「さとぼろ」同

織り成す。さらに「馬喰の果」(昭12)に北方人の性格造型を試み、「街と村」(昭14)では故郷の地誌的探求に私小説の自己処罰を融合す。20年空襲激化のため野田生の夫人の実家に疎開、帝国産金株式会社落部工場に奉職、終戦。戦後は、更科源蔵らの詩誌「野性」「大道」や「北方文学」に詩編を寄せ、長編「鳴海仙吉」を構想。21年7月北大予科講師を在任四ヵ月で退職、帰京。以後は小説、評論に縦横の活躍をし、自伝的長編「若い詩人の肖像」等刊行。東京工大教授、日本近代文学館理事長など歴任。菊池寛賞、芸術院賞を受賞。45年5月郷里の小樽市塩谷に伊藤整文学碑建つ。

〔若い詩人の肖像〕の肖像 長編小説。昭和33年12月、新潮社刊。小樽高商入学から上京までをつづつた自伝小説で、故郷の塩谷と小樽を舞台に、文学へのめざめと恋愛の嵐を描く。周密に書き込まれたさまざまなエピソードの中に、詩人の情感と自我が均衡を保ちながら、青春の固有性をほどよく主張するところに特色がある。(日高昭二)

伊藤誠哉 いとう 明16・8・7(1897-) (小説)新潟生まれ。東北帝大農科大学(現・北大農学部)卒。宮部金吾の指導を受けて研究を続け、大正7年教授となる。植物園

人。「北方文芸」同人。戦後は「北方季刊」の同人。廃刊後は所屬なし。戦前から日夏耿之介に師事した。詩集は持たないが経済学者として新聞その他に風刺をとり入れた文化的な詩を発表している。教養の高いモダニズム的詩法を特色とする。(小松瑛子)

伊藤利孝 いとう 明30・1(1897-) (随筆)秋田県生まれ。大正11年旧北海タイムス社入社。戦中の統合により北海道新聞社に変わり事業部長。戦後、新北海の創刊に参画し、昭和33年北海タイムス社長に就任。退任後も同社顧問としてその発展に尽くした。札幌民芸協会会長をつとめ、民芸品、版面の収集でも知られる。「食いしん坊歳時記」「私の食物誌」等の著作があり、食物に関する随筆家としても定評がある。(小松宋輔)

伊東克志郎 いとう 大14・3・11(1925-) (小説)小樽市生まれ。本名伊藤清春。復員後太平洋炭礦に勤めながら小説を書きはじめ、「北海文学」に地底生活を描いた秀作「輸血」「闇の中」(昭28)を発表した。長編「海峡」(昭37)を自費出版。同人誌を主な舞台とし、短編作家として知られるが、以来筆を折った。(鳥居省三)

昭51・2・22 (1905～1976) 「詩」横浜
市生まれ。北の山に憧れて来道。昭和4
年北海道帝国大学農学部生物学科卒。同
大学院卒後、アメリカ・ペンシルベニア
大学大学院修学。北大予科教授、北海
道学芸大学教授、北海道教育長、札幌医大
教授、札幌静修短期大学長などを歴任。
北大在学中は「北大桜星会雑誌」に作品
を発表。昭和3年処女詩集「風景を歩む」
を刊行。詩風は風景に美と生命と哲学を
観ずることを特色とする。「さあこの落
葉をかきあつめて しばし情念の焰火を
焚かう この宇宙の無機物的曠野の祭壇
で」(同詩集「焚火」から)。詩作は生涯
を通じて行われ、詩誌「情緒」のほか
「北海道詩集」を発表の場としていた。
没後多数の未発表詩編を含めて、友人ら
によって詩集「山の風物誌」(昭52)が
刊行された。生物学者としてのかたわ
ら、登山家としても知られ、北大在学中
より北海道、千島の山々を先駆的に踏破
し大正15年仲間と北大山岳部を創立し
た。昭和3年日本山岳会に入会し、理
事、評議員、北海道支部長などを歴任、
50名名誉会員に推薦された。登山紀行や
随想を収めた「北の山」(昭10)は日本
山岳名著の一冊とされ、後に中公文庫よ
り復刻(昭55)された。ほかに「北海道
の山旅」「草原随想」「北の山・続篇」な

どがある。喉頭ガンで没した。

(永井 浩)

伊藤雪女 ゆきむすめ 明31・2・12 (1888)
東京女子薬学校(現明治薬科大学)卒。
俳句は幼時より屯田兵として岡山から入
植した父松井浮石と「心の華」の歌人だ
った母マサにより指導を受けた。「いた
どり」「高潮」「ホトトギス」「鹿火屋」
に学ぶ。旭川赤十字病院に薬剤師として
勤め、大正14年樺太落合町で俳誌「水
下魚」を主宰する伊藤凍魚と結婚し、同誌
の編集発行の協力者となる。敗戦により
悉くを喪失、帰国の途をとぎされ、21年
暮れ引き揚げて凍魚と再会、旭川に帰住
する。22年凍魚と共に旭川花樺社を発
足、新人の発掘養成にあたる。25年「雲
母」に入会、飯田蛇笏、飯田竜太に師
事、雲母同人。29年札幌で「水 downstream」の
復刊を見、凍魚と共に多くの新人を指導
養成したが、38年1月凍魚死去、遺志に
より「水 downstream」は誌号三四二号でその輝
かしい活動を閉じた。以後凍魚のあとを
継ぎ旭川花樺社を主宰。40年伊藤凍魚句
集「水 downstream」編集発行。43年飯田竜太の
序文により、句集「夫の郷」を雲母社よ
り発行。30年、32年「雲母賞」優秀作品
に入選。52年度旭川市文化奨励賞を受け
た。
(菊地満翠)

伊藤蘭水 らんすい 大7・11・11 (1888)
旧制室蘭商業学校卒。北海道三菱センタ
1事務局局長を務めた。昭和20年頃より句
作に入る。27年創刊の「菜殻火」によ
り、野見山朱鳥の新鮮な伝統俳句に惹か
れ師事、のち「菜殻火」同人。伊藤彩雪
らと「菜殻火」北海道支部を創り、彩雪
没後その指導にあたる。客観写生に新し
い主観の投影を目指す。著書に随筆集
「ふれあいの軌跡」。
(木村敏男)

伊東 廉 けん 大11・2・15 (1888)
「詩」岩見沢市生まれ。旧制岩見沢
中学四年頃より詩を書きはじめ、関西の
吉川則比古主宰「日本詩壇」に投稿。そ
の他学内文芸誌や同人誌「不来方」に作
品を発表。軍隊に入隊、昭和21年夏ラバ
ウルより復員。「詩潮」(鈴木正志主宰)
の会員となり、地元の加藤愛夫、奥保の
影響を受けながら詩作活動に入る。その
頃、佐藤初夫、久野斌、長井菊夫、羽田
野幸子、高橋秀郎らと知りあう。「建設
詩人」(九州、徳永寿主宰)同人となる。
岩見沢の文芸誌「草原」復刊号より編集
に当たるほか、24年には加藤愛夫、奥
保、長井菊夫らと「詩人種」を創刊。全
国より同人集まる。「苗」同人となるほ
か、道内の詩誌や道外の「詩風」「詩火」
「詩人街」など若手詩人の編集する多く

の詩誌に関係しながら作品を発表。31年
第一詩集「失意の雪」(東京、芸術社)
刊行。35年「日本未来派」同人となり、
この頃より「日本未来派」「苗」に主力
をおき活躍。49年には第二詩集「逆光の
径」(北書房)を刊行、第一回北海道
詩人協会賞を受賞、日本現代詩人協会に
推薦された。同年岩見沢市教育振興文化
功労賞受賞。59年第三詩集「蒼い風景」
(勁草書房)を刊行した。そのほか、地
元では詩話会、「文学岩見沢」を育てる
ほか、小、中学校校歌作詞などの仕事がある。版画では道展入選作多数。北海道
詩人協会会長。医師。
(高橋秀郎)

井戸川美和子 みわこ

明41・1・23 (1906～1981)

京生まれ。東京府立第一高女卒。大正14
年四賀光子に師事して「潮音」に入社。
翌15年縁つづきの砲兵将校と結婚、以後
夫の転勤に従って日本各地や大陸にも渡
る。この時期の作品〈千人針われに征旅
の夫ありて祈は熱し縫はしめたまへ〉
が、軍人の妻の歌として諸歌集に収録さ
れ、新聞、雑誌、ラジオ、果ては芝居や
映画の字幕にまで使われて人口に膾炙し
一躍脚光を浴びた。17年第一歌集「旅
雁」を出版。終戦を札幌で迎え離道する
27年まで「新壘」の選者として後進の指
導に尽くすと共に、24年から「潮音」選

者に推され、病気で辞退する55年まで三
〇年間勤めた。歌集も札幌在住時の作品
も収める第二歌集「冬虹」をはじめ「緑
蘿」「碧」、55年第五歌集「豊後梅」など
がある。〈必ず来る死の時我はいかにせ
ん痛病む友が夏帯を買ふ〉(永平利夫)
井鳥廷治 ていぢ 大2・10・10 (1901)
「短歌」後志管内余市町生まれ。本
名貞治。京都帝国大学英法科卒。昭和20
年応召、シベリア抑留後、24年に復員、
療養生活を経て27年から道立高校の教
諭。定年退職後は北海道自動車短大講
師。歌は昭和12年「五更」に入会、15年
「歩道」に参加、さらに「落葉松」「海
鳴」の同人を経て北海道アララギ会員。
37年「井鳥廷治全歌集」、50年に人の哀
歎を彫琢した歌集「白雲」を出版。
(永平利夫)

稲月荈介 たけがけ

昭6・12・5 (1892)

「俳句」室蘭市生まれ。本名吉夫。
昭和26年より作句。土岐鍊太郎を識り
「アカシヤ」入会。また僚誌「青芝」
(八幡城太郎主宰)の創刊に参加。現在
両誌共に無鑑査同人。地元室蘭に在って
昭和29年樋口游魚と共に直線グループを
興して指導者として活躍。58年随筆集
「巴里祭の鴉」、ほかに五冊の版画帖あ
り。俳人協会会員。昭和31年青芝賞。36年
アカシヤ賞受賞。
(岡澤康司)

稲畑笑治 しょうぢ

明42・1・5 (1905)

・4・22 (1909～1980) 「短歌」小樽市
生まれ。本名加畑勝太郎。新聞記者。大
正末期に小樽新聞社へ入社。新聞統合に
より北海道新聞社に移籍。岩見沢、根室
支局長、釧路支社報道部長、函館支社営
業局長、本社出版部長、帯広、小樽支社
長、本社編集局記事審査室委員等歴任。
昭和39年定年退社。短歌は一七歳頃より
作る。昭和2年口語歌誌「街路樹」創
刊。同年12月並木凡平らと「新短歌時
代」を発刊、編集同人として参画。以来
口語歌壇で活躍。戦中、戦後一時中断期
間はあつたが復刊の「青空」「新短歌時
代」「北土」等に作品、エッセーを書き
続け、生涯短歌革新の理念を持っていた。
北海道歌人会委員。昭和4年に歌集
「憂鬱な部屋」を発刊。54年には古希を
記念に歌集「冬将軍」を発刊。〈冬将軍
が堅琴を弾く硬質の絨に抒情的に黄昏れ
のものがりぶえ〉
(吉田秋陽)

稲畑汀子 ていし

昭6・1・8 (1891)

「俳句」横浜市生まれ。小林聖心
女子学院英語専攻科中退。その頃より祖
父高浜虚子、父年尾の俳句の旅に伴い句
作。「ホトトギス」「玉藻」に投句。昭和
31年稲畑順三と結婚。年尾病氣のため52
年7月よりホトトギスの選者となる。54
年年尾死去後主宰者となる。55年4月ホ

トトギス一〇〇〇号記念を主宰する。それと前後して夫順三が原因不明の病に伏した。ある時は病室で選をし、地方大会にも出席し、その心労努力は大変なものであった。55年9月夫順三死去。昭和33年の虚子来道を記念しての北海道ホトギス大会にも毎年出席、本道俳人の育成に力を注いでいる。現在、朝日俳壇、ロタリ俳壇などの選者。著書に「汀子句集」「自然と語りあうやさしい俳句」「旅立」「星月夜」「汀子句評歳時記」など多数。(空といふ自由鶴舞ひ止まざるは)

稲村順三 (嶋田一步)

30・2・21 (1900~1956) [社会運動] 後志管内倶知安町生まれ。北海道大学科在学中に、菅原道太郎と文芸誌「平原」を創刊。「発狂せる母」などの創作を発表した。のち東大に入り、社会運動に身を投じた。戦後は社会党代議士として活躍した。(武井静夫)

犬飼哲夫 (明治30・10・31)

(1897~) [動物学] 松本市生まれ。北海道大学農学部卒。同農学部教授を経て道開拓記念館初代館長などを歴任。北大名誉教授。農博。発生学から出発し北海道、千島、樺太での生態学、民族学、毛皮研究など幅広く手がけ、ヒグマやアザラシの野外研究で先駆的業績が多い。南

生まれ。旧制旭川中学校卒。国鉄に奉職旭川工場庶務課長で退職。昭和28年右肋全摘手術で療養中「はまなす」へ。鎌倉転療後田中鬼骨を知り意を決し「雲母」に入会。「水下角」復刊後直ちに参加、旭川花権社の推進力となる。「未明」「四季」「秋」に一時同人として参加したが脱会、晩年の一〇年近くは「雲母」同人として活躍した。(鳥恒人)

いのうえ ひょう (昭13・7・9)

(1938~) [詩、小説] 十勝管内池田町生まれ。本名井上彪。北大文学部を卒業し北海道新聞社の記者となる。詩集「優しき懲罰」(昭55・8、私家版)、詩と創作の同人雑誌「黎」主宰。「戦士たちの夜」(昭55、「黎」14号)、「をばば鎮魂曲」(昭55、「オリザ」6号)、「80年・札幌・冬」(昭56、「黎」25号)、「汝」(昭59、「響文」2号)。(神谷忠孝)

井上二美 (大正11・11・12)

(1923~) [児童文学] 樺太豊原生まれ。豊原尋常高等小学校卒。日本児童文学者協会会員。「原野の風」「森の仲間」同人。作品に「月夜のふえ」(「北海道児童文学全集」13)、「カー助かえってこい」(「子どものひろば」(偕成社)など。樺太育ちの作者には樺太題材の「サハリン物語」があり、その中の作品「星空に向かって」「サーシャと象の耳」などが好

極大タロを育てた経験などに基づく動物記も多く、代表作に「わが動物記」「北方動物誌」ほかがある。(山口勝次郎)

井沼秋虹 (山口勝次郎)

59・10・23 (1917~1984) [俳句] 旭川市生まれ。本名悦郎。長く郵政事業に従事、郵便局長歴任。昭和23年「はまなす」入会以後「水下角」「若葉」「流水」などに所属、52年第一回はまなす文芸賞受賞。同年句集「湿原」出版。57年より釧路俳句連盟会長。以後死去まで各派俳人の交流融和に尽力、市芸術祭俳句大会など各種大会を主管、俳界の興隆に尽くした。(鈴木青光)

井上蛙苗 (昭2・3・30)

(1923~) [俳句] 釧路管内白糠町生まれ。本名洸。高等通信講習所卒。日本電電公社に勤務。昭和21年権守桂城に師事して句作に入り、春崖草の俳号で「えぞにう」「阿寒」「緋衣」「北方俳句人」「水原帯」「波紋」等に拠った。病氣のため長く休俳し、54年復活。「これ」同人、「杉」所属。55年第二回にれ賞受賞。現代俳句に清新を吹きこむ意欲的な作風をを目指す。(木村敏男)

井上瑛子 (昭23・5・24)

(1908~) [詩] 十勝管内芽室町生まれ。芽室高等学校卒。「裸族」同人を経て「帆」同人。詩集「五月の風」(昭45)、「風に評。また草土社の「語りつぐ戦争体験記」では、作者の体験を生かした「逆密航記」が好評である。民話の面でも「オタモイ地蔵さま」「タヌキにばけたオオカミ」「なべのあたうち」等が偕成社の「北海道の民話」に収録。昭和32年より新聞「婦人新報」の記者兼編集にあたり童話、短歌等を発表。ほかに「詩風土」を枯木虎夫(二美の夫)亡きあと主宰。(坪谷京子)

井上光晴 (大15・5・15)

(1905~) [小説] 旅順生まれ。幼少より佐世保に住む。電波兵器技術養成所卒。昭和25年「書かれざる一章」でデビュー。33年「ガダルカナル戦詩集」で地歩を固める。「虚構のクレール」などのあと、38年、「地の群れ」によって日本社会の深層地帯をとらえ、戦後文学の前衛的頂点にとどいた。以後「妊婦たちの明日」や「眼の皮膚」などで新しい展開をこころみ、現実と想像力の関係を問うアクチュアルで野心的な作品を精力的に書きついでいる。「階級」(昭42)、「心優しき叛逆者たち」(昭48)、「憑かれた人」(昭56)、「黄色い河口」(昭59)等がある。佐世保に文学伝習所をひらいたが、北海道にも54年以降、旭川、函館、札幌に

次々と開設し、(表現とはなにか)をテーマにエネルギーシユな文学行脚をくり

吹かれて」(昭47)、「美しすぎる夢」(昭60)がある。小説「雪の無い冬」「冬が始まる時」など、十勝の生活風土をめぐる鋭角的な心象風景が個性的特色である。(千葉宣一)

井上佐久良 (明21~昭51)

9 (1888~1976) [俳句] 札幌市生まれ。早稲田大学法学部卒。北門貯蓄銀行札幌市内支店長、札幌市立病院事務局長歴任。明治末年から作句。近藤紫村と共に「海紅」の主要同人。北海道の自由律俳句の先達であるとともに、本道俳壇の指導者の一人であった。昭和43年8月やちだも吟社を興し、新妻博、井上素子、曲線立歩、近藤至、近藤佳子、森田不亂軒らとともに自由律俳句の高揚と普及にため、その創始したハガキ俳誌「やちだも」は、誌型の異色とした作品の密度の濃さにより全国的に高い評価を受けた。佐久良はまた小樽の寺山山人、札幌の西田望洋をはじめとする道内および全国各地の自由律俳人らとの交流を深めることを常に忘れなかった。さらに天野宗軒とは多年にわたる書、漢詩、俳句の良き友であり、宗軒が主宰する「水声」の客員としても活躍した。(餓死寸前の白鳥の為水割る)

井上末夫 (大9・8・28)

昭54・1・8 (1890~1979) [俳句] 滝川市ひろげている。また、北方文芸賞の選考委員となり新人発掘に手をかすなど、北海道の文学とかかわりが深い。(高野斗志美)

井上 靖 (明40・5・6)

(1903~) [小説] 旭川市生まれ。京都大学美学専攻。昭和25年、「闘牛」で芥川賞。以後、旺盛で多彩な創作活動をくりひろげ、百万人の文学と呼ばれるほど幅ひろい読者を獲得した。「水壁」「天平の甕」「敦煌」「おろしや国酔夢譚」等がある。多くの文学賞を受け、39年日本芸術院会員となる。51年文化勲章。前日本ベンクラブ会長。北海道に取材した作品には「魔の季節」(昭29~30)等がある。(高野斗志美)

伊能忠敬 (延享2・1・11)

文政元・4・13 (1745~1818) [測量学、地理学] 上総国(現千葉県)小関村の名主小関家の第三子。後、伊能家に養子。五〇歳で隠居後、幼時より興味があった算学、数学、測量を高橋至時に学ぶ。寛政12年蝦夷地東南海岸を測量、このときに会った間宮林蔵の測量図と合わせて現北海道地図の形がつくられた。彼の死後日本地図の基となる「伊能図」と「與地実測録」が編まれた。(藤本英夫)

猪俣庄八 (明45・4・15)

昭43・11・12 (1912~1968) [中国文学研

究」福島県生まれ。東京大学中国文学科卒。中央大学教授を経て北大教授。翻訳「創造十年」(郭沫若)、共訳「支那言語学概論」がある。「北大季刊」創刊(昭26・10)に参加し評論「放浪する文学の鬼」を発表。「札幌文学」同人としてエッセーを書く。随筆集「釣迷記」(昭42、ぶやら新書)、遺稿集「廿年歳月」(昭44、私家版)がある。(神谷忠孝)

猪股 泰 (かたがは) 昭6・11・22(163)「短歌」東京生まれ。北海道大学文学部大学院修。国文学専攻。札幌月寒高校を経て現在藤女子高校勤務、国語担当。札幌西高校在学中に短歌同好会の友人の感化を受けて作歌を始め、昭和26年「原始林」に入会、中山周三に師事。初期には、土屋文明、正岡子規、近藤芳美などアララギ系統の歌人に関する研究を主に、評論、時評を多く発表した。作品面では40年頃から歌境に進展が見られ、多く人事を素材としながら、倫理的な観点から微妙な人間の心理を衝いた、存在感のある作品が評価され、46年原始林賞を受賞。翌47年オホーツク海沿岸地域の冬(の自然と生活を描いた「北オホーツク」)によって田辺賞受賞。50年代に陶芸に興味をもって一時作歌を中断したが復活。歌集はまだないが、近年の作品中では、岩手県遠野、宮崎県椎葉より熊本県

五箇荘、五木にかけての山岳地帯、御岳山への紀行等、民俗や土俗、地方の民衆の素朴な生活を求めて、それぞれ六〇首を超える大作をものする一方、大韓航空機の墜落事件のような社会的な事件を当事者の心理的側面からフィクションナルに描いた作品等が注目される。58年1月より原始林選者。菊美夫人も原始林同人。〈日溜りにしやがみ小豆の莢を剥く一向一揆の裔なりや老婆〉(田村哲三)

違星北斗 (あざ) 明34・1・1(昭41・26(1901)1900)「短歌、俳句」後志管内余市町生まれ。本名滝次郎。小学校卒業後北海道の各地をまわって働いていたが、大正14年に上京、市場協会の事務員となり金田一京助にも会う。しかし翌年には北海道にもどり、平取村のバチエラー保育園に勤める。この頃から短歌を作りはじめて小樽新聞に投稿、中里篤治と同人誌「コタン」を創刊する。さらに小樽新聞へは、小樽高商の西田教授に反論して「疑ふべきフゴツベ遺跡」をのせる。昭和3年からは売菓の行商をして各地をまわる。アイヌ民族の差別にげしい怒りを投げかけながらも、吾アイヌ也と自覚して「日本臣民」として生きようと願いつつ、「二八歳の若さで没した。昭和5年遺稿集「コタン」が希望社から発刊された。平取町に歌碑、余市町

今井 泉 (いらい) 昭10・6・5(1039)「小説」高知市生まれ。神戸商船大学卒業後、国鉄に入社。青函、宇高連絡船の船長を経て、現在四国総局船舶管理部監督。「海峡かもめ」(昭52年度函館市民文芸入選、第三〇回国鉄文芸年度賞一席)、「海の揺籃」(第31回国鉄文芸年度賞一席)、「涙い海峡」(第91回直木賞候補)、「道連れ」(別冊「文芸春秋」168号)などのほか作品集に「二等航海士・石川達雄」があるが、青函連絡船を材にした小説に力量を発揮している。「国鉄北海道文学」(晨)同人。(田中和夫)

今井国夫 (いまい) 昭10・7・29(1039)「短歌」釧路市生まれ。釧路工業高卒。新釧路石油勤務。昭和30年「新墾」入社、37年新墾釧路支社誌「荒潮」復刊、38年新墾賞受賞と目覚ましい活躍を見せた。46年「釧路現代文学選集」(第16巻短歌集)に作品発表。53年「釧路文学運動史(戦後編) 短歌の部」を執筆。現在は無所属ながら堅実に活躍中。〈輪血痕びつしり残る腕を上ぐる冬の短き夕光の中〉(椎名義光)

本名は山口斌。東京で戦災に遭い、札幌に単身赴任して道立教育研究所に勤務。単級複式教育や文学教育を研究。全道をかけ回り、僻地教育の指導にあたった。戦前は、百田宗治の「椎の木」に関係。昭和25年5月札幌の千代田書院より詩集「老いたる愛の詩」を刊行。26年8月更科源藏、八森虎太郎、小柳透らと札幌詩人倶楽部を結成し、詩人の相互交流の場を提供した。日本児童文芸家協会員。在道一〇年、現在、東京に住む。北海道体験をモチーフに、老いたる妻に捧げられた愛の絶唱は、現代詩が喪失した魂の肉声の復活として感動を与えた。

で書き始める。昭和47年手書きの童話集「夕日の沈むとき」をアテネ書房より出す。以後「簪」「邪鬼は泣いた」「雪まろげ」「女鬼」「なほと鬼」など民話風な語り口を生かし肉筆で書かれた童話集を次々と発表。51年アリス館から出た「てぶくろをつくった鬼」は57、59年にNHKとNHK教育テレビで人形劇として放映された。(柴村紀代)

今野賢三 (いのあ) 明26・8・26(昭44・10・18(1893)1969)「小説」秋田県生まれ。小牧近江らの「種時く人」を支えてのち「文芸戦線」派作家として活躍。大正末期、道内誌への寄稿があるほか、大正15年夏来道、函館、小樽、札幌で文芸講演を行った。(小笠原克)

今井泰子 (いまい) 昭8・4・25(1033)「評論、近代文学研究」東京生まれ。札幌西高を経て北大文学部大学院博士課程修了。東京都立三鷹高校教諭、北海学園大学助教授を経て静岡女子短期大学文学科助教授。主要著作に「石川啄木」(日本近代文学大系23)(昭44・12、角川書店)、「石川啄木論」(昭49・4、塙書房)、「石川啄木(鑑賞)日本現代文学6」(昭57・6、角川書店)がある。

今川緑郎 (ながはろ) 明29・3・10(昭50・7(1896)1975)「短歌」山梨県生まれ。晩年を松山管内江差町に過ごす。大正8年、名古屋医大を卒業後、勤務医として北海道に渡る。中央の短歌誌「詩歌」「日光」「橄欖」「層雲」に同人として十余年間参加した。昭和15年函館の「無風帯」に所属して晩年まで作歌を続けた。歌集は「淺葱」の一冊で、他に多

今村忠純 (いむら) 昭17・6・1(1036)「評論、近代文学研究」小樽市生まれ。旭川東高校から立教大学大学院博士課程修。現在宮城学院女子大学教授。「評言と構想」同人。「評言と構想」に岸田国士論を連載。他に山本有三論など、主として近代劇文学に関する論考多数。本道に関するエッセーに、「小松伸六頌」(昭56・6「評言と構想」)や「久保栄」(昭58・7、「別冊国文学」)などがある。昭和60年フランス留学。(日高昭二)

今井保之 (いまい) 昭21・9・27(1066)「児童文学」新潟県生まれ。高校教師。大東文化大学の児童文学サークル

「日光」「橄欖」「層雲」に同人として十余年間参加した。昭和15年函館の「無風帯」に所属して晩年まで作歌を続けた。歌集は「淺葱」の一冊で、他に多

今本 明 (いまもと) 昭28・2・24(1033)「児童文学」十勝管内士幌町生まれ。中学校教師。法政大学鳥越信のゼミで児童文学を学ぶ。卒論に小川未明の「月夜と眼鏡」論を書く。十勝子どもの本連絡会代表。北海道子どもの本連絡会事務局長。雑誌「日本児童文学」に「八

十年代の中学生と児童文学の課題」を発表。集団読書指導など現場の体験に基づき、独自の評論活動を展開する。

(柴村紀代)

井村春光 昭2・2・13 (16) (17) (詩) 満州奉天に生まれる。兄に小説家、劇作家安部公房。札幌医科大学卒。医大在学中に更科源蔵の「野性」に参加、同人となり「至上律」にも作品を発表。のち「野性」編集同人をつとめる。医師。札幌通信病院勤務。

(佐々木逸郎)

入江 旭 大14・3・12 (19) (詩) 東京生まれ。本名木曾義正。昭和21年詩朗読研究会入会。第一回優秀新人演技者。26年来道。高校教師として夕張、倶知安、岩見沢などの転勤先で、詩の朗読実践運動を続ける。58年北海道の風土に根ざした詩集「五番街の舗道にて」(北書房) 刊行、入江旭の筆名となる。35年「だいいある」「日本未来派」を経て「情緒」同人。

(伊東 廉)

入江勉人 昭11・12・21 (19) (俳句) 長野県生まれ。酪農学園機農高等学校卒。書店、肉店など五店舗を経営。昭和29年「芦笛」により句作に入り、「水原帯」を経て、赤城さかえらに師事。休後、46年より古沢太穂に師事して「道標」「北群」同人。50年道標賞。

54年赤旗文化評論文芸賞、55年道標同人賞等受賞。現代俳句協会員。新俳句人連盟幹事。民主文学准同盟員。

(木村敏男)

入江北斗 明20・10・23 (昭54・2・27 (1987・1979)) (俳句) 日高管内えりも町生まれ。本名英一。早稲田中学校に学び、道行、農商務省を経て札幌帝室林野局に勤務。大正13年林野局の職場に熊笹俳句会を興し、牛島藤六の選を受け。昭和21年「はまなす」に創刊より参加。同誌主要同人として活躍したほか「ホトトギス」「若葉」にも所属した。札幌市で死去。句集に「遅桜」(昭52)がある。

(新明紫明)

入江好之 明40・9・4 (19) (詩、児童文学) 小樽市生まれ。本名好行。旭川師範学校本科卒。旭川師範在学中の大正11年詩誌「北斗星」を創刊し二三号まで刊行。大正13年秋山辰己、海老名礼太、坂本路夫、桜井勝美ら旭川師範出身者とともに詩誌「青光」を創刊。「青光」終刊後は「狼」に拠った。ほかに昭和3年までの間に「牽牛」「風車」を刊行し、東海林重一らの「土塊」にも寄稿した。11年第一詩集「あしかび」を刊行。ほかに教子たちの詩集「少年」第一集から第五集の編集にあたった。15年秋から16年1月にわたり特高

の選を経て49年より中山周三に師事。51年度の原始林賞を受賞。昭和23年江別町(当時)内の短歌愛好者に呼びかけて歌会を開き、上京後も原始林東京支社の幹事をつとめた。作歌初期から感受性が豊かで一種の湿潤な抒情を自然詠の中に滲ませたが、中期に、一時口語歌を試作したり、肉親たちの死を契機に長いこと作歌を中断するなどの変遷があった。49年復活後は初期の傾向に陰翳と諦観を加え、写実でありながらそれを超えた思索的な世界を現出している。歌集に「茄子紺」(昭58)がある。(マラソンのテレビの音をわれは消すそのあと選手はただひた走る)

(村井 宏)

岩城之徳 大12・11・3 (19) (近代文学研究) 松山市生まれ。昭和23年日本大学国文科卒。岩見沢高女教諭として来道。滝川高定時代に転勤。25年北大大学院入学、啄木研究を志す。大学院修了後、北星学園女子短大助教。30年大著「石川啄木伝」(東玉書房)を出し、実証的啄木研究の礎を築く。33年日大三高分校に転出。現在日大教授。筑摩版「啄木全集」ほか啄木研究書多数。

(和田謙吾)

岩佐乙丙 大8・4・10 (19) (俳句) 胆振管内虻田町生まれ。本名勝治。旧制東京一ツ橋電気工学校

卒。初め「笛」、のち「壺」、昭和23年「アカシヤ」同人。56年「鶴」同人。30年根室俳句会結成。45年「根室俳壇史」執筆。一時「蟹」主宰。(島 恒人) 岩崎白鯨 明19・5・4 (大3・9・5 (1986・1914)) (短歌) 渡島管内松前町生まれ。本名正。明星「社友」。「紅苜蓿」同人。明治34年青森県第二中学校(現八戸高校)中退。石川啄木来函時の明治40年頃は函館郵便局長。当時、啄木とは非常に親しかった。「紅苜蓿」では最も文学的才能に恵まれていたといわれる。「明星」でも高い評判を得ていたが、大正3年肺結核のため函館で没。享年わずか二八歳。

(福地順一)

岩佐春色 明29・3・20 (昭50・3・27 (1996・1975)) (俳句) 徳島県生まれ。本名幾治。明治41年渡道。農業のかたわら早くより若竹吟社丸山定山の益を受け、青木郭公、牛島藤六に師事。「時雨」「曉雲」「葦牙」「癩祭」「はまなす」などの同人として活躍した。作風は華麗で衆目を集めた。札幌市で没。自宅の庭の句碑(草の実の赤きを沈め療)は子息たちが建立した。

(佐々木子興)

岩田 宏 昭7・3・3 (1932) (詩) 後志管内京極町生まれ。本名小笠原豊樹。東京外国語大学ロシア語科

警察による北海道綴方教育連盟の弾圧検査がおこなわれ、教職を追われて18年満州に渡る。満州で応召。戦後五年間のシベリア抑留生活を経て24年帰国。抑留生活中に執筆した「シベリヤ詩集」草稿は、舞鶴で没収された。帰国後「アジア詩人」「野性」などの同人となり、岩見沢の奥保との二人誌「季信」を創刊し、アンソロジー「日本凍苑」(昭27、岩見沢)の編集委員に参画。31年北海道詩人協会を創立しその事務局長を二〇年間つとめ、「北海道詩集」刊行および「北海道詩書センター」(のち北海道文学館に寄託)の整備にあたった。戦後の詩集に「凍る季節」(昭43)、「花と鳥と少年」(昭51)、「シベリヤ詩集」の一部を収めた「ひとつの歴史」(昭51)がある。北書房を経営し道内詩人の詩集、詩書を数多く上梓した。所蔵文学資料は出身地の市立小樽文学館に寄託した。昭和53年北海道文化賞受賞。日本児童文学者協会員。北書房代表。

(佐々木逸郎)

岩城三郎 昭2・4・2 (19) (短歌) 江別市生まれ。王子製紙江別工場勤務の後、昭和24年上京。札幌商業学校在学中に当時国語教師として在職した中山周三の指導により作歌の道に入る。21年「原始林」創刊時に最年少会員として参加、田辺杜詩花、山下秀之助

(小松珠子)

岩藤雪夫 明35・4・1 (昭50) (小説) 横浜市生まれ。本名佛。早稲田工手学校を卒業して労働運動に近づき、葉山嘉樹の紹介で労芸に参加。昭和2年の本道取材作「売られた彼等」が処女作。翌年12月の「ガトフ・フェグタア」は出世作で、北の海で闘う海上労働者を描いたこの小説は、枝幸に近い海岸に打ち上げられて漁夫に助けられるあたりで結ばれる。ほかに「老朽船」「鷗供養」「蛸狩り記」「吹雪」などの本道取材作がある。

(木原直彦)

岩野泡鳴 明6・1・20 (大9・5・9 (1973・1920)) (詩、小説、評論) 兵庫県淡路島洲本生まれ。本名美衛。明治学院中退後、東北学院に学んで二年間ほど仙台で読書に没頭、生涯の思想の基礎をつくる。明治27年から泡鳴の筆名を用いた。28年竹腰こうと結婚、結婚後養を兼ねて琵琶湖畔に明治32・35年を過ごし、後の札幌放浪の手掛かりにな

つた有竹捨と滋賀県立二中教師として同僚になった。帰京後、「明星」「百合合」などで詩作、詩論に活躍の後、39年以降小説に転じたが、翌40年父死去、家業の下宿屋を引き継ぎ、止宿人増田しも江と愛欲に落ち、小説も認められず、前途を開拓するために樺太でカニの缶詰事業を計画。42年6月樺太に渡ったが事業に失敗、同年8月16日札幌に戻り、有竹の家（北4西7）を拠点に11月6日まで札幌で放浪した。その間、10月3日〜16日は道議田口源太郎の随行者として日高―猿留山道―帯広と馬で旅し、帯広―旭川―札幌と汽車で帰り、「旅中印象雑記」を北海道タイムスに連載した。帰京後、北海道体験を素材として「放浪」（明43・7）を出版、自然主義文壇に独自の地位を確立した。以後、その素材の前後を「断桥」（明44）、「発展」（明45）、「毒菓を飲む女」（大3）、「憑き物」（大7）と書き続け、「泡鳴五部作」として彼の代表作となった。そのうち直接北海道を扱うのは「放浪」「断桥」「憑き物」。ほかに随筆若干。（和田謹吾）

岩淵啓介（いわぶち） 昭7・7・28〜（68）（評論）札幌市生まれ。北海道大学農学部卒。北海道新聞記者。『文学としての資本論』説』『ヘミングウェイ』『老人と海』技法』（ともに「北海道文芸」）

上杉省和（のりかず） 昭14・12・16〜（68）（近代文学研究）浜松市生まれ。昭和38年静岡大学卒。44年に北大大学院博士課程を修了して難道。48年から静岡大学助教授。42年の「有島武郎文学展」開催に尽力。著書に「有島武郎―人とその小説世界―」（昭60・4、明治書院）がある。（木原直彦）

上田互林（のりたけ） 明44・2・19〜昭51・10・1（1911〜1976）〔俳句〕旭川市生まれ。本名義雄。昭和6年旧制旭川中学卒。21年「霧華」創刊と同時に参加、編集を担当する。同年8月秋風主宰に協力して、類書に先んじ「新選季語集」を刊行。「水輪」同人。（後藤軒太郎）

上田寅次郎（のりたけ） 明12・1・27〜大4・12・11（1879〜1916）〔教育〕盛岡市生まれ。作家石上玄一郎の父。ストライキをはかって札幌農学校を追われ、早稲田大学を卒業したあと、札幌で教職につく。極光の筆名で北海道タイムス、小樽新聞に歴史小説などを発表して小説家への夢を求めた。有島武郎の後輩として親交があり、北12条西3丁目の有島邸の隣に住んだこともある。武郎の「死とその後」に「小さき者へ」に出てくる下田さんと氏はこの人物。（木原直彦）

上田 広（のりひろ） 明38・6・18〜昭41・2・27（1905〜1966）〔小説〕千葉県

学）。著書に評論集「塵歟の造形」（昭49）、「豆本」「じゃがいも」等。（鳥居省三）

岩間勢津女（いわませいづな） 大9・11・15〜（1920）〔俳句〕宗谷管内中頓別町生まれ。本名節。主婦。札幌市在住。昭和28年療養中、丸谷松穂子の指導を受け「はまなす」「若葉」に投句。38年「青女」創刊より参加。「青女」「冬草」同人。俳人協会会員。（新明紫明）

巖谷小波（いわたな） 明3・6・6〜昭8・9・5（1870〜1933）〔児童文学、小説、俳句〕東京生まれ。本名季雄。明治期に児童文学各ジャンルを開拓した功績は大きい。晩年は口演童話に熱心で、たびたび来道した。大正2年来道の折に詠んだ（其跡やその血の色を草の花）は、4年五稜郭公園に句碑として建った。10年のときには紀行記「北遊記」があり、その年寿楽碑（渡島当別）に島崎藤村の碑文と共に俳句が刻まれ、大沼公園にも句碑が建った。（木原直彦）

因藤莊助（いんとうさけ） 明40・1・22〜（65）〔詩、評論〕函館市生まれ。小学校高等科中退後、小樽へ転出。貯金支店の雇員、古本屋、貸本屋などの経営を経てプロレタリア階級闘争に一貫した情熱を傾ける。主な詩集に「まじめな成長」「霧の祭」など。（木ノ内洋二）

生まれ。本名浜田昇。高等小学校を卒業と同時に鉄道に勤める。戦時中には火野葦平らと共に「兵隊作家」と呼ばれて活躍した。本道取材作「津軽海峡」（昭32・7、交通協力会）は戦後の代表作で、明治41年から昭和29年までの父子二代にわたる青函連絡船物語である。56年4月に大正出版から新版が出た。（木原直彦）

上田笛夫（のりふと） 大6・5・17〜（1917）〔俳句〕帯広市生まれ。本名正巳。実業学校卒業後、美術工芸家として帯広で自営業「ライオン工房」を創設する。俳句は、昭和6年小学校時代に手ほどきを受け情熱を傾けるが、その同級生に坂口波路がいた。21年より矢田枯柏主宰の「柏」に参加したほか、青木郭公主宰の「曉雲」、古田冬草主宰の「緋衣」、斎藤玄主宰の「壺」などを遍歴していたところ、23年池田町で土岐棟太郎に会い、その知遇を得て24年「アカシヤ」同人として参加。坂口波路と共に、作句、評論等に旺盛な活動を展開した。29年句集「飛雪」を上梓、その序文で棟太郎は「上田笛夫はすぐれた才能の持主である。否才能そのもののような感じだ」と絶賛している。（父といふ一面上の飛雪かな）。27年第一回アカシヤ賞受賞。第二句集「風笛」。（岡澤康司）

う

上坂ヒサ子（のりこ） 大11・5・15〜（1918）〔短歌〕胆振管内早来町生まれ。長年、主に小樽市の小学校の教員を勤める。昭和22年に「新墾」に入社、30年に「潮音」にも入社して歌歴は40年余にもなる。自然詠、生活詠が多く、歌材も身辺、組合の活動、音楽、旅行などと範囲も広く、自己の生活感情を内面的な律動によって映帯させている。47年に歌集「白き旋律」を上梓した。（永平利夫）

上杉勇次（のりゆうじ） 生没年不詳。〔小説〕秋田県出身。大正6年頃釧路へ移住。釧路第二小学校勤務のかたわら詩歌中心の文芸雑誌「砂丘」を創刊。その後札幌へ転住、大通小学校勤務となり、辻義一の後を受け継ぎ「路上」の編集に当たる（大10・5〜大11・4?）。同人には支部沈黙ら七名、維持誌友は二八名。『路上』は垢抜けした同人雑誌であり、内容また当時において充実していたものの一つといえよう」と木原直彦は書いている。（木ノ内洋二）

上田 豊（のりゆたか） 大5・3・21〜（1910）〔短歌〕兵庫県生まれ。大正15年渡道。十勝管内更別村に入植開墾に勤む。農業団体役員、村会議員を務めるかたわら、昭和13年「橄欖」、27年「原始林」「山脈」、29年「鴉族」に入会。「誇張の無い農民としての自分の尊い記録だと信じて作歌を続け度い」（昭36、鴉族合同歌集「凍日」あとがき）のとおり詠風は着実。歌集は「人工融雪」（昭44）、「黄塵」（昭48）、「凍原」（昭52）など。50年度鴉族賞受賞。（村井 宏）

上西晴治（のりはるし） 大14・1・7〜（68）〔小説〕十勝管内浦幌町生まれ。浦幌高等小学校を経て札幌師範付設の小学校准指導養成所に進み、昭和16年に卒業して西足寄の平和国民学校で教員生活に入る。二年後小樽の北海道青年学校水産教員臨時養成所に学び、20年3月に卒業して塩谷村立青年学校に勤めたがすぐ兵隊にとられた。9月に復員し、翌21年4月から増毛青年学校、のち増毛第一中学校に移り、24年に札幌第四中学校に転じた。25年に銭函中学に移り、かたわら札幌文化専門学院夜間部に通った。このころから文学に情熱をおぼえ、文化専門学院の講師で北大大文学部助教授の新聞進一の指導を受けた。26年4月大東文化大文学政学部日本文学科の三年に編入学。

28年3月に卒業。卒業論文に有島武郎を選んだことで岩内の木田金次郎を訪問し、八木義徳の「漁夫画家」(昭27・10、「文学界」)を読んで共感し、小説を書きはじめた。28年から札幌工業高校で国語を教えながら創作を続け、39年7月26日「玉風の吹く頃」で第七回読売短編小説賞に入選。「オコシツの遺品」(昭52・1、「文芸展望」)で52年上期芥川賞候補。「ニシバの歌」(昭52・9、「文芸」)で同期直木賞候補となる。「コシヤマインの末裔」(昭54・10、筑摩書房)で55年の第一四回北海道新聞文学賞を受賞。単行本ではほかに「ポロヌイ峠」(昭46・8、風涛社)がある。

上野新之輔 (神谷忠孝) (1908)「短歌」三笠市生まれ。本名政雄。浜松工専をおえ北炭に入社。大正末期から谷口波人に師事。一時紫草と号した。「創作」「ぬはり」を経て波人没後その門下をまとめ、昭和41年「由紀坐左」を創刊主宰し「万葉集雑観」「植物寸描」を書き続けた。歌風は師波人の叙情性を昇華、新しいリズムを樹立。歌集に「やまみづ集」(昭55)、「鳥が音」(昭57)がある。(横井みつる) 上野山清真 (横井みつる) 明22・6・9) 昭35・1・1 (1889)1960)「美術」江

朗、折館香舟、梅原正らと計って復刊させ、道内アララギ派歌人活躍の場を作った。北海道歌人会幹事の経験もある。実作は、アララギの写実的な生活詠を基調とする詠風である。(田村哲三) 魚住あらた (田村哲三) 明42・1・24) (1909)「短歌」札幌市生まれ。本名新。北海道帝国大学医学部卒。札幌市立病院外科副院長を経て札幌13条クリニック院長。昭和28年から58年まで全国短歌誌「あぢさゐ」の北海道支社長として中心的作歌活動続けた。同誌廃刊後「はしどろ」を創刊しその責任者となる。処女歌集「北溟」に続いて「限りなき蒼」を出版。ほかに専門機関紙への寄稿が多い。(高橋富子) 鶴川童子 (高橋富子) 昭4・1・12) (1908)「詩、小説」札幌市生まれ。昭和24年北海道第一師範学校卒。28年「律動」に参加。続いて32年に「だいたい」38年に「詩の村」に加わる。かたわら詩学研究会に投稿を始め、39年「詩学」新人詩人に推薦される。40年「パターの馬」を創刊。後に道南在住詩人の拠点となったが、49年廃刊。この間43年「核」同人となり現在に至る。一方43年頃より小説も書き始め、44年7月「聖職者たち」で第八回新日本文学賞佳作、45年5月「負の花」で第三回社会新報文学賞を

別市生まれ。大正13年第五回帝展に初入選。以後第七、八、九回と連続特選となり注目された。主として中央画壇で活躍したが、戦災で札幌に仮寓中の昭和20年全道展の結成にも参画、北海道の後進に多くの刺激と影響を与えた。大正4年小説家素木しづと結婚したが、7年しづの病氣により死別した。しづ短編集「青白き夢」巻末の「しづ子の霊前へ」は哀切。随筆集「写生地」(大15・7、中央美術社)がある。東京で没した。(工藤欣弥) 上原紅実 (工藤欣弥) 明25・2) 昭55・5・25 (1892)1980)「俳句」生地不詳。本名実。少年期より兄上原染仙居の指導により作句をはじめた。大正9年栗山に移住、渡辺手寒がいたことから交流を深め、10年手寒と共に「蟻塔」を発行。雑詠は柴田尚曲選、石田雨圃子、比良暮雪、渡辺蒼村ら道内ホトトギス系俳人が参加、神戸、東京、讃岐、紀伊、淡路からも投句が寄せられた。その後「水柱」と改号、手寒、紅実交互に雑詠選にあたる。昭和3年「からす麦」と改題、紅実選となる。6年手寒が「ふる井」を発行したが、同年秋田大竜寺住職として栗山を去り、これを継承した。大正9年以降「ホトトギス」「雲母」を中心に学び、「鹿火屋」「枯野」にも出句した。誠実

受賞。49年8月より11月まで北海道新聞日曜版に「まがり角」を連載。翌50年12月「乗り合い客」が第四回「文学界」新人賞最終候補となるなど、その成果を見せた。著書に詩集「斜塔」「死亡広告」など四冊。北海道詩人協会理事。(山本 丞) 氏家不二雄 (山本 丞) 大8・6・17) 昭45・5・4 (1919)1970)「短歌」三笠市生まれ。北海道大学附属医専卒。北大精神科教室で研究中の昭和21年頃より作歌を始め「新懇」に投稿。22年より「原始林」に入会し、28年まで精力的に作歌したがその後中断。39年一時復活したが、次第に進行した脳萎縮のため死亡した。死後に教室後輩の古屋統の努力により歌集「雪片」が編まれた。心理的な詠風で、心の内面を詠った佳作が多い。(平松 勤) 氏家夕方 (平松 勤) 明40・12・12) (1907)「俳句」空知管内月形町生まれ。本名武。昭和4年伊東月草「草上」により俳句を識る。6年牛島藤六の「時雨」に参加同人。19年吐天「東炎」同人。同年自家小句集「十勝」を発行する。20年村山古郷「べんがら」の同人。同年国鉄深川駅助役。在任中の25年北空知俳句大会を主宰。土岐鍊太郎、細谷源二、長谷部虎杖子、西本一都の各主宰者の来会を

温厚な人柄から道内俳人との交流を深めたが、横浜に転居後昭和20年自宅焼失、俳句資料を失う。(菊地瀧翠) 植村松樹 (菊地瀧翠) 明23・2・16) 昭39・3・26 (1890)1964)「短歌」東京生まれ。大正6年慶応大学理財科を卒業、銀行に勤務したが、後年中学校の国語科教諭となる。窪田空穂に師事し、大正3年「国民文学」に参加した。昭和21年同誌を離れ、「沃野」を創刊し、主宰。歌集「療瘡」ほか数冊。来道は昭和25年8月で、札幌や美唄方面に赴き、若干の歌がある。(中山周三) 植村禎子 (中山周三) 昭10・5・26) (1908)「俳句」札幌市生まれ。本名村上よしえ。昭和31年頃より「氷原帯」に投句。また寺田京子の俳句、原田康子の小説などに影響を受け独自の俳句表現を思考する。40年「粒」同人、その後「海程」(金子兜太代表) 同人を経て、54年より「広軌」(高橋貞俊代表) 同人となる。(辻脇素一) 上村みのる (辻脇素一) 生年不詳) 昭36・9 (1961)「短歌」上川管内中富良野町生まれ。札幌で文房具店自営。「アララギ」会員。昭和28年札幌アララギ歌会編集の「羊蹄」休刊後、作品発表の場として創刊された「あかだも」が一五号で休刊していたのを、29年9月に、村上綾

得て会者八五名の盛会。28年金尾梅の門「季節」同人。30年北海道俳句協会委員。34年「旭鉄俳句作家集」刊行。38年国鉄退職後、41年沢田潤生らと俳句友の会を創り月刊誌「雪垣」を刊行(昭60・3、通巻160号)。42年塩野谷秋風「露華」同人。43年角川源義「河」参加同人。50年俳人協会会員となる。51年11月河叢書第二九集として句集「駅時計」を上梓。56年7月葦芽年次大会を旭川で開催、大会実行委員長を務める。(太田餅吐子) 牛島藤六 (太田餅吐子) 明5・6・24) 昭27・9・11 (1872)1962)「俳句」佐賀県生まれ。本名虎之助。久留米中学校卒業後屯田兵として渡道、上川永山兵村に入植。明治24年鉄道に就職し、大正2年退職。一時自営の事業をしたが失敗、9年北海道庁の吏員となった。13年道庁離職、昭和8年長男家族とともに渡満、一時帰国し11年再び渡満、終戦、引き揚げまで大連に居住した。引き揚げ後は函館に住み、没年まで帯広の五男典義宅に寄寓した。俳句は中学在学中にはじめ、河東碧梧桐、内藤鳴雪に師事。渡道後は同好と語り「白雪吟社」(明32)を興し句誌「白雪」刊行。(明34廃刊)、明治35年には「若葉吟社」を創立、「若葉」を発行したが内紛のため四号で廃刊。39年には「北星吟社」を創り「北星」を発行し

だが、これも水統せず四号で廃刊となつた。明治末期より大正にかけ、いわゆる碧梧桐らの提唱による新傾向俳句に危惧を抱くようになり、また俳壇革新の狼煙を上げた臼田亜浪の「石楠」創刊などに刺激され、本道俳壇に一石を投じようとして、札幌で「時雨」を創刊した。当時全道的な俳誌の出現を渴望していた本道俳人たちは挙げてこれに参加し一大勢力をなした。膝六はつとに北方風土に密着した作品を提唱、自らも道内隈なく足跡を遺し千島にも渡りその主張を喧伝した。しかし「時雨」の発行は事、志と違ひ遅刊休刊の連続で大正15年末から昭和5年までの四年間は全く休刊。昭和6年長谷部虎杖子らの編集担当によりようやく復刊、「時雨」に遅れて発刊された「曉雲」とともに本道の二大俳誌としての地歩を固め俳人の育成に貢献、その後順調に発行された。膝六は渡満後の12年「時雨」退陣を表明。「時雨」は虎杖子らにより「葦牙」と改題継承された。引き揚げ後は第一線には出ず帯広で病没。「牛島膝六句集」は52年山岸巨狼編で遺句集として発刊。句碑「草枕宵々に春の月ありて」(渡島知内)。(佐々木子興)氏本土筆 大10・昭14(1921・1939)「俳句」旭川市生まれ。本名充。昭和10年から「南柯」で作句。12年「海

つらら垂り凍る光の七色に映ゆ(叶 桶夫) 臼田亜浪 明12・2・1・昭26・11・11(1879~1951)「俳句」長野県生まれ。本名卯一郎。明治37年苦学のすえ法政大学卒業。電報通信社政治部担当。42年やまと新聞編集長。大正4年俳誌「石楠」創刊。これは大須賀乙字の援助による。俳壇の革新を念として縦横の批判をあえて行い、そのため「ホトトギス」「海紅」その他の人々と疎遠する。乙字の復古論、季題象徴論、二句一章論に影響されつつ俳句にまなぶ心をまことに求め、自然感、一句一章の自説を確立する。7年感情上の内紛のため、乙字と分かれる。亜浪に学ぶ者はこのほか佐野良太、原田種茅、大野林火、八木絵馬、篠原梵、甲田鐘一路らがいる。13年1月3日より22日まで一回目の渡道。札幌、網走、斜里、本別、滝川、門別、浦河、苫小牧等で指導。その時「今日も暮れる吹雪の底の大日輪」の作品がある。二回目は昭和11年8月、樺太の帰りに、稚内、旭川、札幌、帯広等で句会をもつ。その頃「北海道石楠連盟」が設立され、竹田凍光が機関誌「北光」を帯広より発行。当時の主な門下は、凍光のほか、新田汀花、堀川牧韻、有坂赤光車、山岸巨狼、一原九糸、後に久保洋青、宮部鳥

賊」の創刊に参加。翌13年「プリズム」同人となり、新興俳句の旗手として注目されたが、肺患のため一八歳で夭折した。(園田夢蒼花)

薄井うめ 大8・8・10(1916)「短歌」神奈川県生まれ。本名ウメ、旧姓石川。戸塚高等女学校在学中より作歌に親しみ、「女学雑誌」「令女界」等に投稿、木下利玄の歌風に惹かれる。昭和17年薄井忠男と結婚し18年渡道、小樽市に居住。一男一女をもうけるが、42年長男の夭折、50年夫の病死に遭う。33年「北海道アララギ」に入会。51年には夫の興した「宇波百合」に加入。「アララギ」に拠った。作風はアララギの写生を基調とし、日常の感動をこまかに掬い取るもので、生の詠嘆をにじませつつ観入を深めている。56年より執筆の回想録「宇波百合」連載も、その歌境と軌を一にしている。また52年亡夫の遺歌集「白日」(白玉書房)を編み、56年同じく論文集「近代短歌史論考」(桜楓社)を世に送った。(枯らしては買ふおじぎ草の葉を撫つる在りて遊びし夫まぼろしに) (叶 桶夫)

臼井千吉 昭8・8・4(1933)「俳句」美唄市生まれ。本名文男。細谷源二に師事。職業としての時計師を題材とした境涯俳句の秀句を次々

集、川端麟太、山田緑光ら。主な著書に「定本亜浪句集」(昭24)、「俳句文学全集」(昭13)などがある。(山田緑光)

宇多治見 昭4・11・24・昭31・1・6(1929・1956)「小説」茨城県生まれ。本名宮田行雄。早稲田大学仏文科卒。北海道新聞記者。「北海文学」に自伝風の長編小説「死の誕生」第一部を連載(昭30・3・31・2)、最終回掲載の1月に鉄道自殺した。「宇多治見全集」全三巻(昭32、北海文学同人会)は、小説、日記、書簡も収録し、衝撃的な若い思索者の生涯の全貌をうかがい知ることが出来る。(鳥居倉三)

打木村治 明37・4・21(1907)「小説」埼玉県生まれ。本名保。早稲田大学経済科卒業。昭和12年の「支流を集めて」で農民作家としての地歩を固めた。長編小説「酪農」(昭19・2、錦城出版社)は道東を舞台にした酪農物語である。(木原直彦)

内田 亨 明30・8・24・昭56・10・27(1897~1981)「エッセイ」、動物学研究」浜松市生まれ。東京大学理学部動物学科学卒。昭和4年から二年間、ドイツ、アメリカに留学。帰朝後北大理学部に勤務。26年定年退職。北大名誉教授。著書に「回想の札幌」(ぶやら新書)がある。(神谷忠孝)

「水原帯」誌上に発表し注目を浴びる。昭和54年源二の死後モダニズムを俳句に取り入れた句集「遙かの午後」を刊行。「水原帯」の編集に携わり中心の作家として活躍。俳句鑑賞、評論でも健筆をふるい、その説得力には定評がある。(川端麟太)

薄井忠男 大9・7・8・昭50・4・29(1920~1975)「短歌」横浜市生まれ。国文学者。法政大学高等師範部在学中の昭和17年「アララギ」入会。18年小樽市高等女学校に教職を得て渡道、21年樋口賢治の「羊蹄」に参加。22年北大法文学部文学科に入学し、26年に同大学院を修了。29年北海道学芸大学(当時)助教、43年教授となる。専攻は近代文学。近代短歌への論究は「斎藤茂吉論序説」(47年、桜楓社)、「近代短歌史論考」(56年、同)に結実。近代短歌を文学史に定位させた稀少の研究者であった。戦後、断続した作歌は30年の「北海道アララギ」入会により再開、39年には勤務する大学に宇波百合短歌会を結成し、多くの青年歌人を育てた。歌風は、リアルな把握の中に新鮮な感受が光り、生活事実を支点に時代にかかわろうとする態度に貫かれている。遺歌集「白日」(52年、白玉書房)がある。妻うめもアララギ派歌人。(はだか木の枝に小さき

内田豊和 昭2・3・30(1925)「詩」上川管内鷹栖町生まれ。北海道大学国文学科卒。「新詩人」「現代詩研究」「詩芸術」などの同人を経て北海道詩人協会会員。昭和27年詩集「雪炎の歌」を出す。私家版作品数一三四編。柏倉俊三に依れば「これは、いわば北海道の自然風土風物の中に育った青春の歌である。敗戦後の虚脱の泥に塗られず解放感を基底に踏まえて、ものおじもせず、のびのびと青春の心情が抒べられている」。(瀬戸哲郎)

内田 弘 昭18・2・3(1943)「短歌」札幌市生まれ。札幌東高校を経て昭和39年北海道学芸大学(現教育大)岩見沢分校在学中、指導教官のアララギ派歌人、薄井忠男に導かれ、笹原登喜雄、鈴木隆之らと宇波百合短歌会創立に加わる。同年「北海道アララギ」に入会、40年「アララギ」に入り、樋口賢治らの選歌を受ける。卒業後、千歳市、当別町、札幌市の教員を勤めながら「宇波百合」(季刊、46年創刊)の発行に尽力、同誌を拠点に旺盛な作歌、批評活動を展開している。歌風は薄井忠男唱導の(個から全体への抒情)をめざし、初期の主情傾向から、組合活動等の現実によれ、土屋文明のリアリズムに親近し、時として破調のかたちで生活に根ざしつつ時代

をとりこんでゆく方向にある。(袖口を
チョークに汚し集まれる君らに向かひ何
オルグせむ) (叶 楠夫)

内村鑑三 鑑三 文久元・3・23(昭
5・3・28 (1861~1930)〔宗教〕東京
生まれ。厳格な儒教の教育をうけたが、
明治10年札幌農学校に入学してから一期
生の伝道をうけ熱心なキリスト教徒とな
る。卒業後官吏として水産調査に従事し
たが17年辞し渡米、アマリスト大学、ハ
ートフォード神学校に学び21年帰国。24
年第一高等学校の講師在任中、教育勅語
に敬礼しなかったという「不敬事件」を
起こし職を追われた。30年万朝報の記者
となるが日露戦争に際し非戦論をと見え
退社。その後は雑誌「聖書之研究」およ
び無教会主義に基づく聖書研究会でキリ
スト教の伝道に努めた。「日本とイエス」
につかえることを念願する無教会主義
は、キリスト教史上、世界的にもユニ
クなものであり国木田独歩、有島武郎ら
はじめ当時の青年に大きな影響をあたえ
た。「基督信者のなぐさめ」「余は如何に
して基督教徒となりしか」「代表的日本
人」などの著書がある。(西村 信)

内村剛介 剛介 大9・3・12(16
85)〔評論、ロシア文学研究〕栃木県
生まれ。哈爾濱学院卒。昭和20年から31
年までソ連に抑留。帰国後職を転々と

し、商社入社後執筆活動に従事。48年か
ら52年まで北大教授。現在上智大学教
授。著書に「呪縛の構造」(昭41、現代
思潮社)、「わが思念を去らぬもの」(昭
44、三一書房)、訳書に「エーニン詩
集」(弥生書房)、トロッキ「文学と革
命」(現代思潮社)などがある。
(神谷忠孝)

内村直也 直也 明42・8・15(16
88)〔劇作〕東京生まれ。本名菅原実
慶広。大正24年ラジオドラマ「え
り子とともに」を書き、主題歌「雪の降
る街を」がヒット。根室出身の飯田三郎
作曲で「釧路の乙女」「風蓮湖」「赤い小
樽の灯が見える」などを作詞した。
(八重樫実)

内山茂枝 茂枝 明39・9・4(16
86)〔俳句〕十勝管内豊頃町生まれ。
本名完二。昭和26年以来紙業一筋の道を
歩み、俳句は一八歳のとき釧路の中山茶
紙店主の可祝によって芽生える。20年早
川観谷の「翰墨」廃刊後、「柏」矢田枯
柏に協力して創刊。23年「北海道俳句」
を同志と創刊。また十勝文化協会を早川
観谷と結成。45年十勝俳句連盟を提唱し
て結成。三浦徹人没後二代目会長をつと
める。47年「樺の芽」を同志と創刊主宰
し、「伝統をふまえ風土に生きる証を詠
う」を指標とする。56年幕別温泉に同志
記がある。
(木原直彦)

宇野浩二 浩二 明24・7・26(昭36
・9・21 (1931~1961)〔小説〕福岡市
生まれ。本名格次郎。早稲田大学中退。
大正8年「苦の世界」で新進作家として
の位置を確立。代表作に「子を貸し屋」
など。「赤い鳥」を主舞台に多くの童話
を書いたが、「神様をうしなう話」(「露
の下の神様」と改題)、「春を告げる鳥」
「あるアイヌじいさんの話」は本道のアイ
ヌ民族に取材した作品で、宇野童話の
代表作に数えられる。
(木原直彦)

宇野親美 親美 明28・9・15(昭43
・7・2 (1895~1968)〔国文学研究、
随筆〕松山管内瀬川町生まれ。大正11年
東京大学国文学科卒。水戸高校教授、13
年北大予科教授。昭和20年北大予科長、
24年退官後藤女専、短大、同大教授。43
年札幌市政功労者。昭和のはじめ宇都野
研の「勁草」で作歌。専攻は古代から近
代、現代文学まで造詣深い。その随筆は
人生的な滋味に溢れ、道新連載の「朝の
食草」(昭34)や、没後の「宇野親美遺
稿」がある。
(中山周三)

宇野千代 千代 明30・11・28(1897

と「十勝俳句村」をつくる。53年に句集
「瞑想」(和綴じ、B5判)刊行。(へっ
し)と新わるとかち鮭遊る)
(佐々木露舟)

宇野野研 野研 明10・11・14(昭13
・4・3 (1877~1938)〔短歌〕愛知県
生まれ。本名は研。東京帝国大学医学部
卒。小児科医。大正6年佐佐木信綱に師
事。昭和4年「勁草」を創刊、主宰。歌
集数冊。大正15年より昭和初頭にかけて
北大短歌会とも交流があり、その札幌支
社もつくられた。三児を北大に学ばせ、
山縣汎を女婿に迎えている。その本道詠
は歌集「木群」等に収録されている。
(中山周三)

内海圭子 圭子 昭20・2・18(194
9)〔詩〕網走市生まれ。昭和38年八雲
高校卒。同高校事務職員。41年北海道新
聞「わたしの詩」(小柳透選)への投稿
を契機に詩作を始める。42年「パターの
馬」に参加。のち、49年の「帆 page」
創刊に加わり現在に至る。詩集に「蒼ざ
めた日常のなかで」(昭45、パターの馬
の会)、「炎える午後からとおく離れて」
(昭49、帆の会)がある。北海道詩人協
会員。
(山本 丞)

有土健介 健介 昭26・12・1(19
51)〔詩、評論〕胆振管内白老町生ま
れ。本名谷口孝男。北海道大学国文科

卒。北海道新聞社勤務。詩集「悲歌と断
章」(昭53、冥契社刊)、評論集「陥穽の
中の近代」(昭59、黎文学会)、「思想
の要諦・文学の構想力」(黎 34号)。
(神谷忠孝)

宇野清水 清水 大7・11・9(191
8)〔俳句〕網走市生まれ。本名甫。昭
和8年頃俳句を始め、「ゆく春」「アカシ
ヤ」「葦牙」「水原帯」等に在籍各同人。
現代俳句協会員。女満別俳句会長。女満
別文化連盟より奨励賞受賞。農協理事。
(太田緋吐子)

宇野玉葉 玉葉 明35・4(昭59・
1・22 (1902~1984)〔俳句〕福井県生
まれ。本名秀雄。新聞記者はじめさまさ
まな職業で波乱に満ちた境涯を送る。俳
句は「高潮」に拠り、服部咄石没後は
「春灯」「鶴」にも投句、昭和16年「葦
牙」に入り同誌編集同人として重きをな
した。41年「河」の角川源義に傾倒。44
年河叢書として句集「秋風帖」を刊行。
北辺の厳しい風土を生き抜いてきた詩精
神を貫く作品五百余句収載。
(佐々木子興)

宇野鴻一郎 鴻一郎 昭9・7・25(1934)
〔小説〕札幌市生まれ。本名
鶴野広澄。父の転勤で満州に移り、敗戦
後に引き揚げて福岡に住む。東京大学国
文科卒業。「鯨神」(昭36・7)、「文学

界)によって芥川賞を受賞。中間小説
(性風俗)の流行作家となった。本格的
に本道を舞台にした小説はまだないが、
「千石漁場・名残りの浜鍋」という紀行
記がある。
(木原直彦)

の伝統詩型にもちこみ、近代の心象歌を作るため、苦渋の中で道を探りあて一流を確立した。その詩魂の冴えは短歌を小説、近代詩の領域に近づけたといえる。38年「浅紅」創刊主宰、43年来道、阿寒、然別、知床を回る。54年北海道歌人会二五周年に來道講演。第七歌集「白い風の中で」読売文学賞受賞。歌集一九冊。大津皇子、和泉式部、額田王など著書、入門書多数あり。毎日新聞歌壇選者、NHK婦人百科など多方面に活躍。〈実ごもりしくるみが夜も落つる音ききゐる闇のわたくしひとり〉(矢鳥京子)

梅沢和軒 明4〜昭6・1・4 (1871〜1931)「美術評論」金沢市生まれ。明治30年に東京専門学校文学科を卒業して美術評論家として立ち、特に南画の研究家として著名であった。34年に伊東正三(山華)の発行した北鳴新報で文芸評論を展開し、41年に刊行された山本露滴の歌集「金盃」に序文を寄せ、北方文学について論じた。(小野規矩夫)

梅津 齊 昭11・5・23 (1936)「劇作」稚内市生まれ。北海道学芸大学卒。劇団四季浅利慶太の助手を経て北海道四季代表。昭和42年から54年まで劇団風車を主宰。「新創作」同人。「新創作」一〇号に戯曲「ある夕方」、一二、一四号に「梶井基次郎」、ほかに「壁」

え

江口 逸 明20・7・20 (1887〜1976)「小説」評論 東京生まれ。四高時代、父と衝突して北海道を放浪。五高に転じ、東京大学英文科を卒業直前に退学(大6)。漱石山房で芥川らと親交を結ぶ。昭和期はプロレタリア文学運動の中枢部で活躍。著書に「わが文学半世紀」「たまたかの作家同盟記」等。民衆芸術論のさなかで書いた「労働者誘拐」(大7)は、車中で北海道の監獄部屋に売られかけた青年の運命を照らし出した力作。(小笠原克)

江口源四郎 大6・10・7 (1917)「短歌」新潟県生まれ。国鉄運転高等部卒。動力車指導。旭川機関区、鉄道学院でディーゼル機関車講師。昭和15年「香蘭」、17年「多磨」、21年「あさひね」。28年「コスモス」創刊参加。第一部会員。27年「あさひね」編集委員となった後、小林孝虎と共に「北方短歌」を創刊し、その三〇年の経営にすべての情熱を傾け、今日の「北方短歌」

「くちをろみゑな あんめるよ」などがある。(西村 信)

梅田昌志郎 昭2・12・10 (1905)「小説」札幌市生まれ。本名芳朗。北海道大学文学部大学院中退。「札幌文学」同人。「新日本文学会」にも一時所属。「中央公論」に「海と死者」「亀裂」を書き、前者で第五回中央公論新人賞を受賞。現在法政大学講師のほか「文芸」誌上で同人雑誌評を担当。また翻訳書も多く「ロレンス短編集」「ガリバー旅行記」「反対尋問(ウエルマン)」「(旺文社文庫)などがある。(小松 茂)

浦 聖子 昭12・10・15 (1905)「児童文学」根室市生まれ。本名久野聖子。日本児童文学者協会会員、「原野の風」同人。昭和59年童話集「花びらゆうびん」を自費出版。他にジョン・パチラーを扱った「ランプの神様」などがある。(柴村紀代)

瓜生卓造 大9・1・6 (1907)「小説」神戸市生まれ。東京府立五中在学中の昭和8年春に父が札幌鉄道局長となり、札幌一中の二年に編入学した。10年春のとき東京に転じ、18年に早稲田大学政経学部を卒業。早大時代にスキー部員として活躍する傍ら葛西善藏などの作品で文学の目を

を育てあげた。36年超結社である「旭川歌人会」を結成してその代表となり、春の芸術祭の実行委員長として活躍。また58年からは「北海道新聞歌壇」の選歌を担当。著書には、48年1月歌集「扇形車庫」を東京柏葉書院(コスモス叢書)、56年「万葉ひとりある記」を出版。歌集「扇形車庫」にこめられた歌は北の指標であり、北の視点でもある。(指揮車より伝声管を響きくるわびしきものは人の声なり) (小林孝虎)

江口 棧 大3・3・24 (1914〜1976)「詩、小説」大分県生まれ。本名新一。明治大学卒。地の塩の箱運動の提唱者。昭和24年ころ来道して今井鴻家らと交友を結ぶ。その後26年から一年間、伊達高校で教壇に立った。私小説的短編「オルゴール」(昭30・7、「別冊小説新潮」)はその所産。(木原直彦)

榎本梅谷 明43・10・15 (1910〜1983)「俳句」十勝管内幕別町生まれ。昭和18年以來幕別町役場史員、助役。俳句は父鳴海に学び「石楠」に参加。47年「樺の芽」内山筏杖主宰、創刊に参加。52年「琅玕」の岸田稚魚に師事。56年幕別温泉に十勝俳句村づくりを提唱、地元句会の主軸となる。俳人協会会員。59年遺子らにより鳴海、甞炎

開かれる。28年の「金精峠」によって認められ、のちの小説で芥川、直木両賞の候補にのぼった。「銀嶺に死す」などの著書を持つが、山岳小説に新分野を拓き、男性的で硬質な探検ものの伝記小説家として定評がある。本道取材作も多く、「遠い湖」(昭33、明文堂)、「流水」(昭35、雪華社)、「針葉樹林」(同、明文堂)、「雪の軌跡」(昭46、「スキージャーナル」)、「間宮林蔵」(昭49、山と溪谷社)、「雪の幻影」(昭51、毎日新聞社)などの長、短編集がある。郷愁の町と呼ぶ札幌に因むものとして「札幌という町」(山と溪谷社)、「札幌オリンピックク12章」(至誠堂)があり、「日本山岳文学史」(毎日新聞社)という大著もある。(木原直彦)

運上巨子 昭15・4・30 (1900)「小説」小樽市生まれ。本名坂本日子。昭和20年から28年まで砂川で暮らす。新潟県を経て39年3月に早稲田大学を卒業したが、在学中より創作をはじめ、55年7月「ぼくの出発」で第二回新潮新人賞を受賞。「北海の村」(昭55・7・3、北海道新聞)で本道生活を回想。(木原直彦)

と三者の遺句集「福寿草」発刊。(佐々木露舟)

榎本武揚 天保7・8・25 (1836〜1908)「政治」幕臣の子として江戸に生まれる。たけあきともいう。通称釜次郎、梁川を号す。オランダ留学後海軍奉行、海軍副総裁となる。明治元年新政府に反抗し、旧幕軍と五稜郭に立てこもる。のち許されて開拓使出仕、ロシア公使、通信大臣、文部大臣、外務大臣、農商務大臣等を歴任。久保栄、子母沢寛、安部公房等、武揚を描いた小説が数多い。(永田富智)

江原光太 大12・2・22 (1903)「詩」旭川市生まれ。旭川中学夜間部中退。昭和23年新日本文学会員、旭川勤労文化協会文学部常任。その後療養生活に入り、国立旭川病院「旭病文芸」、旭川赤十字病院「緑蔭」、勤医協厚賀診療所「ひだか」、国立札幌病院「ぐるっぺ」などの文学サークルを組織。「旭川文学ニュース」、第三「北方文学」編集人。「風土」「先列」「詩の村」会員。詩集は「氷山」(昭32)、「移民の孫たち」(昭34)、「狼・五月祭」(昭41)、「穴」(昭45)、「吃りの鼻唄」(昭49、第8回小熊秀雄賞佳作)、「貧民詩集」(昭54)、「ゲジゲジ・ノ歌」個人誌「ろーとるれん」が第九号で終刊後「猪呆亭通

「信」発刊。朗読詩運動に参加。昭和54年から大島竜、嵩文彦、林美脈子、矢口以文、米山将治、佐藤孝、堀越義三らと「詩の隊商」北へ!!」を組織。戦前は旭川新聞、北海道新聞旭川支社編集部勤務。戦後は札幌で業界紙・誌を編集。創映出版代表。(矢口以文)

海老名礼太 明39・7・4、昭32? (1905?) (詩) 後志管内美国町(現積丹町)生まれ。某日行方不明となる。北海道詩人協会理事。旭川師範学校一期生として初代文芸部創立者(当時は雑誌部と称した)で、全国の同人誌との交流が幅広く行われていた。卒業後函館市に赴任、函館の文芸運動に一時期を画する程の活動をし、昭和6年に「北海道詩人協会」名の詩人集一冊を刊行したが、その活動は全道への広がりにはならなかった。11年「北海道綴方教育連盟」の事件に連座して、思想的には左翼とは縁ない詩人教育者でありながら退職を余儀なくされ、17年満州ハルビンの女学校教師として赴任した。終戦後中国側に徴用されて教育界に復帰。北海道へ帰って後志管内に復職、俱知安からさらに山中の単級小学校長となり、のちに蘭越町の小学校長となり間もなく行方不明となった。原因は、失踪宣告の出された今も多くの疑問が残されているが、内面の苦悩

お

及川蛇冬眼 明38・3・18、昭59・1・2 (1905-1984) (俳句) 紋別市生まれ。本名慶治。昭和2年牛島藤六の「時雨」に入会。一貫して「葦牙」長谷部虎杖子、山岸巨狼に協力。教員1年退職後、遠軽町文化連盟会長に就く。50年教育功労賞受賞。(太田緋叶子)

及川 登 昭7・7・6、(63) (詩) 登別市生まれ。室蘭栄高等学校卒。小学校教員。詩誌「形象」「青芽」を経て現在は「パンと薔薇」編集人(創立同人)。昭和42年道詩人協会員になり、45年第一詩集「水雨」を出版、47年「木星」同人。抒情的な詩風だが、精神の流転を水の姿に定め瞑想の世界を求めている。室蘭では市民文芸の選考委員、編集委員長。戦後詩史年表作成も手がけ幅広く活躍している。(光城健俊)

及川 均 大2・2・1、(163) (詩) 岩手県生まれ。岩手師範学校卒。小学校教員を経て、戦後出版社編集員。昭和10年「北方」後、「岩手詩壇」

と多くのトラブル解消をはかるための消失と考えられる。戦前から刊行していた「北方の詩」は、帰国後も続けられていた。このプリントの同人誌に海老名はあらゆる熱意をかけていた。旭川時代の同人誌に「オリオン」「青光」などが記録される。詩集は戦前函館で「蟹の情熱」「薔薇色の掌」を刊行して全国的に知られた。31年7月発足した北海道詩人協会の設立準備会には27年以來出席して尽力した。(入江好之)

江見水蔭 明2・8・12、昭9・11・3 (1888-1934) (小説) 岡山市生まれ。本名忠功。称好塾で巖谷小波、大町桂月と知り合い、尾崎紅葉の硯友社同人となる。明治38年3月から二六新聞に連載した「海賊の子」は宗谷岬が発端の物語。上巻は同年10月、下巻は翌年5月に隆文館から出版された。晩年には講演と揮毫の旅行を続けたが、北海道には昭和4年と7年の二回来ている。「水蔭行脚全集」第三巻(昭8・5、江水社)に収めた「北海道暑中行脚」「北海道寒中行脚」に詳しい。(木原直彦)

遠藤勝一 明28・2・13、(1885) (短歌) 仙台市生まれ。長く北海道拓殖銀行に勤務。大正中期、札幌本店時代に少年期の島木健作を知り、歌誌「オリープ」に計五首発表の機を作った。「風底」「熊」「白亜紀」を創刊。「日本未来派」同人に参加し、活発な作品活動展開。日本未来派より「第十九等官」「夢幻詩集」「焼酎詩集」を刊行。詩集「横田家の鬼」「燕京章」「及川均詩集」「土井晚翠賞」、「海の花火」など。童話集「北京の旗」。(八森虎太郎)

扇畑忠雄 明44・2・15、(1911) (短歌) 国文学者。満州旅順生まれ。東北大名誉教授。昭和5年「アララギ」入会。中村憲吉、土屋文明に師事。21年東北アララギ会より歌誌「群山」を創刊、編集発行人となる。合同歌集「自生地」(昭25)、「不同調」(昭26)、歌集「北西風」(昭25)、「候鳥」(昭27)、ほか万葉集、近代短歌に関する評論が多い。21年「羊蹄」に参加し、以後たびたび来道。仙台市在住。(笹原登喜雄)

逢坂信志 明15・9・9、昭56・1・7 (1882-1981) (宗教) 新潟市生まれ。新潟中学校を経て明治33年札幌農学校入学。42年に昇格した東北帝国大学農科大学卒業。清冽な学究生活を送る。「クラーク先生評伝」「黒田清隆とホールズ・ケブロン」「ウアルト・ホイットマンを語る」「クラーク精神とカール・イル哲学」などの著書がある。

逢坂美智子 昭17・4・20、(木原直彦)

た。歌集「林檎の花」(大11、新潮社)は青年時代の伊藤整を感動させ「若い詩人の肖像」にも作品が掲出された。母の親佐は有島武郎の長男行光(森雅之)の産婆さん。北見支店当時、同地方の文学圏内で活躍。(小笠原克)

遠藤隆子 昭9・12・5、(1885) (詩) 根室管内別海町生まれ。高田敏子主宰「野火」の同人、河邨文一郎主宰「核」同人。詩集に「木洩れ日」(昭43・3、野火の会、東京)、「影」(昭56・10、北海道詩人社、江別市)がある。(小松瑛子)

遠藤秀子 昭4・3・7、(1889) (短歌) 兵庫県生まれ。神戸山手女専国文科卒。昭和24年恩師小島清の「ボトナム」に入会、現在同人。43年同人誌「素」に参加したが同誌解散後57年醍醐志万子らと季刊誌「風景」を創刊。歌集は42年11月初音書房より「風なき湖」を出版、以後56年4月に歌と写真集「光・影」、57年3月島尾敏雄の序文による「冥王星」(雁書館)を刊行。やや醒めた情念に特色がある。(増谷竜三)

(1923) (児童文学) 赤平市生まれ。美唄南高校卒。日本児童文学者協会会員。「青い旗」「原野の風」「ひらく」同人。長編「トンネルのむこうがわ」で北川千代賞佳作受賞。「三角天井の夏休み」は「北海道児童文学全集」三巻に収録。(坪谷京子)

近江ジン 明23、昭40・2・17 (1890-1965) (料亭経営) 函館市生まれ。一七歳のとき実母を頼って釧路に来、料亭しやも寅の抱え芸妓となる。のち釧路の旅館近江屋の女将となり昭和37年11月2日釧路を去って東京に住む。40年南多摩郡多摩町の老人ホーム一望荘附属病院で没する。小奴と名のつた芸妓時代、石川啄木と懇意になり、多くの歌のモデルとなった。釧路市南大通三丁目近江屋旅館跡に「小奴の碑」がある。(鳥居省三)

近江道子 大4・1・6、(1919) (短歌) 東京生まれ。山梨県立甲府高等女学校卒業後、昭和34年渡道、十勝管内清水町に在住。「明日香」「鶉苑」「人民短歌」「砂廊」を経て「原始林」(昭37)、「鴉族」(昭38)に入会。43年北海道歌人会賞、52年鴉族賞をそれぞれ受賞。(村井宏)

大磯ひろし 大7・1・15、(1918) (俳句) 札幌市生まれ。本名

博三郎。会社員。昭和17年「葦牙」により作句。のち、栗木重光の狭霧句会を経て戦後「踏青」「土曜」「零」に参加。54年より「これ」「広軌」同人。句集に「往還（昭27）」がある。（園田夢蒼花）
大内 基（おおいち） 明39・9・22（168））「評論」日高管内えりも町生まれ。横浜高商（現横浜国大）卒。函館毎日新聞を経て昭和10年北海タイムス（現北海道新聞）社入社。25年から一〇年間論説主幹を歴任、39年退社。46年から53年まで北海道労働金庫理事長。（木原直彦）
大江健三郎（おおいけんざう） 昭10・1・31（1935））「小説」愛媛県生まれ。東京大学仏文科学士のとき「飼育」（昭33）で芥川賞受賞。以後「われらの時代」「政治少年死す」「運れてきた青年」「個人的な体験」「万延元年のフットボール」「洪水はわが魂に及び」などの長編、「厳粛な綱渡り」ほかのエッセーで現代文学の最良の最前線に位置し続ける。鯨の去った礼文島に取材し独自のイメージを織りなして現代の伝説を創造した「青年の汚名」（昭35・6、文芸春秋新社）がある。（小笠原克）

大江賢次（おおいけんじ） 明38・9・20（1189））「小説」鳥取県生まれ。小学校卒業後、日雇いなど貧困の生活を送り、左翼思想の洗礼を受け、労働者や農民を描いた。昭和5年8月「改造」より北海道へ派遣され「網走監獄通信」（昭6・11）を書く。12年北海タイムスに「曠野涯なく」を連載。カムチャツカの鮭の缶詰工場に働く人々を描いた「鮭と共に」（昭13・10、「新潮」）は、北洋漁業を写した小林多喜二「蟹工船」と好一対をなす力作。昭和5年の北海道旅行から得たものといわれ、代表著書「移民以後」（昭14・1、新潮社）に収める。（木原直彦）
大江満雄（おおいみつお） 明39・7・23（1189））「詩」高知県生まれ。はじめ表現派の影響をうけ、詩誌「文芸世紀」「野獣群」を出し、昭和3年詩集「血の花開く時」を出す。のちプロレタリア文学運動に参加、「歷程」に加わり、札幌青磁社の詩誌「至上律」の編集委員に参加し、昭和22年の冬、トラビスト修道院を訪れ札幌に至り、29年詩集「海峡」の中の「ツガル海峡で」「チミツプ」等は、そのときの旅の所産である。（史科源蔵）
大岡 信（おおおかののぶ） 昭6・2・16（1192））「詩、評論」静岡県生まれ。東京大学国文学科卒。明治大学教授。詩集「記憶と現在」（昭31・7、ユリイカ）でそれまでの戦後詩にない知性と感性のみみずしい躍動を見せた。昭和31年「今日」同人、34年吉岡実らと「鰐」創刊。

大久保正（おおくぼのただし） 大8・9・21（昭55・9・1（1919）-1980））「短歌」新潟県生まれ。国文学者。昭和18年東京帝大国文学科卒。東京外語大を経て、33年北大文学部助教授、41年同教授。47年国文学資料館教授として東京に転出。古代文学専攻で、本居宣長全集編纂や万葉関係の著書が多い。歌は尾山篤二郎の「芸林」に所属、純情で真挚、時に飄逸なものがあ

大久保正全歌集（昭56）刊行。
大久保正（おおくぼのただし） 大8・9・21（昭55・9・1（1919）-1980））「短歌」新潟県生まれ。国文学者。昭和18年東京帝大国文学科卒。東京外語大を経て、33年北大文学部助教授、41年同教授。47年国文学資料館教授として東京に転出。古代文学専攻で、本居宣長全集編纂や万葉関係の著書が多い。歌は尾山篤二郎の「芸林」に所属、純情で真挚、時に飄逸なものがあ

大久保正（おおくぼのただし） 大8・9・21（昭55・9・1（1919）-1980））「短歌」新潟県生まれ。国文学者。昭和18年東京帝大国文学科卒。東京外語大を経て、33年北大文学部助教授、41年同教授。47年国文学資料館教授として東京に転出。古代文学専攻で、本居宣長全集編纂や万葉関係の著書が多い。歌は尾山篤二郎の「芸林」に所属、純情で真挚、時に飄逸なものがあ

た。昭和5年8月「改造」より北海道へ派遣され「網走監獄通信」（昭6・11）を書く。12年北海タイムスに「曠野涯なく」を連載。カムチャツカの鮭の缶詰工場に働く人々を描いた「鮭と共に」（昭13・10、「新潮」）は、北洋漁業を写した小林多喜二「蟹工船」と好一対をなす力作。昭和5年の北海道旅行から得たものといわれ、代表著書「移民以後」（昭14・1、新潮社）に収める。（木原直彦）
大江満雄（おおいみつお） 明39・7・23（1189））「詩」高知県生まれ。はじめ表現派の影響をうけ、詩誌「文芸世紀」「野獣群」を出し、昭和3年詩集「血の花開く時」を出す。のちプロレタリア文学運動に参加、「歷程」に加わり、札幌青磁社の詩誌「至上律」の編集委員に参加し、昭和22年の冬、トラビスト修道院を訪れ札幌に至り、29年詩集「海峡」の中の「ツガル海峡で」「チミツプ」等は、そのときの旅の所産である。（史科源蔵）
大岡 信（おおおかののぶ） 昭6・2・16（1192））「詩、評論」静岡県生まれ。東京大学国文学科卒。明治大学教授。詩集「記憶と現在」（昭31・7、ユリイカ）でそれまでの戦後詩にない知性と感性のみみずしい躍動を見せた。昭和31年「今日」同人、34年吉岡実らと「鰐」創刊。

大久保正（おおくぼのただし） 大8・9・21（昭55・9・1（1919）-1980））「短歌」新潟県生まれ。国文学者。昭和18年東京帝大国文学科卒。東京外語大を経て、33年北大文学部助教授、41年同教授。47年国文学資料館教授として東京に転出。古代文学専攻で、本居宣長全集編纂や万葉関係の著書が多い。歌は尾山篤二郎の「芸林」に所属、純情で真挚、時に飄逸なものがあ

大久保正（おおくぼのただし） 大8・9・21（昭55・9・1（1919）-1980））「短歌」新潟県生まれ。国文学者。昭和18年東京帝大国文学科卒。東京外語大を経て、33年北大文学部助教授、41年同教授。47年国文学資料館教授として東京に転出。古代文学専攻で、本居宣長全集編纂や万葉関係の著書が多い。歌は尾山篤二郎の「芸林」に所属、純情で真挚、時に飄逸なものがあ

大久保正（おおくぼのただし） 大8・9・21（昭55・9・1（1919）-1980））「短歌」新潟県生まれ。国文学者。昭和18年東京帝大国文学科卒。東京外語大を経て、33年北大文学部助教授、41年同教授。47年国文学資料館教授として東京に転出。古代文学専攻で、本居宣長全集編纂や万葉関係の著書が多い。歌は尾山篤二郎の「芸林」に所属、純情で真挚、時に飄逸なものがあ

詩のほか、戯曲、美術評論、国文学研究、翻訳とその活動領域は極めて幅広い。「大岡信著作集」全一五巻（昭52、青土社）がある。集中講義等で数回来道。（瀬戸哲郎）
大上春秋（おおいしあき） 明44・12・15（1911））「短歌」大阪生まれ。本名治明。大阪商科大学卒業後、日亜製鋼に入社、在籍中のほとんどは大陸で従軍していた。その戦陣詠が山下秀之助にも送稿され後年の「原始林」入社の契機となった。同じ大学にいた五島茂との縁で長く「立春」に所属、水町京子、斎藤史、井戸川美和子らの指導も受けた。夫人行子は井戸川の実妹。作歌初期に島木赤彦の影響も受けたが骨格の太い詠風の中に、細やかさと豊かな情感の発露が見られる。戦後渡道し札幌で文具卸商を始めた頃より「原始林」に入社、精力的な活動を展開した。昭和43年に東京へ転出。会社役員、経営士等を経ながら「さくら短歌」主宰。「南支那」「短歌作法の書」「ハイビスカスの詩」「有恒有心」等のほか、行子との比翼歌集「雪像」（昭36）や合同歌集「原始林十人 I」（昭27）がある。つららする軒にみだれて打つ雪かさだかに天地をかざる色なし（村井 宏）

大久保正（おおくぼのただし） 大8・9・21（昭55・9・1（1919）-1980））「短歌」新潟県生まれ。国文学者。昭和18年東京帝大国文学科卒。東京外語大を経て、33年北大文学部助教授、41年同教授。47年国文学資料館教授として東京に転出。古代文学専攻で、本居宣長全集編纂や万葉関係の著書が多い。歌は尾山篤二郎の「芸林」に所属、純情で真挚、時に飄逸なものがあ

大久保正（おおくぼのただし） 大8・9・21（昭55・9・1（1919）-1980））「短歌」新潟県生まれ。国文学者。昭和18年東京帝大国文学科卒。東京外語大を経て、33年北大文学部助教授、41年同教授。47年国文学資料館教授として東京に転出。古代文学専攻で、本居宣長全集編纂や万葉関係の著書が多い。歌は尾山篤二郎の「芸林」に所属、純情で真挚、時に飄逸なものがあ

大久保正（おおくぼのただし） 大8・9・21（昭55・9・1（1919）-1980））「短歌」新潟県生まれ。国文学者。昭和18年東京帝大国文学科卒。東京外語大を経て、33年北大文学部助教授、41年同教授。47年国文学資料館教授として東京に転出。古代文学専攻で、本居宣長全集編纂や万葉関係の著書が多い。歌は尾山篤二郎の「芸林」に所属、純情で真挚、時に飄逸なものがあ

みついている人達に接して俳句に興味を持つようになり作句。除隊後石田雨圃子に師事し「木の芽」創刊に参加。以後旧「石狩」「古潭」の同人として活躍。雨圃子死後、昭和27年俳誌「きさらぎ」の主幹となり、交互選の形をとったガリ版刷りの俳誌を編集発行する。30年大塚千々二が主幹となる。39年「きさらぎ」は「石狩」と改名。その「きさらぎ集」の選者を48年まで担当。また俳誌「案山子」の「特選句」を加藤蛙水子没後担当している。「ホトトギス」「若葉」「玉藻」等に投じ、現在旭川ホトトギス会顧問。北海道俳句協会委員など。玫瑰やさびるま、に斜里の町

大崎和子 昭17・3・2

942)「児童文学」上川管内下川町生まれ。札幌南高校卒。室蘭に転住後児童文学に筆を染める。児童文学同人誌「まゆ」同人。「港南町から港北町へ」が「北海道児童文学全集」第三巻(立風書房)に収録されたのをきっかけに長編を執筆。「ほくの太陽」(昭59、立風書房)が、北海道児童文学全集発刊記念100万回懸賞に当選する。堅実なりアリズムの手法で少年を描く。笠原 肇

大崎黄奈坊 明32、昭32・6

6 (1899-1957)「川柳」小樽市生まれ。

説に転じ、東京で教職につきながらも作風は脱都会的傾向を強めた。小説集に「野蠻人」(昭11)、「都塵」(昭15)、「渡良瀬川」(昭16)、「谷中村事件」(昭32)など、後期は公害問題に集中していった。東北や北海道を背景にした鉱山ものも多く、「生活文学選集」第八巻の長編「金山」(昭14、春陽堂)は戦時下の国策文学の流れに迎合せず、また素材重視にも偏せず、秋田の鉱山から出て北海道北見山系の探鉱事業に赴くその生産現場が活写されている。取材作は「探鉱日記」(昭14、竹村書房)、「千島丸」(昭14、人文書院)や「金山挿話」(昭14・4、「中央公論」)などがあり、北海道、千島そして樺太にもおよんでいる。

(小笠原克)

大柴甲子郎 大13・3・17

(1924)「俳句」上川管内上川町生まれ。北海道に新興俳句を興した細谷源二、川端麟太に師事。昭和42年水原帯功賞。43年句集「勃火」刊行。52年水原帯功賞を受賞。現代俳句協会会員。「水原帯」企画同人。川端麟太

大島いさむ 大2・5、昭52

10 (1913-1977)「短歌」小樽市生まれ。本名勇。幼少より視力が弱かったので盲学校に学ぶ。少年時代より作歌。並木凡平に師事。昭和12年より口語歌を「青

本名重次郎。製粉業に因んで黄奈坊と号をつける。大正8年金沢百万誌へ投稿。15年3月小樽柳吟社を結成、川柳誌「はららご」を発行。田中五呂八の「水原」と拮抗して伝統川柳を守り続ける。

(斎藤大雄)

大笹 茂 明39・9・16

(68)「短歌」生地不詳。釧路地方にあつてはやくに作歌活動をしてきたが、昭和27年釧路地区新懇社友大会あたりから小田観堂に請われて「新懇」同人となる。その後釧路歌人会の会長、「新懇」釧路支社長を務め、さらに厚岸町文化協会長、尾幌地区公民館長等を歴任、道東方面の歌人の交流を図る世話役や、道東文化振興のため後進の指導に当たっている。

(水平利夫)

大里陸美 大14・8・8

(1935)「短歌」札幌市生まれ。本名吉田庄平。昭和25年北海道大学医学部卒。室蘭、砂川の病院を経て、46年より内科医院開業。22年「羊蹄」、23年「アララギ」、31年「北海道アララギ」入会する。土屋文明、樋口賢治に師事。

(笹原登喜雄)

大沢重夫 明34・6・18

(1901)「詩」長野県生まれ。本名後沢重夫。大正11年函館師範卒。長野県教職員などを経て昭和3年北海道へ転じ、8年

空」に発表。口語歌壇で活躍。作風は沈潜して韻律の優れた作品が多く、心眼で捉えた事象を詩情に盛り上げた感性の強い佳品。53年遺歌集「薄明」刊行。

(吉田秋陽)

大島栄三郎 昭3・10・20

昭48・4・20 (1928-1973)「詩」秋田県生まれ。サルバドル・ダリと浅井十三郎に心酔し、第二次世界大戦後の現実を湿地的社会としてとらえ、社会変革の意志とアバンギャルド精神を抱いて「近代詩」「雨季」「文学革命」「詩と詩人」「造形文学」「列島」などで作品活動を展開。安部公房の跋文を得て上梓した詩集「いびつな球体のしめつばい一部分」(昭25・3、文学地帯社)は、殖合雄高に注目された。昭和27年父と衝突して出郷、新潟県の浅井十三郎宅に寄食し「詩と詩人」の編集を手伝う。その後、郷里で地方新聞の記者兼編集者として八面六臂の活躍をする。32年11月渡道し札幌に定住。「髯」「KARUMAN」などに作品を発表するが、34年興国印刷労働組合で活動しはじめ、44年2月狭心症様の発作ひどく労働運動から離れるまでの一〇年間作品活動とだえる。長い沈黙の末の、無神論者大島が神存在に抗い続ける構築的形式の長編詩集「死の毒の満つる火の舌」(昭45・2、自家版)は、毀誉褒貶

十勝鹿追小校長、11年再び長野県へ転出。大正13年以後、「日本詩人」「文章俱樂部」「詩神」「日本詩壇」「農民詩人」その他に作品と詩論を多数発表。ことに「日本詩人」に作品を発表した北海道在住の詩人加藤愛夫、鈴木政輝らとともに親交を結び、昭和11年第一次北海道詩人協会創立委員の一人となった。直後長野に帰ったが北海道に功をのこした一人である。詩集は「太陽を慕い大地を恋ふる者の歌」(大12、南天堂)、「燃ゆる村落」(昭2、大地舎)、「いのちの呼ぶ」(昭29、思潮社)、「やさしい国文学史」(大15、厚生閣)ほか、「地上楽園」の同人として活動した月刊誌多数ある。

(入江好之)

大沢哲夫 昭8・2・28

(63)「新聞記者」愛知県生まれ。昭和30年北海道大学国文科卒、北海道新聞社に勤務。編著に北海道新聞社刊の「ほっかいどう語」(昭45)、「人脈北海道」(昭49)があり、袖珍書林刊「ふるさと文学散歩」(昭54)で室蘭、胆振地方をまわめた。

(小笠原克)

大鹿 卓 明31・8・25

昭34・2・1 (1898-1959)「詩」小説」愛知県生まれ。詩人金子光晴の弟。東京府立一中卒後さらに秋田鉱山専門学校卒(大10)。詩集「兵隊」(大15)のあと小

の極端に評価が分かれた。その後、「エザビロッチ・暗い歌」(昭47・3、自家版)、「魔女を狩る仮面」(昭47・11、国文社)、「北方抒情」(昭48・3、創映出版)と矢継ぎ早に詩集をだして独自の詩境を拓いたが、惜しくも病没。「北方文芸」六七号(昭48・8)に江原光太、八子政信、友田多喜雄共同編集の追悼特集がある。

(八子政信)

大島扶老竹 明16・12・5

昭17・7・20 (1883-1942)「俳句」東京生まれ。本名次郎。明治36年札幌中学校、北海道庁に勤務。一時帝國製麻に入社したが再び請われて道庁に戻り能吏として晩年まで在職。昭和15年正七位、死後勲八等に叙せられた。俳句は牛島藤六の益を受け「時雨」に拠ったが、「層雲」「海紅」などをも涉猟した。深く藤六の主張作風に傾倒、同誌の編集同人として活躍。「葦牙」と改題後も長谷部虎杖子らと編集に参画して重きをなした。著書の「扶老竹句集」(昭19)は、没後「葦牙」の同志の手によって編まれた遺句集で、著者の大正5年から昭和16年までの作品八二五句を収録。扶老竹は格調高い、確かな自然観照の眼と深いヒューマニズムによって貫かれており、「時雨」「葦牙」の主流をなすものであった。

〈喪の凱旋君征くときも雪なりし〉

大島正健 安政5・7・25ゝ昭

13・3・11 (1868ゝ1938) (宗教、教育) 神奈川県生まれ。札幌農学校第一期生。クラークの影響を強く受け、熱心なクリスチャンとして内村鑑三を入信させた。

札幌独立基督教会の最初の牧師。新島襄を知り、明治25年札幌農学校教授を辞して同志社に移る。のち奈良、甲府で中学校長歴任。「支那音韻史」で文学博士。「クラーク先生とその弟子たち」がある。(和田謙吾)

大島やえ 大8・6ゝ(1919)

〔短歌〕胆振管内豊浦町生まれ。本名八重。大島いさむ夫人。昭和13年頃より作歌。「青空」に所属。社会歌、自然歌、生活歌と自在な詠みぶりであり、感性豊かな抒情質と、本格的な口語短歌には重厚さがある。53年亡夫いさむの遺歌集「薄明」を編集発行。失明寸前の夫をたすけ口語歌壇で活躍。(吉田秋陽)

大島 竜 昭21・3・3ゝ(1950)

〔詩〕小説、劇作、版画「札幌市生まれ」(「パンと薔薇」「ウラヌス」を経て「アストラ」同人。高橋涉二、佐土原台介と詩朗唱運動を開始(昭52)。昭和54年から「詩の隊商」北(!!)に参加。吉原幸子、吉増剛造らと道内で朗唱活動

(昭59)。版画展と朗唱のためシアトルとエドモントンに招かれる。詩集「愛とナイフ」「鍊夢詩篇」、詩画集「山鬼抄」「太郎」、戯曲「千年王国」その他数冊。(矢口以文)

大島流人 明10・2・19ゝ昭16

・8・2 (1877ゝ1941)〔短歌〕日高管内静内町生まれ。本名経男。札幌農学校予科を経て第一高等学校に進んだが神経衰弱のため退学。軍人であった父の函館転勤に伴い同地で静養のあと、明治32年遺愛女学校、その後函館英語学校、靖和女学校で教鞭をとった。この頃、新詩社同人となり、「明星」に詩歌、翻訳、評論などを数多く発表している。39年10月「紅苜蓿」が発行されるとその主宰者となったが、翌40年6月教え子と恋愛破綻から日高の牧場へ隠遁した。来函中の石川啄木は大島の後を受けて「紅苜蓿」を発行した。啄木は学識あり高潔謹厳な大島に終生変わらぬ尊敬の念を抱いていたようである。後、大島は明治42年北海タイムスに、大正7年農商務省に、さらに出版社関係を転々とし、西宮市で亡くなった。(福地順一)

大治柳哉 明42・11・19ゝ(1908)

〔短歌〕大阪生まれ。本名源次郎。大正2年来道。13年より写真業界に入り、昭和5年以来札幌で写真館経営。昭

和3年並木凡平の「新短歌時代」に所属。以後口語短歌に情熱を燃やす。戦後札幌から発刊の「新短歌時代」編集委員。5年歌集「街の青春」、48年合同歌集「七彩」発刊。田中五呂八の新興川柳誌「氷原」に所属したこともある。(吉田秋陽)

大隅きの女 明33・5・28ゝ(1908)

〔短歌〕石川県生まれ。本名きの。明治45年中標津町に移住。幼少時より祖母に万葉集を教わり、小学校一年の時百人一首を暗誦していた。昭和30年小田観螢に師事、「新壺」に入社、現在同人。45年11月第一歌集「歳月」、48年8月第二歌集「俵真布川」、52年第三歌集「開陽台」発刊。同地方の歌人の指導に当たる。57年7月釧根万葉集に参加。(渡辺 勇)

太田絢子 大5・3・17ゝ(1919)

〔短歌〕宗谷管内利尻町生まれ。実践女子専門学校文科に在学中、高崎正秀の指導を受ける。卒業後道内で高校教師をつとめ小樽を第二の故郷とする。昭和25年「新壺」「潮音」入社。「新壺」選者もつとめる。32年潮音主宰太田青丘と結婚して離道、鎌倉に住む。以後「潮音」幹部、選者、編集発行の実務にあたり、全国歌壇の女流として活躍。研究、評論の論述も多く、本道潮音系歌人の著

書などへの序文執筆も多い。また歌会指導などでしばしば来道。39年処女歌集「南北」出版。北方的詩魂を湘南の地に移植した条跡を刻む。48年第二歌集「飛梅千里」を刊行、北から南への叙情の振幅をより豊饒なものに開花させる。現実を、あこがれと夢幻へ伴う知的叙情を持つ。(めぐり幾里もあらぬ小さき島に来て眠る時海は胸元の高さ) (永平利夫)

太田鷗秋 明11・1・16ゝ昭11・12・22 (1878ゝ1936)〔俳句〕松山管内江差町生まれ。本名一夫。大正5ゝ6年頃増毛在住時、今里竹茶、木村丁字、甲子梧らと荻原井泉水の「層雲」により自由律俳句の道に入る。道内誌として牛島藤六「時雨」、青木郭公「暁雲」、荒谷松葉子「常盤木」の誌友として、職業柄多い転勤先で俳人との交流は広く、自称「歓迎俳人」として楽しんでた。

大滝景星 昭5・10・19ゝ(1906)〔俳句〕札幌市生まれ。本名恰。日本電信電話会社職員。昭和19年「ホトトギス」、戦後「阿寒」「はまなす」に拠り句作。「水下魚」復刊に参画、「雲母」を経て「四季」に所属同人。句集「微光」「白く陸」刊行。北の雲大賞受賞。(太田緋吐子)

太田 清 昭11・2ゝ(1936) (島 恒人)

〔詩〕空知管内秩父別町生まれ。法政大学文学部卒。高校時代早川雅之のもとで詩作を始め詩集「黄昏」を刊行。生家の水田農耕に従事しつつ通信教育で大学を卒業。その間郷土の農村文化サークル運動に参加。「開墾地」および詩誌「FRONTIER」同人となり、詩集「村の娘たち」(昭40)を出版。第二回北海道詩人協会賞を受賞。鋭い知的農民詩として注目されたが「核」同人後詩筆を断つ。(早川雅之)

大谷勝義 昭8・12・16ゝ(1933)

〔児童文学〕空知管内新十津川町生まれ。北海道学芸大学卒業後、空知、札幌の小中学校勤務。在学中から文学を志し、児童文学の創作は、昭和40年頃より始める。主な作品として「白いとうげの道」(金の星社)、「ふしぎな世界のピプ」(ポプラ社)、「ふしぎな世界のピプ」(毎日小学生新聞)などがあり、「白いとうげの道」は「北海道児童文学全集」に収録。(加藤多一)

大谷句仏 明8・2・27ゝ昭18

・2・6 (1857ゝ1943)〔俳句〕京都生まれ。本名光演。法名彰如、別号愚峰。真宗大谷派二三世管長を経て、昭和2年より俳句に専念する。はじめ高浜虚子につき河東碧梧桐の指導を受け、明治43年より「懸葵」主宰。北海道へは大正14年

に来札し、小笠原洋々と交流。次いで昭和16年にも来道している。函館東本願寺別院に〈祖思しのぶ北門の秋の法城に〉の句碑が建立されている。

太田比古家 明37・12・7ゝ(1904)

〔短歌〕青森県生まれ。本名彦藏。一〇歳のとき函館転住。旧制函館商業卒後、外務省勤務を経て海陸労務請負業。戦後は学習塾自営と凧の制作を兼ねる。蝦夷凧創始者で、日本凧の会会員。大正12年「日光」、15年「橄欖」と併行して昭和14年まで「無風帯」所属。42年「原始林」に入会。相良義重に師事したが逝去後退会して、現在は無所属のまま凧作りの傍ら心の赴くまま自在に作歌している。歌集に「凧日和」。(新蔵利男)

太田緋吐子 明43・6・29ゝ(1910)

〔俳句〕後志管内倶知安町生まれ。本名倫。昭和2年旧制中学在学中地元新聞俳句に入選したのが動機。翌3年職場の臼田亜浪「石楠」支部に入会。5年青木郭公「暁雲」入会。各誌廃刊まで継続する。31年長谷部虎杖子「葦牙」入会。48年1月山岸巨狼主宰となり発行所の責任者。54年進藤一孝「人」創立と共に「河」晩会の上人会。俳人協会員。北海道俳句協会監事。(佐々木子興)

太田正義 昭9・10・5 (1934) (小説) 松山管内江差町生まれ。岩見沢西高校卒。小学校教師。「静内文芸」「静内文学学校」に属し、「僕の天誅」を「静内文芸」に載せ、後に「北海道新鋭小説集」に収録、ほかに「日高の国」を「北方文芸」に発表。

(小松 茂)

太田水穂 明9・12・9、昭30・1・1 (1896-1985) (短歌、国文学) 長野県生まれ。本名貞一。歌人四賀光子は妻。長野県師範学校卒。「潮音」創刊主宰。初めての来道は大正10年8月。5日札幌に宿泊し、翌6日四〇名の社友に対し二時間にわたり短歌の諸問題を弁じ、その迫力ある語調は社友を魅了した。第二回の来道は妻光子を伴い昭和12年7月から8月にかけてで、7月31日と8月2日の両日、札幌・豊平館を会場に開催した北海道潮音新塾大会に出席した。この時も七〇名の社友は水穂の論旨に酔った。大会後は社友数人と共に洞爺湖に一泊旅行をして帰京。札幌の大路の末の夏がすみ広野と思ふ野の見ゆるなり (宮崎芳男)

太田迪子 昭17・2・12 (1914-) (児童文学) 室蘭市生まれ。本名森迪子。室蘭市在住。札幌静修高校卒。「森の仲間」同人。「雨の日の街」「風の

「石楠」「緋衣」「柏」等により句作。のち「葦牙」「えぞにう」「道」などを経て、現在「これ」「人」「権の芽」同人。第一句集「足あと」。(木村敏男)

大塚陽子 昭5・7・12 (1908-) (短歌) 樺太敷香町生まれ。本名野原陽子。「辛夷」代表野原水嶺夫人。

昭和23年7月引き揚げ。小学校教員を経て国家公務員となり55年12月退職。昭和26年「潮音」「新塾」入社。30年10月「辛夷」入社。同年「新塾」退社。辛夷社の総務担当のほか選考者、運営委員、編集委員を兼務して来たが、59年1月世代交替により編集発行人に選ばれ、同社の最高責任者となった。他に「潮音」幹部同人。昭和29年第一回短歌研究五十首詠で中城ふみ子と特選をあらそったことは有名。58年処女歌集「遠花火」で第七回現代短歌女流賞を受賞、その安定した力を認められるところとなった。詠風はドラマと抒情性に富む。中央の総合短歌雑誌その他への執筆も少なくなかったが、56年8月から北海道新聞日曜版に連載の「四季のうた」は、そのユニークな鑑賞力と解説で広く共感を呼び、短歌関係以外からの関心も集めている。

「遠花火」歌集。昭和57年雁書館刊。掲載歌二七〇首。第一部「花の黙契」は初期、第二部「落日の朱」は53年

中で「悪魔」等を自費出版。また「ボンとまきばの風」は北海道児童文学全集、その他にも収録。(坪谷京子)

太田光夫 大15・10・1 (1929-) (短歌) 函館市生まれ。函館保健所検査室を経て国立函館病院研究検査科臨床検査技師。道南衛生検査技師会会長を三期務める。昭和25年「新塾」、翌年「潮音」に入社。28年七飯から発行されていた潮音、新塾函館支社潮短歌会の「潮」を函館に移して編集発行すること三十年余、今日まで刊行を続けて三四〇号を重ねた。この間、29年に小田観堂を迎えて潮創刊六周年大会をはじめ数回の大会、新塾函館大会や函館歌壇とよく提携をはかるなどの活躍をした。新塾函館支社代表、道南歌人協会理事。作風は、作者の質朴で篤実な性格が自ら滲み出たもので、大仰な身振りや華麗さはない。真摯な心眼で捉えられた事象や景物に沁々とした人の味わいがある。人の眼にふるることなき桜いっぼん山に咲きをり何いふでなく (水平利夫)

大塚郷湖 明37・11・23、昭56・5・4 (1904-1981) (短歌) 岩見沢市生まれ。本名盈。北見市を中心に四五年間教員勤務、元小学校校長。大正年間は新聞、雑誌に出詠し昭和初期から「ぬはり」社友、歌謡の作詞もする。戦後は以降の作品を中心にまとめられている。藤田武の解説「もう一人のジャンヌ・ダルクへ」により著者と歌風が身近かに紹介された。(遠花火消えたるのちの網膜に顕えてさだかに誰とわからず) (渡辺 洪)

大月源二 明37・2・19、昭46・3・18 (1904-1971) (絵画) 函館市生まれ。庁立小樽中卒業後、東京美術学校西洋画科へ進学。官展系の藤島武二教室に入るが次第に階級意識に眼覚め、卒業制作に「新しい生活!」と題した作品を出品。日本プロレタリア美術同盟の担い手の一人として活躍し、中学時代からの友人であった小林多喜二の小説「一九二八・三・十五」「蟹工船」などの挿画を手がける。代表作に第一回普選に立候補し白色テロに倒れた山本宣治の葬儀を描いた「告別」がある。(木ノ内洋二)

大槻富雄 大6・8・1 (1906-) (児童文学) 室蘭市生まれ。昭和13年より胆振管内鶴川小学校勤務。のち札幌市山鼻小学校に転じ、道教委指導主事などを務め札幌市立中央中学校長を最後に53年定年退職。「北海道郷土教育研究会」同人。著作に「北海道の昔話」「北海道の歴史物語」「北海道の伝説」「北海道昔の遊び」等。日本児童文学者

「リラ」「あさひね」等を経て「形成」同人。50年宮中歌会始の詠進歌佳作入選。北海道歌人会の発足からの委員。日本歌人クラブ会員。歌集に「ふる郷の湖」。(水平利夫)

大塚千々二 明44・3・15 (1912-) (俳句) 十勝管内清水町生まれ。本名重親。昭和16年中央大学法科卒。弁護士。旭川地方裁判所調停委員。学校法人大塚学園理事長。小学校時代から句を作り、昭和5年長谷川かな女の「水明」に属し本格的作句生活に入る。10年在京中「ホトトギス」を知り、虚子、立子より直接指導を受ける。以後「ホトトギス」に投句。花鳥諷詠の道を歩む。20年北千島より復員、弁護士として旭川に定住。33年俳誌「きさらぎ」を発刊し、39年には「きさらぎ」を、戦前、雨園子が発刊していた「石狩」に俳誌名を改名し、その主宰者となる。30年「ホトトギス」同人に推される。その間北海道日日新聞俳壇選者などになり、旭川俳壇の中心的存在である。旭川ホトトギス会会長。旭川俳句連盟会長。句集に台詞句集「北国」などがある。へ花びらは冷たきものよ菊に触る (嶋田一歩)

大塚珀蛾 大2・8・24 (1902-) (俳句) 小樽市生まれ。本名永起。農業に従事。昭和10年頃から「暁雲」

協会員。 大津禪良 明29・7・22 (1908-) (俳句) 茨城県生まれ。福島町諦玄寺住職。大正2年日立俳壇で土井秀月に師事。昭和2年渡道。3年北海道既吟社設立主宰となる。6年「かびれ」を大竹孤悠と共に創立し同人。他に「道」「蟻乃塔」「葦牙」同人。句集に「妙土」「黄衣」。句碑二基あり。多数の公職の傍ら地域文化の育成に力を注ぎ、瑞宝章、文化功労賞等を受賞。(北 光星)

大西泰久 昭2・9・18 (1905-) (児童文学) 上川管内下川町生まれ。本名久男。北海道学芸大学卒。日本医史学会員。「森の仲間」同人。作品は郷土史、開拓史に材をとった物が多い。「北海道のむかし話」「北海道の歴史ものがたり」「北海道の伝説」(共著)など。そのほか伝記多数。医史関係では「御雇医師エルドリッジの手紙」「北海道の医療史」。共著に「北大医学部五十年史」「北海道医師会史」。(加藤多二)

大西雄三 大3・6・14 (1904-) (小説) 小樽市生まれ。本名一雄。小樽市立中学校で伊藤整に英語を学ぶ。卒業後文学を志して上京するが、父の病気のため呼びもとされ、税務署員として各地をまわる。その間二度召集されて昭和23年12月復員する。その戦争体験をも

とに「神兵に非ず」を駿台書院から出版、27年には役人生活にあきたらず退職、小樽と札幌とに会計事務所を開設する。30年7月「浮標」から独立して「表情」を創刊、この年同誌掲載の「千歳の女」が同人誌推薦小説として「新潮」にのる。34年「湖の裁き」(知性社)、48年「自分だけの海」(伊美書房)を出版して、独自の作風を確立した。50年恩師伊藤整の研究シリーズとして「雪明りの叢書」を企画、第三編に「若い英語教師伊藤整」(北書房)を書いた。ほかに「蟬の歯ぎしり」(北書房)、「実録北海博徒伝」(みやま書房)、「悲劇の泰東丸」(同)などの著書がある。(武井静夫)

大貫喜也 おおぬき 大15・6・10 (1926) (詩) 山形県生まれ。小学校高等科二年の時に満蒙開拓少年義勇軍に参加。繰り上げ徴兵検査で現地入営、三カ月で終戦。ソ連に抑留。引き揚げてから、東京丸の内署で巡查をしながら苦学。明治学院大英文科に入学。上林猷夫の知遇を得て詩集「黒竜江附近」を上梓。昭和30年北海道に渡り、高校の英語教員となり、本格的に詩にとりくむ。詩集「愛と化身」に続く第三詩集「眼・アングル」で第一回道詩人協会賞受賞。その後、アメリカへ渡り英語を研修。再度、詩に情熱を注ぐ。詩誌「北海詩人」

大沼貞雄 おおぬま 大15・11・23 (1926) (小説) 旭川市生まれ。雑貨店経営。同人誌「朔風」に「コタン挽歌」を書いて開眼。「朔風」第四号の「墓穴」は「文学界」で山本健吉によってとりあげられる。つづいて「樹氷の頃」あたりで立ち直りをみせたが、以後筆を折って久しい。「朔風」「旭川小説懇話会」の主要メンバー。(佐藤喜一)

大沼千代子 おおぬま 明33・9・18 (1904) (短歌) 秋田県生まれ。小学校時代から短歌に興味をもつ。女生生時代、並木凡平の宅が近かったため訪ねたり、小樽新聞に投稿をはじめ。「青空」に所属。現在は「新短歌時代」編集委員。戦中小樽新聞、樺太新聞の記者。戦後小樽に東雲寮を開設。道展会員。道陶芸会員。道新文化センター講師。歌集「陶醉」ほか。(吉田秋陽)

大野千代子 おの 明33・9・18 (1904) (短歌) 上川幸夫。旧制滝川中学(後に滝川東高校)卒業後郵便局に勤務。「全通北海道文学」「留萌文学」会員。「流れ」「陽たまり」「撃たれた一羽」「姉妹」等の作品あり。札幌市在住。(山下和章)

おお比呂司 おおひろし 大10・12 (1921) (漫画) 札幌市生まれ。本名大場博司。北海道新聞社に勤務の後フリーに転向。漫画集団、漫画協会員。著書に「味のある旅」「にっぽんのヒーロー記」「ヒーローの心」などがある。飛行機ファンとして有名。(小松茂)

大平忠雄 おおひら 大8・10・8 (1928) (短歌) 石狩管内新篠津村生まれ。札幌高等計理学校卒。昭和13年北原白秋が主宰する「多磨」に入会。以来、芥子沢新之介の指導を受け終生の師とする。白秋没後、宮柁二の「コスモス」に参加する一方、酒井広治を中心とした旭川の「あさひね」に新之介と共に加わり、31年新之介が旗揚げした「いしかり」に参画。新之介没後、宮柁二との確執から「コスモス」を離脱し、42年「樹氷帯」を創刊した。この間、29年に創立した北海道歌人会幹事として「北海道歌壇史」編纂に力を尽くし、また歌人会賞選考委員を務めるなど、その功績は大きい。古泉千樫の作風を慕

大庭 肇 おほつら 昭9・3・7 (1934) (短歌) 岩見沢市生まれ。本名江尻幸夫。旧制滝川中学(後に滝川東高校)卒業後郵便局に勤務。「全通北海道文学」「留萌文学」会員。「流れ」「陽たまり」「撃たれた一羽」「姉妹」等の作品あり。札幌市在住。(山下和章)

管内美瑛町生まれ。本名チヨ。帯広神社宮司大野呉朗の妻。昭和6年「新報」入社、続いて「潮音」入社。21年4月野原水嶺、千葉一也、菅野郊路、成田茂、渡辺洪らと「辛夷」を創刊、29年の復刊にも参画。昭和6年以降、約四〇年間「潮音」「新報」「辛夷」の月例会に会場を提供して郷土の歌壇に貢献。歌集に「万年青」。(渡辺 洪)

大野利子 おの 大3・9・2 (1914) (短歌) 帯広市生まれ。昭和6年、帯広市姉妹高等女学校卒業。21年「辛夷」入社。選者、運営委員、編集委員を歴任。54年辛夷功労賞を受ける。54年歌集「自生の草」を出版。(渡辺 洪)

大野黙然人 おの 大3・7・4 (1914) (短歌、版画) 鳥取市生まれ。本名景川弘道。国鉄レッドページの後、昭和24年より北見市で食料品店を経営。昭和17年「橄欖」に入社。40年「辛夷」に入社、運営委員、選者、北見支部長を歴任。昭和12年第二回改造社短歌研究五〇首詠に第二位入選。「大野黙然人歌集」ほか、版画集数冊あり。55年北見市文化賞を受賞。歌人としてよりも版画家として活躍。(渡辺 洪)

大野百合子 おの 明41・4・24 (1908) (詩) 後志管内余市町生まれ。小樽高女を病で中退。大正

い、その作品は温雅、清澄、ほのぼのとしたものであった。植物が好きで「樹氷帯」に「雑草庭園」と題する植物、自然を主体とした旅行随筆を連載していた。49年9月歌集「篠津原野」を刊行。没後「樹氷帯」は解散した。(山名康郎)

大広行雄 おほひろ 大14・5・17 (1929) (詩) 夕張市生まれ。深川町立高小卒。戦争体験あり、戦後シベリアに抑留される。戦後、土木労働者となり詩と短歌をはじめ。詩は詩誌「明暗」「北海詩人」に作品を発表し続ける。道詩人協会員、北海詩人同人。詩集「航跡」「風化への挑戦」がある。(浅野明信)

大町桂月 おおまち 明2・1・24 (1876) (紀行、評論) 高知市生まれ。本名芳衛。称好塾に学び、飯谷小波、江見水陸らと交わる。桂月の面目は生来の旅行好きによる名紀行文で、その道の第一人者として多くの愛読者を得た。三カ月にわたり北海道各地を探勝したのは大正10年、博文館創業三六周年記念「太陽」増刊号(大12・6)の「北海道山水の大観」がそれで、北海道の八大勝景として大雪山、層雲峡、阿寒嶺、登別温泉、蝦夷富士、大沼公園、猿間湖(サロマ湖)、野付半島をあげている。「層雲峡より大雪山へ」(大12・8、「中央公論」)もあり、桂月は北海道の山

15年小樽洋服裁縫女学院を創立。昭和7年正月号「婦人公論」の『全国職業婦人百撰』に挙げられている。創作活動は当時小樽から刊行されていた「新短歌時代」「詩歌建築」等に詩、口語短歌などを投稿したのを始めとして、当時来樽した宮崎丈二に認められ、道在住作家では更光源蔵、難波田竜起、西倉保太郎などが加入していた同人誌「河」に参加。昭和6年7月より8年8月まで六一編の作品を発表。作風は平明ながら「思無邪」(孔子)の感に尽き、なお折目正しくふくよかな感性に満たされている。没後、遺稿詩集「雪はただ白く降りて」が刊行され、高村光太郎、宇野浩二らの絶賛を博した。(木ノ内洋二)

大場豊吉 おおば 大12・1・27 (1923) (詩) 室蘭市生まれ。本名盛。戦時中海軍に徴兵され暗号員。戦後、炭鉱、土木建築現場、出稼ぎ労働人夫など雑多な肉体力労働生活に生きる。「新日本文学会」に所属し詩作をつづけ、詩のサークル活動を推進した。「北方詩人」「夜汽車」「詩の村」などの同人を経て、無名者の詩運動「原」に参加。その詩風は、詩による社会主義変革をめざす。昭和52年「大場豊吉詩集」(室蘭噴火湾社)発刊。(堀越義三)

水を最も早く文学的に世に喧伝した文学者である。層雲峡は桂月の命名。桂月岳はそれに因む。文学碑には「あなたと平和の山に湧き出でて人の命をすくふ真清水」(歌碑・遠軽町北海道家庭学校)「網を干す棒や鳥鷗の物語」(句碑・別海町尾岱沼)のほか、川湯温泉川湯神社とサロマ湖竜宮台に漢詩碑があり、層雲峡園地には記念碑が建っている。

(木原直彦)

大村忠孝 大5・4・1(昭50・24) (1916-1975) 「小説」旭川市生まれ。植字工員を経て食糧店経営。戦後「旭川小説懇話会」メンバーの一人。近文町で義弟となる大沼貞雄と文芸誌「湖風」創刊、「仏様の様な男」で名を揚げ「工場地帯」「担ぎ屋列車」など体験を通して書きつづけた。リンゴの買い出しで、担ぎ屋仲間と親しくなる。「憎悪」「焼酎」等、心の強さを示す作を「湖風」に残し一商店主として病没した。(佐藤喜一)

大森光章 大11・7・24(昭50・25) 「小説」後志管内俱知安町生まれ。本名大森倅二。昭和21年堂前憲悦らと俱知安から「新芸術派」を創刊するが三号で休刊。23年文学を志して上京「マランチャ」「三田文学」「円卓」等に創作を発表する。36年「名門」が芥川賞候補

となり、ついで「王国」「培養」がそれぞれ同賞候補となった。著書に「名門」(南北社)、「鯨船」(叢文社)、「星の岬」(同)がある。(武井静夫)

大森静夫 昭4・6・8(昭50・9) 「詩」東京生まれ。日本大学文学部卒。戦後教員のかたわら詩作をはじめ、旭川の詩誌「情緒」および「フロンティア」同人となる。詩集に「少年の唄」「土の微笑」がある。盲学校生徒の詩集発行を志し「一本の細い道」「渡つて来た橋」編集にあたる。俳誌「梓」会員。(佐々木逸郎)

大森卓 大11・4・21(昭26・9・27) (1922-1961) 「短歌」十勝管内芽室町生まれ。札幌通信講習所卒。郵便局員を経て銀行員。16年頃より野原水嶺指導の歌会に出席。21年7月「辛夷」編集委員。「新墾」にも入会。24年5月中城ふみ子らと「辛夷」歌会に出席。この頃結核のため帯広協成病院入院。26年国立帯広療養所へ転院。この間「くるみ」「曠野」「銀の壺」等の歌会を組織し指導。26年1月水嶺、舟橋精盛らとともに超結社誌「山脈」を創刊、編集委員として活躍した。同人の中城は眉目秀麗の大森を恋い病室に通い、幾人かの女流との間で争奪戦を演ずるが、手術後病状悪化し卓は三〇歳で早逝した。へいくたり

の胸に頭ちみし大森卓息ひきてたれの所有にもあらず」と歌ったふみ子は、卓の面影を追いつつ「乳房喪失」一卷を残した。(大いなる苦痛に頭なの自我うすれ求むるものあり血を咯く終焉に)

(増谷竜二)

大森亮三 大13・5・29(昭52・4) 「短歌」後志管内俱知安町生まれ。大森光章の弟。道内での教員生活が長く、一時は現役兵として道東の部隊にあつた。若い頃は詩作もし詩集「父の墓碑銘」(私家版)がある。作歌は昭和48年から石本隆一に師事、現在「水原」同人。木版画にも打ち込み公募展に出品する機会が多い。版画も歌も、風土を背景に人間の哀愍を陰翳ぶかく描き出す。歌集は「北の挽歌」(昭51)、「亜寒樹」(昭54)、「樹のごとく」(昭57)等。(村井宏)

岡井隆 昭3・1・5(昭28) 「短歌」名古屋生まれ。慶応大学医学部卒。国立豊橋病院内科勤務。昭和30年代当初に塚本邦雄とともに前衛短歌の旗手として歌壇に登場。以来現代短歌のオビニオンリーダーとして、作品、評論の両面で活躍。一〇冊の歌集と二〇冊を超える評論集を刊行。51年12月詞華集「北の会76」(昭51・11、現代短歌・北の会)出版記念会(札幌)に初めて来

道、「現代短歌の体験」と題して講演。

以後学会で来道の都度、道内の歌人と交流、57年6月にも「正岡子規」と題して札幌で講演。来道時の作品は、第七歌集「歳月の贈物」(昭53・4、国文社)、第一〇歌集「禁忌と好色」(昭57・12、不識書院)に収載されている。(ヒラに降る雨のさなかを裾ぬれて行きゆくわれは讃美してをり)

(細井剛)

岡井満子 大15・4・24(昭50・9) 「小説」北見市生まれ。本名津田美智子。庁立北見高等女学校卒。84年度の「朝日女性の小説」に「仮りの家」が入選。作品集「仮りの家」(昭60、北書房)に収録。以後同人雑誌「三月派」に拠り、「個」などを発表する。(日高昭二)

岡崎正之 大10・4・11(昭50・12) 「短歌」釧路管内釧路町生まれ。昭和10年太平洋炭砒に入社。51年定年退職するまで炭砒マンを貫く。昭和17年旭川北部方面第四部隊に入隊。23年シベリアより復員。抑留中に詩、俳句、短歌をはじめ。復員後、俳句結社「えぞにう」に入り、久保洋青の門下生となる。40年3月以前から交流のあつた短歌結社「辛夷」に入会、野原水嶺に師事、本格的な作歌をはじめ。炭砒を素材とした作品に優れたものが多く、北海道炭砒マンを代表する歌人。作品は誠実で審美性の

うるおいがあり、よく彫琢されている。著書には歌集「帽灯」、釧路新書「長いトンネルの道」などがある。43年北海道歌人会賞、51年北海道新聞文学賞(歌集「帽灯」)、52年辛夷賞、55年釧路市文化奨励賞を受賞した。(へらひらと降る淡雪に出坑の身を反らしてはくちびる向けゆく)

(渡辺 洪)

岡崎守 昭16・9・2(昭51・4) 「小説、川柳」三笠市生まれ。三笠高校土木科卒。道開発局室蘭開発建設部勤務。七人句集「芽」(昭50、札幌川柳)、「さいはて」(昭54、宗谷川柳社)。昭和57年「らんふう会」結成し、「らんふう」発行人となる。(神谷忠孝)

(神谷忠孝)

岡澤康司 大11・5・31(昭50・12) 「俳句」空知管内妹背牛町生まれ。本名彰。昭和17年東北薬学専門学校、24年北海道大学農学部農芸化学科卒業後北海道庁に勤務、二七年間勤続して51年退職。俳句は昭和28年新しい抒情の確立を唱導する土岐鍊太郎に共鳴して「アカシヤ」に参加、翌29年同人。37年アカシヤ賞受賞とともに無鑑査同人。45年編集長となる。51年鍊太郎主宰が病を得てから、たびたびアカシヤ作品の選評を代行したが、翌52年鍊太郎没後、その遺志を体した同人会の決定で後継主宰に推された。句集は45年刊の「寒夕焼」、54年刊

の「盆の月」のほか、共著句集「アカシヤの花」五冊がある。俳人協会評議員。同協会北海道支部副支部長。北海道俳句協会常任委員として俳句の興隆と後進の育成に尽くしている。

「盆の月」 昭和54年アカシヤ叢書第二八集としてアカシヤ俳句会から刊行した第二句集。処女句集「寒夕焼」以後、すなわち昭和44年から53年までの作四六二句を収めた。亡師鍊太郎以来「アカシヤ」が提唱し続ける新しい抒情の確立、生活のうたごえを实践した好句集。(盆の月兄弟淡くなりけり)などの句は「北海道文学全集」(立風書房)にも採録された。(園田夢蒼花)

(園田夢蒼花)

小笠原賢二 昭21・4・15(昭56) 「編集者、批評家」留萌管内増毛町生まれ。増毛高校を経て、50年法政大学大学院日本文学科修士課程修了。「星雲」同人。48年以降「週刊読書人」編集部勤務。多彩な問題提起を企画し、論壇の活性化に貢献。主著「黒衣の文学誌」(昭57、雁書館)は、水上勉、吉本隆明等二十七人の文学者の(創作工房)を探訪。文学の現況と未来像をめぐる新しい文学考現学の確立を志向している。(千葉宣一)

(千葉宣一)

小笠原克 昭6・9・3(昭31) 「評論、近代文学研究」小樽市生

まれ。筆名大炊絶。小樽潮陵高校から北
大大学院国文科修士課程修。同文学部助
手を経て現在藤女子大学教授。「私小説
論の成立をめぐる」(昭37・5、「群
像」)で第五回群像新人文学賞を受賞。
処女出版は「島木健作」(昭40、明治書
院)で、つづく「昭和文学史論」(昭45、
八木書店)は、小林秀雄らを軸とする昭
和文学史の、批評と研究双方からの位相
精査の成果。また同人誌「位置」を主
宰、43年創刊の「北方文芸」編集人を長
くつとめた。その間、北海道の文学への
広い涉猟と理論的構築に打ち込み、「日
本」へ架ける橋(昭47、辺境社)、「近代
北海道の文学」(昭48、日本放送出版協
会)、「北海道風土と文学運動」(昭53、
北海道新聞社)などにまとめる。その他
の著書に「伊藤整の青春(上)(下)」、「
(昭50、北書房)」、「野間宏論」(昭53、
講談社)などがある。(日高昭二)

小笠原洋々 おがさわら 明13・昭36(1880-1961)〔俳句〕秋田県生まれ。本名不詳。正岡子規門下で日本派の俳人として注目されていた石井露月が、郷里秋田から明治33年に「俳星」を創刊したが、45年に休刊。その後露月は「雲蹤」を創刊し、大正15年に島田五空が改題して再刊、のち岩動炎天を経て小笠原洋々が主宰した。洋々は、明治43年秋田から来道

隻を持つ大綱元であった。明治29年松城小学校に入学したところから家業が傾きはじめ、37年に父の兄である大地主山田吉兵衛を頼って庁立小樽中学校(現潮陵高校)に進んだ。この頃から絵と文を好んだが、在学中に生家は没落、一家は吉兵衛の庇護のもと小樽に移住した。42年に小樽中学を出て上京し、太平洋面研究所に通ったが、志を得ず43年小樽に戻り小樽税務署に勤めた。その年に旭川の第七師団騎兵第七聯隊に入隊、在隊八カ月で税務署に復帰。大正3年ふたたび上京して早稲田大学英文科に入学した。在学中本格的に小説を書き始めたが、その間予備役召集で三週間第七師団に再入隊。6年新愛知新聞の懸賞小説で「涯なき路」が一等に当選し、翌年同紙に連載された。続く「影」が文壇への初舞台。8年早稲田大学を卒えて博文館に勤め「文章世界」の記者となる。9年に発表した「泥濘」をはじめ「軍馬の死」「惨めな戯れ」「兵営時代」などによって新進作家としての地位を築いた。10年に短編集「涯なき路」と長編「青春」を新潮社から刊行し、秋にはフランスに遊学した。翌年帰国してコント文学を紹介提唱。徳田秋声に師事し、同郷の中村武羅夫と親交を結んだ。14年に「文芸日本」を主宰し、その年創刊の「不同調」の同人とな

して「俳星」系俳人を集め、大正3年に「札幌俳句会」を創り、昭和11年大野宗軒らと「木曜会」を結成する。「俳星」は、日本派では「ホトトギス」に次いで刊行された俳誌で、露月の主張した詠嘆に根ざした写生道を守り、日本派のなまかな写生句が東北の風土と重なって骨太な俳風を形成した。東北地方を中心に日本派の中心的存在であったが、洋々が来道してすぐ「俳星」系俳人を糾合した経緯からみて、かなりの「俳星」系俳人がいたものと思われる。大正期に「俳星」が休刊したこともあり、自由律俳句を一時試みた。河東碧梧桐が、昭和2年二度目の来道旅行に際して、札幌で洋々の斡旋を受けたことが、碧梧桐の主宰誌「三昧」にも記されている。

〔新涼〕 あき 句集。昭和18年9月私家版。明治33年以降四五年間の作品を収録しているが、集中には新傾向の自由律俳句は一切含まれていない。定型を墨守した平明にして深奥な花鳥風月の風物詩が、その主体を成していることも興味が深い。(木村敏男)

岡 千仞 お千 天保4・11・2(1833-1914)〔漢学〕仙台市生まれ。家は仙台藩の大番士。同藩の藩学養賢堂に学び、二〇歳で江戸に出て昌平黌に学ぶ。のち仙台に帰り養賢堂

り、昭和4年には「近代生活」に参加し新興芸術派の一員として活躍した。私生活では妻がugguggと変わり、銀座の茶房で働いていた第四の妻との逃避行が一連の名作を生み、戦争中の「伸六もの」は岡田文学の最後を飾った作品群。この作家の本質は人生派的私小説にあった。第七師団での生活を扱った処女短編集「涯なき路」に顕著である。本道取材作も多く、素材面からみて軍隊もののほか、「母」などの故郷もの、「煙」「熊」などの税務署時代のもの、三つの系列に分けることができる。

〔涯なき路〕 あき 短編小説集。大正10年2月、新潮社発行。「新進作家叢書」第二六巻。処女出版で、五編収録。うち「涯なき路」「惨めな戯れ」「泥濘」「軍馬の死」は旭川第七師団に入隊した折の体験をもとにしたもので、この作家の代表作群。軍隊生活がいかに人間を痴呆化するかを描いて注目された。ほかに「監獄附近」を収める。(木原直彦)

岡田耀三 あき 大13・1・21(1894-)〔詩〕札幌市生まれ。幼時、北見市に転住する。昭和21年戦後北海道における最初の文芸誌「私たち」創刊に加わり、小説「死の家」や詩を発表する。47年詩集「無限の空腹」私家版を出版する。後に北見現代詩話会の創設に参加

の教授となったが、明治3年東京に出て大学助教となり、東京府学教授となる。修史館協修、東京図書館長を歴任する。著書三百余巻を数えるが、明治13年、22年、34年の三回来道し、「北海遊乗」「北海詩草」等を著した。(小野規矩夫)

緒方厚子 あき 明41・11・18(1898-)〔俳句〕釧路管内厚岸町生まれ。文学好きの父の影響と豊かな才能で、昭和6年発表した創作「流水」は評価を受けた。女性カメラマンとして渡満結婚、「ホトトギス」系俳人に教えを受け俳句に入る。敗戦後の苦難は句文集「たむけくさ」(昭49)にくわしい。釧路居住後「えぞにう」に入会、のち編集同人。「鷹」同人。59年福岡へ移住した。(鈴木青光)

岡田喜秋 あき 大15・1・2(1899-)〔紀行〕東京生まれ。東北大学卒。雑誌「旅」編集長をつとめる。本道紀行記が多く、それらは「思索の旅路」「すべてふるさと」(東日本編)、「心にふれあう自然」「旅に出る日」「旅情百景」などに収められている。横浜商科大学教授。(木原直彦)

岡田三郎 あき 明23・2・4(昭29・4・12(1890-1964)〔小説〕渡島管内松前町生まれ。作家牧屋善三は実弟。父祖は近江商人で、父の代には漁船十数

し、詩集「風の記憶」を同会から出版して高い作品評価を受ける。詩誌「北域」「れん」同人で、地域文学運動の指導的立場にある。(新井章夫)

岡野知十 あきのち 万延元・2・19(昭7・8・13(1860-1932)〔俳句〕日高管内日高町生まれ。本名敬胤、別号正味。新聞記者を経て文筆家。明治10年函館毎日新聞の記者、のち主筆となり、その後東京へ出て報知新聞を経て文筆生活に携わった。俳句とのかかわりは、明治28年毎日新聞に「俳壇風聞記」を執筆し、俳壇の関心を集めたことに始まる。翌29年角田竹冷により結成された「秋声会」に参加した。「秋声会」は、正岡子規の「日本派」と対抗する旧派の集団であったが、のち室積徂春らと「雀会」を興し、34年に「半面」を創刊、「新々派」と称した。「半面派」は「日本派」の写生的句風や、「秋声会」の談林的風潮に対し、主観尊重を重視して俳句の歴史的研究に熱意を入れた。著書に「晋其角」

「俳壇風聞記」「湯島法楽」「蕪村其の他」など。句集に「鶯日」がある。(秋草やどの花折らば人の眉)(木村敏男)

岡部博 あき 昭29・6・18(1904-)〔俳句〕空知管内妹背牛町生まれ。農業。一三歳から作句する。高校時「水原帯」に入会。昭和50年「海程」同人。

51年高橋信雄と同人誌「秒間」終刊まで発行。53年「鋭角」同人。現代俳句協会員。(山田緑光)

岡村正吉 おかむらま 大11・8・13 (1925) (行政) 胆振管内虻田町生まれ。

東京大学法学部卒。東京築地市場内の会社に勤務後、昭和27年北海道庁に入り、42年道教育長、47年退職。49年から虻田町長。著書に「町長トソビ」「北海道に生ける一人物論」「有珠山噴火に負けてたまるか」など多数。(工藤欣弥)

岡本かつ子 おかもと 明38・12・6 (1948) (短歌) 留萌

市生まれ。筆名松橋かつ子。留萌高女在学中から短歌に親しみ、大正15年岡本高樹と結婚、「潮音」入社、幹部同人。昭和5年「新壑」創刊に参加、幹部同人、選者。長期にわたって「新壑」編集発行に当たった夫君を援けて尽瘁した。(六月の乱層雲よさはやかにレモンしぼらむわが身のために) (茂木健太郎)

岡本高樹 おかもと 明36・3・10 (1903) (短歌) 兵庫

生まれ。本名増成。幼時両親と共に渡道して下富良野に居住。旭川中学校を待学生で卒業。北大土木専門部に無試験入学を許され、橋梁力学を専攻。同大学助手から昭和17年室蘭高等工業学校に転じて工専教授。明德寮寮監を兼ね、学生達に

慕われた。24年呼吸器を病んで入院。十余年に及ぶ闘病生活にもついに回復することなく、札幌で長逝。大正9年「潮音」入社、幹部同人。昭和5年太田水穂の勧めにより小田観堂を援けて「新壑」を創刊。十数年間自ら編集発行の任に当たり、選者。極めて熱心に社友の育成指導に尽力した。27年に室蘭で歌誌「いぶり路」を発刊。ここでも地域後進の作歌指導に努力した。著書は歌集「青鷲」と、かつ子夫人の手に成る遺歌集「一代雑種」がある。高樹は「新壑」の創刊についで、観堂と相談しながら水穂と打ち

合わせていたことが太田水穂全集(昭和34、東京近藤書店、全10巻)中の水穂書簡集に明らかであり、昭和4年高樹宛のそれには細部にわたっても注意を与えてあり、当時の経緯も窺われて興味深いものがある。当初誌名は「太蘭」を考えていたのに水穂は「太蘭」を落第です。「新壑」としてはいかがですか。小田君にもよろしく」とある。(深海の盲魚に似たる嗅覚に沁みてかなしく栗の花匂ふ)

岡本昼虹 あかほり 明32・8・18 (1903) (俳句) 松山

市生まれ。大正4年義理の叔父を頼り渡道。庁立小樽商業学校卒。早川商店に就職。大正9年同僚の比良暮雪の勧めで俳

に参画し後に支部長を継ぐ。「北見歌人」の編集委員。北見地域歌壇の結束、各地グループの連絡機関としての役割を果たす。33年処女歌集「夜の海流」を出版し「新壑」中堅としての地位を固める。この30年代の「新壑」は、中城ふみ子が全国歌壇に脚光を浴びた後、山口雅子が短歌研究新人賞特選一席に入賞したのをはじめて若く豊かな才覚者が多く輩出した。一時期はそれらの牽引者でもあった。

(一人の死は神のてのひら列島の死は悪魔のしらい頭がい骨)。作風はすでに後年の、万象への鎮めた思惟のあわいから宗教的な迷界へさすらうような孤独感を象徴的にうたい込む詞の華麗さがみられた。その當為は第六歌集「冥龍祭」あたりから顕著になりついに第十二歌集「天の層」まで積み上げてきた。自らの死亡診断書を書く死の形象や、超汎神的なイメージ等もその根本は孤の恐怖感と望遠感が相乗された魂の存在意識となり、他界から自らを焙り出す超空間地帯を展開。54年滝川市で「去風文学展」を開き、58年札幌で「去風文学を語る会」が開かれた。(永平利夫)

沖口遼々子 おきよこ 明42・8・8 (1909) (俳句) 愛媛県生まれ。本

名三郎。国学院大学卒。樺太で教職につき戦後北海道へ引き揚げ。釧路北陽高校

句入門。大正11年一年志願兵とし松山連隊に入隊。同年高浜虚子に師事、12年よりホトトギス、枯野、芭蕉に学ぶ。昭和5年から13年までの期間に、東京、静岡に勤務し休俳。14年小樽に帰住して再び作句をはじめ。19年応召、中国上海より大陸南下作戦に従軍し敗戦、捕虜の期間を経て21年帰国、同年より「雲母」一筋に学び、飯田蛇笏、飯田竜太に師事。23年北海製紙常務取締役就任。激職の間になつて比良暮雪と共に雲母小樽支社の指導にあたる。「雲母」同人。句集「蝦夷薊」(昭49)。(菊地滴翠)

岡本正敏 おかもと 昭7・1・2 (1905) (俳句) 樺太大泊生まれ。北海道

大学医学部卒。医院経営、東日本学園大学教授。昭和26年「玉虫」、28年「雲母」に入会。46年「青樹」「北の雲」同人となり俳壇時評連載。岐阜菓大在学中より長谷川双魚の指導を受け「青樹」主要同人として活躍。(聴診器ことりと置けば雪嶺あり)は「雲母」巻頭作品で、飯田竜太に激賞された。(鳥 恒人)

岡山去風 おきたかぜ 大12・4・10 (1903) (短歌) 砂川市生まれ。本名英吉。

「新壑」「潮音」「砂金」「彩北」等の同人。昭和25年北見で創刊した「かりがね」ですべて新人中堅として活躍。27年「新壑」入社と同時に新壑北見支部結成

昭51・5・20 (1884) (俳句) 東京生まれ。旧制東京帝国大学文学部卒。昭和女子大学、清泉女子学院等の教授、講師を務めた。老鼠堂木機の「俳諧自在」により句作に入る。「卯杖」「半面」等を経て、河東碧梧桐の新傾向運動に共鳴し、俳号を愛桜から井泉水に改め、明治44年碧梧桐と共に「層雲」を創刊。印象的象徴的な自由律俳句の理論確立と実践につとめ、没年まで「層雲」を主宰した。北海道の自由律俳句には、碧梧桐と共に大きな影響をもたらしたが、大正11年から北海タイムス(現北海道新聞)の自由律俳句欄選者を担当し、のち山岡夢人選として昭和15年まで続いた。16年北海道を訪れ、七戸黙戸らの案内で各地の自由律俳人と交遊を深めた。著書に「ゲエテ言行録」「俳壇傾向論」「井泉水句集全八巻」「井泉水句集」などがある。(馬よ人間の笠から耳を出して) (木村敏男)

奥田達也 おくだたつ 昭5・8・20 (1900) (小説) 釧路市生まれ。小説「思慕の影」を「北海文学」(昭28)に掲載。一時「ふいりあ」の復刊にかかわったが間もなく「文学創造」「脚本研究」(昭33)を創刊し、自ら小説「発明」を発表した。「発明」は素材の扱いに特異な手法を用いた作品で注目された。「釧路現

萩原井泉水 はぎわらひみづずみ 明17・6・16 (1902) (小説) 神谷忠孝

調査研究部に勤務。著書「女が職場を去る日」(昭51、新潮社)、「銀の国・ちちはの群像」(昭52、同)、「平安なれ命の終り」(昭59、同)、「妻がひそかに決意する時」(昭58、祥伝社)、「働きながら親を見る」(昭59、学陽書房)など。

代文学選集」第九卷(昭46)に収録された。著書に「釧中物語」(昭52)がある。

(鳥居省三)

奥保 明40・9・10(昭47・9・2 (1907-1972)) 「詩、エッセー」

三笠市生まれ。札幌師範学校在学中より詩作で名をあげ早くより「日本詩壇」に所属して発表。三笠市ほか空知管内で教員経験、岩見沢市で学校長となる。婦人の詩グループを組織してその影響大きく、没後もなお組織は解体せず継続している。「日本未来派」の古くからの同人。吉田一穂と親交篤く、とくに岩見沢に呼んでの講演数回。和田徹三の「湾」の同人となったのは死に近い数年間であった。子供の詩の指導には異数の志を抱き石狩川の氾濫に際して「怒れる石狩川」という子供詩集を刊行(昭38)。詩集にはまともならなかったが全道各地の学校を訪問して子供たちの教育の実態を教育雑誌に連載した。入江好之と二人で詩と随想誌「季信」を刊行(昭29)したが、エッセイストとしての奥保の真価が十分発揮された。北海道詩人協会創設の際発起人となり組織の原動力になった。発足の4年前に(昭27)その前駆ともいえるべき「日本凍苑」に奥保が「北海道詩壇史」という貴重な一文を書いている。詩集は「ブルガトリオの路」(昭33)、「冬の門」

(昭41)の二冊で前著は北書房版、後著は東京から。古い詩歴がありながら個人詩集二冊というのは少ない憾みがあるが、奥保のすぐれた資質をそのままに伝える詩集として、評価をうけている。

(入江好之)

小国孝徳 大6・5(1917)

〔短歌〕札幌市生まれ。医学博士。昭和16年「アララギ」に入会。18年9月北海道大学医学部卒。軍医としてニューギニアへ赴任、その後二年間の軍医生活は辛酸をきわめ、この時の感慨は処女歌集「一つ螢」(昭37・2)に結実している。21年に復員して北海道大学産婦人科教室に復帰、戦後は雑誌「羊蹄」創立に参加、「あかだも」「歩道」を経て、30年からは「北海道アララギ」創刊に参加する。この間、24年には小樽協会病院産婦人科医長として赴任し、31年小樽市で医院を開業、かたわら日本産婦人科学会の評議員、北海道産婦人科学会理事の要職にある。29年から日本医歌人クラブ北海道地区委員、北海道歌人会幹事、46年から北海タイムス歌壇の選者をつとめる。47年歌会始詠題に佳作入選。幅広い活動を続けながら、一貫して「個」の詠嘆を生活にもとづいて行うという姿勢を保ちつづけている。47年に第二歌集「冬の渚」を、57年に第三歌集「翼の灯」を刊

行し、現在も「アララギ」「北海道アララギ」を主たる発表の場とし旺盛な作歌、批評活動を展開している。翼端に小さき灯りのみ見えてただ暗しみちのく八千米の空)

(内田 弘)

小国露堂 明10・10・12(昭27・2・4 (1877-1952)) 「新聞記者」

岩手県生まれ。本名善平。明治37年頃渡道。函館新聞、北門新報、小樽日報の記者を経て明治42年釧路で東北北海道新聞を創刊したが失敗。後、故郷で宮古新聞を発行し、主筆として活躍した。北海道時代、石川啄木の就職(北門新報、小樽日報)に労をとっている。また、社会主義思想の面からも啄木に強い影響を与えた。

(福地順一)

奥野健男 大15・7・25(1929)

〔評論〕東京生まれ。東京工業大学生時代、伊藤整に識られた。「太宰治論」(昭31)で登場以後、文壇の指導的評論家の一人として活躍。「文学におけるぼくの唯一の恩師」についての三〇年近い論考をまとめた「伊藤整」(昭55・9、潮出版社)がある。

(小笠原克)

小黒 輝 明18・8・24(昭46・9・10 (1885-1971)) 「昆虫学、動物細胞学、随筆」

東京生まれ。明治44年東北帝大農科大学(現北大農学部)卒。昆虫学の日本での祖とも言うべき松村松年

の門下として、トンボの分類学的研究の先覚者。北大教授として、理学部長、低温科学研究所長などを歴任。のち国立遺伝学研究所長。傍ら随筆をよくし、「虫の進軍」(昭21)は北海道の昆虫についての科学随筆として佳品。(和田謙吾)

小黒秀雄 明34・9・9(昭15・11・20 (1901-1940)) 「詩」

小樽市生まれ。少年時代を樺太で過ごし、泊居尋常高等小学校を卒業。漁場の入夫をはじめ多くの仕事に従事する。大正11年旭川に来て旭川新聞社に入社、文芸活動を始める。14年上京、「愛国婦人」に童話「焼かれた小魚」を発表。昭和2年旭川新聞社に復職、文芸欄担当。今野大力らと「凹筒帽」創刊。2年上京、詩人遠地輝武を知りプロレタリア文学運動に接近。生活と喘息に苦しむ。6年「プロレタリア詩」に「スパイは幾万ありとも」を発表。9年「詩精神」に「馬上の詩」を発表。プロレタリア文学運動の退潮期、不安の文学の時代に、日本の中国侵略戦争の拡大の時期に、「詩精神」「詩人」「現実」等に拠り、精神的に、多弁、哄笑の詩を連打、活躍期をむかえる。プーシキンのロシア詩人の研究を行い、異色の絵を描き、画論を書き、長詩にいくど朗読を行う。しゃべり捲くれという創造的で不屈な精神を発揮、多面多彩の

活動をくりひろげていく。10年5月三四歳、「小黒秀雄詩集」を耕進社から上梓、6月長編叙事詩集「飛ぶ鳩」を前奏社から上梓。「改造」に「鶯の歌」。中野重治らとサンチョ・クラブをつくり「太鼓」の同人となり諷刺詩にむかう。11年「馬車の出発の歌」。発表場面がせばれるなかで本庄陸男らと「槐」をつくる。14年平野謙らと「現代文学」をつくり、「偶成詩集」「逍遙詩集」「流民詩集」等を発表。15年刊行予定の「流民詩集」は未完におわる(昭22、中野重治編、三三書房)。結核のため死亡。遺稿「無題」。

め、「雲母」「雲」に投句、「水下角」の復刊発起人となり、33年深谷雄大とともに「未明」創刊発行。48年自註句集「奥村炬雷集」刊行。(鳥 恒人)

奥山俊美 昭13・1・13(1688)

〔詩〕苫小牧市生まれ。苫小牧工業高校卒。詩誌「ふっふし」「パンと薔薇」同人を経て「錯地」同人。道詩人協会会員。昭和50年の詩集「赤海」では公害を主題とし、その後も状況を鋭敏にとらえる詩風を特色とする。(光城健悦)

奥山 亮 明45・3・27(昭48・5・21 (1912-1973)) 「歴史」

愛媛県生まれ。東北学院卒業後、樺太、札幌の高校教諭を歴任。昭和26年に北海道地方史研究会を結成し、「北海道地方史研究」を創刊、48年2月までに九〇号を世に送った。昭和25年に従来の官製史的研究と別な理論に基づく「新考北海道史」を世に問い、その後の道史研究に大きな影響を与えた。47年北海道文化奨励賞受賞。(小野規矩夫)

小黒葩水 明34・7(昭44・3)

〔短歌〕三笠市生まれ。(1901-1969) 「短歌」三笠市生まれ。本名惣吉。昭和3年札幌師範学校専攻科卒。釧路市、空知管内で教員。34年江別市に定住、川村寿人に師事。「新墾」同人、元江別短歌会長。合同歌集「白鳥の群」ほか。40年新墾新人賞を受賞。

(川村溥人)

尾崎士郎 おしろう 明31・2・5、昭39・2・19 (1898-1964) 「小説」愛知県生まれ。早稲田大学政治経済科に入学したが、学生運動のため除名処分を受ける。代表作に「人生劇場」など。大正10年1月に時事新報の懸賞短編小説で第二席になったが、翌年暮れに第一席だった藤村(宇野)千代を譲り、同棲から結婚へと進んだ。「馬喰一代」の作者中山正男と親交を結び、昭和16年8月から北海道タイムス(現北海道新聞)に連載した長編小説「春の原始林」(昭17・2、平凡社)はこの中山正男がモデルである。

(木原直彦)

尾崎卓司 たけし 昭6・2・14、(1937) 「短歌」稚内市生まれ。札幌通信講習所卒。稚内、旭川電報電話局に勤務し48年退職。現在旭川文学学校講師。通信業務に携わった関係上、情報機に詳しく軍事評論家としても注目されている。22年「新墾」入社、以後「凍土」「素」「北海道青年歌人会」「北の会」等を経て無所属。39年角川短歌賞候補となる。程なく短歌評論の執筆に傾斜、尖鋭な好評論を書く。著書に「尾崎卓司評論集・光芒遙かなり」がある。(鈴木杜世春) 尾崎道子 みちこ 昭8・3・2、(1938) 「詩」旭川市生まれ。少女期新聞の

詩壇投稿をきっかけに詩作をはじめ。詩誌「四季」に作品を発表、詩誌「東京四季の会」会員になる。昭和54年より週一回新聞紙上に「尾崎道子の詩」を連載。新聞のコラムなどにも軽妙なタッチの執筆をしてきた。詩集「銀の猫」「四季の木立」。旭川詩人クラブ会員。

(東 延江)

小山内竜 りゅう 昭3・8・10、(1928) 「俳句」札幌市生まれ。本名長内辰雄。国税職員を勤めた。昭和21年「壺」に加入、23年同人。「水輪」「土曜」にも出句したが斎藤玄への傾倒激しく、句集「壺玄」は玄一周忌追悼のための句集である。「にれ」「葦牙」「梓」等に所属。(園田夢蒼花)

長見義三 よし三 明41・5・13、(1918) 「小説」空知管内長沼町生まれ。大正3年追分町に移り、10年追分小学校を卒業して庁立小樽中学校に入学。13年一家は穂別町に移住。翌年小樽中学を四年で中退して穂別に帰ったが、小説の素材の大半はこの地で得る。昭和3年札幌の北海道農産物検査所に勤めていた折に「母胎より塚穴」が小樽新聞の懸賞小説一等に入選した。7年に選者の谷崎精二を頼って早稲田大学予科第一高等学校に入学。9年12月号「紀元」に発表した「姫鱈」は代表作。10年4月に早大仏文

ミチ夫人との遺句集「冬一樹」刊行。

(鈴木青光)

忍 漱泉 しゆせん 明32・3・19、昭24・3・23 (1899-1949) 「俳句」富良野市生まれ。本名宗光。大正10年俳誌「時雨」の創刊と共に入会。牛島藤六に師事。「時雨」廃刊後は「葦牙」長谷部虎杖子に師事し、長年にわたり富良野地区支部長として活躍した。(太田耕十子) 渡島敏郎 としら 大15・10・10、(1926) 「小説」渡島管内八雲町生まれ。本名野田芳満。昭和52年「草の城」で北海道新聞社の第五回日曜版連載懸賞小説に当選。シナリオ(ラジオ)に「発破」「指輪」など。道内市町村史、団体史などの執筆、編集に参画。(稲葉吉正)

小田観螢 かんへい 明19・11・7、昭48・1・1 (1886-1973) 「短歌」岩手県生まれ。本名哲弥。明治33年北海道に移住。その後「金箭社」同人、42年「創作」に投稿。大正4年「潮音」に入社。没年まで選者。昭和5年「新墾」創刊、主宰。著書に「隠り沼」「忍冬」「夫人米倉久子と共著」、「蒼鷹」「暁白」「天象」「晩暉」「小田観螢全集」「小田観螢評論集」がある。作風は生命感の強いものを持ち象徴を体している。大正14年庁立小樽中学校(現潮陵高等学校)教員となり昭和21年まで勤務。北海道歌壇の草分

けとして、明治、大正、昭和にわたる歌業七十余年、北海道歌壇の功労者であると共に、日本歌壇の小田観螢であった。また北海道新聞歌壇選者として終始後進者を指導する。北海道文化賞、北海道新聞文化賞、小樽市功労者賞等数々の栄誉にかがやいた。歌碑は小樽市、富良野市等七カ所に建立されている。新墾社では昭和48年1月米寿の祝賀会を計画していたが、それを待たず心不全のため急逝。観螢は小樽中学校教員の前、苦前、砂川、中富良野の教員をつとめ、明治44年富良野市の下富良野小学校に教鞭をとる、大正5年郊外の鳥沼小学校長として着任した。鳥沼時代の一〇年は、観螢にとって言語に絶する逆境の連続で、貧窮のうちに夫人をうしなった。この富良野時代の門下生で歌壇に進出した歌人は、岡本高樹、山名薫人、栗原俊夫、野原水嶺、金子静光、清水権六、川仁純子、中田緑雨、赤倉憲一、高松竹次、西川青涛、堀恭一、松田宗一郎らである。(火口原湖摩周湖暮れて永劫を鳴らすと銅羅の月懸りたり)

(宮崎芳男)

小田切進 せき 大13・9・13、(1918) 「評論」東京生まれ。文芸評論家小田切秀雄の弟。早稲田大学国文学科卒。立教大学小田切ゼミを中心とした文学展を契機に日本近代文学館設立の産婆役を務め、専務理事として高見順、伊藤整など歴代理事長を補佐し、現在は理事長。昭和39年の文学碑「石狩川」除幕式、41年の「北海道文学展」開催、42年の「北海道文学館」設立などに助力し、北海道文学との縁が深い。(木原直彦) 小田切秀雄 ひでゆき 大5・9・10、(1916) 「評論」東京生まれ。法政大学国文学科卒。同大教授。戦後「近代文学」の創設、新日本文学会の設立に参加し、以来旺盛な批評活動を展開、現代文学を触発しつづけている。昭和50年「現代文学史」上下を刊行した。日本近代文学研究所代表。「私に見た昭和の思想と文学の五十年」を「すばる」に執筆中。創樹社刊「小熊秀雄全集」全五巻(別巻一)を編集、第四巻に解説を書いている。北海道の文学にかかわりが深い。

(高野斗志美)

小田欣一 おだいきち 昭2・8・16、(1927) 「俳句」札幌市生まれ。昭和28年北海道大学医学部卒。日赤旭川病院医師。昭和21年以來加藤楸邨の「寒雷」に参加。44年同人誌「広軌」創刊と同時に参加。57年より「梓」に参加。医師という日常の営為から目を反らさず、明快で骨太い、体温の伝わってくる作風。旅中吟に佳句が多い。現代俳句協会員。(後藤軒太郎)

小田邦雄 くにち 明45・1・24〜昭40
 ・5・17 (1912〜1965) 「詩、評論」江別市生まれ。「平原と花」は清純な詩感を出した詩集。詩評にあたっては厳しい態度を崩さず敵も多かった。北海道から詩の中央誌に匹敵するものを、との考えを推進して企画。大江満雄を編集人に委嘱して入江好之とともに「亜細亜詩人」を創刊して全国配布にした。評論活動の本命は宮沢賢治研究であるが全国の宮沢賢治研究にさきがけた小田邦雄の「宮沢賢治覚え書」(昭28)は、もつともすぐれたもので、詩的感覚のすぐれた点が遺憾なく発揮されている。宮沢賢治については研究論文、随想的なものをふくめて他に三冊ある。彼の意中には日本の詩人たちの「詩人研究」「詩人論」を書く資料が集められていることをたびたび示唆していた。その途中の思いたつての研究であるが知里真志保と共著「ユウカラ鑑賞」(昭56)を刊行しており、詩的感覚のよさがユウカラ鑑賞に光を与えている。また画家を育てることも異数の力を発揮、詩集「日本凍園」の画家の採択にその功をみる。(入江好之)

小田幸子 さち 昭3・1・21 (1938) 「俳句」空知管内秩父別町生まれ。昭和19年市立旭川高女卒。21年「霧華」に投句。22年「水輪」に投句。24年「水

化の丘」、53年「運河の周辺」の三冊がある。(北川頼子)

小田信一 のぶいち 明26・9・昭57・1 (1893〜1982) 「短歌」岩手県生まれ。小学校四年修了後すぐに実業につき、「文章倶楽部」「文章世界」への投書家時代を経て、「とねりこ」「新進歌人」「創生」「新生」「原始林」等に拠り作歌を継続。小樽、樺太、美唄、仙台、札幌と各地を転住、自ら流浪の人生と称した。死の直前まで、温厚、篤実な人柄と真摯無縫な詠風を保った。「山峡の音」「光陰」の二歌集がある。(田村哲三)

小田節子 せつこ 昭4・4・29 (1929) 「詩」小樽市生まれ。庁立小樽高女卒。「山音文学」「あさゆう」「小樽詩話会」に所属。昭和50年佐藤武と詩画集「回想」を出版。個人誌「風の結晶」は56年より発行。北方的な人情をとらえた詩が多い。(小松茂)

小田哲夫 てつお 大2・12・15 (1913) 「短歌」留萌市生まれ。昭和6年小樽郵便局に就職。以後電気通信関係に従事する。15年から終戦まで満州電電に勤務して小樽に帰還、小樽電報電話局につとめて定年を迎える。昭和10年に「新壘」、翌年「潮音」に入社、新進歌人として注目され、13年に改造社から出版された「新万葉集」には、先輩歌人が入集

輪」同人となる。32年より「寒雷」に参加し、以後加藤楸郎に師事。42年「扉」同人。44年より同人誌「広軌」に拠る。45年北海道俳句協会賞受賞。53年句集「今朝の雪」上梓。(後藤軒太郎)

小田重子 しげこ 明27・1・15 (1884) 「短歌」小樽市生まれ。北海道庁立小樽高等女学校を経て大正6年東京女子高等師範学校(現お茶の水女子大学)卒。旭川市立北都高等女学校につとめる。大正10年母校の庁立小樽高等女学校(現小樽桜陽高等学校)に勤務し、昭和16年退職。昭和5年「新壘」「潮音」入社。14年2月小田観瑩に嫁し、以来形影相添うて観瑩をたすけた。37年「潮音」幹部同人、「新壘」選者。42年7月第一歌集「裸木」を上梓出版。この歌集には「花鳥風月」に加えて人事詠が織り込まれ、戦時体制下での実世間的なものが続々と詠出されている。また孤愁や焦燥を内包したものもある。観瑩が逝去してからは、推された「新壘」代表。昭和56年1月病氣のため「新壘」代表を退いて顧問となる。同年7月第二歌集「海の落暉」を刊行。対象との感合に新味。日本歌人クラブ会員。道歌人会員。八食甚の月まがまがしく空にあり地はしんとしと一白の雪。(宮崎芳男)

小田島紀多子 きよこ 大7・2・10 (1906)

されないうで五首も入集した。満州時代は奉天が勤務地で、この地や新京などに潮音同人も比較的多かったので毎月の歌会、「新壘」や「潮音」への送稿を欠かさなかった。戦後「新壘」の復刊や小樽新壘歌会の中心歌人として活躍、「新壘」の選者や北海道歌人会賞の選考委員もつとめる。「新壘」「潮音」の幹部同人。53年には、昭和12年から52年までの作品の中から厳選した六〇〇首を収める第一歌集「時間と海」を出版、この歌人の作風の変遷を鳥瞰することができる。作風は、「青春の遺産である初期の清新甘美な作風から次第に理知に傾斜し、抒情性詠嘆性を抑えた思弁的作風となり、社会派、人生派ともいべき独自の作品の世界を形成している。表現は平明にして軽妙闊達親しみ易い庶民の顔を感じさせるのが魅力」(浜一郎)である。へ自らを掴み得ぬまま過ぎゆきて自分があるとき最も遠し(永平利夫)

小田基 もと 昭6・6・7 (1931) 「小説」樺太生まれ。東北大学大学院修。東北大学教授。「札幌文学」「位置」から「東北文学」「象形」同人に移り、創作には「乾いた朝」、著書に、「ジヨイスへの道」などあり、「国際作家プログラム」客員作家。(小松茂)

落合京太郎 きやうたろう 明38・9・26 (1913)

(1917) 「短歌」小樽市生まれ。庁立小樽高女卒。昭和11年に札幌鉄道管理局に就職。48年退職後は鉄道用品荷役作業会社に勤める。27年「新壘」に入社、32年に「潮音」に入社。国鉄歌人会及び文学会員としてこの分野でも活躍が著しい。57年に北海道歌人会競詠準入選。歌集「楡の道」(昭和42・9、東京新星書房)を上梓。八若さが吾れを包みし時期も遠くなり虚構めく北国の真冬の星座(椎名義光)

小田島京子 きやうこ 大12・3・30 (1903) 「短歌」小樽市生まれ。道立紋別高女卒。新十津川、滝川、夕張、赤平等の小中学校教員を勤める。昭和35年「新壘」に入社。地力を発揮して42年に新壘新人賞、45年に新壘賞、57年に小田観瑩賞を受賞したが後に退社、現在「音」に所属。江別市在住。八千万のこまのちよ生きあるも仮象と思ふいちめんの苗(椎名義光)

小田島思遠 しおんげん 大4・7 (1915) 「短歌」高知県生まれ。本名一雄。昭和11年小樽高商卒。戦前より口語短歌誌「青空」に所属、昭和41年「原始林」に入社。その後、「原型」及び「林間」にも出詠。日本歌人クラブ会員。会社役員を引退の後は、書道の指導に当たっている。歌集は45年「幾歲月」、49年「風

(1906) 「短歌」静岡県生まれ。本名鈴木忠一。東京帝国大学法学部卒。各地地裁判事、最高裁人事局長、司法研修所長を歴任。弁護士。大正14年「アララギ」入会、土屋文明に師事。現在アララギ編集委員及び選者。昭和33年随筆集「菴没羅の花」があるが、歌集を持たないことに一つの見識を示す。昭和9年土屋文明らと来道、道東を巡り、支笏湖アララギ歌会に出席した。東京在住。(笹原登喜雄)

落合恒雄 つねお 昭6・2 (1931) 「短歌」空知管内上砂川町生まれ。昭和25年頃より作歌、中空知短歌会が30年に結成された当時、結核療養所に入所中だったが療養グループの中核として参加。「砂川短歌」「アララギ」などを経て「原始林」入社後、34年原始林賞受賞。三井炭鉱砂川鉱業所勤務中より労働運動にも参加、理知的で重厚な作品のなかに近代人の憂愁がある。炭鉱事情悪化に伴って38年離道。(村井宏)

おな・しろ おなしろ 大9・2・4 (1920) 「評論」函館市生まれ。本名小名提郎。東京外語大学卒。東京新聞記者などを経て北海道教育大学函館分校で英文学を教授、現在同大学名誉教授。「函館勤労者文学」などを経て「表現」同人として評論主体に作品活動。「シエイクスピ

ア『解釈』考(昭49)53、「表現」、『鳴海仙吉』ほか(昭40、「表現」)など。最近は「思いつくまゝ」日本語の記述(一)、「+」を「表現」や「どんぐい」に連載。(安東璋二)

尾上柴舟 さいじょう 明9・8・20(昭32・1・13(1876~1957))『短歌』岡山県生まれ。本名八郎。東京大学国文学科卒。東京女高師、学習院、早大等の教授。大正3年「水鏡」を創刊、主宰。歌集歌書多数。書道の大家でもある。来道は二回あり、昭和10年8月には阿寒まで赴き、歌は「素月集」に、また26年6月には札幌を訪れ、歌は「ひとつの火」にそれぞれ収録。(中山周三)

小野規矩夫 のりこ 昭3・7・26(昭58)『歴史研究』札幌市生まれ。昭和60年まで北海道庁職員。札幌文学同人。昭和38年から56年まで北海道史編集所編集員として「新北海道史」の編纂に従事、主として近代社会文化史部門を執筆。論文等に「大正末以降の労働運動」「北海道における仏教教団の布教策」「北海道における社会教化団体の活動」「開拓と宗教」。小説に「大沢四郎の日記」「我がこのち」「にが風」など。現在、新札幌市史編集員。(工藤欣弥)

小野崎順子 のりこ 大9・1・7(昭36・9・25(1920~1961))『俳句』札幌

文がある。(白幡千草)
小野昌繁 のりこ 明40・1(昭51・7(1907~1976))『短歌』山梨県生まれ。総合誌「短歌研究」、短歌誌「むらさき」を編集発行。戦時中は小樽に経理将校として勤務。昭和30年8月来札して文芸講演会をひらく。その後、札幌雪祭りに来札。石狩にも何度か観光に來道。京都、奈良、吉野にも旅行。晩年は闘病生活に明けくれた。歌集は「曙光」ほか一六歌集出版。(気分よき今朝の目ざめは新聞の活字もおのづ大きく見ゆる)

小野村林蔵 のりこ 明16・1・22(昭33・10・11(1883~1965))『宗教』大阪生まれ。大正7年札幌北辰教会(札幌北一条教会の前身)牧師となり昭和34年辞任するまで四十余年にわたり同教会を全国有数の大教会に発展させた。戦前、宗教に対する国家権力の干渉に対し「神社に対する疑義」(大15)等で抵抗を示すが、教会擁護のため妥協の過程をたどる。昭和19年「言論出版教会集結社臨時取締法」で検挙される。著書に自伝「豊平物語」がある。(西村 信)

小野連司 のりこ 大7・7・14(昭54・6・13(1918~1978))『詩』函館生まれ。本名連治。函館商業学校在学中に肺結核を患い、昭和35年7月から国立北海

道第一療養所に入所。約四〇年間にわたる闘病生活で再三死線を彷徨、その都度不死鳥のように甦っては詩業に精魂を打ち込む。学生時代に保田与重郎の「日本浪漫派」の影響を受けた。昭和14年「日本詩壇」、15年「詩文学研究」の同人としてその特異な叙情詩風をみせ、太平洋戦争後は「濤」(函館)、「純粋詩」(東京)、「地球」(浦和)、「だいいある」(帆)(函館)の同人として活躍した。16年「13本目の万年筆で書いた詩集」にはじまって53年刊行「鱈屋繁盛記」までの一八冊の分厚い詩集は、いづれも一冊一編の連作叙事詩。その他に「肉体交響楽」「鶴詩集」など八冊の未刊詩集がある。それはケタ外れの智識とおそろべき想像力にささえられたロマンチズムの展開である。彼は詩人として評価される量と質をもっているが、同時に批評家としての業績も無視できない。戦後北川冬彦の「現代詩」に連載した「現代叙事詩論」はその方面でのライフワークであったし、文字通り縦横無尽に独特の刃をふるったが、ときにはプライベートな問題をかもしだしたりもした。彼には本質的批評家とともに世俗的批評家が同居していたといえよう。純粋詩功労賞、小熊秀雄賞、函館市文化賞をうける。53年死の二日前、出来上がったばかりの一八冊目の

市生まれ。本名武石素子。昭和16年東京女子美術専門学校卒業後、小樽双葉高等女学校で図画と習字を教えたが、20年病氣のため退職。以後死の直前まで子供に絵画を指導する。俳句は20年から始め「葦牙」「七曜」「緋衣」で精進、たちまち異彩を放った。没後一原九糸らの奔走で上梓した句集「葦木」には橋本多佳子、古田冬草が序文を寄せている。(園田夢實花)

小野恣流 しりゅう 昭7・7・20(昭58)『俳句』後志管内寿都町生まれ。本名繁。札幌短期大学商業科卒。中学校教員。昭和51年頃より句作。「アカシヤ」「壺」を経て「これ」「広軌」同人。「沖」所属。小中学生の俳句に力を注ぎ、後志教育実践奨励賞等受賞。(木村敏男)

小野寺テル てる 昭2・12(昭53)『短歌』釧路管内浜中町生まれ。小学校教員を勤めた後、昭和22年結婚。幾多の変遷を経て現在案内市街にスーパーストアを経営。43年「辛夷」入会。49年第一〇回中城ふみ子賞、57年第二四回辛夷賞を受賞。53年には北海道歌人会賞の受賞者となる。その作品は、一貫して生活に根ざした手堅い詠法をまもりつつ

道第一療養所に入所。約四〇年間にわたる闘病生活で再三死線を彷徨、その都度不死鳥のように甦っては詩業に精魂を打ち込む。学生時代に保田与重郎の「日本浪漫派」の影響を受けた。昭和14年「日本詩壇」、15年「詩文学研究」の同人としてその特異な叙情詩風をみせ、太平洋戦争後は「濤」(函館)、「純粋詩」(東京)、「地球」(浦和)、「だいいある」(帆)(函館)の同人として活躍した。16年「13本目の万年筆で書いた詩集」にはじまって53年刊行「鱈屋繁盛記」までの一八冊の分厚い詩集は、いづれも一冊一編の連作叙事詩。その他に「肉体交響楽」「鶴詩集」など八冊の未刊詩集がある。それはケタ外れの智識とおそろべき想像力にささえられたロマンチズムの展開である。彼は詩人として評価される量と質をもっているが、同時に批評家としての業績も無視できない。戦後北川冬彦の「現代詩」に連載した「現代叙事詩論」はその方面でのライフワークであったし、文字通り縦横無尽に独特の刃をふるったが、ときにはプライベートな問題をかもしだしたりもした。彼には本質的批評家とともに世俗的批評家が同居していたといえよう。純粋詩功労賞、小熊秀雄賞、函館市文化賞をうける。53年死の二日前、出来上がったばかりの一八冊目の

詩集を前にして陽気に酒をふるまった。
小原野花 のりこ 明32・5・24(昭40・9・4(1889~1965))『俳句』後志管内余市町生まれ。本名寛。大正12年中央大学卒。拓殖銀行に入行。富安風生入門。15年「曉雲」同人。昭和2年雪印乳業に入社。15年「若葉」同人。18年吉屋信子、小島政二郎らと「鯉交會」を主宰。20年古田一也らと「はまなす」を創刊。「北海道句鑑」(昭24)の審査委員。句集「向日葵」「小原野花遺句集」がある。(白幡千草)

尾山篤二郎 のりこ 明22・12・15(昭38・6・23(1889~1963))『短歌』金沢市生まれ。大正6年松村英一と「短歌雑誌」を創刊。8年「自然」「芸林」等を主宰。歌集、歌書の刊行が多い。来道は、大正15年8月小樽高商有志に招かれて札幌、旭川、深川方面をめぐる、各地で地元歌人と交流があった。その歌は歌集「平明調」(昭8)巻頭に七〇首収録。清新で直截、時に洒脱な歌を数多く詠んでいる。(中山周三)

尾山夜半杖 のりこ 明21・9・23(昭9・12・28(1908~1934))『川柳』国後島泊村生まれ。本名留太郎。大正6年に神尾三休、芳賀南閑亭、吉島蜜秋らと「札幌アツシ會」を創立、川柳誌「アツ

小野寺与吉 のりこ 昭5・1・21(1930)『詩』夕張市生まれ。北海道第三師範(現道教大旭川分校)在学中に詩作をはじめ、昭和25年安田博(現風山暇生)らと詩誌「ATOM」を創刊。27年三瓶雅義らと詩誌「フロンティア」の創刊同人となり現在に至る。このほか詩誌「遍路」「青い壺」なども出すが長くは続かなかつた。著書「教科書の詩」(昭56)、詩集「緑郷日記」(昭58)。合唱組曲「北の大地」ほかの作詩がある。(東 延江)

小野輝一 のりこ 昭3・7・25(昭58)『俳句』美唄市生まれ。炭鉱勤務を経て造園業。昭和24年より句作に入り、矢田枯柏に師事。志峰の号で「怪」のち「草人」同人。同誌休刊により休俳後、「これ」に参加し現在同人。草人賞受賞。(木村敏男)

小野白雨 のりこ 明27・5・9(昭50・7・27(1894~1976))『俳句』生地不詳。本名純一。医師。大正時代から石田雨圃子の「木の芽」を中心に句作。戦後、琴似から「木華」を創刊、主宰する。高浜虚子に師事しホトトギスに投句。昭和23年虚子来道大会委員。虚子来道記念誌「楡」の常任編集委員として24年これを発刊する。ホトトギス同人。「楡」に「カルルスのと時」という一

シ」を創刊、編集兼発行兼印刷人として、北海道柳壇の礎石を築いた。また名吟家としても知られる。12年に北海道で初めての個人川柳句集「雪つぶて」を刊行。11年札幌より旭川に移住し「全国川柳名句番附集」を刊行。全国各地から作品を募集するばかりでなく、日本柳壇の一流選者を配しての選句集であっただけに高く評価され、15年の第五集まで毎年刊行された。その間追分の柳友河内岐一の死去にともない遺句集「岐一集」(大12)を出版、その友情愛が讃えられた。晩年は齋藤幽坡の俳誌「錦」に参画。昭和7年結核で入院、札幌で没した。代表作「人生を区切る気がする雪つぶて」(齋藤大雄)

折原きよ女 明35・5・18(1920)「俳句」生地不詳。本名きよ。国鉄釧路工場事務係として二〇年勤務。上司の高橋嬉娥のすすめで俳句の道に入り、長谷川かな女に師事、昭和18年芸誌「霧笛」を釧路より刊行、俳句を担当したが同人応召のため主宰となり、特高の検閲用紙の確保に苦勞した。戦後「阿寒」「流水」等ホトトギス系俳誌で活躍した。釧路俳句連盟副会長等を歴任し後進の育成に尽くした。(鈴木青光)

恩地樺雪 明33・10・16(昭59・6・24(1900~1984))「俳句」宗谷管

悲苦の棄民的な生存ぶりを独自の饒舌体を駆使して泣き笑いの人生模様染めあげた。(小笠原克)

甲斐千枝子 昭2・1・1(1927)「短歌」樺太留多加生まれ。大阪赤十字看護学院卒。昭和22年樺太引き揚げ。25年より旭川市内高校養護教諭。24年「あさひね」、33年「コスモス」入会。昭和31年「北方短歌」創刊より参加し、酒井先生賞。北海道歌人会賞準入選。現在「北方短歌」編集同人、選者。作風は感情を沈潜させ透明深化を増す。へ署長をかたみに怖れ事務執りしリユータも老いむかわが樺太に(江口源四郎)

海原 卓 昭2・11・24(1927)「シナリオ」旭川市生まれ。本名大島英一。旭川市立中学卒。中央大学卒業後、昭和28年から50年まで弁護士。「裁かれしもの」が59年6月に第四回読売テレビゴールデンシナリオ賞最優秀賞を受賞。処女作「向日葵は知っていた」。都市法学研究所主宰。(木原直彦)

海保進一 昭4・2・19(1929)「劇作」千葉県生まれ。国学院大学専門部卒。帯広農業高校教諭として演劇部顧問となり昭和40年から創作劇に取り組み。帯広農業高校演劇部および十勝管内の農村演劇サークルによって上演された主な作品に「消えたトテッポ」(昭

内東利尻町生まれ。本名隆政。中央大学専門部経済科卒。大正13年大蔵省官房会計課に勤務。昭和2年樺太庁に転じ、敗戦により22年引き揚げ、23年北海道庁に就職、小樽税務出張所長、渡島、胆振支庁の税務課長を経て33年定年。北海道中小企業団体中央会参事のあと北海道自動車商業組合専務理事となり、45年退職。大正14年大蔵省俳句会に入会し、篠原温亭の指導を受け、樺太移住後は伊藤凍魚に師事。「水下魚」幹部同人。昭和5年「鹿火屋」に入会し同人。同年樺太庁俳句会発足し指導にあたる。9年俳誌「凍晴」、11年俳誌「むささび」を発行。樺太俳句の推進に尽力した。29年「水下魚」復刊にあたり中樞にあつて実現に貢献した。句集「凍晴」(昭51)。(菊地清翠)

海音寺潮五郎 明34・3・13(昭52・12・1(1901~1977))「小説」鹿兒島県生まれ。本名末富東作。国学院大学高等師範部卒。代表作に「平将門」

か

45)、「あすなろう高原」(昭46)、「幻覚巨象」(昭46)、「夏雲の記憶は消えず」(昭47)、「白蛇の里」(昭48)があり、「幻覚巨象」が帯広市民文芸賞を受賞。翌47年演劇創作活動により帯広市文化奨励賞を受賞した。戯曲集に内村直也の序文による「夏雲の記憶は消えず」(昭47)がある。道立帯広緑陽高校教頭。(佐々木逸郎)

香川朝子 明37・8・15(昭58・2・14(1904~1983))「短歌」山形県生まれ。旧姓中村。大正11年から15年まで北海道庁に勤務。そのかわら夜間の庁立女子中学校を卒業。昭和4年「勁草」入社。19年帯広市に転住後、26年「山脈」、27年「原始林」、29年「鴉族」に入社。43年に鴉族賞受賞。地域の婦人会役員や家庭裁判所調停委員など公的な活動のほか、婦人会の短歌部門で後進の指導に尽くした。歌集「サビタの花」(昭51)がある。(村井宏)

香川進 明43・7・15(1910)「短歌」香川県生まれ。神戸商大卒。会社社長。昭和4年前田夕暮に師事し、「詩歌」に入る。夕暮没後、28年「地中海」を創刊し、今日に至る。歌集「太陽のある風景」ほか数冊。来道は昭和26年春のころで「札幌市周辺詠」などの大作がつけられている。夕暮の流れを

「天と地と」など。本道取材作に「蝦夷天一坊」(昭41・6)、「オール読物」、紀行記に「江差、松前」(昭39)、「週刊朝日」がある。(木原直彦)

海賀愛哲 明4・12・5(大12・4・13(1871~1923))「小説、雑誌記者」福岡県生まれ。本名篤磨。東京の攻玉舎を卒業後、札幌農学校に学ぶ。明治32年5月以降33年末まで万朝報に六編ほどの小品を発表、34年以降は「新小説」「文芸界」「文芸倶楽部」読売新聞などに執筆、39年博文館に入社。著書に「新浮世風呂」(明39)、「新式小説辞典」(明42)、「日本文学遊戯大全」(同)など。日高と十勝のアイヌを描いた「少年復讐奇談 山獄王」(明41・3、大川屋書店)がある。(和田謙吾)

開高健 昭5・12・30(1936)「小説」大阪生まれ。昭和24年大阪市大入学。のころから小説を書き始め「パニック」(昭32)で認められ「裸の王様」で芥川賞受賞後、「日本三文オペラ」「流亡記」「青い月曜日」「輝ける闇」「夏の闇」などの小説、「ベトナム戦記」「フィッシュ・オン」などの体験記、「紙の中の戦争」などの評論で多彩かつ精力的な活動を続ける。「ロビンソンの末裔」(昭35・12、中央公論社)は、大雪山麓の戦後開拓民に取材し、その哀切

汲み、浪漫風で生命感溢れ、戦後の北海道の風土や生活の印象をうたっている。(中山周三)

賀川豊彦 明21・7・10(昭35・4・23(1888~1960))「社会運動」神戸市生まれ。明治40年神戸神学校入会、のち渡米。長編「第三紀層の上に」(昭13・6、講談社)に北海道と樺太が現れる。代表作「死線を越えて」。(木原直彦)

り、松前心拳ともいわれる。最近ではその詩文「波響樓遺稿」(全六巻は高い評価を受けている。(水田富智)

柿本良平 生涯年不詳(小説)昭和3年早稲田大学仏文科卒。長編小説「石狩の歌」(昭17・1、越後屋書房)は昭和5年春、北大生鱒一彦の登場で開幕する。北海道の農場経営に一生を捧げた物語。「十勝の春」(昭17・11、同)はその姉妹編で依田勉三の晩成社の理念に多くの筆を費やしている。青少年向きの「北の巨人依田勉三」(昭18・6)や石油事業を描いた「焰の人々」(昭18・12、金鈴社)などがある。(木原直彦)

鍵谷幸信 昭5・7・26(168)〔英文学、詩、評論〕旭川市生まれ。慶応大学英文科卒。慶応大教授。三田文学会。詩人西脇順三郎を慕って慶応に入る。昭和45年「西脇順三郎」(社会思潮社)、46年詩誌「湾」に連載したものを中心に、西脇の探求に努めた一〇年間の成果を「西脇順三郎論」(思潮社)として出す。なお58年「海」に掲載した一二〇枚の「西脇順三郎回想」を含めた「詩人 西脇順三郎」(筑摩書房)を出している。これに先立って昭和31年には詩誌「フロンテア」西脇順三郎特集号を編集。46年には「西脇順三郎研究」(右文書院)を村野四郎、福田陸太郎と編

(大6・7、「処女文壇」と発表した)が、生計は苦しく妻子を故郷に帰す。鎌倉建長寺に在住し「おせい」(大12・2、「改造」)を書き、かわゆる「おせい」ものが登場するが、晩年は病勢が進み、加えて生活難、家庭問題で生活が荒み、創作の筆も鈍る。「葛西善蔵全集」全四巻(津軽書房)がある。(神谷忠孝)

葛西暢吉 明39(昭58・8・13(1906~1983))〔詩〕釧路市生まれ。本名長吉。昭和初年渡辺茂、更科源蔵らと交わり、昭和2年詩誌「港街」の編集発行人となる(2号より渡辺茂、昭和3年「至上律」と改題)。「北緯五十度」の名義人ともなり、根室の「測量船」にも参加。昭和6年詩集「北緯五十度詩集」に「叩き大工の詩」を発表。戦時中樺太に渡り詩筆を断ち、戦後北海道に引き揚げ、札幌で没した。(更科源蔵)

笠井嗣夫 昭17・6・16(1942)〔詩〕札幌市生まれ。北海道大学文学部卒。定時制高校教諭。詩誌「ゆでいりあ」「視線と拠点」、季刊「熱月」を経て、現在は個人詩誌「密告」を編集発行。詩集「飢餓のまつり」(昭42、北書房)、「夜をつめたい発作」(昭59、れんが書房新社)、評論集「青い空 夢の死骸 詩人たち」(昭54、白馬書房)、詩人論の「田村隆一」(昭57、沖積舎)が

集、翌年には三六六に及ぶ「無限29」特集西脇順三郎を編集。46年3月には全一〇巻からなる「西脇順三郎全集」第一巻(筑摩)が出たが、この全巻の編集解説も執筆した。再度全一巻別巻一の増補「西脇順三郎全集」が出て、これは氏と新倉俊一が編集し、58年7月に最終刊が出た。英米詩人の翻訳編集も多い。(瀬戸哲郎)

角新草人 明37・1・19(1904)〔俳句〕留萌管内遠別町生まれ。本名新蔵。大正4年小学生時より作句を始め、8年石田雨圃子に、また昭和18年東京陸軍病院で戦傷療養中、吉田冬葉に指導を受ける。戦後は昭和22年より富安風生門に入り、「若葉」「はまなす」に投句して活躍する。「若葉」同人。俳人協会会員。近年しばらくは病氣療養中のために、作句活動が途絶えている。(新明紫明)

笠井 清 明44・3・20(1911)〔小説〕砂川市生まれ。本名清司。北海中学中退。昭和6年ナルブ札幌支部準備会の創設に参加。機関誌「吹雪」創刊。二号に反戦小説「千人針」発表。昭和12年第一次「北方文学」創刊。20年「新日本文学会」に入会(現在同評議員)。22年第二次「北方文学」復刊。「江別文学」同人。著書は「海峡―笠井清作

ある。昭和47年には江原光太、谷川絵伊子、東村有三らとともに「北海道詩人協会の解体にむけて」というパンフレットを出し、「北海道読書新聞」紙上で数回、水井浩と論争を行った。「夜をつめたい発作」は二四編からなるが、すべてが四連で構成されている。野坂政司が「読書北海道」で、それぞれの連は煉瓦のように積み重ねられているが、その統一が逆に「詩人の内的意識の切迫した危機を照射している」と指摘している。(矢口以文)

笠原伸夫 昭7・1・13(1932)〔評論〕小樽市生まれ。日本大学国文科卒。日本大学文理学部教授。主要著作に「泉鏡花・美とエロスの構造」(昭51、至文堂)、「谷崎潤一郎―宿命のエロス」(昭55、冬樹社)があり、評論足穂や戦後文学全体にわたる幅広い評論活動を展開している。(神谷忠孝)

笠原 肇 昭10・12・17(1935)〔児童文学〕留萌市生まれ。本名小笠原治嘉。東洋大学文学部中国哲学文学科卒。児童文学者久保喬に師事、昭和31年同人誌「まゆ」を創刊。日本児童文学者協会、日本児童話会に入会し「童話」に作品を発表。日童ベスト3賞を四回受賞。童話集に「熊のいる道」「黒ダイヤの森」「港のトランペット」「原野の父」

品集」(昭46、創映出版)、「札幌プロ文学運動覚え書」(昭51、新日本文学会)。(矢口以文)

笠井信一 昭4・10・24(1938)〔短歌〕函館市生まれ。原始林人社は昭和48年だが歌歴は古く、函館協会病院入院中、昭和29年に患者看護婦らグループの歌誌「曉声」を編集した。58年に原始林賞受賞。函館市で船舶工事関係の仕事に従事している。写実を基調に職場や家庭の人間に題材をとった深切な詠風だが、造船という時代に影響され易い環境にある知性人の驕りとともに風土と歴史への傾倒が顕著になっている。(村井 宏)

葛西善蔵 明20・1・16(昭37・23(1887~1938))〔小説〕弘前市生まれ。明治21年一家は北海道に移住、24年に青森に帰る。南津軽郡碓ヶ岡小学校補習科卒業後、小説家を志して上京苦学、母の死で帰郷。一七歳から一九歳まで北海道で鉄道車掌、営林署、砂金掘り人夫になるなど放浪するが、結局再上京。明治41年結婚したが、単身上京、徳田秋声に師事し早稲田大学英文科の聴講生となる。大正元年9月「奇蹟」創刊号に処女作「哀しき父」を葛西歌棄の名で発表。「悪魔」(大元・12、「奇蹟」)、「池の女」(大2・2、「奇蹟」)、「雪をんな」

「オネ先生ばんざい」など。高校で国語を教え、教育学者斎藤喜博の門を叩き、室蘭啓明高等学校定時制で五年間にわたって直接指導を受けながら実践をする。著書に「人間の変革・教師の変革」(明治図書)、「俳句の授業」(葦書房)などがあり、教授学という学問の建設を目指して研究に打ち込んでいる。「室蘭市民文芸」「伊達市民文芸」「いぶり文芸」などにもかかわっている。(加藤多一)

風巻景次郎 明35・5・22(昭35・1・4(1902~1960))〔国文学研究〕平田景儀の五男として兵庫県に生まれ、翌年母方の風巻平の養子となる。京都、金沢、大阪、名古屋と移り、第八高等学校を経て大正15年東京大学国文学科卒。大阪女子専門学校、長野女子専門学校、東京音楽学校、清水高等商船学校などの教授を経て、昭和19年北京輔仁大学教授に招かれて中国に渡る。21年4月帰国、北海道大学法文学部創設に当たり、初代国文学科主任教授として22年8月来札着任。同年11月「四十度の幻想」を北海道大学新聞に発表、のちの北海道文学論の一つの指標を与えた。25年9月「国語国文研究」を創刊、研究者の育成に尽力、道内国文学研究の礎を築くとともに、26年10月「北大季刊」創刊の編集責

任者となり、道内文学関係者とも広く連携し、文学活動にも刺激を与えた。高血圧に悩み、33年関西大学に転出。「風巻景次郎全集」全一〇巻(桜楓社)があり、その九、一〇巻に北海道関係文献がある。(和田謹吉)

笠松久子 大9・1・28(1930)「俳句」渡島管内上磯町生まれ。函館白百合高女卒。昭和16年ころから斎藤玄(当時三樹雄)に師事「壺」同人。石川桂郎、相馬遷子らとともに課題句選者。厳選峻烈な句評で知られた。渡辺直子とともに「壺」の女流の双璧として活躍したが、28年休刊により句作休止。43年斎藤玄が個人誌「丹精」を発行すると句作再開、玄に求められ作品を発表。48年「壺」復刊に編集同人として参加。51年壺中賞受賞。55年玄没後の「壺」素玄集(無鑑査)同人。57年句集「百夜」刊行。「梓」主宰水田耕一郎は「新鮮であるためには常に古風であらねばならぬ」という室生犀星の語をひき、斎藤玄の作品の中で自分の俳句を作りつづけた強情さ純粹さを称え、園田夢蒼花は「研磨し精選しつくされた宝石」を見るような句集と評した。「百夜」は59年第三回鮫島賞を受賞した。(金谷信夫)

風間六三 明40・11・12(1965)「政治運動、評論」小樽市生まれ。「梓」同人。(木村敏男) 加持谷幸夫 明43・10・25(昭55・6・16(1910~1980))「短歌」網走管内上湧別町生まれ。本名幸雄。肖像画を描いて生活してしたが、戦時中室蘭市に転出。日本製鉄所総務課に勤務。昭和22年から写真館経営。昭和10年藤浪会に入会。「短歌至上主義」に投稿。日支事変以来長く短歌から離れる。36年「原始林」入会、50年より病床にあった。歌集「残像」(昭53)がある。(高橋信子) 梶野恵三 明34・1・29(昭59・4・1(1901~1984))「小説」新潟県生まれ。本名正義。小学校卒。明治末期に一家をあげて札幌に移住。横須賀海兵団入団中に親しんだ柔道の知識をもとに、梶野千万騎の筆名で「試合」ものを「譚海」などに寄稿。長谷川伸主宰の新鷹会に加入して「大衆文芸」に「鯨の町」などを発表、海洋作家として知られる。天塩の漁港が舞台の「鯨漁場」(昭22・5、「大衆文芸」)は代表作で、大衆文芸賞を受賞。「ジャコ万と鉄」(谷口千吉演出)の題名で映画化された。「北海の竜虎」(昭33・2、桃源社)は稚内を舞台にした漁場もの。(木原直彦) 櫻村幹夫 昭9・9・1(1936)「小説、音楽評論」小樽市生まれ。昭和26年札幌南高校在学中に加清純子、

庁立小樽中学校卒。大正末期から労働運動に加わり、昭和3年ナツプ(全日本無産者芸術連盟)小樽支部を結成、小林多喜二、伊藤信二らと活動、海上生活者新聞をも発行。「北方文芸」の「伊藤信二特集号」推進に力を尽くす。文学運動の証人として、同誌に「小林多喜二の思い出」(「党・杉本良吉と私」)を書く。(小笠原克)

笠谷紅青紫 明40・9・8(1907)「俳句」後志管内岩内町生まれ。本名三吉。札幌師範学校卒、後志管内で教員歴任、昭和43年発足中学校校長を最後に勇退。オリンピッククスキージャンプ選手笠谷幸生の父。俳句は昭和7年より新田汀花に師事し、「暁雲」「緋衣」「石鳥」に拠る。現在「葦牙」「河」に所属、幹部同人として活躍。余市町俳句会長、北海道俳句協会委員、俳人協会員。(佐々木子興)

風山蝦生 昭2・4・21(1932)「詩」秋田県生まれ。本名安田博。昭和7年釧路管内弟子屈の美留和に入植。旭川師範学校講習科卒。弟子屈で教員のち昭和23年釧路に移り月刊文芸誌「霧笛」編集者となる。前田鉄之助の「詩洋」(東京、のち神奈川県真鶴)同人となり、佐々木逸郎のすすめで古川豊策の「道標」(新十津川)同人となる。

岡村春彦、中川幸一郎らと「青銅文学」を創刊。27年6月ころから東京で精力的に同人雑誌「青銅文学」を発行。同誌に小説を発表するほか、銅版画の制作と個展の開催に力をそぐ。一方、大芝信・内田裕子舞踊研究所に所属して現代舞踊家として活躍。31年8月創造社から小説集「木乃座」を刊行。主な作品は「ビトリイヌの鏡」「鏡と恋人」「波と風の対話」「若き訣別の歌」「巨人」「海猫よ翔べ」など。いずれもナルシジズムの傾向が色濃い。集中的な文学活動は昭和26年から42年までの「青銅文学」発行期間中と考えられるが、小説と並行して取り組んでいた音楽評論、各種雑誌の企画、編集、装丁に特異の才能を発揮、この面での評価が高い。(谷崎真澄)

梶山季之 昭4・1・2(昭50・5・11(1929~1976))「小説」朝鮮京城生まれ。広島高等師範卒。「黒の試走車」で文壇にデビューし、産業スパイもので推理小説史上の新機軸を拓く。代表作の「赤いダイヤ」上、下(昭37・12、38・4、集英社)は穀倉地帯といわれる十勝を一方の舞台とした小豆相場をめぐる物語。「稲妻よ、奔れ」(昭50・8、新潮社)は開拓時代の旭川を舞台にした稲妻小僧の波乱に満ちた生涯を描く。(木原直彦)

24年父の移転先上川管内愛別に帰り、25年小野寺与吉と「ATOM」を創刊。和田徹三らの「木星」(札幌)および北川冬彦の「時間」(東京)同人となる。札幌に移り、29年佐々木高見、松岡寛、斎藤邦男、千葉宣一と「眼」(千歳)を創刊した。のち広島県に移り、昭和33年作品「幼い者の奇跡」でユリイカ新人賞を受賞。第一詩集「大地の一隅」(昭36)で日氏賞(日本現代詩人会賞)を受賞した。「大地の一隅」および第二詩集「自伝のしたたり」(昭37)は、北海道の原野に入植した父母とその子として育った自らの心内部に起伏する地理(「自伝のしたたり」あとがき)を描いたもので、父母の開拓生活の現実が「大地の一隅」のあとがきに「ある開拓」として記録されている。「新詩篇」(東京)、「地球」(浦和)同人を経て「歷程」(東京)、「風」(埼玉・八潮)同人。松木伍一著「日本農民詩史」下巻2に収録。日本現代詩人会員。日本労働協会(東京)嘱託。(佐々木逸郎)

梶 鴻風 昭15・3・23(1940)「俳句」小樽市生まれ。本名進。日本大学文理学部卒。利尻高校教員。昭和29年「はまなす」により、水野波陣洞に師事して句作を始める。「水原帯」「緋蕪」「杉」「壺」等を経て、現在「これ」

柏倉俊三 明31・10・21(1908)「英文学研究、エッセー」山形県生まれ。東京大学英文科卒。昭和22年に北海道大学法文学部創設のため来道、文学第一講座担当。「シェイクスピアとその周辺」(昭28、研究社)などの研究業績のほか、「流水」(昭37、春秋社)のような北海道に関する随想も多い。T・E・ロレンス「知恵の七柱」(全3巻、昭46、平凡社)では日本翻訳文化賞受賞。(本田錦一郎)

春日正博 大15・6・21(1926)「短歌」札幌市生まれ。北海道大学臨時医専卒。医師。昭和22年川村湊人の主宰誌「青楸」の創刊に参加。23年「原始林」入会、一度中断したが、27年に復活入会。37年「空」で原始林賞を、「冬山のうた」で田辺賞を受賞し注目を浴びた。歌集に「原始林十人」(昭38、共著)がある。その後北海道を離れ、消息つまびらかでない。(猪股 泰)

粕谷草衣 明44・1・25(昭53・8・15(1911~1978))「俳句」札幌市生まれ。本名貞一。捕虜としてシベリア抑留中の昭和22年「奥の細道」に魅せられて昭和2年ころから短歌の制作を始め、俳句の世界に入った。復員後の昭和23年「緋衣」に参加、緋衣賞受賞。「緋衣」廃刊後「水原帯」同人となり、別に

28年から七年間「養灯」(後「獅子座」と改題)を創刊主宰。三谷昭らの同人誌「面」にも加わる。41年創刊の「扉」(後「道」と改題)の編集長となり、終焉までつとめた。50年札幌市白石区民センターの俳句サークル白石俳句会を組織、「草衣」を創刊、52年には会員合同句集「くさころも」を上梓した。句集に「雪林」(昭49、道俳句会)、「柏谷草衣全句集」(道句集、昭54、白石俳句会)がある。札幌市自治振興功労者賞を受賞。(胸につく雪片老はとどまらず)現代俳句協会員。(園田夢蒼花)

片岡 孝 大12・3、昭47・1(1923-1972)「短歌」出生地不詳。恵庭建設会社役員。日高管内門別町厚賀で守谷操一らと白愁短歌会を創設。昭和24年12月山道千恵遺歌集「寂光」を編集、発行。白川療養所短歌会の中心として「やまなみ」を編集。「ポトナム」「原始林」にも所属。(田村哲三)

片岡百合女 大8・1・19(1919-)「俳句」函館市生まれ。本名百合子。函館大谷女学校卒。昭和28年「ゆく春」のち「北の雲」「雲母」に所属。戦後中国から引き揚げの夫を亡くし、その遺愛の草や木に対する佳品が多い。52年句集「片しぐれ」を刊行。(島 恒人)

く (江口源四郎)

片山晴夫 昭22・11・1(1947-)「近代文学研究」福井県生まれ。東京教育大学大学院修士課程修。北海道教育大学旭川分校助教授。「北村透谷」「楚囚之詩」の「表現」に関する覚え書(昭60、「語学文学」)。「読書北海道」の「文芸時評」(昭56・2・12)担当。(神谷忠孝)

可知春於 昭3・3・16(1928-)「小説」芦別市生まれ。本名角幡春雄。北海道大学農学部大学院修。「裸形」「札幌文学」同人。「新日本文学」会員。作品に「ダム」(北大季刊)、「推移」(文学)一九五三年)などのほかに「新日本文学」に演劇時評を載せている。(小松 茂)

勝又星津女 大12・3・10(1923-)「俳句」樺太真岡町生まれ。本名節子。真岡高等女学校卒。昭和30年俳句の道に入り「氷下魚」「雲母」に所属。「北の雲」創刊とともに夫の勝又木風雨をたすけ編集業務に携わる。40年句集「絹の川」刊行。34年「雲母」五〇〇号記念出版句集「雲はみどり」に「雲母」の代表的女流二〇〇名の一人として「雨月の闇」二〇句を登載。温雅な商家の妻女としての破綻のない作品を発表した。(島 恒人)

湯沼誠二 昭12・9・15(1925-)「国文学研究」美唄市生まれ。北海道教育大学卒。北海道大学大学院修。北海道教育大学岩見沢分校教授。国際交流にも力を入れてたびたび渡米。著書に「高村光太郎におけるアメリカ」(昭57、桜楓社)、「儒学と国学」(昭59、同)がある。(神谷忠孝)

片平庸人 明35・7・21、昭29・12・26(1902-1954)「詩」仙台市生まれ。父は裁判所官吏。紙箱職人をしてながらわが国の童謡開花期の大正7年ころから野口雨情、西条八十に私淑し、児童雑誌「童話」に童謡を発表。昭和5年2月羽織袴に黒マントの姿で函館棧橋に下り立ち、そのまま函館に住みついた。海老名礼太主宰「北海詩歌」に参加し民謡を発表。自ら主宰して「北日本民謡」を創刊。後に一世を風靡した高橋掬太郎作詞「酒は涙か溜息か」が「酒」と題して発表されたのがこの誌である。また「日本詩壇」の民謡欄にもよく作品を寄稿した。独特の省略法と、温められ練りあげられた言葉で、人生の哀歓を染めあげてきた作品は「歌う民謡」というよりは、むしろ「読む民謡」、つまり詩としての民謡を目指し、詩人との交流を心がけてきた。その独自の民謡は「片平ぶし」として全国の民謡関係者に広く知られる存

在となった。昭和21年詩人三吉良太郎とともに詩誌「涛」を復刊し、戦後いち早く民謡の息吹を復活させた。民謡集「鴉追ひ」「不惑貧乏」、童謡集「夢に降る雪」「ほうほう春」がある。昭和46年彼が不慮の死を遂げた大森浜の啄木小公園に(北の海にび色にかびろく 雲ひくく まろし砂丘 見るかぎり茫々 餓えがらすそが雪の上 ただあるく ばつさばつ さな)と刻まれた詩碑が建立されている。(堀井利雄)

勝俣ひとし (昭6・3・21)

勝俣ひとし 昭6・3・21(1931-)「俳句」東京都生まれ。本名等。北海学園大学卒。日本電信電話会社員。昭和21年はまなす俳句会に出席、水野波陣洞、伊藤凍魚の指導を受け、25年飯田蛇笏来道を機に「雲母」に入会。29年札幌で「氷下魚」復刊後、編集部長となり、38年同誌廃刊まで同人。「雲母」同人。35年第二九回雲母寒夜句三昧個人賞を受賞。NHK学園俳句講座講師。現代俳句協会員。(菊地滴翠)

勝又木風雨 大3・11・8(1914-)「俳句」千葉県生まれ。本名誠。室蘭製綿所経営などを経て、現在京呉服商経営。昭和8年「ゆく春」に拠り、室積但春他界後は伊藤凍魚、飯田蛇笏、飯田竜太に師事。「氷下魚」「雲母」で活躍、北方の詩情を十分に吸収し、絹を商う商用の旅吟にすぐれ、実生活の匂いをそこはかとなく漂わせた作品が多い。昭和45年5月南雲母句会を発展させ、旧「氷下魚」の作家を吸収、「北の雲」創刊に踏み切った。氷下魚第一句集「凍土帯」(昭33)、同第二句集「水紋」(昭35)、および雲母創刊四〇周年記念句集「青潮」第二集(昭29)、同誌五〇〇号記念句集「青潮」第三集(昭34)に作品発表、当時、雲母中堅作家としての地位を確保した。「雲母」同人。44年第

一旬集「雲の放浪」(扉の会)、54年第二句集「二月の橋」(北の雲社) 発刊。俳人協会評議員、同道支部長。
「二月の橋」 句集。第一句集「雲の放浪」出版後九年がかりの四五四句を収録。「一月の鳶」「百日の夏」「つ雪の底」「角帯」「哀歓」「群青の鳥」と区分し、「北の雲」主宰としての匆忙の中、商用の旅も多く、北国に生きる作家の抒情を大事にあしらった作品集で、(絹の源氏車が蝸へ廻りだす)のように、絹物を商うときの心の高揚を作品としてるのが特徴。(島 恒人)

片山栄志 大5・11・10(1925-)「短歌」根室市生まれ。戦後根室で書店経営。橋本徳寿、桜田角郎を知る。昭和31年「アララギ」に入会。39年「海鳴」に入会し、54年より同誌選者。歌集に「花前線」(昭50)、「花前線その後」(昭59)がある。札幌在住。(笹原登喜雄)

片山博園 昭2・5、昭43・10(1927-1988)「短歌」稚内市生まれ。本名保。昭和16年海軍甲種予科練に入隊する。20年に茶舗を稚内で経営。25年稚内市社会教育委員を務める。24年「あさひね」、28年「コスモス」に入会。31年「北方短歌」創刊に尽力し、特別維持同人として稚内支部をまとめる。同年歌集「雪窪の道」を刊行。(訳もなく出づる涙をこらへつつ戦友の屍を夜をこめて焼

勝峰晋風 明20・12・11、昭29・1・31(1887-1964)「俳句、国文学」東京生まれ。本名晋三。東洋大学卒。父錦風は旧派の宗匠で、明治25年に後志管内岩内町で「文友会」を興していた。その影響で父に俳句を学び、大正卒業後明治43年から小樽新聞の記者となる。間もなく上京し、報知新聞、万朝報、時事新報等の記者を勤めた。大正12年関東大震災後記者をやめ、翻訳と著述業に専念する。また一時法政大学で、俳諧史及び蕉門の俳論を講義した。大正13年北海道へ来遊し、各地を巡った。のち伊藤松宇ら「秋声会」と交友を持ち、松宇の「にひはり」を継承したが、大正15年「黄橙」を創刊主宰した。最も大きな業績は、

75

「日本俳書大系」全一七巻を大正15年から三年間で刊行したことがある。このほかの著に、昭和9年「明治俳諧史話」、同年「汽笛」、10年「子規以前の明治俳諧」、11年「季節新表」があり、後の編纂に「其角全集」「芭蕉全集」などがある。

萬城紀彦 まぎつひこ 明38・9・10（1605）〔小説〕和歌山県生まれ。本名北田和成。大正15年和歌山高等商業学校を卒業して教員生活に入り、昭和12年に渡道、小樽高等商業学校に赴任、14年に辞職して離道し、実業界に入った。「北の湖」（昭31・4、「文学界」）は31年度の文学界新人賞第一回候補決定作品に選ばれ、同年上半期の芥川賞候補作となる。本名による随筆集「ことわざ漫筆」もある。

（木村敏男）

加藤愛夫 かとうあいふ 明35・4・19（昭54・10・3）〔1902～1979〕〔詩〕空知管内北竜町生まれ。本名松一郎。父は千葉県からの開拓移民で、培本社農場の支配人を務めた北竜の草分け。母は秩父別に屯田兵として入植した旧佐賀藩士の娘。早稲田実業在学中病気のため帰郷。このころ文学に親しみ「文章倶楽部」「文章世界」に小品、詩を投稿。同校中退。生田春月に師事し、手書き詩集「黄金の森」を送り、春月の主宰する「文芸通報」同

加藤一考 かとういこう 昭5・10・26（1606）〔詩〕宗谷管内浜頓別町生まれ。本名一幸。昭和25年小学校教師となり、このころより詩作を始める。28年詩集「時空の電子」を出版。詩誌「青芽」に参加し、37年詩誌「かおす」を創刊。42年詩集「骨の記憶」を思潮社から出版する。その他子供の詩集「あしあと」「炭鉱っ子」等の編がある。のちに詩誌「情緒」に拠るが、現在所属はない。

（新井章夫）

加藤楸邨 かとうきゅうそん 明38・5・26（1606）〔俳句〕東京生まれ。本名健雄。昭和6年水原秋桜子に師事「馬酔木」に拠る。8年第二回馬酔木賞受賞。初期は短歌的な唯美的抒情句が多かったが、次第に人間内面の表現を希求する方向を辿り、中村草田男、石田波郷とともに人間探究派と呼ばれる。14年第一句集「寒雷」を上梓。翌15年俳誌「寒雷」を創刊主宰。門下から森澄雄、金子兜太、沢木欣一、田川飛旅子、古沢太穂、和知喜八ら多くの俊秀を輩出した。45年より朝日俳壇選者。句集は「寒雷」から51年の「吹越」まで一冊、ほかに芭蕉研究をはじめ多くの著述があるが、これらを総合した「加藤楸邨全集」一四巻が55年から57年にわたり講談社から上梓された。戦中戦後を通じ、中国ほか海外への旅が

人となる。大正11年ころから「日本詩人」「詩聖」「新詩人」などに作品を発表し、新人として注目される。同年函館重砲隊に入営。退役後上京して春月主宰「烽火」の編集に当たったが、ロク膜炎と脚氣を病み、父母の再移住先、空知管内北村に帰郷。同管内秩父別の「北線」に作品を発表。このころ小熊秀雄、更科源蔵らとの交流が始まる。昭和6年から12年までの間「北緯五十度」（弟子屈）、「群声」（岩見沢）、「詩宗族」（札幌）、「国詩評林」（旭川）などに参加。この間に昭和8年岩見沢で養鶏業を始め、瀬戸喜久江と結婚。晩年まで北海道養鶏業の指導的役割を果たした。13年中国転戦中の詩編を「従軍」として国詩評林社から出版。15年生犀屋序文になる「進軍」を新潮社から出版。以後犀屋に私淑した。戦後は総合文芸誌「草原」（岩見沢）を創刊。更科源蔵の「野性」に参加。24年岩見沢詩話会を結成し「詩人種」を創刊。26年旭川の「情緒」に参加。44年「文学岩見沢」を創刊。戦後の詩集に思索的田園叙情を基調とした「幻虹」（昭36・9）、「夕陽無限」（昭47・9）、「詩書に「詩人のいる風景」（昭45・7）、「バイエルンの秋」（昭52・12）、「評伝に「中村武羅夫」（昭51・3）、「辻村もと子」（昭54・8）、「随筆集に「百姓ぐ

多い。昭和21、46、47年に来道、札幌、函館、釧路、阿寒、旭川、稚内、浜頓別等を巡遊。阿寒では夕焼け湖の穂藻にとどかんかの句を残した。

（園田夢蒼花）

加藤多一 かとうたかいち 昭和9・6・1（1610）〔児童文学〕網走管内滝上町生まれ。北海道大学教育学部卒。大学在学中から短歌や評論に手を染めていたが、北大童話研究会で砂沢喜代次、斎藤秋男を顧問とする「童話研究」の創刊に参加して児童文学へ。昭和50年度第二回日本童話会賞A賞受賞作「白いエプロン白いヤギ」が偕成社から出版されると同時に「ふぶきだ走れ」（北海道新聞社）が北海道新聞文学賞佳作を受賞し作家としての地位が確定した。北海道の風土に根ざした農村を背景にしたさまざまな少女像を刻んで見せるところに特徴がある。昭和53年には「原野にとぶ橋」が出て、加藤の代表作になる。この作品は自伝的要素を色濃く持ちながら、馬と人間の年代記を交錯させて、単純な年代記に終わらせず、しかも作品の背景には北海道の開拓農民の苦闘とその歴史を併せて描いている。ほかに「ともだちみつけた」「さっちゃん青いてぶくろ」「おはよう白い馬」「びんのむこうはあおいうみ」「夜空をかける青い馬」「ミス牧場は四年生」

らし」 「鵝」などがある。47年北海道文化賞を受賞。49年岩見沢開基九〇年記念に「交響詩岩見沢」（作曲川越守）を作詞。ガンを病み国立札幌病院で没した。北竜町、岩見沢市に詩碑。研究書に「加藤愛夫・その人と作品」（北竜町加藤愛夫文学碑建立委員会）、「文学岩見沢21・加藤愛夫追悼特集」がある。

（佐々木逸郎）

加藤蛙水子 かとうかみづこ 明37・4・14（昭58・1・26）〔1904～1983〕〔俳句〕三笠市生まれ。本名繁男。昭和4年国鉄室蘭車掌区勤務。大正12年より石田雨圃子に師事し、「ホトトギス」に投句。大正15年より琵琶を習い、自ら琵琶を製作し、その名声は俳句とともに知られた。昭和20年鈴木洋々子とともに「いぶり」を創刊し編集に当たる。洋々子没後「いぶり」の主宰となり、山口青郎の「夏草」の同人に推され、会員の指導に活躍。北海道句鑑発行（昭24・3）の賛助委員として句鑑の選に当たった小原野花、阿部慧月らの片腕となった。30年ホトトギス同人に推される。36年国鉄を定年退職。57年6月北海道ホトトギス大会（室蘭）の大会長として活躍。ホトトギス雑誌全集に多くの佳句が収録されている。句集「樽前」「寒弾」がある。（彈初の只ひとすじに誇りなし）

（白幡千草）

「じてんしゃ特急、牧場行き」「牧場のまどがおおる日」「ふぶきの家のノンコ」「オンドリ飛ばべよ」などの作品がある。「ふぶきの家のノンコ」は昭和60年第一回北の児童文学賞受賞、加藤の新しい側面を開拓した。日本児童文学者協会評議員、同北海道支部長、北海道児童文学全集編集委員などを務めた。（笠原肇）

加藤卓爾 かとうたけじ 明22・3・15（昭34・1・18）〔1889～1956〕〔短歌〕岩手県生まれ。大正8年渡道。日本歌人會に属するかわら、根室市の文化活動の育成に尽くした。「青垣」所属。文芸雑誌「流水」「オコック」を発刊。戦後は道歌人群、特に写実派歌人を糾合して昭和24年短歌雑誌「海域」を刊行。32年根室市文化賞を受賞。33年亡妻に捧げる歌集「けむり」を出版した。（かそかなるものなりしかな座を占めて妻ありしとき平安ありき）

（宮本貞子）

加藤武雄 かとうたけお 明21・5・3（昭31・9・1）〔1888～1960〕〔小説〕神奈川県生まれ。投書界の花形から新潮社の編集者へ、そして通俗小説界の重鎮として名をなした。中村武羅夫、三上於菟吉との「長篇三人全集」二八巻中一〇巻を占める。農民文学育ての親でもあり、「文章倶楽部」「文学時代」で新人発掘にも意を注いだ。佐佐木俊郎は加藤の推載で

世に出た。(小笠原克)

加藤次男 昭6・2・8(1931)「俳句」富良野市生まれ。昭和26年療養中塩野谷秋風に師事。27年霧華賞受賞。28・30年「霧華」の編集責任者。29年三鬼の「断崖」の同人となる。30年作句活動休止。44年同人誌「広軌」創刊にともない作句再開。言葉の内包する練精のような美しさをひき出し得る作家。現代俳句協会員。(後藤軒太郎)

加藤倍兆 明42・2・13(1969)「川柳」根室市生まれ。本名熊次郎。大正11年川柳「一川吟社」入会。昭和45年「根室市一〇〇年記念文化誌」に根室川柳史を執筆、六〇年の歴史を持つ「一川吟社」を紹介した。現在、根室柳界の重鎮として活躍している。(鷲尾待人)

加藤破天光 明30・12・16(1944)・3・30(1937)・1969)「川柳」函館市生まれ。本名幸吉。大正5年旭川に移住とともに旭川最初の川柳団体「熊」会結成に精坊と号して参加。以後、「川柳あさひ会」を経て昭和11年5月旭川川柳社創立には同人として参加。戦後は25年1月職場の北海道新聞旭川支社内に「ポブラ川柳社」を結成してその主幹となり、柳誌「ポブラ」を発刊する。29年定年退職後は「旭川川柳社」の「川柳あ

さひ」編集人、また北海道新聞柳壇選者、北海道川柳年一度賞選考委員などをして川柳の発展、後進の育成に努めた。45年3月一周忌にあたり「加藤破天光遺句集」が「旭川川柳社」から刊行された。「老骨の胸を揺すって枯葉舞う」(大野信夫)

加藤未涯 明37(1917)・10・4(1904)・1942)「短歌」後志管内積丹町生まれ。本名親義。祖父の代より積丹半島有数のニシン漁場の網元であったが、凶漁続きのため没落、一介の漁夫となって魚群を追ひ、きびしい漁労のかたわら海への哀歎を歌い続けた。昭和3年ころより並木凡平に師事。「青空」所屬。作歌態度の熱心さは抜群で歌気遣いとまで評された。歌集は昭和15年歌友達の協力により、約六〇首をまとめ「星の海」を発刊。(北川緑雨)

加藤眠柳 明2・9・18(1910)・11・23(1889)・1921)「小説、新聞記者」岐阜県生まれ。本名米司。明治39年来道、小樽新聞に入社。堺枯川(利彦)の友人であり、明治41年西川光次郎、添田平吉の講演会を小樽で開く。小樽新聞に「女髪」「自然主義の将来」などを執筆。(木ノ内洋二)

加藤幸子 昭11・9・26(1936)「小説」札幌市生まれ。本名白木幸

のち「広場」の支部となった。比良暮雪、松原地蔵尊、飯田蛇笏に師事、「広場」「句と評論」「壺」に拠ったが、晩年「雲母」同人として活躍した。

金坂吉見 大12・7・17(1903)「短歌」島根県生まれ。昭和17年上智大学卒。昭和30年渡道し保険外交員。36年滝川、旭川で古書店経営。32年「砂金」創刊に参加。49年「コスモス」に入会して第一同人。歌集に「寒灯」「晨」。58年「凍」発刊。57年歌書として「白秋の北海道周遊手控」を発刊する。(戦ひに死にてみ骨の還りこぬ君がみ墓をいまは罷りぬ)(江口源四郎)

金崎一光 昭10・2・20(1935)「短歌」深川市生まれ。高校卒業後、昭和28年「新壑」に入社するとともに深川町文化連盟の一部門だった「波紋」や「鴉族」などにも作品を発表。昭和30年代には北海道青年歌人会や「素」にも参加、斬新な作品で注目された。その後歌作の中断期間があつて、52年「新壑」に復帰するとともに「原型」にも入会、再び独自の言語美学に立脚した作品を発表している。(永平利夫)

金沢欣哉 昭2・3・8(1927)「小説」後志管内泊村生まれ。二代で結核を患ひ、長期療養中に文学を

子。昭和16年から22年中国北京に滞在。北海道大学農学部卒業後、農林省農業技術研究所に入所。日本自然保護協会を経て、現在自然観察会代表。日本ペンクラブ、野鳥の会会員。「ぼくのクオ・パデイス」(「使者」昭56春号)でデビュー。「野餓鬼のいた村」(昭57・7、「新潮」)で第一回新潮新人賞受賞。「夢の壁」(昭57・9、同)で第八八回芥川賞受賞。(神谷忠孝)

角川源義 大6・10・9(1950)・10・27(1917)・1975)「俳句」富山県生まれ。昭和7年より句作。22年「古志」(後の「季節」)同人。33年「河」を創刊主宰。一方、20年角川書店を創立。27年総合誌「俳句」を創刊。角川俳句賞、短歌賞、蛇笏賞、超空賞を設定。俳句文学館設立に奔走する。文学博士。句集「ロダンの首」ほか著書多数。41年「河」全道俳句大会出席のため札幌を訪れて以来、しばしば来道している。(園田夢蒼花)

角野良雄 明44・2・9(1944)・7・18(1911)・1969)「俳句」名寄市生まれ。小樽市立商業卒。第一銀行小樽支店に勤務後東京に転出。昭和8年ころ角野四潮と称し「白十字会」に入り、12年新興的傾向の「広場の会」を創立主宰。「馬酔木」の研究を目的としたが、

委員主査を経て著作活動に入り、病死した。著書に「下座嘯百題」ほかがある。

金沢美津子 大6・6・28(1917)「短歌」根室市生まれ。昭和34年「凍土」に参加。40年同誌終刊に至るまで同人として活躍。41年「新凍土」創刊に参加し、現在、運営および編集委員。一方、41年釧路あかつき短歌会を創立し後進の指導に当たる。42年「かざろひ」に入社したが後に退社。45年北海道歌人会賞を受賞。50年歌集「錦木」を新凍土叢書第一編として刊行した。詠風は、リアリズムを根幹に据え、硬質な文体で現実の深奥に迫ろうとする鋭い観察眼と表現力。また、玄妙な審美眼と美意識は作品を魅力的なものにしている。△炎えつきて葉を散らしたる錦木のりんりんとなに貫かんとす(八巻春悟)

金巻鎮雄 昭13・3・18(1938)「評論」上川管内東川町生まれ。旭川北門中学教諭から神楽中学に移る。評論「中国人強制連行事件」(昭50、みやま書房)のほか「北海道屯田兵絵巻物語」と「三浦綾子の世界」を総北海から上梓、「北海道地図解」なども。写真集「北海道地図解」などもある。(佐藤喜二)

かなまる・よしあき 昭3・8・21(1928)「小説」

(1938)「小説」室蘭市生まれ。本名金丸義昭。室蘭中学校卒。東北学院工業専門学校中退。昭和21年室蘭電気通信工事務局に勤務。24年全通信労働組合運動に加わり献首される。この間、全通労組北海道本部青年部長を務める。25年全通室蘭文学サークル誌「はたちの周囲」を創刊し、小説、評論などを書く。28年同人誌「未来」を創刊。29年新日本文学会会員となる。新日本文学会室蘭支部の運動に加わり、「次にくるもの」「現代文学」などの同人誌刊行。民主主義文学同人誌「壁」に加わり、創作活動続ける。29年から同人誌「夜汽車」に小説、評論を書く。26年椎田潤志の名で作品集「牧草地」を、54年長編小説「証人台」を刊行。翌年「証人台」で第一三回北海道新聞文学賞、室蘭文化連盟芸術賞を受賞。現在、室蘭文学館設立期成会副会長、不同調の会代表、全通北海道文学サークル会員、「留萌文学」同人。(深海秀俊)

金子信夫 大3・1・2 (1914)「俳句」後志管内寿都町生まれ。地方公務員、のち商業自営。昭和7年岩内町在住時泉太郎に師事して俳句を始め、15年斎藤玄の「壺」に入会。28年「壺」休刊の後は「鶴」「風土」の同人となったが、昭和40年代後半斎藤玄が個人誌「丹精」を発行するに当たり、旧「壺」

同人を糾合して素玄会を組織し、48年「壺」復刊の原動力となった。復刊後は同人会長として玄を助け、誌勢の伸長に努めた。55年玄をうしなつた「壺」は、信夫と稲島帚木の二人代表制を採用したが、帚木は一年で辞任、信夫は単独代表を経て主宰に推された。信夫は有季定型を信条とする実力派だが、文章もよくし、句集「人後」(昭54、壺俳句会)のほかに「長万部町史」「北松山町史」等の著述がある。「壺」内部の賞としては昭和26年の壺俳句賞、49年の素玄賞、52年の壺中賞があり、ほかに35年鶴岡切賞努力賞を受けている。俳人協会会員。「人後」昭10年から53年までの作四一五句を収めた54年刊の処女句集。斎藤玄は「君は俳句を常に平常心をもって諷諷する。これは昔から一貫して変わらない。奇矯を嫌い、銜いを忘むこの一徹の作風云々」と序文に記したむ、まさに適評。ハまつ暗に河の流るる雪解かな (園田夢蒼花)

金子喜一 明8・10・21 (1914)「評論」神奈川県笹下村(現横浜市)生まれ。徳富蘇峰の書生となり文学を学ぶ。明治31年埼玉経済時報主筆となり、安部磯雄らの社会主義研究会に入会。32年渡米、社会主義思想を深める。ハーバード大学で同窓の

ジョセフィン・コンガーと結婚、米国に帰化。同大学で知り合った有島武郎と親交を結び、思想生活に大きな影響を与えた。著書に「海外より見たる社会問題」(明40・5、平民書房)。明治42年5月結核療養のため帰国。(神埜 努)

金子静光 明36・9・23 (1903)「短歌」富山県生まれ。本名安一。三歳のとき現在の富良野市へ移住し、小学校を卒業。同窓生に歌人西川青海がいた。昭和7年南富良野村金山の官行伐木

事業所に就職後、16年に退職。当時、日高の八田鉱山富内出張所長であった潮音同人堀恭一の推挙で本社の木材部に就職、27年間勤務して退職、現在札幌市に在住。大正10年「潮音」入社、幹部同人。昭和5年「新壱」創刊と同時に入社。潮音主宰太田水穂、新壱主宰小田観瑩に師事し、「新壱」元選者として後輩の指導育成に当たり、昭和45年5月、43年間の労作をまとめ第一歌集「沙流川」を刊行した。この歌集の序文は恩師小田観瑩が、序歌は「潮音」の元代表四賀光子が書いている。ハ大えそまつどうと倒れし地響きの銜しゆくに耳澄し竹つ。55年2月第二歌集「二次林」を刊行。第一歌集「沙流川」出版以後一〇年間の「潮音」「新壱」に出詠した作品から五二〇首を収録し、序歌は「潮音」代表太田青丘の作品が飾っている。「沙流川」は、著者の青年時代からの境遇の変転を追った履歴書的な事象を主体としたものであったが、その後は社会の第一線から退いて第二の人生に入り、「二次林」は年齢にふさわしく枯淡な境地をめざしてゐる。(鍋山隆明)

金子兜太 大8・9・23 (1919)「俳句」埼玉県生まれ。東京大学在学中に加藤楸邨、中村草田男の影響を受ける。「寒雷」同人。海軍主計短期現役

のときトラック島で敗戦。昭和22年帰国後日銀に復職。沢木欣一の「風」同人。25年寒雷三人句集「鼎」刊行。30年句集「少年」発行。31年第五回現代俳句協会賞。このころ問題作「銀行員朝より螢光す鳥賊のごとく」の非詩的難解性をめぐり賛否の論湧く。社会性論議から前衛論議へ主導する結果となる。主な評論は昭和36年「造型俳句六章」を角川の「俳句」に連載、以後「短詩型文学論」「今日の俳句」「定住漂泊」「戦後俳句作家シリーズ金子兜太集」「蜿蜒」「暗緑地誌」「愛句百句」等の著書がある。来道は昭和39年8月北海タイムス文学講演会で砂川市ほか二市。46年「海程」北海道大会で札幌。50年6月北海タイムス文学講演会で江別市。56年3月現代俳句協会地区会議総会出席。同協会会長。(山田緑光)

金子徳四郎 大4・7・24 (1915)「短歌」山形県生まれ。昭和3年両親に伴われて小樽に移住。高山樗牛に心酔する文学少年だった。昭和8年「新壱」入社。短歌作品より随筆、評論を能くし、「田舎美学」の連載は逸文であった。昭和50年に長年勤務の郵政省を退職後悠々自適。第三回新壱評論賞を受賞。(永平利夫)

金子光晴 明28・12・25 (1905)「詩」愛知県津島市生まれ。本名保和。大正8年処女詩集「赤土の家」上梓。12年詩集「こがね虫」により華麗な高踏派詩人としてデビューしたが、昭和3年から四年間の東南アジア、ヨーロッパ放浪を経て筋金入りの反骨詩人に成長。昭和12年の詩集「鯨」(人民社)は日本のレジスタンス文学の金字塔と言われる。反戦を貫いて戦時中は沈黙し、書きためた大量の詩を戦後発表、詩壇最高峰の地位を固め、日

和54年第二回辛夷賞、同年第一五回中城ふみ子賞を一举に受賞した。昭和57年助産婦という職業からうたい上げた「臍帯剪刀」三〇首によって第二五回北海道歌人会賞を受賞。現在「辛夷」「潭」同人。「半島詩片」「庭を育てる」「喫茶店で」「ベンチで」ほかを同誌に発表。詩風は論理性を骨格に、日常のさりげない情景をかりて豊かな情念とイマジネーションを展開する点に特色がある。(堤 寛治)

本に近代的自我を確立した最初の詩人として海外の研究者も始めている。北海道には昭和30年7月河野文一郎の招きで妻の作家森三千代とともに来訪、札幌市民会館における肢体不自由児療育資金募集と銘打った「詩と音楽の夕」で講演したのち、苫小牧、登別、洞爺湖、函館を経て帰京。北海道に関する詩やエッセーも数編書かれている。「金子光晴全集」(中央公論社)がある。(河野文一郎)

金子洋文 結城 明27・4・8、昭60・3・21(1894~1985)〔小説〕秋田県生まれ。小牧近江らと「種蒔く人」を創刊、「地獄」(大12)で注目され、労農芸術家連盟を支え続けた。戦後は参議院議員、新派の脚本、演出も手がけた。日本プロレタリア傑作選集の一冊「赤い湖」(昭5、日本評論社)所収の「闘争する二十三人」は函館が舞台、資金不払いで争議に発展したあげく、秋田出身の漁夫二三人が豚箱に叩きこまれる経緯を描く。(小笠原克)

金崎霞枝 岩手県生まれ。本名義徳。札幌夜間中学卒業後北海道庁、北海道興農公社、雪印乳業、須田製版等を歴任したのち札幌市に自適。昭和7年天野宗軒の主宰する水声会に入会。以後「俳句研究」(戦前)等に作品を寄せるほかは、

加畑作治郎 大9・3・30、昭47・9・19(1920~1972)〔小説〕福島県生まれ。師範学校卒。第一次「札幌文学」同人。「さむらい部落」「雪の街にて」などの創作がある。文学活動のほか、労働運動に従事し、北海電労の委員長でもあった。(小松茂)

鎌倉子洞 明22・3・22、昭29・1・29(1889~1954)〔俳句〕宮城県生まれ。本名庄一。明治大学中退後札幌市に移住。晩年は森林組合専務理事の職に在った。俳句は大正末期荒谷松葉子の手ほどきで始め、松葉子が「常盤木」を創刊してからはこれを助け、北村暮畔子、都竹呼句朗、鈴木農月、福田秋谷、北村南泥ら後進の台頭を促した。やがて室積徂春の「ゆく春」に加盟、暮畔子、呼句朗、農月、秋谷らとともに活躍。旭川の藤田旭山、西山東溪と結び「ゆく春」の誌勢拡大に力を入れた。子洞は土別の同志の先頭に立って徂春句碑の建立を企画奔走した結果、昭和35年士別市不動公園に「北風強し雪砂吹き散る日の光」の碑が建ち、門下一四名の句碑も建立された。(日光のゆたけさ)にあり松の雪は子洞碑に刻まれた一句。(園田夢蒼花)

一切の俳句結社に所属せず、「水声」一筋に歩み続けた。霞枝入会のこの年は宗軒を中心に有田豊進、植田小寒らが集まって水声会を創設した年で、俳誌「水声」を発行し、昭和10年代は旭川の「リズムム」、函館の「壺」と並び北海道における新興俳句運動を果敢に推進した。その中心は霞枝、手塚甫、辰木久門、鈴木白歩らの新鋭で、とりわけ霞枝の活躍には目をみはるものがあった。48年宗軒没後は後継主宰として「水声句箋」を発行し続ける。現代俳句協会員。北海道俳句協会常任委員、事務局長。(十三時妻との間に蟬は充つ)(園田夢蒼花)

金崎琢磨 明29・4・10、昭36・1・21(1896~1961)〔短歌〕根室市生まれ。本名信二。雅号は白明、哀草果。明治43年富良野で小田観螢、小林小夢らと歌誌「白鷗」を創刊。旭川地方歌壇に影響を与えた。「詩歌」「オリブ」「冷光」「吾が嶺」にも作歌発表。昭和21年10月旭川で「北海道詩歌新聞」を編集、発行。芥子沢新之介、酒井広治、白山友正、小田観螢、山下秀之助など錚々たる顔ぶれの作品も見えるが、第二号以降の発刊についてはつまびらかでない。(田村哲三)

叶 樞夫 昭19・12・29、(1944~)〔短歌〕札幌市生まれ。北海道学芸校卒。「札幌文学」同人。「墓地」(24号)、「人形」(25号)、「渡るべき橋」(28号)、「漂ふ花」(31号)、「三月の雪」(51号)など。「渡るべき橋」「漂ふ花」は道内同人誌秀作に選ばれた。(西村信)

鎌田薄氷 明43・2・5、(1910~)〔俳句〕滝川市生まれ。昭和3年序立滝川中学校、4年岩手師範学校卒。17年北海道庁に勤務、39年退職。昭和5年宮古市の宮古吟社に入社し、「ホトトギス」に投句。高浜虚子に直接指導を受けたが、虚子の没後は山口青邨に師事し、「夏草」に投句。昭和41年11月花巻市で俳誌「青原」を創刊、主宰。現在は函館から発行している。昭和57年に国立公園大沼湖畔に「花菖蒲池畔に座せば妻も美し」の句碑を建立。「夏草」同人。俳人協会会員。著書に「吾が俳歴の一断片」ほか多数がある。(鮭上る河口連絡船はろか)(白幡千草)

鎌田 一 大4・7・25、(1914~)〔短歌〕夕張市生まれ。昭和29年胸部疾患のため道立清水沢療養所に入所。ここで歌との出会いがあり、同年「原始林」入会。併せて「コスモス」にも8年ほど籍を置いた。57年1月歌集「峽の四季」を原始林叢書として出版、ここでは廃れゆく炭山都市の惨めさと、それに伴う蔬菜農園の不振を嘆いているが、メロ

大学(現北海道教育大学)岩見沢分校で「宇波百合」短歌会に加わり、内田弘、田保愛明らと積極的な作歌活動を開始する。薄井忠男(当時学芸大学教授)の指導のもと、翌年には「北海道アララギ」「アララギ」に入り、清新な抒情が注目をあびる。卒業後、高校教師を経て編集、出版の事業に携わる。その間、二年間ほど北海道農民連盟書記として労農運動にも力を注ぐ。昭和53年より「宇波百合」短歌会の編集を続け、鋭敏な感性を駆使したリアリズムの手法は独自のものがあり、その特異性がきわだっている。歌集は「冬茜」(昭44、阿知良光治と共著)、「群島」(昭49、合同歌集)、「七八年冬まで」(昭53)の三冊がある。(離職して職なきものらアパートの一階にきたまりなほ住みてをり)(内田弘)

加葉田可六 明39・5・10、昭57・7・20(1906~1982)〔俳句〕空知管内北竜町生まれ。本名藤吉郎。昭和2年ころより臼田亜浪の選を受ける。32年「道」の前身である「隙」に参加、風土性の強い作品を発表。42年現代俳句協会員となる。「扉」を経て「道」同人となり、深い詩心と変幻自在な表現力を認められ、51年道俳句作家賞受賞。句集に「年輪」「青山河」、合同句集「北竜」がある。(北光星)

ン栽培の歌に新鮮な佳作が多い。夕張歌人会長。(土蔵培人)

神尾三林 明16・4・2、昭28・1・13(1883~1953)〔川柳〕埼玉県生まれ。本名正。北海道川柳界の草分け的存在。大正3年東京柳樽寺川柳界同人の三輪破魔杖の来道によって北海道で最初の川柳誌「仔熊」が創刊されると同時に、北海道報の川柳欄を担当していた関係から選者陣として参画、以後、北海道川柳界の指導的立場にあって柳界育成に尽力した。大正6年「札幌川柳会」と「オホツク会」が合併し「札幌アツシ会」を結成し、その盟主となる。そのとき井上剣花坊の率いる東京柳樽寺川柳会の同人に推挙される。北海道から中央柳壇への同人は初めてのこと。大正7年開道五〇年大博覧会協賛の北海道川柳大会を主催、井上剣花坊らを招聘したが、剣花坊川柳に失望。以来中央依存を排し郷土川柳を主唱し、「札幌アツシ会」を発展的に解散して「北海川柳社」を創立、川柳誌「鐮矢」を創刊、二〇号まで続ける。勤務の道庁農事試験場の関係で旭川に移住、永山試験場長となる。そして「旭川川柳会」に関与。その後、渡島試験場に転勤、函館川柳界の育成に努めた。亀井花童子の「渡島川柳社」の顧問となる。昭和16年日本川柳協会函館支部

長となる。戦後は「函館川柳社」より第二次「ひぐま」が創刊され、その顧問として指導。常に北海道柳界の長老格として、北海道の川柳史とともに歩んできた。(斎藤大雄)

神近市子(かみぢかしこ) 明21・6・6〜昭56・8・1(1888〜1981)〔評論、社会運動〕長崎県生まれ。本名イチ。女子英学塾(現津田塾大)在学中に青鞥社員となり、プロレタリア文学運動を経て女性解放運動に挺身した。大正10年ごろ茶業連盟の招待で北海道を回ったが、その折の見聞をもとに短編「雄阿寒おろし」(大11・1、「種蒔く人」)をものしている。北海道開拓史の暗黒面に目を向けた労働文学の先駆的な小説。(木原直彦)

神谷忠孝(かみやただたか) 昭12・6・5〜(63)〔近代文学研究〕帯広市生まれ。帯広三条高校から北海道大学文学部国文学科に進み、同大学院修。帯広大谷短大講師、中央大学文学部助教授を経て、現在北大文学部助教授。同人雑誌「あすとら」に「位置」に参加。「帯広市民文芸」に発表した「寒川光太郎論」「亀井勝一郎論」「農民文学試論」「早川三代治覚え書」等で注目される。また横光利一論によって新世代の研究者として頭角をあらわし、「横光利一論(昭53、双文社)」をまとめる。その後、日本浪漫派やダダイ

し、マルクス主義体験、日本の伝統芸術との出会い、宗教体験、戦争体験などにふれながら、自己の内面を通して、日本人とは何かという問題を追求しようとした。(神谷忠孝)

亀井花童子(かみいはなご) 明26・2・22〜昭33・6・24(1893〜1968)〔川柳〕函館市生まれ。本名六郎。函館中学を経て慶応大学に学ぶ。土地貸業。大正5年3月創立の函館川柳社を支援、7年3月柳誌「忍路」を発行。約七年間続き、誌上の課題には中央柳壇の有名選者に依頼、全国的に北海道柳界の地位を高めた。函館川柳社創立一〇周年記念川柳大会を大正14年開催、東京、札幌、旭川、小樽などから総員五〇名が集まり大成功。昭和に入ってから青森との交流が始まり、第一回海峽親善川柳大会を小林不浪人と組んで昭和4年8月青森で、第二回は翌5年5月函館で開催し、その後六、七回は続いた。戦時中の昭和18年ころ、花童子は渡島管内大野町へ疎開、戦後大野より函館川柳社の例会へ通った。函館川柳社は花童子の功績をたたえ花童子賞を設定、昭和59年には第二六回を数える。(先見の明ありされど金がない)(鈴木青柳)

ズム、南進の文学と研究の幅を広げ、「吉行エイスケ作品(冬樹社)の編集もつとめる。主著に「保田与重郎論」(昭54、雁書館)、「保田与重郎書誌」(同、笠間書院)、「坂口安吾」(昭56、角川書店)などがある。昭和52年から北海道新聞で「創作・評論」の回顧や「新鋭小説集」の選考もつとめる。56年インドネシア大学で日本文学を講義。(日高昭二)

亀井勝一郎(かみいしやういちろう) 明40・2・6〜昭41・11・14(1907〜1966)〔評論〕函館市生まれ。山形高等学校を経て東京大学文学科中退。大正15年東大入学生直後にマルクス主義芸術研究会に出席し、翌年「新人会」会員となり、共産主義青年同盟に加わって政治活動に従事。昭和3年4月治安維持法違反容疑で検挙され、二年半の獄中生活で文学書に親しみ、特に「ゲーテとの対話」に感動する。5年喀血して市ヶ谷刑務所の病監に臥床、「非合法的政治活動には向後一切関与せず」との転向上申書を書いた、秋に保釈となる。その後函館で半年ほど療養したあと上京し、川口浩のすすめで日本プロレタリア作家同盟に加わり、評論を書き始める。「創作活動に於ける当面の諸問題」(昭7・6、「プロレタリア文学」)がデビュー作。昭和8年3月ナルブ大会で中

部教授。「国語国文研究」等に伊藤整論を、続いて同人雑誌「序説」「位置」および岩波「文学」に「平野謙論」や「高見順論」を発表。また第八回群像新人文学賞で「ある文学史論のゆくすえ」が次席。昭和43年「北方文芸」に「中野重治と伊藤整」を連載、作家の認識と環境との偏差を構造的に捉え、それらを「伊藤整の世界」(昭44、講談社)、「中野重治論」(昭45、三一書房)にまとめる。以後は文学の原理的な考察に進み、「小林秀雄論」(昭47、瑞書房)や言語表現論として「現代の表現思想」(昭49、講談社)のち改訂「身体・表現のはじまり」のほか、「個我的集合性―大岡昇平論」(昭52、講談社)、「感性の変革」(昭58、同)、「身体・この不思議なるものの文学」(昭59、れんが書房新社)などの著作で旺盛な批評活動を展開している。

亀岡鶴水(かみおかつるみづ) 明38・1・1〜(63)〔俳句〕兵庫県生まれ。本名鶴雄。立命館大学専門部卒。高等文官試験合格。樺太庁事務官を皮切りに各官職に就き、釧路地方経済調査局長を最後に退官。昭和13年樺太庁俳句会に入会。終戦後シベリアに抑留され善羅漢句会を結成、幹事をつとめた。帰還後「水下角」所属。昭和49年「えぞにう」所属同人。

中央委員となり教育部長に選任される。昭和9年「文学評論」(3月)、「現実」(4月)の創刊に参加。同年10月保田与重郎らと日本浪漫派を結成。処女評論集「転形期の文学」(ナウカ社)を刊行。10年3月創刊の「日本浪漫派」編集の中心となって「生けるユダ」(5、6月)を発表。「人間教育」(昭12・12、野田書房)により第四回池谷信三郎賞を受賞し、13年9月より「文学界」同人となる。このころから仏教、古美術への関心を深め「東洋の愛」(昭14、竹村書房)、「現代人の救ひ」(昭17、桜井書店)、「大和古寺風物誌」(昭18、天理時報社)、「親鸞」(昭19、新潮社)などを発表。22年6月に開かれた札幌での北海道出版文化祭には小林秀雄、久米正雄らと水川丸で来道し、大講演会に参加した。「北海道文学の系譜」(昭29・8・16、読売新聞)で札幌のビュリタニズム、小樽のリアリズム、函館のロマンチズムという図式を示して、それ以後の北海道文学研究に示唆を与えた。昭和41年9月札幌の北海道文学展のため、三〇枚の色紙に自筆年譜を書き、絶筆となった。「我が精神の遍歴」(昭23、評論集)。「現代人の遍歴」(昭23、養徳社)を改題(昭26、創元社)した。少年期の「富める者」としての罪意識から説きおこ

53年「狩」所属。句集「北方圏」(昭57)は釧路文学賞を受賞した。(鈴木青光)

亀村 青波(かみむらあおなみ) 明44・3・25〜(1911)〔短歌〕札幌市生まれ。本名義雄。料理店北野家に就職。戦時、一時期自主廃業のため糧秣廠勤務、応召、土建会社勤務。戦後北野家再開に参画。取締役営業部長を務めて退職。短歌は昭和初期学友の誘いで投稿を始める。文語歌、俳句、川柳等にも手を染めたが、昭和4年ころ並木凡平の口語歌誌「新短歌時代」に所属。「青空」を経て同誌復刊後も活躍。昭和44年札幌から「新短歌時代」発刊に参画、同誌主宰。北海道歌人会幹事を経て同会委員。合同歌集「七彩」、55年金婚式を記念に歌集「さざなみ」発刊。歌柄は温和で、生活に根ざした作品が多く、終始定型口語歌を愛する態度は青波の人生観でもある。(一首でも二首でも私の血が通えしよせん捨てられぬ短歌へのいのち)

亀山正治(かみやまただよ) 大2・1・29〜(63)〔短歌〕小樽市生まれ。小樽商業学校在学中、同級の竹田磯次郎の勧めで定型口語歌を作る。「みどり」「銀杏」発行に参画。並木凡平の「新短歌時代」同人から大熊信行の「まるめら」に加入。現在「青空」同人。「新短歌時代」編集委員。「芸術と自由」「新短歌」同人。歌

集に「孫子老の詩」「むすこのてのひら」など。小樽文化クラブ会員。小樽みなどライオンズクラブ副会長等を歴任。

亀山昭祐 (吉田秋陽) 昭7・3・19(1932)

「俳句」樺太生まれ。大泊中学入學、戦後夕張鹿島高校卒。陣不倒を知り作句、昭和32年「緋衣」に入会。35年緋衣新人賞受賞。「圏」「r」創刊同人、38年創刊の「象」発行責任者。句集に「喪失の午前」(昭40、象の会)がある。

蒲生貨車夫 (辻協系一) 昭2・1・17(1927)

「俳句」帯広市生まれ。本名力一。元国鉄職員。昭和20年ころ俳句の道に入り、のち「えぞにう」「緋衣」「柏」「風」に所属。一方、若手俳人と共に昭和25年同人誌「波紋」を発行、真摯な作句活動をし、八九号まで発行した。28年国鉄労組文芸年度賞、41年、43年と二位、三位を受賞。52年句集「家路」出版、釧路文学賞を受賞した。現代俳句協会員。現在「えぞにう」「これ」同人。

加茂儀一 (鈴木青光) 明32・11・6(昭52)

・11・7(1899~1977)「技術文化史研究」兵庫県生まれ。東京商科大学卒。中央气象台、東京工業大学教授を経て、昭和32年から40年まで小樽商科大学長。

行「新潟県生まれ。本名七郎。明治36年東京英語学校卒。実家が没落したため37年ごろ来道して石狩管内を転々とし、40年ごろ厚田村に落ち着く。42年に厚田小学校の代用教員になったが、教え子に子母沢寛がいる。45年に最初の行記「ルーラン」(小樽・近江堂)を上梓。大正元年に歌人の並木凡平らと同人誌「北国文壇」を創刊したが、本道文学運動の第一期生群に位置する。大正5年に厚田小学校を退職して小樽市に居を移し、翌6年小樽新聞社の社会部記者となる。翌7年に北海タイムス社(現北海道新聞)に転じ、社会部長や事業部長をつとめた。大正4年「熊の囁」、6年「江差松前道分節」、7年「手宮の古代文字」、10年「薩哈噠の旅」などを刊行し、昭和10年の「蝦夷地は歌ふ」(富貴堂)が最後の著作。名紀行文を兼ね備えた優れた探勝家であった。

川内康範 (木原直彦) 大9・2・26(1902)

「小説」函館市生まれ。本名潔士。坑内員、工員、店員などを遍歴して上京、浅野晃に師事して詩作を続けたが、昭和23年小説「愛怨の記」で第一回福島県文学賞受賞。28年に処女出版「生きる葦」「かくて愛に自由」を刊行したが、33年からのテレビ映画「月光仮面」の作者として一躍クローズアップされた。歌

オナルド・ダ・ビンチの研究家として有名。「モナ・リザの秘密」「レオナルドと科学」等の著書がある。昭和35年「榎本武揚」を出版、科学史家の日で武揚を分析した。日本科学史学会長、世界連邦建設同盟理事長などを務めた。45年勲二等瑞宝章、52年従三位に叙せられる。

萱野 茂 (協田 勇) 大15・6・15(1920)

「アイヌ文化研究」日高管内平取町生まれ。父貝沢清太郎、母はつめの三男、父方の縁戚の萱野家に養子。測量、造材などの業のかたわらアイヌ民具を製作。同族の先輩、知里真志保に研究方法の教示を受け、日高地方を中心にユーカラ、ウエベケレなどアイヌの口承文芸の保存につとめ、録音したテープは延べ五〇〇時間を超える。また古くから伝えられる生活民具をも採集、保存し、同郷の同族、貝沢正と共に、それらを収蔵、展示する二風谷アイヌ文化資料館建設を提唱、館長として運営に当たっている。また録音した民話や、金田一京助のために筆録した金成マツのユーカラノートの和訳をすすめている。著書多数あり「ウウエベケレ集大成」で昭和50年第二三回菊池寛賞。40年北海道文化財保護協会文化財保護功労者賞、52年平取町教育功労賞、53年北海道文化奨励賞などを受賞。

謡曲の作詞も多く、35年度レコード大賞、43年度作詞大賞を受賞している。

川江青佳 (脇 哲) 大3・5(昭36)

・20(1914~1961)「俳句」石狩管内広島町生まれ。本名正吉。葦牙「馬酔木」「寒雷」「鶴」などで穏健な作風で活躍。昭和16年から「葦牙」の編集同人として長谷部虎杖子をたすけた。晩年肺疾患となり、白川療養所に入り、闘病のかたわら没年まで句作に精進した。句碑「蟋蟀や凡壺に活ける山の草」が同療養所庭にある。句集「凡壺」は昭和33年葦牙叢書第一集として刊行された。

川上喜代一 (佐々木子興) 大6・10・7(1917)

「短歌」岐阜県生まれ。旧制余市中学卒。昭和13年から約一〇年兵役に就き、終戦時はラバウル。22年に復員、北炭に約一〇年働き、のち余市に帰り、自営業を営む。戦前と戦後の一時期詩作のほか、小樽新聞に口語歌を投稿、並木凡平の選を受けた。短歌(文語)との出会いは、復員後すぐ「楡」に投稿、芥子沢新之介の選を受けたことに始まる。数年後「楡」が解散し、本間武司の勧めで「原始林」に入会した。山下秀之助、田辺杜詩花、戸塚新太郎の選を受けながら熱心に作歌に励み、33年田辺

50年より平取町議。(藤本英夫)

狩野敏也 (詩) 昭4・9・17(1929)

「詩」根室管内標津町生まれ。北海道大学卒。NHK勤務。日本児童文学者協会、波の会の会員、詩誌「風」「曠野」同人。詩集「おぼろづく」(昭46・2、風社)、「サン・ジャックの朝」(昭51・7、思潮社)がある。(小松英子)

枯木虎夫 (詩) 大3・12・29(昭52)

・5・26(1914~1977)「詩」帯広市生まれ。本姓井上。戦時中は樺太豊原支庁勤務。戦後は札幌地検事務官で定年。「山脈」「石狩平原」(栗山町)、「野性」(札幌市)同人を経て「詩風土」(札幌市)を主宰した。北方の大自然を愛し、労働に生きる人間に親しみ、哀愁と孤高を詩精神とした。作中に古今東西の人名を登場させ、題名に何々の詩と付すが特徴であった。夢みた社会に絶望した枯木は、最後の詩集となった「冬」で、病める文明の中に己れの死を予知した詩を詠い、病床で「冬」のゲラ刷りを終えて生を閉じた。昭和43年第一回小態秀雄賞受賞。詩集に「陽とともに」(昭14)、石狩平原詩社、山内栄二と共著)のほか「雁」「雁」「驚」「冬」、詩画集「望郷」がある。(山内栄治)

河合操石 (詩) 明16・12・12(昭16)

・3・6(1883~1941)「新聞記者、紀賞、42年原始林賞を受賞し、同人として重きをなす。作風は、北方風土に根ざした生活抒情を、内閉的な態度でうたいあげるのが特徴。ことに小樽運河の風景に自己の心象を託してうたった秀作が多く見られる。(潮さして来らむ時が海にむく口あかあかと運河午後五時)

川上澄生 (平松 勤) 明28・4・10(昭47)

・9・1(1896~1972)「版画」横浜市生まれ。青山学院中等部卒後、カナダ、アメリカ、アラスカを歩き、そのころより詩作を始める。宇都宮中学英語教師。昭和20年胆振管内追分町に疎開し、次いで同白老町に移り、苫小牧中学嘱託教師となり、24年宇都宮に帰る。在道中「安平川」「寂寥地方」「胆振國白老村にて」「苫小牧市」「えぞがしま」「あいのもしり」等を「我が詩篇」に集録する。

河上徹太郎 (史料源蔵) 明35・1・8(昭55)

・9・22(1902~1980)「評論」長崎県生まれ。近代批評を樹立した先駆者の一人といえるが、代表作に「日本のアウトサイダー」など。敗戦直後の昭和22年5~6月に開かれた北海道出版文化祭に亀井勝一郎らと来道しているが、エッセーに旧幕府軍大島圭介の足跡をたどった「革命前後の人」(昭30・2、「別冊文

芸春秋)がある。(木原直彦)

川喜多二郎 (かわきた じろう) 大9・5・11 (1902) (民族学)三重県生まれ。京都大学卒。「日本文化探検」(昭35、講談社)のなかに昭和14年の本道紀行「北地の日本人」があり、十勝の野に入って農民・画家・登山家の坂本直行に出会う場面が現れる。(木原直彦)

川崎彰彦 (かわさき てるひこ) 昭8・9・27 (1933) (小説)福岡県生まれ。早稲田大学露文科卒。大学時代五木寛之らと「月報現代芸術」を発行。北海道新聞函館支社に勤め、同紙に「五稜郭物語」を連載(昭41、五稜郭タワー)、かたわら「新日本文学」や「函館勤労者文学」などで作品活動。昭和42年退社して大阪で作家生活に入る。主な著作に小説集「まるい世界」(昭45、構造社)、「夜がらすの記」(昭59、編集工房ノア)、随筆集「私の函館地図」(昭54、たいまつ社)などがある。(安東肇二)

川崎茂次郎 (かわさき 茂じろう) 大13・3・22 (昭49・12・28 (1924~1974)) (小説)芦別市生まれ。本名定平。「北海文学」に「めろん」「落丁の多い落書」「畏」「象」などの佳作を発表。「釧路現代文学選集」第六巻(昭46)に収録。生前をしのんで「めろん忌」がある。(鳥居省三)

川崎大治 (かわさき たいぢ) 明35・3・29 (昭55

・8・8 (1902~1980)) (児童文学)札幌市生まれ。本名池田政一。早稲田大学卒。巖谷小波の門下生。昭和4年新興童話作家連盟に加入、翌5年プロレタリア作家同盟に加入して「少年戦旗」を編集。「ピリピリ電車」が文壇出世作。紙芝居の出版にも意欲を燃やし「紙芝居の大治先生」として知られる。代表作に「太郎熊、次郎熊」があり、紙芝居の出版点数は二〇〇を超えるといわれている。代表作は「太陽をかこむ子供たち」(昭15)で、現実の子どもの生活に根ざした生活童話を築いたと評される作品。また「戦争讚美におぼれきつていたとき、そうした侵略戦争にたいする、ささやかながらも、抵抗の姿があらわれている」(和田義雄)、『赤い鳥』等の既存の児童文学を交革しようとした情熱がある。…生活を楽しむ子どものために精いっぱい知恵と行動を見せる子どもたちを登場させ、戦時体制に対する抵抗を示した(向川幹雄)という評価もある。実践活動、評論と多方面にわたった川崎の活躍は、児童文学の地平を切り拓く先兵の役割を果たしたといえよう。楳本楠郎理論の継承者でもあり、児童文学者協会の会長もつとめた。東京家政大学にも出講し、同校の教授をつとめた。他の作品に「新しい魔法の町」「熊のたずねた木

こり小屋」「はなになれ、みちになれ」「夕焼けの雲の下」「川崎大治民話選」などがある。(笠原肇)

川崎昇 (かわさき なる) 明37・4・20 (1902) (短歌)後志管内余市町生まれ。妹に詩人の佐川ちか(川崎愛)がいる。余市尋常高等小学校高等科卒後、小樽の貯金支局勤務。従兄の川崎尚(田居尚)が大正10年7月創刊した雑誌「青空」に参加、同7集から余市町の自宅を発行所にして編集、伊藤整が加わる。13年上京、新橋の貯金局勤務。昭和3年1月伊藤整、河原直一郎と「信天翁」を、翌年「文芸レビュー」を創刊した。(日高昭二)

川嶋 至 (かわしま いたる) 昭10・2・24 (1935) (評論)札幌市生まれ。北海道大学国文科卒。東京工業大学教授。同人誌「位置」創刊に加わり、「川端康成―大正期に於ける批評活動」(上)(昭38・6・39・4、「位置)、「川端康成の創作意識―観戦記から『名人へ』」(昭41・2、「位置)などを発表、注目された。著書に「川端康成の世界」(昭44・10、講談社)、「美神の反逆」(昭47・10、北洋社)がある。(神谷忠孝)

川嶋康男 (かわしま けんお) 昭25・2・16 (1950) (ノンフィクション)後志管内内岩内町生まれ。主な著書に「札幌焼の謎」

(昭52、私家版)、「聞きがたり北の大衆芸」(昭55、みやま書房)、「南部忠平物語」(昭56、北海道新聞社)、「北風に遊ぶ哀歌を聴いた」(昭59、総北海道出版部)、「北の獅子舞」(昭60、北海道テレビ放送。道ノンフィクション集団幹部。札幌市役所勤務。(木原直彦)

河 精太 (かわ せい) 昭3・4・10 (1938) (小説)十勝管内士幌町生まれ。本名小川精一。帯広畜産大学卒。高校教師。戦後の北海道高校演劇活動の組織化に従事し戯曲、放送劇を書き、自ら演出、審査員にもなった。長編小説「翌松」(昭35、「北海文学)は第一回太宰治賞の最終候補に残った。「釧路現代文学選集」第六巻(昭46)に収録。同人誌「群水」(昭33)主宰。戯曲「はまとんけし」「棹浜」がある。(鳥居省三)

河草之介 (かわくさ のすけ) 昭8・1・17 (1933) (俳句)日高管内浦河町生まれ。本名木田恒夫。昭和25年より句作。27年「緋衣」に入会、34年同人。同誌廃刊後の40年「水原帯」同人となる。細谷源二の影響を強く受け無季俳句を実践、41年から数年間深沢伸二、谷口亜岐夫とともに編集に当たる。41年風餐賞(新人賞)、44年水原帯賞受賞。51年より「広軌」同人。現代俳句協会会員。(園田夢蒼花)

川田 順 (かわた じゆん) 明15・1・15 (昭41

・1・22 (1893~1966)) (短歌)東京生まれ。東京大学法科卒。住友本社入社。明治30年佐佐木信綱に師事、「心の花」同人。昭和37年芸術院会員。来道は大正10年7月、歌集「山海経」(大11)に二十九首、二度目は昭和12年6月で、その歌は「驚」(昭15)に一六首収録。紀行文集「山海記」に当時の旅行記四編所載。その歌は関連で歯切れよく、本道の特徴をよく捉えている。(中山周三)

川田光子 (かわた みこと) 大9・2・16 (1920) (俳句)愛媛県生まれ。昭和38年苦小牧俳句会に入会。山下率實子、新田汀花に師事。39年「葦牙」に入会。41年「河」に入会。54年「人」創刊とともに入会、進藤一考に師事。「葦牙」苦小牧支部長。(太田耕吐子)

河内英社 (かわうち えいせ) 大2・4・1 (1903) (短歌)釧路市生まれ。本名栄蔵。根室商業卒。郵政省職員として長く道内に勤務したが、昭和48年定年退職して千葉県に転出。歌誌「吾妹」を経て、昭和10年来道した橋本徳寿の「青垣」に加入。長年徳寿の歌風に親しんだが、独自の質実な歌風を保った。北海道歌人会幹事を長く務め、歌集は三木唯史との共著「氷峽」(昭24)と、青垣叢書「望郷」がある。(田村哲三)

川仁純子 (かわに じゆん) 明31・1・15 (昭53

・12・24 (1898~1978)) (短歌)大阪生まれ。明治34年上川管内中富良野に移住。明治41年耳疾発病、完全聾者となる。大正10年「潮音」に入社。太田水穂、小田鯉鯨に師事。昭和5年「新壘」創刊に参加、選者となって富良野周辺の多くの歌人を育てた。大正7年日本裁縫教育会普通部を、9年大日本通信高等学校を卒業。歌は、いけにえの人生にあって、ひるむことなく美しい目でものを見て、心象、社会詠と幅ひろい。歌碑が中富良野町にある。歌集「とど松」「開拓絵巻」「くろゆり」がある。(一すぢの道なほつづけかへらざる旅出に我は歌を笈ひゆく)

川西つお (かわにし つお) 大7・4・8 (1918) (俳句)帯広市生まれ。本名鉄雄。武道専門学校本科卒。昭和11年鈴鹿野風呂について作句。戦後「緋衣」「雲母」「水下魚」、現在「秋」「葦牙」同人。稚内高校校長退職後、一層の句作精進をつづける。別名「一葦」。

川西政明 (かわにし まさあき) 昭16・8・5 (1941) (評論)大阪市生まれ。中央大学卒。河出書房編集者のころ、船山馨を知り北海道出身作家達と親交。船山馨の評伝「孤客」(昭57、北海道新聞社)のほか「大江健三郎論」(昭54、講談社)、

「一つの運命(原民喜論)」(昭55、講談社)などがある。(朝倉 賢)

川端香男里 かたむね 昭8・12・24(1933)「露文学、比較文学研究」東京生まれ。東京大学卒。北海道大学でシア語を教えていたとき、川端康成の養女と結婚。この際、和田謹吾の従兄にあたる藤田圭雄を介して和田謹吾に川端康成が新婚の新居探しを依頼した。(神谷忠孝)

川端何洗 なにげ 明38・6・1(1909)「俳句」札幌市生まれ。本名一。高等小学校を卒業して父の経営する商店に入る。大正15年北海タイムス俳壇(青木郭公選、現北海道新聞)に投句したのが作句の始まり。同年「暁雲」創刊と同時に加入し、長年熱心に作句を続けたが「暁雲」は昭和23年に廃刊となり、以後、41年実弟麟太の勧めにより「水原帯」同人となるまで作句を中断した。49年「広軌」同人。現代俳句協会員。(川端麟太)

川端康成 かたむね 明32・6・14(昭47・4・16(1899-1972))「小説」大阪生まれ。第一高等学校を経て東京大学国文学科卒。横光利一らと新感覚派運動を興す。芸術院会員、日本ペンクラブ第四代会長、昭和43年ノーベル文学賞受賞。昭和13年6月横光とともに札幌を訪れ、講

演後真駒内などに遊ぶ。22年5月北海道出版文化祭に北大中央講堂で講演、登別、洞爺を回り室蘭より帰京。42年令嬢が札幌に嫁したので同年冬来札。(和田謹吾)

川端麟太 かたむね 大8・1・16(1906)「俳句」札幌市生まれ。本名末泰。北海中学校卒業後公務員、会社員等の職に就く。昭和13年兄何洗の勧めで青木郭公の「暁雲」により作句を始め、以後「石楠」「青炎」「アカシヤ」「緋衣」各誌の同人。23年細谷源二を中心とする「北方俳句人」の創刊に関与してからは、筆名を柳人から麟太に改めた。「北方俳句人」は翌24年「水原帯」に移行。45年主宰者源二死去のあと深沢伸二、木下春影とともに代表となり、後さらに推されて後継主宰となった。晩年の源二が極端な破調を試みたのに対し、麟太は無季肯定の立場を取りながら定型を重んじ、その句風は流麗甘美といわれる。句集は「庶民の帽」(昭41、水原帯発行所)、「川端麟太集」(昭49、八幡船社)、「さつぽろ砂漠」(昭51、水原帯社)の三冊。札幌市に句碑一基。北海道新聞俳壇選者。現代俳句協会員。細谷源二賞選考委員。北海道俳句協会常任委員。(朝倉 賢)

3)、「岬から翔べ」(昭59・4、構想社)で第一八回北海道新聞文学賞受賞。ほかに「閉じられた島」(昭48・12、「新潮」)、「島よ、眠れ」(昭54・10、「北方文芸」)、「昭55・1、「文学界」)、「空の銃架」(昭55・8、「すばる」)などがある。(朝倉 賢)

川村慶子 かむらこ 大11・6・20(1908)「小説、詩」日高管内門別町生まれ。北海道学芸大学札幌分校卒。江部乙、標茶、旭川、伊達等の各地で高校教師の生活を経る。昭和24年新潟市の雑誌「北日本文学」に芹沢慶子のペンネームで小説を投稿、注目を受けた。35年、40年にそれぞれ詩集「半生」「悲歌」を上梓した。35年「冬濤」に参加、40年の23号あたりから毎号精力的に小説を発表していく。「執念」「エ・ジュルス」「めこのユーカー」等によって頭角を現し、安定した実力派女流と目される。戦中派独身女性の性に巣くう閉ざされた実存の心象風景をとおして、女の業にせまる心理表出の手法に特色がみられる。詩誌「情緒」にも属したが、46年未発表の「インルデを目ざして」を加えた六編を小説集「竜神に凝る」にまとめた。これは、北書房による「北海道文学選集・女流小説シリーズ(1)」にあたる。(高野斗志美)

川村静子 かむらこ 大9・5・18(1908)「俳句」砂川市生まれ。旧制滝川高等女学校卒。昭和31年帯広の婦人句会に入会、「水下角」「雲母」に拠る。その後釧路転居に伴い、北方の風土性を色濃く表白する作風を身につけ、「雲母」巻頭作家となり、52年同人。昭和45年「雲母珠玉作品集」第一集および56年の第二集にも数多く秀句が採録されている。昭和45年合同句集「大湿原」参加。(鳥 恒人)

川村淳一 かむらひとし 大11・1・27(1909)「小説、短歌」函館市生まれ。小説「ひとり坂」(北方文芸)、「花咲蟹」「樽太鼓」(北匠)があり、「釧路現代文学選集」第四巻(昭46)に収録。釧路歌人会長(昭33)。釧路市文化奨励賞受賞。編著「釧路万葉集」(昭58)が好評であった。(鳥居省三)

川村清吉 かむらきよきち 大3・3・29(1904)「短歌」後志管内寿都町生まれ。筆名麗花。昭和5年小樽新聞歌壇に投稿。並木凡平に師事。「新短歌時代」「青空」「短歌新調」「短歌紀元」「現代短歌」等に所属。現在「北土」編集委員。昭和7年小樽青空詩社より歌集「幌馬車」発刊。寿都町議会議員。同ことぶき短歌会長。同文化団体連絡協議会長。団体役員。口語歌壇における活躍が目ざましい。エッセー等多数。(吉田秋陽)

共に頭角を現し、「新声」の俳句欄選者となる。明治30年松山から創刊された「ほととぎす」に参加。35年子規没後「日本俳句」の選者を継ぎ、虚子は「ホトトギス」の主宰となった。このころから虚子と作風上の対立を生じ、虚子の花鳥諷詠に対する新傾向の新風を唱導し、精力的に各地を巡る。北海道との縁は、明治40年、昭和2年、5年と三回にわたって来道し、各地を訪れたが、その目的も新傾向の句を広めるためであった。最初の旅は、その著「三千里」「続三千里」に詳しく記述されているが、高弟であった泉天郎をはじめ、札幌、小樽、旭川、函館、根室など各地に、碧梧桐派の自由律俳人がいた。しかし、その自由律俳句も、その間「層雲」「海紅」等の主宰を経てより漸次分派的な様相を見せ、「三昧」を最後に還暦で俳壇から引退した。碧梧桐は、俳句のほかにジャーナリストとしても活躍し、多くの俳論や、与謝蕪村の研究など数多くの著作で知られる。(木村敏男)

川辺為三 かたべみさ 昭3・11・29(1908)「小説」樺太豊原市生まれ。昭和22年帰国。北海道学芸大学札幌分校卒。高校教師。31年「凍橋」(のち「くりま」と改題)を創り、同誌に作品を発表。「白袖無文」で新潮新人賞候補(昭47・

第三句集。昭和43年から49年までの作五〇〇句を収録、伝統俳句で鍛えた観察力、表現力が前衛志向と調和して麟太独自の世界を展開する。(水点へ逸るわが斧ぬれぬずみ)「北海道文学全集」にも収載。(園田夢蒼花)

河原直一郎 かたはらなほいちろう 明38・9・1(昭49・12・12(1905-1974))「詩」小樽市生まれ。父直孝は北海水力電気株式会社取締役、小樽市議会議員のち小樽市長。小樽中学から京都府立一中へ転校。病を得て帰郷後、小樽高等商業学校図書館に勤める。昭和3年1月伊藤整、川崎昇らと「信天翁」創刊、同3月詩集「春・影・集」(金星堂)を自費出版(序文は伊藤整)。同5月フランスほか三国へ外遊、在仏のまま翌年「文芸レビュー」等に寄稿。(日高昭二)

河東碧梧桐 かとうひろかたむね 明6・2・26(昭12・2・21(1873-1937))「俳句」愛媛県生まれ。本名兼五郎。旧制伊予尋常中学校は高浜虚子と同級で、旧制高等学校も同じ下宿、また中途退学も同じであった。明治28年日本新聞(入社し、のち京華日報、太平新聞、中央新聞等の社会部長を務めた。漢学者であった父の縁で正岡子規を知り、その指導を受けるようになり、虚子と共に子規を頼り上京する。子規の唱導する日本俳句で虚子と

川村 瀧人 たかひと 明37・11・27 (62) (短歌) 滝川市生まれ。本名武夫。札幌師範学校を卒業後、道内小学校の教員、校長を歴任し、昭和40年札幌市立寒小学校長を最後に勇退した。大正14年9月「潮音」に入社して太田水穂の指導を受ける。昭和5年に創刊された「新壘」に参加し、以後長期間にわたって同誌の選者や編集委員として作歌活動を続けるとともに、後進の指導に当たった。その間、昭和22年に「青楸」を刊行して主宰をしたこともある。48年から小田観螢の後を継いで北海道新聞歌壇の選者となる。現在は北海道歌人会委員。「潮音」の幹部同人、選者として全国的な会員の作歌指導に当たっている。作品は、作歌理念の視座を確かに据えながら、すぐれた知的感覚と豊かな抒情質を内包させる。現代本道の歌人を代表する一人である。昭和36年に処女歌集「不凍湖」を出版。北海道の風土の抒情を掬い上げた。「北の眉」ほくすゝめ、歌集。昭和50年3月に発行された第二歌集。処女歌集から一四年後に編まれた。作品はだいたいの年代順に「涯」「幻」「塔」の三部に構成され、歌数四一五首を収める。〈凛冽の気流を透す初日赫し日本列島の灼かる背〉の一首を開巻とするこの歌集の成った期間、安保闘争を経る激動の時期であり、また著者にとっても四十余年にわたった教職を退くという転換の時でもあった。冷徹な風土の中で耐えと飢えの心を鍛え磨き上げ、鋭く事象や情勢を捉える能力、柔軟な感性と豊潤な感覚は、歌人としての詩性の高さを示し、常にそれを保持する不断の営みがある。〈飢えの如くガラス欠けたる所より北の生れの眉をあげしか〉

河邨文一郎 かむらふみいちろう 大6・4・15 (67) (詩) 小樽市生まれ。北海道大学医学部卒業後、東京大学整形外科を経て、昭和27年札幌医科大学教授。現在同大学名誉教授。北大在学時代から詩人金子光晴に師事して現代詩にうちこみ、昭和9年ごろより「北大文芸」「新領土」(春山行夫)、「詩生活」(泉芳朗)などに作品を発表。戦後は浅井十三郎らの「詩と詩人」に編集同人として招かれ、また更科源蔵らの「野性」の編集同人もつとめた。昭和24年北海道に戻り同年4月詩集「天地交驛」(詩と詩人社、第一回北海道文化奨励賞)、26年2月「山嶺の火」(詩と詩人社)、33年6月「湖上の薔薇」(ユリイカ)、34年4月「物質の真屋」(凡書房)、43年9月「ザ・ミッドナイト・サン」(あいなめ舎)、51年11月「一本のけやきの影」(無限社)、57年7月「河邨文一郎詩集」(思潮社、271頁、

97編を収める。前記六詩集の選集にあたる大冊)。「詩法の秘密はモチーフの内面性と外面性との同時的把握だといってよい。氏は眼を同時に表側と裏側とに向けてその意味を透し見しようとしている」(木原孝一)。昭和36年夏「核の会」を興し、翌37年2月詩誌「核」を創刊、現在まで四四号を出した。「核」を主宰し萩原貢、原子修、永井浩、新井章夫、鷲谷峰雄、米谷祐司ほか多数の詩人を育て、日本北方最強の集団と言われるようになった。その間、核詩集二回(10周年、20周年)、核叢書二〇余冊を出している。一方、北海道詩人協会の設立に参加し、その代表理事、会長を数期にわたって歴任し、北海道現代詩の振興に貢献した。また昭和51年度「日本現代詩人会H氏賞」の選考委員長もつとめた。氏には詩集のほか選詩集、リルケの翻訳詩集、舞踊詩劇(白鳳の華)、歌曲集、エッセイ等多数の著作があるが、昭和47年札幌冬季オリンピック賛歌「虹と雪のバラード」はいまなお多くの人々の愛唱歌となっている。(瀬戸哲郎)

域」(昭58、国文社)、「批評という物語」(昭60、同)、「音は幻」(同、同)などがある。(神谷忠孝)

川村 弥生 やよい 大4・3・24 (615) (短歌) 網走管内西興部村生まれ。昭和3年ころより並木凡平の小樽新聞歌壇に口語短歌を発表。当時、筆名栗原悦子。以後「鈴蘭」「針路」「樹心」「蟹」等に参加。戦後「輪」編集委員。「新短歌時代」「漢岩嶺」「岳樺」創立に参加したが、現在は「青空」同人。新短歌人連盟委員。北海道文学館理事。歌集「山峡の唄」を昭和7年に出版。口語歌壇ではキャリアをもつ詩人である。(吉田秋陽)

協会員、55年壺中賞受賞。56年より素玄集同人(無鑑査)、壺同人会幹事として芦別壺の会を率いている。(金谷信夫)

神沢利子 としかこ 大13・1・29 (622) (児童文学) 北九州市生まれ。炭鉱技師だった父の転任に伴い、二歳から東京、北海道、樺太と移り住む。幼児期を過ごした札幌の風物は高い評価を受けた作品「いないいないばあ」の中に描かれ、樺太の北方性の詩情は「ちびっこカムのぼうけん」「銀のほのおの国」などの中にちりばめられている。樺太東海岸北部の内川小学校を卒業、豊原高等学校二年の夏に上京、自由学園普通科に編入。自由学園美術部に入学後文学部に転科。このころから詩を書き始める。昭和18年結婚。結核や家業倒産などで辛苦をなめる。その後療養しながら童話、童謡を書き、NHKで幼児のうたを発表。幼年童話の名手として知られ、その中には「くまの子ウーフ」が有名である。ほかに「いたずらラッコのロッコ」「フライパンが空をとんだら」「ふらいはんじいさん」「はけたよはけたよ」「あひるのバーバちゃん」など童話、絵本の作品多数。(加藤多一)

ら三姉弟の伯母。J・Pチャラーの知遇を得て、一八歳から数年間、函館のアイヌ人伝道師養成の愛隣学校に学んだ後、平取、旭川で布教、大正7年以来、金田一京助のアイヌ研究に協力、約一六〇冊のユーカラノートを残し、その一部は「アイヌ叙事詩ユーカラ集」I・II・IX(三省堂)に所収。昭和31年紫綬褒章受章。(藤本英夫)

菅野正治 ひさのぶ 大5・3・10 (昭56・6・20 (1916~1981)) (短歌) 福島県生まれ。酪農家。昭和2年渡道、空知管内上芦別に入る。18年日高管内新冠に開拓入植。21年「原始林」入会。46年「いしかり」入会。札幌で死去。(水口幾代)

川村 豊 ゆたか 昭12・9・6 (623) (俳句) 後志管内黒松内町生まれ。中学時代新田汀花校長の影響から俳句を始め、「緋衣」を経て「磔」「象」など同人誌を中心に作品を発表。昭和52年創刊の「秋」発行人。句集に「眼」(昭35、磔社)がある。(辻脇系一)

川本政代 まさよ 大7・3・23 (618) (俳句) 朝鮮釜山生まれ。釜山高等女学校卒。会社事務員を昭和58年退職。45年ころ「ぬかご」に投句、新人賞を受賞したが、約一年で退会。46年「丹精」素玄集に投句、斎藤玄に師事。48年「壺」復刊と同時に同人参加。50年俳人

金成マツ まatsu 明8・11・10 (昭36・4・10 (1875~1961)) (ユーカラ伝承) 登別市生まれ。知里幸恵、高央、真志保

菅野美知子 みちこ 昭4・2・25 (629) (短歌) 樺太生まれ。昭和22年10月小樽に引き揚げる。32年「新壘」入社。40年新壘賞、47年北海道歌人会賞、51年小田観螢賞を受賞。40年「素」創刊に参加、42年脱退。56年「新壘」退社。郵政事務官三十余年で退職。55年歌集「非天」、56年「田型広場」を刊行。漂泊する魂を知的に灼き、鋼の叙情を湛える。〈白樺の幹よりまなここぼれくる水雨の窓辺に佇ちてゐにけり〉

上林 暁 あきぼけ 明35・10・6 (昭

き

55・8・28 (1902～1980) (小説) 高知県生まれ。本名徳広(とくひろ)城。東京大学英文科卒。改造社の編集者生活を経て作家となり、篤実な私小説を生涯たゆまず書き続けた。「上林晩全集」一九卷(筑摩書房)がある。短編「和日庵」(昭31・3、「芸芸」は北海道ゆかりの口語歌人鳴海要吉がモデル。(小笠原克)

上林(じょうりん) 秋夫(あきお) 大3・2・21 (1904) (詩) 札幌市生まれ。旧姓高垣。生後六カ月で母方の伯父上林富太郎の養子となる。大蔵省専売局官吏だった養父の転勤に従い、幼時から福岡、鹿児島、広島、大阪へと移り住み、昭和9年同志社高商卒、大阪地方専売局を経て高砂香料工業に転じ、取締役総務部長を務めた。昭和9年全国誌「日本詩壇」同人、翌10年に詩誌「魂」(のち「豚」現代詩精神)と改題)を創刊。昭和21年6月「日本未来派」創立に参加。日本現代詩人会の発展にも貢献し、38年から数年間その理事長として卓越した事務手腕をふるった。詩集には現代詩人会第三回H氏賞を得た「都市幻想」のほか、「上林献夫全詩集」(昭51、潮流社)を含め五冊あるが、特に58年刊行の「遺跡になる町」は事象内面の見事な立体視を展開し、この詩人特有の的確な視力の成熟を示した。日本ペンクラブ会員。

(河部文一郎)

木内(きうち) 綾(あや) 大13・7・7 (1905) (工芸) 空知管内幌加内町生まれ。戦後ヘアファッションの美容研究から転じ、昭和37年家庭の主婦らの講習会から生まれた企業組合を発足させる。55年優良繊維工芸館を旭川市忠和丘上に設立開館。「本道の自然」―流水、ミズバシヨウ、ライラック、摩周湖、大雪等を織りあげ、国内外で各種の賞を受賞。昭和59年二〇周年を迎え一代で築いた織元。著書に「手のぬくもり」「染め織りの記」など多数。(佐藤喜一)

木内(きうち) 進(すすむ) 明41・12・20 (1908) (詩) 山形県生まれ。昭和3年第一詩集「巢立ち」を出す。その後北海道に渡り、昭和8年旭川新聞社に入社したが、戦時統合により、北海道新聞から北海日日新聞、そして北海タイムス社に移り、論説委員を務め定年退職。昭和33年から「情緒」同人となり、38年ころより「昭和詩史」を毎号書き、50年までつづ

けたが、連載中から労作の評高く、一冊にまとめられる期待の声も高かった。58年エッセー「三岸好太郎の詩について」を自家版として発行した。詩集としては情緒刊行会から昭和44年「わが歳時記」、53年「幼年歳時」、55年「流離」を刊行するなど、詩作の活躍を見せるかたわら新聞、芸誌にエッセーの数々を発表している。(下村保太郎)

木内(きうち) 宏(ひろ) 昭15・3・14 (1909) (新聞記者) 群馬県生まれ。38年に東京大学文学部を卒業して朝日新聞社に入社。北海道の風土に魅せられて「北の波濤に唄う―江差追分物語」(昭54・3、「講談社)、「賽の河原紀行」(昭56・12、朝日新聞社)、「礼文島、北深く」(昭60・1、新潮社)の著作がある。58年から朝日新聞北海道支社編集委員。(木原直彦)

浪漫的抒情に富む。

(中山周三)

鬼川(きがわ) 太刀雄(たてお) 大10・3・20 (1921) (随筆) 深川市生まれ。旭川中学から東京慈恵会医科大学卒。三菱瓦斯化学診療所長、医博。歌集「堅香子の花」「さざん花」、随想「カマの舟唄」「さらばシベリヤ」、評論「凍れる詩人鬼川俊藏」(昭58、「文人の会」)などがある。(佐藤喜一)

菊田(きくた) 一夫(かずお) 明41・3・1 (昭48) (小説) 1908～1973 (劇作) 神奈川県生まれ。本名数男。NHKのラジオドラマ「君の名は」(昭27、29)は夜の放送時間帯の公衆浴場女風呂が空になるという伝説を生み、のちに映画化もされて人気はいやがうえにも上昇した。この「すれ違いドラマ」は全国観光地めぐりの一面を持ち、本道では阿寒国立公園が取り入れられて北海道観光ブームに役買った。宝文館から出版の四部作は放送のあと追ひ。長編「リラの花忘れじ」(昭22・6、松竹KK出版社)は旭川と東京を舞台にしたアイヌ民族を見据えた物語。(木原直彦)

菊地(きくち) 京路(きやうろ) 明34・10・15 (1901) (俳句) 秋田県生まれ。本名五三。函館師範学校卒、函館市東川小学校校長を最後に教職勇退、専ら文筆に親しむ。俳句は「霞雲」「海紅」を経て「時雨」「葦

牙」に拠り活躍、同誌金剛集同人。短歌もよくし、著書に歌集「未開紅」「天の花環」「鈴樹院哀悼に因む詠草」「玄牛」、句集「湖畔」「四季歳歳」、随筆集「句房草紙」など。昭和59年教育功労で勲五等瑞宝章を受章。(佐々木子興)

菊地(きくち) 慶一(けいいち) 昭7・6・23 (1908) (児童文学) 旭川市生まれ。網走管内で小学校教師として勤務し、生活綴方、生活記録運動を実践する。昭和48年「白いオホツク―流水の海の記録」を出版、以後文筆活動を行う。48年「オホツクの風に向って」が第四回学研児童文学賞に入選。49年「金の星社幼年童話」佳作となった「ふたりの白鳥クラブ」を同社より出版。その後「オホツクの歌」(昭53、岩崎書店)、「はくちょうクルル」(昭53、小学館)などを出版。常にオホツクの風土と現実と根ざした創作を志す。歴史、ノンフィクションにも興味を持ち、「紅の海」(昭52、楡書房)など多くの作品を持つ。児童向けには「流水の世界」(昭57、岩崎書店)、「ハマナスのかけで」(昭54、北書房)などがある。昭和44年より網走市在住。日本児童文学者協会会員。(加藤多一)

菊地(きくち) 信一(のぶいち) 昭7・7・23 (1908) (小説) 富良野市生まれ。昭和45年北海道有朋高校卒。郵政職員からNT

T社員に転じた。「平原文学」を主宰し、「山の灯」「別離」「石ころ」「第二組合」などの小説がある。(木原直彦)

菊池(きく池) 蒼村(そうむら) 明32・1・25 (昭37) (短歌) 1889～1963 (短歌) 三笠市生まれ。本名博臣。日本大学中退後十勝管内池田町小学校教員、銀行員、榨油工場経営等の後、昭和30年帯広市に転居、ドレヌメーカー女学院開校、校長となる。大正9年短歌同好者を集めて「牛蘭社」を結成、自宅その他で月例会を催す。のちに医師中島竹雄参加、12年中島を会長に推す。同年若山秋水の門に入り、「創作」に作品を発表、のち「吾妹」その他数誌に拠る。昭和6年活版月刊短歌誌「原始林」を編集、発行したが約二年で休刊。12年秋水ゆかりの地、十勝管内幕別町札内黒田温泉前に粒羅融、中島竹雄らと秋水歌碑を建立。17年中島竹雄歌碑を池田町清見丘中腹に建立。終戦後は歌誌「山脈」「鴉族」等に拠る。その作風は生活の贅を写実的に追求しながらも秋水調の詠嘆の贅を曳く。没後、寺師が菊池蒼村全歌集を編集印刷した(15回分刷)。(寺師治人)

菊地(きくち) 滴翠(てつすい) 大5・7・15 (1906) (俳句) 松山管内奥尻町生まれ。幼時樺太に移住、文官試験に合格、樺太検事局に勤務後樺太庁に出向した。その

在職中応召し、戦後シベリア抑留後帰国、石川県、北海道内の職業安定所に勤務、士別出張所長を最後に昭和50年退職。昭和9年「雲母」に入会、翌年伊藤凍魚に師事、「水下魚」の推進力の一人として、俳句を媒体として自然を凝視する作品形成を企図した。句の鑑賞力にもすぐれ、作風は鷹揚。「水下魚」廃刊後は「雲母」同人として活躍、現在NHK学園俳句講座講師。昭和26年ほまなす花権賞、翌年雲母寒夜句三昧個人賞受賞。昭和58年明治末から敗戦までの樺太における俳句作品を年代別、地方別にまとめた「樺太の俳句」（北海道新聞社）、つづいて樺太の独自の季語をあしらった「樺太歳時記」（東京国書刊行会）を世に出し、抑留俳句選集「シベリヤ俘虜記」（昭60・6、仙台双弓舎）を隈治人らと共に著して刊行。

菊地徹子 大14・5・1（1929）（詩）函館市生まれ。昭和31年「北方の詩」に入会。39年上京、「サークルP」に所属し、約三年東京詩学研究会に出席した。49年帰道して詩集「他人の芝生の中で」を出版。55年「帆」同人となる。（山本 丞）

菊池幽芳 明3・10・27（昭22・7・21）（1870～1947）（小説、新聞記者）水戸市生まれ。本名清。明治期の典町、南富良野町、占冠村の各市町村史のほか、「田呂善作伝」「松浦周太郎伝」「石川清一伝」「日本の包容性」「中道論」「日本を愛する心」「生命の微」などがある。（西川青海）

貴司山治 明32・12・22（昭48・11・20）（1899～1973）（小説）徳島県生まれ。プロレタリア文学運動のなかで「忍術武勇伝」「ゴー・ストッパ」など大衆性の濃い作風で知られた。取材作に『通俗歴史小説』と自認する。「最上徳内」（昭18、昭森社）のほか「北進日本人」（昭17）がある。（小笠原克）

北江 青 昭22・3・27（194）（小説）旭川市生まれ。本名伊藤進。工学院大学中退。建設会社、出版社、広告会社などに勤務。「虫は深部」（昭56・10、「北方文芸」）、「動物爆弾」（昭56・12、同、「イストラムの戦場へ」（昭59・12、同）などの作品がある。（神谷忠孝）

北川頼子 大8・2・11（1619）（短歌）室蘭市生まれ。北川緑雨夫人。二〇歳ころから口語歌誌「青空」に拠って作歌。中断のち昭和41年「原始林」と「鴉族」に入社、48年原始林田辺賞、49年には原始林賞と鴉族賞を共に受賞。視点を固定しない写実のなかに、沈潜したまなざしと生活者の実感が浮き

型的な家庭小説作家。大阪毎日の文芸部主任のとき長編「己が罪」を同紙に連載して空前の成功を収めた。続く代表作「乳姉妹」（明36・8・24）12・26、大阪毎日新聞前編明37・1、後編明37・4、春陽堂）は翻案もので、その一部は札幌が背景になっている。明治の読者に未知の北海道を広く紹介する役割を果たしたが、幽芳は明治35年夏に来道しており、その折の紀行記は「日本海周遊記」（明36・7、春陽堂）に収められている。（木原直彦）

菊村 到 大14・5・15（1929）（小説）平塚市生まれ。本名戸川雄次郎。作家戸川貞雄の二男。早稲田大学英文科卒。昭和32年に「硫黄島」で芥川賞受賞。社会派作家で推理ものや事件ものを多く手がけている。本道を舞台にした「殺意は海鳴りのように」（昭52・6、太陽）はこのジャンルの会心作であり、ほかに「残酷な月」（昭36・7、新潮社）などがある。（木原直彦）

岸 正夫 生年不詳（昭9（1934））（詩）札幌市生まれ。筆名山本正夫。札幌の詩誌の草分けといわれる詩人で、昭和5年より9年まで詩誌「自由詩人」を刊行、執筆者に更科源蔵、海老名礼太などの顔もみえる。昭和6年北海道詩人連盟を結成、「北海道詩人」を刊

彫りにされる。商家の主婦として古風な家族制度のもとにあって抑制され、培われた詩情は格調を伴う。歌集に「春寒」（昭51）がある。（村井 宏）

北川緑雨 明45・3・1（19412）（短歌）滝川市生まれ。本名孝一。昭和4年から小樽市に居住。12年ころより並木凡平に師事、口語歌誌「青空」に所属。終戦後二〇年の空白のち昭和40年「青空」復刊と同時に編集同人となる。凡平会会長、同歌碑保存会長等を務める。著書に抑留記「ダモイ」がある。へパロフスク日本人墓地で掌を合わす昔捕虜だったままのこの掌を。青山ゆき路歌碑の建設委員長となり、昭和54年6月小樽市朝里川温泉に建立した。その他、青空短歌会の運営に主役的活躍をみせ、特に全道口語歌大会、凡平祭を毎年挙行、常にその先導者として活躍。また抑留者のためにその保障運動の主唱者として「スコラ・ダモイ」を刊行、多くの反響を呼んでいる。（青山ゆき路）

北川玲三 昭4・10・15（1929）（小説）釧路市生まれ。本名渡辺隆一。北海道第一師範学校卒。北海道新聞記者。「潮想」（昭26）主宰。同誌に「二十才の頃の好事家」「飼育人の死」「弔葬の場」を発表。『潮想』五十号の歩み』は小説ではないが史的な意味で重

行、詩誌「時計台」も刊行した。第一詩集「放浪者の横顔」に次いで「街の敗者」、さらに没後、札幌・樹心詩社より遺稿集「寒帯樹」が刊行された。（小松英子）

木島 始 昭3・2・4（1928）（詩）京都生まれ。東京大学英文科卒。昭和28年新世代の左翼詩人の大同団結のため結成された「列島」（昭27（30））に参加。詩集に「木島始詩集」（昭28・5、未來社）、「ベタルの魂」（昭35・11、飯塚書店）、「私の探照燈」（昭46・9、思潮社）、「木島始詩集」（昭47・12、思潮社）がある。そのほか評論集「詩 黒人 ジャズ」（昭40、晶文社）やエッセー集、翻訳などがある。（瀬戸哲郎）

岸本翠月 明41・5・1（昭55・12・29）（1908～1980）（短歌）上川管内中富良野町生まれ。本名勇。農業に従事。昭和10年「新壘」、13年「潮音」に入社、のち幹部同人として活躍。昭和21年西川青海らと季刊歌誌「樹氷」を創刊。後半は郷土史家として富良野周辺の市町村史一万頁を執筆。39年処女歌集「富良野路」刊行、48年中富良野神社境内に歌碑が建立された。51年第二歌集「一位」刊行。55年「岸本翠月遺稿集」が樹水社から刊行された。主要著書に富良野市、芦別市、中富良野町、上富良野

要。独特の抑揚、リズムを持った魅力ある文体でいずれも注目作。「丹頂鶴」（昭35）は荒正人が激賞、「北海道文学全集」第二〇巻に収録された。（島居省三）

木田金次郎 明26・7・16（昭37・12・15）（1903～1962）（洋画）後志管内岩内町生まれ。岩内尋常高等小学校高等科卒業後、東京の中学に学ぶ。明治43年秋、学校を中退して帰道、在札中に黒百合会展覧会で有島武郎の作品に感銘。その後自作をたずさえて上白石の有島家を訪問、励まされる。岩内に帰るが家業不振のため、漁業労働の合間に素描をつづける。大正6年素描帳と手紙とを東京の有島に送り、11月に狩太（現ニセコ町）の農場事務所にて7年ぶりに有島と再会。翌年有島は木田をモデルとした作品「生れ出づる悩み」を書き、8年有島邸内で「木田金次郎氏習作展覧会」を開く。11年農場解放に來道した有島が木田を岩内に訪ね、一泊。翌年有島死去。以後、一層の貧苦の中に画業に専念する。この間、昭和17年山田フミと結婚。終戦後、画業ようやく認められ、各種文化賞を受け、新聞社等主催の個展が相次ぐ。没後の遺作展も一〇回を数えている。（高山亮二）

北口年夫 大8・2・10（1619）（短歌）空知管内奈井江町生まれ。

本名年雄。小学校卒業後農業に従事。後年奈井江町教育委員や保護司を務めた。現在「アララギ」と「原始林」に所属。昭和25年から34年まで「短歌平原」を編集。長く奈井江町歌話会長を務めた。

(村井 宏)

北けんじ 1909.5.9 (103才) (評論) 本名喜田健二。上川管内比布町生まれ。日本大学映画学科中退。昭和44年「愚神群」同人。第八号より「風太郎魔界」を連載、ユニークな大衆文学論をくりひろげている。この間、戯曲「寅吉遊行伝」が劇団「河」で上演された。

(高野斗志美)

北 光星 1912.3.5 (106才) (俳句) 北見市生まれ。本名孝義。昭和23年「ふもと」主宰竹田凍光の手引きで作句を始め、24年細谷源二の「水原帯」(「北方俳句人」改題)に編集同人として参加。大工俳句で気を吐く。25年空知管内北竜町和に水原帯支部を設け、中村耕人、田中北斗、宮脇竜、加葉田可六、松平幸雄、島本研二、池津海彦らの新鋭を育成。30年これらの同志を率い同人誌「礫」を創刊、「水原帯」から離れた。「礫」は少数でよく俳句革新の実を挙げたが、41年総合協同俳誌「扉」創刊のため発展的に解消。「扉」はまた47年「道」と改題、季刊から光星主宰の月刊誌に变身した。著書には「一月の川」(昭和30、水原帯発行所)、「北光星句集」(昭和37、礫社)、「伐り株」(昭和45、扉の会)、「頼杖」(昭和56、道俳句会)など四冊の句集と「句眼歳時記」(昭和54、道俳句会)、句集序文集「翔韻」(昭和58、同)がある。昭和57年北海道文化奨励賞受賞。俳人協会評議員。北海道俳句協会常任委員。

「一月の川」句集。昭和30年刊の処女句集で「北海道文学全集」にも収載された。細谷源二が提唱した働く者の俳句の典型をここに見る。《ぎこぎことごとと鋸磨ぐ果して雪》(鳥帰る渡り大工のわがうへを) (園田夢蒼花)

北沢禎介 1904.7.21 (106才) (評論) 胆振管内壮瞥町生まれ。本名佐藤英夫。28年北海道学芸大学卒。35年「北限」、37年「北海道文学」に参加。「武田泰淳試論」「芥川竜之介考察」「作家と風土」などがあり、38年の「私観的風土論」は北海道新聞の道内同人雑誌秀作に選ばれた。

(木原直彦)

北沢輝明 1905.7.2 (106才) (小説) 室蘭市生まれ。本名謹二。庁立室蘭中学校を経て、昭和30年早稲田大学政経学部卒。32年「室蘭文学」同人となり、連載の「少年の海」むろらんまの雑誌」を39年に国際図書から刊行。

「新潮」に発表した「橋と夜と光景」「道のむこう」「影たちが見る」はいずれも新潮同人雑誌賞・新人賞候補となる。「三田文学」「早稲田文学」にも諸作を掲載し、「文芸」の「あわいの構図」は文芸賞候補となり、「北方文芸」の「蛸沼の話」は故郷室蘭が舞台。

(木原直彦)

北沢三保 1920.8.23 (106才) (小説) 奈良県生まれ。本名佐藤建次。昭和21年に家族とともに土別市に移住。土別高等学校卒業後に上京。開高健らの株式会社サン・アドに入社してコピーライターとなり、英国留学の体験も持つ。本道を舞台とした「遙かな森」(昭和50・12、「文学界」が第四一回文学界新人賞の佳作となり、「逆立ちだ」と「狩人たちの祝宴」は芥川賞の候補にのぼった。「遙かな森 罅する谷」(昭和52・6、「文芸春秋」は本道の原野を舞台とした透明感あふれる短編集。ペンネームは「北」へのおもいからとった。

(木原直彦)

北嶋虚石 1912.3.20 (106才) (俳句) 樺太豊原生まれ。本名信男。北海道大学医学部卒。医師。昭和19年ころより「北大俳句会」に拠り句作。27年から山口青柳に師事して「夏草」に入会。現在「夏草」同人。夏草功労賞受

賞。俳人協会員。(木村敏男)

北瀬清二 1914.9.3 (108才) (短歌) 石川県生まれ。昭和24年「新塾」入社と同時に小田観瑩に師事し作歌活動を開始。昭和6年空知郡上赤平村役場の吏員となる。その後赤平市の初代収入役として、公務のかたわら、炭鉱の全盛期から退潮期までをつぶさに詠みつづける。昭和30年5月赤平短歌連盟を結成、副会長、会長を歴任、会員各自の個性発掘に指導力を発揮した。41年赤平短歌連盟は赤平市文化賞の団体受賞を受けた。42年公務員退職と同時に江別市に移住。江別短歌会長を務め、現在新塾江別支社代表。著書に夫人哀悼歌文集「温城」「北から南へ」などがある。《地の底に幾百の命穢えとすこともなげに消ゆ炭山といふもの》 (桜井美千子)

北 建夫 1921.12.8 (104才) (俳句) 空知管内北竜町生まれ。道俳句会主宰北光星の長男。小樽商科大学卒。昭和50年より作句。「道」に所属し、56年より「道」の編集を担当。59年句集「射手座」を上梓。俳人協会員。

(北 光星)

北野 光 1910.7.30 (103才) (小説) 東京生まれ。本名工藤欣弥。大東文化学院卒。三岸好太郎美術館長。「凍原」「札幌文学」の各同人。北海

道文学館理事、日本ペンクラブ会員。主な作品として「駐臨一〇二」(札幌文学)、「津軽五本松」(同)、「雑司ヶ谷墓地」(「北方文芸」)、「耳の中の虫の音」(同)、「昆布を拾う女」(同)、「セピア色の写真」(同)、「鷲」(同)、「彼岸桜のころ」(同)などと、本名による随筆集「赤い雨傘」(昭和60・7、北方文芸刊行会)がある。

(小松 茂)

北野竜介 1906.2.6 (108才) (短歌) 胆振管内虻田町生まれ。本名平野総橋。昭和11年石川啄木の短歌に心動かされて歌作を始め、のち北原白秋の短歌に傾倒する。13年前田夕暮の自由律短歌「詩歌」、さらに石原純の「新短歌」に参加、15年より19年まで並木凡平の口語短歌「青空」に参加。15年3月から17年11月まで軍隊勤務。18年1月第一歌集「花びら」を小樽青空詩社より刊行。19年以降はひとり歌作をつづける。昭和37年9月松本博之、沢田真三らと虻田短歌会を創立、北海道歌人会員となる。38年2月短歌雑誌「湾」を創刊し、その編集発行人となる。同年3月青木政雄を選者に迎え短歌作品の充実に向上をはかり、郷土歌人育成に意欲を燃やす。59年3月「湾」第六叢書として昭和16年より27年までの短歌を選び、第二歌集「漂流砂」を刊行した。

(青木政雄)

北畑光男 1921.7.23 (109才) (詩) 岩手県生まれ。酪農学園大学卒。高校教員。詩誌「地球」「核」同人。詩集に「死火山に立つ」「とべない蛍」がある。その詩風は宮沢賢治、村上昭夫など郷土の詩人の影響を受け、対象へのやさしさを基調とし、祈りの姿勢であらゆるものを見詰めるところに特徴がある。

(鷲谷峰雄)

北原白秋 1885.1.25 (107才) (詩、短歌) 福岡県生まれ。本名隆吉。詩集「邪宗門」「思ひ出」「東京景物詩及其他」「雪と花火」、歌集「桐の花」「雲母集」などで日本を代表する詩人として知られた白秋が、鉄道省主催の樺太・北海道観光団に加わり、歌人吉植庄亮と共に北海道・樺太を旅したのは大正14年8月10日からおおよそ二〇日間わたる。道内では山下秀之助、戸塚新太郎らによる小樽の歓迎歌会、旭川、近文コタン探訪、七師団参謀長齋藤瀾、深川の鬼川俊蔵らの旭川歓迎会、深川歌談会、札幌・北大病院に入院中の酒井広治の見舞い、芥子沢新之介らとの植物園散策、札幌短歌会歓迎歌会、詩と童話の会、函館郊外当別のトラピスト修道院訪問などの行程であった。この旅にまつわる著作に周遊記「フレック・トリップ」、旅の随筆「雲と時計」、

詩集「海豹と雲」、歌集「海阪」、童謡集「月と胡桃」がある。深川市丸山公園に歌碑がある。(佐々木逸郎)

北見恂吉 1893(明治26)・2・7(63)~(短歌) 稚内市生まれ。本名鈴木重道。後志管内の余市から庁立小樽中学へ通う汽車の中で貸した「藤村詩集」が、伊藤整を文学の道に進ませることになった話は有名。昭和44年12月小樽市塩谷ゴロダの丘に建った伊藤整文学碑の題字を揮毫。伊勢の神宮皇学館本科を卒業後、神宮文庫に勤務。その間、根岸派系の五更会に入り、機関誌「五更」の通巻一〇〇号までを編集発行、子規の弟子で書家でもある岡麓の指導を受けた。このころ小樽の工藤利と結婚。その後埼玉の久喜高等女学校に六年勤め、昭和9年余市の養父のもとへ帰郷。12年官幣大社朝鮮神宮主典に補せられ京城に赴任。朝鮮総督府祭務官にまでなったが、本州勤務を希望して、福島県伊須美神社宮司になる。ここで敗戦を迎え、のち再度帰郷。昭和24年10月道立小樽高等学校(現小樽潮陵高)教諭から余市高校に転じ、余市文芸協会短歌部会に加入して再び歌活動に入る。25年1月歌誌「落葉松」を創刊。発行八八号をもって32年終刊。次いでタプロイド判「小丘」「後方羊蹄」と発行を重ね、35年1月短歌誌「海鳴」を

創刊、「万葉の詩精神を現代に」との主張を掲げ全力を傾注。41年5月歌碑を、宮司をしている余市町茂人山の明治神社参道横に建立、短歌三首を刻したのは珍しい。47年11月同境内に鎮魂歌碑を建立。51年7月余市町功労賞受賞、翌年妻利、長逝。57年7月余市ベンの会を設立、代表に就任。著書は歌集に「曠原」「帰雁」「小丘」「山荘」「行雲」「雪の頌」「北見恂吉歌集」「同(二)」「同(三)」、随筆集に「曠野抄」「小丘抄」「続小丘抄」「山荘記」「続山荘記」「行雲抄」「続行雲抄」「少年譜」「ゴロダの丘」「幼年譜」「北見恂吉文集」「山房私記」。編著、研究に「本田親徳全集」「本田親徳研究」「一本の道」「報恩祝詞述義」。また海鳴叢書としてこれまで同人の歌集、随筆集六四編を精力的に出版。年一回輪番開催の後志短歌大会は二一回を重ねた。(中村勝栄)

北見弟花 昭4・9・6(1929)~(俳句) 上川管内比布町生まれ。本名喜多見清司。昭和21年旭川工業学校卒。同年塩野谷秋風に師事して「霧華」に参加、24年同人となる。43年「季節」、49年「あざみ」の各同人。44年「広軌」の創刊に参画して同人。このほか一時「壺」「水輪」の同人でもあった。53年以降は「樹水」(「霧華」を改題)の編集

責任者。56年季節賞受賞。現代俳句協会員。(後藤軒太郎)

北見透 1893(明治26)・4・15(100)~(詩) 函館市生まれ。本名松浦宏之。函館高等水産学校卒。昭和18年詩誌「涛」で詩作に入る。戦後の「涛」では編集同人となって、発表した作品は暗い世相に切り込んでの知的情念の世界。その主張は「伝統的感覚の継承」でもあった。昭和25年創作に転じ、「札幌文学」同人、自ら「函館文学」も発行した。34年「表現」に発表した「圭子の作文」を最後に創作の筆を折る。創作集は「北見透集」がある。現在女子栄養大学教授。(堀井利雄)

北村順治郎 1909(明治42)・3・25(1959)・7・31(1969)~(小説、俳句) 釧路管内厚岸町生まれ。俳号暮畔子。明治43年士別市に移住し、新潟農林高校卒業後、帰郷して農民運動に参加。今野大力、小熊秀雄を知る。名寄新芸術協会に加わり、昭和2年集産党事件に連座する。戦前は精米業自営、戦後30年道北日報を創刊。俳句は昭和初期荒谷松葉子に師事した後、室積但春の「ゆく春」同人となる。基準律をめぐる中田青馬(天の川)との誌上論争は熾烈を極め、俳壇注視の的となった。13年新興俳句を標榜して誕生した「プリズム」の雑誌選

者に推され、新人の育成に当たるとともに「我観新興俳句」などすぐれた評論も次々に発表した。戦後の25年に「雪鬼」が「新郷土」創作賞を受ける。「地情」に小説等を発表。俳句は「水輪」を経て「ゆく春」「広軌」同人。42年士別市文化賞受賞。53年「士別市民文芸」会長。59年小説集「蛇紋岩」を上梓。没後「柳絮集」が刊行された。「士別市民文芸」8号(昭59・11)は「北村順治郎追悼号」。(園田夢蒼花)

北村白眼子 1895(明治28)・11・3(1954)・3・2(1965)~(俳句) 愛知県生まれ。本名脩一。明治45年東京歯科医学校へ入学。大正12年川崎市駅前で開業したが同年9月関東大震災に遭い夫人の故郷松前郡大島村江良町(現松前町江良)に避難。13年函館市で開業。13年1月松前で六華川柳社を興す。昭和3年1月川柳野蘭会創立。4年8月播磨川柳社創立、「川柳揺籃」を五号まで発行する。6年5月北海川柳社を創立、機関誌「川柳漁火」を発行、九号で廃刊。昭和25年8月「川柳バトン」三号で終わる。戦前は函館日日新聞、函館新聞、NHKラジオなどの川柳選者、戦後は北海道新聞の川柳選者となる。44年10月句集「想い出」刊行。50年11月函館市文化賞受賞。故人の三周忌に水天宮境内に句碑が

建立された。(想い出となれば憎めぬ人ばかり)。(鈴木青柳)

北 杜夫 昭2・5・1(1927)~(小説) 東京生まれ。本名斎藤宗吉。父は歌人の斎藤茂吉。東北大学医学部卒。昭和35年に「夜と霧の隅で」で芥川賞受賞。「どくとるマンボウ航海記」がベストセラーとなり、マンボウもので広く知られる。北海道取材作に虻田から物語が始まる北洋サケ・マス漁船を扱った短編「遙かな国遠い国」(昭35・9、「新潮」)があり、「どくとるマンボウ水海をゆく」には宗谷海峡やオホーツク海の流水原が現れる。(木原直彦)

喜多柚子男 1925(昭和10)・2・20(1957)・1・1(1925)~(俳句) 十勝管内池田町生まれ。本名澄男。池田町高島小学校高等科卒。昭和15年から国鉄運輸関係に就職。戦後は労働運動に参加、池田駅支部国労委員長などを務める。昭和42年から池田町議を三期務める。俳句は「俳諧」「柏」「北海道俳句」を経て昭和25年「アカシヤ」土岐鎌太郎に師事。55年アカシヤ浄錬賞受賞、同木理集同人。同年句集「遠野火」刊行。(佐々木露舟)

北夢之助 1896(明治29)・2・5(1954)・2・16(1966)~(俳句) 札幌市生まれ。本名智之。北海中学校卒。旧

北海タイムスの川柳欄へ投稿。大正6年「アツシ」創刊と同時に参加、最年少の同人となる。10年函館に移住、「忍路」に参画。15年樺太へ渡り、川柳誌「わかやなぎ」「犬橋」を発行。昭和5年句集「北夢之助句集」を大泊から刊行。23年北海道から新潟へ移住する。柳都川柳社、新潟川柳芸芸社各顧問。(斎藤大雄)

木津川昭夫 1903(明治40)・4・10(1928)~(詩) 滝川市生まれ。旧制滝川中学校卒。戦後詩作を始め、昭和24年「道標」(新十津川)同人を経て史料源蔵の「野性」(札幌)および「文芸首都」同人となる。東京に移り48年「ホルン」を創刊。52年「ホルン」後継誌として「曠野」を創刊し編集、発行にあたる。同誌の主要同人に狩野敏也、駒込毅、貞松堂子、土橋秋良、新妻博、矢口以文、舟山逸子、松島日差子などがいる。ほか「火牛」「風」(埼玉・八潮)同人。詩集に「賈のエチュード」(昭27)、「幻想的自画像」(昭46)、「雪の痛み」(昭50)、「朝の家族」(昭52)、「夢の構造」(昭54)、「鳥たちの祭り」(昭55)、「木津川昭夫詩集」(昭57)、「水見」(昭59)がある。銀行員として札幌在住時代「野性」の同人仲間だった日塔聰と親しく交わり、日塔の死後「曠野」第一〇号を「日

塔路追悼特集」として刊行し、共著の詩集に「反戦四人詩集、戦後からのまなざし」(昭56)がある。初期の詩風はフランス象徴詩の影響による高踏、幻想的な色彩が濃かったが、その幻想性のなかに諧謔的市民感情を感った作品を数多く発表しつつある。日本現代詩人会常任理事。日本文芸家協会会員、日本ペンクラブ会員。東京在住。(佐々木逸郎)

木戸織男 大10・3 (昭21)「小説」札幌市生まれ。本名能戸清司。東京大学法学部卒。昭和18年マレー進駐。昭和23年朝日新聞札幌支局勤務。25年北海道日新聞懸賞小説で「遙かなる道程」が「庶人選」。「冬涛」に「暗い火花」を発表。「夜は明けない」が第四四回(昭34下期)直木賞候補となる。(佐藤喜一)

木戸清平 大12・9・30 (昭46)「小説」札幌市生まれ。本名能戸清司。2・1 (昭33~1971)「近代文学研究」東京生まれ。茨城大学卒業後水戸第二高等学校に勤務、早川三代治研究に情熱を注ぎ、労作「知られざる文学」(昭35・12、川又書店)を刊行。「日本残酷物語 第二部忘れられた土地」(昭35、平凡社)も分担執筆。(小笠原克)

木下順一 昭和4・4・10 (昭39)「小説」函館市生まれ。国学院大学中退。タウン誌「月刊はこだて」

ると五〇〇枚近くに及ぶ。単行本としては処女短編集「凍雪」(緑地社)、「樹と雪と甲虫」と「粧われた心」(四つのはち)を収めた「樹と雪と甲虫」と(光風社)、「ドキュメント」(苦小牧港) (講談社)、「艦樓」(新潮社)、旭川中島遊廓シリーズを収めた「旭川中島遊廓」(光風社)などがある。「樹と雪と甲虫」とは日本ペンクラブ編「経済小説名作選」(集英社文庫)にも収録されている。新聞記者としての幅広い視野は、今後とも社会小説分野での活躍を期待される。(小松茂)

木原孝一 大11・2・13 (昭54)・2・8 (昭22~1979)「詩」八王子市生まれ。本名太田忠。東京墨田高等学校建築科卒。一五歳にして「VOU」加入。戦後「荒地」同人、「詩学」編集長。放送詩劇、評論にも活躍した。昭和36年河野文一郎に招かれ札幌、道東を旅行。40年11月札幌市における道詩人協会一〇周年詩祭で講演、「核」に再三寄稿した。著書に詩集「木原孝一全詩集」、評論に「一〇〇人の詩人」などがある。(河野文一郎)

木原直彦 昭5・1・19 (昭68)「評論」胆振管内厚真町生まれ。本名武男。昭和17年1月に室蘭に移り、22年3月庁立室蘭工業学校を卒業、23年

「街」の編集に当たる。一方で小説主体に作品活動。各種同人誌を主宰して現在「表現」同人。小説集「六号室」(昭56、檸檬社)のほか、小説に「文鳥」(昭55、「表現」のち「文学界」)「北海道新鋭小説集」、「肩車」(昭58、「表現」)、「午後5時」(昭57、「作品」)、「来訪者」(昭58、「海燕」)、「壁の画」(昭59、同)など多数がある。(安東璋二)

木下春影 明30・12・15 (昭77)「俳句」富山県生まれ。大正3年日本実業学校卒。13年北海道庁林務官養成所修。網走管林区署野付牛分署を経て釧路管林区署勤務。昭和16年北海道林業試験場釧路試験所長、24年退官。昭和16年北海道林業試験場より日本林学会で「林内放牧馬の習性」ほか一二編の研究論文を発表(18年まで)する。俳句は昭和8年俳誌「暁雲」入会、10年同人。20年「緋衣」に入会、同人。25年「水原帯」同人、「えぞにう」客員。55年から摩周俳句会より機関誌「いそつじ」を発刊主宰。句集に「花片」「続花片」がある。(川端麟太)

木下路石 大15・8・20 (昭68)「俳句」夕張市生まれ。本名長四郎。昭和19年ころから長兄の影響で俳句、「暁雲」夕張支部に入会、前田参初

4月郵政省室蘭簡易保険支局に勤務。28年職場文芸誌「ペン」を発刊、「文学者と北海道」を連載して北海道文学研究に手を染める。29年同人誌「室蘭文学」を創刊して編集にたずさわる。「来道作家ノオト」連載。36年7月札幌地方簡易保険局の開局に伴い札幌に移る。37年に同人誌「北海道文学」を発刊主宰し「北海道文学ノート」を連載。40年北海道文化奨励賞受賞。41年秋の「北海道文学展」開催に際して同実行委員会の事務局長を務める。42年春から北海道文学館事務局長。50年に北海道新聞文学賞と札幌市民文化奨励賞を受賞。51年4月札幌市教育委員会に転じ「さっぽろ文庫」を編集。著書に「北海道文学史」全三巻(北海道新聞社)、「北海道文学散歩」全四巻(立風書房)など、共著に「物語・北海道文学盛衰史」(河出書房新社)ほかがある。(西村信)

木俣修 明39・7・28 (昭58)・4・4 (昭60~1983)「短歌」滋賀県生まれ。本名修二。東京高等師範学校在学中の昭和2年北原白秋の門をたたき、「香蘭」を経て「多磨」で活躍。17年白秋没後「多磨」の編集に当たる。昭和28年歌誌「形成」を創刊、主宰。歌集「高志」「呼べば笛」「去年今年」など一三冊のほか、ライフワークに「昭和短歌史」

の指導を受け、後に同支部機関紙「胡桃」の代表となる。25年「緋衣」同人、一時「断崖」(西東三鬼)等を経て、現在「頂点」「未完現実」「狄」の各同人。現代社会人の深層に触れる作品を狙いとする。句集に「地上」(昭35、自費出版)がある。現代俳句協会会員。苫小牧市在住。(辻脇系一)

木野工 大9・6・15 (昭30)「小説」旭川市生まれ。北海道大学工学部卒。北海タイムス東京支社論説委員。昭和18年9月大学を戦時練り上げ卒業、海軍予備学生となる。北千島に渡ったが終戦は本州勤務。復員後旭川の「冬涛」同人となる。昭和27年同誌の編集責任者となり、「新潮」に発表した「粧われた心」が第三〇回芥川賞候補となる。以後、芥川、直木賞の候補になること数回に及び注目を浴びる。所属した同人誌は「冬涛」のほかに「札幌文学」、第三次「赤門文学」で、主な作品をあげると、「煙虫」(「冬涛」、第38回芥川賞候補)、「紙の裏」(「赤門文学」、第45回芥川賞候補)、「凍」(「文学界」、第46回芥川賞候補)、「怪談」(同、第47回直木賞候補)、「艦樓」(「北方文芸」、第66回直木賞候補、第5回北海道新聞文学賞受賞)などである。「艦樓」は初めての長編で「続艦樓」(「北方文芸」と合わせ

がある。来道は昭5年以後数回。作品は第二歌集「みちのく」に収められている。(田村哲三)

木宮節子 昭6・2・4 (昭38)「小説」新潟県生まれ。お茶の水女子大卒。「北限」「くりま」の各同人。「三十五歳」(函館市民文芸)、「叔父の計」(北限)、「桃子」(「北方文芸」)、「後遺症」(同)、「異臭」(同)、「初詣で」(同)などの作品がある。(小松茂)

木村久遷典 大12・7・11 (昭23)「評論」札幌市生まれ。中央大学法学部卒。青山学院女子短大教授。著書に「錨と桜の賦―桜井忠温と水野広徳」(昭55、新評社)、「山本周五郎青春時代」(昭57、福武書店)、「山本周五郎馬込時代」(昭58、同)がある。(神谷忠孝)

木村茂雄 明43・11・25 (昭19)「詩」函館市生まれ。一九三〇年代より第二次大戦前、主として「新領土」(アオイ書房)に執筆し活躍した詩人であるが、作品の傾向はほとんどモダニズムにかかわりなく独自の領域をひらく。戦後は筆を断ち、後進の指導に力を尽くす。詩集「投影」(昭24・9、自家版)、「遠い人」(昭31・12、同)ほかがある。(新妻博)

木村捨録 すくろく 明30・11・2）(895)〔短歌〕中央大学法科卒。昭和7年日本短歌社社長。19年改造社から「短歌研究」を受け継ぐ。昭和29年6月北海道歌人会設立準備委員会出席のため来道、その帰途帯広市公民館短歌会に出席、その後、歌会、講演などで来道三回。歌集は「壮年的」「有機」「地下水」「旅情」「庭園」「四季」「葛の花」。このほか評論集など十数冊の著書がある。昭和25年歌誌「林間」を創刊、主宰する。

(寺師治人)

木村隆 たかたか 昭7・8・16）(932)〔短歌〕福島県生まれ。小学生時代六年間を樺太豊原市で過ごし、昭和20年旭川市に引き揚げる。31年北海道学芸大学旭川分校卒。中学校教員として稚内、愛別、旭川の各地に勤務。大学在学中、中山勝の指導を受け、30年かぎろひ詩社に入る。36年角川短歌賞候補となつて総合誌「短歌」に三〇首登載され、塚本邦雄(短歌)、生方たつみ(短歌研究)らの評言を得て名を知られる。37年「かぎろひ」編集委員。39年かぎろひ青玄賞受賞。そのころより作歌と並行して批評活動も盛んに行い、「北方文芸」、北海道読書新聞等に短歌時評を連載。56年から「かぎろひ」編集発行人。一方、昭和45年同志と昭和世代歌人による現代短歌研

究集団「野馬の会」を結成、同会代表。同人誌「野馬」は以後一〇年間に一八号まで発行して休刊。45年歌集「白楊」を刊行した。

〔白楊〕びやう 歌集。昭和45年3月かぎろひ詩社刊。本編の白楊編は昭和40年までの一〇年間の作品から一六〇首を精選して二六章に構成したもの。各章に構成の基調をあらわす四行詩を付けている。付録の憂苦連唱編は以後五年間の作品から一章一〇首を収載。前衛短歌の洗礼を受けた世代的歌集らしく、小粒ながら極めて意図的に編集されている。その意味で本編と付録との区切りには、作歌姿勢の転回が読みとられて興味深い。

(中山勝)

木村丁字 ていじ 明14・7・15）昭30・1・10 (1981・1986)〔俳句〕留萌管内増毛町生まれ。本名法惠。幼名賀川香恵。真宗大谷大学卒。明治38年から増毛町真宗大谷派の住職。はじめ児翠と号し、句仏上人の流れを汲んで定型の句作に入る。自坊潤澄寺に入つて以来、自由律俳句の「層雲」に拠り、萩原井泉水に師事する。明治末期から大正期にかけて、高浜虚子の守旧的俳句伝統派と、河東碧梧桐や萩原井泉水の新傾向派の対立という形をとってきたが、北海道の新しい自由律俳句に大きな影響をもたらした

35)〔俳句〕青森県生まれ。本名伊佐雄。日鉄室蘭製鉄所に勤務して退職。昭和17年郷里の鳴子吟社に入会して作句。戦後、富安風生門に入り、「はまなす」

「若葉」「冬草」に投句、「青女」創刊より参加。オロフレ句会のほか、登別地方の諸句会を指導して多くの俳人を育成、昭和53年登別市教育文化貢献賞受賞。「若葉」「青女」「冬草」の各同人。俳人協会員。(新明紫明)

木村利雄 としお 明42・6・21）(969)〔短歌〕石狩管内浜益村生まれ。昭和3年並木凡平のもとで口語短歌を始めた。「原始林」には創刊より参加し、戸塚新太郎らと「小樽歌壇会」を結成した。小樽天狗山麓に居住し、天狗山登山記録一万回を数年前に達成した。

(北川頼子)

木村敏男 としお 大12・2・22）(993)〔俳句〕旭川市生まれ。旧制永山農業学校卒業後、地方公務員として長年勤務。昭和25年高橋貞俊の「水輪」に拠り句作を始める。その時の筆名は蒼花だったが、その後敏をを経て本名の敏男に改めた。「水輪」は昭和26年で休刊。34年旧「水輪」同人を主軸とする「涯」を自ら発行。44年旧「水輪」人中心の季刊同人誌「広軌」を創刊した。次いで53年札幌市より「にれ」を創刊主宰。この間、

42年に第一回北海道俳句協会賞受賞、翌43年に第一句集「日高」を刊行、この句集で第二回北海道新聞文学賞を受けた。著書は「日高」のほか第二句集「遠望」(昭52、永田書房)、第三句集「雄心」(昭58、にれ発行所)と「北海道俳句史」(昭53、北海道新聞社、共著には「カラー図説日本大歳時記」「札幌の俳句」「札幌歳時記」がある。読売新聞北海道版俳句選者。北海道地区現代俳句協会長。北海道文学館常任理事。北海道俳句協会常任委員。森澄雄の主宰する「杉」の創刊同人としても活躍している。

〔遠望〕えんぼう 昭和52年刊の第二句集で「北海道文学全集」にも収載された浪漫の薫り高い句集で、昭和43年から51年までの作三八〇句を収録。〈子が妻が視く図上の露の家〉

(園田夢蒼花)

木村南生 なまき 明43・12・8）(610)〔小説〕秋田県生まれ。本名楠雄。木村不二男の弟。函館師範学校卒。昭和5年伊達市を振り出しに教員生活に入り、胆振、日高両管内を転々とする。戦前から文学運動を始め、29年5月には胆振管内豊浦町字大和から赤木三兵と「山音文学」を創刊した。33年に第一創作集「湖のねぐら」を山音文学会から上梓し、その後「海と山と湖の記憶」「溪流

のも、碧梧桐と共に井泉水である。丁字が井泉水に師事するようになった経過は明らかではないが、道内の各地に自由律俳句の波が広がった一環として、丁字も増毛を中心とした道北沿岸にその輪を盛り上げ、今里竹茶らと「暑寒吟社」を興し、昭和23年「浜街道」を創刊主宰した。これは道内では数少ない自由律俳誌であった。

(木村敏男)

木村哲郎 てつろう 昭11・9・12）(688)〔詩〕札幌市生まれ。札幌北高等学校卒。国家公務員。詩誌「洲」編集、発行同人。詩会「洲」主宰。昭和30年代前半、ネオ・モダニズム的な詩を書き、同人に鹿内正一、中城美砂夫、木ノ内洋二らがついて新鮮なグループであった。

(小松瑛子)

木村照子 ていし 昭3・9・3）(908)〔俳句〕旭川市生まれ。昭和20年庁立旭川高等女学校卒。高橋貞俊の経営する婦人新聞、子供ダイジェストの記者となる。昭和20年貞俊に師事して作句、「水輪」同人。41年「扉」同人。44年「広軌」同人。45年から53年まで「草苑」同人。55年「鷹」に転じて同人。句集に「冬の旅」(昭49、草苑叢書)がある。昭和46年北海道俳句協会賞受賞。高橋貞俊は夫。

(後藤軒太郎)

木村凍郎 とうろう 大14・5・21）(60)の譜「雪路の涯」「竜胆だより」の創作集、「あの頃この歌」の小品集を出している。46年に長い教員生活を終えて伊達市を永住の地と定めた。(木原直彦)

木村不二男 ふじお 明39・3・28）昭51・12・12 (1966-1976)〔小説〕秋田県生まれ。玉川大学教育学部卒。昭和5年文化学院文学部入学(同級に野口富士男がいた)。「文芸意匠」に発表した「ラ・パロマを唄う女」が林芙美子に認められて発奮。13年教職のかたわら「新日本教育」の編集(通巻32号)。16年父子家庭のアイヌを描いた「古譚の唄」が中央公論新人賞。20年空襲で家屋焼失、渡島管内森町に疎開、のち同町高校教諭。38年退職して文筆に専念する。教育関係著書として「綴方の書」「母の綴方」(父文助との共著)、「戦える教師」「カムチャツカ少年記」(文部省推薦)。文学関係として「北蝦夷物語」「北海道文学選」(伊藤整、船山馨との共著)、「新ニューカラ譚」(ぶやら新書)、「文学的自叙伝」(北海道の作家)。主な作品として「有島供養」(新潮)、「防人の歌」(同)、「北洋の男」(同)、「代表作とみなされる」(古譚調) (同)、「鈴木三重吉」(中央公論)、「北国の牧歌」(山音文学)、「百年の墓」(同)、「元始女性は太陽であった」(同)、「間宮林蔵」(札幌文学)、「

「絶対他者を求めて」(「北海教育評論」)、「鈴木三重吉」(「童話」, 57回連載、ライフワークといわれる)、「ヨーロッパ紀行」(「森新報」)、「赤い鳥の世紀」(同)、「山の出版屋」(「旭川豊談」)、「故山の土」(同)。「童謡集」ニシバの祭。昭和30年11月20日北海道文学者懇話会が発足、同会の委員長(のち会長と改称)になった。(木村南生)

木村正雄 明45・7・11(1912)「短歌」釧路管内厚岸町生まれ。函館師範学校卒業後、釧路支庁管内で小、中学校教員。昭和5年から作歌したが26年洞爺で結核療養中、「短歌紀元」「あさひね」に入会、のち「コスモス」を経て、29年「原始林」入社。30年標茶短歌同好会を結成、初代会長となり、「自生林」を発刊し現在も同人。洞爺教員保養所時代の合同歌集「虎杖」などがあり。自然と人間を穏やかな温かい眼差しで見詰める詠風である。(村井 宏)

木村雅信 昭16・10・5(1911)「音楽、詩」中国・石家荘生まれ。鹿児島県種子島に育つ。昭和45年東京芸術大学大学院修。詩と音楽を両立させ、48年第二回モスクワ国際バレエコンクールで最優秀伴奏ピアニスト賞受賞。57年スペインでピアノリサイタル。47年処女詩集「パリの旋律」に続いて翌年第二詩

集「星たち・静かなる計器」を刊行。55年詩誌「舟」(レアリテの会、東京)の同人となり、同誌を主たる発表の場として、59年第三詩集「珊瑚海岸」を刊行した。詩風は鋭い感性と豊かな想像力に満ちており、作品全体を貫く主題は、人間や事物の在り様に向けられている。日本作曲家協議会会員。札幌現代音楽展主宰。札幌大谷短期大学助教授。(永井 浩)

木村真佐幸 昭5・1・15(1930)「近代文学研究」後志管内真狩村生まれ。北海道大学国文科卒。札幌南高校教諭を経て現在札幌大学教授。同大学図書館長と理事を併任。主要論文に「文学に現われた北海道の精神風土」(昭47・8)、「北海評論」(「北海道の風土と文学試論」北海道の交通発達史と文学との関係)(昭49)、「札大紀要」がある。著書に「北海道文学の周辺」(昭52、北海道新聞社)、「一葉文学成立の背景」(昭51、桜楓社)、「樋口一葉」(昭55、同)、「共著「全集樋口一葉」全四巻(昭54、小学館)などがある。(神谷忠孝)

木村和嘉子 昭10・1・27(1935)「児童文学」函館市生まれ。昭和52年同人誌「だんろ」創刊。「樹」同人。主な作品に終戦前後の中国からの引き揚げを扱った「繻子のくつ」「雨竜ダムの人びと」などがある。日本児童文学者協

会員。
木谷冬人 明41・12・19(1908)「俳句」石川県生まれ。本名七郎。北海道、樺太と移住し、終戦後再び北海道に帰還。会社に勤務、定年退職。昭和27年細谷源二主宰の「水原帯」に入会、現在企画同人。第二五回水原帯賞(昭53)、第七回細谷源二賞(昭53)、網走市芸術賞(昭55)受賞。49年より水原帯網走地区支社長。句集に「蒼い船」(昭54)がある。現代俳句協会員。(川端麟太)

木山捷平 明37・3・26(昭43・8・23(1907)「小説」岡山県生まれ。東洋大学中退。初めは詩人、昭和8年ころから小説家を志すが不遇時代が長く、北海道を訪れたのはその飄逸味が認められて人気作家となった41年。42年にも二度訪れ「別冊小説新潮」に「番外」小説現代に「斜里の白雪」といずれも道東が舞台。詩「オホーツクの鳥」は「木山捷平全集」(新潮社)第二巻に収載されている。(八重樫実)

京極正實 大2・3・21(昭33・9・13(1913)「短歌」香川県生まれ。昭和4年高松中学を中退して渡道、十勝管内池田町高島で開墾農業。昭和7年口語歌人、伊東音次郎に師事、「青空」に拠る。16年応石渡満後肺結核

で帰還、終生病弱となった。昭和26年歌誌「山脈」に参加、このころより文語歌となるが口語の葉脈がみられる特異な作風をみせる。29年「鴉族」編集委員。34年遺歌集「望郷」が鴉族社から上梓された。(寺師治人)

京谷 健 大9・5・7(1920)「小説」小樽市生まれ。戦争中、北京にあって新聞記者。「北方文芸」(昭24)創刊の編集者。作品に「北国の恋情」「杉山元曹長」「むし歯」などがある。心理描写を得意とし、小説巧者の技巧派として知られている。(鳥居省三)

曲線立歩 明43・1・23(1910)「川柳」網走管内斜里町生まれ。本名前田忠次。昭和3年新興川柳を標榜する田中五呂八主宰の小樽水原社に入会、22年高木夢二郎の「衢川柳会」結成に参加する。44年南部菊太郎と新興川柳論の継承発展をはかって、札幌に「水原川柳会」を創立。会報は四号で休刊したが、水原会代表として五呂八の遺鉢を継ぎ、その任に当たっている。この間NHK、HBC等で川柳を担当。

金田 一京助 明15・5・5(昭46・11・14(1882)「国文学研究」盛岡市生まれ。石川啄木と交友があった。久保寺逸彦、知里真志保はアイヌ

研究の弟子。東京大学在学中、師の上田万年にすすめられてアイヌ語研究を志し、大学最後の夏休みに北海道南部でユーカーを採録、また明治40年卒業の年、日本領有直後の樺太でのアイヌ語採録の苦労は随筆「心の小径」で有名。以来、アイヌの居住地を訪ねたり、伝承者自宅に招いてアイヌの口承文芸を研究。その成果をまとめた「アイヌ叙事詩ユーカーの研究」(昭6)はアイヌ学の基であり、帝国学士院賞(恩賜賞)を受けた。また多くの著作によりユーカーを世界的に著名にした。アイヌ研究途上の金成マツ、知里幸恵との親交は有名。太平洋戦争後、国語教育を通じての日本人の言語生活に大きな影響があった。昭和29年文化勲章。死後、従三位勲一等瑞宝章。金田一春彦はその息。(藤本英夫)

金田 一昌三 大2・4・13(昭55・8・14(1913)「編集、随筆」札幌市生まれ。東京大学国文科卒、大学院修。鎌倉文庫を創始。創元社、日産書房と北海道の出版界の重鎮。昭和22年6月の北海道出版文化祭の提唱者で、同時に小林秀雄、中村光夫、久米正雄、柳田国男、亀井勝一郎ら当時の日本文壇第一線の一二氏を誘う原動力となった。昭和24年から37年まで道立図書館長として活躍し、特に郷土史の資料室を設置、

そこから生まれたのが自ら肝煎りをつとめたコックリ会で、学者、文化人、芸術家の親睦団体である。(富岡木之介)

九鬼伍平 昭7・5・3(1932)「小説」留萌市生まれ。本名園辺甲治。中央大学卒。高校教師。雑誌「文芸」の創作募集で「峠」が佳作入選(昭28)、戯曲「積丹の女」(昭40)、「終りのない歌」(昭41)が高校演劇で上演された。NHK全国募集で作詞「釧路川」入選(昭58)。「北海文学」同人。

草皆白影子 大14・9・9(昭46・11・4(1925)「俳句」空知管内月形町生まれ。本名太平。庁立札幌一中学時代より俳句に興味を持ち、昭和20年中学校を飯卒業して入隊、樺太上敷香で終戦。ソ連抑留中ラーゲルの「わかきさ句会」に出る。23年復員し放射線技師となる。26年「葦牙」に入会、同人。30年同人誌「車軸」を創刊、35年「圏」(中嶋立ら)と合併し、「車軸」を

廃して「r」を創刊、代表（発行人）となる。この間「北海道同人誌会」の結成、「新俳句人連盟」「道標」などに参加、赤城さかえらの影響を受ける。ヘリウ句う雲多き夜のデモ（妻と）など民衆詩的視野からリアルに生活を詠い、一方、恵庭事件など社会運動にかかわる。37年現代俳句協会、38年全通北海道文学会、42年北海道文学館常任理事、42、43年に北海道俳壇史年表を発表。47年「草皆白影子句集」が上梓された。

（辻協系一）

草路れい 明44・10・13（1917）「短歌」小樽市生まれ。本名吉積きみ。庁立小樽高女本科卒。同網走高女補習科師範部修。網走小学校教員。短歌は高女時代の恩師に手ほどきを受ける。網走小勤務時代、同人誌「白樺」を発刊。昭和4年小樽新聞の歌壇に投稿。並木凡平の「新短歌時代」や青山ゆき路の「青空」に、戦後は「現代短歌」等に所属。昭和45年以降「北土」編集委員。北海道歌人会委員。

（吉田秋陽）

草野心平 明36・5・12（1903）「詩」福島県生まれ。中国広東省羅南大学に学び、広東省時代に詩誌「銅鑼」創刊。詩集「空と電柱」等を上梓。北海道との関係は昭和2年「詩神」に発表の、同郷の友「猪狩満直に送る手紙」

に始まり、猪狩や真壁仁のやっていた「北緯五十度」や「至上律」に作品を寄せていたが、実際に北海道の土を踏んだのは昭和26年5月「火の会」の講演に來道の時。どこらあたりにあったのだろう。猪狩満直の開墾小屋はとうたつた「弟子屈原野」という猪狩の追悼の詩は、昭和45年3月学研版「日本の文学」文学紀行取材旅行中のもので、その他北海道をうたつた詩作品は詩集「天」の「エリモ岬」「オホーツク」。「侏羅紀の果の昨今」の作品の「花咲蟹」と「丹頂鶴」「マンモスの牙」の「野寒布岬」「エリモ岬」。「原音」の「音別海岸」雑誌「旅」に発表の紀行文「オホーツク海と日高の海」などもある。

（更科源蔵）

草野ゆき子 昭17・9・23（1902）「小説」後志管内倶知安町生まれ。本名小林美都枝。札幌南高校卒。作品に「明日は冬にむかつて」（昭50・1、「奔流」）、「踏みしだく冬」（昭52・7、同、「北海道新鋭小説集78」収録）、「冬に発つ」（昭53・11、「民主文学」）、「地のぬくみ」（昭57・5、同）、「冬芽のうた」（昭58・10、同）がある。昭和59年日本民主主義文学同盟を脱会。

（神谷忠孝）

草間 明 明36・12・7（1908）

8、雄山閣 などがある。（木原直彦）
くすみ・じゅんこ 昭22・1・14（1907）「詩」後志管内共和町生まれ。本名楠美純子。倶知安農業高校卒。詩誌「裸族」を経て、現在詩誌「パンと薔薇」同人。詩集に「櫛をひく」（昭52・12、パンと薔薇の会）、「駅への道」（昭58・2、裸族結社）がある。社会性のあるみずみずしい詩を書く。（小松瑛子）

九津見房子 明23・10・18（1890）「社会主義運動」岡山県生まれ。山川均、福田英子らの影響下で社会、労働運動に入る。高田集蔵との間に二女をもうけたが離婚。晩年会、赤瀾会に参加。三田村四郎と行動を共にして非合法生活に入り、昭和3年オルグとして札幌に住み、検挙され、8年6月まで札幌刑務所在監。のちゾルゲ事件に連座して下獄。牧瀬菊枝編「九津見房子の暦」（昭50・3、思想の科学社）がある。

朽木寒三 大14・5・20（1895）「小説」後志管内倶知安町生まれ。本名水口安典。東京農工大卒。木村毅の「文章倶楽部」から昭和27年「人間像」に参加。同誌六五号（昭38・4）発表の「冬の夜の冒険」が北海道新聞の第八回同人雑誌秀作に選ばれたのははじめ、「中島成子戦記」などの馬賊物が脚光を

浴び、遂に「馬賊戦記」（番町書房）は五〇版を越えるロングセラーとなる。ほかに「天鬼將軍伝」（徳間書店）など。文芸家協会員。
沓沢久里 昭7・1・3（1908）「小説」大阪生まれ。本名中村久子。大阪大学法学部卒。「鶴の泪」で昭和55年8月第一回朝日新聞「女性の小説」入選。「ヤヌスの月に」（昭55・4、「北方文芸」）、「不在証明」（昭58・12、「昴」創刊号）がある。「昴」発行人。（神谷忠孝）

工藤いはほ 明43・4・1（1908）「俳句」宗谷管内東利尻町生まれ。本名豊一。札幌工業学校建築科卒。江別市役所に入り、助役を務め、のち市議としても活躍。清光建設KK社長。昭和16年より作句。「雲母」誌友、「青樹」「葦

次。一時詩作を中断、画家をめざすが、詩誌「木星」の坂井一郎に出会い再び詩作に専念する。昭和21年「木星」復刊第一号から参加。父親の横川茂一（号は楮丘）は詩人であり、カトリック伝道師であったところから、詩風はカトリシズムで占められている。詩集「黙想詩集」「天使の時間」。詩誌「情緒」同人。室蘭市在住。（東 延江）
草森紳一 昭13・2・23（1888）「評論」帯広市生まれ。慶応大学中国文学科卒。著書に「マンガ考」（昭42・5、コダマプレス）、「日本ナンセンス絵志」（大和書房）ほか多数。「江戸のデザイナー」（昭47・11、駁々堂）で毎日出版文化賞を受賞。（神谷忠孝）
串田孫一 大4・11・12（1905）「哲学、詩、随筆」東京生まれ。東京大学哲学科卒。人生への思索や自然に対する観察には定評があり、その詩的エッセーには独自な趣がある。「北海道の旅」（昭37・12、筑摩書房）は題名が示すように、ほぼ北海道一円の見聞記であり、戦後の来道作家による紀行記の傑作の一つといわれている。（木原直彦）
九島勝太郎 明39・9・20（1906）「文化運動」札幌市生まれ。早稲田大学文学部卒。北海道文化団体協

議長。道内でも草分けの映画館「遊楽館」（札幌）の二代目経営者として活躍するかたわら、札幌プレクトラム・アンサンブルを主宰、音楽文化の向上に努めるとともに、文化団体のまとめ役として本道文化の発展に尽力。昭和46年北海道文化賞、52年札幌市文化功労者表彰、53年文化庁長官表彰、58年北海道開発功労賞受賞。（西村 信）

九条武子 明20・10・20（昭3・3・7（1887〜1928）「短歌」京都生まれ。幼少より作歌。「心の花」の代表歌人。北海道では神居古潭、十勝岳に歌碑がある。歌集に「金鈴」（大9）ほかがある。仏教的社会事業家。ゆふがすみ西の山の端つむ頃ひとりの吾は悲しかりけり（永平緑苑）

楠田匡介 明36・8・23（昭41・9・23（1903〜1966）「小説」石狩管内厚田村生まれ。本名小松保爾。「ふるさと厚田村のこと」（昭40、「まんとん」）のなかに、同郷の子母沢寛と河合裸石の名をあげ、さらに詩の手ほどきをしてくれた厚田小学校の先生（詩人）支部沈黙に問いかけている。郵便局員や女学校教師などを転々とした。推理小説で活躍し、本道取材作に「狙われた顔」（昭34・9、光風社）、「死の家の記録」（昭35・6、同）、「四枚の壁」（昭36・

牙「北の雲」「これ」各同人。江別市の文化活動、特に俳句面の中心的役割を果たしている。昭和49年江別を詠じた句集「煉瓦の村」を出版。53年準葦牙賞を受ける。(竹田てつを)

工藤善孝 大2・7・2
昭54・2・20 (1913~1979) 「俳句」山形県生まれ。本名正治。昭和16年渡島管内長万部町工藤病院事務長。17年ころから同町の句会「水燿会」で句作を始め、21年「壺」に入会、23年同人。28年「壺」休刊後約二〇年句作活動を休止したが、48年「壺」復刊と同時に同人に復帰した。52年夏、ガンに侵され約半年句作を休止したが、53年句作再開、54年壺中賞を受賞した。(金谷信夫)

工藤等三郎 大7・11・25
(1918~) 「児童文学」 釧路市生まれ。元小学校校長。戦後「釧路児童文化」を三上敏夫らと創刊。その後「やちほろず」「北の子」と同人誌活動を経て「北の仲間」を創刊。日本児童文学者協会北海道支部結成時に、和田義雄らにすすめられ日本児童文学者協会に入会。釧路子どもの本連絡会代表。ガリ版刷り同人誌「鶴のつ子」で後進の指導にあたる。主な作品に「よわむし先生」「密漁」などがある。(柴村紀代)

工藤仙二 大5・11・26
昭52

・10・24 (1916~1977) 「短歌」夕張市生まれ。庁立室蘭商業卒。静狩運送を経て日鉄に入社。昭和46年退職。喫茶店経営。短歌は昭和5年ころより工藤紅雨の筆名で小樽新聞歌壇に投稿。昭和8年新樹詩社室蘭支部結成。12年「炭かすの街」創刊主宰。41年歌碑建立。室蘭文芸懇談会長、同市民文芸編集委員長等を歴任。51年室蘭文化連盟功労賞を受賞。(吉田秋陽)

工藤信彦 昭5・10・16
昭55) 「教育」 樺太大泊生まれ。昭和29年北海道大学文学部国文科卒。札幌南高等学校、藤女子高等学校を経て東京の成城学園高等学校で教鞭をとる。在札幌「異風土」同人として詩を書く。作文教育の有数な実践家。著書に「書く力をつけよう」(岩波ジュニア新書68)ほかがある。(小笠原克)

工藤正広 昭18・5・5
昭57) 「小説、露文学研究」青森県生まれ。北海道大学露文科卒。北海道大学言語文化部助教。翻訳にバステルナーク「ジェーニヤ・リュヴェルス」(昭52、白馬書房)、「バステルナーク詩人の愛」(昭57、新潮社)、「バステルナーク「晴れようとき」(昭59、響文社)、創作集「眠る故郷」(昭55、白馬書房)がある。「オリザ」主宰。昭和59、60年ワルシヤ

国松 登 明40・5・6
昭57) 「絵画、俳句」函館市生まれ。帝國美術学校卒業。国画会員。札幌文化団体協議会長。画家としての実績は瑞宝章、紺綬褒章、北海道文化賞等の数多い受賞が示す。俳句は斎藤三樹雄(玄)が昭和15年に創刊した「壺」に参加。角野良雄と小樽広場の会結成。昭和21年復刊の「鶴」に投句、55年「鶴」同人となる。札幌鶴の会結成。「道」客員待遇。(北 光星)

久保 栄 明33・12・28
昭33・3・15 (1900~1958) 「演劇、小説」札幌市生まれ。父兵太郎は東京での官途を辞して来道、祖父の煉瓦事業を継ぎ、晩年は札幌商工会議所会頭となった。幼時、東京の叔父の養子となるが、のち復籍。第一高等学校を経て東京大学独文科卒(大15)。在学中から築地小劇場に入り小山内薫に師事、独逸の戯曲を訳出。新築地劇団を経て昭和5年プロット(日本プロレタリア演劇同盟)に参加、同年「新説国姓爺合戦」、7年「中国湖南省」、8年「五稜郭血書」「吉野の盗賊」と作・演出が続き、現代演劇の指導的地位に立った。9年弾圧でプロット解散、新協劇団が結成され、島崎藤村原作・村山知義脚色「夜明け前」の演出を担当。10年社会主義リアリズム論争に参加。生

ワ大学日本学科で日本語、日本文学を講義。(神谷忠孝)

工藤麗隆 明37・1・29
昭55) 「詩」青森県生まれ。本名直一。幼年期根室町(当時)に移住。北斗尋常高等小学校卒。山本連蔵商店に入店、軍入隊で退学。除隊後印刷所、海産商勤務。「金星樹」(大12、13)、「流水」(大14、昭5)同人詩歌誌の編集発行にかかわる。大正期、昭和初期の根室管内文芸の主導者。詩稿の一部は残存しているが詩集はない。戦中戦後の一時期根室町会議員。雑貨店、クリーニング店自営。隠退後埼玉県で療養中。(中沢 茂)

国木田独歩 明4・8・30
昭41・6・23 (1871~1908) 「小説」千葉県生まれ。幼名亀吉、のち哲夫と改名。父は旧竜野藩脇坂家藩士専八、母まん。だが、出生の由来に疑問がある。明治21年東京専門学校(現早稲田大学)英語普通科に入学したが24年鳩山和夫校長排斥、大隈重信推戴の学生運動に加わり同年3月退学。27年民友社に入り、従軍記者として千代田艦に乗り込み国民新聞に通信を送りつづけ好評を得る。これが後の「愛弟通信」(明41・11)である。明治28年6月佐々城信子に会い、その愛の成就のため北海道移住を計画、同年9月19日函館、室蘭を経て札幌着。新渡戸稻

産部面を基底に、典型的状態下の典型的性格を、細部の真実に即し総合的社会像として比重正しく描く、という「久保リアリズム論」は「火山灰地」(昭12・13)に鮮やかに結実した。戦後の「客観ロマン」「のぼり窯」(昭27)もこの延長にある。評論集「新劇の書」(昭14)の翌15年8月新劇事件で投獄され(16年末保釈出所)、戦中は公的活動から遠ざかった。敗戦後直ちに滝沢修、薄田研二と東京芸術劇場を創立、「林檎園日記」(昭22)を公演したが世評かんばしからず、「日本の気象」(昭28)、ラジオドラマ「博徒ごむらい」(昭31)のほかは、四部構想「のぼり窯」の熟成に精魂を傾けたが未完に終わった。芸術の、科学的概括と詩的形象の一元化という至難の課題が残った。「久保栄全集」一二巻(昭38、三二書房)がある。

「火山灰地」 戯曲。第一部「新潮」(昭12・12)、第二部「同」(昭13・7)。昭和13年7月新潮社刊。帯広、音更を素材地に、火山灰土管農への資本浸潤と技術発展の経路を特殊具体的に捉え、日本農業のはらむ普遍的問題をえぐった。農民の惨苦、科学者の良心、多層多様な群像を、家庭悲劇をもまじえて描破し、戦中抵抗芸術の記念碑となった。「のぼり窯」 小説。長編小説。昭和26年

造、高岡熊雄らの紹介で道庁を訪ねて土地選定を相談。25日空知川の沿岸へ向かい空知太駅(現滝川駅)で下車、さらに旅館三浦屋(現滝川ホテル・三浦華園)の助言で歌志内へ。今石川旅館に宿泊し、空知川の河岸(赤平)へ出て土地選定後、札幌に戻り、信子の手紙を見る。急ぎ帰京し、信子に渡米を強要する母豊寿の反対を押し切って強引に結婚。だが五カ月で破綻。しかし、この一二日間の北海道体験と、北海道移住計画に影響を与えた津田仙の「北海道開拓雑誌」や、佐々城本支(五稜郭の戦いに榎本軍に加わって医療従事の経験をもつ)、豊寿、信子らの北海道に関する生の情報が、北海道文学の嚆矢ともいえる「空知川の岸辺」(明35)成立の遠因となった。

(木村真佐幸)

6月〜12月「新潮」。新潮社刊(昭27・2)。野幌の一煉瓦工場が、室蘭に製鉄所を新設せんとする親会社の動向に巻き込まれ、手工業段階から機械化に踏み出す過程を、資本金、帝国海軍、イギリス資本などの巨大な渦に翻弄される姿として描くとともに、良心的技術者や傷痍軍人の苦悩をにじませる。四部作構想の第一部。(小笠原克)

久保二瓢(ふたひょう) 元治元・4・4〜昭8・2・24(1864〜1933)「俳句」徳島県生まれ。本名兵太郎。劇作家、演出家、小説家として著名な久保栄の父である。専修大学経済学部で学ぶ。はじめ東京鉄道局に勤務したが、札幌近郊の野幌に煉瓦工場を創設した父の事務を助けるため、明治31年来道。来道後も北炭創設になる鉄道関係に一時勤務した。渡道以前から句作に親しんでいたが、来道の明治30年代は、正岡子規により俳句近代化の炬火が全国的に盛り上がった時代で、宗匠俳句の旧派を打破する気運が充満していたが、道内にまだ根強く残っていた旧派の影響を打破すべく志し、江別に「好風会」を、また札幌でも梁田凡口らと「札幌吟社」を興し、新風の鼓吹に努めた。没後久保栄ら子息の手により、遺句集として「二瓢句集」が編まれ、花鳥諷詠の悠々たる境地が詠われている。

〈乾鮭の大きかりける眼かな〉
窪田 薫(かほ) 大13・3・7〜(昭5)「俳句」函館市生まれ。東海大学助教授。昭和40年「道」同人。札幌連句会主宰。53年句集「逃走曲」、55年句集「灰まで悪魔でモーターアルト」、54年「世界俳句選集78」、55年「同79」、56年「1980年の鵜料理」、57年連句集「蝦夷20歌仙81」、58年「犬糞」、59年「ゲームの義賊」をそれぞれ発行。欧米の詩人達と交流し、ドイツ語、英語の連句を指導している。(山田緑光)

窪田清彦(きよひこ) 大11・5・25〜(昭5)「演劇」東京生まれ。国学院大学卒。昭和26年の第一回全道高校演劇コンクール以来、栗山、釧路湖陵、苫小牧東高校などの演劇部を指導、全国大会に3度出場するなど、高校演劇の指導的役割を果たした。(本山節弥)

久保田俊夫(とよお) 昭3・6・12〜(昭58)「詩」後志管内岩内町生まれ。旧制室蘭中卒。昭和27年2月第一詩集「貧巷」、翌28年10月「三人以上の善人」。27年8月筑摩書房刊「祖国の砂」、29年10月宝文館刊「死の灰詩集」に作品が載る。ほかに27年戯曲「フゴッペ岩」で第二回北海道労働文化奨励賞受賞。「東京原始林」「TAP」「木星」「北方詩人」「詩と詩人」「文学風土」各同人。平明な民衆詩を目指した社会性をもつ抒情が、全作品の底流にある。(大場豊吉)

久保田浩(ひろし) 昭2・5・28〜(昭5)「劇作」松山管内北松山町生まれ。北海道大学卒。北大在学中からラジオドラマを執筆し、NHK札幌放送局から放送した。卒業後NHKに入局し札幌、東京、大阪で舞台中継およびラジオ、テレビのドラマ制作にあたった。戯曲に佐々木逸郎との共作「この夜明けに」(昭36)、「情炎夢暗闇虚無」(昭52)のほか札幌放送劇団公演の舞台演出作品が多い。ビデオ制作会社勤務。(佐々木逸郎)

久保田凉衣(りょうい) 大13・5・26〜(昭5)「俳句」新潟県生まれ。本名良生。昭和27年来道、46年離道。建設会社勤めた。昭和18年ころより新聞投句

により句作に入る。戦後「海紅」「馬酔木」「ほむら」「火山脈」「蘆火」「白歌」「樹海」「緋衣」「草人」「扉」等の各誌に学んだ後、中島斌雄に師事して「麦」同人、「海霧灯」客員。40年に第一句集「妻は旗手」を刊行。「草人」「麦」の各作家賞を受賞。現代俳句協会員。(木村敏男)

久保洋青(ひろあき) 大2・11・1〜昭51・9・7(1913〜1976)「俳句」釧路市生まれ。本名吉次。昭和6年に通信職場雑誌鮫島交魚子選に投稿、俳句の道に入る。当初、紅洋子と号したが8年洋青に改号。昭和7年「曉雲」入会、14年幹部となる。11年「石楠」入会、15年準幹部となる。昭和20年9月軍隊より復員、同年10月「緋衣」発刊委員幹部となる。21年4月紅林秋汀ら五人と道東俳句会を創立。機関誌「えぞにう」を創刊、主幹に推される。以後、釧路地方を中心にして抒情性の濃い詠法で風土を詠い上げるかたわら、後進の指導に当たった。代表的評論に「俳句の芸術性と特質」があり、生を写さんとする努力は芭蕉の芸術境に通じ、芸術は表現である、俳句の特質は庶民文学であることを説いた。昭和34年「えぞにう社」が、48年には久保洋青自身が釧路市文化奨励賞を受賞した。51年、四四年にわたる郵政官吏を依頼退職、俳句を中心に充実した余生を送ることを念願したが、宿痾の肝臓で没した。53年マサ子未亡人によって洋青遺句集「河」と遺稿集が刊行され、59年11月釧路市春採公園に句碑へあめひそかなればみどりのおく知れずが建立された。(鈴木青光)

熊谷克治(かつぢ) 昭4・6・1〜(昭5)「詩」帯広市生まれ。帯広畜産専門学校中退。小学校教諭を経て、昭和46年道議初当選。49年帯広市長選に出馬惜敗。50年から道議会議員。昭和34年「サイロ」創立同人。詩文集「太陽をとれ」(昭45、明治図書)がある。(小笠原克)

熊谷杜宇(とよ) 大6・9・14〜(昭5)「俳句」宗谷管内利尻町生まれ。本名勝元。岩内商業専修学校中退。昭和5年一四歳から泉天郎に師事、「曉雲」「窓」「雲母」「水子魚」に所属、昭和29年から三年連続受賞、32年水子魚賞、41年芦別市文化功労賞を受賞。55年から札幌市老人大学俳句講師を委嘱され、指導を担当中であるが、現在所属誌はない。(島恒人)

久保柏村(はくむら) 大4・7・2〜(昭5)「俳句」帯広市生まれ。本名与一。農業に生き農業委員長、農協常務を務める。俳句は昭和11年の「翰墨」に始まり、現在「樹海」「道」「樺の芽」同人。句集に「芽からまつ」(昭55)、「青からまつ」(昭58)がある。(藤本英夫)

久保吉春(きちる) 大13・3・8〜(昭6)「詩、小説」札幌市生まれ。藤女子短期大学国文科卒。昭和43年第一詩集「砂の憧憬」を、49年第二詩集「六月に

(佐々木露布)

久保吉春

大13・3・8〜(昭6)

ひとり逝き七月溺愛八月水死」を刊行し注目された。のち小説に転じ、同人誌「莞爾」「マロオス」などに作品を発表。主な作品に「ナポレオン・ゲーム」「骨」「赤い匙」「鳥、とんだ」(昭53)、「北海道新鋭小説集」(「三月の兎」がある。広告代理店ブランナー。(佐々木逸郎)

神代愛彦 昭8・7・11(68)「短歌」樺太豊原市生まれ。戦後の昭和22年に根室管内中標津町に引き揚げた。法政大学卒。別海野野付中学ほかで教員、現在教頭。29年「新墾」に入社、新墾評論賞受賞。北海道歌人会員。根室短歌会、中標津町「たわらまっぶ歌会」、奥根室「北のぐるうぶ歌会」に入会。芸芸誌「根拠地」「別海芸芸」編集発行。歌集に「孤独の旗」がある。八湿原の中にとる灯困みつつ管々と生きある家系幾人(推名義光)

久米正雄 明24・11・23(昭27・3・1(1891~1952))「小説」長野県生まれ。東京大学在学時、芥川竜之介らと第三、四次「新思潮」を創刊。漱石没後も夏目家の知遇を得たが、令嬢との恋に破れ、一転して「破船」(大11)などで通俗小説界の花形となる。しかし、純文学への郷愁を抱き続けた。大正5年大沼発電所技師の兄を母と訪ねた折の所産に「山の湯」(大5・12、「黒潮」)、「峡

中記」(大6・1、「新思潮」がある。雲田光男 明42・12・29(1908)「小説」後志管内寿都町生まれ。本名久保田一雄。国鉄五稜郭工場に勤務時に函館短芸芸社を創立、「短芸芸」(のち「道南文学」と改題)を発刊。北川冬彦の「時間」、保高德蔵の「芸芸首都」などにも参加、詩、小説、随筆など多方面に書く。小説集「朱太川」(昭33、短芸社)、「孤島」(昭36、同)。詩集「秋」(昭25、土曜詩学会)のほか、小説「山の風町の風」(昭38~39、「道南文学」)などがある。(安東璋二)

倉内佐知子 昭25・8・8(1906)「詩」帯広市生まれ。北海道教育大学釧路分校卒。帯広市立広陽小学校勤務。「コスモス」「修羅」同人を経て「不羈」同人。詩集「恋母記」死児のために「昭和53年度北海道詩人協会賞」を受ける。サド・マゾヒステックな心理主義の方法が、詩の個性的魅力を構成している。(千葉宣一)

倉島 斉 昭7・1・22(1908)「小説」シナリオ。札幌市生まれ。本名吉原達男。北海道を経て昭和29年北海道大学文学部国文科卒。中学教師、電気器具販売店経営などの後高校教師となり、昭和60年以後は文筆に専念。北海

高在学中「エチュード」創刊に参加。昭和31年「凍橋」同人、同誌が「くりま」と改称後も引き続き同人となる。44年同誌に発表した「歳月の小車」が北海道新聞文学賞佳作となり、翌45年「老父」で第二回新潮新人賞を受賞、その受賞第一作の「兄」が芥川賞候補となる。その後の作品としては「家族合わせ」「夫婦」「団欒」などがあるが、家族の絆の不条理が一貫したテーマとなっている。また49年よりラジオドラマを書き始め「絆」「ちりりん ちりりん」で51、52年度の文化庁芸術祭優秀賞を受賞、東ドイツ、スペイン等二カ国で放送された。テレビドラマとしては「札幌物語」朝の手紙」がある。(川辺為三)

倉島 敏 明45・7・13(1906)「俳句」上川管内美深町生まれ。長野県上田英語学校修、上川管内で中学校長歴任。退職後、資生堂札幌支店女子寮寮監、学習塾経営。大正13年郷土信濃の俳人に興味を持ち資料収集。昭和46年「菜燂火」入会、次いで「鶴」に投稿したが中止。46年「丹精」素玄集により斎藤玄に師事、48年「壺」復刊編集同人。56年同人会副会長、57年壺中賞受賞、素玄集(無鑑査)同人として活躍中。(金谷信夫)

蔵原惟人 明35・1・26(1906)「評論」東京生まれ。日本のマルクス主義文学理論の主導者で、実作の小林多喜二と双壁をなした。「蔵原惟人評論集」一〇巻(新日本出版社)がある。昭和10年治安維持法違反で七年の刑を受け、札幌刑務所在監(昭12まで)中の動静が「芸術書簡」(蔵原惟人評論集「第5巻」)から知れる。40年10月「小林多喜二文学碑」除幕(小樽)で来道した。(小笠原克)

倉本 聰 昭10・1・1(1909)「シナリオ」東京生まれ。本名山谷驛。東京大学文学部美学科卒。ニッポン放送に入社し、昭和38年同社を退きシナリオ作家として主にテレビドラマを多く執筆する。主な作品に「文五捕物絵図」「あひるの学校」「赤ひげ」「勝海舟」(以上日本放送協会)、「わが青春の時」「君は海を見たか」「光の中の海」「ガラス細工の家」「前略おふくろ様」「昨日、悲別で」(以上日本テレビ)、「おはよう」「白ら影」(以上東京放送)、「6羽のかもめ」「あなただけ今晚わ」「北の国から」(以上フジテレビ)。映画の主なものに「月曜日のユカ」「陽の当る坂道」「君は海を見たか」「駅」「居酒屋兆治」。北海道放送制作の「東芝日曜劇場」に「ばんえい」(昭48)、「りんりん」と(昭49)、「うちのほんかん」(昭50)、「幻の町」

(昭51)などの秀作を書き、「うちのほんかん」はその後「ほんかんシリーズ」として道内各地を舞台に制作された。その後富良野市に移住し「北の国から」「昨日、悲別で」は移住後に書かれた。同市に演劇塾を発足させ、俳優作家の養成に当たっている。著書に「倉本聰コレクション」三〇巻(シナリオ集、昭58から続刊中)、エッセー集に「さらば、テレビジョン」(昭53)、「新テレビ事情」(昭55)、「北の人名録」(昭57)ほか。文化庁芸術祭賞、同優秀賞、毎日芸術賞、日本民間放送連盟賞最優秀賞受賞ほか。日本放送作家協会会員。(佐々木逸郎)

栗木重光 明37・2(昭20・11・24(1904~1976))「俳句」網走管内上湧別町生まれ。昭和初年札幌鉄道教習所をおえ、札幌鉄道局に勤務して札幌市に定住。俳句は大正14年内藤鳴雪に師事したのがはじめ。のち鳴雪の系譜を継ぐ武田鶯塘の「南柯」同人となる一方、牛島藤六に私淑して「時雨」に加盟、編集同人として活躍。昭和12年「時雨」が「葦牙」に変わってからも精進を続けた。昭和7年肺を患い、以後の半生をほとんど病床で過ごした。その間「樹心」「踏靑」等を発行、福島新松子、斎藤笑風、若山允男、見方愛子(のち允男と結婚)、中

山直木、上山八寿女(のち直木と結婚)、寺田京子、水田杏子をはじめ多くの療養者俳人を世に送り出した。戦後は郷里で療養を重ねていたが、症状が進み、札幌の病院で生涯を閉じた。句集「雪天」のほか「蔓引けば西日こぼるる秋の風」の作を刻んだ句碑が上湧別町にある。晩年は本名を名乗っていたが、「踏靑」の筆名で知られている。「雪天」 昭和10年時雨吟社から刊行した句集で、大正14年から昭和10年までの一〇四四句を収めている。へ脳天を鳥の歩りく二月かな(湯婆二つ入れて生きをり春の昼)(仏ともならず覚めみつ盆の雨)はいずれも病中の作。表紙の題字を桑原翠邦、序文を武田鶯塘が書いている。(園田夢實花)

栗田桂子 昭11・7・18(1909)「小説」岐阜県生まれ。本名大沼桂子。長野県立飯田高等学校卒。昭和57年から同人誌「開かれた部屋」同人となり、「優しい声のポピュラーソング」(昭58・10、「北方芸芸」)は「北海道新鋭小説集84」に収録された。(神谷忠孝)

栗坪良樹 昭15・10・13(1906)「評論、近代文学研究」満州奉天市生まれ。月形高等学校から早稲田大学大学院国文科修士課程修。現在青山学院女子短期大学教授。同人雑誌「評言」と構

「想」編集人。「評言と構想」や岩波「文学」等に横光利一論を精力的に発表。文芸評論家としても活躍し、「文学界」に「上林晚論」ほかを、「すばる」では吉行淳之介、植谷雄高、安部公房など現代作家のインタビュアー、またコラムの筆もふるう。その間「北方文芸」にも「横光利一論」や「松岡二十世のこと」などを寄稿、「詩人伊藤整の郷土的実感」(昭45・2、「評言と構想」ペンフレット)や「武田泰淳・ひかりごけ」(昭52・9、「解釈と鑑賞」)など、北海道関連作家の論考も多い。主な編著書に「展望戦後雑誌」(昭52、河出書房新社)、「早稲田文学人物誌」(昭56、青英社)、「横光利一」(昭56、角川書店)などがあり、「定本横光利一全集」の編集委員もつとめる。(日高昭二)

栗本鈿雲 (くろもと じゆん) 文政5・3・10〜明30・3・6 (1822〜1897) 〔医師、外交家、新聞記者〕名は鯤。瀬兵衛、瑞見とも称し、鈿雲、鈿庵は号。江戸幕府の医師喜多村槐園の三男。儒学、医学、本草学を修め、栗本家を継ぎ幕府奥詰医師をつとめた。嘉永5年(一八三三)から文久3年(一八六三)まで蝦夷地居住を志願し箱館に住んだ。この間、菓草採取、菜園(七重村)経営、箱館に病院建設、久根別川の水運など、医事、殖産に功績があり、

柳貞造と結婚して関西で暮らす、夫は召集となり、23年3月戦死の公報を受ける。戦地の夫を思うひたむきな気持ちは、「或る戦中日記より」(「北方文芸」)にくわしい。同年12月創作活動に専念するため上京、24年佐多稲子の紹介で「夫婦とは」を「女人芸術」に発表、戦争未亡人の悲哀を描いた。ついで「限りなき困惑」(昭26)、「歳月のかげに」(昭29)など、暗い現実を抑制された文章で追求するとともに、少女時代を素材に「姉妹」を「近代文学」に連載する。のち加筆されて、講談社から刊行された。ほか「こぶしの花の咲くころ」「深夜の小駅」「明日はほんとうにくるだろうか」「ポプラ並木はなにを見た」「白い道」などの作品がある。

〔姉妹〕 長編小説。昭和28年7月から29年2月まで四回にわけて「近代文学」に連載。講談社刊(昭29・6)。同年第八回毎日出版文化賞受賞。山の中の発電所で育った圭子と俊子の姉妹が、札幌の学校に学んで成長していく姿を、北海道という風土と、かずかずの暗い社会的現象を背景としながらも、明るくのびのびと生きていく主人公俊子をたくまぬユーモアで描いている。リズムミカルなこの自伝的小説は映画にもなって評判を呼ぶ。(武井静夫)

箱館奉行組頭に任じられた。江戸に帰って昌平黌頭取、目附、軍艦奉行、外国奉行兼箱館奉行を歴任。外国奉行としてフランスに赴いて日、仏の親和につとめた。維新後は一時帰農したが、明治5年新聞界に入り、郵便報知新聞の編集を主宰し、同紙は民権派新聞として知られた。明治9年報知社を退社するまで懐旧的な随筆を執筆し読者の好評を得た。著書のうち「砲庵遺稿」は箱館在住中の見聞を収め、幕末史および幕末蝦夷地事情に資するところが大きい。(佐々木逸郎)

紅林秋汀 (くわんりん せいつてい) 明19・5・8〜昭45・7・24 (1866〜1970) 〔俳句〕釧路市生まれ。本名鉄雄。明治維新により釧路へ移住。中学講義録などにより勉学、教員となる。少年時代「少年世界」「小国民」などにより文学を開眼、角田竹冷など尾崎紅葉門下の指導を受ける。音別小学校校長を最後に昭和14年地方公務員となる。22年音別町長に当選、以来四期連続当選。当初は夜雨と号し、のち秋汀に改める。明治38年の釧路における新派旧派論争に参加、純正文学論を展開した。大正15年「曉雲」に参加、幹部同人として活躍、また釧路支部長として後進を育てた。昭和21年久保洋青ら五人と道東俳句会を結成、「えぞにう」を創刊、釧根

桑門津柵子 (くわんもん づさこ) 昭3・2・13 (1928) 〔詩〕留萌管内羽幌町生まれ。羽幌国民学校卒。昭和27年に詩学研究会北海道支部に入り、32年から「木星」同人。一時、「眼」檸檬」にも参加したが、この両誌廃刊後は「木星」一本に絞る。羽幌町真浄寺の息女として聖典類に親しみ、仏教的主題や思考で大作を発表してきたが、最近では自らの教習を掘り起こし磨き上げて対象にぶつけない希求が感得される。芯の強い言葉が屈折進展する抽象構造であるが、詩の表情は朝露が陽にきらめくすがすがしさであり、しかも底辺に童唄の心が通奏低音のようにちりばめられている。(坂井一郎)

桑野晶子 (くわの しょうこ) 大14・11・4 (1939) 〔川柳〕東京生まれ。昭和19年渡道。43年から川柳の道歩み、新人ばなれした斬新な句風を評価される。48年から54年まで読売新聞(北海道版)の柳壇選者をつとめる。53年7月句集「眉の位置」を刊行。58年から北海道川柳年度賞選考委員。北海道の柳誌六誌の選者として活躍、女流作家として第一線歩み、新人育成につとめる。(川村美翔)

桑野 敏 (くわの びん) 昭8・3・31 (1933) 〔詩〕小樽市生まれ。本名桑島敏。増毛高等学校時代から詩作し、教員となつてから辺地の学校を転任しながら、

に根ざした俳句文学の確立に挺身、月刊という苦難を分担し、後進育成に尽力、「生活即俳句」を終始提唱した。自叙伝「風雪八十有余年」(昭42)、句文集「流るる雲」(昭44)がある。(鈴木青光)

黒田三郎 (くろた ざぶろう) 大8・2・26 (昭55・1・8 (1919) 1960) 〔詩〕鹿児島県生まれ。東京大学経済学部卒。昭和11年ころより「VOU」、戦後は「荒地」「歷程」の各同人。ペーソスの向こうに小市民の生活のリアリティを再発見する独自の詩風を樹立。昭和42年2月(札幌)、および49年5月(函館)の道詩人協会、詩祭、53年9月札幌での南空知詩人会議主催の講演会等で講演。詩集に「ひとり」の女に」(第5回日氏賞)ほかがある。(河野文一郎)

畔柳二美 (わたなげ にみ) 明45・1・14 (昭40・1・13 (1912) 1965) 〔小説〕千歳市水明郷の王子発電所に生まれる。旧姓遠藤。大正9年父が尻別第一発電所に移ったのにもない、狩太(現ニセコ)小学校に転校する。このころを素材に「山の子供」(昭31)が書かれている。大正13年北海道高等学校(現札幌大谷高校)に進み、姉と伯母の家に下宿して通学する。二〇歳のとき、窪川(のち佐多)稲子の「キヤラメル工場から」に感銘、文通をはじめ。昭和8年上京、12年に畔

「PEN」や「留萌文学」「未完成」に詩を書く。昭和47年に詩集「北の海では」を出版した。(湯田克寛)

桑平トキ子 (くわの ときこ) 昭5・2・2 (1930) 〔詩〕函館市生まれ。昭和22年庁立函館高等学校卒。同年創刊の戦後函館初の女性詩誌「ダイアナ」に作品を発表。以来、函館の地を離れず、「だいある」「女」「中部日本詩人」「北海道詩人」などを通じて詩作を続け、現在は「ALICE」(東村山市)同人。詩集に「虹の道標」(昭39、宇宙時代社)、「桑平トキ子詩集」(昭57、芸風書院)がある。北海道詩人協会員。(山本 丞)

郡司正勝 (ぐんじょう しょうしょう) 大2・7・7 (1923) 〔演劇評論〕札幌市生まれ。早稲田大学国文科卒。早大演劇科で長く教壇に立ち、昭和30年芸術選奨。50年紫綬褒章受賞。早大文学部名誉教授。著作は四十数冊に及ぶが、代表作に「かぶき」様式と伝承」(昭29、寧楽書房)、「歌舞伎と吉原」(昭31、淡路書房)、「かぶきの発想」(昭34、弘文堂)、「かぶきの美学」(昭38、演劇出版社)、「地芝居と民俗」(昭46、岩崎美術社)などがある。(神谷忠孝)

け

芥子沢新之介 けしざわし 明27・3・29
 〔短歌〕
 新潟県生まれ。本名田中弥彦次。明治36年一家をあげて旭川に移住。大正6年6月「アララギ」に入会し、9月来道した島木赤彦に逢い指導を受けたのが歌人としての出発。10年純正短歌雑誌「冷光」を発行、主宰。15年「アララギ」を退会して「香蘭」に入会。昭和2年に「吾が嶺」を創刊、主宰した。10年「多磨」創刊に参加し、11年8月、「多磨」の中央統制により「吾が嶺」を廃刊。21年帯広で「多磨」支部として集まっていた本間たけし、大平忠雄らと「楡」短歌会を結成した。28年「コスモス」創刊に参加。31年には、夫人の水口幾代、大平忠雄らとともに「いしかり詩舎」を結成して、歌誌「いしかり」を創刊した。41年8月「コスモス」全国大会を定山溪で開催したが、その直後、脳内出血で倒れた。新之介の没後、42年6月夫人の手によって「芥子沢新之介歌集」、同年10月随筆集

「赤鉛筆」が刊行された。新之介の作風は、作歌初期のアララギの影響から、写生を基調とするが、「多磨」「香蘭」「コスモス」等から受けた浪漫的な風格をも加えており、夫人の長い闘病生活、生活苦のかげが人間的悲哀、漂泊の思いとなつて、独自の歌境を作り出している。〈あかしやは花の咲く日も静かにてすでに散りくるさむぎ地のうへ〉を刻んだ歌碑が、48年6月札幌市月寒公園ロータリーの森に建てられた。

〔早春〕 はるし 歌集。芥子沢新之介、水口幾代共著。昭和22年6月楡短歌会刊。13年から22年までの作品を収める新之介の第一歌集。戦中・戦後の厳しい生活体験を、哀愁と寂寥感をたたえた抒情で詠いあげている。〈清らかに日は照らせどもまだ寒し遠風は冬木を鳴らす〉

煙久久仁子 けしざわし 大7・9・22
 〔短歌〕盛岡市生まれ。二歳で十勝管内池田町に移住。庁立池田高女卒。「青空」「新墾」などを経て、昭和29年「かざろひ」創刊に参画。以後編集委員として編集に参加。現在運営委員として活躍。旭川歌会の運営を担当。短歌作品のほか、地域誌タウン誌などにエッセイを連載。歌集に「未知の街筋」(昭50)がある。(木村隆)

源氏鶏太 げんじけいだい 明45・4・19
 〔小説〕富山県生まれ。本名田中富雄。富山商業を卒業して大阪の住友合資会社に入社。代表作に「三等重役」などがあり、サラリーマン作家として知られるが、本道取材作の短編「流水」(昭33・1、「日本」)はサラリーマンの悲哀を描く。作者の体験を取り入れた私小説的な作品で紋別の鴻之舞金山を舞台にしている。(木原直彦)

小池嘉四郎 こいけけしざわし 大2・2・16
 〔俳句〕岐阜県生まれ。本名利市。昭和10年渡道、小樽に居住。16年栗山町に転居。昭和8年作句を始め、松村巨猷の「樹海」に入会したが、その後心召により一時作句を中断したが、22年復員後「葦牙」「緋衣」に入会、27年「葦牙」同人、54年「葦牙」金剛集同人となる。同年1月「人」創刊とともに入会、56年同人となる。(太田耕吐子)

小池喜孝 こいけきこう 大5・9・11
 〔小説〕「民衆史研究」東京生まれ。法政大

学卒。教員、出版社員を経て昭和28年北見市に移り高校教員のかたわら、地域民衆史の発掘に専念。45年秩父事件会計長の井上伝蔵の追跡を契機に本格的な民衆史掘りおこし運動を展開。その運動母体となる「オホーツク民衆史講座」を組織し、囚人、タコ、朝鮮人、中国人、アイヌ、ウイグルなど本道開拓の最底辺に埋もれた民衆の歴史を発掘し、顕彰活動を推進。単なる歴史運動にとどまらないこの運動は、今日的な反戦・平和、人権と民主主義の問題を根底から問いなおす住民運動でもあり、その影響力は道内ばかりか全国にまで及んだ。57年「民衆史講座」会長を辞任し、現在東京都東松山市に住んで、フリーの立場で民衆史の研究と運動に従事。著書「鎖塚―自由民権と囚人労働の記録」(昭48、現代史出版会)、「常紋トネル」(昭52、朝日新聞社)など。(森山軍治郎)

こいぬまさ (人名編)

小池次陶 こいけつぎ 明43・11・10
 〔俳句〕岐阜県生まれ。本名平一。昭和6年帯広市で陶器商。18年札幌市に転居。現在木材会社社長。昭和10年石田雨圃子の「石狩」を経て「ホトトギス」に投句。14年読売新聞懸賞俳句虚子選晩夏雑の部で第一席入選。15年「草」に投句。推薦作家となる。17年北海道俳句作家協会設立発起人。戦後「はまなす」

「阿寒」「まはぎ」「緋蕪」「芹」なども投句、一時高野素十の指導を受ける。39年「若葉」、44年「かつらぎ」に投句。48年両誌の同人に推される。投句俳誌は多くを数えたが虚子の唱導する花鳥諷詠の道を歩む。毎年、全道俳壇に呼びかけて芭蕉祭を主催。俳人協会会員。道俳協常任委員。かつらぎ推薦作家。句集に「牧秋」「阿寒の月」がある。(水塊となりし流木岩に載る)(嶋田一歩)

小池進 こいけしん 昭23・6・8
 〔小説〕中国佳木斯市生まれ。斜里高校卒。昭和42年国鉄に入る。創作集「九月になれば…」(昭53・11、オホーツク書房)のほかに「宵宮のまつり」(昭55・9、「文芸網走」)、「時夫」(昭57・10、「海燕」)など。(神谷忠孝)

小池栄寿 こいけえいす 明38・12・21
 〔詩〕上川管内鷹栖町生まれ。旧制旭川中学を経て昭和2年東洋大学卒。中学三年の頃、鈴木政輝に誘われたのが作詩の始め。大正10年詩誌「漂泊」、15年「草を喰む」同人。昭和2年「田筒帽」に参加以後「裸」「不死鳥」「国詩評林」同人。8年旭川新聞社募集の「北鎮精鋭凱旋歌」に当選。12年6月名寄詩人連盟(四七名)が結成され幹事長に推挙。「高台」同人。14年3月詩人連盟が自然解消となるまでつとめた。19年秋、

慰問詩集「青い芽」に参加。21年7月教え子富田正一編集発行の「青芽」創刊から数年にわたりアドバイザーとして尽力。「亜寒帯」を経て「情緒」同人。短歌の道にも造詣深く「旭川歌話会」「霧華」「水松」「香蘭」を経て「短歌人」同人。私家本であるが詩集「微笑」(昭4・5)、「女学校詩集」(昭5・10)、「さびしき生涯」(昭8・11、教育報国社)、「落穂」(昭39・2)、「我孫子即興詩集」(昭43・6)、歌集に「植樹祭」(昭39・9)、「一所不住」(昭44・6)、詩歌集「喜寿」(昭58・8)がある。千葉県我孫子市在住。(富田正一)

古泉千櫻 ふるいずみちさくら 明19・9・昭2・8
 〔短歌〕千葉県生まれ。1886〜1927 小学校教員。帝國水難救済会勤務。明治37年「馬酔木」入会。42年「アララギ」入会、伊藤左千夫に師事。大正6年札幌オリーブ詩社創刊の歌誌「オリーブ」に寄稿。13年「アララギ」を離れ「日光」同人。14年自選歌集「川のほとり」刊。15年歌誌「青垣」創刊。歌集に「屋上の土」「青牛集」、歌論集に「随縁抄」がある。(小国孝徳)

鯉沼又骨 こいぬまたほね 大12・9・2
 〔俳句〕東京生まれ。本名正一。歯科医。日本大学在学中に「ホトトギス」に拠り同好グループと作句。増毛で

開業のかたわら「葦牙」「河」「人」同人として活躍。俳人協会会員、増毛俳句協会長。
高坂百合子 (佐々木子興) 大8・8・15 (1919-) 「短歌」旭川市生まれ。昭和29年「かぎろひ」創刊に参加。53年まで才気ある現実派として活躍。別に、51年「未来」入会。56年「群帆」入会。その間、未来会員による季刊「創」に拠り活動。(木村隆)

高城 高 (高城高) 昭10・1・17 (1895-) 「小説」函館市生まれ。本名乳井洋一。昭和32年東北大学文学部英文学卒。北海道新聞社に入社。大学在学中の30年「X橋付近」で、旧「寶石」誌(岩谷書店)の新人賞を受賞。32年編集顧問をしていた江戸川乱歩の勧めで同誌に短編を連続発表し推理作家として認められる。わが国初の正統派ハードボイルドといわれ、道東を舞台にした作品が多かったためジョルジュ・シムノン風のリズムがあると評された。代表作は仙台七夕を背景にフェンシング試合中の事件を描いた「賭ける」、密漁船を題材にし、東映で映画化(村山新治監督)された「淋しい草原に」、国後島への潜入スパイ事件をモデルにした「暗い海深い霧」など。単行本としては短編集「微かなる吊鐘」(昭34、光文社)、長編「墓標なき

墓場」(昭37、光風社)がある。45年に「死ぬ時は硬い笑いを」を発表している作品はみられない。日本推理作家協会員。(大須田一彦)

古宇伸太郎 (古宇伸太郎) 明39・3・10 (1906-) 「小説」後志管内神恵内村生まれ。本名福島豊。札幌通信講習所を終えて、小樽、札幌、東京築地の各郵便局電信課に勤務。大正13年広津和郎の芸術社社員となる。その後出版社巡りをしていたが、全国的不況により昭和4年帰道、北見新聞記者。7年文学を志向し再上京、月刊「北海道倶楽部」編集長となる。広津和郎に密着、多くの作家たちと接する。15年「文学者」に発表の「蛾性の女」で芥川賞候補となるが、戦争拡大により文筆活動を中止、同年帰道。職を転々と変えながら「北方文芸」に短編、北海道新聞に「徳足内騒動」を連載。その後、長い休筆状態のあと40年還暦となって同人誌「人間像」に参加。同誌に「おらが柄」(昭40)、「仔鳥」(昭42)、「旧街道点景」(昭42)など、淡味のある作品を次々と発表した。ラフ・ワーク「漂流」(昭45・47)を連載中に胃ガンのため没した。(針山和美)

合田一 (合田一) 昭9・1・5 (1902-) 「ノンフィクション」空知管内上

砂川町生まれ。昭和28年北海道新聞社に入社。北海道の民話、伝説、祭りをルボした「北海道ロマン伝説の旅」(噴火湾社)、「北海道祭りの旅」(北海道新聞社)ほかを刊行。戦前のカニ缶工を描いた小説「流水の海に女工節が聴える」(新潮社)が56年芸術祭参加のテレビドラマになった。北海道文化放送営業局長。北海道ノンフィクション集団代表。(大須田一彦)

幸田露伴 (幸田露伴) 慶応3・7・23 (1867-) 「小説」東京(江戸下谷)の生まれ。本名成行。電信修技学校を卒業、明治18年7月判任官通信省十等技手として北海道後志国余市電信分局勤務(月俸一二円)を命ぜられ、船で小樽に入り、徒歩で余市に着いた。その時のことは「雪粉々」の序に記されている。電信局は浜中町にあった。現在道立中央水産試験場中庭に当たり、昭和30年8月そこに露伴句碑が建てられた。余市時代は沢町の雑貨商新井田宅二階に下宿、近くの永全寺の蔵書を耽読、文壇の状況にも刺激され、明治20年8月25日、余市を脱出、小樽から船で青森に上陸、徒歩で東京に向かった。途中野宿し、夜露と伴に寝たことから「露伴」の号が生まれた。22年11月「雪粉々」を読売新聞に連載一四回で中絶(明34、堀内新泉と

共著出版)、アイヌ伝説取材作。北海道脱出の旅は「突貫紀行」(明26「枕頭山水」所収)に詳し。(和田謙吾)

幸能舎守雄 (幸能舎守雄) 安政2・7 (1855-) 「俳句」山形県生まれ。本名佐藤守雄。明治27年来道し、はじめ神道の督事として函館に住み、その後室蘭の八幡神社宮司となる。短歌と俳句の道に秀で、室蘭地方の文芸に種を播くなど草分け的存在であった。石狩町草創期の俳句集「尚古集」の選にあたり、俳誌「蘭の香」を創刊、室蘭毎日新聞の選者等、北海道俳諧三大家の一人に数えられた。(木村敏男)

甲野狂水 (甲野狂水) 明31・11・27 (1898-) 「川柳」函館市生まれ。本名弘。昭和42年2月発行者甲野喜久の名で遺句集「冬木立」を一周忌に合わせて発行。大正10年頃川柳に手を染める。13年12月新興川柳「ほのほ」を発行したが五号で終わる。大正時代から「水原」「影像」「川柳人」「たまむし」に投稿を続けた。(鈴木青柳)

河野常吉 (河野常吉) 文久2・11・22 (1862-) 「歴史研究」長野県生まれ。松本師範学校卒、慶応義塾に学ぶ。自由民権運動に参加。明治27年北海道囑託。拓殖事務を執り、広く道内を踏査、拓殖事業各種報告書を編集。

大正4年から開道五〇年事業の「北海道史」編集主任となるが、その筆が上司の忌諱にふれ退職。「函館区史」「小樽市史」編集執筆。アイヌ研究ではコロポックル説批判の論陣をはるなど、北海道史の父、といわれ、高倉新一郎など後継者を育てた。水島ヒサ、河野広道は子。(藤本英夫)

河野都詩夫 (河野都詩夫) 昭2・3・30 (1927-) 「詩」旭川市生まれ。本名敏男。帯広畜産大学入学前から詩作をはじめ、勤務先であった合同酒精旭川本社労組文化部の雑誌「炎」の詩のグループの指導、旭川刑務所受刑者の詩の指導などで活躍、詩誌「情緒」同人として地道な詩活動を続け、昭和29年鈴木政輝序による詩集「磁針」を北海道詩人クラブ(現情緒刊行会)より発行。(東延江)

河野広道 (河野広道) 明38・1・17 (1905-) 「昆虫学、考古学、民族学研究」札幌市生まれ。北海道大学卒。昆虫学者松村松年の弟子。昆虫分類学に業績多い。昭和10年治安維持法違反で北大退職。父常吉の薫陶を受け学生時代から考古学、アイヌ研究に進み、その分野で指導的役割を果たす。「貝塚人骨の謎とアイヌのイオマンテ」は学史上特筆される。「著作集」全四巻あり。

昭和17年大政翼賛会道協力議員。26年北海道文化賞。28年道文化財専門委員など公職のほか関係学会役員。30年北海道学芸大学教授。(藤本英夫)

小書政治 (小書政治) 明41・2 (1908-) 「短歌」東京生まれ。東京府立一中卒。昭和5年「アララギ」入会、土屋文明に師事、現在同誌選者。21年「新泉」「羊蹄」参加。歌集に「新しき丘」「春望」「花」「春天の樹」「雨色」「薄舌集」、合同歌集「自生地」、自選歌集に「青条集」がある。生活に根ざした作品は新しい開拓と方向を目ざしており、沈痛にして清新でもある。45年国立大雪青年の家に講演のため来道。53年にも来道して各地を回る。(小国孝徳)

小坂電英 (小坂電英) 大9・4・1 (1920-) 「川柳」石川県生まれ。本名吉雄。昭和18年船員を志望、北海道に渡り、国鉄に就職、連絡船乗務。29年10月函館川柳社同人、35年9月東京きやり社人となる。46年北海道川柳連盟選考委員。51年「川柳はこたて」の編集長となる。52年3月国鉄退職を機に竜笑句集「日常茶飯」を刊行。〈気の弱いのが善人とされている〉(鈴木青柳)

朗に俳諧を学ぶ。のち脇宗匠となった。万延元年(一八六〇) 福山(現松前町)へ来島、翌年箱館へ来住し、慶応元年(一八六五) 孤山堂を継いで三世となる。明治20年函館八幡宮主典となり、函館俳壇に君臨し「巴珍報」の俳壇選者などにあたった。(木村敏男)

努力する。40年北海道川柳連盟発足と同時に事務局長、58年連盟会長となる。49年日本川柳協会理事。54年よりヨーロッパの日本短詩文芸研究家達(川柳を紹介。著書に句集「ふるさと」(昭49・2)。(雪ぞふるふるさとの雪音もなし)(橋爪まさのり)

小島雅代 註 大8・12・10(一〇九〇)「詩」美唄市生まれ。本名マサヨ。戦前、森みつ、逢坂瑞穂と三人で「木雲」を刊行、その同人となる。女流詩人の草分けの一人としての仕事をした。(小松瑛子)

越郷黙朗 註 明45・7・18(一九二二)「川柳」函館市生まれ。本名喜三郎。昭和7年函館で畑喜多坊を知り本格的に作句を始める。10年東京から函館に戻った村井潮三郎の「潮」吟社に入会、頭角をあらわす。12年小樽へ転住するまでの短期間に「巴」グループ、「朗々」会等を組織。小樽では「小樽川柳研究会」に入会。小樽時代に東京の「柳友会」「川柳研究会」等に参加し、山路星文洞、川上三太郎等の知遇を得る。15年樺太へ渡り応召。22年岩波文庫の「柳多留」三冊を抱いて函館に引き揚げる。同年旭川に移り敦賀谷夢楽、佐藤篤漢等と柳誌「あさひ」を復刊。その後札幌、横須賀と移転したが35年再び札幌に戻り、創立間もない札幌川柳社の運営に参画。42年札幌に「川柳あきあじ」吟社を創立し代表幹事となる。この間昭和35年から毎日新聞柳壇の選者をつとめる。38年川上三太郎より贈られた基金をもとに北海道川柳年度賞、北海道川柳連盟の創設に

越崎宗一 註 明34・7・29(昭51・10・19) (1901-1976)「郷土史研究」小樽市生まれ。小樽高商、東京商大卒。大日本麦酒社員を経て昭和15年より越崎商店社長。アイヌ絵を中心にした郷土史資料のコレクションは著名。昭和初期から郷土誌「蝦夷往来」などに寄稿多く、また「アイヌ絵」北海道写真文化史」「北前船考」など多数の著作あり。北海道文化財保護協会創設の推進役で昭和36年以来その副会長。34年北海道文化奨励賞受賞。(藤本英夫)

小島嘉雄 註 昭6・8・15(一九三二)「短歌」空知管内奈井江町生まれ。昭和25年「新掣」入社。28年退会して「林間」入会、木村捨録に師事、本格的に作歌をはじめ。33年林間賞受賞。40年歌集「蒼雪」を泰文堂より上梓。従来の農民短歌と異質の清冽な抒情性を高く評価される。25年から34年廃刊までの「空知平原」を北口年夫らと編集発行。38年「奈井江歌話会」と改め以来副会長として後進の指導にあたる。36年「凍土」入会。47年「凍土」を離脱した矢鳥京子、芝木朝次らと「彩北」創刊、運営委員となる。以来「彩北」に毎号多数の作品を発表。「土」と密着した確かな眼とふくよかな歌柄に磨きがかけられた。山田あき選「稲の花」に三〇首、中井正義編「働く者の短歌」に三〇首登載。「田園」副会長。「林間」幹部同人。△冷やけき霧湧く沼の朝けにてさびしき抱き鴨ら帰り来(矢鳥京子)

谷興治。旭川市生まれ。札幌中央創成小高等科卒業後、上京して三田夜間中学に学ぶ。山田隆哉に師事して演劇の世界に入り、劇団同志座(東京)、ミュージック・ガイド(札幌)を経て新築地劇団の八田元夫演出「帆船天祐丸」、久保栄演出「夜明け前」(ともに昭9)に参加。劇団第一歩(札幌)に加入し岸田国士作「驟雨」、真船豊作「山鳩」、ルナル作「南の風」、秋田雨雀作「国境の夜」に出演(昭10)。昭和12年上京して新協劇団研究生となり、翌年久保栄作、演出「火山灰地」に出演。再び札幌に帰って劇団第一歩を再建。戦中は日本移動演劇連盟北海道支部の仕事をにつづけた。戦後は自由劇場(札幌)を経て、25年札幌芸術座を結成。30年札幌演劇協会会長、34年札幌市民劇場運営委員長となり、俳優、演出家および公演企画者として活躍した。著書に「五条彰・演劇ノート」(昭47)がある。(佐々木逸郎)

越沢和子 註 昭5・3・1(一九〇〇)「俳句」岩見沢市生まれ。中学教師。俳句は昭和26年「水原帯」に入会、細谷源二に師事。31年水原帯新人賞。32年句集「ちぎれ雲」出版。41年水原帯賞受賞。43年「水原帯」に連載の細谷源二研究をまとめ「炎の海」を出版。47年第一回細谷源二賞を受賞。42年「水原帯」を退会し「粒」同人に復活する。「海程」同人。現代俳句協会員。(山田緑光)

児玉花外 註 明7・7・7(昭18・9・20) (1874-1943)「詩」京都生まれ。本名伝八。同志社予備校、仙台東華学校、札幌農学校(北大)子科、東京専門学校(早大)を各中退、バイロンに傾倒して詩作をはじめ。「早稲田文学」「東京独立雑誌」に寄稿、明治36年に「社会主義詩集」を出したが安寧秩序を害するとして発売禁止となる。花外は徹底した社会主義者ではなく、社会主義を訴えた先駆的な新体詩人である。詩集「ゆく雲」(明39)、「天風魔帆」(明40)、訳詩「バイロン詩集」(明40)、随筆集「紅噴隨筆」(明45)その他の著がある。大正12年9月1日関東大震災で焼け出され、父親の位牌と行李ひとつを持って北海道に渡っている。北海タイムスに詩「石狩川の鮭」(大12・11・4)を寄稿、その足で青森県蕨温泉に寄寓、大町桂月と一冬をすごす。東京都養老院で孤独の生涯を閉じた。詩集「旗と林檎の国」が昭和45年津軽書房より出版された。(小松瑛子)

小柄 皎 註 明41・1・27(一九〇〇)「詩」空知管内栗山町生まれ。本名作雄。大正10年ホトトギス派の渡辺手寒主宰の俳誌「蟻塔」(栗山町)に入り丙子の名で寄稿していた。14年友人寺敏郎と文芸誌「空」を四号まで発行。昭和5年「黒潮時代」「新世紀」をそれぞれ一回発行。「空」は道内詩人に広く親しま

小助川浜雄 註 明38・10・21(昭10・3・4) (1905-1935)「短歌」釧路管内白糠町生まれ。村役場吏員を退職して療養に努めたが三〇歳で夭折。大正10年頃から歌作を始め、昭和5年に「新掣」に入社、12年「潮音」に入社、異才振りを発揮した。アイヌの歌謡研究をはじめとして、考古学、郷土史の研究にも当たった。遺歌集「海彦」(昭11)、遺歌集再刊(昭54)。△星冷えてうるむ夜更けの潮の香のくろくろとして渚の流寄木(椎名義光)

賞、59年に網走市文化賞を受賞した。(棚川音一)

小柄 皎 註 明41・1・27(一九〇〇)「詩」空知管内栗山町生まれ。本名作雄。大正10年ホトトギス派の渡辺手寒主宰の俳誌「蟻塔」(栗山町)に入り丙子の名で寄稿していた。14年友人寺敏郎と文芸誌「空」を四号まで発行。昭和5年「黒潮時代」「新世紀」をそれぞれ一回発行。「空」は道内詩人に広く親しま

小嶋久三 註 明38・6・17(一九〇三)「短歌」函館市生まれ。根室商業卒。その頃から作歌したが無所属。大正13年に網走管内留辺蘂小学校の教員となり、昭和41年に網走市立卯原内小学校長を勇退。その後、保護司、少年補導員、網走刑務所受刑者の短歌指導、網走歌人会の会長などを務める。55年に法務大臣表彰。56年に網走市文化連盟芸術

児玉旭生 註 明34・6・4(昭60・2・4) (1901-1985)「俳句」渡島管内八雲町生まれ。本名清。大正9年八雲三頭会に入り句作。昭和4年「雲」創

刊発行。戦後「ふもと」に拠るが35年以來一党一派に偏せず活動し、56年八雲文化活動功労者賞受賞。(鳥 恒人)

後藤郁子 いくち 明36(1903)〔詩〕栃木県生まれ。本名は、内野郁子。詩誌「耕人」「亜細亜詩脈」「鉄」「宣言」「女人芸術」「女詩人」同人。「プロレタリア作家同盟」「ナツプ」に参加。詩人新井徹(内野健児)と結婚、二人で「詩精神」を創刊。札幌在住時に北大詩話会の「さとぼろ」に詩を発表、上京後詩集「午前零時」(昭2、森林社)、「真昼の花」(昭5、宣言社)、「貝殻墓地」(昭40、思潮社)。(小松瑛子)

後藤軒太郎 けんたろう 大8・2・8(1919)〔俳句〕山形県生まれ。本名憲太郎。昭和15年京都薬専卒。はじめ旭川市合同酒精に勤務したが、昭和28年退社して薬局を開業した。俳句は20年藤田旭山の手ほどきで始め、以後塩野谷秋風の「霧華」、高橋貞俊の「水輪」で精進を重ねたが、当時山口誓子、中村草田男の作風に傾倒、特に草田男には生涯の方向を決定づける程の強い影響を受けている。「水輪」休刊(昭26)後一時貞俊、園田夢蒼花と行を共にして細谷源二の「水原帯」に加盟したが、44年貞俊、夢蒼花、木村敏男らと純同人誌「広軌」を創刊してからはこれに全力を注ぎ、さら

に貞俊が52年に創刊した「海流」にも力を貸している。49年貞俊の序、夢蒼花の跋を得、広軌発行所から句集「寒気団」を上梓した。八寒気団どっと妻の座ひと握り。この句集は「北海道文学全集」にも収載された。現代俳句協会員。(園田夢蒼花)

後藤省平 しやうへい 昭6(1931)〔詩〕札幌市生まれ。本名徹也。新制中学卒業後、富貴堂書店に勤務。昭和23年頃から小柳透に師事して詩作を始め、24年に「木星」同人となる。第一詩集「俺達家族」(昭26・10、木星社)、第二詩集「母系」(昭27・2、木星社)を発行後、上京。書店、出版社、石材店を転々としながら詩作を続け、「雑木林」連作に取り組んでいる。(坂井一郎)

後藤寿雄 すけお 大9・10・25(1920)〔短歌〕札幌市生まれ。札幌西高定時制卒。昭和11年札幌局文書課に就職し、51年釧路局調度課長で定年退職した。その後札幌トヨタ自動車販売店協会勤務。昭和18年「新墾」入社、村田豊雄のもとで編集委員、後選者となったが退任して現在幹部同人。19年「潮音」入社、同人。元国鉄歌人会員。(鍋田隆明)

後藤美枝子 みえこ 大8・1・1(1919)〔短歌〕帯広市生まれ。昭和27年

頃よりNHK帯広ラジオ歌壇で活躍。選者であった野原水嶺にすめられ、30年「辛夷」「潮音」入社。35年第二回辛夷賞を受賞。54年発刊の第一歌集「絹の糸」は、主婦として母としての日常をすくいあげるようにうたい込んだ一冊である。土幌町在住。地元「むらさき短歌会」の主軸の一人として、また「辛夷」運営委員として活躍している。(大塚陽子)

後藤杜三 つとむ 大7・1・25(1908)〔小説、評伝〕札幌市生まれ。岩手医学専門学校卒。戦中の「不來方」「日聖紀」同人を経て昭和24年石塚喜久三らと「北海道文学者会」を興し「散文派」に拠る。同年鎌倉に移ってからは「南北」(南北社発行のものとは同名異誌、石塚友二、清水基吉らがいた)、「新誌」を主宰(発行名義人)した。「わが久保田万太郎」(昭49、文芸春秋社)で第五回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。ほかに岩手医専(現岩手医科大学)の創始者を追尋した「三田俊次郎先生伝」(昭30、岩手済生医学会)などがある。(佐藤庫之介)

後藤電二 でんじ 昭18・6・24(1943)〔児童文学〕美唄市生まれ。早太文学部で「少年文学会」に入会、児童文学を書き始める。昭和41年「天使で大

地はいっぱいだ」で講談社児童文学新人賞佳作受賞。翌年講談社より出版、以後創作活動に入る。「おれたちのきょう」「風のまつり」「ぼくらははだしで」等の中学生群像や、「天使で大地はいっぱいだ」の続編「大地の冬のかなかたち」(野間児童文芸賞推奨受賞)を書く。「ポタ山は燃えている」「とべ」

「ぼくらの町だ」「たんぼぼ飛ぶころ」など現代社会の矛盾を背負いながらもそれに押しつぶされずに懸命に生きる大人と子ども姿を描いている。51年一時帰郷「故郷」で高度経済成長の中で離農を余儀なくされていった野菜農家を描く。52年「白赤だすき小○の旗風」、58年「少年たち」で日本児童文学者協会賞受賞。日本児童文学者協会員。全国児童文学同人誌連絡会「季節風」同人。(柴村紀代)

後藤礼子 れいこ 昭4・1(1929)〔短歌〕十勝管内浦幌町生まれ。小学校教員を経て結婚。昭和29年「新墾」入社、野原水嶺に師事。31年水嶺に従い新墾退社後「辛夷」入会。続いて43年「潮音」に入社する。44年第五回中城ふみ子賞受賞、48年第一五回辛夷賞を受賞。54年第一歌集「一郷の土」を発刊した。現在「辛夷」編集委員、選者、運営委員のほか「潭」同人、「潮音」同人として活躍している。(大塚陽子)

小納迷入 なまひら 明25・3(昭8・11)〔俳句〕石川県生まれ。本名広吉。小樽高等商業学校卒業後、同校実践室助手として就職。大正7年在学中の松原地蔵尊と緑丘吟社の創設に奔走。学校側から回松ゆたかと石橋、寺田教授、学生側では竹田磊石、比良暮雪等合計三〇名位であったが、大正8年高浜年尾の入学により、選評を村上鬼城、原月舟、原石鼎に仰ぎ、一方市内の俳人とも交流を深め、北海道俳壇に新風をもたらした。9年札幌商業学校教頭として赴任、10年1月俳誌「北」を発行、題字は高浜虚子、雑詠選飯田蛇笏で道内俳人との交流を趣旨とし誌代無料とした。松原地蔵尊、高浜年尾、比良暮雪のほか、子駿、迷人、昼虹、雨圃子、著村、手寒、月二郎等が出句した。11年広島県芦品実業学校へ転出したため「北」は七号から比良暮雪が引き継いだが一三号で終わった。(菊地滴翠)

小西英市 えいち 昭2(昭24・5・1)〔俳句〕生地不詳。本名栄市。北海道大学予科を病氣中退。昭和21年栗木重光の踏青会で作句。「水輪」「壺」「土曜」に属し作品、評論両面で活躍し前途を嘱望されたが結核の症状増悪、札幌市で惜しまれつつ夭折した。(園田夢蒼花)

小西楊々子 やうやう 明43・8・25(昭57・4・2)〔1910(1932)〕〔俳句〕空知管内北村生まれ。本名忠次郎。長兄米作(歌人)の影響で文芸にかかわる。昭和16年北方の自然と郷土色に即した作風にひかれ「曉雲」に投句、戦後「緋衣」に所属したが26年以降休筆。52年「道標」(古沢太穂主宰)同人として句作再開。53年「北群」創刊同人。56年「広軌」同人。句集「裸り葉」(56年、北群叢書)。現代俳句協会員。(辻脇素一)

小西米作 よしか 明39・2・18(昭55・3・16)〔1906(1980)〕〔短歌〕空知管内北村生まれ。大正8年一二歳の時、短歌誌「ひこばえ」発行。9年岩見沢詩話会結成。10年若山牧水主宰「創作」入社。15年八丈島で療養のかたわら作歌。昭和3年詩歌誌「白楊」発行。4年歌誌「幌馬車」編集同人。9年岩見沢に転入。印刷業自営。11年「橄欖」主宰吉植庄亮、山下秀之助歓迎歌会開催。13年改造社刊「新万葉集」第三巻に四首採録。16年岩見沢町文化委員会結成。21年総合文芸誌「草原」編集委員。30年「岩見沢短歌会」参加。34年岩見沢文化連盟結成。42年「原始林」入社。歌文集「亡き妻の記」刊行。43年市教育振興会文化功労賞受賞。芸術総合誌「芸林」(1)(2)刊行。46年北海道歌壇史編集委員。47年歌

集「白揚」出版。54年歌集「狭き視野」出版。55年市政功労賞。「創作」編集企画委員、北海道歌人会委員、岩見沢文化連盟副会長なども務めた。

(吉田福太郎)

小林一之助 いちのすけ 大6・9・30(1931)「小説」釧路市生まれ。戦後釧路地方労働運動の指導的立場にたった。「釧路文学」(昭26創刊)の実質的編集者。「小さな芽」「車輪の下」のほか別海町矢白別トライベツ自衛隊演習地、中標津町武佐中学校などのルポ、調査報告がある。「かげろう自伝」(昭30)、「釧路文学回想記」(昭49、単行出版)は自伝的要素の強い小説集。「釧路現代文学選集」第一〇巻(昭47)に収録。

(鳥居省三)

小林閑東棉 かんとうわた 明37・4・10、昭55・2・15(1904-1980)「俳句」札幌市生まれ。本名正孝。通信講習所卒。道内郵便局に勤務。大正13年頃より独学で作句。戦前より「ホトトギス」に投句。戦後、富安風生門に入り「若葉」「はまなす」「青女」等に投句。昭和33年北見在住時には、北見周辺俳句懇話会を結成、その代表世話人となり活躍。「若葉」「青女」同人、俳人協会員。

(新明紫明)

小林金三 きんぞう 大12・7・4(1916)

同人誌「クララテ」創刊、悲境にあった田口タキとの愛を深め、最底辺に生きる人間への共感から、現実批判をして社会科学の認識を強めていった。初期の「師走」「人を殺す犬」「滝子其他」などは改作を繰り返した結実。大正15年葉山嘉樹「淫売婦」に衝撃を受け、ゴリキ一の影響もあってプロレタリア作家たる自覚を強め、労働運動にも関係し始める(日記、書簡にこの間の経緯がうかがえる)。昭和3年三・一五事件で検挙され拷問を受けた知友の体験に基づき、「一九二八年三月十五日」を「戦旗」に発表、一挙に注目を集め続く「蟹工船」(昭4)によって国際的にも革命作家として知られた。さらに「防雪林」(昭3)を大きく改稿した「不在地主」(昭4)は労働提携の闘争を挑んだ磯野小作争議を描き、プロレタリア文学最尖鋭の作家となったが、この作が直接の理由で拓銀を解雇され、意を決して上京(昭5)、運動中枢部で活躍。「工場細胞」(昭5)、「オルグ」「独房」「安子」「転形期の人々」(昭6)など、いずれも当面するプロレタリア文学の理論的問題への実践としての重要性を帯びている。「右翼的偏向の諸問題」(昭7)ほかの評論も重要。入党(昭6・10)、非合法生活(昭7・3)の苛酷な状況下で「党生活者」

(33)「評論」三笠市生まれ。昭和16年満州建国大学に入学、学徒出陣中の20年の敗戦で大学消滅。同年北海道新聞社に入社し、43年から二年間コラム「卓上四季」執筆。論説主幹などを勤め、58年監査役を最後に退職。「北方文芸」に「来時の道を忘却せず」、「紅」に「中国の旅・そしてぼくと中国」などを発表。単行本に「ベトナム日記」(昭40、理論社)と、文を含む画集「小樽・街と家並み」(昭59、小林静江発行)がある。

(木原直彦)

小林小夜子 こよこ 昭13・6・8(1938)「詩」石狩管内新篠津村生まれ。道立江別高等学校卒。池田町で陶芸指導に専念。「裸族」「核」「地球」同人。昭和50年11月「黒ゆり」創刊。「シニア」主宰。「裸族詩選」「北海道女流詩人集」に参加。「小林小夜子詩集」(昭47、裸族双書)刊行。女性の感覚、心理、生理の様相を分析する主知主義的リアリズムから、社会の病理病象を告発する詩風である。

(千葉宣一)

小林孝虎 たかた 大12・5・3(1916)「短歌」深川市生まれ。北海道第三師範学校本科卒。室蘭、旭川、富良野の教諭を経て旭川市立常盤中学校長で昭和59年退職。昭和22年「あさひね」に参加して27年より編集を担当する。29年宮

「地区の人々」を書いたがスパイに売られて街頭で捕われ即日虐殺された。日本文学史に類例のないその全文学は数種の版を経て「小林多喜二全集」全七巻(昭58、新日本出版社)に集成されている。「蟹工船」(昭4) 中編小説。昭和4年5、6月「戦旗」(6月号)は発禁。天皇への献上品の缶詰をめぐる部分が不敬罪となった。戦旗社刊(昭4・9)。函館からカムチャツカに中航したポロ船博光丸は、監督浅川の虐待で倒れる者が続出、ストライキで東の間勝利を得たが、指導者は捕われ駆逐艦に移される。目覚める未組織労働者の集団描写が白眉。

(小笠原克)

小林とし子 としこ 大15・6・17(1926)「俳句」留萌管内増毛町生まれ。本名トシ子。昭和16年栗木踏書に師事して作句。21年から27年まで「水輪」「土曜」の主軸同人として活躍。十余年の空白を距て49年寺田京子らと「零」を興すが51年廃刊。

(園田夢蒼花)

小林俊子 としこ 昭8・11・26(1933)「詩」東京生まれ。東京女子大学文学部日本文科卒。高田敏子主宰「野火」同人。詩集「水きりかご」(昭53、「野火の会」)。幸せな日常をテーマにした詩が多く、静かな詩の世界の中にも教養を感じさせる作品が多い。

終二の「コスモス」に入会、第一同人。31年1月旭川で「北方短歌」を創刊し主宰となる。酒井広治亡きあとの北海道新聞歌壇選者を経て、40年より朝日新聞北海道版歌壇選者を担当。34年女満別に第一歌碑「美しくほろびし民をかなしむに声あげて啼く湖の青さぎ」を建立し、53年神居古潭に第二歌碑「神居古潭幻想賦」短歌七首を建立する。38年旭川市文化奨励賞、58年旭川市文化賞を受賞。歌集は41年「新選十一人集」、43年「ピルの上の塔」。50年著書「酒井広治の世界」を旭川叢書第九巻として発行する。該博な知識と旺盛な行動力を持ち「北方短歌」を斬新な指導方針により、道内一五の支部を育成して道内屈指の歌誌に伸展させる。また学校の校歌作詞も多い。〈東綉嶺・西綉嶺の峰々にあきはかがやけ驪山晚照〉(江口源四郎)
小林多喜二 たきじ 明36・10・13(昭8・2・20(1903-1933))「小説」秋田県生まれ。没落貧農の家に生まれ、四歳で伯父を頼って小樽市へ移住。パン工場で働くことを条件に伯父の家から住み込みで通学(現小樽商高)、さらに小樽高商(現小樽商大)を卒業(大13)、拓殖銀行小樽支店に就職。この間、「文章世界」「新興文学」などに投稿、志賀直哉を鏡として研鑽を続けた。拓銀入行後、

小林秀雄 ひでお 明35・4・11(昭58・3・1(1902-1983))「評論」東京生まれ。近代批評の確立者。「小林秀雄全集」(13巻、別巻2、新潮社)がある。昭和22年秋、川端康成らと氷川丸で来道、北海道出版文化祭のパネル・ディスカッションに出席(記録は昭22・11、「文芸復興」創刊号)した。

(小笠原克)

小林みさ みさ 昭11・1・14(1936)「俳句」静岡県生まれ。滝川東高校卒。道立衛生研究所勤務。昭和44年から職場サークル「白の会」で寺田京子に師事。「これ」同人。57年にれ風響賞受賞。58年第一句集「初燕」刊行。

(木村敏男)

小林 実 みのる 大11・4・28(1931)「詩」宗谷管内中頓別町生まれ。昭和19年合同詩集「青い芽」に参加以來、戦後「青芽」「詩帖」「ゆりかご」「垂寒帯」同人。28年「時間」同人。29年から職業事情により休筆。53年8月「青芽」同人復帰、会員作品評を担当。「ジャーナル年刊現代詩集」所属。詩集に「晴れた日にも」(昭24・12、青い芽文芸社)がある。58年小田原市に転居。

(富田正一)

小樽山奮男 たけし 昭2・2・21(1927)

(1937)「児童文学」福島県生まれ。鳥越信、古田足日、山中恒らと早大童話会「小さい仲間」創立に参加。ソビエト児童文学の翻訳を手がける。昭和29年マカレンコ著「児童文学と児童読物」共訳。48年同じく「子どもの教育・子ども」の文学」共訳。他にニコライ・ノソフ著「ピストル」「ミシシカの電話」などの翻訳がある。日本児童文学者協会員、同人誌「トカプチ」代表。(柴村紀代) 小樽山博 昭12・4・15(63)

苦小牧工業高卒。北海道新聞社工務局に入社し昭和36年東京支社へ転勤、「文芸首都」に参加。44年本社へ戻り「札幌文学」同人となる。「低いままの天井」(昭49・4、「札幌文学」)が「文学界」に転載され、「北方文芸」に次々と創作を発表。50年同社図書編集部へ配属。「出刃」(昭51・5、「北方文芸」)で第一回北方文芸賞を受賞し、第七五回芥川賞候補となる。第一創作集「出刃」(昭51、構想社)が刊行されてジャーナリズムに注目され、「血痕」(昭52・4、「すばる」)、「黯い足音」(昭53・4、「別冊文芸春秋」)、「イタチ捕り」(昭53・2、「海」、第79回直木賞候補)などを次々と発表。創作のほかルポルタージュにも取りくみ、青函トンネル工事に取材した「津軽

海峡夏景色」(昭53・8、「潮」)、「離婚記」(昭55、作品社)などを発表。創作集「黯い足音」(昭53、集英社)、「生きものたち」(昭55、同)、「野人の巢」(昭55、潮出版社)、「地吹雪」(昭57、河出書房新社)、「荒海」(同、福武書店)、「光る女」(昭58、集英社)などを次々に刊行。「光る女」で北海道新聞文学賞、泉鏡花文学賞を受賞。その後「天女たち」(昭59、河出書房新社)、「地の音」(昭60、集英社)、エッセー集「乱酔記」(昭59、潮出版社)などを刊行。59年、滝上町中央公民館内に「小樽山博文学コーナー」が作られた。

「出刃」を短編小説。昭和51年5月「北方文芸」掲載。第一回北方文芸賞受賞。北海道の寒村を舞台に、うちつづく冷害に追いつめられる農民一家を描いた。働きにでた妻は他の男と同棲し、離農した夫は子供をつれて妻をさがしたり、父に援助を求めながら深夜にひとり出刃を磨ぐ。(神谷忠孝) 小松瑛子 昭4・5・26(63) 「詩」東京生まれ。天使女子短大卒。戦後詩作をはじめ「野性」(札幌)に寄稿。のち枯木虎夫の「詩風土」(札幌)同人を経て「日本未来派」同人。現在「核」(札幌)、「情緒」(旭川)、「地

球」(浦和)同人。都会人の知的抒情を基底とした作風で、昭和43年第一詩集「朱の棺」(北海道詩人賞、現北海道詩人協会賞受賞)、57年第二詩集「わたし」がブーツをはく理由について」(北海道新聞文学賞佳作受賞)を刊行。主な著作に「黒い天鵝絨の天使」左川ちか小伝」(昭47・11、「北方文芸」)、さつぼろ文庫五「札幌の詩」(昭53)、「私の植物誌」(小樽詩話会、継統中)ほか。北海道新聞日曜文芸、詩の選者。随筆家としても知られ、北海道の先覚女流詩人の事蹟を調査、研究している。日本現代詩人会員。北海道詩人協会常任理事。(佐々木逸郎)

小松 茂 大12・6・27(63) 「小説」苦小牧市生まれ。函館中学より横浜専門学校に進み学徒動員。復員後高校教師。「札幌文学」編集責任者。主な作品は「鳥籠」「松」「林道」「春近くして雪」(札幌文学)、「岬のかなた」「雨音」「夏草」「スパコイノイノケ」「暮色の人」(北方文芸)、「金魚鉢のある部屋」(三田文学)、「賤墨」(新潮)など。 小松伸六 大3・9・28(63) 「独文学研究、評論」釧路市生まれ。筆名は内海伸平。山田昭夫と従兄弟。東京大学文学部美学科、のち転科し

て独文科大学院中退。戦争末期に応召して中国に渡ったが、肺結核のため帰国。旧制四高教授、金沢大講師を経て立教大教授。金沢時代は「北国文化」により深田久弥、森山啓、佐伯彰一らと交わる。上京後は「赤門文学」の編集者として福田宏年、平田次三郎、駒田信二らに意欲的仕事をさせた。文芸評論家としての新人発掘の炯眼には定評があり、原田康子の「挽歌」にいち早く注目し、また新保千代子「室生犀星―聞き書き抄」(日本エッセイスト・クラブ賞)をひき出した。じみな「文学界」同人雑誌評で新人発掘に息の長い情熱を傾けた。ゲーテに関する論文のほか、クライスト、トーマス・マンについての訳述、著書に「美を見し人は―自殺者の系譜」(昭56・2、講談社)がある。(神谷忠孝)

小松節子 昭6・3・30(63) 「俳句」日高管内平取町生まれ。旧制浦河高等女学校卒。小学校教員を経て主婦。昭和20年頃より句作、のち寺田京子に師事。「寒雷」所属。「これ」「獅林」同人。48年獅林賞、54年第一回準にれ賞等受賞。(木村敏男)

小松宋輔 大14・2・4(63) 「編集」札幌市生まれ。本名慶治。昭和20年12月に月刊俳誌「青炎」を発刊。翌年4月に実兄富岡木之介にバトン

を渡し後に鷲巢繁男らと同人誌「北海道文学」に拠り、自らも小説を書く。また農業雑誌「農家の友」「デーリイマン」などの編集を手助け、現在随筆誌「紅」(137号)と、朱鳥書屋をもっていて、高度の造本術を駆使している。俳句、小説は休筆中。(富岡木之介)

小松宏光 大12・3・13(63) 「小説、編集」札幌市生まれ。興亜専門学校(現亜細亜大)南洋科卒。戦後札幌で発刊された総合誌「談論」を編集し柴田鍊三郎らの作品や、坂口安吾と尾崎士郎の対談などを掲載。同人誌「裸人群」「文学1963」を主宰した。東日本観光開発社長。(朝倉賢)

小南武朗 昭2・11・28(63) 「小説」函館市生まれ。北海道大学国文科卒。北海道放送でラジオ、テレビの制作を担当し、退職後は北大、藤女子大非常勤講師を勤める。同人誌「弦」に所属し、「メシエの記憶」(昭43)、「羽化」(昭46)、「月のかがやき」(昭50)などを発表。「海の音」(昭51・4、「北方文芸」)は第一〇回北海道新聞文学賞の最終審査に残った。創作集「ぬばたま」(昭57・8、近代文芸社)がある。(神谷忠孝)

五味保義 明34・8・昭57・5(1901~1982) 「短歌」長野県生まれ。

京都大学国文科卒。海軍機関学校教官その他を歴任。大正9年島木赤彦に師事。12年「アララギ」入会。終戦直後より41年まで同誌の編集、刊行を担当。途中から選者もつとめた。北海道には昭和9年8月土屋文明と共に来て各地を回り歌会に出席。歌集に清澄で堅実な歌風の「清峽」「島山」「此岸集」「つ石」「小さき岬」「病間」「冬の羊歯」等。研究書に「短歌の表現」「子規といふ人」等。(小国孝徳)

小村たか子 昭8・9・21(63) 「小説」大阪生まれ。本名坂井悦子。北海道学芸大学(現教育大)札幌分校卒。「カニの会」所属。主要作品に「朝の馬櫓」(昭50・3、「北方文芸」)、「父の離村」(北海道新鋭小説集'83)収がある。(小笠原克)

米谷茂和 昭2・12・17(昭58・11・25(1927~1983) 「劇作」小倉市生まれ。早稲田大学卒。小樽千秋、釧路江南高校勤務。高文連草創期の中心人物。小樽、釧路の合同公演に尽力。昭和57年交通事故に遭い、翌年死去。代表作「待帆亭」。(菅村敏次郎)

小森利夫 明41・6・1(昭60) 「短歌」後志管内ニセコ町生まれ。昭和57年江差信用金庫理事長を退職。昭和4年「アララギ」入会。竹尾忠吉に師

事。一時小森登蔵名を用いた。7年齋藤茂吉来道の歌会、9年土屋文明来道の支笏湖アララギ歌会、22年土屋文明再来道の全道アララギ歌会に参加し交流を深める。現在「アララギ」其「欄会員。夫人小森静顔も昭和7年より「アララギ」の歌人。昭和21年「羊蹄」、31年「北海道アララギ」創刊に参加。57年樋口賢治の病氣、死去により「北海道アララギ」の選歌を担当。47年歌集「亜麻の島」を刊行。写真の中に抒情を貫き、北海道の自然を自己に投影させた作品群は濃厚な作風を確立させている。へなほ青く澄む夕空にきざらぎの震ふ梢を見て帰るなり」

(笹原登喜雄)

小森 汎 大4・7・5 (1915) 「短歌」後志管内蘭越町生まれ。昭和5年北海道水産会に勤務。以来四〇年間水産事務に従事し、釧路十勝海区漁業調整委員会を53年に退職。一六歳頃から万葉集に親しみ、昭和8年「アララギ」に入会。竹尾忠吉を経て樋口賢治に師事。21年「羊蹄」を命名し、編集兼発行者となる。36年釧路アララギ会を興し会報を発刊。的確な写真と深い抒情性を持った作品で知られている。

(笹原登喜雄)

小柳 透 大2・1・1 (1916) 「詩」札幌市生まれ。1913(1913)「詩」札幌市生まれ。夫らと刊行。21年8月近藤東選集の「鉄道詩集」に「吹雪の朝」が収録される。22年「青芽」の前身である「七ツ星」に参加、以来「鈴石」「ピヤシリ」「亜寒帯」「実験室」「ボア」「シグナル」同人。名寄地方詩人育成に尽力。小山玲二、小谷明、折笠次郎の筆名がある。遺稿詩集に「昆虫擬図」(昭46・10、青い芽文芸社)がある。自らの手で命を断つ。

(富田正一)

今 官一 明42・12・8 (1909) 「小説」弘前市生まれ。早稲田大学露文科を中退し、太宰治らと同人誌「青い花」を創刊。作品集「壁の花」(昭31・3、芸術社)で直木賞を受賞したが、その中の「暗い皆」は襟裳岬一円を舞台としてアイヌ民族の苦悩を描く。「巨大なる樹々の落葉」(昭51・9、津軽書房)もこの系列の長編で、昭和13年から15年にかけて作者の青春を傾けて書き綴ったアイヌ民族への鎮魂歌。戦前の小説集「海鷗の章」(昭15・9、竹村書房)にも取材作がある。本道酪農の父といわれるエドウィン・ダンの生涯を追った長編小説「牛飼いの座」(昭36・11、講談社)は代表作の一つ。詩情豊かな作風を持つ。その生涯一度も来道してこなく。

(木原直彦)

今田 敬一 明29・11・8 (1904) 「小説」秋田市生まれ。北海道帝国大学農学部林学科卒。同僚部助手、助教授、教授を経て名誉教授に。北大在学中に美術団体黒百合会で活躍。大正14年北海道美術協会(道展)の創立に参加、以後同展会員として制作活動を続け、のちに同展会長をつとめた。学術の専門分野のほか北海道の美術事情に精通し、著書に「北海道美術史」(道立美術館)がある。(工藤欣弥)

近藤 経一 明30・4・12 (1897) 「小説」東京生まれ。武者小路実篤の影響を受け、二高、東大在学中に「白樺」などに作品発表。昭和に入ってから映画人として活躍。短編「札幌にて」(大8)が「北海道文学全集」第三巻に再録された。

(小笠原克)

今 東光 明31・3・26 (1898) 「小説」横濱市生まれ。函館、小樽の小学校に学ぶ。「瘦せた花嫁」(大14・1、婦人公論)で認められたが、昭和5年に出家し文壇から遠ざかった。31年「お吟さま」で直木賞受賞。中尊寺貫主、参議院議員。

(神谷忠孝)

近藤 紫村 明26・10・9 (1893) 「短歌」愛知県生まれ。本名清松。医学校中退。大正5年来道し道警勤務二十余年。退職後釣具

まれ。本名小梁川重彦。昭和10年小樽高商卒。旧制高等学校校商業専科教員、旧制商業学校教諭として小樽、札幌、函館と転じたが、終戦後は札幌に定住し、札幌商工会議所を経て昭和22年に札幌市役所へ入り、教育、文化関係の部課を歴任。45年札幌市立図書館長を最後に定年退職。以後、道市町村の委嘱による史跡調査、郷土史執筆、文化事業などに幅広く従事。芸術開眼は札幌一中時代の絵画であるが、小樽高商卒業後、詩作に転じた。17年9月小樽高商出身者による同人誌「木星」の創刊同人として参画。戦後は「日本未来派」「眼」などにも主要同人として加わったが、30年代後半からは「木星」一本に絞る。著書に詩集「旅の手帖」(昭21・6、木星社)、遺稿詩集「非在の神」(昭58・9、坂井一郎編・自家版)がある。ほかに編者または共著書として名を連ねた文学書が多数ある。詩は純粹思考の世界を繰り広げる賢者の詩で、死の直前の「非在の神」二編は、ひときわ高度の結晶体である。

(坂井一郎)

小山 清 明44・10・4 (1911) 「小説」東京生まれ。明治学院中等部卒。中学時代に武者小路実篤に傾倒して文学に開眼。二〇歳の年、母と死別、ひとり東京に留どま

り新聞配達などに従事する間、昭和15年に太宰治を識って師事、戦争末期は青森に疎開した太宰宅の留守番をした。22年1月夕張炭鉱坑夫となり、23年9月まで働いた(林義実「空知の文学」上、みやま書房刊、が詳述)。太宰に推されて発表した「聖アンデルセン」(昭23・1)で文壇に登場後、庶民生活の哀歓を清澄な私小説世界で捉えた。失語症、妻の死と打撃が重なり、悲惨な晩年を閲した。一巻本「小山清全集」(昭44、筑摩書房)がある。夕張での生活は「夕張の宿」「雪の宿」「道連れ」「よきサマリヤ人」などの小説に描き出されており、盛況を呈していた炭鉱の片隅に漂着した人間を包む庶民の善意と愛情が、さりげなく、しかし深々と伝わってくる。

(小笠原克)

小山 政明 明44・1・19 (1910) 「詩」名寄市生まれ。昭和9年頃口語歌の余韻を詩に転じたのが詩作の始め。同人誌には同年11月石川久司主宰「シリウス」が初参加。12年久野英夫らと名寄詩人連盟を結成。「高台」編集同人。そのかたわら「鉄道界」「鉄道青年」に投稿。「蠟人形」の愛読者。18年秋、慰問詩集「戦想」を編集。翌19年官憲の検閲を幾度も受けながら慰問詩集「青い芽」を石原辰

店「三州屋」を自営。少年の頃、大島為足、竹中猗堂につき作歌する。大正時代口語歌に転向。並木凡平、秋葉安一、炭光任、渡辺要、藤田晋一らと親交を結び本道口語歌壇の元老。名利に恬淡な人がらそのままに歌境は清澄温雅。美術工芸の鑑賞にも一言を持つ。

(横井みつる)

近藤 潤一 昭6・2・1 (1891) 「俳句」函館市生まれ。北海道大学大学院文学研究科博士課程修。帯広大谷短期大学助教授を経て北海道文学学部教授。中古、中世日本文学史関係の著書、論文多数。昭和21年「壺」入会。23年同人(最年少)。抒情性豊かな作品をもって、一〇代作家井上藍子らとともに異彩を放ち、評論活動も活発に行なった。24年から25年「黒姫」に自選作品を発表。「壺」休刊後、斎藤玄の個人誌「丹精」に前衛的作品を発表。48年「壺」復刊と同時に復帰編集同人。50年評論活動等により、壺中賞準賞受賞。55年「壺」主宰斎藤玄死去後、「壺」継続発行の中心核として活躍。同時に朝日新聞北海道版俳壇選者。斬新意欲的な編集企画をもって俳壇主要作家を動員して現代俳句の問題点をとらえ、また「現代俳句渉獵」「新著展望」などの批評、鑑賞を書き、「壺」の全国的水準保持の原動力となっ

ている。「雪然」(昭60・7、卯辰山文庫)は初句集。(金谷信夫)

近藤 洋 ひろし 大12・7・12(168)、「シナリオ」宮城県生まれ。本名洋七郎。県立古川中学校卒。旭川に移りNHK旭川放送劇団を経て同局ライター。農事ドラマ「相談相手の稲村さん」を執筆し単行本として刊行。のちNHK札幌放送局専属ライターとなり主として児童番組、学校放送ドラマを執筆した。共著に「北海道放送脚本集」(昭47)がある。37年日本放送作家協会北海道支部を結成し支部長。北海道文化団体協議会常務理事。(佐々木逸郎)

近藤芳美 よしみ 大2・5・5(163)、「短歌」朝鮮馬山浦生まれ。昭和7年中村憲吉を訪ね作歌の要を学んだ。9年旧広島高校在学中にアララギ入会、中村憲吉の死により上京して土屋文明に師事。13年東京工業大学卒。清水建設に勤務。48年定年後神奈川大学教授。昭和21年鹿兒島寿蔵らと「新泉」創刊。22年大野誠夫、加藤克巳らと「新歌人集団」を結成。23年歌集「早春歌」「埃吹く街」を出版。26年周辺に集まる若い歌人達と「未来」を創刊するなど戦後派歌人の旗手にふさわしい活躍を展開した。歌論集「新しき短歌の規定」ほか歌集、著書多数。30年「朝日歌壇」選者となり、44年

に逍空賞受賞、52年以来現代歌人協会理事長。29年3月、46年6月に来道、歌集「冬の銀河」「遠く夏めぐりて」に作品収載。46年北海道歌人大会に日本歌人クラブ派遣講師として講演、その要旨「短歌と生」が、47年度北海道短歌年鑑に載せられている。(田村哲三)

今野大力 たけちか 明37・2・5(昭10・6・19(1904~1935))「詩」宮城県生まれ。三歳で家族と共に渡道。旭川、名寄、上北竜村(深川市多度志町)に移り、ふたたび旭川に住む。旭川新聞に詩、小説、エッセー発表。旭川新聞記者をしていた小熊秀雄を知る。一七歳のとき大阪朝日一万号記念懸賞詩部門三位入選。一八歳、平岡敏男(現毎日新聞会長)の編集する「青い果」同人となり詩をかく。フィリップ、ゴリーキーにひかれ「文芸戦線」に小品、詩を掲げる。昭和2年上京、本郷郵便局などに勤務。黒島伝治の知遇を得る。小熊秀雄、鈴木政輝らと詩誌「四筒筒」創刊(同誌は2号で廃刊)。3年小熊秀雄上京、小熊夫妻の家に鈴木政輝とともに同居。体調をくずし一旦帰旭、一年ほど旭川に滞在。黒島と同郷の新聞記者中村計一を訪ね、知り合う。北都毎日新聞社に入社。「コラム」を担当。丸本久子と結婚。5年上京、黒島らと「労芸」脱退、直後「焼ゴ

テ事件」の渦中の人となる。「プロレタリア作家同盟」加盟、「戦旗」「婦人戦旗」「少年戦旗」の編集活動にたずさわる。7年コップ加盟団体への大弾圧により、大力も検挙され駒込署に留置、拷問の殴打のため中耳炎から入院、病院を転々、闘病生活をつづけたが胸部疾患のため死去。戦後「今野大力、今村恒夫詩集」(昭48、新日本出版)刊行。(佐藤喜一)

金野知足 ちか 明31・12・28(昭8)、「俳句」岩手県生まれ。本名真夫。大正7年狩太時代(現後志管内ニセコ町)牛島藤六を知り「時雨」発刊とともに入会。昭和42年「葦牙」同人、54年麗日集同人。44年6月留寿都村に有志により句碑建立。(峰の雪歌遠く薯植うるかな) (太田耕吐子)

今野寿起 としお 明42・7・12(昭57・5(1909~1982))「短歌」石狩管内浜益村生まれ。昭和4年から15年まで富良野、南富良野役場に勤務。後に三井炭鉱美唄鉱業所に入社し38年まで勤務。昭和10年「新壘」入社、22年「潮音」入社、共に同人。札幌市で没。(鍋山隆明)

金野声影 こゑかげ 明34・4・9(昭54・8・21(1901~1979))「俳句」岩手県生まれ。本名貴麗。昭和5年帯広時代、特発性脱疽のため左下腿切断、実兄

知足の奨めで俳句の道に入る。6年竹田凍光に直接指導を受け、同年「晝雲」に入会。7年「石楠」に入会、12年幹部となる。「葦牙」同人時代の31年から32年「北方季題」の四代目選者となる。51年句集「青芦帖」を上梓する。(太田耕吐子)

今日出海 けふいせ 明36・11・6(昭59・7・30(1903~1984))「小説」函館市生まれ。今東光は長兄。東京大学仏文学科卒。昭和12年パリ、16年、19年陸軍報道班員としてフィリピンへ。「天皇の帽子」で直木賞受賞。43年から47年まで初代文化庁長官。(神谷忠孝)

ろ

犀川野火男 のしかの 昭3・9・20(1938)、「俳句」札幌市生まれ。本名儀一。昭和42年から作句を始め「扉」を経て細谷源二に師事。「水原帯」同人となり、一時自宅に発行所を置き編集発行業務に携わる。現在は同山巔集同人として作句に専念。43年水原帯新人賞、46、48年準水原帯賞、49年水原帯賞を受賞。

52年には第六回細谷源二賞を受けた。北海道俳句協会常任委員。北海道地区現代俳句協会広報担当幹事。(川端麟太)

西条八十 さいじょう 明25・1・15(昭45・8・12(1892~1970))「詩」東京生まれ。早稲田大学英文科卒。三木露風の影響をうける。処女詩集「砂金」の典雅な象徴詩は詩壇の注目をうけた。その後「見知らぬ愛人」「美しき喪失」などの詩集を出したが、初期の華麗な幻想的イメージは次第に影をひそめ、静かに人生をふりかえる苦い回顧と深い哀愁の情に変わっていった。自ら詩誌「詩王」を創刊。ほかに童謡、歌謡、小唄、民謡の作詞をも手がけ、特に歌謡曲では「東京行進曲」「サーカスの歌」「青い山脈」「誰か故郷を想わざる」「王将」などのヒット曲の作詞をした。雑誌「家の光」取材で来道、函館市立待岬の啄木の墓碑に詣でた際の詩「眠れる君に 捧ぐべき矢車草の花もなく ひとり佇む五月寒 立待岬の波静か おもひ出の砂ただ光る」を真筆で彫った碑が、昭和34年啄木小公園に建立された。(堀井利雄)

斎藤一郎 さいとう 昭3・3・15(昭68)、「短歌」名寄市生まれ。昭和28年より作歌をはじめ。30年「宗谷路」入会。36年「新壘」入社。38年「凍土」に参加、47年「凍土」を離脱した。矢鳥京

子、小島嘉雄らと「彩北」創刊に参加、運営委員となる。49年北海道歌人会委員。53年6月大陸からひとり引き揚げて来た少年の日の孤愁が原点をなしている。第一歌集「あふれざる海」を刊行する。同年11月サハリン文化視察団に加わり、その記録として第二歌集「炎花」を刊行。50年名寄短歌会長、58年名寄市文化奨励賞(短歌部門)を受賞。名寄短歌会、また美深短歌会で後進の指導にあたる。現在「彩北」運営委員、「新壘」同人、北海道歌人会委員、名寄市社会教育委員長などを務める。(燃えながら夏が逝く日よ少年の口笛は北へ流れてやまず) (矢鳥京子)

斎藤不実枝 さいとう 大10・1・21(1921)、「俳句」十勝管内鹿追町生まれ。本名喜美枝。旧制帯広大谷高等女学校卒。昭和26年早川観谷に師事して俳誌「とから」に入会し、俳句の手ほどきを受ける。29年土岐鍊太郎を識り「アカシヤ俳句会」に転じた。35年同百花集同人。53年同木理集(無鑑査)同人に推される。アカシヤ俳句会運営委員として業務に専念、俳誌の発展に尽力。俳人協会員。(岡澤康司)

斎藤邦男 さいて 大10・2・21(昭55)、「詩」札幌市生まれ。旧制光星商業卒。札幌市立図書館長を務めた。昭和

25年2月後藤省平、麓聖らと「ケイオス」創刊、発行人となる。29年「眼」に参加。六号より編集委員。30年「眼年刊詩集」に「擬態」を発表。和田徹三、小柳透らと詩的交流を持ち「木星」「湾」で活躍。41年8月昭森社より詩集「九つ」の独案」を刊行。戦中派を代表する心理主義的リアリズムの旗手である。詩的モラルは剛直かつ禁欲的で、永遠の詩的生命とは、詩人の社会的使命とは何か、を常に問い続け、侮蔑の時代の詩人の良心として、誠実な自己告発を詩的実存の中心に疼かせている。(千葉宣一)

齋藤 圭 大15・4・24(1636)〔俳句〕渡島管内恵山町生まれ。本名勝美。警察官定年退職後自由業。昭和48年「壺」入会、50年同人、53年編集同人。54年壺中賞受賞。56年同素玄集同人(無鑑査)。「壺」の編集、発行業務に携わる。俳人協会会員。(金谷信夫)

齋藤 生没年不詳。(小説)明治33年1月号の「新小説」臨時増刊号に尾崎紅葉、幸田露伴、坪内逍遙、森鷗外の選で「松前追分」が一等当選で載った。「根室港の或る漁業家から、標津の漁舎に居る、数十名の漁夫の取締まりを命ぜられた男」が語り手で、アイヌへの交情が素直ににじむ小品。(木原直彦)

会員、北海道俳句協会委員、釧路文学協役員、釧路市福祉部主管俳句教室講師、市民文芸「釧路春秋」選者。現代郷土俳句を提唱、俳句の「守・破・離」道の実践を目指している。著書として句集「流水」「海峡」。「釧路現代文学選集俳句集」「釧路俳壇概系図」など。(鈴木青光)

斎藤大雄 昭8・2・18(1638)〔川柳〕札幌市生まれ。一八歳頃から新聞等へ川柳の投稿を始める。北海道大学医学部第一生理学教室勤務。昭和33年「札幌川柳社」創立の翌月より参画。40年第三回北海道川柳年度賞受賞。42年札幌川柳社主幹となる。この頃より川柳普及のため全道各地に川柳結社等を興し、今日の北海道川柳界の隆盛の礎石を作る。44年相田忠朗らと「古川柳研究会」を結成。同年より札幌市内の川柳会結成に力を入れ、指導も兼ねながら普及に努め一カ所の川柳会が活動している。50年札幌川柳社が北海道文化団体協議会賞、札幌市民文化奨励賞を受賞。北海タイムス紙の「タイムス川柳」選者。また苫小牧民報、「北方ジャーナル」、北海タイムス紙に川柳欄を新設、選者をつとめる。著書は昭和39年の処女句集「根」(共著)をはじめ「川柳講座」第一編〜第五編、柳文集「雪やなぎ」、句

齋藤 玄 大3・8・22(昭55・5・8(1914-1980))〔俳句〕函館市生まれ。本名俊彦。父齋藤俊三は唱華と号し二科会所属の画家。四歳の時父を亡くす。函館中学を経て早稲田大学商科卒。大学在学中の昭和12年、新興俳句に惹かれ従兄杉村聖林子に誘われて「京大俳句」に入り西東三鬼に師事。13年北海道銀行に就職。14年石田波郷を知り、これまでの俳号三樹雄を玄に改め「鶴」初投句で巻頭、同人に推された。石川桂郎を知ったのもこのころである。19年印刷用紙事情悪化のため「壺」休刊。銀行を退職。21年「壺」復刊。26年北海道銀行入行。27年ころ句作を怠り、28年「壺」の刊行を断った。30年土岐鎮太郎らと同人誌「楡派」を刊行したが五年間八冊で終わった。42年銀行を退職、道央信組専務理事に就任。43年個人誌「丹精」発行。ガンで死去した妻を詠った「クルーケンベルヒ氏腫瘍と妻」を連載して俳壇に復帰、注目を浴びた。44年生涯の師石田波郷死去。「丹精」に「波郷の海」の連載をはじめた。46年旧壺同人の要請により「丹精」に素玄集を設けて選評を行い、48年「壺」復刊。「丹精」は二七冊で終わった。50年親友石川桂郎、51年相馬遷子死去。自らも晩年意識を濃くして

集に「喜怒哀楽」「逃げ水」と、「北海道川柳史」「現代川柳入門」や柳文集「北の座標」「川柳の世界」がある。札幌川柳社主幹、北海道川柳連盟副会長、日本川柳協会常任理事、札幌文化団体協議会事務局長、北海道文化団体協議会事務局次長、東北北海道芸術文化団体協議会理事、全日本文化団体連合会理事。(川村美穂)

西東妙子 昭4・5・18(1638)〔短歌〕苫小牧市生まれ。昭和21年苫小牧高女卒業と共に短歌グループ「風不死」に入会、26年解散まで所属。38年「ヌブリ短歌会」の結成より参加する。その間、39年「新壱」に、45年「潮音」に所属し現在同人。48年「榛の木」に参加したが55年に退会。42年苫小牧市社会教育委員として公民館をはじめ図書館運営活動など幅広い分野で活躍。56年永年勤続表彰を受ける。苫小牧文化振興連絡協議会副会長として主に文芸部門を担当し、「苫小牧文芸連文芸」「苫小牧市民文芸」の発行や胆振芸術祭短歌大会の運営に協力する。51年「苫小牧短歌協会」設立に参加し、幹事。(わが柩造られむためにそくそくと年輪重ねぬし樹林あり)

斎藤 伝 明43・2・15(昭43・7・8(1910-1968))〔俳句〕伊達市

いった。52年滝川に句碑が建立された。53年直腸ガンで入院。道央信組退職、旭川に転居。55年第五句集「雁道」の蛇笏賞受賞。著書句集「舎木」「飛雪」「玄」「狩眼」「雁道」「無畔」。自註句集「斎藤玄集」。詩集「ムムム」。59年壺俳句会により函館公園に第二句碑が建立された。(金谷信夫)

斎藤紫月 明31(昭37(1886-1963))〔短歌〕渡島管内上磯町生まれ。本名伊三郎。年少の頃の膝関節負傷による身障者。上磯、朝鮮総督府、奥尻、茂辺地の郵便局に勤務。大正12年頃から「ポトナム」に所属。主要著書に「北海の星」「吾が靈魂」「斎藤紫月歌集」がある。(田村哲三)

斎藤青火 大5・5・20(1636)〔俳句〕千島水島島生まれ。本名清。北海道警察官を退官。現在俳誌「えぞにう」主幹。昭和15年俳句の道に入り「石楠」「緋衣」「浜」などに参加、21年「えぞにう」創刊と共に参加し各同人。23年在勤中の標茶町より俳誌「丹頂」を創刊、主宰となり、若手俳人の研究誌として四六号まで発行、32年に廃刊した。28年鈴木銀冬らと共に全釧路俳句会を結成、幹事長、のちに副会長、顧問を歴任。51年9月久保洋青死去により「えぞにう」を継承、主幹となる。現代俳句協

生まれ。室蘭中学(現栄高校)在学中から自由律短歌を作り、昭和2年口語短歌詩「灰色の街」、3年自由律短歌誌「高圧線」発行。5年ころから詩作に転じ「北方詩脈」発行、6年詩集「黒い短帽」を乗せた葬儀車」を出版。この詩集により佐藤惣之助主宰「詩の家」同人になったが、後に身辺の事情で中断。14年俳句に転じ、日野草城の「旗艦」同人。15年斎藤玄(当時三樹雄)の「壺」創刊に城西左夫の俳号で同人参加。一時作句中断したが、22年「太陽系」「アカシヤ」の同人で復帰。30年同人誌「楡派」に西塔伝の俳号で参加。後に総合文芸誌「火山帯」、第二次「北方詩脈」を発行した。34年以降「室蘭文学」「山音文学」「風貌」等の同人となり多くの作品を発表。没後の昭和44年八島祥二、松岡繁雄らによって斎藤伝詩句集「自嘲の呂律」が刊行された。(金谷信夫)

斎藤淑子 大8・6・20(1636)〔俳句〕伊達市生まれ。昭和34年より土岐鎮太郎に師事し「アカシヤ俳句会」に入会。34年同百花集同人。49年同木理集(無鑑査)同人。56年句集「水の匂ひ」上梓。アカシヤ俳句会苫小牧支部長。俳人協会会員。(岡澤康司)

斎藤春雄 明43・5・23(1636)〔野鳥研究〕札幌市生まれ。北海

新しい詩人の参加を得て道内有数の詩誌に発展し充実した内容をみせている。坂井は小樽高商を卒業後、北海道拓殖銀行に勤務、小樽、留萌、札幌を転勤し45年退職。著書に詩集「揺籃歌」(昭18・4、木星社)、「薔薇窓」(昭21・8、同)がある。現代日本詩人会員。(新妻 博)

堺 信子 昭2・11・20 (1935) (俳句) 東京生まれ。本名のぶ子。東京で俳句に親しみ昭和40年釧路に転入後「えぞにう」所属同人。53年より「白鳴鐘」の横山白虹に師事同人。北海道女流合同句集「朱弦」に参加。句会「沐耀会」主宰。現代俳句協会員。(鈴木青光)

堺 浩 大15・8・4 (1936) (小説) 旭川市生まれ。郵政職員。昭和43年9月に札幌で同人誌「楡」を主宰発行し、「小黒原野」「破風の部屋」「雲雀」「末黒野」「行きどまり」などを発表。研究に島崎藤村の妻の美家(函館)を扱った「秦家の人々」(昭46・4、「北方文芸」)がある。(木原直彦)

酒井広治 明27・4・27 (昭31・1・30 (1934~1936)) (短歌) 福井県生まれ。明治31年父と共に旭川に來住。大正元年行立上川中学を経て東京歯科医学専門学校卒。7年日本橋で歯科医院を開業する。遊学中に北原白秋に師事して「地上巡礼」「アルス」「煙草の花」「朱

つである。(木原直彦) 坂口波路 大6・8・2 (1911) (俳句) 帯広市生まれ。本名貞一。満州大連語学校に学ぶ。昭和8年青木郭公主宰の「曉雲」及び白田垂浪主宰の「石楠」に入会して俳句の手ほどきを受ける。22年土岐鍊太郎の知遇を受け「アカシヤ俳句会」に同人として参加、後に同木理集(無鑑査)同人となる。著書に合同句集八冊あり。戦時中、北京で燕京文学賞、昭和50年帯広市民文芸賞受賞。俳人協会員。(岡澤康司)

坂口三津枝 大10・10・4 (1921) (俳句) 松山管内今金町生まれ。砂川市、次いで札幌市で酒房経営。昭和31年細谷源二を知り「水原帯」に参加。36年水原帯新人賞、37年水原帯賞受賞。48年句集「午前二時のマダム」上梓。「水原帯」山嶺集同人。(川端麟太)

坂田文字 大5・7・24 (1919) (短歌、俳句) 上川管内朝日町生まれ。帝国女子医専卒。昭和26年名寄市で名寄中央病院を開業、家事調停委員。27年名寄の超結社誌であった「名寄短歌」に参加。35年「新墾」、42年に「潮音」に入社、同人。39年の第八回と、45年第一四回の二回、北海道歌人会賞準入選を果たし「名寄短歌会」の責任者になるなど、名寄歌壇の中心となって活躍。さら

「名寄短歌会」の責任者になるなど、名寄歌壇の中心となって活躍。さら

「樂」の歌誌に参加する。大正10年父の意志により旭川に帰り、昭和12年旭川信用組合理事、26年初代旭川信用金庫理事長となる。帰旭してからは北原白秋、吉植庄亮、生田蝶介、若山牧水、小川千鶴らの来旭をうながし短歌について懇談する。大正15年旭川歌話会を創設してリーダーとなり月例歌会を開く。同人として斎藤瀧、斎藤史、鬼川俊蔵、小熊秀雄、小林昂、山名薫人らがおり、旭川歌壇の基盤を作る。昭和10年「多磨」第一部会員、14年「香蘭」第一部会員。27年「多磨」解散における重要協議会の一人として招聘され協議。翌28年宮柵二の「コスモス」創刊より第一部会員として参加。

29年第一歌集「雪来る前」を刊行。31年旭川で小林孝虎主宰の「北方短歌」創刊に当たり、顧問として参加。性温厚にして歌壇の表面に立たず、歌誌を主宰することもなく歌人の育成につとめる。24年第一回旭川市文化賞受賞。33年旭川市風山弓成山にへわが観るや川筋ひかる野のかなを照りしつむもりし遠の街屋根の歌碑が建立された。(江口源四郎)

坂井まつば女 明25・4・24 (1930) (俳句) 兵庫県生まれ。本名タツ。少女時代より文学に心を寄せ、短歌、俳句を学ぶ。渡道結婚後、牛島藤六、青木郭公に師事、「時雨」「葦牙」女

に歌作と共に昭和30年土岐鍊太郎のもとで句作に精進、43年に「啓塾」、51年に「薔薇」の句集を刊行。49年には徂春賞を受賞。55年北方領土返還運動に共鳴、根室の納沙布望郷の岬公園にへ一億の切なる願ひ鳥帰れこの間近なる岬に叫ぶの歌を自筆し建立して寄付するなどの情熱を傾けた。51年名寄市文化奨励賞、名寄市文協芸術賞などを受賞した。(水平利夫)

坂田資宏 昭6・3・10 (1931) (短歌) 東京生まれ。昭和12年8月渡道。20年岩見沢市の空知農業学校へ入学。援農の暇々に詩を作り楽しんでのが定型詩短歌に触れた発端で、学校の短歌会に吉川泰夫(原始林)、太田絢子(潮音)、足立敏彦(新墾)らが入った。山下秀之助の歌集「雪雲」を購読したのが動機で、24年「原始林」入会。28年北海道開発局に就職、篠津原野の泥炭地開発事業などに従事した。その後も道内各地の風景に接する機会が多く、歌材も見聞する各地の自然、歴史に根ざした重厚な歌風である。36年原始林賞、39年田辺賞受賞。作歌のはじめから昭和36年までの作一〇〇首「櫃」で「原始林十人III」(38年)に参加。40年に歌集「屯田」、50年に歌集「漂砂」を刊行。「当別町開基百年記念町史」(昭47・5)、「篠津地

流作家として活躍する。夫無々との共著に句集「松籟」(昭55)がある。(佐々木子興)

堺万市郎 大15・3・23 (1930) (教育、小説) 東京生まれ。上智大学卒業後、志して道東僻地の教育に携わり、独自の方法で地域文化の向上に情熱を注ぐかたわら、「北方文芸」に「同胞」(昭44・5・6)、「おそね」(昭44・10)を発表、根釧原野の最深部の人間生態に光をあてた。(小笠原克)

榊原雪穂子 大2・4・1 (1913) (俳句) 宮城県生まれ。本名猛。昭和8年旭川師範学校卒。9年牛島藤六の「時雨」に入会。11年伊藤月草の「草上」の同人。14年「葦牙」発刊と同時に同人として参加。22年「べんがら」に入会。29年「季節」に入会、32年同人となる。41年塩野谷秋風の「きばな」に同人として加入。47年句集「樹水林」上梓。現代俳句協会員。(後藤軒太郎)

榊山 潤 明33・11・21 (昭55・9・9 (1900~1980)) (小説) 横浜生まれ。昭和7年に中村武羅夫の推輓で世に出たが、13年から翌年にかけての長編小説「歴史」で新潮文芸賞を受け作家的地位を確立した。「歴史」(昭16・12、新潮社)所収の「五稜郭落つ」は箱館戦争を描いたこの作者の維新ものの一

域泥炭地開発事業誌」(昭46・4)、「北海道歌壇史」(昭46・11)などを執筆した。「北海道歌書年表」をはじめ、北方文芸連載中の小説「石狩川」の史実調査記録はライフワークの性質のものであり、北海道短歌年鑑特集連載の「北海道の歌碑」も足で書いた労作。55年以来北海道歌人会代表幹事。(田村哲三)

坂西志保 明29・12・6 (昭51・1・14 (1896~1976)) (評論) 東京生まれ。幼時期、伝道師の父とともに忍路郡塩谷村伍助沢に住む。隣組に伊藤整の一家がいた。大正11年渡米、ホイートン大学卒。米議会図書館に日本部長として勤め、昭和17年帰国。戦後は参議院外務専門員、国家公安委員のかたわら評論活動を展開。著書に石川啄木「一握の砂」の英訳「A Handful of Sand」(昭22、読書展望社)など多数ある。(日高昭二)

坂西八郎 昭6・8・7 (1931) (民謡、俳句研究) 長野県生まれ。昭和34年北海道大学文学部卒。41年より室蘭工業大学に勤務。59年教授。ドイツ民謡、日、独の短詩文学の研究および翻訳にたずさわる。訳書「ドイツの民謡」(昭48、岩崎美術社)ほか多数の著書があるが、「ヨーロッパ俳句選集」(共編、昭54、デーリイマン社)、「独訳・一茶句集」(昭56、信濃毎日新聞社)が出色で

があるが、「ヨーロッパ俳句選集」(共編、昭54、デーリイマン社)、「独訳・一茶句集」(昭56、信濃毎日新聞社)が出色で

ある。(河部文二郎)

嵯峨美津江 昭10・8・22(1935)「短歌」釧路管内浜中町生まれ。

本姓鈴木。高校時代より作歌をはじめ、新聞投稿などを経て昭和29年釧路歌人会に入会した。32年「辛夷」に入会。41年第二回中城ふみ子賞、45年第一二回辛夷賞を受賞、また45年には市民文芸釧路春秋賞を受賞している。49年第一歌集「鶴の序章」を刊行し日常生活に発想の根をおいた美しい叙情の世界を展開したが、59年に一〇年を経て刊行された第二歌集「雪鳥」では、加えて精神性高い心象風景の分野にいどみ新しい境地を拓いた。45年刊「釧路現代文学選集」にその作品一六〇首が収録されている。「潮音」特別同人、「辛夷」運営委員、選者のほか、釧路歌人会副会長、辛夷釧路支社誌「岳樺」編集委員、「市民文芸釧路春秋」の選者などを歴任。(大塚陽子)

坂本一亀 大10・12・8(1925)「編集」福岡県生まれ。日本大学卒。戦後、河出書房に入社、「現代日本小説大系」編集を推進。三島由紀夫、野間宏、埴谷雄高、井上光晴らの作品創造に編集者として携わった。河出書房刊、なにか書房発売「物語・北海道文学盛衰史」と、立風書房刊「北海道文学全集」の刊行にも尽力。(小笠原克)

がある。(神谷忠孝)

坂本路夫 明43・3・31(昭58)

・9・30(1910~1983)「詩」山梨県生まれ。本名富貴雄。小学生のころ土別へ移住。その後旭川へ。永山農業学校在学中作詩を始める。東洋大学に学び文学科卒後旭川新聞編集局勤務。帯広高女教諭、旭川師範学校教諭、道学芸大学旭川分校教授、退官して名誉教授となり、さらに札幌静修女子短大教授、道都大学教授を務め、昭和57年勲三等旭日中綬章受章。旭川で生涯を終えた。東京遊学中の昭和5年仙人掌社より刊行した「根がある」という詩集は左翼詩と判定され、直ちに発禁処分を受けたため、ほとんど知られずに姿を消した。学芸大学内の文芸誌「素描」発行を支援、さらに教養子指導援助の「北門文学グループ」に大きな力を与えた。このなかから早川雅之、小野寺与吉、三瓶雅義、小関恒夫、新井田キヨノなど「フロンテア」の発展の芽が育っていった。旭川地方作文教育研究会会長としての活動も力があり、会は今も継続している。「旭川市民文芸」誌も古い歴史を持つが、詩の部の選者として没するまで協力していた。(入江好之)

相良和 大5・2・8(昭52)・6・30(1916~1977)「短歌」空知管内妹背牛町生まれ。近松勘七と結婚、樺

坂本箕子 昭8・8・2(1906)

(俳句)旭川市生まれ。本名豊司。終戦後病氣加療中、塩野谷秋風の指導により俳句に志す。昭和24年「霧華」同人。31年同誌の編集に従事。「水原帯」「扉」同人を経て現在「広軌」同人。(後藤軒太郎)

坂本幸四郎 大13・9・19(1924)「評論」函館市生まれ。官立無線電信講習所卒。青函連絡船通信長などを務める。「思想の科学」(昭44)に「小山宗祐牧師補の死」を発表以来評論主体に活動。「雪と炎のうた」(昭52、たいまつ社)、「現代川柳の鑑賞」(昭56、同)など一連の現代川柳研究や、「青函連絡船」(昭58、朝日イブニングニュース)の著作で注目された。その他民衆詩史の研究など幅広く作品活動している。(安東璋二)

坂本蒼郷 昭4・8・9(1929)「俳句」渡島管内八雲町生まれ。本名勇作。昭和23年より作句。25年細谷源二に会う。「水原帯」「海霧灯」「海程」各同人。40年句集「出生届」。42年海霧灯賞受賞。現代俳句協会員。月刊誌「八雲」編集。(川端麟太)

坂本直寛 嘉永6・10・5(明44・9・6(1833~1911))「開拓」高知県(土佐安田村)生まれ。坂本竜馬の

太に移り住む。夫と二児を失い、昭和22年小樽に引き揚げ、小樽国立療養所で病氣療養中、作歌をはじめ、25年「原始林」に入会。30年療養所退所。38年相良義重と再婚、以後札幌に住む。52年3月第一歌集「紙風船」を刊行。晩年の歌には生活の平静や充実が多く表現されている。(中山信)

相良由紀子 明31・12・24(昭37・3・1(1898~1963))「短歌」北見市生まれ。本名ユキ。大正12年相良義重と結婚後作歌をはじめ、第一次「原始林」、さらに復刊の「新樹」に出詠。のち「橄欖」に入社、街のない質実な作品を発表。昭和13年夫と共に北支に移住。21年引き揚げ。以後は作品の発表はない。「婦人公論」の札幌白雪会(会長山下愛)に参加。(中山信)

相良義重 明35・9・3(昭58)・4・12(1902~1983)「短歌」福島県生まれ。四歳のころ両親に従い、当時北見国佐呂間栃木に入植。大正9年札幌鉄道教習所卒。長年にわたる国鉄に勤務、昭和13年鉄道省派遣軍属として北支鉄道輸送に従事、14年華北交通に移る。21年引き揚げ国鉄に再就職し、札幌鉄道病院勤務。34年退職。37年妻由紀子、52年同和と死別。作歌は大正6年1月金子薫園の短歌研究会に入り、12年「光」「橄欖」

甥。二五歳頃から自由民権家として活躍。明治18年三三歳で洗礼をうける。29年北見国訓子府にキリスト教による北光社を建設、移民の入植指導にあたる。31年浦臼の聖園に入植。32年札幌に日本坑夫同盟を結成。35年札幌で北展日報創刊、大日本労働至誠会長となる。その後旭川で牧師として活動。信仰的自伝「予が信仰の経歴」がある。(小野規矩夫)

坂本直行 明39・7・26(昭57)・5・2(1906~1983)「絵画、随筆」釧路市生まれ。北海道帝国大学農学部農学科卒。在学中は山岳部員として活躍。卒業後二年間、東京田園調布で温室園芸研究に従事したが、昭和5年現十勝管内広尾町で牧畜業にたずさわり、11年より同町豊似大野塚原野の未開地で開拓生活。二四年間にわたって酪農業を営み35年6月に離農した。その体験は「開墾の記」(昭17)・11、長崎書店。昭50・10再版、茗溪堂)に詳しい。また四季おりおりの北海道の風物や、日高、ヒマラヤの山岳風景を描き続け、画家としても有名。帯広の児童詩誌「サイロ」(六花亭)の表紙、カットを34年から57年まで描き続けた。著書に「山 原野 牧場」(昭12、竹村書房。昭50・10再版、茗溪堂)、「原野から見た山」(昭32)、「私の草木漫筆」(昭39)、「雪原の足あと」(昭40)

に属した。13年4月第一次「原始林」創刊に参加。昭和11年日本歌人協会員。21年5月第二次「原始林」創刊に参加、後年選歌を担当。25年1月日本歌人クラブ北海道支部発足のときは、支部長山下秀之助の下で事務を担当。29年同支部が発展的に解消され、北海道歌人会が創立されてからも、十数年にわたり事務局を担当し、北海道歌壇史刊行などの事業を推進した。また日本歌人クラブの地方幹事を長く務め、名誉会員に推された。ほかに現代歌人協会員。42年北海道文化奨励賞を受賞。43年に札幌市藻岩山麓に歌碑(霧去りて雫したたる笹の葉に高山蝶が来て羽たむ)が建立された。読売新聞地方版歌壇選者。北海道文学館副理事長、刑務所篤志面接員を務め、51年藍綬褒章を受章。34年定年退職後は作歌を中心に、自在で気ままな晩年を過ごした。

その歌は謙敵で篤実な人柄を反映し、質実、平明に庶民的な生活の哀歎をうたったものが多い。歌集には、初期の「防雪林」(昭4)をはじめ、「低地帯」や最新刊の「喜望峰」まで九冊を数える。〈終の日を時をり思ふふるさとに帰るが如く旅立ちゆかむ〉(中山周三)

左川ちか 明44・2・14(昭11)・1・7(1911~1936)「詩」後志管内余市町生まれ。本名川崎愛。佇立小樽高

等女学校卒。昭和3年上京、百田宗治の主宰する「椎の木」の同人、「詩と詩論」「文学」「文芸レビュー」「カイエ」「新文学研究」「マダム・ブランシュ」「新領土」などに詩を発表。死後友人伊藤整によって昭森社から「左川ちか詩集」が上梓された。左川の上京した昭和初期は新文学運動がおこって、伊藤整などと共に新しい感覚のモダニズム形式の詩を書いた。感性が豊かで詩の中で展開していくイメージが結晶しているが、推しすすめていく絶望感は暗く重い。日本海の暗い風土の中で育ったことと、病弱であったことから、死を内包する悲しみを叫びのようにうたう詩は第一作からひとつの予感に充ちていた。詩作のかたわら翻訳もし、「椎の木」から昭和7年ジェムス・ジョイスの「室楽」を上梓。翻訳を通じて言葉への感覚が鋭くなっていったと思われる。「詩と詩論」などにもヴァアニア・ウルフの短編の一部も訳している。「椎の木」時代は江間章子、中村千尾と親交があった。胃ガンのため二五歳で夭折。暗い風土との生活からのがれて新しい文学を求めて上京した作家伊藤整と共にあったが、その全詩作品は北方を向いており、伊藤整の「雪明り」と呼ぶ魂の亀裂がある。「左川ちか全詩集」(昭58・11・27、森開社)。(小松瑛子)

いさぎよい歌柄である。〈吾が夏も送らな一日みどり児に左右のかひなをうばはれながら〉
桜井 実 (永平緑苑) 大15・1・14 (69)

いさぎよい歌柄である。〈吾が夏も送らな一日みどり児に左右のかひなをうばはれながら〉
桜井 実 (永平緑苑) 大15・1・14 (69)

いさぎよい歌柄である。〈吾が夏も送らな一日みどり児に左右のかひなをうばはれながら〉
桜井 実 (永平緑苑) 大15・1・14 (69)

いさぎよい歌柄である。〈吾が夏も送らな一日みどり児に左右のかひなをうばはれながら〉
桜井 実 (永平緑苑) 大15・1・14 (69)

作左部月之介 (さきさく) 大10・10・26 (1931) (俳句) 秋田県生まれ。本名万治。工業学校卒。会社役員。昭和12年「俳星」入会。15年「一輪吟社」を興したが、戦争の影響をうけて中断。50年斎藤玄に師事。「壺」入会、51年同人。52年俳人協会員。(金谷信夫)
佐久間佐太郎 (さきさく) 明26・3・昭50・10 (1893~1976) (短歌) 仙台市生まれ。号は砂汀路。大正6年来道、裁判所書記として長く北海道で勤務。「詩歌」「潮音」「霸王樹」「水蓮」「橄欖」等を経て、のち「アララギ」「歩道」に作品を発表。歌集「白雪」がある。(田村哲三)

桜井勝美 (さきさく) 明42・2・20 (68) (詩、評論) 岩見沢市生まれ。昭和4年旭川師範卒、早稲田及び日本大学に学ぶ。旭川師範では第三代文芸部長(雑誌部長)として学校外の文芸同人誌活動も盛んに行う。東京都で学校勤務、中学校長を最後に退職して詩作と評論活動に専念する。「麵麴」「混倫」等の同人となり、のちネオ・リアリズム詩運動を標榜する北川冬彦の詩誌「時間」の創立に参加、「時間」の運動と影響は日本の新しい詩が目玉とされていた。小詩集「ボタンについて」(昭28)は、作品の

本放送出版協会に席をおいた。48年第三詩集「動物戯画」を刊行。黒田三郎らとともにNHK職員による詩話会を発足させた。その詩風は、「海の中の向日葵」時代はモダニズムの影響をにじませた自虐的な孤独感にいろどられ「愛あるところ」の時代は、静謐な市民の日常性をうたい、「動物戯画」の時代は寓意と諧謔による諸相観察の鋭さに特色があり、それらに貫く人間愛が基底に流れている。俳句「貂の会」同人。日本放送教育協会常務理事。川崎市在住。(佐々木逸郎)

酒本寿朔 (さきさく) 明44・1・1 (6二) (短歌) 室蘭市生まれ。室蘭中学校卒。国鉄に勤務し、昭和41年退職。室蘭アララギ歌会で河野茂美を知り短歌も志す。昭和20年「アララギ」入会。土屋文明に師事。21年「羊蹄」、26年「道南アララギ月報」、31年「北海道アララギ」の各創刊に参加。22年土屋文明来道の全道アララギ歌会(札幌東本願寺)、室蘭歌会(護国寺)、30年の戸隠山安居会、37年の高尾山安居会に出席。また国鉄部内の機関誌や文芸誌にも意欲的に作品を発表し、蒸気機関車と共に生きる歌を多く残して貴重である。40年歌集「黒き煙の流れ」を刊行。47年合同歌集「岬の風」を編集発行。実直、平明な描写と

独創性を認められ第四回時間賞を受賞。ほかに郷土北海道を主に取材した詩集「泥炭」(昭41)、宝文館の昭和詩大系の一巻として昭和50年刊行の「桜井勝美詩集」がある。「新しい世代の詩」「現代詩の魅力」などの詩論集は、現代詩普及のため北川冬彦と共著で出版されたほか、評論集に「北川冬彦の世界」(昭59)、「志賀直哉の原像」(昭51)の著作がある。(入江好之)

桜井健治 (さきさく) 昭22・8・17 (6六) (近代文学研究) 函館市生まれ。東海大学日本文学科卒。函館市役所企画調整課主査。主要論文に「啄木における万里と『スバル』」(昭51・3)、「啄木研究」(昭51)、「啄木のあしあと」(昭51・9) 58・5、同)がある。(神谷忠孝)

桜井美千子 (さきさく) 昭7・7・20 (1932) (短歌) 旭川市生まれ。本姓脇本。昭和40年6月「新翠」入社。47年「潮音」入社。43年新翠新人賞受賞。48年新翠賞受賞。51年赤平市文化協会賞受賞。赤平市で積極的短歌活動を行う。58年結婚と同時に石狩管内広島町に移住し、「新翠」広島短歌会、及び「新翠」赤平短歌会にも参加。この間北海道拓殖銀行に22年から57年まで勤務。50年歌集「非晶体」刊行。歌風は清冽にして、自己のめぐりに思いを深め、虚飾がなくて

人間性あふれる職場、生活、自然詠の中に枯淡で温かみのある歌風を確立させている。〈風の向きに流されてゆく黒き煙この構内にも長く勤めぬ〉
酒匂親幸 (さきさく) 明28・1・24 (昭57・1・20 (1895~1982)) (短歌) 東京生まれ。大正6年日本大学商学部商科卒。北海道拓殖銀行入行東京勤務。のち小樽、札幌に転勤、昭和24年定年退職。渡島水産協同販売株式会社(函館)常勤監査役、大北硝子興業株式会社(函館)常務取締役を経て28年立天産業株式会社取締役社長として東京へ転住。大正7年「潮音」入社。同人、幹部を経て顧問。第一次渡道の大正12年、第一次「原始林」発刊に参加(小樽)、「新樹社」創立に参加(小樽)、再渡道の昭和11年には「新翠」同人、選者。拓銀歌会の指導を中心に札幌、小樽の後輩啓蒙に奔走。24年より函館在住の間、「潮短歌会」を直接指導。39年11月歌集「記念樹」刊行。登載歌数九〇八首のうち北海道を詠った作品が過半数を占めるのも、在道二三年を数えることからうなずかれる。58年1月妻富美子の手により比翼歌集「冬好日」刊行。〈石狩の中洲の柳芽ぶきつつ雪代水にひたる明るさ〉 (川村寿人)

菅尾礼三 (さきさく) 昭3・12・15 (6六)

88) (俳句) 日高管内浦河町生まれ。空知農業学校卒。公立高等学校事務職員。昭和23年加藤蛙水子に俳句の手ほどきを受けたが後に中断。35年寺田京子に師事、作句再開。「摸の会」所属。「これ」創刊に参画、同人。(竹田てつを)

佐々木あきら 明30・6・6)

(1897) (俳句) 渡島管内知内町生まれ。本名明。小中高校の教員を歴任。一時満州で会社員となるが、昭和21年引き揚げ、旭川東高校に再任。35年定年退職。その後札幌商高講師として七五歳まで勤務。昭和4年より石田雨圃子に師事。俳誌「木ノ芽」の編集。「ホトトギス」「玉藻」に投句。満州時代は三木朱城主宰の「俳句満洲」に投句。引き揚げ後、雨圃子没後大塚千々二らと「石狩」を再興する。出札後「いたどり会」などを指導。44年ホトトギス同人。48年かつらぎ同人に推される。現在札幌ホトトギス会顧問、北海道俳句協会常任委員、俳人協会員。著書に教育功労者として、杉村財団叢書第一巻自叙伝「蛙と柳に飛びつけ」、句集に「開拓」などがある。「開拓の一すじ道をみちをし」(嶋田一歩)

佐々木逸郎 昭2・11・28)

(1927) (詩、シナリオ) 渡島管内松前町生まれ。函館高等経理学校を中退。

佐々木孝丸 明31・1・30)

(1898) (劇作、俳優) 筆名落合三郎。釧路集治監教戒師の三男として釧路管内標茶町に生まれる。七歳で父の寺がある香川県に帰る。僧侶、郵便局員のものち大正10年小牧近江、金子洋文らの「種時く人」同人に参加。秋田雨雀らと表現座、次いで先駆座を結成した。以後、前芸座、日本プロレタリア劇場同盟、左翼劇場、新築地劇団の演出部員として小林多喜二「不在地主」、三好十郎「炭塵」「斬られの仙太」を上演し、戯曲に「地獄の審判」「筑波秘録」「板垣退助」ほかがある。戦後は娘婿千秋実の劇団「薔薇座」にかかわったほか、俳優として映画、テレビに数多く出演した。(佐々木逸郎)

佐々木高見 大15・4・1(1938)

(詩) 紋別市生まれ。千歳市で歯科医院や印刷所を経営するが倒産し詩と訣別。「木星」「時間」「ケイオス」同人を経て昭和29年1月「眼」を安田博、松岡寛と共同編集し、発行人となる。30年9月「眼年刊詩集」を刊行する。ネオ・リアリズムから出発。「自由と必然」を詩の主題として探究。私財を投じて北方の詩精神を結集し、北海道における戦後詩の創造の磁場を構築した編集者としての功績は高く評価される。(千葉宣一)

佐々木武観 大12・12・28)

陸軍特別幹部候補生として陸軍航空通信学校在学中に肺結核となり兵役免除。傷痍軍人北海道第二療養所(国立札幌第二療養所)の詩部会で更科源蔵、渡辺茂を識り以後私淑する。詩部会報「凍原帯」「序奏」の編集にあたり、「野性」の同人となる。昭和30年以降は「野性」の編集同人。その間に古川豊策、中島金二郎と詩誌「道標」(空知管内新十津川町)を創刊。安田博(風山蝦生)の「ATOM」に参加。「野性」終刊後の38年に堀越義三らと「詩の村」を創刊。詩集に53年度北海道新聞文学賞を受賞した「劇場」紀行記に「北海道ひとり旅」、編著書に「北海道文学全集」二二巻「北の抒情」「さつぼろ文庫」五巻「札幌の詩」「更科源蔵詩集」(もく馬社)などがある。33年から九年間NHK札幌放送局の専属脚本家となり、のち日本放送作家協会会員として放送(テレビ、ラジオ)と舞台作品を数多く手がける。(木原直彦)

佐々木記代子 昭12・2・10)

(1937) (短歌) 空知管内由仁町生まれ。本姓手塚。由仁町立病院看護婦を経て主婦。昭和38年「北方短歌」入会。44年北方短歌賞、58年北海道歌人会賞受賞。(汝が待つひそかな予感翡翠色の湖の深きに帰ってゆかむ)(江口源四郎)

佐々木子興 明43・3・1)

89) (劇作) 岩手県生まれ。国鉄に職を得た時代、釧路で「北東文化」北方文芸「北海文学」に関係し作品を掲載した。昭和24年自立劇団「北方芸術座」を創立、全道的規模で自作公演を行った。24年戯曲「荒原地」で第一回国鉄文芸年度賞受賞。26年上京して北条秀司に師事。作家生活に入る。超人的なエネルギーの持ち主で、上京以前に既に数本目の作品を残したことで有名。風土と人間とのかかわりに荒削りの逞しい手法を用いるのが特色。しかし「荒原地」評の関口次郎が「稍感情過多な、また幾分自己陶酔的な」傾向が目立つと指摘した側面もある。「吹雪」「断崖の部屋」「密漁の宿」「淡雪」「漁人」「はっぱ太鼓のおりき」が好評であった。「釧路現代文学選集」第四巻(昭45)に収録。著書に戯曲集「拓林飯場」(昭26)がある。(鳥居省三)

佐々木千枝子 昭7・8・28)

(1932) (短歌) 樺太豊原市生まれ。旧姓牧野。豊原高女より引き揚げ後、県立千葉高校へ転入。一時、詩を手がけたこともあるが、昭和43年「原始林」入社、49年同社田辺賞、51年原始林賞を受賞。主知的に都会居住者の憂愁をうたい、感覚が繊細しなやかで事象や心象、あるいは時空のとらえ方にも独自なもの

90) (俳句) 函館市生まれ。本名与吉。昭和6年函館師範卒。斎藤啞蟬に勧められ句作する。その直後古谷亜禪により「時雨」に入会、牛島膝六に師事。戦時中休俳するが「時雨」「葦牙」に属する。「葦牙」金剛集同人。北海道俳句協会常任委員。昭和23年教職を退き北海道教育評論社、北海道印刷紙工業協会役員。退任後「滄風社」を創立、出版企画の自営。(太田緋吐子)

佐々木謙 昭25・3・16)

(小説) 夕張市生まれ。札幌月寒高等学校卒。昭和54年「鉄騎兵、跳んだ」で第五回オール読物新人賞受賞。55年文芸春秋より同名短編集を刊行。ほかに「真夜中の遠い彼方」「死の色の封印」など。(稲葉吉正)

佐々木宣太郎 明40・3・9)

昭52・11・24 (1907-1977) (小説) 秋田県生まれ。昭和7年笠井清らとナルブ札幌支部結成。17年資本論研究会事件で検挙される。戦後小樽に居住。22年新日本文学会第二回創作コンクールに獄中記「病舎にて」が入選、「新日本文学」に掲載され同会編「新しい小説第二集」(昭23)にも収録された。51年回想記「ナルブの思い出」(佐藤八郎「ネヴオの記」収)を執筆している。(玉川 薫)

佐々木千之 明35・5・4)

91) (小説) 札幌市生まれ。独協中学校卒。新潮社の記者をするかたわら同人雑誌「短篇」を創刊。自伝的長編小説三部作「憂鬱なる河」(大14・9)昭3・7、新潮社)でデビュー。雑誌「文芸王国」を主宰して活躍したが、昭和7年文壇を去って小学館に勤務、14年退社。15年ごろから「葛西善蔵」(昭18・6、学芸社)など伝記小説の分野で活躍。本道取材作に「間宮林蔵」(昭15、至玄社)、「北門の楯」(昭18、金星堂)がある。25年に脳軟化症で倒れ療養中。

佐々木丁冬 明45・7・17)

52・7・24 (1912-1977) (俳句) 札幌市生まれ。本名季雄。旧制札幌第一中学校卒。卒業後北海道農業試験場の研究生となる。昭和12年病害虫防除のため渡満したが、俳句はその頃仲間誘われて始めた。特定の師弟関係はなく、28年に帰道して以来、「霜林」「阿寒」「葦牙」「あきあじ」「青女」などにもつばら投句して独学、満州勤務時代から季節学の研究に興味を持ち、帰道後歳時記の調査、集録に没頭し、月刊誌類に次々と連載発表

する。「農村歳時記」「漁村歳時記」「牛飼い歳時記」「観光えぞ歳時記」「酒の歳時記」等であるが、この集大成として「蝦夷歳時記」を36年から刊行し、農村編、季節物象編、植物編、動物編など、北海道独自の季節感、自然感の探求に努めたことは、高く評価されている。この功により、49年北海道芸術新賞を受賞。(夜は火蛾の執着明日の銭数ふ)

(木村敏男)

佐々木俊郎 (しんご) 明33・4・14、昭8・3・13 (1900~1933) 「小説」宮城県生まれ。一五歳(大4)で高等小学校卒業後、十勝の池田機関庫に就職したが一年余で帰郷、代用教員を経て上京し職を転々としながら小説を書く。加藤武雄の知遇を得て新潮社の投書雑誌「文章俱樂部」の編集者、のち同社の「文学時代」の編集に携わる。大正末期の農民文学会に加わり、「文芸戦線」「文芸時代」にも執筆したが、新興芸術派倶楽部に参加するなど文壇諸派とかかわった。農民もの、都会風俗、さらに探偵小説と、分野も広い。北海道開拓移民の土地との格闘を、悪徳地主への復讐譚と織り成した「熊の出る開墾地」(昭4)が出世作。取材作にはほかに機関士体験をにじませた「汽笛」「機関車」や「墾成不可能地帯」など。ほかに東北の農村に密着した

「黒い地帯」(昭5)や農村の荒廃を先取りした「都会地帯の膨脹」(昭5)がある。没後、川端康成らに惜しまれた。

(小笠原克)

佐々城豊寿 (とよひさ) 嘉永6・3・29、明34・6・15 (1853~1901) 「婦人運動」仙台市生まれ。フェリス女学院の前身に学ぶ。医師佐々城本文と結婚。明治21年室蘭に土地を求めて26年本籍を室蘭へ移し、農園と教育事業を志向して同年4月本文を除く一男二女(佐々城信子のノブ、佑、アイ、ヨシエ)を伴って来道。佑は同志社中学から札幌中学校(現札幌南高)へ。卒業後、渡米。昭和53年3月23日東京で没した(九五歳)。アイは札幌の北星女学校に学ぶ。(木村真佐幸)

佐々城信子 (のぶこ)

明11・7・30、昭24・9・24 (1878~1946) 「小説のモデル」東京生まれ。父本文、母豊寿の長女。戸籍名ノブ。青山女学院に合併された海岸女学校に学ぶ。明治26年母、弟妹らと室蘭に転籍移転。一時、北海道に住む。28年独歩と波乱の結婚。五カ月で破局。その後、母の強要で有島武郎の友人である婚約者森広との結婚のため渡米中、その船の事務長武井勘三郎との恋愛問題で世上をにぎわした。武井と佐世保で所帯を持つが、晩年は栃木県真岡に住む。有島の「或る女」のモデル。

方ジャーナル同人雑誌賞受賞。

(針山和美)

佐々木文子 (ふみこ) 大14・8・26、(昭33) 「俳句」札幌市生まれ。札幌藤高等女学校卒業。昭和44年寺田京子に師事。「杉」所属「これ」同人。57年第一句集「秋薔薇」刊行。瀟洒感覚の世界と清澄心象の世界を見せ注目された。55年札幌市民芸術祭奨励賞受賞。(竹田てつを)

佐々木丸美 (たまき)

昭24・1・23、(昭39) 「小説」石狩管内当別町生まれ。当別高校から北海道大学法学部中退。昭和50年NETテレビと朝日新聞の二千万円懸賞小説で佳作。同年11月札幌を舞台に孤児の少女をメルヘン風に描いた「雪の断章」(講談社)を刊行、人気作家となる。以後著作は、いずれも講談社から「崖の館」(昭52)、「忘れな草」(昭53)、「花嫁人形」(昭54)、「夢館」(昭55)、「椽家の伝説」(昭57)など多数。(日高昭二)

佐々木充 (みさき)

昭11・7・5、(昭19) 「近代文学研究」岩見沢市生まれ。室蘭で育ち北海道大学国文科卒業。昭和35年から44年まで帯広大谷短大に勤務。現在千葉大助教授。著書に「中島敦―近代文学資料I―」(昭43・3、桜楓社)、「中島敦の文学」(昭48・6、同)がある。(神谷忠孝)

佐々木露舟 (ろぶね)

大1・10・23、(昭19) 「俳句」青森県生まれ。本名正之進。昭和5年「曉雲」幹部同人。その後「とかち」「アカシヤ」「樹海」同人。現在「樺の芽」同人会長。俳人協会員。帯広刑務所俳句教育講師、高齢者学級講師、また自宅での「露舟俳句教室」などボランティアの俳句指導を実施中。刑務所の指導で56年法務大臣賞受賞。51年句集「流寓」、54年「露舟隨筆集」刊行。(鳥恒人)

笹沢左保 (ささざき)

昭5・11・15、(昭28) 「小説」横浜市生まれ。本名勝。詩人笹沢美明の三男。関東学院中等部卒業。昭和35年の「招かれざる客」で本格推理小説家として注目され、「人喰い」が探偵作家クラブ賞を受け、「木枯し紋次郎」は爆発的な人気を呼んだ。本道取材作に「暗い渚」(昭41・1、東栄堂)、「3000キロの罫」(昭45・10、桃園書房)、「いつになく過去に涙を」(昭46・1、徳間書店)、「現代股旅ヤロー」(昭47・8、同)、「夫婦葬送」(昭58・9、朝日新聞社)などがある。(木原直彦)

笹原登喜雄 (とよあき)

昭17・6・8、(昭19) 「短歌」後志管内共和町生まれ。北海道学芸大学(現教育大)在学中の昭和39年アララギ派の薄井忠男のもと

(木村真佐幸)

佐佐木信綱 (のぶあき)

明5・6・3、(昭38・12・2 (1872~1963) 「短歌、国文学」三重県鈴鹿市(旧伊勢鈴鹿郡石叡師村)生まれ。歌人佐佐木弘綱の長男。一〇歳、父に従って上京、この年御歌所長高崎正風入門、香川景樹の桂園派の歌風を学ぶ。一六歳で東京帝大古典科卒業。明治31年主宰する竹伯会の機関誌「心の華」(のち「心の花」)を創刊、和歌革新運動を展開。38年東京大学講師。学士院恩賜賞、第一回文化勲章を受ける。歌集には「思草」(明36・10)、「新月」(大1・11)、「山と水と」(昭27・12)等があり、和歌の伝統を生かしながら、浪漫的理想主義的な作品をつくり、以後温和、自在な境地に至った。本道には昭和2年9月と14年10月の二度来遊し、道南や夕張、旭川、狩勝峠などに足跡を残し、43年1月には狩勝峠頂上に歌碑が建立された。(我が上を白雲はしる広々し十勝原みつつ立てれば)。孫幸綱は現主宰である。(増谷竜三)

佐々木徳次 (とくじ)

昭3・7・3、(昭18) 「小説」島根県生まれ。「人間像」同人。同誌六一号(昭36)発表の「遠い家々」で北海道新聞の第七回同人雑誌秀作に選ばれる。また同誌九六号(昭55)発表の「二つの極」で第二回北

に結成された宇波百合短歌会で作歌を始めた。同年「北海道アララギ」、40年「アララギ」に入会。卒業後、北星男子高校教諭のかたわら、アララギ札幌歌会の中核にあつて、精力的に作歌が続いている。この間、アララギ選者の樋口賢治と交流を深め、作歌態度、抒情質に影響されるところが大きかった。作風は、アララギの写実を基層としながらも、都市生活者ぶりの心理的領域にずれこみ、いわば先進の「実」を享けつつ、みずからは「虚」の世界に踏み出している。その意味では、高度成長期以後のアララギの潮流を特徴する一人といえよう。歌集に「街風」(昭49)。(降る雪が速度感持つビルの壁に沿ひつつ真昼の孤独を思ふ) (叶 桶夫)

笹部幹雄 (たけあき)

大8・1・9、(昭19) 「詩」札幌市生まれ。札幌二中を経て昭和16年小樽高商卒業。日本銀行に入行し、49年定年退職。「木星」創刊同人。創刊号を飾った「喪服」七章は冷たく澄んだ情感と心理表出の美しさで圧倒的な反響を呼んだ。最近「木星」に「白まは黒の輪郭の線で」「デオニエンスの笛」を、「海程」に「韻律の領域」など、リズム関係の詩論を展開中。

佐瀬子駿 (しほ)

明5、(昭10) 7・21

(1872~1935)「俳句」秋田県生まれ。本名徳五郎。二四、五歳の頃出郷し、一時大湊に居住したが、渡道して函館税関吏、千島沙那等に勤務し札幌に出て市役所に勤め、後に札幌郵便局に転じ、最後に友人経営の商店事務を手伝う。一時「恐山人」と号してホトギスをはじめ多くの俳誌に投句。大正8年11月高浜虚子来道歓迎俳句大会開催を幹旋し、ホトギス系統の俳人が少なかった当時百数十名が参会という北海道俳壇史上稀に見る盛会ぶりを発揮した。12年5月「有無会」を設立、天野宗軒、石田雨圃子らをはじめ本道の有力ホ誌系俳人の全部を網羅した。(白幡千草)

佐多稲子 (白幡千草) 明37・6・1 (36) 「小説」長崎県生まれ。小学校中退で労働生活に入り、窪川鶴次郎と結婚(昭20)離婚後、中野重治のすすめで小説を書き出した。プロレタリア文学に、鋭く細やかな感性で新風を注いだ。体験に根ざした長編「歯車」「溪流」など。「佐多稲子全集」一八巻(昭54、講談社)がある。昭和23年に総選挙応援で来道。小林多喜二の母を訪ねた折の「雪の降る小樽」(昭25、「北海道文学全集」19巻収)がある。(小笠原克)

佐藤 京 大10・3・4 (昭31) 「詩」後志管内仁木町生まれ。札幌静修高校卒。「カニの会」所属。主要作品に「ホテルの前の石の橋」(昭55・4、「北方文芸」)、「日昏れのまち」(北海道新鋭小説集83)がある。(小笠原克)

佐藤 京 大10・3・4 (昭31) 「詩」後志管内仁木町生まれ。札幌静修高校卒。「カニの会」所属。主要作品に「ホテルの前の石の橋」(昭55・4、「北方文芸」)、「日昏れのまち」(北海道新鋭小説集83)がある。(小笠原克)

結核で入院加療中アンリ・ミシヨの詩に接して翻訳を試み、療養仲間の吉田絵らと「雑草園」を創刊、詩を発表した。30年「先列」の創刊に加わり吉田絵、吉田三千雄、松岡繁雄、尾崎寿一郎、山田順三、江原光太らとともに社会性の強い作品を書きつづけた。38年堀越義三、江原光太、古川善盛らと「詩の村」を創刊、39年からは河邨文一郎、富樫脛彦郎、牧草造らの「核」に参加、旺盛な詩作をつづけている。「詩の村」ベトナム反戦詩特集に発表の「フリーダム」は、真壁仁編の岩波新書「詩にめざめる日本」に収録された。しかし、その詩作態度は一貫して「具体よりは抽象を、写実よりは幻想を」とシュールレアリスムの詩の形成をめざしている。長万部町在住。(堀越義三)

佐藤 京 大10・3・4 (昭31) 「詩」後志管内仁木町生まれ。札幌静修高校卒。「カニの会」所属。主要作品に「ホテルの前の石の橋」(昭55・4、「北方文芸」)、「日昏れのまち」(北海道新鋭小説集83)がある。(小笠原克)

佐藤 京 大10・3・4 (昭31) 「詩」後志管内仁木町生まれ。札幌静修高校卒。「カニの会」所属。主要作品に「ホテルの前の石の橋」(昭55・4、「北方文芸」)、「日昏れのまち」(北海道新鋭小説集83)がある。(小笠原克)

ととなり、のちに博物館名誉館長。北海道東海大学教授を務めた。学生の頃から創作をはじめ、昭和11年第一創作集「雲」を出し、13年の「早稲田文学」新人創作号に「蒼園」を発表している。戦前は同人誌「十勝泥流」(昭12・14)に拠り、代表作「十勝泥流」を連載した。第二創作集「十勝泥流」は21年、玄文社から刊行された。戦後は「冬涛」を主宰し、また「情緒」にも属して評論にむかった。小熊秀雄の研究調査にのりだし、この成果は「小熊秀雄論考」に結実し、42年第一回北海道新聞文学賞を受けた。これにさきだち、31年検書房から「北海道文学史稿」を出版、北海道文学研究の先駆的役割をはたした。小熊秀雄再評価の気運にもとづくみ、47年「詩人・今野大力」をまとめた。評伝「小熊秀雄」を53年に出すが、「小熊秀雄全集」(創樹社、53年完結)の編集委員をつとめ、第二巻に解説を書く。58年北海道の文芸に多大に寄与した業績により北海道文化賞をうける。早くに旭川市文化賞も受けている。現在、女性の小説(朝日新聞社)選考委員。郷土研究者としてもすぐれ、58年「旭川夜話」を総北海から出版。「中金太郎伝」もある。59年「幼年時代」を刊行。(高野斗志美)

佐藤 京 大10・3・4 (昭31) 「詩」後志管内仁木町生まれ。札幌静修高校卒。「カニの会」所属。主要作品に「ホテルの前の石の橋」(昭55・4、「北方文芸」)、「日昏れのまち」(北海道新鋭小説集83)がある。(小笠原克)

佐藤皓二 大4・11・3、昭56・11・24 (1915-1981) 「俳句」日高管内浦河町生まれ。本名滋郎。北海道帝国大学医学部卒。昭和23年余市町で医院開業、長年余市町の保健医療に尽くし、56年余市町功労者賞受賞。38年「馬酔木」入会。51年「沖」同人。翌年「余市沖研究会」結成。53年「これ」創刊に参画、同人会副会長。俳人協会会員。没後夫人の手により遺句集「花林檎」が出版された。(竹田てつを)

佐藤光世 明44・2・28 (1911-1981) 「俳句」胆振管内白老町生まれ。本名光世。札幌第一中学校を経て、陸軍軍医学校の委託生として北海道大学医学部を卒業。陸軍病院長のとき終戦となり、以後俳句を始める。鮫島交魚子に師事し、中村若沙主宰の「いそな」に投句すると共にホトトギスに投句。高浜年尾来道のととき交魚子の片腕となり尽くした。後にホトトギス同人に推される。昭和54年三ツ谷謡村主宰没後「緋燕」を「ひかぶ」と改めて主宰し、雑誌の選に当たる。新田充穂(同誌のライラック集選者)編集長と共に会員の指導に当たり、会員に慕われたが、病に倒れ、また充穂の急逝により「ひかぶ」は通巻四三九号、57年12月号をもって休刊。ホトトギス同人。俳人協会会員。(白幡千草)

版。北海道には詩集「トランシット」出版の年、俳人飯田九一と高村光太郎の紹介で更科源蔵を訪れ、昭和6年海老名礼太の刊行した「北海道詩集」に「アイヌ」「メノコ」「記憶の正誤」「摩周湖」「釧路市」を「鮭鱒島」の題名で発表した。(更科源蔵)

佐藤 孝 昭11・8・8 (1939-) 「詩」釧路管内鶴居村生まれ。北海道大学卒。昭和32年より市立札幌病院附属静療院の患者発行月刊誌「静月の友」に詩を寄稿。45年詩誌「ねぐんど」創刊に参加し、翌年より同会代表。「ねぐんど」詩社「名のまま」56年詩誌「複眼系」と改題発行。48年詩集「しよんべん」刊行。詩風は奇をてらわす、平易な文体で日常表現を心がける。北海道詩人協会会員。(永井浩)

佐藤たすく 明36・10・4 (1906-) 「俳句」空知管内長沼町生まれ。本名佐。札幌師範学校卒。昭和39年寒寒小学校長定年退職。現在伊藤塗工部高等職業訓練校長。44年札幌市成人学校で寺田京子の指導を受け作句。「寒雷」杉「僕の会」所属、「これ」同人会長。55年第一句集「青葙原」出版。諸詠の底に飄々とした哀歎と人間味をたたえた作風である。52年準北海道俳句協会賞受賞。現代俳句協会員。(竹田てつを)

佐藤佐太郎 明42・11・13 (1909-) 「短歌」宮城県生まれ。大正15年岩波書店に勤め、昭和20年退職。戦後、一時出版社、あるいは養鶏業を自営。「アララギ」には大正15年入会、斎藤茂吉に師事。同門の俊秀といわれ処女歌集「歩道」により注目を浴びる。昭和15年「新風十人」に参加。さらに「軽風」「しろたへ」「立房」等の歌集に日常茶飯の中に新しい詩を発見するための努力がみられた。20年歌誌「歩道」を創刊。以後も歌集は「帰潮」「読売文学賞」、「地表」「冬木」「形影」「開冬」等多数。研究書に「純粹短歌」「斎藤茂吉研究」「葦馬山房随聞」「茂吉秀歌」等。初学者向きの著書も多い。59年芸術院会員、追賞受賞。終戦直後、札幌青磁社の編集長を務めていた関係もあり、同社から主としてアララギ関係者の歌集を多く出版し、帰京後もたびたび来道している。(林檎さくところを行けり紅に白まじりて日に照らふ花) (小国孝徳)

佐藤しげ 大5・7・17 (1910-) 「詩」石狩管内厚田村生まれ。詩誌「渦」同人。他に文学活動として同人誌「明暗」同人、「文学会議」同人。詩集「風鳥」(昭53・8・15、東京はるひろ社)、北海道詩人協会発行「北海道詩集」の第三号から詩を発表。人間存在の哀し

佐藤忠雄 大3・8・16 (1914-) 「新聞記者」青森県生まれ。昭和6年青森県立弘前工業卒。樺太や北海道内の新聞社に勤務後、昭和17年北海道新聞社入社。論説一筋に活躍し、39年論説主幹。44年退社。北海道新聞社の社史編纂に参画した。著書に「新聞にみる北海道の明治・大正」(昭55、北海道新聞社)がある。(大須田彦)

佐藤忠良 明45・7・4 (1912-) 「彫刻」宮城県に生まれ北海道に育つ。昭和14年東京美術学校彫刻科卒。同年新制作派協会彫刻部の創立に最年少会員として参加。一貫して写実彫刻の道を歩み「群馬の人」(昭27)、「うれ」(昭34、高村光太郎賞)、「ふざけっ子」(昭39)、「マント」(昭43)など数多くの傑作を生んだ。56年パリのロタン美術館で日本人初の個展を開き注目された。小説家船山馨と親交があり小説の挿絵を多く描いている。(工藤欣弥)

佐藤 任 大正10 (1921-) 「短歌」伊達市生まれ。函館師範学校卒。教員生活を送り退職。学校時代から短歌に親しみ、明石海人の歌集「白描」に感動し、「短歌紀元」の同人として活躍、また松川短歌会を指導し地域の指導にも専念する。小歌集「水脈」「露台」「火焰樹」のほか、55年に歌集「赤灯

みを骨太い女の業を駆使した表現で推しすすめていく詩は、作者独自の生と重なって肉感の厚い作品群となっている。北海道詩人協会会員。(小松瑛子)

佐藤昌介 安政3・11・14 (1806-1866) 「農政経済学」花巻市生まれ。明治9年札幌農学校第一期生として入学。卒業後、米国ジョズ・ホプキンス大学に留学、19年札幌農学校教授、27年同校校長、40年東北帝大農科大学長、大正7年北海道帝大総長、昭和5年退任。島崎藤村の恋人佐藤輔子の異母兄、輔子の夫鹿討豊太郎は従兄弟。有島武郎と縁が深い。(和田謹吾)

佐藤輔子 明4・6・15 (1871-1895) 「小説のモデル」島崎藤村の恋人。藤村「春」のモデル。岩手県花巻市生まれ。北大初代総長佐藤昌介の異母妹。明治女学校在学中、着任した藤村を知ったが、父の先妻の実家の長男鹿討豊太郎(当時札幌農学校講師)と結婚(明28・5)。札幌で没。(和田謹吾)

佐藤惣之助 明23・12・3 (1880-1942) 「詩」神奈川県生まれ。大正5年「正義の兜」出版以来、旺盛な詩作活動をつづけ、琉球の紀行詩集をはじめ、数十冊の詩集を出

台」を出版。(赤く燃ゆる燈台の灯をめぐりつつ燦めく如く雪降りつづく) (村上清一)

佐藤徹二 大10・11・昭44・4 (1921-1969) 「短歌」旭川市生まれ。東鷹栖郵便局員。昭和26年胸部疾患により療養生活をつづけ、四八歳で没。27年「あさひね」、29年「コスモス」、31年「北方短歌」創刊より特別維持同人。遺歌集「雪の起伏」。(江口源四郎)

佐藤 堯 明38・2・6 (昭53・6・26 (1905-1978)) 「川柳」札幌市生まれ。旧姓加藤。昭和40年札幌市民文化祭川柳大会に初入選してから川柳の虜となり、晩年を川柳活動に打ち込み、佐藤一族をあげて石山地区の川柳普及に貢献する。44年「石柳会」を創立、会長として毎月句会を催す。後に「みなみ川柳会」と改称、次女の本間美恵子にバトンタッチする。その娘婿の山下梅庵は「川柳さつぽろ」編集を担当、親子三代にわたっての川柳一族となる。昭和49年に句集「みち柳」を発売。(けなすまい嫁にいとしい母がいる) (斎藤大雄)

佐藤冬児 明45・1・2 (昭60・4・2 (1912-1986)) 「川柳」山形県生まれ。本名亭如。昭和6年屋根の雪落とし作業中転落、以後病臥生活。10年柳誌「番茶」「きやり」等に作品発表。

54年句文集「冬のぼら」を発売。北海道川柳年度賞選考委員、59年北海道川柳連盟功労賞受賞。昭和46年在宅投票制度復活訴訟をおこす。没後、自伝「冬のぼらは棘だらけ」(昭60、「アカシア会」)が刊行された。(ふるさと)も月も遠きにおいてこそ (長沢としを)

佐藤 徹 (さとう とお) 大4・9、昭50・10・16 (1915-1976) 「短歌」香川県生まれ。本名義雄。専修合格。貿易商社に勤務の後、昭和11年に現役入隊。中国から復員後は小樽で製パン業を営む。短歌は昭和11年頃よりはじめ、14年「アララギ」に入会、以後土屋文明の選を受け、16年八木沼丈夫の「短歌中原」創刊に参加。23年「原始林」に入会。25年度原始林賞、36年度田辺賞を受賞した。以来小樽歌会を中心として後進の指導育成につとめた。46年東京に転出するに当たり、小樽会員が歌集「燧臺」を刊行した。上京後は製パン会社に勤務。(鳳仙花の実の弾じけ散る庭暑しなべて終りしごとくさまよふ) (北川頼子)

佐藤十三湖 (さとう じゅうこ) 明42・2・2、昭59・12・30 (1909-1984) 「俳句」青森県生まれ。本名健次郎。成人して渡道、砂川三井鉱業に就職。昭和28年旭川市に転住、石炭販売業を自営。俳誌「葦牙」「雪垣」「季節」「河」「人」各同人である。

「日本詩壇」「文芸汎論」などに詩を投稿。昭和16年久野斌、本間たけし、舟橋精盛らと知りあう。「流水」「北征」(東京)、「白壁」(京都)に関係をもち「詩祭」(東京)の同人。海軍に応召。復員後「建設詩人」(小倉)、「詩人街」(名古屋)、「木馬」(薔薇)「童謡詩人」(以上東京)、「詩風」(群馬)など多くの詩誌に作品発表。詩誌「悪」「詩祭」「ぼへみや」「ぼへみやん」改題)、「POPPO」を創刊。24年「詩人種」(岩見沢)編集同人を経て「苗」「青芽」同人。56年3月歌誌「悪」を古屋統、中田弘と創刊。(伊東 廉)

佐藤春夫 (さとう はるお) 明25・4・9、昭39・5・6 (1892-1964) 「小説」詩、評論」と歌山県生まれ。家は代々医家で、父豊太郎は明治31年にはじめて来道し、二年後には十勝の十弗原野の開墾を開始した。年少の頃から詩人としての才能を現していた春夫の初来道は新宮中学校時代の41年夏であった。父は札幌農学校入学をすすめたが、慶応大学に入学(大学2年で退学)。二度目の来道は大正6年秋で「手記」(大8・1、「中外」はこの折の心境小説。のち「私記」と改題。13年7月の「随筆」に「北海道へ」を発表したが、この年の9月に三度目の来道。父に代わって開墾に従事していた実弟竹

つた。(太田耕吐子)

佐藤俊雄 (さとう としよ) 大2・11・13、昭57・2・12 (1913-1982) 「短歌」秋田県生まれ。旭川中学中退。食堂経営。終戦後「山脈」を経て昭和41年「鴉族」、45年「歩道」に入会。舟橋精盛を親友としながら昭和5年頃より口語歌、自由律短歌、詩などにうつつ屈した情熱を注いできた。高齢期に入つて巡り会つた佐藤佐太郎を生涯唯一の正師とし、その後はひたすら写実の道歩む。老來病みがちとなり、いよいよ沈滞した境涯詠となつたが常に人間のかなしみが揺曳する世界であつた。44年浦河短歌会を結成、46年の「うららべつ」以来、「微塵」「青苗」「行雲」「余秋」「歴史」「群影」「流水」「寒芒」「光陰」(昭56)と毎年合同歌集を出し、地域文化の刺戟ともなつた。没後、会員の手で遺歌集を兼ねた合同歌集「礎石」(昭58)が上梓された。(ささりげなき言葉なりしが時を経て塩の雫のごとく身にしむ) (村井 宏)

佐藤二宝 (さとう にほ) 大6・12・18、(昭11)「俳句」宮城県生まれ。本名定市。早稲田大学在学中「石楠」白田亜浪に師事。昭和14年三菱大夕張鉱務時「暁雲」へ入会。応召、復員後、21年「アカシヤ」「緋衣」に入会し、23年「北方俳句人」入会、24年「水原帯」同人、28年

田夏樹が出てくる「雁の旅」(昭12・4、「中央公論」)はこの旅の所産。「文章世界」大正8年8月号の「虎次郎と僕」も三度におよぶ十勝訪問の折に材料を得た小説である。晩年は昭和38年の6月と10月に来道しているが、北海タイムスに連載した「北海道吟行」も「わが北海道」も北海道紀行記であると共に、若き日の回想記でもある。この二つの作品は新潮社の「わが北海道」(昭39・6)に収められていたが、この作者の北海道との縁の深さを知ることができる。昭和40年7月十勝管内豊頃町長節湖畔に詩碑が建つた。「田園の憂鬱」「都会の憂鬱」「殉情詩集」は有名。(木原直彦)

佐藤晴生 (さとう はるお) 大7・6・20、(昭19)「俳句」樺太生まれ。本名晴夫。旧制中学中退。団体役員。一七歳の頃より伊藤凍魚に師事「氷下魚」に入会して俳句を学ぶ。戦後秋田に引き揚げ、一時中島斌雄主宰の「麦」に拠る。昭和24年芦別市に移住、「アカシヤ」を識り入会。36年同百花集同人。51年同木理集(無鑑査)同人。53年句集「露林」上梓。57年句碑建立。48年芦別市文化賞受賞。芦別市文化連盟会長。俳人協会会員。(岡澤康司)

佐藤ひかる (さとう ひかる) 明44・9・11、昭20・5・6 (1911-1945) 「詩」札幌市

より休俳。51年粕谷草衣と再会して句作、51年「これ」同人、58年句集「虹」を刊行。他に「粒」同人。現代俳句協会員。(山田緑光)

佐藤八郎 (さとう はちろう) 明38・7・10、(昭39)「デザイン」、プロレタリア芸術運動研究、新潟生まれ。庁立小樽中学校退。三浦鮮治、兼平英二(英示)の指導で洋画に親しみ大正末期から昭和初期にかけてアンデパンダン展、道展に出品。「アナキスト文学者」「悪い仲間」同人。昭和3年札幌に転居し喫茶店「ネヴォ」を経営。プロレタリア美術家、演劇人のたまり場となり加藤悦郎、三岸好太郎、小林多喜二、富士井盛文、久保栄らが訪れ、一九三〇年代の芸術活動の拠点となつたが、昭和11年佐藤の上京により閉店した。著書に「ネヴォの記」一九三〇年代・札幌―文化運動の回想」がある。デザイナースタジオ代表。(佐々木逸郎)

佐藤初夫 (さとう はつお) 明43・6・12、(昭19)「詩、短歌」札幌市生まれ。竹製品製造業、続いて石油会社勤務。詩集「紺緋の袂の着物を着た少年」を昭和36年刊行。篤、笛真久の筆名で歌集「天表」を53年刊行。32年第一回北海道歌人会賞を「黙約の椅子50首」で受賞。三〇歳より詩を書きはじめる。「蠟人形」「若草」

生まれ。本名光。兄の一郎と共に出版した詩誌「牧羊」(昭4・3、牧羊詩社)はカトリック教会に集う人々の宗教的な詩誌であった。詩集「晩鐘」(昭4・10、牧羊詩社)発行。53年遺族によって詩集「雲がみだれる」を思樹社より上梓、この中には昭和25年5月6日沖繩で戦死した佐藤ひかるの全詩と解説が佐藤良一の筆で収められている。(小松瑛子)

佐藤牧翠 (さとう ぼくすい) 明32・12・5、(昭38)「俳句」新潟県生まれ。本名秀昌。教員。元高等学校校長。昭和4年石田雨圃子の「木の芽」創刊に参加。「ホトトギス」「玉藻」に投句。8年北日本俳句大会の記念誌「古潭」を編集。10年「石狩」の入門欄選者となり自宅を発行所とし編集に当たる。23年北海道ホトトギス大会の記念誌「楡」を編集。58年ホトトギス同人に推される。句集に合同句集「北国」など。(嶋田一步)

佐藤将寛 (さとう まさひろ) 昭18・9・8、(昭39)「児童文学」室蘭市生まれ。小学校教師。昭和50年網走管内東藻琴村明生小学校児童と版画童話「キタキツネ物語」(北海道新聞社)、51年同じく「キムンカマイの祈り」を刊行。網走市在住。児童文学の会会員。(柴村紀代)

佐藤真佐美 (さとう まさみ) 昭14・3・29、(昭39)「児童文学」網走管内清里町生ま

れ。酪農学園、札幌短大、玉川大学に学び、その後米国、韓国に遊学。教職を経て、現在は児童文学創作活動に入る。昭和48年「マンガの世界」で北川千代賞佳作受賞。作品にオホーツクの風土に生きる開拓農民を描いた「ジョンガラの歌がきこえる」や「これはしつれい大せんば」。「ぼくらは地底王国探検隊」などがある。日本児童文学者協会会員。山梨県在住。

(柴村紀代)

佐藤眠羊 明12・2、没年不詳(1879?)「新聞記者」根室市生まれ。本名長蔵。小樽新聞岩内支局記者時代に、有島武郎の「生れ出づる悩み」刊行の約三カ月後、モデル木田金次郎のスケッチ入り記事「稲穂崎の素人画家」を連載している。

(高山亮二)

佐藤泰志 昭24・4・26(1949)「小説」函館市生まれ。函館西高校を経て国学院大学文学部哲学科卒。肉體労働をしながら創作に励む。高校在学中に「青春の記録」が第四回有島青少年文芸賞、「市街戦のジャズメン」が第五回同賞のそれぞれ優秀賞になり、「もうひとつの朝」などを「北方文芸」に発表。51年には二〇〇号記念北方文芸賞に応募した「深い夜から」が佳作に選ばれた。「草の響」「きみの鳥はうたえる」「光る道」「美しく夏」(文芸芸)、「水晶の腕」

「空の青み」「防空壕のある庭」(新潮)、「黄金の服」(文学界)などを発表、芥川賞候補になること四度に及んでいる。

(小松 茂)

佐土原台介 昭16・8・18(1941)「詩」愛媛県生まれ。日本大学芸術学部映画科卒。映画界で助監督を経験。昭和48年来道。苫小牧に住み、59年離道。「おくれてきた書物」(昭46)、「団扇をつくる詩人」(昭50)、「脳体解剖詩図」(昭51)。52年高橋涉二、大島竜と詩朗唱運動体「ウラヌス」創立。「鍊夢詩篇」(昭54)は三人の合同詩集。55年に個人詩誌「唯我」創刊。詩の朗唱に力をいれた。

(矢口以文)

里見純世 大8・12(1919)「短歌」網走市生まれ。本名正。旭川師範第二部卒業後、阿寒の舌辛国民学校を振り出しに教員生活、網走市立南小学校教諭を最後に退職。歌歴は相馬御風の「野を歩む者」会員、その後昭和21年「新壘」、22年「潮音」加入、いずれも現在同人。「旅情」(昭39)、「見晴」(昭43)、「砂丘に二人」(昭45)の歌集と「純世アルバム」(昭54)の還暦記念の詩歌集を持つ。

(前田信二)

里見 弾 明21・7・14、昭58・1・21(1888~1983)「小説」横浜市生まれ。本名山内英夫。有島武郎の実

弟。学習院を経て東京帝大英文科に入学したが、中退。明治43年「白樺」創刊には長兄有島武郎、次兄生馬とともに参加。大正4年山中まさと両親の猛反対をおして結婚。小説の小さな「と呼ばれた筆致で「善人悪人」「多情仏心」「安城家の兄弟」等を発表。昭和43年文化勲章を受章。「里見弾全集」全一〇巻がある。

(高山亮二)

佐貫徳義 明43・2・17、昭49・6・2(1910~1974)「小説」小樽市生まれ。小樽新聞記者。昭和7年ナルプ小樽支部準備会結成。10年山野千衛の名で「小林多喜二を回顧する」(文学評論)を執筆。16年「北方文芸」創刊に参加し「孤児たち」を発表している。

(玉川 薫)

佐野四満美 明33、昭45・1・8(1900~1970)「児童文学」札幌市生まれ。青年時代は小学校教師。終戦時、北海道新聞社文化部。美術評論家として、厳しい眼力の持ち主。大正13年10月30日児童文芸雑誌「児童文芸」(文芸運動社)を札幌で創刊。「児童文芸」は、商業雑誌としての体面を保ちつつも、同人誌的側面もち、佐野四満美の独特のスタイルを偲ばせるものがある。

(渡辺ひろし)

佐野翠披 明21・4・27、没年

不詳(1888?)「短歌」弘前市生まれ。本名光雄。社会政策学院卒。大正1年から6年まで、下富良野、旭川で国鉄勤務。のち本州に転住、国鉄駅長を経て会社員。はじめ尾上柴舟に師事、大正4年「潮音」「霸王樹」「橄欖」を経て、昭和15年「登音」、35年「白鷺」を創刊、主宰した。合著「交響」(昭6)がある。小田観螢、山下秀之助らと並んで、「潮音」の先輩的存在だった。

(中山周三)

佐野法幸 大7・11・25(1908)「政治、エッセー」紋別市生まれ。立正大学卒。紋別市議を経て道議会議員(昭33・9・50・4)、道労働金庫理事長を歴任。洒落な文章の中に鋭い観察がある。著書に「北海道自治は病んでいる」(昭49)、随想「ゆるふん譚」(昭55)がある。

(山内栄治)

佐野 洋 昭3・5・22(1908)「小説」東京生まれ。本名丸山一郎。東京大学卒。読売新聞札幌支社在勤の体験を生かした「一本の鉛」(昭34、東都書房)などで推理小説界の第一人者となった。48年北海道新聞連載の「血が走る」も日高、札幌、東京が背景で、のちに「牧場に消える」(光文社)と改題。他に「親しめぬ肌」(講談社文庫)、「空翔ける娼婦」(文春文庫)、「月刊ダン」連載の「北の事件簿」(新潮社)などが

ある。

寒川光太郎 明41・1・1、昭52・1・25(1908~1977)「小説」留萌管内羽幌町生まれ。本名菅原憲光。父繁蔵は「樺太植物誌」全四巻を著した植物学者。小学校教員の父に従い、八歳で樺太大泊に移住して少年時代をすごす。北海中学(現北海道高校)に進み、同人誌「街道」を作って創作に親しむ。法政大学中退後、樺太と満州で新聞記者、東京で喫茶店を営んだりしたのち樺太に戻り、数年間、父とともに植物採集に従った。昭和12年上京、14年7月創刊の同人誌「創作」に発表した「密猟者」によって第一〇回芥川賞を受賞。単行本「密猟者」(昭15、小山書店)、「未婚手帖」(同、高山書院)、「海峡」(同、河出書房)、「草人」(昭16、中央公論社)、「流水」(同、高山書院)などを続々刊行したのち、16年12月の太平洋戦争開始と同時に海軍報道班員として南方戦線に従軍。「薫風の鳥々」(昭18、文松堂)、「従軍風土記」(同、興亜日本社)などを刊行。19年再徴用されフィリピンで米軍の捕虜となり22年に帰国した。「北風ぞ吹かん」(昭17、桜井書店)が北見地方のハッカ栽培にまつわる開拓文学としてすぐれた作品である。戦後も「吹雪と原始林」「熊」(昭24、日本交通公社)などの

(八重樫実)

エッセーで北海道に愛着を示す。フィリピンでの捕虜体験をふまえて遺骨収集を政府に訴えた「遺骨は還らず」(昭27、双葉書房)に主力を注ぎ、創作から遠ざかった。「密猟者」短編小説。昭和14年7月、「創作」。「文芸春秋」(昭15・3)再掲。第10回芥川賞受賞作。主人公の豹(あだ名)は野獣の官能を身につけた狼の名人である。白熊を密猟する外国船に雇われ、日頃から敵対する稲妻とよばれる猟師が白熊に襲われたのを助けようとして射たれ、獣のように死ぬ。自然と人間をダイナミックに描いた作品。

(神谷忠孝)

鮫島交魚子 明21・4・26、昭55・10・19(1888~1980)「俳句」長野県生まれ。本名竜水。大正4年東京大学医学部卒。北辰病院名誉院長。14年に小樽病院外科医長兼副院長として渡道。昭和6年北辰病院長となり職員及び看護婦らの教養向上のため水無瀬白風らと俳句を作り始めたのが第一歩で、7年より石田雨園子に師事。8年虚子門に入り「ホトトギス」「玉藻」に投句。後に「桐の葉」「芹」などにも投句。20年ホトトギス同人に推される。23年札幌ホトトギス会会長。30年8月北海道俳句協会結成と共に代表幹事となり以後亡くなる

まで会長として北海道俳壇をまとめ結社意識にとられない包容力が信望を集める。33年北海道ホトトギス会長。46年北海道文化賞、52年札幌市芸術文化功労賞、死後北海道開発功労賞を受賞。句集に「返り花」「花栗」「花紫苑」などがある。

〔花栗〕^{（平）}句集。昭和52年6月北海道俳句協会刊。第一句集「返り花」も含め、著者俳歴四五年の総括句集。虚子選、ホトトギス・玉藻雜詠選句約九〇〇句を収録。高浜年尾は序文の中で「交魚子の長寿が現在の北海道に於ける私達のホトトギス仲間の繁栄を引立ててくれる。若い俳人諸君は交魚子を囲んで句精進しているのである」と述べている。〈炭焼夫ともなり湖に漁なき日〉

（嶋田一歩）

鮫島昌子 ^{（嶋田一歩）} 昭6・10・27（65）〔短歌〕札幌市生まれ。北海道大学文学部、同大学院修士課程（国文学）修。旧姓小林。学生時代から中山周三に師事、「原始林」に出詠、活躍。昭和31年第一回田辺賞、翌32年原始林賞を連続受賞した。札幌の風土に密着した生活感情と、やや内向的で、古典文学の素養を源とする繊細な感受性は独特の作風を生んでいる。「原始林」主要同人による合同歌集「原始林十人Ⅲ」（昭38）に参加

している。（田村哲三）

更科源蔵 ^{（田村哲三）} 明37・1・27（戸籍上は2・15）昭60・9・25（1984）1988〔詩〕釧路管内弟子屈町生まれ。東京麻布獣医畜産学校中退。父母は新潟県からの開拓移民。麻布獣医在学中の夏休み帰省中に詩作をはじめ、翌年肺を病み休学中に弟子屈郵便局員岡本清一と同人誌「リリー」（のち「ログス」と改題）を発刊。大正14年尾崎喜八選により「抒情詩」に入選。同時に入選した金井新作、真壁仁、伊藤整との交流はじまる。昭和2年渡辺茂、葛西暢吉と共に「港街」創刊。翌年伊藤整と上京し高村光太郎を訪ね生涯私淑する。同年高村の命名による「至上律」を創刊。5年阿寒に入植した猪狩満直を加えて「至上律」を「北緯五十度」と改題。同誌も高村の命名による。同年12月第一詩集「種薯」を刊行し、原野の農民生活を基底とした現実告発と人間愛の詩風が高く評価された。6年4月夕張郡角田村（現栗山町）出身の中島はなゑ（中島葉那子）と結婚。この年屈斜路コタン小学校代用教員を敵首。以後釧路川密漁監視員、蔬菜園芸、郷土玩具制作、印刷業、牛飼いを転々。14年4月妻の病死により翌年牛飼いを断念して札幌に出て写真工房勤務、北大新聞編集、「北方文芸」編集、「北海道畜産史」

テネ・フランセ、太平洋画会研究所に学びながら、象徴派詩人川路柳虹に師事。「現代詩歌」に作品発表。次いで象徴派詩人として認められた西条八十に兄事。「白孔雀」創立同人となり、12年雑誌「住宅」の編集長となり、かたわら「黄表紙」「銀座」「文芸春秋」「文芸時代」「婦人公論」「新小説」「クラク」などに執筆してダンディな都会派詩人として知られていった。「海のまぼろし」の語句の一部を変え、箕作秋吉が作曲した「悲歌」は日本の代表的歌曲として知られる。昭和41年6月詩碑が岩内町雷電に建立され、翌42年6月に遺稿集「華やかな憂鬱」が発行された。現在原稿の大半は中国北京で行方不明である。

（平 善雄）

沢井繁男 ^{（平 善雄）} 昭29・1・13（1954）〔小説〕札幌市生まれ。本名茂夫。京都大学大学院修。作品に「孵化」「方舟」「密行」「雪道」（北方文芸）があり、「雪道」で北方文芸賞受賞。その他「水筒」（十字路）「坂道」（ditto）などの作品がある。現在京大研修員。

（小松 茂）

沢井芳生 ^{（小松 茂）} 明43・3・12（1960）〔俳句〕日高管内様似町生まれ。本名芳造。昭和25年様似の「うのとり吟社」設立に尽力。「雲母」に拠る。53年

句集「峡の樹」刊行。北海道新聞日曜文芸欄伊藤凍魚選の俳句作品賞を受賞。

（島 恒人）

沙和宋一 ^{（島 恒人）} 明40・9・20（昭43・1・1）（1907）1988〔児童文学、小説〕茨城県生まれ。本名山本勝衛。さまざまな苦労を経て東奥日報社の論説委員などを務める。長編「オホツク海」（昭14・9、春陽堂書店）は作者がカムチャツカ漁夫の体験から生まれた作品で、海洋生活小説と銘打ち「生活文学選集10」の一つ。新日本文芸叢書「北海の漁夫」（昭17・8、錦城出版社）には津軽、北海道、カムチャツカ漁場の歴史が織り込まれている。（木原直彦）

沢田慶子 ^{（木原直彦）} 大15・1・3（1939）〔児童文学〕札幌市生まれ。「原野の風」同人。「アスファルトの上の光景」のほか北海道のむかし話を採集。「運上屋のアカ」などがある。日本児童文学者協会員。（柴村和代）

沢田潤生 ^{（柴村和代）} 明43・3・15（昭60・5・24）（1910）1986〔俳句〕旭川市生まれ。本名秀明。昭和32年「アカシヤ」に初投句。40年「葦牙」、43年「河」、47年「季節」、54年「人」創刊と共に入会、各誌同人。俳人協会員、北海道俳句協会委員。55年6月「人」叢書第一九編として処女句集「現顔」上梓。昭

編集などにたずさわり敗戦を迎える。その間に「コタン生物記」（昭17・9）、第二詩集「凍原の歌」（昭18・10）を刊行。戦後に入って21年2月渡辺茂、鈴見健次郎らと「野性」を創刊。22年7月札幌青磁社から真壁仁と共同編集により全国規模の「至上律」を創刊した。戦後の詩集に「河童磨」（昭21・11）、「無明」（昭27・7）、「更科源蔵詩集」（昭36・1、北海道書房）、「原野」（昭42・6）、「北海道百年」（昭43・11）、「河童道」（昭53・11）、「更科源蔵詩集」（昭48・6、北海道編集センター）、「白夜」（昭50・2）、「行雲」（昭52・9）、「コタン詩集」（昭59・4）、「如月日記」（昭59・7）があり、アイヌ文化研究、市町村史誌、自伝、随筆などの著作も数多い。北海道文化賞（昭25）、放送文化賞（昭42）、北海道新聞文化賞（昭43）を受賞。日本現代詩人会から（先達詩人への敬意）顕彰（昭55）を受けた。北海道文学館理事長。弟子屈、天売、南富良野に詩碑がある。（佐々木逸郎）

（佐々木逸郎）

沙良峰夫 ^{（佐々木逸郎）} 明34・3・11（昭35・5・12）（1901）1928〔詩〕後志管内岩内町生まれ。本名梅沢孝一。医師石川進の長男、母は名望家梅沢市太郎の長女イシ。父の影響を受け画家を志し、大正5年一六歳で札幌一中を中退し上京、ア

和3年師範卒業より45年定年退職まで一貫して教鞭をとる。（太田耕吐子）

（太田耕吐子）

沢田誠一 ^{（太田耕吐子）} 大9・9・18（1934）〔小説〕札幌市（平岸）生まれ。父は林檎園自営。昭和8年札幌商業学校に入学し、教師の影響で文学書の濫読がはじまる。13年卒業の頃から作歌をはじめ。16年陸軍高射砲学校に入学し、以後、小樽、北千島などを転じ、敗戦を埼玉県栗橋の高射砲陣地（中隊長）で迎える。22年西尾広子と結婚。23年ごろから小説の試作をはじめ、翌年ようやく上京の念を固めたとき父が急逝し林檎園を継ぐ。26年西村真吉のすすめで西田喜代司の「札幌文学」（9号）に「蠅のたかった歴史」を発表。27年休刊中の「札幌文学」を野間美英らの相談を受けて編集責任者となる。28年同誌に「重い発音」の連載を開始し、以後この雑誌を主舞台として活動を続けた。27年12月「新潮」に「准尉」が全国同人雑誌推薦小説として掲載される。30年北海道文学者懇話会の結成に、31年「北海道文学代表選集」の刊行にそれぞれ努力。38年9月処女短編集「耳と微笑」を日高晋の紹介で七曜社より刊行した。41年の北海道文学展開催と、42年の北海道文学館結成に尽力し、43年1月浪花剛の肝煎りで小笠原克らと「北方文芸」を創刊し、55年1月の

化勲章受章。小林多喜三が大正10年ごろから直哉の文学に強い関心を持ち、文通を続けていた。(和田蘆吾)

・3・23 (1885~1976)「短歌」長野県生まれ。本名太田みつ。歌人太田水穂は夫。東京女師文科卒。水穂主宰の「潮音」を助けた。昭和12年の7月から8月にかけて夫水穂と来道し、7月31日と8月2日の両日札幌で開催した北海道潮音新懇大会に出席した。水穂の没後「潮音」の主宰となり、35年の第三〇回新懇大会に講師として来道した。47年の潮音社全国大会(札幌)にも出席している。歌風は中道平明で、的確な具象の中に自在の風がある。(黒松の防風林をふちとして一湾は銀の水を充たしたり)

式場瑞枝 札幌 大12・8・7 (1912)

・(俳句)高知県生まれ。樺太豊原高女卒。昭和15年三井鉱山樺太内川炭鉱、住友金属プロペラ伸鋼所、22年三井美唄鉱業所に勤務、25年退職。46年「丹精」素玄会に入会し斎藤玄に師事、48年「壺」復刊と同時に同人参加。句と文両面で活躍。(金谷信夫)

時雨音羽 札幌 明32・3・19 (昭55)

・7・25 (1899~1980)「歌謡詩、随筆」宗谷管内尻尻町生まれ。本名池野音吉。

柱」などが単行本に収録。また児童劇「森のせんたく屋」は教育演劇研究会劇団たんぼぼにより五三〇回も上演された。(塚谷京子)

重森直樹 札幌 大15・3・15 (昭26)

・(小説)大阪生まれ。別名じゅうじょう・かなめ。北海道大学法文学部卒業後、国鉄に入社。北海道総局調査役を経て札幌ターミナルビル専務。国鉄文学会の初代会長で、現在は「国鉄北海道文学」の発行人。小説集に「断層」「季節の構図」「針葉樹林」、随筆集に「北海道たべもの歳時記」など。ほかに小説「亀裂」「小説・島義勇」(交通新聞)などがある。「コタンベツの丘」は第一三回北海道新聞文学賞候補作。(田中和夫)

中戸鉄蔵 札幌 大15・1 (昭26)

・(短歌)釧路市生まれ。昭和23年弟子屈歌会創立、「銀嶺」発行。24年雄別短歌会創立、「断層」発行。26年「山脈」「新懇」を経て「辛夷」復刊に参加。30年釧路歌人会を結成し現在会長。辛夷釧路支社長として支社誌「岳樺」を発行。53年第一歌集「尾白鷺」発行、同年釧路文学賞受賞。45年「釧路現代文学選集」に作品一六〇首収録。現在「辛夷」運営委員、選者。釧路工業高等専門学校技官。(大塚陽子)

穴戸 律 札幌 昭10・8・15 (昭33)

日本大学法科卒。大蔵省勤務のかたわら雑誌「キング」に発表した新歌謡詩「出船の港」「銚をおさめて」が中山晋平作曲、藤原義江の歌によって広く愛唱され、昭和3年ビクター創立に文芸顧問として入社。その第一作「君恋し」が佐々紅華作曲によって大ヒットした。「出船の港」は故郷利尻島のタラ釣り出漁の情景をうたったもので、ほかに「宗谷海峡月蒼く」「北潮節」「スキ」「洞爺湖畔の夕月に」など利尻や道内の風物をうたった作品が多い。随筆家としても活躍し、映画「雨情」の原作をはじめ戯曲も文芸春秋当選の「樹下の一夜」など数編がある。44年紫綬褒章受章。主な著作に随筆集「鳥物がたり」(昭23)、同「出船の港」、歌謡集「君恋し」(昭36)ほか。利尻島杵形岬に「出船の港」の詩碑がある。(佐々木逸郎)

重兼芳子 札幌 昭2・3・7 (昭6)

・(小説)空知管内上砂川町生まれ。高等女学校卒。父は三井砂川鉱業所勤務で、一二歳の時福岡に移住。はじめのころ「民主文学」に「黒土」(昭49・10)、「脱ぎ捨てたギブス」(昭51・8)などを発表した。が、駒田信二が指導する朝日カルチャーの創作講座に参加して「民主文学」を脱退。同人誌「まくた」に発表した「ペビィフード」「髪」がいずれも

・(小説)樺太生まれ。昭和31年より夕張市で教員生活。55年度の「赤旗」文芸作品小説部門に「産声」が入選後、「文化評論」「民主文学」に執筆。短編集に「産声」(昭59、白石書店)がある。民主文学同盟員、夕張文学会代表。(日高昭二)

志岡川倫 札幌 大14・1・3 (昭19)

・(小説)釧路市生まれ。本名渡辺捷夫。昭和22年民主主義文化連盟の募集に小説「晴着」入選、以来作家活動。戦中北千島要塞司令部に軍属としていた経験から、千島もの「一連の作品が多い。「久里留」「古里の十九日」「東京の地図」はいずれも「釧路現代文学選集」第四巻(昭45)に収録。著書に「流水の祖国」。ラッコ捕りの物語で、第四回サンデー毎日小説賞受賞。(島居省三)

志田冬彦 札幌 明45・1・4 (昭19)

・(俳句)山形県生まれ。本名範三。旧制小樽中学校卒。団体職員を長く勤めた。昭和25年より比良暮雪に師事して句作。飯田蛇笏来道を機に「雲母」へ入会、一貫して現在に至る。ほかに「にれ」同人。58年第三回にれ風響賞受賞。日常山野の自然相に触れて、自然を対象とした素材の句により、北方的な滋味深い作風を目指す。俳人協会員。(木村敏男)

(木村敏男)

芥川賞候補となり、三作目の「やまあいの煙」で昭和54年上期の第八一回芥川賞受賞。「見えすぎる眼」(昭54・7、「文学界」)は少女の眼を通して、炭鉱における職員と坑夫の子に対する教師の差別を鋭く描いている。単行本に「透けた耳朶」(昭54、新潮社)、「やまあいの煙」(同、文芸春秋)、「うすい貝殻」(昭55、同)などの短編集、「ジュラルミン色の空」(昭56、講談社)、「ワルツ」(同、文芸春秋)の書きおろし長編小説、エッセー集「赤い小さな足の裏」(同、潮出版社)がある。(神谷忠孝)

滋野透子 札幌 大正10・5・4 (昭21)

・(児童文学)岩見沢市生まれ。本名澄子。札幌静修女学校卒。初等科訓導養成所修了後教師生活に入る。昭和50年退職。昭和30年「樹の会」創立。同人九人、誌友八二人。同人は「樹」を、誌友は「苗木」を機関誌とし、「樹」は59年に四二号発行、「苗木」は一号のみ。56年「樹かげ文庫」創立。主な著書に「たんぼぼの歌」(たんぼぼの歌刊行会)、「シゲちゃんの目は千里眼」「すばらしい財産家たち」(以上アリス館)、「ながいながいたいけんりょうこう」(北書房)、「くずぶんの仲間たち」(新世紀書房)、「笛鬼」(理論社)等がある。その他「にげ出した神様」「常紋トンネルの人

志田白雨 札幌 明40・1・22 (昭6)

・(俳句)山形県生まれ。本名金吾。六歳の時渡道、紋別市に転住。国鉄職員として定年まで勤める。昭和42年滝上の西川喜代志に俳句を学び、以来「葦牙」に所属して作句にとめる。現在「葦牙」「雪垣」の同人。(太田耕吐子)

七条多藻津 札幌 大3 (昭14)

・(俳句)旭川市生まれ。本名保。昭和8年頃、武田篤塘の主宰する「南柯」に出句してたちまち異彩を放ち、篤塘没後も後継主宰渡辺志豊に重用された。12年以後は「海賊」「プリズム」「俳句会館」、そして戦後の「水輪」と、常に高橋貞俊、園田夢蒼花と作句活動を共にしていたが、26年頃突然旭川市から姿を消し、以後香として消息が判明しない。三原秀は「水輪」で用いた筆名である。(園田夢蒼花)

七戸黙徒 札幌 明23・2・9 (昭8)

・5・13 (1890~1953)「俳句」後志管内岩内町生まれ。本名平吉。北海道師範学校卒。浦河小学校校長等教員を勤めた。岩内には月並俳句の土壌が古くからあり、少年時代からその影響で句作に親しむ。明治40年岩内の「鶯声会」に入る。その頃の札幌は、新傾向の自由律俳句が隆盛を見せた頃で、徐々に自由律俳句との交流を深める。大正4年から室蘭の小

学校教員となるが、旧派の「ひよどり会」に自由律の新風を吹きこみ、やがて萩原井泉水の「層雲」へ投じ、その巻頭を飾るなど代表的作家となる。昭和29年「層雲」の北海道樺太俳壇選者となった。6年の井泉水来道に際し、終始同道役をつとめた。その作風は、大正、昭和初期の不況に触発されて、民衆の生活をリアルに映しとった。遺句集に「黙徒句集」「父を打てや」がある。(人間が居て霧の底ひで種をまくなり)

(木村敏男)

品田雄吉 (しんたゆうきち) 昭5・2・3 (68) (映画評論) 留萌管内遠別町生まれ。北海道大学国文学科卒。「現代なテーマに裏づけられたスリラー」(「キネマ旬報」70号)など、雑誌「キネマ旬報」を舞台に映画評論の筆を執る。日本映画ペンクラブ会員。(日高昭二)

志乃翔子 (しのりょうこ) 昭22・8・21 (66) (短歌) 稚内市生まれ。本名山名富子。帯広大谷短大卒業後一時期実家の酪農業に従事する。山名康郎と結婚後、夫の影響や、中城ふみ子の作品に接するうち作歌意欲に駆られ、はじめて制作した「牛飼いの歌」三〇首で49年の第一七回北海道歌人会賞を受賞した。山名の発行する歌誌「潭」の編集発行等の陰の尽力者である。(永平利夫)

篠遠ひろ子 (しのとほひろこ) 昭7・1・7 (63) (小説) 東京生まれ。本名高久裕子。東京女子大学短大卒。朝日新聞「防雪林」に随筆を掲載。主な作品として「朝日女性」の小説に入選した「金髪」のジェニーさん」がある。(小松茂)

篠原敦子 (しのはらあつこ) 昭34・9・10 (69) (小説) 前橋市生まれ。本姓中島。県立前橋女子高校卒。昭和57年札幌転住。「北方文芸」に発表した「十一月」が「北海道新鋭小説集一九八三年版」(北海道新聞社)に収められる。ほかに「雪帽子」など。「くりまの会」会員。(木原直彦)

司野道輔 (しのりちのすけ) 昭2・4・1 (62) (小説) 旭川市生まれ。本名佐野道司。北海道大学農芸化学科卒。「冬涛」によって創作活動を開始。昭和31年「細菌列車」を書きあげ注目を受ける。34年一五号に「怒江に死す」を発表し高い評価をうける。ほかに「侮蔑の青春」「てんぷら革命」等がある。49年北書房から「雪の記憶」を出し、個のルーツをたどりかえしながら歴史の意味にせまる表現者の苦悩を、重厚な筆致で描いた。評伝「上野山清貞伝」もある。(高野斗志美)

柴 篤雄 (しばあつお) 明40・1・25 (68) (詩) 上川管内風連町生まれ。本名

の「刺客心中」(昭30・6、「オール読物」、増毛が舞台の「幻の魚」(昭43・2、同、箱館戦争もの「函館五稜郭」(昭42・3、同)、北見枝幸が舞台の痛快譚「生命ぎり物語」(昭47・11、春陽堂書店)などがある。(木原直彦)

柴村紀代 (しばむねよ) 昭21・10・26 (66) (児童文学) 台湾生まれ。八歳の時渡道。藤女子大学で童話サークルに入会し、昭和42年同人誌「青い猿」を創刊。「ひらく」「季節風」「原野の風」同人。日本児童文学者協会会員。北海道子ども本連絡会世話人。昭和51年「若きごめ達の出発」(北海道児童文学全集)第8巻収録)で北川千代賞佳作受賞。ほかに「おかあさんの湖」(講談社)「やませ吹くジロの島」(大日本図書)などがある。(加藤多二)

渋谷美代子 (しぶらみよこ) 昭16・5・16 (69) (詩) 上川管内和寒町生まれ。本姓田村。一〇代から詩作をはじめ、「青芽」「だいらある」同人を経て上京、詩学研究会に参加。帰道して個人誌「繻」を、ついで大門太(田村耕一郎)との二人誌「蛇蠍」を刊行。作品の主調は、早逝した父をはじめ幼年時に遭遇した死や狂気の世界を通じ、その孤独な青春や官能のゆらめきをモチーフとしながら昏い凄絶な情念が心象化される。しかし表現

壺井孝雄。昭和3年守田一夫と詩誌「疑視群」創刊。9年名寄市で宮林敏行、飯田一夫らと詩誌「風見鶏」を創刊する。その他「不死鳥」「北海詩戦」「律」燔祭」「国詩評林」等の同人として作品を発表。現在詩誌「情緒」同人。小樽市在住。(東延江)

柴英三郎 (しばえいざぶろう) 昭2・3・18 (67) (シナリオ) 東京生まれ。本名前田孝三郎。陸軍士官学校五九期生。終戦時帯広九一部隊長鯉登中將の三男。幼児母方の実家の養子となる。戦後は帯広で金沢隆志、藤本善雄ら経営の凍原社や公民館に勤め、地元の新演伎座文芸部員を経て上京、劇団東童に籍を置いたのち猪俣勝人の門下生となる。内田吐夢の「大菩薩峠」が脚本第一作。五社英雄の「三匹の侍」の台本などが有名。(八重樫実)

芝木朝次 (しばあさし) 明40・1・22 (65) 11・20 (1907-1976) (短歌) 札幌市生まれ。本名水島勝。凸版印刷勤務中に多くの俳誌、短歌誌にふれ短詩型文学に惹かれるようになる。青木郭公の「暁雲」に入り俳句に親しむ。戦後短歌誌「新翠」「凍土」を経て昭和47年矢島京子らと「彩北」を創刊、運営委員として編集発行に協力する。社会的な鋭い視野とみずみずしい感覚で人生の哀感を詠

は透明直截で、かつ日常性を超え、衝撃的でさえあり、短詩に絶唱ともいうべき佳品がある。また散文連作の試みもある。詩誌「ないふ」「餓鬼」「火蜥蜴」等にも関係。著書に詩集「母胎との対話」(昭39、青い芽文芸社)、「暗い五月」(昭42、思潮社)、「死斑鏡」(昭47、詩学社)、「優しい亀裂」(昭59、詩学社)、散文集「幼年連続」(昭56、蛇蠍舎)がある。(菅原政雄)

柴生田繪 (しばいくゑ) 明37・6・26 (60) (短歌、国文学) 三重県生まれ。東京帝国大学文学部卒。大学教授。昭和3年「アララギ」入会。斎藤茂吉に師事。16年の「春山」が第一歌集。40年「入野」、56年「統齋藤茂吉伝」は読売文学賞を受賞。その他歌集、著書多数。現在アララギ編集委員、選者。昭和9年土屋文明に同行して来道。近年は、38年、44年、47年と来札し、会員と交流を持っている。(笹原登喜雄)

島本赤彦 (しまのあかひこ) 明9・12・17 (大正3・3・27 (1876-1926)) (短歌) 本名久保田敏彦。長野県(上諏訪)生まれ。明治36年「比牟呂」を創刊。42年伊藤左千夫が東京に移した「アララギ」と合併、以後意欲的な作歌活動を開始。大正3年以後「アララギ」の刊行に当たる。大正2年中村憲吉との合同歌集「馬鈴薯の

み、個性ある文章を「彩北」誌上に発表した。また新人の育成に情熱をかたむけ温厚なうちにきびしきをもってその任にあたった。残された日記の遺言により遺歌集はない。(「労りはなくて風吹く藤棚」に花房ありてながき狂乱)(矢島京子)

芝木サチ (しばさち) 昭19・7・1 (64) (児童文学) 台湾生まれ。本名曾我幸代。札幌市在住。「原野の風」「青い猿」「ひらく」同人。日本児童文学者協会会員。「鳥の街」「コインランドリール」ス」など。(柴村紀代)

柴田久男 (しばひさお) 昭3・3 (1928) (短歌) 小樽市生まれ。昭和27年より空知管内南幌町農協勤務。58年定年退職。現在南幌町社会福祉協議会事務局長、公民館運営委員長、南幌短歌会事務局長など。原始林同人。36年歌会始入選、51年歌集「若きら」、58年「停年前夜」を出版、合同歌集「交流」の編集発行もする。三六年の歌歴をもち、わかち易い歌をモットーに、着実に足元を視つめつつ意欲的に取り組んでいる。(宮西頼母)

柴田鎌三郎 (しばたかみさぶろう) 大6・3・26 (昭53・6・30 (1917-1978)) (小説) 岡山県生まれ。本姓斎藤。慶応大学支那文学科卒。昭和26年の「イエスの齋」で直木賞受賞。「眠狂四郎無頼控」は爆発的人気を呼ぶ。本道取材作に空知集治監も

花」を刊行。ほかに「切火」「水魚」「太虚集」「柿蔭集」等あり。4年に来道。余市、小樽、狩勝を経て帰京。

(笹原登喜雄)

島木健作 けんさく 明36・9・7、昭20・8・17 (1903~1945) 「小説」札幌市生まれ。本名朝倉菊雄。北海道庁の小吏だった父が大連で病没後、分家した母の手で貧窮のうちに育てられた。高等小学一年で中退し拓殖銀行給仕をしながら夜学に通い、短歌や小品文を投稿し始める。立志して上京(大8)したが病気で帰郷。厚田村の富豪佐藤正男の援助で北海道中学に編入、卒業(大12)後再度上京、大震災で負傷帰郷、北大の雇員となり社会科学部に開眼、東北帝大選科入学(大14)、学生運動、農民運動に携わる。翌年、日豊香川県連合会書記となり、やがて非合法共産党入党、第一回普選(昭2・2)直後に逮捕され控訴審で転向を声明、7年春出所。この獄中経験を踏まえた「頼」「盲目」(昭9)で「一挙に注目され、短編集『獄』『黎明』『再建』で不動の地歩を築いたが、長編『再建』(昭12)が発禁を受け、農民運動組織再建のテーマが不可能となって一歩後退を余儀なくされ、転じて知識人の帰農土着の誠実な模索を主題とした『生活の探求』(昭12)が大ベストセラーとなり、

珍しい。当然出るべくして出された句集というべきで、胸部を病んだ時代の幾分の感傷を含んで、みずみずしい抒情をたたえた作から、父母を失った近作に至るまで、境涯性を濃く藏した句集である。

(木村敏男)

島崎藤村 とうむら 明5・2・17、昭18・8・22 (1872~1943) 「小説」長野県(馬籠)生まれ。本名春樹。一〇歳で上京、明治学院卒。明治25年9月明治女学校の英語教師となり、教え子佐藤輔子に恋し、教職を辞して関西放浪の旅に出た。「春」(明41)の素材がそれであるが、作中の安井勝子が佐藤輔子で、北大初代総長佐藤昌介の異母妹。明治28年5月札幌農学校講師鹿討豊太郎と結婚、札幌に住んだが、同年8月没。32年4月函館の網問屋秦慶治の三女冬子と結婚、小諸に移り住み、詩から散文へ転換を志し、やがて「破戒」の自費出版を果たすため、37年7月下旬函館の妻の実家を訪ねて出版費四〇〇円を借用。その旅の体験は「津軽海峡」(明37・12)に描かれた。その旅の時、青森に出迎えた鳴海要吉はその後増毛・コタンベツに住み、藤村との文通が続いた。渡島上磯の寿楽園に碑がある。
嶋田一步 いっぽ 大12・3・22 (1903~) 「俳句」東京生まれ。本名力。昭和

以後、昭和十年代を領導する小説家として絶えず陽の当たる場所に立たされることになった。「人間の復活」「運命の人」「嵐のなか」「礎」という長編の題名を見ても、戦争下の暗い時代を、良心の灯を消さず、生の在処を護るまいとする意思がうかがわれるが、随所に述べられる抵抗感や国策批判も、逆に為政者にとりこまれ、意に反して国策随順に滑りこむ結果となった。晩年の短編集「出発まで」(没後刊)収の「赤蛙」「黒猫」などは、小動物の生死の実相に仮託し、時流に抗しつつも流されてゆく運命を凝視し諦観する作者の真情が吐露している。主な取材作に「鱈漁場」(昭9)、「三十年代一面」(昭11)、「嵐のなか」(昭15)、「礎」(昭19)があり、「文学的自叙伝」(昭12)は「北方人の血と運命」を自覚した独自の主体を鮮やかにくまどる。「島木健作全集」全一五巻(昭51、国書刊行会)がある。

「嵐のなか」 あせな 長編小説。昭和14年11月、15年11月「日本評論」。富裕な都会の学生である主人公が何物かにせかれて北海道農業研究へ赴き、不在地主たるわが家の農場に滞在、篤農青年や開拓者に感銘を受け、思い決して満州へ渡ろうとする。信念更生の志が帰農土着に至りつく、まことに島木のな知識人学生の痛

23年東京慈恵会医科大学卒。25年北見市唐笠産婦人科病院に勤務。現在医院経営。25年「阿寒」主宰唐笠何蝶長女、摩耶子と結婚。何蝶の手ほどきを受け作句をはじめ阿寒、ホトトギスに投句する。高浜虚子、年尾、星野立子に直接師事。虚子山荘での夏の稽古会に毎年出席。北海道ホトトギス作家の集まりである「十人会」のリーダーとして摩耶子、依田明倫と共に、ホトトギスの代表作家。一步は「詩の中で俳句はドライな詩である」「ホトトギスの先人の築いた格調の高い句が俳句の本道であることは否定しないが、軽やかな句」に専心することにも大きな意義を感じている」とも言っている。北海道ホトトギス会長。札幌ホトトギス会長。ホトトギス同人。北海道俳句協会常任委員。俳人協会評議員。俳人協会北海道支部参与。句集「蟻」(昭26、牧羊社)、「白靴」(昭57、東京美術)がある。作風に類想類型のにおいは微塵もない。(きりりもなき銀杏落葉のついに終ゆ)

島田正策 しげさく 明34・1・11 (1901~) 「小説」空知管内北村生まれ。大正9年小樽商業学校卒。同年10月頃同校在学中の小林多喜二らと回覧雑誌「素描」を作り翌年まで七集で終わる。13年4月に多喜二らと同人誌「クラルテ」を

ましい生き方が伺える。(小笠原克) 島 恒人 とこじん 大13・2・13 (1902~) 「俳句」釧路市生まれ。本名安。

旧制帯広中学校卒。国鉄総務関係に長く勤めた。青年期から病を得ること多し、療養中に俳句を知る。昭和21年創刊の「春灯」で句作を始める。また釧路鉄道局時代、高杉杜詩花らと「緋鯛吟社」を結成し、道東俳壇に旗を揚げた。のち飯田蛇笏の格調正しい自然詠に惹かれ、26年「雲母」へ投じて句作に打ち込む。また樺太から引き揚げて伊藤凍魚に師事して、「水下魚」復刊と同時に参加。終刊まで編集同人。その後同じ蛇笏を師系とする石原八束の「秋」創刊に参加、同人となる。俳句以外の文学全般にも広く識見を深めて博学を知られ、46年「国鉄北海道文学」を創刊、発行人となる。57年に第一句集「風騷集」を刊行、これにより第一七回北海道新聞文学賞を受賞した。共著に「札幌の俳句」「札幌歳時記」などがある。俳人協会員、北海道文学館常任理事。(極月の夜の群衆として歩く)

「風騷集」 ふうそう 句集。昭和57年12月、秋発行所刊。昭和27年「雲母」へ投じて以来の、三〇年間の作を収めた処女句集である。句歴三〇年にして初句集というのは、句集ブームの近時の現象の中では創刊し、15年3月五号で終刊。回想記に「小林多喜二のこと」(新日本出版社「小林多喜二読本」)、「私の『自画像』を書いた頃」(昭53・3、「民主文学」)などがある。48年4月川崎市に移る。日本民主文学同盟准同盟員。(木原直彦) 島田 正 ただ 大3・6・21、昭55・5・17 (1914~1980) 「詩」渡島管内砂原町生まれ。上智大学で事務職、札幌に移り大成建設に勤務。かたわらカトリック教会等にてボランティア活動。自作詩の色紙販売により社会福祉事業に一〇〇万円献金を志し、その業完遂寸前に死去。詩集に「北涙の歌」「結婚」「愛」(昭35・昭森社)、「架ける橋」(昭47)。ほかに島田康光の筆名による掌編詩集「あこがれ」(昭23)がある。

島田梅洞 うめどう 明23・3・5、昭51・3 (1890~1976) 「短歌」新潟県生まれ。本名梅十。札幌師範学校卒業後網走管内で教職に就き、校長で退職後、団体勤務等を経て酪農経営。大正7年頃より作歌。「霸王樹」「にほ笛」「辛夷」等を経て「ぬはり」に拠った。昭和41年に地元元松村千代一らと「とうか短歌会」創立、初代会長として後進を育成した。51年に湧別町文化奨励賞受賞。風土性豊かな歌集「サロマ湖のほとりにて」(昭45)

75 185

がある。(村井宏)

嶋田摩耶子 昭和3・6・20(1938)「俳句」宮城県生まれ。唐笠何蝶の長女。フラワーデザイナー。昭和24年より父何蝶の膝下で句を作り始め、父の主宰する「阿寒」に投句、また星野立子の「玉藻」に投句し、高浜虚子、年尾に師事。25年嶋田一歩と結婚し、ホトトギスの夫婦作家として活躍。虚子山荘の山中湖畔で毎年行われる夏の稽古会に出席し、虚子が「月見草ひらくところを見なかつた」という彼女の句を激賞したことは有名。北海道「十人会」の異色中心作家であり、夫一歩と共に会員の指導に当たる。ホトトギス、玉藻の巻頭を占むること数十回。句集「月見草」、玉藻俳句叢書「更衣」がある。ホトトギス同人。俳人協会会員。北海道俳句協会委員。〈胎動は胎児の言葉籐寝椅子〉

(白幡千草)

志摩直志 大11・10・24(1926)「詩」空知管内浦臼町生まれ。本名津田実。高小卒。戦後詩作をはじめ宗谷管内豊富町日曹炭鉱で昭和22年同人誌「溪流」に参加。27年詩誌「律動」(美唄)同人を経て、29年「野性」(札幌)同人となる。詩集に「未完の一日」(昭和27)、「夜光虫」(昭和28)がある。札幌在住。造園業自営。(佐々木逸郎)

島 弘史 大2・1・11(1913)「俳句」上川管内比布町生まれ。本名弘司。国鉄に長く勤め退職。昭和5年より作句。石田雨圃子、新明紫明に師事し「石狩」「青女」「若葉」等に投句。「青女」同人。現住所旭川市。句集「だいつつ山」(昭和58)がある。(新明紫明)

島ふで女 大4・1・4(1915)「俳句」松山管内奥尻町生まれ。本名ふで。国鉄勤務を経て主婦。昭和11年樺太で伊藤凍魚の勧めにより句作に入る。14年改造社発行の「俳句三代集・巻一春の部」「同巻六秋の部」等に凍魚の推薦により作品が採録されたのを機縁に、以後凍魚門へ入り「水 downstream」に拠る。終戦で札幌へ引き揚げ後、同じく樺太より旭川へ引き揚げの凍魚を擁して、29年「水 downstream」復刊の発起人となり、終刊まで編集同人。その間、凍魚が飯田蛇笏の孤高の作風に共鳴して、「雲母」同人となったことに倣い、25年より「雲母」へ参加、55年同人となる。作風は冷徹な写実を基調としながら、北方の風土感に富む温かな人間性を内包して、骨格正しい伝統を追究する。50年第一句集「果樹園」刊行。現代俳句協会会員。〈無月かな匂ひ袋も遺品にて〉(木村敏男)

島本研一 昭和4・5・22(1928)「俳句」空知管内雨竜町生まれ。けた堀江格郎の紹介で「橄欖」に入会、山下秀之助の選を受けた時から。その頃短歌のほか小説や詩も書いた。兵役で作歌中断、自然退会。復員後、第二次「原始林」の前身「光」に入り、引き続き「原始林」創刊から同人、52年原始林賞受賞。現在選者。45年第一歌集「雪あかね」、57年12月第二歌集「南国」を出版。文学的に私淑している川端康成ゆかりの鎌倉に居住。東京、関東の原始林会員の指導に尽力している。

島 竜生 明37・8・6(1958)・6・5(1964)「俳句」宗谷管内利尻町生まれ。広島で被爆後札幌居住。昭和26年「天狼」に投句。30年「緋衣」に入会。緋衣賞受賞。35年「俳句評論」、38年「琴座」を経て50年「粒」同人。53年「俳句広島」同人。原爆症のためたびたび危機におちいる。56年句集「鬼」発刊。前衛を志向し清冽な作風に特徴がある。「粒」一五八号は竜生特集号。(山田緑光)

清水蛸月 大5・10・17(1916)「俳句」宗谷管内利尻町生まれ。竜谷大学卒。僧侶。昭和14年高浜虚子、石田雨圃子に師事「ホトトギス」「石狩」「緋蕪」同人を経て、40年「アカンヤ」入会、43年同人。句集「良夜」。利尻町教育文化功労賞受賞。利尻町文化協会長。(岡澤康司)

清水堅一 大6・2・8(1916)「短歌」東京生まれ。昭和16年北海道大学農学部農業経済学科卒。帰京して農業団体の全国機関に就職。17年4月から終戦まで兵役に服す。33年から日本貿易振興会に勤務、その間シンガポール駐在、鹿児島の出先機関、通産関係年金基金に勤務して57年退職。作歌は、昭和13年北大新聞の短歌コンクールに斎藤茂吉選で天賞を受けた際、同時に人賞を受

本名浦本修。昭和28年より作句。31年に創刊された「際」に参加。36年刊行の句集「黒穂」は風土性の色濃い農民俳句として注目を浴び、翌37年現代俳句協会会員となる。40年事業の失敗により作句中断。昭和44年「扉」へ参加し、「扉」改題により「道」同人となる。夫人の有田茉莉も俳人。他に句集「樹」がある。(北 光星)

島本純一 大11・8・16(1922)「小説」小樽市生まれ。本名川島義一。昭和15年3月に当時の日本製鉄輪西製鉄所入社。社内報「白樺」を手はじめに社内文芸誌「足跡」(昭和21・8、創刊)の編集を担当する。敗戦直後の室蘭文学運動の担い手で、「習作時代」「二十世紀」などにかかわる。28年3月には木原直彦らと「室蘭文学」を創刊した。主な作品に「小さい手の女」「乾土」「河の見える家」「静かな祭」など。42年12月に名古屋へ転住した。(木原直彦)

島 義勇 文政5・9・12(1747)「政治」肥前藩士の家に生まれる。安政4年(一八五七)幕命で蝦夷地巡見、明治2年開拓判官となり札幌開府に努めたが、4年東京に召還。7年佐賀の乱を起こし、死刑となる。「人北記」「北海道紀行」がある。(小野規矩夫)

清水冬眠子 明32・4・8(1911)「川柳」小樽市生まれ。本名喜一朗。空知農業学校(現岩見沢農業高校)卒。北海道農業共済組合連合会総務課長。大正12年から句作に入り、15年小樽柳吟社(後の小樽川柳社)の「はららご」創刊により編集担当。昭和12年東京の中心グループ、川柳きやり吟社(主幹村田周魚)社人となる。15年小樽川柳社「番茶」創刊により編集責任者。16年日本川柳協会小樽支部常任幹事兼書記長。23年川柳雪吟社(小樽)誕生により社友。30年小樽市文化祭川柳選者。33年北海道放送四季の綴り川柳選者。34年北海道新聞「時事川柳」選者。39年北海道川柳連盟初代会長。その味のある作品、こくのある選句眼から、坂下銀泉、東田扇果、谷内香魚、中野草路、塩見一釜、姫宮遊子、新川洋洋ら多くの門下生が育った。著書は句集「樽」「川柳を作ろうとする人へ」(昭和41、小樽川柳社)がある。(塩見一釜)

志水 汎 明43・5・1(1910)「短歌」留萌管内初山別村生まれ。本名清水仁三郎。昭和7年「青空」初山

別支部に加盟。その後「宗谷路」「輪」等に所属。現在「北土」編集委員。8年合同歌集「天塩路」、50年歌集「北の年輪」出版。地方公務員等三十有余年勤務、44年退職。終始口語短歌に取り組み、枯淡の歌境に味わいがある。

(吉田秋陽)

清水康雄 生誕 昭7・2・4 (1932) (詩、出版) 十勝管内広尾町生まれ。筆名清水康。旧制帯広中学(現柏葉高)を経て早稲田大学卒。青土社代表。詩集「詩」(書肆ユリイカ)、訳書にヘンリーミラー「南回帰線」(角川文庫)、共著「ドイツ詩論」(思潮社)がある。

(神谷忠孝)

子母沢寛 生誕 明25・2・1 (昭43・7・19 (1932)~1968) (小説) 石狩管内厚田村生まれ。本名梅谷松太郎。生涯伊平という父親を知らず、母三岸イシは橋岩松と駆け落ちして異父弟の画家三岸好太郎を産んだ。祖父梅谷十次郎は五稜郭にたてこもって敗れた御家人で、寛は祖父母の美子として育った。その回顧談が子母沢文学の源泉となっている。厚田小学校を出て庁立函館商業学校に進んだが、間もなく私立小樽商業学校に転じ、さらに札幌の私立北海中学校に移った。在学中に文学活動を開始し、卒業した明治44年に上京して明治大学に入学。大正

3年に卒業して地方紙の編集に携わったあと札幌に戻り、新聞記者や木枝関係の仕事に従事した。7年に読売新聞社に入り、15年に東京日日新聞社に移る。昭和3年処女出版の「新選組始末記」(万里園)は新選組ものの必読書となった。

「笹川の繁蔵」「国定忠治」「弥太郎笠」などによって股旅ものの大衆作家として地位を不動にした。戦後の代表作「勝海舟」「父子鷹」「おとこ鷹」はいずれも祖父の像が映されており、これら幕末・維新ものによって37年に菊池寛賞が贈られた。晩年になって戊辰戦争の終わりを告げた箱館戦争や故郷厚田を捉えた作品が多いのは、幼時から半生を通じて寛の記憶に烙印のように残っている祖父ゆえである。「行きゆきて峠あり」「花の雨」「蝦夷物語」「厚田日記」「南へ向いた丘」などがそれであり、回想記「曲りかど人生」(昭39)には北海道時代が多く語られている。49年11月に子母沢寛文学碑が故郷の厚田に建った。

「蝦夷物語」 生誕 昭和33年12月「別冊文芸春秋」。35年4月「蝦夷物語」中央公論社刊収。「或る二人の敗走者」のサブタイトルがあり、一種独特な語り口を通じて負け犬であった祖父への愛情をにじませている。五稜郭で敗残の身となった主人公ら七人は厚田に身

を落ち着けるが、「厚田日記」(昭36・10、「小説新潮」)は続編であり、「南へ向いた丘」(同・7、「小説中央公論」)はその姉妹編。

(木原直彦)

下田かなふ 生誕 大12・6・3 (1933) (俳句) 東京生まれ。本名光子。第一生命に勤務し社内の俳句グループ「あおきり」に参加し俳句を学ぶ。昭和18年戦火が激しくなり疎開のため北海道滝川に移住、「北方俳句人」の旗揚げに参加。細谷源二、川端麟太らを識り、「働く者の俳句」に混雑たる戦後の青春を俳句に傾けた。後に改題した「氷原帯」の企画同人。句集に「リラ冷え」がある。

(川端麟太)

下村千秋 生誕 明26・9・4 (昭30・1・31 (1933)~1955) (小説) 茨城県生まれ。早稲田大学英文科卒。代表作に「天国の記録」があり、プロレタリア文学運動に刺激を受けた同伴者作家として知られる。短編集「月寒の女」(昭4・11、中央公論社)のなかの「月寒の女」は昭和7年ごろの札幌を描いている。「北海流人」(昭10・8、「中央公論」という短編もある。

(木原直彦)

影響を受けて詩を書き出す。昭和4年西倉保太郎、吉本伸一(西倉の弟、工藤昇、中家ひとみらと詩誌「裸」創刊同人となる。5年詩誌「登場」(5号終刊)の発行。7年西倉、吉本と詩誌「不死鳥」を創刊。9年詩誌「国詩評林」同人となる。ほか詩誌「街頭風景」「青年文学」「辺境文学」などに精力的に詩作を発表。22年8月詩誌「情緒」を創刊、以後多くの同人の詩集発行を手がけてきたが、28年の詩誌「大雪山系」は一号で終わる。進学時の数年をのぞき、旭川を離れることなく詩、短歌を書きつづけ、常に美しい詩誌づくりに専念してきた。詩展、詩画展、朗読会などへの積極的な協力は若い詩人たちの台頭をうながした。37年旭川市奨励賞、55年旭川市文化賞受賞。詩集「風の歌」「鍾」「献呈詩集」「鶏助詩集」「無言な冬」。エッセー集

死体の小鳥ノゴマの喉の赤の美しさが忘れられず、生きた夢の姿を求めて原野を心のふるさととし、「カラスの四季」「原野の四季」「牧場の四季」「牧人小屋だより」「草の中の伝説」等著書多数。

(中沢 茂)

「北窓灯語」「贗作自画像」。歌集「七面鳥」「木版歌集」。詩誌「情緒」主宰。趣味の小冊子「さろん・ど・おんくり」の発行。旭川詩人クラブ代表。北海道詩人協会、北海道文学館理事。(東 延江) 周はじめ 生誕 昭5・12・22 (1930) (鳥類研究、エッセー) 愛媛県生まれ。本名吉田元。中央大学法学部卒。昭和28年4月北海道に渡り、三年間、道東地方の人と自然に親しむ。六歳の時見た

庄崎稲胡 生誕 大6・11・5 (1907) (俳句) 後志管内岩内町生まれ。本名之男。自治大学校第二部修。昭和9年俳句開始、20年地元俳誌に出句、「雲母」に拠り終戦後俳誌「冬虹」を経て現在「北の雲」同人。俳人協会会員。岩宇俳句連盟会長、前岩内教育長。(島 恒人) 庄子風夫 生誕 大15・10・22 (1908) (俳句) 帯広市生まれ。本名三郎。旧帯広中学卒。国鉄技術関係(昭19)昭57)勤務。俳句は「アカシヤ」土岐鍊太郎(昭27)、「草人」矢田枯柏(昭30)に師事。職場の文芸誌「どんかち」に関係。退職後札幌市に居住。(佐々木露舟) 庄司はるみ 生誕 大13・10・31 (1924) (短歌) 札幌市生まれ。旧姓代田。口語歌人代田茂樹(本名茂)が父。帝国女子理学院専門卒業後道内の高等女学校で教職。昭和30年より上京。合同歌集「原始林十人」(昭38)のほか歌集「冬の黄蘗」(昭53)がある。

松密二 生誕 宝暦6 (文政6・7・9 (1756)~1823) (俳句) 宮城県生まれ。本名岩間清雄。陸前白石城下千手院の住職で権大僧都。父支羅に俳諧を学ぶ。享和3年(一八〇三)江戸に出て、「畑芹」を編み、翌年帰郷。乙二は天明以後の優れた俳人として名を成した宗匠であるが、蝦夷地の時代に二回来遊して、前後七年間にわたり俳諧の指導普及に携わった。当時の蝦夷地は、松前藩治下の上方文化の流れと、徳川幕領時代の江戸文化の影響下にあつて、享保2(一七一七)年京都の連歌師柏亭魄哉を松前矩広が招いて以来、乙二が最も著名である。乙二来島目的については、露人の侵入が見られた北方の視察と、宗門の布教を兼ねて俳諧の伝授を目的としたと伝えられるが、定かではない。しかし交通

庄司はるみ 生誕 大13・10・31 (1924) (短歌) 札幌市生まれ。旧姓代田。口語歌人代田茂樹(本名茂)が父。帝国女子理学院専門卒業後道内の高等女学校で教職。昭和30年より上京。合同歌集「原始林十人」(昭38)のほか歌集「冬の黄蘗」(昭53)がある。

庄子よしゑ 生誕 大4・9・26 (村井 宏)

困難な蝦夷地へ、病弱の身をおして二回も来遊したのは、郷里で乙二の教えを受けた模窓布席の招きによるものである。初めは文化7(一八二〇)年から同10(一八一三)年まで、二回目は文政元(一八一八)年から同2(一八一九)年までで、この間箱館から松前、江差等へたびたび足を延ばし、門人の育成に努めると共に、蝦夷地の大衆に俳諧を深く根づかせる基礎を築いた。乙二の業績で最も注目すべき著作は「蕪村発句解」で、これは従来難解とされてきた蕪村の研究に先鞭をつけたものとされ、このほか「松窓乙二発句集」「斧の柄草稿」「乙二七部集」がある。(木村敏男)

庄野凡人 明28・8・4(一八95)〔俳句〕徳島県生まれ。本名巖。大正4年平取に入植。10年頃地元小学校の藤原校長に俳句の指導をうけた。極の実俳句会長。「葦牙」躍日集同人。昭和44年平取名誉町民第一号。(太田耕吐子)

正部家一夫 大8・6・2(1919)〔俳句〕小樽市生まれ。昭和19年千島捉島従軍中、荒寥無聊に堪えかねて始めたのが作句の動機。「葦牙」金剛集同人、同小樽支部長。北海道俳句協会地方委員。小樽俳句協会役員。会社役員。(太田耕吐子)

師事し文章を勉強する。虚子、年尾に師事する。「ひかぶ」の編集にも参加。ホトトギス巻頭作家。53年ホトトギス同人に推される。北海道ホトトギス会幹事。札幌ホトトギス会副会長、俳人協会員。句集に「心」「十人会句集」など。(嶋田一步)

白山友正 明39・9(昭52・11(1906~1977))〔短歌〕深川市生まれ。札幌師範を経て小樽高等商業を卒業、日本大学文学部、立正大学史学科に学び函館師範、北海道学芸大学函館分校の教諭、教授となり、昭和37年論文「松前蝦夷場所請負制度の研究」で文学博士の学位を受ける。大正8年頃より短歌に親しみ石川啄木、前田夕暮に私淑。短歌の定型に疑問をもち口語に依る短唱を提唱して歌壇に新風を入れ、やがて新興短歌連盟を結成して主幹になって活動したが、時局が復古調に向かったことと、文語短歌のリズムから逃れることが出来ず口語短歌の運動を停止せざるを得なかった。その後平易な調子を中心とした「短歌紀元」を出す。正四位勲三等瑞宝章に叙勲され、昭和37年札幌市宮の森山水閣に歌碑が建てられた。(宇宙花は心に生きて人の世の花火美しと見上げてあたり)著書に「短歌概論」(昭14)、「北海道歌壇史」(昭23)、「短歌入門」(昭26)等多

城 柳子 大8・1・25(一865)〔短歌〕函館市生まれ。本名久保田貞子。庁立函館高女卒。在学中より桜田角郎、後に荒井源司に師事。昭和16年「アララギ」、21年「羊蹄」、31年「北海道アララギ」に入会。53年歌集「二日月」を刊行。(笹原登喜雄)

ジョセフィン・コンガー・金子 生、没年不詳。有島武郎が在米中にハーバード大学で親しくなった金子喜一の妻。有島から彼女が聞いた経歴を踏まえた「一郎がはじめて受け取った恋文」(一九〇九・四「The Progressive Woman」)23号。昭50・1、「人文学報」104号川上美那子訳。「北海道文学全集」第3巻収がある。(小笠原克)

白井長流水 明27・1・29(1894)〔俳句〕愛知県生まれ。本名弥六。大正8年室蘭駅を振り出しに国鉄勤務。俳句は15年青木郭公の「暁雲」に拠り、のち「緋衣」「石楠」の同人として任地各地で地域俳壇の振興に貢献。江別市在住。「葦牙」同人。(佐々木子興)

白井秀 昭3・4・1(1928)〔小説〕樺太真岡生まれ。本名菊池昭。北海道大学卒。小樽商科大学教授。「札幌文学」同人。主な作品に「宿場町にて」「終わりの花」(札幌文学)、「それ

く、歌集には「要塞地帯」(昭11)、「海の陽」(昭25)、「臥す牛」(昭25)、「宇宙花」(昭34)、「白き夢」(昭34)等。没後、雑誌「短歌紀元」は、妻の白山登代子が発行責任者となり主要同人が遺志を受け継いで毎月発行を続けている。(村上清一)

白山登代子 明治36・9(1903)〔短歌〕岩見沢市生まれ。札幌菊本裁縫女学校卒。白山友正と結婚。大正13年頃より「新短歌」の西村溥骨に指導を受け、後に友正と共に「詩歌」の前田夕暮の薫陶を受け、友正を助けて口語歌運動を進める。後、文語歌に変わったが、友正のよき援助者となり、友正死後は雑誌「短歌紀元」を引き継ぎ、発行を続けている。函館市在住。(村上清一)

代田茂樹 明30・11・1(昭29・10・8(1897~1964))〔短歌〕札幌市生まれ。本名茂。札幌一中中退。古書店尚古堂を経営。大正8年「落穂」創刊。当時筆名松原歌集。10年文芸誌「路傍人」、昭和4年歌誌「寒帯」発刊。啄木、哀果、陽吉らの影響を受け生活派三行書の口語短歌を作っていたが、伊東音次郎、並木凡平と共に鳴。第一回札幌短歌会を安達不死鳥、近藤紫村、久城吉男らと発足させる。大正末期から昭和初期の口語短歌全盛時代には歌誌の創刊、廃刊が

それぞれのソウル」「兄嫁へのごとば」(北方文芸)などがある。(小松茂)

素木しづ 明28・3・26(大7・1・29(1895~1978))〔小説〕札幌市生まれ。本名シヅ。明治44年庁立札幌高女卒。最終学年ごろから右胸結核性関節炎発病。45年上京、赤十字病院で右胸切

断。病中、作家として立つ決意を固め、大正2年5月札幌時代の隣人藤村陣(操の父)の筋から安倍能成の紹介で森田草平に入門した。同年12月草平の小引文を付した「松葉杖をつく女」、翌3年5月に「三十三の死」を「新小説」に発表、好評を得て文壇に登場した。3年6月より約一〇カ月伊豆大島に転地療養。岡田(のち林原)耕三との恋愛実らず、江別出身の画家上野山清貢と知り、4年8月結婚、同12月長女桜子出生。貧苦と病苦の中で上野山との愛、子に対する母性愛を抒情的に描き続け、5年には新進女流作家としての地位を確立した。6年「美しき牢獄」を読売新聞に連載(大7刊)。短編集「三十三の死」「青白き夢」「素木しづ作品集」など。(和田謙吾)

白幡千草 昭2・11・23(1925)〔俳句〕留萌管内羽幌町生まれ。昭和58年国鉄を定年退職。昭和21年頃より水野波陣洞に手ほどきを受け「はまなす」「ホトトギス」に投句。京極紀陽に

相次いだ、この頃関係した歌誌は約三〇冊にも上る。北海道口語歌壇の草分け的存在。北海道口語歌人連盟の組織、北海道歌人連盟設立等歌壇の発展に尽力。戦後は北日本社を創設。「北方風物」を創刊する等各種出版物を手がける。昭和25年北海道文化奨励賞受賞。(ともかくも売らねばならぬ商人の笑ひ浮かべて値切られてゐる)

城山三郎 昭2・8・12(1925)〔小説〕名古屋生まれ。本名杉浦英一。東京商大卒。33年「総会屋錦城」で直木賞受賞。著書多数。本道関係では「石北峠」(昭38・9)、「小説新潮」はのちに「北海道文学全集」(立風書房)第一九巻に収載。同時期に新聞三社連合(中日、西日本、北海道新聞)紙に連載の「昨是今非」は「昨日は昨日」(集英社)と改題。56年同三社連合紙連載の「冬の派閥」(新潮社)などがある。(八重樫実)

の他)で第五回室生犀星賞受賞。日本現代詩人会長、北海道詩人協会会長の招きで来道講演。

新蔵利男 しんざりお 大5・12・24 (16)

〔短歌〕函館市生まれ。昭和19年立函館商業卒。家業の造船所を継ぐ。

八年を兵役に服し、22年から36年まで衣類の行商。紙器下請工場長、図書セールス、夜警、廃鶏処理工、食堂自営等を経て現在無職。35年1月「原始林」に入り相良義重に師事。同氏没後、平松勤に就く。43年度原始林社「田辺賞」を受賞。46年12月「寄貝旅人」の筆名を廃し本名を用う。51年11月歌集「貝寄せ風」を出版した。

進藤 紫 しんどうむらさ 大12・3・22 (16)

〔俳句〕帯広市生まれ。本名婦久子。療養中に短歌俳句に関心をもち、昭和40年頃から北光星の指導を受け、「道」同人となる。第一句集「壺」は女性らしい豊かな感性を賞揚され、47年第六回北海道新聞文学賞を女性としては初めて受賞。52年「道」随筆賞、54年「道」俳句作家賞を受賞。ほかに句集「魚眼」、合同句集「朱弦」等がある。(北光星) 神保光太郎 しんぼみつこうたろう 明38・11・29 (1905) 〔詩〕山形市生まれ。京都大学文学部独文科学卒。ドイツ文学者。戦時中シンガポール日本語学院を主宰。昭和

14年日大芸術学部文芸学科主任教授。昭和初年真壁仁、更科源蔵の第一次「至上律」に参加。「日本浪漫派」「四季」に加わる。詩集「鳥」「雪崩」「神保光太郎全詩集」あり、翻訳にエッカーマンの「ゲーテとの対話」がある。札幌市立開成高校の校歌は彼の作詞である。

新聞進一 しんぶんしんいち 大6・9・3 (16)

〔国文学研究〕東京生まれ。六高を経て昭和15年東京大学国文科卒。白百合女子短大教授を経て、昭和25年北大法文学部助教授(教養担当)として着任。中世歌謡と近代短歌とに業績をあげ、後進の育成に貢献した。北星女子短大、天使女子短大などにも出講、32年10月文部省教科書調査官に転出。現在青山学院大学教授「歌謡史の研究」(昭22、至文堂)、「近代短歌史論」(昭44、有精堂)。(和田謹吾)

新明紫明 しんめいむらさ 昭3・8・13 (16)

〔俳句〕室蘭市生まれ。本名美仁。北海道大学医学部卒。昭和21年から作句活動に入り、「はまなす」「若葉」に投句。「若葉」で頭角をあらわし33年同人。38年旭川鉄道病院内科医師の身であったが、「青女」を創刊主宰となり、率先して実作に励み「凡医のうた」はこの作家の特質を表象した作品として「青

女」を飾っている。40年俳人協会員となり現在同会評議員。昭和33年第五回若葉賞(新人賞)、59年若葉賞(結社賞)を受賞、代表的作家の評価を得た。50年旭川市文化奨励賞を受賞、旭川市芸術祭等の選者なども務める。富安風生、清崎敏郎門として清潔かつ恬淡の作風を展開し、伝統俳句を実作を通して推進、道内屈指の誌勢をもつ「青女」を作りあげた。〈落葉に火付けて凡医の凡手かな〉のごとく気負いのないのが特徴。

新明セツ子 しんめいせつこ 昭5・10・14 (1936)

〔俳句〕札幌市生まれ。北海道高女卒。昭和37年より作句し「若葉」「青女」に投句。夫紫明に手ほどきを受ける。両誌の同人とし、特に「青女」の編集に尽力、内助の功を果たしている。俳人協会員。(島 恒人)

新谷 行 しんやゆき 昭7・11・15 (昭54)

〔詩〕1932(1979)〔詩〕アイヌ問題研究「留萌管内小平町生まれ。本名新屋英行。中央大学卒。アイヌ解放に関わる積極的な論考が多い。「アイヌ民族抵抗史」「金子光晴論」「アイヌ民族と天皇制国家」「ユーカラの世界」などがある。(木原直彦)

末吉実子 すえきちみこ 明43・8・11 (16)

〔短歌〕福井県生まれ。帝国女子医専卒。札幌慈恵会病院勤務。眼科医。北海道書道会員及び審査員。昭和22年「羊蹄」、23年「アララギ」、28年「あかだも」、31年「北海道アララギ」に入会。樋口賢治に師事。(笹原登喜雄)

須員光夫 すゑひみつと 昭和4・8・25 (1909)

〔小説〕山形県生まれ。山形大学文学部文学科卒。浦河高校、札幌東高校を経て現在は苫小牧東高校教諭。「日高文学」「日高芸芸」「山音文学」等に参加し、現在「コブタン」主宰。主要作品は「高きポプラの森の中」「コブタン」創刊号、「亡びゆき一人となるも」「同2」「4号」,「あなたの優しい翼の中で」(同8号)、単行本「この魂をウタリに」(昭51、栄光出版)。(神谷忠孝)

菅江真澄 すがえまみ 宝曆4(文政12)

19 (1754(1829)〔紀行〕愛知県豊橋市近くの生まれ。故郷にいた頃は白井英二、旅に出てからは秀雄、秋田に定着した晩年に菅江真澄と称す。生前は白井秀雄が著名で、彼の没後、その遺著が総括して「真澄遊覧記」と呼ばれたことから菅江姓が普及した。少年時代、賀茂真淵の門人植田義方から国学、二〇歳代に尾張藩医浅井凶南に本草学を学ぶ。少年時

す

吹田順助 ふいたのりすけ 明16・12・24 (昭38・7・20 (1883(1963)〔独文学研究〕

東京生まれ。明治40年東京大学独文科学卒。東北帝大農科大学等で教鞭をとる。文学博士。芦風と号し上田敏らの「芸苑」の準同人。札幌時代同僚の有島武郎宅に寄寓するなどし親交を結ぶ。この間のことは有島の短編「半日」に描かれてゐる。著書に「独逸精神史」「近代独逸思潮史」等のほか各種翻訳と自伝的随想「旅人の夜の歌」がある。(高山亮)

吹田晋平 ふいたしんぺい 明35・8・19 (昭54)

〔短歌〕札幌市生まれ。本名晋進。高小卒。父祖は屯田兵出身。農業を営み、琴似町会議員を経て札幌市会議員を務める。昭和33年札幌市政功労者、38年紺綬褒章を受ける。長年新琴似地域の発展のため貢献した。作歌は一四歳ころよりはじめ、小学校の師北山哲平(本名福岡正生)に歌の手ほどきを受けた。のち「創作」や地元諸誌に出稿、大正15年11月若山牧水夫妻の来道

の際には、新琴似で歓迎歌会を催した。牧水没後の昭和2年「橄欖」に移り、同札幌支部歌会をおこす。それ以前大正13年同志と新琴似短歌会をつくり、以後断続して今日にいたる。戦後は第二次「原始林」に参加。山下秀之助、相良義重の指導を受ける。歌集は「平原」(昭36)、「植樹祭」(昭44)、「熱帯樹の街」(昭48)、「耕土」(昭49)、「流転」(昭51)、「峡谷」(昭53)、「吹田晋平歌集」(昭54)などがある。北海道歌人会委員。歌は実直で素朴、農民生活の実情を伝え、晩年国内外での見聞を多作している。昭和47年(村を拓きし屯田本部の跡どころこぶしは咲けり朝の日ざしに)の歌碑が新琴似神社境内に建立され、他に歌碑二基がある。(屯田二代目の我老いたれど九十年のけふの式典の長をつとむる)(中山周三)

末武綾子 すゑたかこ 昭9・6・12 (1934)

〔小説〕日高管内門別町生まれ。昭和31年藤女子短大國文科卒。平取高校教師時代に「室蘭文学」に加わり、のちに「エスプリ文学」(室蘭)にも参加。教職員文芸誌「文芸広場」(東京)を主な発表の場とし、同誌の創作年度賞を二回受賞。著作に「パチエラー・八重子抄」(北書房)、児童文学佳作入選作に「無名の十字架」(学研)、「ゆきえの歩

代から旅を好み、三〇歳の春から旅に出
てついに故郷に帰らず、旅先に見られる
風俗習慣を克明に彩色の絵と合わせて記
録、旅日記は現在七〇冊、地誌は六〇冊
などあり、うち北海道関係は「えぞのて
ぶり」「えみしのさへき」など五冊。真
澄の記録が優れているのは、自分の眼で
観察した事実を客観的な筆で微細に記し
ているところにある。彼は自分の記録を
大切に保存することに努め、その著作を
佐竹藩に納めている。柳田国男は真澄の
民俗観察の態度に傾倒していた。

(藤本英夫)

菅村敬次郎 菅村敬次郎 昭14・4・25(1939)〔劇作〕東京生まれ。東京教
育大学国文科卒。高校教師として演劇部
顧問をつとめ昭和42年から創作劇に取り
組んだ。社会的問題を深く見つめた作品
が多く、主な作品に「老人炭鉱」「水晶
島」「コタン」「ここは幸子の家です」

「鱗翅幻想」や「鼓動」(青年劇場創作
脚本賞受賞)があり、昭和53年札幌藻岩
高校によって上演された「あしたは天
気」で全道大会最優秀賞を受け、翌年の
全国大会(金沢)で最優秀賞と創作脚本
賞を受賞した。共著に「北海道高等学校
創作劇集三」「北海道演劇史稿」がある。
札幌藻岩高校教師。(佐々木逸郎)

須賀ユキ 須賀ユキ 昭11・3・11(1936)

杉浦明平 杉浦明平 大2・6・9(1937)〔評論、小説〕愛知県生まれ。東
京大学国文科卒。代表作に「小説渡辺鞆
山」があり「ノリソダ騒動記」はルボル
タージュとして有名。日ソ交渉の渦中に
ある北洋漁業の実態をさぐった「国境の
海」(昭30・12、青木書店)は、昭和30
年夏に日魯漁業のサケ・マス母船栄丸
に乗り込んだ体験記でもある。

(木原直彦)

杉沢文月 杉沢文月 明37・6・28(昭4
0・6・4(1904~1929))〔詩〕静岡県生
まれ。本名実。明治39年両親に連れられ
て後志管内喜茂別村(当時)に移住。大
正11年5月同村山麓文壇社より同人誌
「十字架」を創刊、第三集から「青林
檜」と改題したが軍隊に入って中断。15
年除隊とともに恐神健次郎と呼応して北
海道詩人連盟の結成を提唱、「青林檜」
を「無名作家連盟及北海道詩人連盟の機
関誌」と銘うつとともに、平野行彦と同
人誌「破る」を創刊、詩誌「北海詩戦」
も発刊した。昭和2年俱知安新聞の記者
となり、発行所を北海道芸術協会と改称
して俱知安に移した。翌3年同所より詩
集「山の新聞記者」を発刊。同年小樽新
聞創立三五周年記念懸賞小説の三等に
「太陽を射る」が入選する。翌4年北海
道日日新聞が創刊されると、その記者と

し(詩)渡島管内七飯町生まれ。昭和
32年北海道学芸大学函館分校卒。小学校
教師。昭和37年頃「L・ヒューズ詩集」
中の一編、「七十五セントのブルース」
を読んで内なる放浪願望を刺激され、詩
的世界へ導かれる。まもなく北海道新聞
「わたしの詩」欄への投稿を始め、40年
選者小柳透の薦めにより、大野町在住の
詩人、鶴川(白石)章子を訪ね「バター
の馬」に加わり、本格的な詩活動に入
る。49年同誌廃刊後、新たに結成された
「帆pan」(編集、沢田三尾)の同人
となる。54年沢田の札幌転出の後を受
け、二七号より須賀が編集を担当。この
間、詩集「日常のはじまり」(昭43)、
「白水星」(昭45)、「忘却のはじまり」
(昭46)を上梓。従前の抒情を避け、日
常と対決する切れのいい機知的な語り口
に特徴がある。道詩人協会員。

(山本 丞)

菅原虚洞子 菅原虚洞子 大13・1・9(昭
52・8・11(1924~1977))〔俳句〕旭
川市生まれ。本名三郎。昭和17年栗木踏
書に学び俳句。「雲母」「葦牙」「緋衣」
「はまなす」に句出。「ダムのある療養
所」「異母妹の文」「林檎の里」などの句
集あり。滝川市で病没。(園田夢蒼花)

菅原圃鷲 菅原圃鷲 明39・9・27(19
08)〔俳句〕後志管内岩内町生まれ。

なつて札幌に移り、「青林檜」を「北海
道芸術」と改題して刊行したが、その三
カ月後に没した。

(武井静夫)

杉野一博 杉野一博 昭6・3・20(1931)〔俳句〕函館市生まれ。日本大学
芸術学部中退。北海道放送勤務。昭和22
年頃高校文芸部で近藤潤一らと俳句を始
める。「水下魚」(故伊藤凍魚主宰)を経
て、39年「四季」創刊(松沢昭主宰)に
参加、編集同人。47年、49年に四季年度
賞受賞。風土に立脚した俳句の純粹詩的
造形感覚を追求。北海道地区現代俳句協
会事務局長。句集に「待景」(昭53、四
季書房)がある。(辻脇系)

杉野黙勇 杉野黙勇 大13・11・9(1932)

や)〔俳句〕後志管内ニセコ町生まれ。
本名勇。昭和29年当時砂川在住の細谷源
二に師事。炭鉱マンとして三十余年を勤
め、この間炭鉱俳句作家として「水原
帯」の発展に努力。無季、不定形を容認
し、奔放な発想を基に独自の作句態度の
確立を志向する。俳句前衛を目指す一
人。現代俳句協会員。水原帯企画同人。
所屬誌「水原帯」「粒」。(川端麟太)

杉野要吉 杉野要吉 昭7・11・15(1932)

さ)〔近代文学研究〕美唄市生まれ。
早稲田大学卒。現早大助教。美唄工業
高機械科を出て二年間小学校の代用教員
を経て大学に進学。卒業後、道内の高校

本名常雄。昭和10年「曲水」に加入。21
年同人。戦後「葦牙」に拠り長谷部虎杖
子を扶け、40年虎杖子句碑を泊村茂岩に
建立した。50年句集「どんぐり」刊行。
(太田緋吐子)

菅原政雄 菅原政雄 昭8・11・2(1933)

さ)〔小説〕釧路市生まれ。北海道教
育大学旭川分校卒(昭31)。各地を経て
北見市内の中学校に教鞭をとる。昭和29
年以降「時間」「眼」「フロロティア」
「北見文学」など多くの同人誌に作品を
発表。詩集「馬糞道」「記憶の垂線」、小
説集「残党」(昭50)、「風の向こうから
の声」(昭56)のほか「北見文学史稿」
の労作がある。(小笠原克)

菅原道太郎 菅原道太郎 明32・2・18(昭
59・2・4(1896~1984))〔農学〕胆

振管内早来町生まれ。札幌一中を経て大
正5年に北大農学部に入學。在学中に稲
村順三、沢村克人らと「平原」を創刊し
て文学運動を展開したが、その事情は
「平原社のおし出」(昭41、42)、「北海道
文学」に詳しい。11年に卒業して樺太
に渡り、農事試験場に勤めるかたわら文
芸団体にもかかわった。昭和22年帰国。
樺太叢書「ツンドラ」(昭14、樺太庁)、
「赤い牢獄」「連獄中記」(昭24、川
崎書店)の著書がある。神奈川県の湯河
原で没した。(木原直彦)

教師。「堀辰雄の文学序説」(昭33)で東
大新聞五月祭賞佳作に入選。著書に「中
野重治の研究」(昭54、笠間書院)のほ
か、「党生活者」のよびかけるもの」
(昭51・6、「日本文学」)、「平野謙論」
(「群」)など多数の論文がある。

(神谷忠孝)

杉原佳代子 杉原佳代子 昭24・5・1(1909)

さ)〔詩〕札幌市生まれ。藤女子
短期大学国文科卒。詩誌「瞬」同人。詩
集「センチメンタルシーズン」(昭52・
4、瞬同人会)、「杉原佳代子詩集」(昭
57・10、芸風書院)。感覚的に優れた詩
で、日常をうたいながら日常を超えた世
界を感じさせる表現力の豊かな詩人。詩
がある地点に到達するまでの過程の美し
さはヴァレリーの原理、詩の舞踊を思わ
せる。(小松瑛子)

杉村暎子 杉村暎子 昭20・11・9(1905)

さ)〔小説〕札幌市生まれ。京都藤川
デザイン学院卒。「北方文芸」に「青春
のインクブルー」「シーソーの夏」「耳か
ら風がはいつて」「摂氏四度」を発表し、
「青春のインクブルー」は「北海道新鋭
小説集一九八三年版」(北海道新聞社)
に転載された。

杉本晃一 杉本晃一 大10・3・25(1902)

さ)〔短歌〕函館市生まれ。国学院大
学哲学科を経て北海道大学哲学研究科

卒。岩見沢東高、函館中部高の教諭を経て56年退職。昭和17年「アララギ」、21年「羊蹄」に入会。39年「北海道アララギ」に入会。46年武藤善友の死去により同誌の編集人となり、56年山内国治の死去により編集発行人となる。武藤善友、樋口賢治に師事。48年函館アララギ会発行の合同歌集「春の潮」に参加。アララギの写実に徹し、精選された用語の使用、確実な把握、緻密な表現による独自の歌風を地域の風土に密着した自然詠に力を注ぎ、独特な冴えを示している。〈驟雨すぎし埒頭ひと色にゆふぐれて銹びし鉄梯に水光りをり〉（笹原登喜雄）

杉本春生 大15・3・21（68）（詩）山口県生まれ。官立京城法学専門学校卒。札幌短大教授、広島大学文学部講師を経て現在岩国短大教授。詩誌「日本未来派」を経て、現在詩誌「地球」同人。詩集「初めての歌」（昭51・9、溪水社）、評論集「抒情の周辺」（昭30・9、ユリイカ）、評論集「現代詩の方法」（昭34・7、思潮社）、「光と闇のなかの詩人」（昭57・12、季節社）その他。

杉本政男 大3・7・29（61）（俳句）青森県生まれ。俳号静眉、着泉花を経て現在本名を名乗る。父の仕事を継いで自らも炭鉱マンとなる。昭和

7年紅林秋汀に手ほどきを受け「暁雲」加入。シベリアより23年復員「えぞにう」に参加、現在編集同人。また「石楠」「浜」に所属した。43年釧路俳句連盟会長となり、57年辞任まで各派の融和俳句界向上に尽くした。（鈴木青光）

杉山月魄 大20・9・3（昭37・4）（俳句）宮城県生まれ。本名常雄。郷里の農学校卒業後渡道して教職につき、山部小学校長を務めたが昭和9年病氣のため退職。俳句は初め素山と号し「高潮」「石楠」「層雲」などに所属、後「時雨」「暁雲」などに精力的に作品や文章を寄せた。句碑（人の世の）、日も暮れて草の花（富良野市山部）。著書に句集「つきしろ」、養嗣子雲崖編「月魄遺句文集」がある。（佐々木子興）

助川徳是 昭8・2・21（69）（小説）東京生まれ。東京大学文学部卒。名古屋大学教授。「啄木と折麩」など日本近代文学に関する研究書多く、小説としては「飛駒」「癒やさざる人間」（札幌文学）、「死鴉」（北方文芸）などがある。（小松 茂）

須郷 誓 大7・2・10（昭49・9・14）（1918～1974）（小説）函館市生まれ。日本大学中退。戦地体験を綴った「無頼の春」を、昭和25年第二次「海

峡」に載せ注目される。40年「函館ペン」発行。創刊号に「頼の使者」発表。遺作集に「頼の使者」（昭51）がある。（木下順一）

鈴木伊志子 大9・10・8（昭58・4・4）（1920～1983）（俳句）千葉県生まれ。昭和43年「氷原帯」により作句。44年同人。50年水原帯新人賞、51年同人賞、53年準水原帯賞、57年準細谷源二賞受賞。句集に「妻の聖火」あり。札幌市で病没。（川端麟太）

鈴木きみえ 昭10・9・10（68）（俳句）函館市生まれ。桂信子の「俳句はその人の全人格の投影である」に感動「草苑」の創刊を知り入会。「草苑」「これ」同人。昭和52年北海道俳句協会準賞。54年同協会賞。55年第二回準にれ賞受賞。現代俳句協会員。（竹田てつを）

鈴木恭三 昭9・10・30（68）（俳句）東京生まれ。昭和27年頃より作句、目黒の工場街で職場サークル誌「天邪鬼」を坂本凜視（環礁）同人らと発行。一時札幌に居を移し「圏」を経て「8」創刊同人、新俳句人連盟中央常任委員となる。39年より札幌在住。橋本夢道、中村還一らの影響を受ける。現在「広軌」同人、「北群」創刊同人。48年第七回北海道俳句協会賞を受賞す

る。（辻脇系一）

鈴木銀冬 明40・5・21（昭47・12・26）（1907～1972）（俳句）釧路管内釧路町生まれ。本名恭男。郵政、電電公社報話局長などを歴任。昭和5年「暁雲」「時雨」に入会。6年釧路俳句会設立に奔走。21年久保洋青らと「えぞにう」創刊、編集同人。27年金釧路俳句会を結成、戦後釧路俳壇の大団結を成功させ会長に就任、33年転任まで興隆に尽くした。48年句集「銀冬遺句二百集」を出版した。（鈴木青光）

鈴木限三 明17・3・7（昭43・12・11）（1884～1968）（植物学研究）愛知県生まれ。明治43年東北帝大農科大学卒、東大大学院に学ぶ。大正11年北大子科教授となり、昭和18年同志社高女に転じた。農科大学時代に独立教会、遠友夜学校等を通じて有島武郎を知り、その影響を受けた。有島の晩年の小説「星座」中の人物、園のモデルといわれている。内村鑑三を敬愛するキリスト教徒で、随想に「白亜の校舎新しきころ」がある。（高山亮二）

鈴木重吉 大5・9・14（二〇六）（米文学）宗谷管内利尻町生まれ。広島文理科大学出身。北大をへて立正大に勤務。日本における「アメリカ研究」の道をひらく。ホーソン文学、精

神分析的批評、文体論と、その関心は広い。著書に「鏡と影」ホーソン文学の研究（昭44、研究社）などがある。（本田錦一郎）

芒 順子 昭22・1・3（69）（詩）札幌市生まれ。本名中川順子。昭和女子日本文学科卒。「日本詩人クラブ」を経て現在無所属。詩集「しんきろう」（昭45・6・8、木犀書房）がある。（小松瑛子）

鈴木青光 昭2・1・3（69）（俳句）釧路管内浜中町生まれ。本名敏雄。昭和21年「えぞにう」に参加久保洋青の薫陶を受け、28年同人、現在編集責任者。43年釧路俳句連盟幹事長に選ばれる。現代俳句協会員。53年「釧路文学運動史」（戦後俳句編）、55年句集「霧多布」刊行。道東の風物を詠い第一回鮫島賞受賞。「えぞにう」の刀祢無句賞、洋青賞も受賞している。（島 恒人）

鈴木青光 明41・8・13（二〇〇）（川柳）函館市生まれ。本名実。大正12年3月弥生高小卒後、函館電報局に勤務、郵政畑を歩き昭和44年定年退職。昭和4年函館新聞柳壇に投句したのが川柳作家活動の始まりで間もなく職場グループ「亀の子会」を結成、本格的に川柳に取り組む。14年頃小川よしのりと二人で「川柳なかま」を発行したが、共

に昭和6年再興の函館川柳社の同人に推挙されたため同誌を発展的解消。18年亀井花童子より函館川柳社（川柳はこだて）を引き継ぎ現在に至る。この功績により第一回函館市文化団体協議会の白鳳賞を受賞（昭57）する。〈その職に馴れて狂わぬ目分量〉（坂下銀泉）

鈴木 扶 昭14・6・9（68）（小説）札幌市生まれ。国学院大学日本文学科卒。帯広緑陽高校教諭。主要作品は「山羊のいる風景」（昭45・11、「帯広市民文芸」）、「丸太川第三吊橋」（昭51・10、「黎」創刊号）、「ズリ山慕情」（昭58・12、「北方文芸」）。（神谷忠孝）

鈴木俊美 昭18・1・10（64）（詩）札幌市生まれ。昭和36年札幌第一高校卒。北海道建物勤務。名寄詩人協会会で「青芽」の富田正一の指導を受け、詩集「遠い風景」を刊行。40年北見市で藤川日出尚らと詩誌「れん」創刊。（堤 寛治）

鈴木杜世春 大14・5・15（1925）（短歌）宗谷管内利尻町生まれ。本名豊治。北海道青年師範学校卒。利尻、枝幸、砂川、札幌で国語担当の中学教諭を勤め昭和59年退職、以後文筆生活に入る。昭和31年歌誌「新壘」に入会。小田観螢に師事し、34年歌誌「潮

音」にも入る。35年頃より長谷川竜生に師事して、詩作も始める。37年新墾新人賞受賞。39年12月詩集「オホーツクの長い渚で」(思潮社)上梓、長い文体の詩で注目される。40年短歌同人誌「素」結成に参画。44年10月第二詩集「幻想海峡」(黄土社)上梓。50年「現代短歌・北の会」結成に参画、同会幹事。56年12月「新墾」退会。57年7月増谷竜三、細井剛、坪川美智子と共に歌誌「岬」創刊、現在同誌発行人。詩誌「核」同人として詩作も続行中。前衛短歌運動の影響を受けて歌作を始め、当初モダニズム風の作品を発表していたが、38年北海道青年歌人会に加入の前後から、高度の喩法を駆使した現実告発の抒情詩へと作風が変化、その後喩法のほか頭韻、脚韻を用いるなど、技巧的作品を多く発表。49年第一回小田観堂賞受賞。その間、評論も頻繁に執筆、47年新墾評論賞受賞。とくに文体論には見識を示し注目される。近年は古典和歌の文体の考察へと歩をすずめ、論述は学究的である。(晩年をさらにことさらにさりげなく食む日々にして韻律うごく) (細井剛)

昭和22年「壺」「風」両誌に所属同人。五十嵐利三らと小西英市の「路人」に協力したが28年「壺」休刊後、俳句活動を休止。(釜谷信夫)

鈴木白歩 詩誌 大2・3・3・(1955)「俳句」旭川市生まれ。本名春雄。札幌遠友夜学校卒。少年時より金崎葎杖と親交、文学を愛し芥子沢新之介主宰の歌誌「吾が嶺」に入会、昭和11年公傷により右脚を失い、葎杖の励ましにより白歩と号し、天野宗軒主宰「水声」に入会、後編集同人として葎杖、手塚甫と共に宗門トリオをなしている。同師没後、金崎葎杖主宰「水声句箋」同人。(金崎葎杖)

鈴木彦次郎 詩誌 明31・12・27、昭50・7・23 (1938~1976)「小説」東京生まれ。一高、東大の同窓川端康成らと文学活動に入り新感覚派を興し、「宗次郎は跛だ」(大14)などを書く。昭和期は農民文学、大衆文学に転じ、戦後は岩手県で文化運動の推進役となった。取材作に「近藤重蔵」(昭11・6、「中央公論」)、「北海の俠雄」(昭17・11、新正堂)がある。(小笠原克)

鈴木洋 詩誌 昭17・6・29、(1942)「短歌」下関市生まれ。実兄と塗装業を営む。昭和38年歌誌「新墾」入会。40年歌誌「潮」「潮音」それぞれ入会。

43年新墾新人賞受賞。48年短歌同人誌「素」に参画。現在「新墾」「潮」同人。詩人黒田喜夫の影響下に歌作を始め、鋭い感受性から時代状況を穿ち、青春を醒めた眼でとらえる作風は、70年代の俊英として注目された。近年は、歌作から遠ざかっている。(細井剛)

鈴木政輝 詩誌 明38・1・1、昭57・8・9 (1935~1983)「詩」旭川市生まれ。日本大学法文学部文学芸術科卒。一時帰郷し代用教員をしたがまもなく父の意を受けつぎ、茶、華道に専念。昭和2年旭川にいた小熊秀雄、大谷東策、小池栄寿、今野大力、河見一三らと「口筒唱詩社」をつくり第一号を発行するが翌年第二号を出して廃刊となる。その後しばしば上京しては、既に上京していた小熊秀雄、今野大力らと交友を深め、萩原朔太郎、堀辰雄らと浅草などで飲み歩き、斎藤昌三とも知るようになる。旭川から創刊された芸芸誌「裸」などにも詩を掲載していた。3年「国詩評林」発行し、宮本吉次に編集をまかせる。宮本吉次上京後は、中家ひとみ、鈴木与之助、下村保太郎らに編集をまかせ自らは詩作にはげんだ。中家ひとみ詩集「銭」、入江好之詩集「あしかび」などは鈴木与之助の装幀で世に送った。12年書物展望社より詩集「帝国情緒」を発行。13年には

加藤愛夫詩集「従軍」を出し、17年山雅房より鈴木、東郷克郎編「北海道詩人集」を出版、21年には「北海道文学」を発行する。その後は表立った活動はせず家業に専念し「不死鳥」休刊後、22年に「情緒」発行に当たり陰ながら力を与えた。55年「雲雀の歌」を情緒刊行会より出版した。旭川で没。(下村保太郎)

会議員等を務める。昭和16年服部町石の「高潮」により句作を始め、俳句の伝統的手法になる平板な自然詠や、情緒的作風に飽き足らぬものを覚え、人間の意識と哀歎を反映した作風に目覚める。23年「土塊」を創刊したが、のち道内に澎湃として盛り上がった同人誌の気運に刺激され、31年「でるた」を創刊するなど、道東俳句革新の先導的な役割を実践する。次いで矢田枯柏の「柏」、土岐鍊太郎の「アカシヤ」等の同人を経て、現在は加藤楸郎の「寒雷」、金子兜太の「海程」、森澄雄の「杉」同人。42年第一句集「轆轤」、47年第二句集「方円」刊行。48年帯広市文化奨励賞受賞。現代俳句協会員。(一族忌胡桃焼く火に父母の見え)

昭和50・3・29 (1935~1976)「俳句」山形県生まれ。本名又吉。明治35年頃、小学校の恩師稻毛金七のすすめにより上京。苦学して東京歯科学校に学ぶ。明治42年頃より句作をはじめ。大正7年歯科医師となり、9年室蘭市で開業。昭和9年ホトトギス初入選。高浜虚子、年尾、山口青邨に師事し、18年室蘭市翼賛俳句会の指導にあたる。20年「いぶり」を創刊、主宰。「霧笛集」選者。室蘭民報、「富士鉄白樺」「歯科評論」等の選者。室蘭歯科医師会長、室蘭学校歯科医師会長として保健衛生の向上に献身的な努力をした。38年室蘭市功労者表彰、48年室蘭市文化団体連絡協議会第五回功労賞を受ける。「ホトトギス」同人。「夏草」同人。句集に「霧笛」がある。(白幡千草)

鈴木みさを 詩誌 大6・3・1、(1917)「俳句」札幌市生まれ。昭和45年以来札幌歸の会へ出席して作句。46年「粒」同人。49年第三回細谷源二賞で準賞を受賞する。56年句集「游鴉」を「粒」俳句会より発行。斬新な発想と表現に特徴がある。(山田緑光)

鈴木幸吉 詩誌 昭7・9・12、(1932)「児童文学」帯広市生まれ。小学校教師。日本児童文学者協会会員。「原野の風」「トカブチ」同人。主な作品に「正夫さんとひみつ」「先生のとっておきの話」「収」「サル時代」「北へ行くれんらく船」「収」「山の学校で」「餓死したキツネ」「幸子の夜明け」など。また開拓ものがたりに「宮尊親と興復社を描いた」「開拓のあけぼの」などがある。(柴村紀代)

鈴木健次郎 詩誌 大2・9・25、昭58・7・15 (1913~1983)「詩」秋田県生まれ。本名健二郎。北海道大学文学科卒。帯広中学在学中に鈴木竜緒のペンネームで十勝新聞、「水原」(札幌)、「牧羊」(鹿追)に作品を発表。在学中の昭和7年札幌で玉川雄介、坂田勝らと「時計台」を創刊。ペンネームを鈴木健次郎とする。8年時計台社同人詩集「年輪」刊行。同年札幌の「時計台」「自由詩人」

鈴木光彦 詩誌 大12・11・21、(1935)「俳句」松山管内今金町生まれ。本名正行。旧制京都二中卒業後、昭和19年従軍。終戦後細谷源二らの刊行した「北方俳句会」「水原帯」に参加。源二没後も後継者川端麟太を助け水原帯の編集発行に参画して同誌の支柱的中心作家。生活に根ざした敘情俳句から次第に客観性、即物性を強め現代人の心象風景の表出を志向する。句集は「雪齡」(昭和50、水原帯社)がある。(川端麟太)

鈴木八駄郎 詩誌 大14・4・17、(1925)「俳句」十勝管内清水町生まれ。本名富夫。農業団体役員、帯広市議

鈴木洋々子 詩誌 明28・5・12、(1913)「俳句」十勝管内清水町生まれ。本名富夫。農業団体役員、帯広市議

「詩宗族」が結果して札幌詩話会を結成

「札幌詩人選集」を刊行。両詩集の編集発行にたずさわる。10年4月帝室林野局に勤務、札幌支局夕張鹿の谷出張所在勤。以後43年の定年退職まで林野庁で森林行政と取り組む。12年第一詩集「故園の雪」を刊行。硬質な北方のリリズムが高く評価された。同年橋本マツエと結婚。戦後は更科源蔵の「野性」同人となり、21年第二詩集「雪の美しい国」を刊行。「木星」「日本未来派」「至上律」に同人または寄稿者として参加し、「北海道詩集」第一冊の編集委員として北海道詩人協会創立に協力した。32年長野県上松営林署長として北海道を離れ、林野庁退職後は岩倉組木材東京支社に入社、東京に没した。(佐々木逸郎)

須田抄二 昭2・11・14(1927)「詩」札幌市生まれ。札幌文科専門学院卒。昭和二〇年代後半から小説や脚本の習作を試みていたが、サンボリズムの洗礼を受けて詩作を始め、詩誌「だいある」「風雪」「渦」などに参加した。53年詩集「北海の霧」を刊行。詩風は敗戦体験を踏まえた個と時代の関係への追究を原点とした、観念性、論理性的の強い点に特色を持つ。北海道詩人協会員。(木井浩)

須田楨一 明42・1・21(1909)「新聞記者」評

芸)を發表。(神谷忠孝)

せ

情野小鈴 大2・10・23(1913)「俳句」旭川市生まれ。本名稔子。昭和3年旭川市立高女在学中、校内俳誌「からまつ」に投句。石田雨圃子の指導を受け、卒業後荒谷松葉子の「常盤木」に参加。13年「旭川ゆく春会」に入会。22年「水輪」、23年「霧華」同人。その後「氷下魚」「雲母」「俳海」にも参加。45年「小鈴遺句集」が上梓された。(後藤軒太郎)

青野麦秋 大14・3・20(1905)「俳句」網走管内上湧別町生まれ。本名幸雄。初め農業に従事、後警察予備隊創立と同時に入隊、昭和50年退官後、施設「ひまわり学園」勤務。昭和22年「葦牙」入会、50年北海道俳句協会賞、52年葦牙賞受賞。俳人協会員。(佐々木子興)

瀬尾明彦 昭17・5・3(1902)「詩」東京生まれ。北海道立清水高校卒。「裸族」同人を経て「あすとら」

論)茨城県生まれ。東京大学独文科卒。朝日新聞社記者、高校教師などを経て北海道新聞論説委員。同紙コラム「卓上四季」で活躍。「北方文芸」に絶筆になるまで「刃影」を連載。戦時中は風見章、尾崎秀実と私淑。「オリオン」の「風見章とその時代」「独絃のペン・交響のペン」などの著作のほか、中国語に造詣深く、郭沫若「屈原」「虎符」など一二冊に及ぶ訳書がある。(小松茂)

須藤隆仙 昭4・11・28(1909)「郷土史」渡島管内上磯町生まれ。大正大学卒。現在函館称名寺住職。「海峡」同人などを経て昭和46年より北海道史研究会主宰。文学面では「季刊随想」の顧問をしながら地方史の中の文学的素材の発掘検証に意を注いでいる。「えぞ切丹史」(昭44、ぶやら新書刊行会)、「北の夜話」(昭45、みやま書房)、「北海道意外史」(昭54、同)、「函館の一〇〇〇年」(昭57、国書刊行会)など著作多数。(安東璋二)

砂山影二 明35・3・9(1902)「短歌」函館市生まれ。本名諸岡寅雄。庁立函館中学校中退後、家業の印刷を手伝いながら歌作に専心。歌誌「銀の壺」「海峡」などを発刊した。琢木心酔者。歌集に「坊っちゃん」の歌集がある。(福地順一)

瀬川尋羊 大15・8・26(1906)「俳句」日高管内浦河町生まれ。本名輝彦。昭和24年より作句。「葦牙」を経て41年「道」の前身である「扉」に入会。「道」同人。郷土俳誌「べてかり」の編集者を長く勤め、同誌主幹となる。句集に「一列の枕」。(北光星)

関井香葉 明38・12・27(1905)「俳句」後志管内仁木町生まれ。本名利雄。大正9年(四歳)仁玄寺玉置梅窓住職より俳句を学ぶ。大正10年牛島膝六「時雨」創刊に参加。山岸巨狼「葦牙」金剛集同人。進藤一考「人」当月集同人。高井北杜「ひまわり」同人。昭和54年仁木開基百年記念俳句大会を主宰。徳島より高井北杜(ひまわり主宰)を招き俳句を通じての交流をはかる。(太田耕吐子)

関寛齋 天保元・2・18(1830)「医学」千葉県生まれ。のち寛と名を改める。佐倉順天堂で蘭医学を学び、明治維新の戊辰の役では政府側の軍医、野戦病院長を務め

炭光任 明27・2・12(1804)「短歌」奈良市生まれ。一七歳の秋上京、太平洋画会に入り洋画を研修八年、のち日本画に転向。少年時代俳句、明星派の文語歌を経て口語歌に転じ「郷愁」「芸術と自由」などに所属。大正15年口語歌誌「一点」を創刊。歌集「雪靴」(大13)、「旅鴉」(昭2)を東京紅玉堂から刊行して一躍その名を知られる。序文の伊東音次郎、跋文の清水信は「新短歌壇の至宝であり」「素材の広汎、表現の自由的確、手法は東洋的であり、旅を好みそのリズムは俳味を匂わず」と称讃している。書も独自の書体で妙味があり、風貌は剽悍で人に親しまれた。へお墓だけ残る郷里の梅が咲く便りとどいた雪下駄の上(青山ゆき路)

須見容子 昭22・3・2(1904)「評論、近代文学研究」本名北田幸恵。根室管内中標津町生まれ。北海道大学大学院(国文科)博士課程修。札幌学院大学非常勤講師。須見容子の名で『「伸子」論覚書』(昭51、新日本出版社)「宮本百合子・作品と生涯」(収)、「初期の百合子の文学における二つの問題」(昭54・7、「民主文学」)などを発表。また、北田幸恵の名で「女権と文学の間―古在紫琴論―」(昭59・8、「北方文

る。戦後は徳島で一町医として名医の名をほしいままにするが、明治15年北海道移住を決意して斗満(十勝管内陸別町)に入植し、開祖となる。入植後に徳富蘆花と親交を結び、蘆花は43年9月に妻子を伴ってこの地を訪れた。蘆花「みづのたはこと」に詳しいが、その中で「軍医総監勇爵は造作もない」人物と評し、晩年になって未開地を開拓した剛毅な寛齋をしのんでいる。司馬遼太郎「胡蝶の夢」の主要人物。著書に「命の洗濯」「旅行日記」「目ざまし草」など。子供と意見対立し陸別で服毒自殺したが、辞世(諸ともに契りし事は半にて斗満の露と消えしこの身は)を刻んだ文学碑のほか、陸別には関寛翁碑やブロンズ像など記念碑が多い。寛齋に関する著書も多く、陸別町公民館郷土室には「関寛の生涯」コーナーがある。(木原直彦)

関口次郎 明42・10・21(1907)「新聞記者」夕張市生まれ。昭和9年明治大学文科文学科卒。12年北海タイムス社(現北海道新聞)に入社。戦後間もない文化部長や、学芸部長時代に文学、演劇、絵画など本道の文化興隆に尽力した。35年から論説主幹。41年に常務取締役となり、43年に退任後は経営難に追い込まれていた「北方文芸」を復刊させた。(木原直彦)

関直彦 安政4・7、昭9・4・21 (1857-1934)〔翻訳〕東京大学卒。明治19年8月に内務大臣山県有朋、外務大臣井上馨が本道を巡回視察した折に東京日日新聞記者として同行。同紙に連載した「北海道巡行記」は本道の実情を広く紹介するのに役立った。

関原 暉 昭19・1・8、(16) 札幌市生まれ。北海道大学卒。昭和41年稚内高校勤務。1938・インデギルガにより青年劇場創作戯曲佳作賞受賞。風土に根ざした骨太い構成力で高校演劇第二世代の旗手として活躍。「アプカ」「傷あと」等。現在深川西高教諭。

関場理堂 慶応元・9・19、昭14・8・25 (1865-1934)〔医学・漢詩・篆刻〕会津若松市生まれ。本名不二彦。東京帝国大学医科大学卒。公立札幌病院長として赴任(明25)、以後札幌に住む。明治26年北海病院(現北原病院)を開設、経営。三六六年間にわたって同病院長を務め、41年札幌区医師会長、大正5年北海道医師会長に選ばれ、ともに終生その責にあつた。明治29年「あいぬ医事談」を自費出版。別に「札幌医事沿革史」(稿本)を遺す。漢詩家の面貌はかなりの数にのぼる「理堂詩存」に明らか

であるし、加えて小論考集成の「百結衣」、雑纂を内容とする「関場理堂選集」、昭41、同選集刊行委員会)が集積を伝える。大正8年に年少の石井雙石が興した篆刻集団、北原印会に加盟、ほう大な蔵書で識られた書齋(瀬祭魚書屋)を開放し、自身も印刀を揮った。雙石選による印譜は以後四、五年にわたって断続的に北海タイムス(現北海道新聞)に連載された。(佐藤庫之介)

関 鳴海 大4・9、(19) 福島県生まれ。本名五郎。昭和4年小樽市に移住。5年北海ホテルに就職。旭川歩兵二六連隊に入隊。11年北日本汽船入社。13年から20年まで樺太航路勤務。18年「新墾」入社、幹部同人。同年「潮音」入社、同人。

瀧田栄之助 大5・3・14、昭46・2・7 (1916-1971)〔小説〕三重県生まれ。天理大学教授。「文学者」「近代文学」等を経て昭和39年「人間像」に参加。「ニッポン・ピカレスト」が北海道新聞の第一五回同人雑誌秀作に選ばれたのをはじめ、小説、評論を大量に発表。特にガンに冒されてからの諸作は全国的な注目を集め、45年「いのちある日」が講談社から出版された。四日市市で没した。(針山和美)

瀧戸内晴美 大11・5・15、(19) 徳島県生まれ。東京女子大学卒。伝記小説「田村俊子」で田村俊子賞、「夏の終り」で女流文学賞。代表作に「美は乱調にあり」など。昭和48年に出家(寂聴の号)して話題をまいた。本道取材作に十勝が舞台の「妻たち」(昭39)、40、北海道新聞、「湖への旅」(昭39・12、「オール読物」)などがある。(木原直彦)

瀧戸恵子 昭10・9・21、(13) 旭川市生まれ。旧姓小浜。函館中部高校卒。函館中央病院に勤務。同院医師阿部たつをに師事し「無風帯」に入社。その後札幌に転住。昭和36年結婚し作歌を中断するが、夫と死別後の49年、作歌活動を再開「新墾」に入社、同人。52年新墾新人賞、55年「水の森」で第七回小田観堂賞受賞。評論も鋭い。「熱きものに地に凝りてしらしらと吐息やまざる水の森はあり」(中島正裕)

瀧戸哲郎 大8・1・21、(19) 札幌市生まれ。札幌師範、東京高等師範学校卒。九歳のときブラジル移住を志した父とともにサンパウロ州に渡ったが、一年半後父のけがで札幌に戻る。北海道内の小、中、高校の教員生活を経て札幌旭丘高校長を最後に53年定年退職、札幌市の静修短期大学教授(国

文学)となる。戦後、東京で山本太郎、金井直、清水省吾らの「零度」、またその後身といえる「現代詩評論」同人、北海道に戻ってからは帯広の「オメガ」、札幌の「眼」「木星」、旭川の「フロンティア」を経て38年河邨文一郎らの「核」に加わる。昭和30年処女詩集「雪虫」刊行。第二詩集「笹を放つ」により第七回北海道詩人協会賞を受賞。54年7月韓国ソウルの第四回世界詩人大会に出席。同年詩と作家論を合わせた「露とこたえて」、59年詩集「空に真赤な」を上梓。

日本古典、ことに王朝文学への傾斜を示すが、そのとらえ方は官能的で、しかもそこはかとなし破戒の匂いを漂わせている点が独自で、狭く美しい日本の日常と倫理の檻にとじこめられた南方の精神とでも言うべきか。事象の分析も人生に対する肯定に支えられて大らかであり、いかに鋭い別れのさいにも冷酷さをいささかも感じさせない、成熟した大人の文学であるといえる。日本現代詩人会員。

瀧沼茂樹 明37・10・6、(19) 東京生まれ。本名鈴木忠直。昭和2年東京商大在学中に「一橋文芸」を創刊、以来伊藤整と生涯の友となる。「現代文学」(昭8、木星社)、「近代日本文学のなりたち」(昭26、河出書

房)、「評伝島崎藤村」(昭34、実業之日本社)ほかの実証的で理論的な業績が多い。「有島武郎伝」(昭37)に始まる詳細な有島研究、友情と理智に富む「伊藤整」(昭46、冬樹社)も必読の書である。(小笠原克)

校より東大法学部卒。朝日新聞記者。東大在学中の昭和51年に「北帰行」で第一回回文芸賞受賞。同人雑誌とは無縁の受賞であった。その後作品なし。単行本「北帰行」(河出書房)。(小松茂)

そ

千本きくよ 昭9・5・17、(19) 福岡県生まれ。本名貴代。福岡県大川定時制高校卒。農民文学会員。やまぶどうの会(「童話」)会員。「闖入者」(「文学者見沢」)、「老婆ふたり」(「北方文芸」)、「手土産」(「農民文学」)などの作品がある。(小松茂)

十河利男 明45・3・27、(19) 上川管内南富良野町生まれ。郵政職員として永年勤続。俳句は昭和19年ごろから「暁雲」に拠り奥村静雨の益を受け、後「葦牙」の長谷部虎杖子に師事、子息宣洋とともに「葦牙」同人として活躍している。(佐々木子興)

曾根素拙 大10・7・10、昭58・3・12 (1921-1983)〔俳句〕胆振管内早来町生まれ。本名茂。北海道工学部卒。「緋衣」創刊と同時に中学時代の恩師古田冬草に師事。人間性豊かな作品で頭角を現す。「汽笛は旅のうた」の遺稿集がある。(島 恒人)

として、伊藤整に関する評論、伝記、研究を多数発表。なかでも「雪明りの叢書」第九編「伊藤昌整」(昭50、北書房)、「伝記伊藤整―詩人の肖像」(昭52、六興出版)は、伝記研究の白眉として高く評価されている。(日高昭二)

會野綾子 昭6・9・17(1937)「小説」東京生まれ。本名三浦知寿子。聖心女子大学英文科卒。作家三浦朱門は夫。昭和29年の「遠来の客たち」が芥川賞候補となり文壇にデビュー。つぎつぎと話題作を生み、有吉佐和子と共に才女の名をほしいままにする。本道取材作に「室蘭まで」(昭34・9、「週刊朝日別冊」)、「消えない航跡」(昭36・10)11、「週刊サンケイ」などがあり、講演も多く。(木原直彦)

園一勢 大9・10・3(1938)「俳句」小樽生まれ。本名宮川勢一。砂川市居住後東京転出。昭和22年細谷源二に師事、「北方俳句人」水原帯、45年「海程」同人。31年水原帯賞を受ける。24年より「水原帯」発行会計担当。38年句集「翔ぶ皿」刊行。作品は庶民的明るさと独特の比喩の巧みさで幾多の秀作がある。現代俳句協会員。(山田緑光)

園田郁志 昭2(1927)「小説」青森市生まれ。本名小西幸男。昭和20年庁立室蘭中学校卒。25年頃から保高内余市町生まれ。旧姓川崎、ペンネーム深山水明、田中兼通。大正10年7月札幌から同人誌「青空」を創刊、第七集から余市町のいとこ川崎昇に引きつぐ。のちこの同人誌の編集に伊藤整があたる。大正13年11月歌集「むらぎも」を深山水明の名で発刊、同人誌「アカシヤ」の編集もするが、ほどなく上京、日本大学に学ぶ。昭和3年詩誌「信天翁」に加わり、田中兼通の名で詩を発表、7年には「新文芸時代」に田居尚の名で「処方箋」「句点」など創作をのせるが、その後文学活動から遠のく。伊藤整の没後ふたたび文学にかかわり「青空」と伊藤整「(北書房)、詩歌集「信天翁」(六興出版)、「蘇春記―素膚の伊藤整」(岩崎書店)、「義経の生涯―能楽義経像」(中央公論事業出版)などを著した。理工出版社長、武蔵野学園長などを務めた。(武井静夫)

徳蔵の「文芸首都」に拠り小説を書く。代表作「千礁」(「文芸首都」掲載、昭29・2「室蘭文学地図」に転載)。HBCラジオ放送の掌編小説等がある。(かなまる・よしあき)

園田 風 大12・2・24(1933)「俳句」上川管内和寒町生まれ。本名重和。兄夢蒼花に感化され昭和12年頃から句作を始め、17年「天の川」に加え、吉岡禪寺洞の指導を受ける。21年「水輪」同人。32年「水原帯」同人(異薔薇男の筆名を用いる)。45年千葉県松戸市に転じ「広軌」に参加。滝沢無人と東京支部を結成。58年句集「跋扈の汗」を広軌発行所から上梓した。現代俳句協会員。(園田夢蒼花)

園田夢蒼花 大2・12・15(1913)「俳句」上川管内美瑛町生まれ。本名喜武。昭和7年以降公務員生活三八年、函館労働基準監督署長を最後に46年退職。小学生の頃から句作に手を染め、新聞俳壇などに句を投じ、また「南柯」等の俳誌にも投句するようになった。やがて昭和初頭から俳壇を席捲した新興俳句運動に共鳴し、高橋貞俊らと吉岡禪寺洞の「天の川」へ投じ、のち同人となる。12年貞俊らと「海賊」(のち「プリズム」と改称)を創刊、北海道の新興俳句運動に火を付けた。21年貞俊ら

と「水輪」を創刊したが、幾ばくもなく休刊。細谷源二の「水原帯」に迎えられる、編集同人となる。44年貞俊を代表に、後藤軒太郎、木村敏男らと同人誌「広軌」創刊。47年より「杉」にも参加し、現在「広軌」「杉」同人。昭和26年第一句集「火を放て」、48年第二句集「こほろぎ馬車」刊行。共著に「札幌の俳句」「札幌歳時記」がある。現代俳句協会幹事。北海道文学館監事。(酒がめは酔がめにかはる雪女郎)

「こほろぎ馬車」句集。昭和48年11月広軌発行所刊。第一句集「火を放て」以降約二〇年間の作を収めた第二句集で、年代的には三〇代の壮年期から、六〇代の還暦に及ぶ間の集積である。処女句集「火を放て」が、抜群に新鮮で奔放な感覚に溢れていたのに対し、この句集は年齢の驕りを見せながらも、妖しいまでの虚構の世界を自在に現前してみせた句集といえる。(木村敏男)

た

田居 尚 明37・5・20(昭59)

る。人間存在について問い続けることを詩の主題とする、洞察と存在感のある詩風が特色。(永井造)

平 忠昭 昭4・3・11(1926)「新聞記者」上川管内下川町生まれ。昭和26年北海道大学国文科卒。同年北海道新聞社入社。29年名寄支局で同人雑誌「刻塔」の創刊に参加。32年札幌本社芸芸部芸芸担当、39年東京支社社会部芸芸担当次長。41年の北海道文学展では東京での資料集めに当たり、同展の成功で創設された北海道新聞文学賞の運営に発足当初から参加。芸芸部長、出版局長を経て60年旭川支社長。(木原直彦)

高 昭宏 昭11・9・30(1936)「短歌」十勝管内音更町生まれ。中学校時代から短歌に親しみ、雑誌「少年」「蛍雪時代」などへの投稿を経て「辛夷」入会。北海道立中央水産試験場に勤務してから海上生活を素材とした作品を多く発表してきた。51年第一歌集「わが航路」発刊のほか「漁業露和事典」「漁業和露事典」を、57年には「系統魚類学」(ニコリスキー著、高昭宏訳、たたら書房)など特殊な著書がある。(大塚陽子)

高井静子 明35・7・25(昭58)・8・2(1902-1983)「短歌」岐阜県生まれ。本名静。庁立札幌高等女学校

卒。林賢治と結婚したが離婚。札幌市の桑園出張所勤務。短歌結社「とをつび」と同人。道歌人会員。(名島俊子)

高岡邦夫 大11・11・2(1922)「短歌」山形県生まれ。岩手医学専門学校卒。北海道大学医学部、釧路赤十字病院産婦人科部長を経てシロアム医

院長。昭和19年「アララギ」入会。21年「羊蹄」創刊に参加する。36年釧路アララギ会を興し会報を発刊した。(笹原登喜雄)

高垣 葵 昭3・11・10(1929)「シナリオ」東京生まれ。本名正克。父は冒険小説作家高垣晔。北海道大学国文科卒。北大在学中に農学部の手田悌三らと学生演劇で活躍し、昭和27年NHK札幌放送劇団に入団。花房はるみ、若原良などの筆名でラジオドラマを執筆。翌年退団し、「底流」でNHK懸賞放送劇に入選、作家生活に入る。代表作に「一目一番地」(NHKラジオ)、「ホームラン教室」(同テレビ)など。楠トシエらと劇団を結成し、ブラジル取材によるラジオ作品、戯曲がある。東京在住。(佐々木逸郎)

大門 太 昭9・11・4(1934)「詩」札幌市生まれ。本名田村耕一郎。昭和36年詩誌「ん」のほか「ダイヤモンド・ダイナマイト」「非」(以上個人誌)を創刊。48年渋谷美代子と二人誌「蛇蠍」を創刊して刊行中。詩集は37年の「太陽のある風景」のほか「ある存在」「指・眼・舌」「わが詩王」などがあ

編集後記

本事典の編集は早くからの懸案であったが、昭和58年度の北海道文学館総会（5月21日）において決定され、翌59年2月27日に「北海道文学大事典編集委員会」の発足をみた。

〈委員長〉更科源蔵。〈副委員長〉園田夢蒼花、中山周三、和田謹吾。〈委員〉小説・評論〓小笠原克、神谷忠孝、沢田誠一、日高昭二。児童文学〓加藤多一、柴村紀代、渡辺ひろし、和田義雄。詩〓東延江、河邨文一郎、小松瑛子、佐々木逸郎、永井浩。短歌〓田村哲三、永平利夫、宮崎芳男、村井宏。俳句〓木村敏男、島恒人、辻脇系一。〈事務局〉木原直彦、西村信。〈事務局員〉東海林淳子、山本よしえ。

以来、何回となく会議を重ねて基本要綱作りにはじまり、リスト作成に取り組んだ。その際に、日本近代文学館編「日本近代文学大事典」(講談社)が大きく参考になったが、しかし府県単位の前例がないため、本道の実情に即して試行錯誤を重ねざるを得なかったのである。

最大の難関は項目の選定とスペースの割り当てであり、これにはどの委員も最初から最後まで苦闘の連続であった。結局のところ、全ジャンルのリストアップを終えたあと、ジャンル別に総枠を定め、ジャンルのリストアップを終えたあと、ジャンル別に総枠を定め、ジャンルごとに配分するという方法をとった。ジャンルを横断し、全体を通じて横並びの比重を期すことは不可能だったからである。みんなが納得する基準などないこともおもしろい知った。最善の努力をはらったつもりであるが、しかし目くばりのまずさを恐れるもので、その点はお叱りを受けながら他意のないことをご了承いただきたいと

思っている。

編みながら、時間をかければそれでいい、というものでないことも知った。すでに見えなくなっているものが、いかに大きかったことか。この時期に編まなければ、古い事象はますます見えなくなってしまう、との実感を深めたこともたしかである。

いま本事典が陽の目を見ることになったが、ここまで漕ぎ着けることができたのも、校正にまで忙殺された全委員の熱情によること勿論であるが、なんといっても三四〇人という方々が心よく気持ちこめてご執筆くださったからにはかならない。幾重にも感謝するものである。

北海道新聞社出版局図書編集部には並々ならぬお世話になった。ことに当方の編集やその手順のまずさを、担当の方々によってどれほど助けられたか知れない。このご尽力がなければ、この段階での完成はおぼつかなかったはずで、心からお礼を申しあげたい。また、出版社側と執筆者の間に立つて苦闘された北海道文学館の事務局員にも格別に感謝する。

だが、ここで、満腔の悲しみをこめて、更科源蔵北海道文学館理事長の急逝について述べなければならぬ。昭和42年の文学館創立以来、今日まで理事長として活躍され北海道の文学に、いや日本の文学界に多大の影響を与え続けてこられた氏は、文学館の歴史の中で最も大きな、画期的な事業として企画された本書の完成を待たず、昭和60年9月25日に永眠された。この一、二年、健康状態が思わしくなかったが、それにもかかわらず、自ら四二項目を執筆し、刊行を心待ちにしておられた。大変残念でならない。本書を霊前に捧げて、ご冥福を心からお祈りする次第である。

(木原 直彦)

北海道文学大事典

定価 四〇〇〇円

印刷 昭和六〇年一〇月二二日
発行 昭和六〇年一〇月三〇日

編者 北海道文学館
編者代表 更科源蔵

発行者 森田博志
発行所 北海道新聞社

札幌市中央区大通西三丁目
郵便番号 〇六〇
電話 (011)221-2211
振替 小樽九一二八三九八

印刷所 大日本印刷株式会社
製本所 大日本製本株式会社

ISBN4-89363-454-2 C0590 ¥4000E

北海道文学史略年表

年次	作品と事項	社会の動き
一八八九(明22)	幸田露伴・雪紛々	帝国憲法発布
一八九六(明29)	三遊亭円朝・権説蝦夷訛 有島武郎 札幌農学校入学	上磯郡当別にトラピスト修道院発足
一九〇二(明35)	国木田独步・空知川の岸辺	札幌・函館・小樽3区で衆議院議員選挙
一九〇三(明36)	菊池幽芳・乳姉妹	北海道官設鉄道、釧路・帯広間全通
一九〇五(明38)	パチエラー・アイヌ英和辞典	札幌農学校、東北帝国大学農科大学となる/函館大火
一九〇七(明40)	石川啄木・漂泊	新夕張炭鉱でガス爆発
一九〇八(明41)	小林多喜二 小樽に移住 武林夢想庵・洞爺	私立函館図書館開館(岡田健蔵ら設立)
一九〇九(明42)	武者小路実篤 来遊 徳富蘆花・寄生木	小樽高等商業学校の設置認可
一九一〇(明43)	鳴海要吉 増毛に移住 岩野泡鳴 来遊	小樽大火
一九一〇(明43)	岩野泡鳴・放浪 啄木・歌集一握の砂	夕張炭鉱でガス爆発/五番館札幌営業開始
一九一一(明44)	長田幹彦・徳富蘆花 来遊 武者小路実篤・高村光太郎 来遊	気候不順のため大凶作/不景気続く 苫前村に大熊出現
一九二二(大元)	里見淳・手紙 里見淳ら来遊	丸井今井百貨店開店
一九二三(大2)	徳富蘆花・みづのたはこと	
一九二五(大4)	有島武郎 農科大学教授辞職	
一九二六(大5)	小林多喜二 小樽商業入学 小熊秀雄 樺太転々	

年次	作品と事項	社会の動き
一九一七(大6)	有島武郎・カインの未裔 葛西善蔵・雪をんな	ロシア革命/この頃から、道内各地でストライキ相次ぐ
一九一八(大7)	伊藤整 小樽中学校入学 岡田三郎・涯なき路	北海道帝国大学を札幌に設置/北海道博覧会
一九一九(大8)	有島武郎・生まれ出づる悩み 久保栄 帰道	
一九二〇(大9)	中戸川吉二・反射する心 島木健作 上京	第一回国勢調査実施。全道人口二三五万九一八三人
一九二二(大10)	有島武郎 農場視察に来遊 本庄陸男 上京	函館大火
一九二二(大11)	有島武郎 有島農場解放宣言 鶴田知也 来遊	札幌・函館・小樽・旭川・室蘭・釧路、区制を廃し市制を施行
一九二三(大12)	宮沢賢治・詩オホーツク挽歌 島木健作 上京	戸長役場を全廃し、町村制を施行
一九二四(大13)	宮沢賢治 来遊 佐藤春夫・北海道へ	札幌などで憲政擁護演説会開催
一九二五(大14)	宮沢賢治・佐藤春夫ら来遊 北原白秋ら来遊	治安維持法公布
一九二六(昭元)	葉山嘉樹・海に生くる人々 吉田一穂・詩集海の聖母	青森・函館間電話線開通/十勝岳大爆発、泥流で死者・不明者多数
一九二七(昭2)	伊藤整・詩集雪明りの路 若山牧水ら来遊	小樽港労働争議
一九二八(昭3)	芥川龍之介・里見淳 来遊 小熊秀雄 上京	全国で共産党関係者を一斉検挙
一九二九(昭4)	小林多喜二・蟹工船 パチエラー八重子・若き同族に	駒ヶ岳大爆発
一九三〇(昭5)	斎藤茂吉ら来遊 林芙美子 来遊	満州事変/冷害凶作
一九三三(昭8)		札幌に三越支店開業 旭川国防婦人会発足

年次	作品と事項	社会の動き
一九三五(昭10)	正宗白鳥・尾上柴舟 来遊	国勢調査、全道人口三〇六万八二八三人
一九三六(昭11)	鶴田知也・コシヤメイン記 北海道詩人協会(旭川) 結成	陸軍特別大演習/昭和天皇、道内各地を巡幸
一九三七(昭12)	伊藤整・幽鬼の街 久保栄・火山灰地第一部	札幌・東京間の定期航空路開設
一九三八(昭13)	森田たま・石狩少女 本庄陸男・石狩川	国策パルプ工業創立
一九三九(昭14)	伊藤整・小熊秀雄・島木健作・横光利一・川端康成・阿部知二 来遊	朝鮮人労働者の道内強制連行始まる
一九四〇(昭15)	板東三三・兵村 寒川光太郎・密猟者	北海道女子師範学校設置/北部軍司令部を札幌に設置
一九四一(昭16)	高浜虚子・佐佐木信綱 来遊 吉田十四雄・百姓記	北海道綴方聯盟事件/太平洋戦争開戦
一九四二(昭17)	島木健作 帰道 北海道文芸協会(札幌) 結成	「北海タイムス」「小樽新聞」など十紙が合併し「北海道新聞」を創刊
一九四六(昭21)	北海道文芸協会(札幌) 結成 北海道出版文化祭(札幌)	官部金吾、文化勲章を受賞
一九四七(昭22)	武田泰淳・サイロのほとりにて	北大に法文学部設置
一九四八(昭23)	八木義徳・摩周湖	新制高等学校発足
一九五〇(昭25)	草野心平ら来遊	第一回札幌雪まつり/レッドパージ/朝鮮戦争(一五三年)

年次	作品と事項	社会の動き
一九五一(昭26)	志賀直哉・岸田国士 来遊	対日平和条約・日米安保条約調印
一九五三(昭28)	畔柳二美・姉妹	街頭・店頭テレビに人気殺到
一九五四(昭29)	武田泰淳・ひかりごけ	青函トンネル工事起工式(八八年完成)/台風15号(洞爺丸台風)で大惨事/岩内大火
一九五五(昭30)	原田康子・挽歌	鎌凶漁、以後回復せず
一九五六(昭31)	伊藤整・若い詩人の肖像	NHK札幌中央放送局のテレビ開局/冷害凶作
一九五七(昭32)	北海道文学者懇話会設立(札幌)	ソ連、人工衛星打ち上げに成功
一九五九(昭34)	石森延男・コタンの口笛	皇太子の成婚パレード
一九六一(昭36)	原田康子第8回女流文学者賞 中沢茂・助命歌願	札幌・東京間航空路にジェット機登場
一九六二(昭37)	子母沢寛・厚田日記	東京でスモッグ、深刻化
一九六四(昭39)	日本近代文学会北海道支部結成	NHK、札幌圏内でカラーテレビ放送を開始
一九六五(昭40)	水上勉・飢餓海峡	消費者物価七・四%上昇
一九六六(昭41)	安部公房・榎本武揚 津村節子・さい果て	ビートルズ来日
一九六七(昭42)	三浦綾子・氷点	ベトナム反戦国際統一行動の全道中
一九六八(昭43)	船山馨・石狩平野 物語北海道文学盛衰史	中央集会、札幌で開催
	北海道文学展(札幌)	
	北海道文学賞	
	佐藤喜一・小熊秀雄論考	
	中野重治・北海道の作家たち	
	北海道文学館発足	
	北海道新聞文学賞設立	
	澤田誠一・斧と楡のひつぎ	十勝沖地震

年次	作品と事項	社会の動き
一九六九(昭44)	李恢成・またふたたびの道 亀井秀雄・伊藤整の世界	北大など道内大学でも学園紛争
一九七〇(昭45)	渡辺淳一・花埋み 渡辺淳一第63回直木賞 伊藤整・亀井勝一郎文学展開 催	全道市長会で北海道旧土人保護法廃止を決議
一九七二(昭47)	李恢成第66回芥川賞 木野工・権櫻 夏堀正元・幻の北海道共和国 小笠原克・近代北海道の文学 高橋揆一郎第37回文学界新人賞	札幌市営地下鉄南北線開業 第11回冬季オリンピック札幌大会開催 札幌市、政令指定都市となる 第一次石油ショック
一九七三(昭48)	和田芳恵第26回読売文学賞 西野辰吉・石狩川紀行 萱野茂・ウエベケレ集大成 萱野茂第23回菊池寛賞 小椋山博・出刃 八木義徳第28回読売文学賞 吉村昭・飛風 和田芳恵第9回日本文学大賞 和田芳恵・雀いろの空 高野斗志美・現代文学と北海道の作家群像 新・有島記念館開館(ニセコ) 小樽文学館開館 高橋揆一郎第79回芥川賞 和田芳恵第5回川端康成文学賞	佐藤栄作、ノーベル平和賞受賞 堂垣内知事、交通事故非常事態宣言を出す 道庁ロビーで時限爆弾爆発/ソ連の戦艦機、函館空港に強制着陸 北海道立近代美術館開館 英で世界初の試験管ベビー誕生
一九七四(昭49)	和田芳恵第26回読売文学賞	札幌豊平川にサケ遡上を25年ぶりに確認
一九七五(昭50)	西野辰吉・石狩川紀行	
一九七六(昭51)	小椋山博・出刃	
一九七七(昭52)	八木義徳第28回読売文学賞	
一九七八(昭53)	吉村昭・飛風	
一九七九(昭54)	和田芳恵第9回日本文学大賞	

年次	作品と事項	社会の動き
一九八〇(昭55)	更科源蔵・原野 渡辺淳一第14回吉川英治文学賞	北電苫厚真火力発電所で火入れ式挙行 2月7日を北方領土の日と決定 石狩湾新港開港
一九八一(昭56)	倉本聰・北の国から 船山馨第15回吉川英治文学賞 吉村昭・関宮林蔵 小松伸六第32回芸術選奨文部大臣賞	
一九八二(昭57)	吉田十四雄農民文学特別賞 加藤幸子第14回新潮新人賞 島居省三・異端の系譜 高橋揆一郎・地ぶき花ゆら 加藤幸子第88回芥川賞 小椋山博第11回泉鏡花文学賞 萱野茂・アイヌの里二風谷に生きて 神谷忠孝・日本のダダ 三浦清宏・長男の出家 池澤夏樹・ステイルライフ 掛川源一郎・バチラー八重子の生涯 沖藤典子・薄命の作家素木しづの生涯 三浦清宏・池澤夏樹第98回芥川賞 室蘭港の文学館開館 北海道文学館財団法人化	大韓航空機、撃墜される 国鉄、百七年の歴史をとじる 青函トンネル開通
一九八三(昭58)	島居省三・異端の系譜	
一九八七(昭62)	萱野茂・アイヌの里二風谷に生きて	
一九八八(昭63)	神谷忠孝・日本のダダ	
一九八五(平7)	北海道立文学館開館	

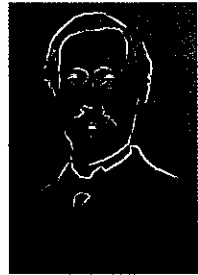
小説・評論

フォトガイド 北海道の文学

近代北海道の文学は、18世紀後半から今日に至る一三〇年余りの歴史を有しています。そのうち小説・評論の分野は、時代の流れに沿って次の十のコーナーに分けて構成しました。

20世紀への胎動/助走期の苦闘/漂泊と彷徨/道産子作家の誕生/逆流のさなかで/モダンイズムの台頭/戦火の中で/復興と再生/成長期の精華/変転する現代

これらのうちから、主な展示資料や人物、文学碑などを紹介します。



ウィリアム・S・クラーク (1826~86)
米国から札幌農学校初代教頭として1876年に来道



札幌農学校演武場と北講堂 (1887年以後)



内村鑑三 (1861~1930)
札幌でキリスト者として活動



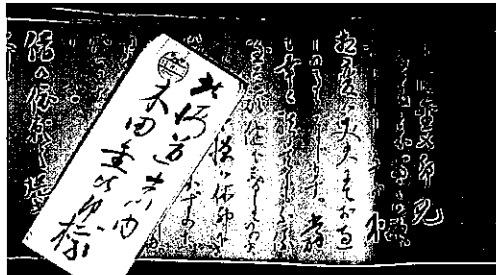
新渡戸稲造 (1862~1933)
選友夜学校を創立



札幌史学会著
札幌史学会刊「札幌沿革史全」(復刻版)



有島武郎 (1878~1923)
湖道は12年に及んだ



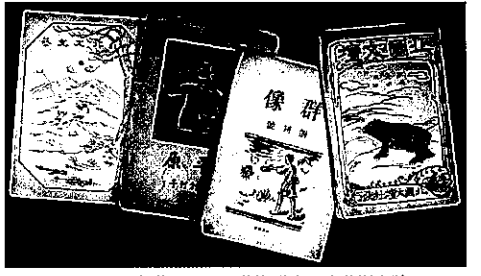
木田金次郎(画家)宛有島武郎書簡
木田との交流から小説「生れ出づる悩み」が誕生した



幸田露伴 (1867~1947)
若き日、余市町に2年滞在



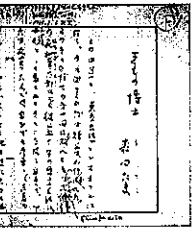
岩野泡鳴 (1873~1920)
1900年代初頭、札幌で放浪



1910~20年代に現れた北海道内の文芸同人誌



有島武郎「カインの末裔」文学碑(ニセコ町)



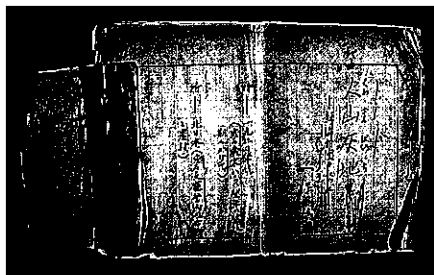
森田たま「きもの博士」原稿



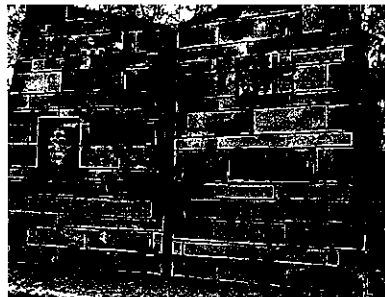
辻村もと子「馬追原野」原稿



久保栄 (1900~58)



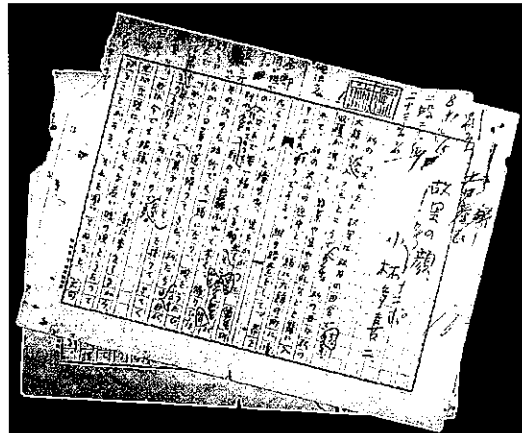
久保栄の代表作「火山灰地」(戯曲)の原稿



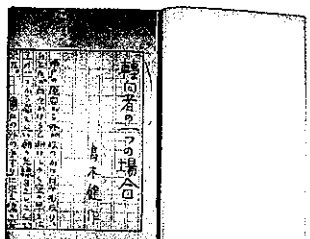
小林多喜二文学碑(小樽市)



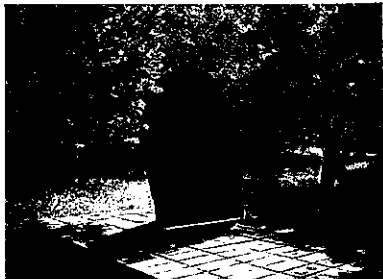
小林多喜二(1903~1933)
幼時から小樽で過ごす



小林多喜二「故里の顔」原稿(全6枚)



島木健作「転向者の一つの場合」原稿



久保栄「林檎園日記」文学碑(札幌市)

■収録人物(物故者)没年月日一覧

※ デジタル版『北海道文学大事典』の「人名編」記事本文は刊行時(1985年)のかたたちををほぼそのまま残してアップしました。

掲載した人々の中には、すでに故人となった方々も含まれています。

※ 以下は、上記の「すでに故人となった方々」の没年月日について調査し、それが判明した人々について一覧化したものです。

また、「備考」欄は受賞歴など現在調査中の事柄のうち確定した内容を後日定期的に加え、情報としてご提供するための欄です。

※ 「人名編」記事本文には、下表とは別に、すでに物故されたと推定できる人々がまだ多く含まれています。

これらの方々については、調査を続行いたしますが、なおこの『大事典』をご利用くださる皆様で、

没年月日などの情報をお持ちの方は、随時当文学館まで当該情報をお届けください。

※ 没年一覧の該当人物については本文見出し人名部分に一覧へのリンク設定をしております。

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
あ				
追加・訂正部分は、赤字で表示しています。				
青木 政雄	あおき まさお	短歌	1906年(明39)8月14日～1988年(昭63)7月15日	
青山 ゆき路	あおやま ゆきじ	短歌	1907年(明40)8月11日～1993年(平5)3月1日	
秋山 清	あきやま きよし	詩、評論	1904年(明37)4月20日～1988年(昭63)11月14日	
秋山 しぐれ	あきやま しぐれ	俳句	1925年(大14)11月15日～没年不詳	
朝谷 耿三	あさたに こうぞう	小説	1909年(明42)2月17日～2007年(平19)3月	
浅野 晃	あさの あきら	詩、評論	1901年(明34)8月15日～1990年(平2)1月29日	
浅野 太市	あさの たいち	小説	1930年(昭5)7月10日～2008年(平20)9月	
浅野 明信	あさの めいしん	詩	1933年(昭8)8月5日～2005年(平17)10月1日	
安住 尚志	あずみ たかし	短歌	1919年(大8)1月20日～2000年(平12)2月19日	
阿部 慧月	あべ けいげつ	俳句	1905年(明38)12月25日～2005年(平17)12月31日	
安部 公房	あべ こうぼう	小説、劇作	1924年(大13)3月7日～1993年(平5)1月22日	
阿部 信一	あべ しんいち	俳句	1932年(昭7)8月15日～2005年(平17)12月31日	
阿部 保	あべ たもつ	英文学、詩	1910年(明43)5月30日～2007年(平19)1月10日	
荒川 楓谷	あらかわ ふうこく	俳句	1908年(明41)2月25日～2005年(平17)4月15日	
荒澤 勝太郎	あらかわ かつたろう	小説	1913年(大2)4月15日～1994年(平6)4月2日	
荒谷 七生	あらかや なおえ	短歌	1911年(明44)8月24日～1997年(平9)8月	
阿波野 青畝	あわの せいほ	俳句	1899年(明32)2月10日～1992年(平成4)12月22日	
安藤 美紀夫	あんどう みきお	児童文学	1930年(昭5)1月12日～1990年(平2)3月17日	
い				
追加・訂正部分は、赤字で表示しています。				
飯塚 朗	いづか あきら	中国文学研究、小説	1907年(明40)9月2日～1989年(平元)2月23日	
飯田 龍太	いいだ りゅうた	俳句	1920年(大9)7月1日～2007年(平19)2月25日	
生田 直親	いくた なおちか	シナリオ、小説	1929年(昭4)12月31日～1993年(平5)3月18日	
池波 正太郎	いけなみ しょうたろう	小説、劇作	1923年(大12)1月25日～1990年(平2)5月3日	
石 一郎	いし いちろう	小説、アメリカ文学研究	1911年(明44)8月1日～2007年(平19)1月	
石井 昌光	いしい まさみつ	詩	1911年(明44)5月24日～1987年(昭62)4月12日	
石岡 草次郎	いしおか そうじろう	短歌	1916年(大5)3月20日～1995年(平7)4月	
石垣 福雄	いしがき ふくお	国語学	1914年(大3)7月23日～2004年(平16)2月21日	
石上 玄一郎	いしがみ げんいちろう	小説	1910年(明43)3月27日～2009年(平21)10月5日	
石上 慎	いしがみ しん	劇作	1935年(昭10)1月1日～2010年(平22)5月10日	
石川 桔梗	いしかわ ききょう	短歌	1906年(明39)2月23日～2000年(平12)8月	
石川 澄水	いしかわ しょうすい	短歌	1905年(明38)5月1日～1986年(昭61)1月	
石川 昌男	いしかわ まさお	短歌	1911年(明44)10月10日～2005年(平17)	
石坂 由紀子	いしがき ゆきこ	詩	1936年(昭11)6月6日～1991年(平3)3月14日	
石坂 洋次郎	いしがき ようじろう	小説	1900年(明33)1月25日～1986年(昭61)10月7日	
石塚 喜久三	いしづか きくぞう	小説	1904年(明37)9月5日～1987年(昭62)10月1日	
石塚 友二	いしづか ともじ	俳句	1906年(明39)9月20日～1986年(昭61)2月8日	
石橋 豊次郎	いしばし とよじろう	短歌	1906年(明39)9月13日～1992年(平4)10月	
石原 八束	いしはら やつか	俳句	1919年(大8)11月20日～1998年(平10)7月16日	
石森 延男	いしもり のぶお	児童文学、国語学者	1897年(明30)6月16日～1987年(昭62)8月14日	

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
石山 透	いしやま とおる	シナリオ	1927年(昭2)5月15日～1985年(昭60)12月3日	
石山 正雄	いしやま まさお	短歌	1914年(大3)2月5日～2005年(平17)9月	
泉 孝	いずみ たかし	短歌	1916年(大5)8月1日～2007年(平19)7月13日	
市瀬 見	いちのせ けん	新聞記者	1918年(大7)6月5日～2002年(平14)3月28日	
井手 貢夫	いで あやお	独文学研究	1910年(明43)10月18日～1995年(平7)5月19日	
伊藤 信吉	いとう しんきち	詩、評論	1906年(明39)11月30日～2002年(平14)8月3日	
伊藤 俊夫	いとう としお	詩	1907年(明40)10月30日～1998年(平10)5月25日	
伊藤 兎志郎	いとう としろう	小説	1925年(大14)3月11日～2002年(平14)3月18日	
伊藤 雪女	いとう ゆきじょ	俳句	1898年(明31)2月12日～1988年(昭63)5月1日	
伊藤 蘭水	いとう らんすい	俳句	1918年(大7)11月11日～1992年(平4)7月31日	
伊東 廉	いとう れん	詩	1922年(大11)2月15日～2004年(平16)5月1日	
稲月 蛭介	いなづき けいすけ	俳句	1931年(昭6)12月5日～2004年(平16)	
犬飼 哲夫	いぬかい てつお	動物学	1897年(明30)10月31日～1989年(平元)7月31日	
井上 蛙宙	いのうえ あちゆう	俳句	1927年(昭2)3月30日～1997年(平9)9月	
いのうえ ひょう	いのうえ ひょう	詩、小説	1938年(昭13)7月9日～2002年(平15)12月13日	
井上 二美	いのうえ ふみ	児童文学	1922年(大11)11月12日～2012年(平24)3月31日	
井上 光晴	いのうえ みつはる	小説	1926年(大15)5月15日～1992年(平4)5月30日	
井上 靖	いのうえ やすし	小説	1907年(明40)5月6日～1991年(平3)1月29日	
猪股 泰	いのまた ゆたか	短歌	1931年(昭6)11月22日～1994年(平6)2月	
今井 鴻象	いまい こうしょう	詩、児童文学	1904年(明37)9月5日～1988年(昭63)11月15日	
今井 泰子	いまい やすこ	評論、近代文学研究	1933年(昭8)4月25日～2009年(平21)	
入江 好之	いりえ よしゆき	詩、児童文学	1907年(明40)9月4日～1989年(平元)8月8日	
岩城 三郎	いわき さぶろう	短歌	1927年(昭2)4月2日～2005年(平17)8月	
岩城 之徳	いわき ゆきのり	近代文学研究	1923年(大12)11月3日～1995年(平7)8月3日	
う				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
上西 晴治	うえにし はるじ	小説	1925年(大14)1月7日～2009年(平21)11月10日	
上野 新之輔	うえの しんのすけ	短歌	1908年(明41)1月24日～1988年(昭63)5月9日	
魚住 あらた	うおずみ あらた	短歌	1909年(明42)1月24日～2007年(平19)1月	
氏家 夕方	うじいえ ゆうかた	俳句	1907年(明40)12月12日～1993年(平5)12月12日	
薄井 うめ	うすい うめ	短歌	1919年(大8)8月10日～2009年(平21)9月	
打木 村治	うちき むらじ	小説	1904年(明37)4月21日～1990年(平2)5月29日	
内村 剛介	うちむら ごうすけ	評論、ロシア文学研究	1920年(大9)3月12日～2009年(平21)1月30日	
内村 直也	うちむら なおや	劇作	1909年(明42)8月15日～1989年(平元)7月27日	
内山 筏杖	うちやま ばつじょう	俳句	1906年(明39)9月4日～1988年(昭63)7月14日	
宇野 渭水	うの いすい	俳句	1918年(大7)11月9日～1991年(平3)10月19日	
宇野 千代	うの ちよ	小説	1897年(明30)11月28日～1996年(平8)6月10日	
生方 たつゑ	うぶかた たつゑ	短歌	1905年(明38)2月23日～2000年(平12)1月18日	
え				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
江口 源四郎	えぐち げんしろう	短歌	1917年(大6)10月7日～没年月日不詳	
遠藤 勝一	えんどう しょういち	短歌	1895年(明28)2月13日～1991年(平3)5月5日	
お				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
扇畑 忠雄	おうぎばた ただお	短歌	1911年(明44)2月15日～2005年(平17)7月16日	
大磯 ひろし	おおいそ ひろし	俳句	1918年(大7)1月15日～1988年(昭63)2月28日	
大江 賢次	おおえ けんじ	小説	1905年(明38)9月20日～1987年(昭62)2月1日	
大江 満雄	おおえ みつお	詩	1906年(明39)7月23日～1991年(平3)10月12日	
大久保 テイ子	おおくぼ ていこ	詩	1930年(昭5)2月2日～2002年(平14)4月10日	
大熊 信行	おおくま のぶゆき	短歌、評論、経済学	1893年(明26)2月18日～1977年(昭52)6月20日	
大籠 蘆雪	おおごもり ろせつ	俳句	1904年(明37)4月10日～1991年(平3)11月27日	
大沢 重夫	おおさわ しげお	詩	1901年(明34)6月18日～1994年(平6)2月3日	
大柴 甲子郎	おおしば こうしろう	俳句	1924年(大13)3月17日～2007年(平19)6月12日	

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
大治 柳哉	おおじ りゅうや	短歌	1909年(明42)11月19日～1997年(平9)	
太田 絢子	おおた あやこ	短歌	1916年(大5)3月17日～2009年(平21)10月31日	
太田 比古象	おおた ひこぞう	短歌	1904年(明37)12月7日～1996年(平8)1月28日	
太田 緋吐子	おおた ひとし	俳句	1910年(明43)6月29日～1998年(平10)6月12日	
太田 光夫	おおた みつお	短歌	1926年(大15)10月1日～2004年(平16)6月	
大塚 陽子	おおつか ようこ	短歌	1930年(昭5)7月12日～2007年(平19)8月18日	
大津 禅良	おおつ ぜんりょう	俳句	1896年(明29)7月22日～1988年(昭63)3月3日	
大沼 スミ	おおぬま すみ	短歌	1917年(大6)5月9日～1991年(平3)4月2日	
大野 利子	おおの としこ	短歌	1914年(大3)9月2日～1988年(昭63)3月16日	
大野 黙然人	おおの もくねひと	短歌、版画	1914年(大3)7月4日～2008年(平20)5月	
大場 豊吉	おおば とよきち	詩	1923年(大12)1月27日～没年月日不明	
おおば 比呂司	おおば ひろし	漫画	1921年(大10)12月17日～1988年(昭63)8月18日	
大広 行雄	おおひろ ゆきお	詩	1925年(大14)5月17日～2005年(平17)4月	
岡澤 康司	おかざわ こうし	俳句	1922年(大11)5月31日～2006年(平18)7月15日	
小笠原 賢二	おがさわら けんじ	編集者、批評家	1946年(昭21)4月15日～2004年(平16)10月4日	
小笠原 克	おがさわら まさる	評論、近代文学研究	1931年(昭6)9月3日～1999年(平11)12月9日	
緒方 厚子	おがた あつこ	俳句	1908年(明41)11月18日～1993年(平5)4月	
岡山 去風	おかやま きよふう	短歌	1923年(大12)4月10日～1991年(平3)6月	
沖口 遼々子	おきぐち りょうりょうし	俳句	1909年(明42)8月8日～1990年(平2)9月14日	
小国 孝徳	おくに たかのり	短歌	1917年(大6)5月～2010年(平22)3月3日	
奥野 健男	おくの たけお	評論	1926年(大15)7月25日～1997年(平9)11月26日	
尾崎 道子	おざき みちこ	詩	1933年(昭8)3月2日～1999年(平11)10月26日	
長見 義三	おさみ ぎぞう	小説	1908年(明41)5月13日～1994年(平6)4月21日	
小田切 進	おだぎりすすむ	評論	1924年(大13)9月13日～1992年(平4)12月20日	
小田切 秀雄	おだぎりひでお	評論	1916年(大5)9月10日～2000年(平12)5月24日	
小田 重子	おだ しげこ	短歌	1894年(明27)1月15日～1989年(平元)3月22日	
小田島 思遠	おだじま しおん	短歌	1915年(大4)7月～1989年(平元)4月	
小田 節子	おだ せつこ	詩	1929年(昭4)4月29日～2008年(平20)8月16日	
小田 哲夫	おだ てつお	短歌	1913年(大2)12月15日～1990年(平2)2月	
小田 基	おだ もとい	小説	1931年(昭6)6月7日～2000年(平12)11月	
折原 きゑ女	おりはら きえじよ	俳句	1902年(明35)5月18日～1990年(平2)4月9日	
か				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
開高 健	かいこう たけし	小説	1930年(昭5)12月30日～1989年(平元)12月9日	
鍵谷 幸信	かぎや ゆきのぶ	英文学、詩、評論	1930年(昭5)7月26日～1989年(平元)1月16日	
笠井 清	かさい きよし	小説	1911年(明44)3月20日～1990年(平2)12月20日	
笠松 久子	かさまつ ひさこ	俳句	1920年(大9)1月28日～1993年(平5)8月17日	
笠谷 紅青紫	かさや こうせいし	俳句	1907年(明40)9月8日～1992年(平4)1月27日	
柏倉 俊三	かしわくら しゅんぞう	英文学研究、エッセー	1898年(明31)10月21日～1996年(平8)	
片山 栄志	かたやま えいじ	短歌	1916年(大5)11月10日～2007年(平19)8月24日	
勝又 木風雨	かつまた もくふうう	俳句	1914年(大3)11月8日～1997年(平9)1月23日	
加藤 愛夫	かとう あいお	詩	1902年(明35)4月19日～1979年(昭54)10月23日	
加藤 楸邨	かとう しゅうそん	俳句	1905年(明38)5月26日～1993年(平5)7月3日	
かなまる よしあき	かなまる よしあき	小説	1928年(昭3)8月21日～2007年(平19)11月13日	
金谷 信夫	かなや のぶお	俳句	1914年(大3)1月2日～1991年(平3)5月25日	
金子 きみ	かねこ きみ	小説	1916年(大5)2月12日～2009年(平21)6月23日	
金子 静光	かねこ せいこう	短歌	1903年(明36)9月23日～1999年(平11)4月	
金崎 葭杖	かねさき かじょう	俳句	1912年(大元)10月15日～1996年(平8)	
鎌田 純一	かまだ じゅんいち	小説	1934年(昭9)11月8日～2000年(平12)10月4日	
鎌田 薄氷	かまだ はくひょう	俳句	1910年(明43)2月5日～1985年(昭60)10月	

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
亀山 正治	かめやま しょうじ	短歌	1913年(大2)1月29日～1987年(昭62)3月9日	
萱野 茂	かやの しげる	アイヌ文化研究	1926年(大15)6月15日～2006年(平18)5月6日	
川内 康範	かわうち こうはん	小説	1920年(大9)2月26日～2008年(平20)4月6日	
川喜多 二郎	かわきた じろう	民族学	1920年(大9)5月11日～2009年(平21)7月8日	
川崎 彰彦	かわさき あきひこ	小説	1933年(昭8)9月27日～2010年(平22)2月4日	
川嶋 至	かわしま いたる	評論	1935年(昭10)2月24日～2001年(平13)7月2日	
河 草之介	かわ そうのすけ	俳句	1933年(昭8)1月17日～2005年(平17)1月3日	
川端 何洗	かわばた かせん	俳句	1905年(明38)6月1日～1994年(平6)7月20日	
川端 麟太	かわばた りんた	俳句	1919年(大8)1月16日～1987年(昭62)6月	
川辺 為三	かわべ ためぞう	小説	1928年(昭3)11月29日～1999年(平11)4月16日	
川村 淳一	かわむら じゅんいち	小説、短歌	1922年(大11)1月27日～1996年(平8)4月6日	
川村 清吉	かわむら せいきち	短歌	1914年(大3)3月29日～1988年(昭63)	
川村 謙人	かわむら とうじん	短歌	1904年(明37)11月27日～1990年(平2)11月6日	
河邨 文一郎	かわむら ぶんいちろう	詩	1917年(大6)4月15日～2004年(平16)3月30日	
川村 弥生	かわむら やよい	短歌	1915年(大4)3月24日～2010年(平22)7月29日	
上林 猷夫	かんばやし みちお	詩	1914年(大3)2月21日～2001年(平13)9月10日	
き				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
木内 綾	きうち あや	工芸	1924年(大13)7月7日～2006年(平18)11月5日	
木内 進	きうち すずむ	詩	1908年(明41)12月20日～1990年(平2)1月9日	
菊地 京路	きくち きょうろ	俳句	1901年(明34)10月15日～1993年(平5)2月22日	
菊地 滴翠	きくち てきすい	俳句	1916年(大5)7月15日～2005年(平17)3月3日	
菊地 徹子	きくち てつこ	詩	1925年(大14)5月1日～2004年(平16)2月23日	
菊村 到	きくむら いたる	小説	1925年(大14)5月15日～1999年(平11)4月3日	
木島 始	きじま はじめ	詩	1928年(昭3)2月4日～2004年(平16)8月14日	
北川 緑雨	きたがわ りょくう	短歌	1912年(明45)3月1日～1994年(平6)2月11日	
北 光星	きた こうせい	俳句	1923年(大12)3月5日～2001年(平13)3月17日	
北嶋 虚石	きたじま きよせき	俳句	1923年(大12)3月20日～1990年(平2)9月13日	
北野 洸	きたの こう	小説	1921年(大10)7月30日～2010年(平22)5月8日	
北見 洵吉	きたみ じゅんきち	短歌	1902年(明35)2月7日～1990年(平2)11月13日	
北 杜夫	きた もりお	小説	1927年(昭2)5月1日～2011年(平23)10月24日	
木下 順一	きのした じゅんいち	小説	1929年(昭4)4月10日～2005年(平17)10月27日	
木下 春影	きのした しゅんえい	俳句	1897年(明30)12月15日～1993年(平5)7月21日	
木下 路石	きのした ろせき	俳句	1926年(大15)8月20日～1991年(平3)2月1日	
木野 工	きの たくみ	小説	1920年(大9)6月15日～2008年(平20)8月3日	
木村 久運典	きむら くにのり	評論	1923年(大12)7月11日～2000年(平12)4月12日	
木村 哲郎	きむら てつろう	詩	1936年(昭11)9月12日～2000(平12)8月11日	
曲線 立歩	きよくせん りっぽ	川柳	1910年(明43)1月23日～2003年(平15)5月	
く				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
九鬼 伍平	くき ごへい	小説	1932年(昭7)5月3日～2002年(平14)3月17日	
草路 れい	くさじ れい	短歌	1911年(明44)10月13日～1994年(平6)2月	
草野 心平	くさの しんぺい	詩	1903年(明36)5月12日～1988年(昭63)11月12日	
草森 紳一	くさもり しんいち	評論	1938年(昭13)2月23日～2008年(平20)3月20日	
串田 孫一	くしだ まごいち	哲学、詩、随筆	1915年(大4)11月12日～2005年(平17)7月8日	
九島 勝太郎	くしま かつたろう	文化運動	1906年(明39)9月20日～1993年(平5)9月26日	
九津見 房子	くづみ ふさこ	社会主義運動	1890年(明23)10月18日～1980年(昭55)7月15日	
國松 登	くにまつ のぼる	絵画、俳句	1907年(明40)5月6日～1994年(平6)4月18日	
窪田 薫	くぼた かおる	俳句	1924年(大13)3月7日～1999年(平11)10月4日	
窪田 精	くぼた せい	小説	1921年(大10)4月15日～2004年(平16)2月29日	
久保 吉春	くぼ よしはる	郷土史	1924年(大13)3月8日～1989年(平元)8月14日	
倉島 齊	くらしま せい	小説・シナリオ	1932年(昭7)1月22日～2011年(平23)10月27日	

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
藏原 惟人	くらはら これひと	評論	1902年(明35)1月26日～1991年(平3)1月25日	
郡司 正勝	ぐんじ まさかつ	演劇評論	1913年(大2)7月7日～1998年(平10)4月15日	
こ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
小池 嘉四郎	こいけ かしろ	俳句	1913年(大2)2月16日～1994年(平6)4月25日	
小池 喜孝	こいけ きこう	民衆史研究	1916年(大5)9月11日～2003年(平15)11月28日	
小池 次陶	こいけ じとう	俳句	1910年(明43)11月10日～1996年(平8)5月19日	
越郷 黙朗	こしごう もくろう	川柳	1912年(明45)7月18日～1996年(平8)5月20日	
後藤 軒太郎	ごとう けんたろう	俳句	1919年(大8)2月8日～2008年(平20)3月11日	
後藤 竜二	ごとう りゅうじ	児童文学	1943年(昭18)6月24日～2010年(平22)7月3日	
小林 金三	こばやし きんぞう	評論	1923年(大12)7月4日～2010年(平22)7月18日	
小林 孝虎	こばやし たかとら	短歌	1923年(大12)5月3日～2004年(平16)12月19日	
小林 とし子	こばやし としこ	俳句	1926年(大15)6月17日～1991年(平3)5月9日	
小松 瑛子	こまつ えいこ	詩	1929年(昭4)5月26日～2000年(平12)5月30日	
小松 茂	こまつ しげる	小説	1923年(大12)6月27日～2007年(平19)6月15日	
小松 伸六	こまつ しんろく	拙文学研究、評論	1914年(大3)9月28日～2006年(平18)4月20日	
小森 利夫	こもり としお	短歌	1908年(明41)6月1日～1994年(平6)6月5日	
小森 汎	こもり ひろし	短歌	1915年(大4)7月5日～1994年(平6)7月	
近藤 潤一	こんどう じゅんいち	俳句	1931年(昭6)2月1日～1994年(平6)9月16日	
近藤 芳美	こんどう よしみ	短歌	1913年(大2)5月5日～2006年(平18)6月21日	
金野 知足	こんの ちそく	俳句	1898年(明31)12月28日～1990年(平2)6月25日	
さ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
犀川 野火男	さいかわ のびお	俳句	1928年(昭3)9月20日～2002年(平15)12月22日	
斎藤 邦男	さいとう くにお	詩	1921年(大10)2月21日～2006年(平18)2月13日	
斎藤 大雄	さいとう だいゆう	川柳	1933年(昭8)2月18日～2008年(平20)6月29日	
斎藤 史	さいとう ふみ	短歌	1909年(明42)2月14日～2002年(平14)5月26日	
坂井 一郎	さかい いちろう	詩	1915年(大4)1月27日～1990年(平11)3月20日	
坂井 まつば女	さかい まつばじよ	俳句	1892年(明25)4月24日～1986年(昭61)7月28日	
神原 雪毬子	さかきばら せつきゅうし	俳句	1913年(大2)4月1日～1993年(平5)9月21日	
坂口 波路	さかぐち はろ	俳句	1917年(大6)8月2日～2006年(平18)5月1日	
坂田 文子	さかた ふみこ	短歌、俳句	1916年(大5)7月24日～1999年(平11)8月	
坂本 一亀	さかもと かずき	編集	1921年(大10)12月8日～2002年(平14)9月28日	
坂本 幸四郎	さかもと こうしろう	評論	1924年(大13)9月19日～1999年(平11)5月10日	
桜井 勝美	さくらい かつみ	詩、評論	1908年(明41)2月20日～1995年(平7)7月24日	
笹尾 礼三	ささお れいぞう	俳句	1928年(昭3)12月15日～1991年(平3)4月26日	
佐々木 あきら	ささき あきら	俳句	1897年(明30)6月6日～1996年(平8)	
佐々木 逸郎	ささき いつろう	詩、シナリオ	1927年(昭2)11月28日～1992年(平4)1月17日	
佐々木 子興	ささき しこう	俳句	1910年(明43)3月1日～1995年(平7)4月10日	
佐々木 孝丸	ささき たかまる	劇作、俳優	1898年(明31)1月30日～1986年(昭61)12月28日	
佐々木 武観	ささき たけみ	劇作	1923年(大12)12月28日～2000年(平12)7月22日	
佐々木 丸美	ささき まるみ	小説	1949年(昭24)1月23日～2005年(平17)12月25日	
佐々木 露舟	ささき ろしゅう	俳句	1912年(大元)10月23日～2007年(平19)3月10日	
笹沢 左保	ささざわ さほ	小説	1930年(昭5)11月15日～2002年(平14)10月21日	
佐多 稲子	さた いねこ	小説	1904年(明37)6月1日～1998年(平10)10月12日	
颯手 達治	さつて たつじ	小説	1924年(大13)6月13日～2009年(平21)4月11日	
佐藤 鶯溪	さとう おうけい	川柳	1906年(明39)1月10日～2002年(平14)4月	
佐藤 喜一	さとう きいち	小説、評論	1911年(明44)12月10日～1992年(平4)3月2日	
佐藤 洸世	さとう こうせい	俳句	1911年(明44)2月28日～1986年(昭61)7月20日	
佐藤 佐太郎	さとう さたろう	短歌	1909年(明42)11月13日～1987年(昭62)8月8日	
佐藤 しげ	さとう しげ	詩	1916年(大5)7月17日～1993年(平5)8月9日	
佐藤 たすく	さとう たすく	俳句	1903年(明36)10月4日～1994年(平6)10月9日	
佐藤 忠良	さとう ちゅうりょう	彫刻	1912年(明45)7月4日～2011年(平23)3月30日	

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
佐藤 初夫	さとう はつお	詩、短歌	1910年(明43)6月12日～1992年(平4)12月17日	
佐藤 晴生	さとう はるお	俳句	1918年(大7)6月20日～2006年(平18)10月19日	
佐藤 泰志	さとう やすし	小説	1949年(昭24)4月26日～1990年(平2)10月10日	
里見 純世	さとみ じゅんせい	短歌	1919年(大8)12月～2010年(平22)6月20日	
澤田 誠一	さわだ せいいち	小説	1920年(大9)9月18日～2007年(平19)6月5日	
澤野 久雄	さわの ひさお	小説	1912年(大元)12月30日～1992年(平4)12月17日	
し				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
塩野谷 秋風	しおのや しゅうふう	俳句	1909年(明42)10月10日～1986年(昭61)2月27日	
志賀 磯子	しが いそこ	短歌	1915年(大4)12月2日～1991年(平3)	
重兼 芳子	しげかね よしこ	小説	1927年(昭2)3月7日～1993年(平5)8月22日	
滋野 透子	しげの すみこ	児童文学	1921年(大10)5月4日～2000年(平12)11月14日	
重森 直樹	しげもり なおき	小説	1926年(大15)3月15日～2003年(平15)5月16日	
志田 白雨	しだ はくう	俳句	1907年(明40)1月22日～2005年(平17)3月29日	
柴生田 稔	しばうた みのる	短歌、国文学	1904年(明37)6月26日～1991年(平3)8月20日	
島 恒人	しま こうじん	俳句	1924年(大13)2月13日～2000年(平12)3月16日	
清水 堅一	しみず けんいち	短歌	1917年(大6)2月8日～2005年(平17)11月	
志水 汎	しみず はん	短歌	1910年(明43)5月1日～2001年(平13)	
清水 康雄	しみず やすお	詩、出版	1932年(昭7)2月4日～1999年(平11)2月21日	
下村 保太郎	しもむら やすたろう	詩	1909年(明42)8月15日～1985年(昭60)12月4日	
白井 長流水	しらい ちょうりゅうすい	俳句	1894年(明27)1月29日～1986年(昭61)10月13日	
城山 三郎	しろやま さぶろう	小説	1927年(昭2)8月12日～2007年(平19)3月22日	
神保 光太郎	じんぼ こうたろう	詩	1905年(明38)11月29日～1990年(平2)10月24日	
新聞 進一	しんま しんいち	国文学研究	1917年(大6)9月3日～2005年(平17)12月11日	
新明 紫明	しんみょう しめい	俳句	1928年(昭3)8月13日～2006年(平18)4月3日	
新明 セツ子	しんみょう せつこ	俳句	1930年(昭5)10月14日～2011年(平23)8月22日	
す				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
杉浦 明平	すぎうら みんぺい	評論、小説	1913年(大2)6月9日～2001年(平13)3月14日	
杉本 春生	すぎもと はるお	詩	1926年(大15)3月21日～1990年(平2)7月6日	
鈴木 恭三	すずき きょうぞう	俳句	1934年(昭9)10月30日～1992年(平4)5月5日	
鈴木 重吉	すずき じゅうきち	米文学	1916年(大5)9月14日～2002年(平14)11月30日	
鈴木 青光	すずき せいこう	俳句	1927年(昭2)1月3日～1994年(平6)6月1日	
鈴木 青柳	すずき せいりゅう	川柳	1908年(明41)8月13日～1999年(平11)4月	
鈴木 杜世春	すずき とよはる	短歌	1925年(大14)5月15日～1996年(平8)	
せ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
青野 麦秋	せいの ばくしゅう	俳句	1925年(大14)3月20日～1988年(昭63)8月16日	
瀬戸 哲郎	せと てつろう	詩	1919年(大8)1月21日～1985年(昭60)10月22日	
瀬沼 茂樹	せぬま しげき	評論	1904年(明37)10月6日～1988年(昭63)8月14日	
そ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
園田 夢蒼花	そのだ むそうか	俳句	1913年(大2)12月15日～2001年(平13)6月1日	
た				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
高木 彬光	たかぎ あきみつ	小説	1920年(大9)9月25日～1995年(平7)9月9日	
高木 牛花	たかぎ ぎゅうか	俳句	1913年(大2)1月27日～1991年(平3)6月5日	
高倉 新一郎	たかくら しんいちろう	農学、郷土史	1902年(明35)11月23日～1990年(平2)6月7日	
高瀬 白洋	たかせ はくよう	俳句	1908年(明41)12月8日～2003年(平15)1月15日	
高田 敏子	たかだ としこ	詩	1914年(大3)9月16日～1989年(平元)5月28日	
高田 光徳	たかだ みつぼ	川柳	1922年(大11)3月18日～1993年(平5)3月	
高野 斗志美	たかの としみ	評論	1929年(昭4)7月7日～2002年(平14)7月9日	
高橋 揆一郎	たかはし きいちろう	小説	1928年(昭3)4月10日～2007年(平19)1月31日	
高橋 貞俊	たかはし さだとし	俳句	1913年(大2)5月15日～1999年(平11)3月16日	
高橋 英衛	たかはし ひでえい	短歌	1908年(明41)3月8日～1993年(平5)12月	

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
高橋 笛美	たかはし ふえみ	俳句	1928年(昭3)3月10日～2010年(平22)4月19日	
高橋 義孝	たかはし よしたか	独文学研究・評論	1913年(大2)3月27日～1995年(平7)7月21日	
高橋 和光	たかはし わこう	短歌	1911年(明44)12月2日～2003年(平15)9月23日	
高山 亮二	たかやま りょうじ	近代文学研究	1916年(大5)9月27日～2001年(平13)10月17日	
滝川 句楽	たきかわ くらく	川柳	1909年(明42)3月1日～1987年(昭62)1月	
琢磨 緑泉	たくま りよくせん	俳句	1923年(大12)3月31日～1993年(平5)6月23日	
匠 秀夫	たくみ ひでお	美術評論	1924年(大13)11月28日～1994年(平6)9月14日	
竹内 てるよ	たけうち てるよ	詩	1904年(明37)12月21日～2001年(平13)2月4日	
竹岡 和田男	たけおか わだお	美術、映画評論	1928年(昭3)10月21日～2000年(平12)9月4日	
武田 繁太郎	たけだ しげたろう	小説	1919年(大8)8月20日～1986年(昭61)6月8日	
武田 隆子	たけだ たかこ	詩	1909年(明42)1月14日～2008年(平20)5月25日	
武田 友寿	たけだ ともじゅ	評論	1931年(昭6)1月16日～1991年(平3)2月1日	
竹中 雨閣	たけなか うかく	俳句	1913年(大2)1月13日～1988年(昭63)3月29日	
立野 正之	たての まさゆき	短歌	1902年(明35)8月9日～1999年(平11)5月	
館 美保子	たて みほこ	詩	1893年(明26)3月11日～1990年(平2)12月8日	
田中 小実昌	たなか こみまさ	小説	1925年(大14)4月29日～2000年(平12)2月27日	
田中 北斗	たなか ほくと	俳句	1922年(大11)3月15日～2005年(平17)2月27日	
棚川 音一	たなかわ おといち	短歌	1922年(大11)6月20日～1994年(平6)11月	
谷口 広志	たにくち ひろし	文化運動	1917年(大6)8月23日～1990年(平2)	
田上 義也	たのうえ よしや	建築	1899年(明32)5月5日～1991年(平3)8月17日	
玉川 雄介	たまがわ ゆうすけ	児童文学	1910年(明43)2月10日～2009年(平21)12月18日	
玉手 北肇	たまて ほくちょう	俳句	1920年(大9)11月6日～1988年(昭63)8月30日	
田宮 慧子	たみや けいこ	小説	1927年(昭2)1月16日～1992年(平4)10月9日	
田宮 虎彦	たみや とらひこ	小説	1911年(明44)8月5日～1988年(昭63)4月9日	
田村 哲三	たむら てつみ	短歌	1930年(昭5)4月10日～2000年(平12)7月26日	
田村 昌由	たむら まさよし	詩	1913年(大2)5月17日～1994年(平6)5月29日	
田元 北史	たもと ほくし	俳句	1910年(明43)9月20日～1994年(平6)5月23日	
ち				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
千田 三四郎	ちだ さんしろう	小説	1922年(大11)5月18日～2005年(平17)8月2日	
長 光太	ちよう こうた	詩	1907年(明40)4月8日～1999年(平11)7月10日	
つ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
塚本 邦雄	つかもと くにお	短歌	1920年(大9)8月7日～2005年(平17)6月9日	
辻岡 一羊	つじおか いちよう	俳句	1906年(明39)6月23日～1995年(平7)1月2日	
辻 邦生	つじ くにお	小説	1925年(大14)9月24日～1999年(平11)7月29日	
津田 露木	つだ ろぼく	俳句	1912年(明45)2月1日～1991年(平3)5月1日	
土谷 重朗	つちや じゅうろう	短歌	1904年(明37)3月10日～1994年(平6)1月	
土屋 文明	つちや ぶんめい	短歌	1890年(明23)9月18日～1990年(平2)12月8日	
網淵 謙綻	つなぶち けんじょう	小説	1924年(大13)9月21日～1996年(平8)4月14日	
鶴田 知也	つるた ともや	小説	1902年(明35)2月19日～1988年(昭63)4月1日	
て				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
手塚 義隆	てづか よしたか	短歌	1924年(大13)4月19日～1999年(平11)7月1日	
寺久保 友哉	てらくぼ ともや	小説	1937年(昭12)6月4日～1999年(平11)1月22日	
寺師 治人	てらし はるひと	短歌	1916年(大5)9月14日～2003年(平15)5月21日	
寺島 露月	てらしま ろげつ	俳句	1924年(大13)12月1日～1985年(昭60)10月	
と				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
塔崎 健二	とうざき けんじ	評論	1944年(昭19)2月14日～1995年(平7)	
百目鬼 恭三郎	どうめき きょうざぶろう	評論	1926年(大15)2月8日～1991年(平3)3月31日	
堂本 茂	どうもと しげる	小説	1924年(大13)8月2日～1997年(平9)11月22日	
戸川 幸夫	とがわ ゆきお	小説	1912年(明45)4月19日～2004年(平16)5月1日	
所 雅彦	ところ まさひこ	小説	1935年(昭10)7月5日～2011年(平23)	

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
戸田 正彦	とだ まさひこ	新聞記者	1924年(大13)1月22日～1994年(平6)7月23日	
富岡 木之介	とみおか きのすけ	俳句	1919年(大8)4月5日～1995年(平7)1月28日	
富原 孝	とみはら たかし	詩	1920年(大9)7月15日～2006年(平18)3月8日	
鳥居 省三	とりい しょうぞう	評論	1925年(大14)8月1日～2006年(平18)5月4日	
な				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
中紙 輝一	なかがみ きいち	小説	1922年(大11)11月18日～1992年(平4)8月19日	
中越 華章	なかごし かしょう	俳句	1908年(明41)2月16日～1988年(昭63)6月4日	
中沢 茂	なかざわ しげる	小説	1909年(明42)1月4日～1997年(平9)9月1日	
長沢 としを	ながさわ としお	川柳	1920年(大9)9月8日～2000年(平12)12月	
長沢 美津	ながさわ みつ	短歌	1905年(明38)11月4日～2005年(平17)4月26日	
中嶋 立	なかじま りつ	俳句	1933年(昭8)3月28日～2002年(平15)6月26日	
中台 泰史	なかだい たいし	俳句	1923年(大12)5月26日～1994年(平6)6月27日	
永田 耕一郎	ながた こういちろう	俳句	1918年(大7)9月20日～2006年(平18)8月20日	
永田 秀郎	ながた ひでろう	劇作	1934年(昭9)7月16日～2009年(平21)8月5日	
中田 稔	なかた みのる	俳句	1921年(大10)11月2日～1986年(昭61)7月	
永田 洋平	ながた ようへい	動物文学、詩	1917年(大6)10月10日～2002年(平14)1月19日	
長野 京子	ながの きょうこ	児童文学	1914年(大3)1月1日～2008年(平20)2月18日	
中村 光夫	なかむら みつお	評論	1911年(明44)2月5日～1988年(昭63)7月12日	
中山 周三	なかやま しゅうぞう	短歌	1916年(大5)8月13日～1999年(平11)9月22日	
中山 照華	なかやま しょうか	俳句	1883年(明26)1月15日～1986年(昭61)12月17日	
中山 信	なかやま のぶ	短歌	1920年(大9)6月9日～2004年(平16)10月2日	
中山 勝	なかやま まさる	短歌	1906年(明39)3月24日～1989年(平元)8月19日	
名島 俊子	なじま としこ	短歌	1912年(明45)8月3日～1995年(平7)6月11日	
夏堀 正元	なつぼり まさもと	小説	1925年(大14)1月30日～1999年(平11)1月4日	
浪花 剛	なにわ つよし	出版	1924年(大13)2月9日～2010年(平22)11月19日	
鍋山 隆明	なべやま りゅうめい	短歌	1917年(大6)6月20日～1988年(昭63)4月26日	
並川 公	なみかわ こう	詩	1915年(大4)4月18日～1992年(平2)7月1日	
成田 昭男	なりた あきお	俳句	1927年(昭2)10月10日～2007年(平19)3月16日	
成田 智世子	なりた ちせこ	俳句	1929年(昭4)11月22日～1988年(昭63)12月30日	
に				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
新妻 博	にいづま ひろし	詩、俳句	1917年(大6)9月30日～2012年(平24)2月3日	
西川 青澗	にしかわ せいとう	短歌	1905年(明38)3月22日～1994年(平6)2月	
錦 俊坊	にしき としぼう	川柳	1923年(大12)5月28日～1997年(平9)3月	
西谷 能雄	にしたに よしお	出版	1913年(大2)9月8日～1995年(平7)4月29日	
西野 辰吉	にし の たつきち	小説	1916年(大5)2月12日～1999年(平11)10月21日	
西村 一平	にしむら いっぺい	短歌	1911年(明44)12月10日～2001年(平13)9月21日	
西村 寿行	にしむら じゅこう	小説	1930年(昭5)11月3日～2007年(平19)8月23日	
西村 信	にしむら まこと	文化運動	1935年(昭10)10月20日～2000年(平12)11月3日	
庭田 竹堂	にわた ちくどう	俳句	1903年(明36)2月1日～1988年(昭63)12月30日	
丹羽 文雄	にわ ふみお	小説	1904年(明37)11月22日～2005年(平17)4月20日	
ぬ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
沼田 寿枝女	ぬまた すえじょ	俳句	1918年(大7)3月28日～2007年(平19)3月9日	
の				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
野口 富士男	のぐち ふじお	小説	1911年(明44)7月4日～1993年(平5)11月22日	
野田 寿雄	のだ ひさお	国文学研究	1913年(大2)2月23日～2004年(平16)4月8日	
野間 宏	のま ひろし	小説	1915年(大4)2月23日～1991年(平3)1月2日	
野村 良雄	のむら ながお	詩	1931年(昭6)2月20日～2012年(平24)1月	
は				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
博田 草樹	はかた そうじゅ	短歌	1912年(大元)12月1日～1999年(平11)1月	
萩原 葉子	はぎわら ようこ	小説	1920年(大9)9月4日～2005年(平17)7月1日	

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
橋本 佳代女	はしもと かよじょ	俳句	1905年(明38)9月3日～1989年(平元)1月15日	
橋本 徳寿	はしもと とくじゅ	短歌	1894年(明27)9月10日～1989年(平元)	
長谷川 四郎	はせがわ しろう	小説	1909年(明42)6月7日～1987年(昭62)4月19日	
長谷川 正治	はせがわ まさはる	短歌、書道	1913年(大2)1月27日～1992年(平4)2月	
長谷川 みさを	はせがわ みさお	詩	1928年(昭3)2月26日～2004年(平16)3月	
畑沢 草羽	はたざわ そうう	短歌	1913年(大2)7月9日～1988年(昭63)12月	
羽田野 幸子	はたの ゆきこ	詩	1914年(大3)9月17日～1995年(平7)8月13日	
秦 保二郎	はた やすじろう	詩	1913年(大2)12月14日～1997年(平9)8月19日	
畑山 博	はたやま ひろし	小説	1935年(昭10)5月18日～2001年(平13)9月2日	
八匠 衆一	はっしょう しゅういち	小説	1917年(大6)3月30日～2004年(平16)6月21日	
浜 一郎	はま いちろう	短歌	1915年(大4)2月6日～1990年(平2)1月	
林 直樹	はやし なおき	詩	1934年(昭9)11月23日～2006年(平18)9月9日	
林 白言	はやし はくげん	エッセー	1923年(大12)6月23日～1995年(平7)1月26日	
原子 公平	はらこ こうへい	俳句	1919年(大8)9月14日～2004年(平16)7月18日	
原田 康子	はらだ やすこ	小説	1928年(昭3)1月12日～2009年(平21)10月20日	
針山 和美	はりやま かずみ	小説	1930年(昭5)7月12日～2003年(平15)7月11日	
春山 行夫	はるやま ゆきお	詩、評論、文化史	1902年(明35)7月1日～1994年(平6)10月10日	
萬上 義次	ばんじょう よしつぐ	短歌	1911年(明44)3月19日～1988年(昭63)8月	
半村 良	はんむら りょう	小説	1933年(昭8)10月27日～2002年(平14)3月4日	
ひ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
菱川 善夫	ひしかわ よしお	短歌、評論	1929年(昭4)6月3日～2007年(平19)12月15日	
氷室 冴子	ひむろ さえこ	小説	1957年(昭32)1月11日～2008年(平20)6月6日	
平野 直	ひらの ただし	小説	1902年(明35)3月28日～1986年(昭61)4月23日	
平松 勤	ひらまつ つとむ	短歌	1913年(大2)3月5日～2001年(平13)8月22日	
平山 広	ひらやま ひろし	近代文学研究	1926年(大15)2月20日～2001年(平13)8月3日	
弘瀬 正	ひろせ ただし	小説	1914年(大3)12月30日～1988年(昭63)8月3日	
広中 白骨	ひろなか はっこつ	俳句	1903年(明36)8月1日～1991年(平3)2月4日	
ふ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
深沢 七郎	ふかざわ しちろう	小説	1914年(大3)1月29日～1987年(昭62)8月18日	
深沢 伸二	ふかざわ しんじ	俳句	1927年(昭2)10月29日～1995年(平7)8月21日	
福田 清人	ふくだ きよと	小説、児童文学	1904年(明37)11月29日～1995年(平7)6月13日	
藤枝 静男	ふじえだ しずお	小説	1907年(明40)12月20日～1993年(平5)4月16日	
藤川 日出尚	ふじかわ ひでお	詩	1934年(昭9)4月28日～2004年(平16)6月7日	
藤田 旭山	ふじた きよござん	俳句	1903年(明36)1月16日～1991年(平3)3月6日	
藤田 光則	ふじた みつなり	詩	1922年(大11)3月1日～2000年(平12)1月13日	
藤本 英夫	ふじもと ひでお	考古学研究	1927年(昭和2)3月23日～2005年(平17)12月24日	
藤原 定	ふじわら さだむ	詩、評論	1905年(明38)7月17日～1990年(平2)9月17日	
古川 善盛	ふるかわ よしもり	詩	1927年(昭2)12月8日～2006年(平18)1月	
古瀬 吟風楼	ふるせ ぎんふうろう	俳句	1901年(明34)9月2日～1989年(平元)4月30日	
ほ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
星野 松路	ほしの しょうじ	俳句	1927年(昭2)1月20日～1999年(平11)1月20日	
細谷 徹之助	ほそや てつすけ	短歌	1915年(大4)12月5日～1988年(昭63)12月5日	
堀田 善衛	ほった よしえ	小説	1918年(大7)7月17日～1998年(平10)9月5日	
堀越 義三	ほりこし よしぞう	詩	1923年(大12)2月26日～2003年(平15)4月19日	
本田 錦一郎	ほんだ きんいちろう	英文学研究	1926年(大15)11月11日～2007年(平19)1月2日	
本多 秋五	ほんだ しゅうご	評論	1908年(明41)9月22日～2001年(平13)1月13日	
本多 ミサヲ	ほんだ みさお	短歌	1918年(大7)8月20日～1989年(平元)7月30日	
本間 保	ほんま たもつ	短歌	1922年(大11)7月25日～1992年(平4)7月	
本間 竜二郎	ほんま りゅうじろう	短歌	1910年(明43)3月30日～1994年(平6)5月7日	
ま				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
前川 康男	まえかわ やすお	児童文学	1921年(大10)12月25日～2002年(平14)10月14日	
前野 聖子	まえの せいこ	俳句	1926年(大15)3月12日～2007年(平19)12月27日	
増田 羽衣	ますだ うい	俳句	1907年(明40)4月1日～1991年(平3)12月10日	
益田 喜頓	ますだ きいとん	演劇	1909年(明42)9月11日～1993年(平5)12月1日	
増谷 龍三	ますたに りゅうぞう	短歌	1930年(昭5)1月3日～1996年(平8)5月27日	
松浦 睦子	まつうら むつこ	詩	1931年(昭6)3月5日～1998年(平10)1月29日	
松岡 繁雄	まつおか しげお	詩	1921年(大10)4月30日～1990年(平3)12月8日	
松尾 正路	まつお まさみち	仏文学研究、エッセー	1905年(明38)1月7日～1991年(平3)3月26日	
松田 貞夫	まつだ さだお	評論	1930年(昭5)4月5日～1999年(平11)9月	
松田 葉留枝	まつだ はるえ	川柳	1906年(明39)5月27日～2001年(平13)10月	
松永 伍一	まつなが ごいち	詩、評論	1930年(昭5)4月22日～2008年(平20)3月3日	
松原 良輝	まつばら よしてる	詩	1931年(昭6)6月3日～2005年(平18)1月	
松本 清張	まつもと せいちょう	小説	1909年(明42)2月12日～1992年(平4)8月4日	
間所 祥司	まどころ しょうじ	俳句	1935年(昭10)7月14日～1998年(平10)8月3日	
丸木 俊	まるき とし	絵画	1912年(明45)2月11日～2000年(平12)1月13日	
み				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
三浦 綾子	みうら あやこ	小説	1922年(大11)4月25日～1999年(平11)10月12日	
三浦 哲郎	みうら てつお	小説	1931年(昭6)3月16日～2010年(平22)8月29日	
三浦 敏之	みうら としゆき	短歌	1922年(大11)4月1日～1992年(平4)1月	
三木 澄子	みき すみこ	小説、児童文学	1909年(明42)1月2日～1988年(昭63)4月16日※生年については諸説あり	
三沢 坑子	みさわ こうし	俳句	1915年(大4)7月15日～1989年(平元)4月19日	
水口 幾代	みずぐち いくよ	短歌	1914年(大3)7月8日～1995年(平7)5月16日	
水谷 準	みずたに じゅん	小説	1904年(明37)3月5日～2001年(平13)3月20日	
三谷 木の実	みたに このみ	詩	1910年(明43)1月8日～2009年(平21)3月5日	
水上 勉	みなかみ つとむ	小説	1919年(大8)3月8日～2004年(平16)9月8日	
宮口 良朔	みやぐち りょうさく	短歌	1923年(大12)1月26日～1997年(平9)	
三宅 草木	みやげ そうもく	俳句	1907年(明40)2月28日～1993年(平5)5月13日	
宮崎 正夫	みやざき まさお	短歌	1940年(昭15)8月15日～2006年(平18)1月	
宮崎 芳男	みやざき よしお	短歌	1901年(明34)9月1日～1989年(平元)5月26日	
宮田 千恵	みやた ちえ	短歌	1926年(大15)9月13日～2007年(平19)2月	
宮田 陽之介	みやた ようのすけ	俳句	1902年(明35)12月20日～1994年(平6)4月4日	
宮西 頼母	みやにし たのも	短歌	1918年(大7)2月11日～2006年(平18)2月	
宮野 駿	みやの しゅん	小説	1923年(大12)5月12日～2007年(平19)6月11日	
宮部 鳥巢	みやべ ちょうそう	俳句	1921年(大10)9月19日～2007年(平19)5月29日	
宮本 顕治	みやもと けんじ	政治、評論	1908年(明41)10月17日～2007年(平19)7月18日	
宮本 貞子	みやもと さだこ	短歌	1932年(昭7)7月9日～1999年(平11)11月	
宮脇 俊三	みやわき しゅんぞう	紀行	1926年(大15)12月9日～2003年(平15)3月26日	
む				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
向井 豊昭	むかい とよあき	小説	1933年(昭8)11月14日～2008年(平20)6月30日	
村上 綾朗	むらかみ あやお	短歌	1929年(昭4)2月24日～2005年(平17)7月	
村上 元三	むらかみ げんぞう	小説	1910年(明43)3月14日～2006年(平18)4月3日	
村木 雄一	むらき ゆういち	詩	1907年(明40)10月3日～1987年(昭62)9月23日	
村田 和歌子	むらた わかこ	詩	1917年(大6)2月26日～1996年(平8)6月13日	
め				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
目黒 草水	めぐろ そうすい	短歌	1907年(明40)4月20日～1990年(平2)2月1日	
も				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
茂木 健太郎	もぎ けんたろう	短歌	1915年(大4)9月13日～1990年(平2)1月29日	
本山 哲朗	もとやま てつろう	川柳	1917年(大6)10月1日～2004年(平16)10月	
森 澄雄	もり すみお	俳句	1919年(大8)2月28日～2010年(平22)8月18日	
森本 三郎	もりもと さぶろう	詩、画家	1909年(明42)11月8日～1987年(昭62)	

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
森山 啓	もりやま けい	小説	1904年(明37)3月10日～1991年(平3)7月26日	
や				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
八重 樫実	やえがし みのる	小説	1922年(大11)11月1日～1999年(平11)11月29日	
八木沢 不凍	やぎさわ ふとう	俳句	1924年(大13)4月19日～1994年(平6)3月23日	
八木 義徳	やぎ よしのり	小説	1911年(明44)10月21日～1999年(平11)11月9日	
社 八郎	やしろ はちろう	俳句、川柳	1913年(大2)3月2日～1989年(平元)6月26日	
八森 虎太郎	やつもり とらたろう	詩	1914年(大3)6月12日～1999年(平12)10月24日	
八剣 浩太郎	やつるぎ こうたろう	小説	1925年(大14)10月23日～2009年(平21)6月	
藪 禎子	やぶ ていこ	近代文学研究	1930年(昭5)3月29日～2008年(平20)10月26日	
山内 栄治	やまうち えいじ	詩	1915年(大4)2月8日～2009年(平21)3月6日	
山川 力	やまかわ つとむ	エッセー、評論	1913年(大2)1月19日～2001年(平13)8月8日	
山岸 巨狼	やまぎし きよろう	俳句	1910年(明43)3月22日～1997年(平9)4月28日	
山口 馨子	やまぐち せいし	俳句	1901年(明34)11月3日～1994年(平6)3月26日	
山口 青邨	やまぐち せいそん	俳句	1892年(明25)5月10日～1988年(昭63)12月15日	
山崎 剛平	やまざき ごうへい	短歌、出版	1901年(明34)6月2日～1996年(平8)7月8日	
山路 ひろ子	やまじ ひろこ	小説	1937年(昭12)10月18日～1994年(平6)10月	
山田 昭夫	やまだ あきお	評論	1928年(昭3)1月2日～2004年(平16)9月15日	
山田 伍市	やまだ ごいち	詩	1930年(昭5)3月17日～2001年(平13)9月15日	
山田 順三	やまだ じゅんぞう	詩	1930年(昭5)5月28日～2005年(平17)7月23日	
山田 清三郎	やまだ せいざぶろう	小説、評論	1896年(明29)6月13日～1987年(昭62)9月30日	
山田 大雪槍	やまだ だいせつそう	俳句	1900年(明33)1月5日～1993年(平5)10月1日	
山田 秀三	やまだ ひでぞう	アイス文化	1899年(明32)6月30日～1992年(平4)7月28日	
山田 風太郎	やまだ ふうたろう	小説	1922年(大11)1月4日～2001年(平13)7月28日	
山田 政明	やまだ まさあき	詩	1934年(昭9)6月5日～2007年(平19)6月15日	
山田 緑光	やまだ りよくこう	俳句	1917年(大6)7月25日～2012年(平24)2月7日	
山室 静	やまむろ しずか	詩、評論	1906年(明39)12月15日～2000年(平12)3月23日	
山本 健吉	やまもと けんきち	評論	1907年(明40)4月26日～1988年(昭63)5月7日	
山本 千里	やまもと せんり	俳句	1928年(昭3)10月10日～1992年(平4)7月2日	
山本 太郎	やまもと たろう	詩	1925年(大14)11月8日～1988年(昭63)11月5日	
よ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
横井 みつる	よこい みつる	短歌	1917年(大6)11月25日～1998年(平10)9月23日	
横田 庄八	よこた しょうはち	短歌	1905年(明38)2月15日～1997年(平9)3月26日	
横道 秀川	よこみち しゅうせん	俳句	1910年(明43)2月22日～1998年(平10)6月2日	
与謝野 鉄幹	よさの てつかん	短歌、詩	1873年(明6)2月26日～1935年(昭10)3月26日	
吉岡 秋帆影	よしおか しゅうはんえい	俳句	1907年(明40)11月21日～1993年(平5)12月5日	
吉川 泰夫	よしかわ やすお	短歌	1906年(明39)12月14日～1994年(平6)4月	
吉田 乙丸	よしだ おとまる	短歌	1908年(明41)7月29日～1990年(平2)8月	
吉田 寿人	よしだ ひさと	短歌	1916年(大5)6月1日～1989年(平元)9月24日	
吉田 正俊	よしだ まさとし	短歌	1902年(明35)4月30日～1993年(平5)6月23日	
吉村 昭	よしむら あきら	小説	1927年(昭2)5月1日～2006年(平18)7月31日	
吉村 唯行	よしむら いこう	俳句	1914年(大3)12月30日～2009年(平21)2月3日	
吉行 淳之介	よしゆき じゅんのすけ	小説	1924年(大13)4月13日～1994年(平6)7月26日	
吉原 幸子	よしわら さちこ	詩	1932年(昭7)6月28日～2002年(平14)11月28日	
米村 晃多郎	よねむら こうたろう	小説	1927年(昭2)5月23日～1989年(昭61)7月18日	
米谷 祐司	よねや ゆうじ	詩	1934年(昭9)1月9日～2011年(平23)12月23日	
わ				追加・訂正部分は、赤字で表示しています。
和田 謹吾	わだ きんご	近代文学研究	1922年(大11)5月12日～1994年(平6)11月15日	
和田 徹三	わだ てつぞう	詩	1909年(明42)8月4日～1999年(平11)6月27日	
渡辺 勇	わたなべ いさむ	短歌	1927年(昭2)3月11日～1990年(平2)12月	
渡辺 左武郎	わたなべ さぶろう	医学	1911年(明44)12月6日～1997年(平9)10月2日	

人名	よみがな	分野	生没年月日	備考
渡辺 秀二	わたなべ しゅうじ	俳句	1921年（大10）2月4日～1993年（平5）12月	
渡辺 俳瞳	わたなべ はいどう	俳句	1905年（明38）1月28日～1991年（平3）11月4日	
渡辺 ひろし	わたなべ ひろし	児童文学	1912年（明45）2月3日～1991年（平3）12月8日	
渡辺 睦子	わたなべ むつこ	俳句	1919年（大8）1月20日～1993年（平5）8月17日	